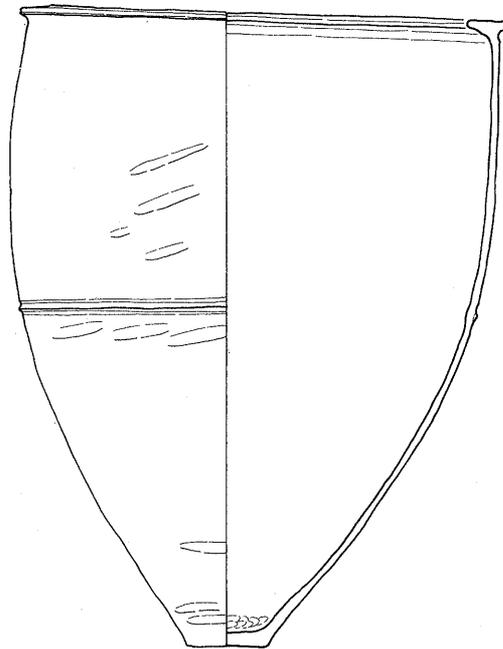


# 太宰府・国分地区遺跡群 1

- 市道正尻 - 紺町線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -



松 7ST320 出土甕棺

平成 16 年  
(2004)

太宰府市教育委員会

# 太宰府・国分地区遺跡群 1

- 市道正尻 - 紺町線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成 16 年  
(2004)

太宰府市教育委員会



調査区周辺の環境【▽箇所が調査地点】

## 序

本書は、平成10年度に市道正尻一紺町線道路新設工事に先立つ埋蔵文化財発掘調査を中心として、平成3年度から平成12年度にかけて行った埋蔵文化財調査記録に関する報告書です。

今回報告しております遺跡は、日本歴史上、階級社会形成過程を考える上で重要な位置を占める弥生時代から古墳時代にかけての遺跡で、100基を超える甕棺墓やその後の集落化を物語る掘立柱建物などが確認されており、太宰府における当該期の歴史を語る上で重要な所見を得ることができました。ここ太宰府は地理的に福岡平野と筑紫平野の結節点にあり、当地の歴史を明らかにすることは、両者を結ぶ様々な歩みを解明する上で欠くことのできない重要な課題であるといえます。

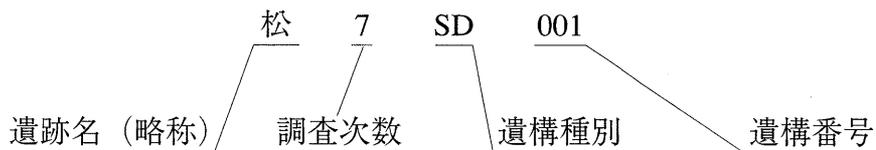
本書が文化財保護として実施された記録としてはもとより、文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用されることを心より願います。

最後になりましたが、文化財保護行政に対してご理解いただきました地権者の皆様をはじめ、関係されました諸機関の皆様方に心からお礼申し上げます。

太宰府市教育委員会  
教育長 關 敏治

## 例 言

1. 本書は、市道正尻 - 紺町線新設に伴って太宰府市教育委員会が行なった、国分松本遺跡第7次調査ならびに周辺調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本書に掲載した発掘調査の原因、調査期間等の調査に関わる経緯については、調査の報告部分に記載している。
3. 本書に掲載した調査年度および整理年度は、第II章に組織一覧としてまとめている。なお整理作業は各調査終了後に随時行ってきたが、主として実施した平成14年度ならびに15年度を整理年度として記載する。
4. 遺構・遺物の実測ならびに各図の浄書は、第II章にて記載した者が行った。
5. 遺構の写真撮影に関しても第II章にて記載した者が行い、遺物の写真撮影はフォトハウスおか（代表岡 紀久夫）が行なった。
6. 遺構実測図および遺構配置図は全て国土調査法第II座標系を基準としている。したがって図中に記載される方位は特に注記のないかぎり座標北（G.N）を指している。
7. 出土した動物遺存体、木製品ならびに金属製品の応急処置は、下川可容子が担当した。
8. 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、『佐野地区遺跡群 I』に記載している。



### 遺跡略称

松：国分松本遺跡 正：国分正尻遺跡 千：国分千足町遺跡

9. 本書の執筆は、目次に執筆者変更箇所の最初の頁に執筆者名を記し、かつ遺物については下記要領で記している。なお編集は中島恒次郎が行った。

遺物の観察に関する報告文は、九州大学大学院院生である重松辰治、渡邊誠、ならびに同大学学部生である城門義廣が、溝口孝司氏（九州大学大学院助教授）の指導のもと執筆を行った。土器に関しては、重松、渡邊が執筆し、石製品に関して城門が記載している。

10. 出土遺物および図面、写真等の記録は太宰府市教育委員会が保管している。
11. 本書で用いる分類は以下の文献に記載されている。

### 弥生土器・古式土師器

#### 日常土器

#### 【弥生中期】

田崎博之（1985）「須玖式土器の再検討」『史淵』第122輯 九州大学文学部

武末純一（1987）「須玖式土器」『弥生文化の研究』第4巻 弥生土器Ⅱ 雄山閣

**【弥生後期】**

柳田康雄（1987）「高三瀨式と西新町式土器」『弥生文化の研究』弥生土器Ⅱ 雄山閣出版

**【弥生終末期から古墳前期初頭】**

柳田康雄（1982）「三・四世紀の土器と鏡」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』

柳田康雄（1991）「土師器の編年 九州」『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器 雄山閣出版

太宰府市教育委員会（2001）『太宰府・佐野地区遺跡群 XI』

**甕棺**

橋口達也（1979）「4. 甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 XXXI（中巻）』福岡県教育委員会

**土師器・須恵器**

太宰府市教育委員会（1983）『大宰府条坊跡 II』

太宰府市教育委員会（1992）『宮ノ本遺跡 II 一窯跡篇一』

**陶磁器**

太宰府市教育委員会（2000）『大宰府条坊跡 XV』

**瓦**

石松好雄・高橋章（1978）「大宰府出土の瓦について（二）」『九州歴史資料館 研究論集 4』九州歴史資料館

12. 写真図版に関しては、モノクロ情報として巻末に掲載しているが、多くのものはカラー情報としてCD-ROMへ搭載している。搭載内容を見ていただくには、まず同CD-ROMへ搭載している「はじめに」をお読みください。

13. 下記情報に関しても、CD-ROMへ搭載している。

- ・ 遺構一覧
- ・ 出土遺物一覧
- ・ 遺物観察表

**目次**

I. 序	（中島恒次郎）	1
II. 調査地の環境		1
1. 自然環境		1
2. 歴史環境		2
A. 大宰府以前	（渡邊 誠）	2
B. 大宰府以後	（中島恒次郎）	4
3. 学説史上の位置		5
A. 大宰府以前	（渡邊 誠）	5
B. 大宰府以後	（中島恒次郎）	6
III. 報告にあたって		9
1. 遺構報告		9
A. 遺構に関する呼称法		9

B. 遺構報告に関する視点	9
2. 遺物報告	10
A. 遺物選別作業	10
B. 棺法量に基づく呼称法	11 (渡邊 誠)
C. 遺物観察事項	18 (重松辰治)
IV. 調査組織	20 (中島恒次郎)
V. 調査報告	26
1. 国分松本遺跡 第4次調査	26
A. 調査に至る経過	26
B. 基本土層	28
C. 遺構	28
D. 遺物	47 (重松辰治・渡邊誠・城門義廣)
E. 小結	89 (中島恒次郎)
2. 国分松本遺跡 第5次調査	93
A. 調査に至る経過	93
B. 基本土層	94
C. 遺構	94
D. 遺物	95 (重松辰治・城門義廣)
E. 小結	103 (中島恒次郎)
3. 国分松本遺跡 第7次調査	105
A. 調査に至る経過	105
B. 基本土層	105
C. 遺構	105
D. 遺物	137 (重松辰治・渡邊誠・城門義廣)
E. 小結	219 (中島恒次郎)
4. 国分正尻遺跡 第1次調査	223
A. 調査に至る経過	223 (城戸康利)
B. 基本土層	223
C. 遺構	223
D. 遺物	225 (重松辰治・城門義廣)
E. 小結	230 (城戸康利)
5. 国分正尻遺跡 第2次調査	232
A. 調査に至る経過	232 (中島恒次郎)
B. 基本土層	232
C. 遺構	232
D. 遺物	238 (重松辰治・渡邊誠・城門義廣)

F. 小結	265	(中島恒次郎)
<b>6. 国分千足町遺跡 第4次調査</b>	267	
A. 調査に至る経過	267	(城戸康利)
B. 基本土層	267	
C. 遺構	267	
D. 遺物	271	(渡邊誠・城門義廣)
E. 小結	292	(城戸康利)
<b>7. 国分千足町遺跡 第5次調査</b>	294	
A. 調査に至る経過	294	(中島恒次郎)
B. 基本土層	294	
C. 遺構	294	
D. 遺物	296	(重松辰治)
E. 小結	301	(中島恒次郎)
<b>VI. 自然科学分析</b>	303	
1. 動物種同定	303	
A. 歯	303	(中島恒次郎)
2. 古環境復原	303	
A. 花粉分析	303	((株)パリノ・サーヴェイ)
B. 植物種同定	304	((株)パリノ・サーヴェイ)
C. 粒度分析	305	(中島恒次郎・(株)パリノ・サーヴェイ)
3. 材質分析	310	
A. 粘土鉱物分析	310	((株)パリノ・サーヴェイ)
B. 土器胎土分析	312	(中島恒次郎・(株)パリノ・サーヴェイ)
4. 年代測定	321	
A. 炭素年代測定	321	((財)地域地盤環境研究所)
<b>VII. まとめ</b>	324	
A. 成果	324	(中島恒次郎)
B. 課題	326	
<b>写真図版</b>		

## I. 序

### 1. 経緯

報告する国分松本・千足町・正尻遺跡（以下「当該遺跡群」と記載）は、筑前国分尼寺跡を内包していることから、大宰府を考える上では条坊外にあるものの条坊周辺地域ならびに国分僧寺・国分尼寺と大宰府条坊との関連、さらには水城東門路線を考える上で重要な遺跡群に位置づけることができる。一方で緊急調査による調査成果の蓄積によって、大宰府以前における遺跡も明らかになり、中でも弥生時代における集落ならびに墓に関する遺跡として重要性が認識されるに至り、特に遺跡の立地環境から福岡平野と筑紫平野の結節点に位置するなど、両者を結びつける歴史的地理的環境を視野に入れた遺跡の解析が必要な地域に位置づけられるようになってきた。このような歴史的環境を有する当該遺跡群において、各種開発事業が計画され記録保存としての発掘調査を実施するに至った。各調査に関わる経緯については、それぞれにおいて記載している。本報告書に記した遺跡は、当該遺跡群に所在する5調査区に関するもので、調査年度も複数年度にわたっており、調査精度に関しては過去の調査成果の整理を待たずして新規調査に着手するなど、調査手法としては悪い状況を繰り返していることになる。

本報告書では、このようなあしき状況を少しでも改善する必要性から、単に報告のみに終始せず、調査成果から導き出される課題についても整理を行うことにする。

## II. 調査地の環境

### 1. 自然環境

当該遺跡群は、現在の行政体である太宰府市の北部に所在している。地形上は西部から広がる背振山系と東部から広がる三郡山系の最も接近した箇所において、北に福岡平野、南に筑紫平野（以下「両平野」と記載）が広がる境界部分に位置し、東西の各山系から派生する小丘陵に挟まれて、その間を御笠川が流れ、当該遺跡群からは両平野を通る往来を見ることは容易であったと考えられる。当該遺跡群を取り巻く地質環境は、早良型花崗岩を基盤層とし、この岩石を母岩とする風化生成物上に立地している。したがって、当該遺跡群にて出土する土器の胎土構成物質の多くは花崗岩風化生成物である可能性が高い。また、第四紀洪積低位段丘構成層上ならびに沖積段丘構成層上に位置しており、これら段丘は北を陣ノ尾川、南を大谷川が流れており両河川によって浸食して形成されたものと考えられる。両河川はいずれも御笠川へ注ぎ込んでいる。なお当該遺跡群が立地する自然環境としては、陣ノ尾川および大谷川の両者に挟まれており、河川崩壊を想定した場合、集落立地条件としては、あまり良好な場所とは言い難い。周辺の発掘調査では、平安時代後期の崩壊層に覆われた遺跡が各所で確認できており、近年の自然災害時における河川崩壊のみならず、過去においても自然災害に見舞われる地域であったと考えられる。

植生等の古環境については、これまで市内各所から抽出された土壌の花粉分析を行っており、報告にて取り上げる主要な時代としての弥生および古墳時代における環境は、その前段階の縄文期以前と比較して温暖化を示す木本・草本花粉が多く検出されている。その内容については、

国分松本遺跡第7次調査にて検出した7SD001最下層から抽出した粘土層の分析結果にても同様な傾向をうかがえ、詳細については自然科学分析結果として本報告にて記載している。

## 2. 歴史環境

諸国衙、郡衙ならびにこれら役所を接続する施設としての官道<sup>1)</sup>など、広域かつ統一的な整備事業を行ったと考えられる時期と、先の水城・大野城・基肆城の造営時期は、考古事象上の現象面で考えた場合二分される。現状では二期に分離して実施されたと解すことができ、大宰府官制成立時期は、政庁Ⅱ期正殿造営時期と併行関係を有する前者の時期が該当していると考えられる。しかし報告に際して記述する「大宰府」以前と以後を二分する場合、歴史的に意味のある分岐点として、国家形成を視野に入れた大宰府官制成立期を分岐点とすることが望ましいが、当該遺跡群のおかれた地形改変事業に視点を置いた場合、水城造営事業が大規模であるだけに後者の時期、すなわち天智初年頃を分岐点としておく。

なお、前者の成立時期に関しては、諸説あり制度成立時期と現象面として観察できる時期について、相互に検証すべき課題と理解している。いわば令制成立時期と先述した広域かつ統一的な整備事業の発現時期が整合しているのかどうかの検証が必要である、後者に関しては、文献史上描かれている画期を一旦横に置き、これまで蓄積されてきた考古事象の厳密な整理が望まれるところである。

### 【註】

1) 官道とは、これまで考古事象上での現象面からみた「定義」が示されてきている。しかしここで述べる官道とは、在地社会の利害を孕むかのように曲折する前代の道路とは異なり、在地社会の伝統を否定するかのような、具体的には、集落・墓域の破壊、水利権を内包すると考えられる自然地形の破壊など、「無作為」な破壊行為を行うような広域かつ統一的に施工される「直線」道路を指している。その背景には在地社会へ、おそらくは在地首長層へ道路施工をヤマト王権から「委託」された結果としての道路と、大和政権による官僚的国家事業として解される「直営」事業との差を表現しているものと考えている。

### A. 大宰府以前

大宰府市域においては旧石器時代から人々の活動の痕跡が認められ、宝満山遺跡第2次調査では中期に遡る可能性のある横長剥片を利用したナイフ型石器が出土している。また、後期に属すると認定される石器は複数の遺跡に見られ、今回の調査地近辺でも国分尼寺跡第10次調査でチョッピング・ツールが発見されている。縄文時代関連の遺物・遺構も、市内各所で散見されるが、晩期中頃には、宮ノ本遺跡など丘陵部への進出が活発になるとともに、丘陵裾部では前田遺跡、原口遺跡が確認されるなど、遺跡数の急激な増加が認められる。この丘陵部と低位面の連動した現象は当地域における食料獲得パターンに関係する一画期を示すと考えられる。本報告の調査地周辺でも国分尼寺跡第12次調査において、後／晩期に位置付けられる可能性をもつ玄武岩製の打製石斧が出土している。弥生時代になると、前期の遺跡は少ないものの、佐野地区の前田遺跡で住居跡や掘立柱建物が確認されている。中期には、国分地区において、国分尼寺跡の調査により住居跡や小型甕棺などが確認され、豊富な石器類や銅矛の鋳型片などが出土している。国分松本遺跡第1次調査では方形張り出し部や濠状の溝、木道状遺構が検出されている。また、周辺では、北東側丘陵上の陣ノ尾遺跡から小型甕棺、北西側丘陵上か

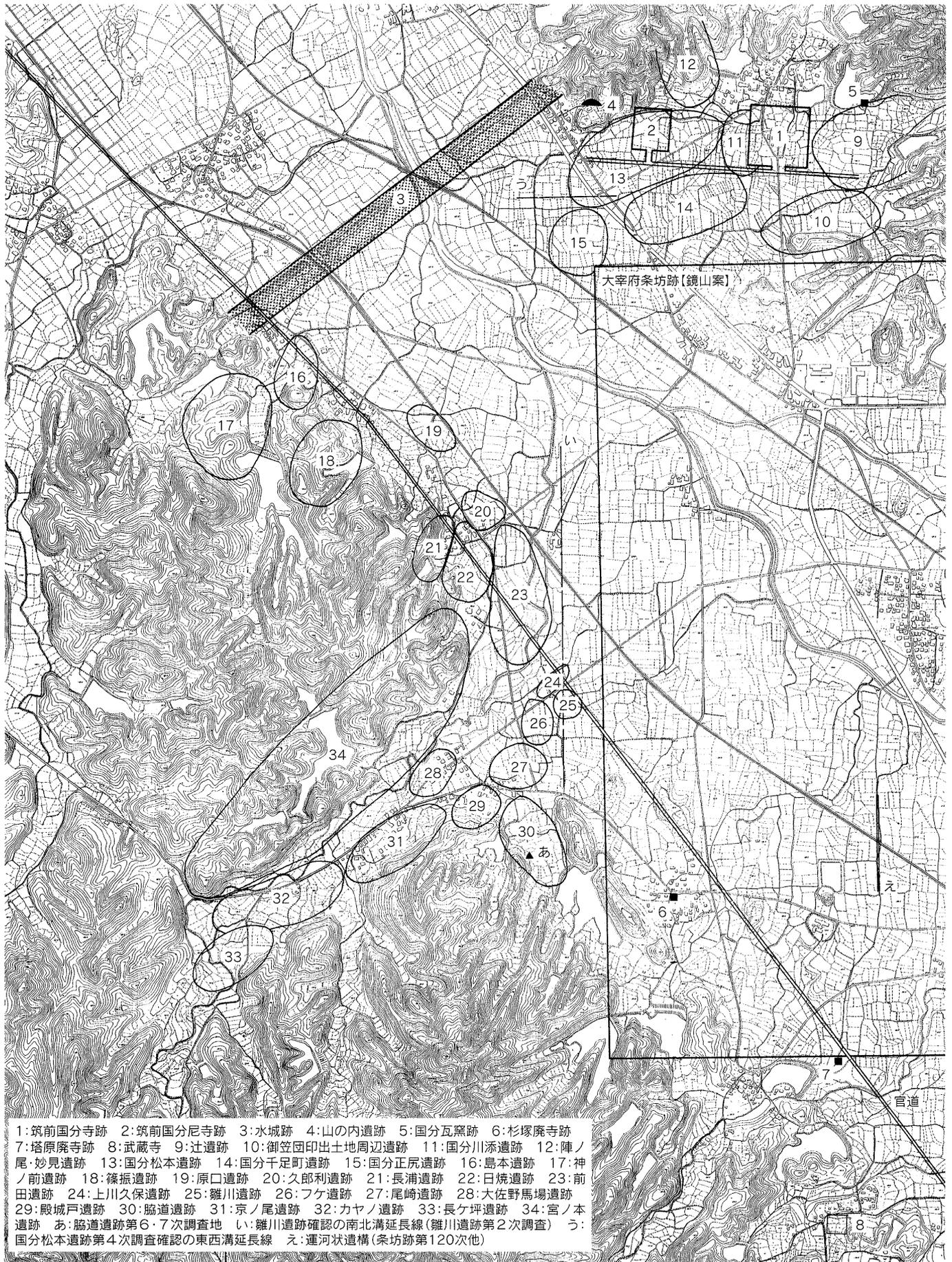


図1.報告遺跡周辺の環境

ら細形銅戈（水城山の内遺跡）や甕棺墓が検出され、墓域の存在が想定されている。これらのことから、当遺跡群を中心として中期の集落域が広範囲に広がっていたことが推定される。この他に、高雄地区の吉ヶ浦遺跡では中期前半の住居跡や中期後半の甕棺墓群などが確認されている。後期になると当遺跡群の出土遺物は希薄になるが、古墳時代初頭の遺物は相当量に上る。一方、佐野地区や高雄地区では後期後半以降、多数の集落が営まれる。これらは古墳時代前期へと継続しており、殿城戸遺跡第7次調査では方形区画溝によって囲まれた掘立柱建物なども確認されている。古墳時代中期以降、集落は佐野地区や国分地区を中心に展開し、後期になると大城山裾や宝満山裾にも出現する。この他、裏ノ田窯や池田窯などの生産遺跡も確認されている。一方、古墳の造営は前期の宮ノ本古墳群にはじまり、後期には陣ノ尾古墳群、池田古墳群、唐人塚古墳群などが築かれるが、7世紀前半にはこれらの造営はほぼ停止される。

## B. 大宰府以後

当該遺跡群周辺には、「大宰府」を特徴づける遺跡である水城跡、さらには東へ連なる大野城跡が北西約400mの位置にある。また東方には筑前国分寺・国分尼寺跡が所在しており、これら諸寺の前面を通る直線道路が当該遺跡群の一つである国分松本遺跡第6次調査地にて確認されており、西方へ延伸すると想定水城東門進入路へと至ることになる。鏡山推定条坊案においては、条坊外に位置していることから、単純には条里の存在が検討課題となるが、生活空間としての条坊と生産空間としての条里の区分について、考古事象面からの検討がなされていない現状において、当該遺跡群周辺がどちらに属しているのかは、調査所見から導き出される必要がある。なお鏡山推定条坊案について再検討の必要性が提起されて久しいものの、提起内容自体に問題を内包しており検討が必要と考えていることから、現状では学説史上周知されている鏡山推定条坊案を踏襲しておく。なお大宰府直前の歴史的環境として、当該遺跡群の東方に陣ノ尾古墳が形成され、同一時期の集落が未発見ながら、本文にて記載する国分松本遺跡第4次調査にて6世紀末から7世紀初頭に位置づけられる土器が出土し、周辺における大宰府直前の集落が確認される可能性がある。筑紫大宰を在地性とは異質分子として位置づけた場合、この大宰府直前の遺跡がどちらに傾いた性質を有しているのかが問題となる。特に前期筑紫大宰の所在ならびに後期筑紫大宰の機構整備過程が不明な現状にあって、問題は単に大宰府に関わる内容ではないだけに、慎重を期す必要がある（倉住、1985）。一方で大宰府直前の遺跡が、現行政区における大野城市・筑紫野市など隣接諸地域に比して少ないなど、その理由に関して今後検討を加えてゆく必要がある。現在この問題に関して想定できる検討課題としては、生産基盤としての水田地帯が狭小であることからくる在地首長層の脆弱性に起因した遺跡数の少なさ、後期筑紫大宰の機構整備に伴って消失、現状で未発見、などの想定される課題があるが、先述した福岡平野と筑紫平野の結節点としての地理的な条件があり、両者を結ぶ交通路の掌握という側面からみた場合、単に水田地帯の狭小さのみで生産性の低さを物語るのは早計である。また太宰府において大規模造成事業が開始される直前の集落とその後の集落の様相を、単に現象面のみを追うのではなく、文献史学上で描かれている社会像までを視野に入れた調査が必要となる。

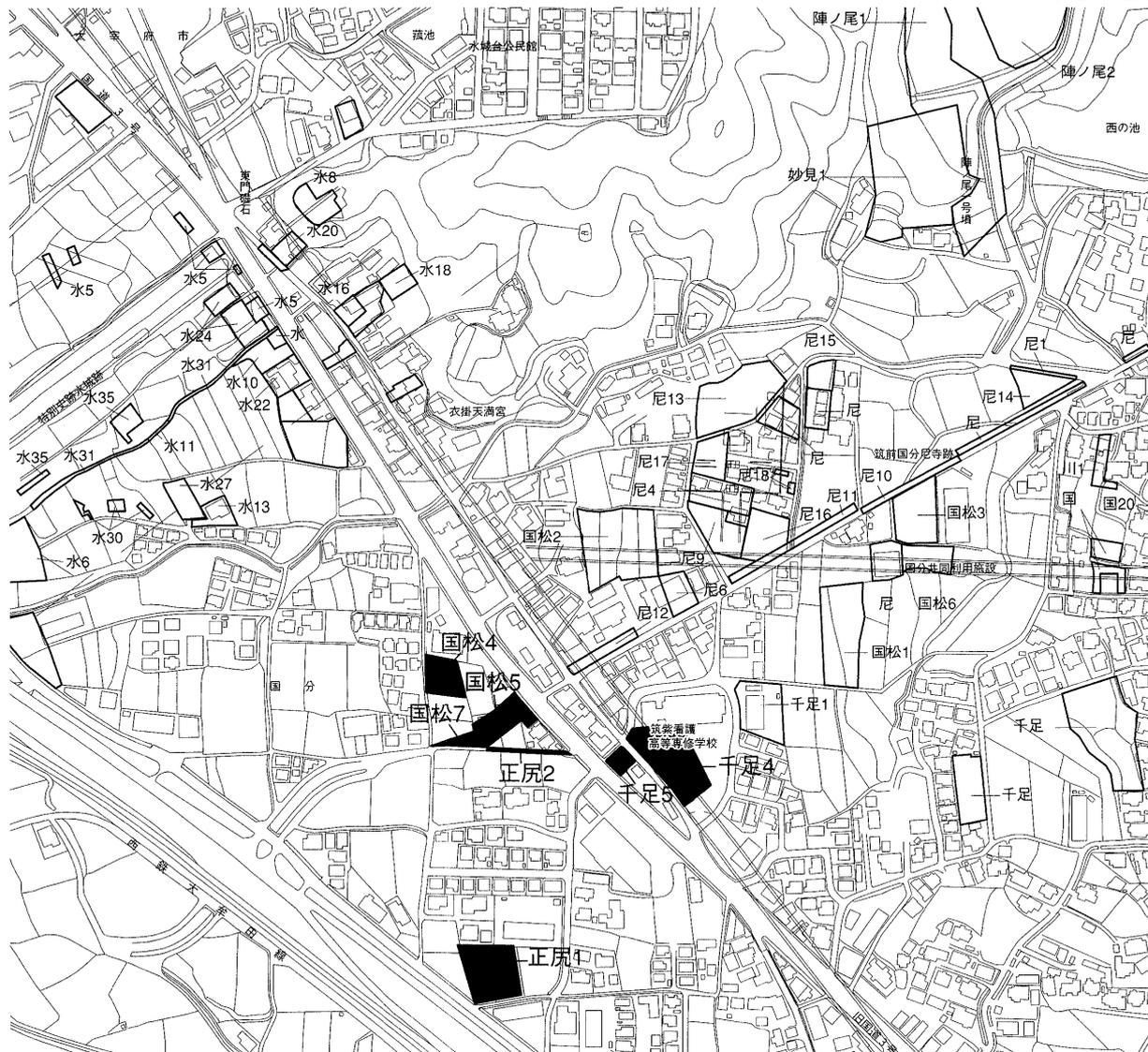


図2. 報告遺跡周辺の調査実績

#### 【引用文献】

倉住靖彦（1985）『古代の大宰府』吉川弘文館

### 3. 学説史上の位置

#### A. 大宰府以前

太宰府市域は福岡平野と筑紫平野の中間に位置し、両地域の社会的・文化的交流・交渉を考える際に、非常に重要な地域であると考えられる。しかし、古くから発掘調査により資料が蓄積されてきたものの、まとまった良好な資料が少ないことから、太宰府市域における遺跡群全体の動向、あるいはそれらと福岡平野や筑紫平野における動向との関係性が検討されることはほとんどなかった。

このような現状ではあるが、近年、佐野地区遺跡群や当遺跡群の発掘調査成果により、弥生時代から古墳時代における、太宰府市域内の各遺跡群の動向や遺跡群間の関係性などが把握可能な状況となりつつある。当遺跡群では、国分松本遺跡第1次調査において、方形張り出し部や濠状の溝が出土し（塩地 1994）、弥生時代中期の環濠集落となる可能性が考えられている。このことは、方形環溝の成立と展開に関する議論（久住 2003, p.98）や中期中葉における環濠

掘削の問題（小沢 2000b, p.38）に一定の影響を与えている。また、今回報告する国分松本遺跡第 4 次・第 7 次調査出土の甕棺墓群は、居住域と墓域の関係性や墓制の検討から、弥生時代の社会構造に迫る研究において、重要な資料となることが期待される。このような国分地区遺跡群に対し、御笠川を挟んだ対岸に位置する佐野地区遺跡群では、弥生時代前期、後期、古墳時代を中心とした資料の蓄積が著しい。しかし、現状では、脇道遺跡で中期後半の遺物が確認されている以外、佐野地区遺跡群では中期の遺構・遺跡が確認されていない。つまり、国分地区遺跡群と佐野地区遺跡群の集落動態を比較すると、存続時期がほとんど重複していないことがわかる。このことは、これまで福岡平野や筑紫平野などを中心として検討されてきた集落動態（小沢 2000a・2002）が、両地域の間地域において、どのような様相を呈するのかを考察する際に重要な情報となるであろう。

弥生時代終末期から古墳時代前期に展開する佐野地区遺跡群の殿城戸遺跡第 7 次調査では、古墳時代初頭の方形区画溝が検出され、内部からは 2 間×1 間の掘立柱建物が確認されている。掘立柱建物が小規模であり、柵や杭列など周囲の住居群と断絶性を図る施設が認められないことから、これがいわゆる「居館」となる可能性は低く、区画溝は集落部分とオープンスペース（公共的な広場）との境界設定を目的として築かれたものと想定されている（佐藤 2002, pp.74-75）。一方、久住猛雄氏はこの遺構を小規模な「居館」と推定し、比較的下位の首長層に関わる施設と考えている（久住 2003, p.101）。見解の当否はここでは問わないが、今後、周辺遺跡や宮ノ本古墳群との関係なども含めた遺跡群総体の中での位置付け・検討が必要となるであろう。

このように、太宰府市域では徐々に良好な資料が蓄積されつつあり、弥生時代、古墳時代を対象とした様々な研究テーマの好材料となることが期待される。

## B. 大宰府以後

大宰府の前身として上げられる「那津官家」は、その役割がそのまま大宰府へ継承されたかどうかの真偽を巡って多くの先行研究によって問われてきたところである（北條、2000）。また後期筑紫大宰の官司機構の所在地問題、条坊制の変遷および設計理念などについても明らかではなく、一言に「大宰府」といっても、いまだ多くの問題を抱えている（倉住、1975）。報告に関わる太宰府における「大宰府」の成立過程に関しては、その所在地ならびに都府楼地区にある「政庁」跡 I 期遺構の関係についても先行研究により、軍事的性格のみに注目する「原大宰府」説（田村、1990・長、1997）、まさに政庁としての後期筑紫大宰の筑紫統治機構としての役割を担う説と大きく二分される見解が示されている。一方考古学側では、福岡県による継続的な発掘調査によって都府楼地区に政庁が所在していたことは明らかとなってきた。しかしその性格に関しては、政庁 II 期における遺構配置が朝堂院形式を取ることから、国家的儀式を背景とする装置としての性格が付与されているものの、その前身である「政庁」I 期に関しては、未検討のまま II 期における性格を遡上させて「政庁」という呼称が付与されているのが現状である。この I 期における遺構配置が明らかになっていない現状にあっては、政庁地区を除く周辺地域における I 期と同じ時期の遺構群の性格などを検討することにより、

推定してゆくしか方法はないものと考えられる。周辺に所在する工房との関係について杉山洋氏による論考があるが（杉山、1983）、大宰府および観世音寺などを包括的に捉えたものであり、「政庁」I期の性格に関して考古学的に論証したものはない。

また鏡山氏によって提示された大宰府条坊制に関しても、その後の福岡県ならびに九州歴史資料館の継続的な発掘調査において、鏡山氏想定箇所からの条坊痕跡が確認されなかったことを受けて、岸俊男氏による条坊否定論も展開され、にわかに条坊否定論が定説化しはじめた（岸、1983）。これに対して、昭和54年度から継続的に市域を調査してきた太宰府市によって、平成元年に実施した大宰府条坊跡第87次調査ならびに第88次調査成果を受けて、それまでの成果を整理し、鏡山案とは異なる規模で東西南北の直線道路の存在を明らかにし、大宰府条坊の存在を確定的なものとした（太宰府市、1990）。その後狭川真一氏によってこれらの成果を継続的に整理し、大宰府条坊の時期および規模についての見通しが提示されることになる（狭川、1990）。狭川氏が明らかにした条坊復原案は、鏡山氏が俗にいう「碁盤の目」状の方形区画を想定したのに対し、長方形区画ならびに「あみだ」状に配された不規則な道路を基本とした条坊復原案であった。さらに鏡山案が24坊22条のほぼ方形の条坊の存在を推定したのに対し、条坊痕跡の存否から部分施工の可能性を示唆した。狭川氏の一連の成果は、これまで鏡山案に囚われていた調査を問い直し、国土座標によって調査を行ってきた成果を素直に整理したことから導き出された結果として、考古学における遺構構造論として最も基本的な手法を用いての成果であった。ただし、遺構の形成、使用、埋没の諸過程、ならびにその時期確定という視点において誤りがあり、考古事象の読み取りにおいて欠点が存在している。しかしこの欠点が狭川氏の論点を低下させるものではなく、大宰府条坊存否論に終止符を打ったことは学説史上、その後金田、阿部両氏によって大宰府条坊の復原案が提出されたことを考えると特筆すべき成果である。以上大宰府に係る学説史上の課題を整理したが、当該遺跡群に引き付けて課題を整理すると、条坊の外に展開する条里の存否が考古事象上まだ明らかにできていない。当該遺跡群の周辺にも東西南北に畦畔を有する水田が残存しており、昭和23年撮影の航空写真をもとに作図した旧地形図にも残されていることから、条里遺構の検出が待たれるところである（太宰府市教委、1989）。これを意図した開発事前調査（確認調査）においては、明確な遺構の確認ができておらず、積極的な条里施工状況、その時期について意見を提示するには至っていない。また水城東門からの大宰府への進入路の位置が明らかになっていない。この道路の存在については、水城跡東門の礎石と考えられるものが、現県道112号線と水城跡の交点部分に残されていること、筑前国分寺・国分尼寺前面の直線道路の延伸状況から、さらに福岡市板付遺跡周辺での道路確認とその延伸部分の推定状況から「東門」の存在とこれを通る道を想定せざるを得ない点などを考慮すると、存在する方向で考えざるを得ないことになる。ただし、当該遺跡群周辺の地形起伏を調査した際、現県道112号線そのものが、自然地形とは考え難い起伏を有しており、聞き取り調査によって県道造成時（旧国道3号線）に県道周辺の掘削によって盛土されたことが明らかとなった（中島、1999）。このことは、県道横に蛇行して存在している旧道が東門からの進入路である可能性があるにも関わらず、残存していない可能性を示唆す

るものとして悲観的にならざるを得ない。報告にて記載する国分千足町遺跡第5次調査の主目的はここにあったが、調査成果としては報告に記載したように弥生期の掘立柱建物のみを検出したただけであった。水城西門からの進入路を検出した前田・日焼遺跡のあり方からして、道路側溝の検出ないしは奈良期の遺物の採集が期待されたが、調査所見としては両者とも検出できなかった。以上の学説史上の課題を当該遺跡群に限って整理すると以下ようになる。

- ・遺跡性格から導き出される条坊・条里の存否とその施工時期
- ・水城東門進入路の存否とその施工・廃絶時期
- ・筑前国分寺・尼寺への進入路との関係
- ・水城造営時の「集落」の存否
- ・土地利用状況の時間軸上での変化と質

大宰府以降における学説史上の課題では、後期筑紫大宰による機構整備との関係、その後の大宰府の崩壊過程から中世さらには現代までの改変状況を追究する必要が想定できるが、前期筑紫大宰から後期筑紫大宰への変化過程における在地首長層との関係を問う必要もある。特に近年、佐野地区遺跡群内にある日焼遺跡における古墳終末期造営と考えられる曲折道路と、その曲折道路が廃絶（人為性がうかがえることから「廃止」とした方が適語と考えられる）し、その後に奈良期造営の直線道路が再整備されている痕跡を確認するなど、おのおのの道路施工時期ならびに道路形状から想定される施工背景を考えた場合、筑紫大宰と在地首長層との関係の一端を考える材料となるものと考えられる。このような視点に立脚した太宰府における発掘調査がまだ十分ではなく、今後の大きな課題といえる。

#### 【引用文献】

太宰府市教育委員会（1989）『大宰府条坊跡 V』

太宰府市教育委員会（1990）『大宰府史跡調査研究指導委員会資料 -付篇-』

田村圓澄（1990）『大宰府探求』吉川弘文館

狭川真一（1990）「大宰府条坊の復原」『条里制研究 第6号』

倉住靖彦（1975）「大宰府研究の現状と問題点についての序章」『日本史研究 153』日本史研究会

杉山洋（1983）「寺院付属の金属関係工房」『佛教藝術 148号』毎日新聞社

岸俊男（1983）「大宰府と都城制」『大宰府古文化論叢 上巻』九州歴史資料館

塩地潤一（1994）「国分松本遺跡の発掘調査」『考古学ジャーナル』378 ニューサイエンス社

長洋一（1994）「新城「大宰府」の成立」『日本の古代国家と城』新人物往来社

中島恒次郎（1999）「筑前国分寺跡の規模と環境」『古文化談叢 第42集』九州古文化研究会

小沢佳憲（2000a）「弥生集落の動態と画期—福岡県春日丘陵域を対象として—」『古文化談叢』第44集 九州古文化研究会

小沢佳憲（2000b）「集落動態からみた弥生時代前半期の社会—玄界灘沿岸域を対象として—」『古文化談叢』第45集 九州古文化研究会

北條秀樹（2000）『日本古代国家の地方支配』吉川弘文館

小沢佳憲（2002）「弥生時代における地域集団の形成」『究斑』II 埋蔵文化財研究会

久住猛雄（2003）「北部九州における弥生時代の特定環溝区画と大型建物の展開」『日本考古学協会 2003 年滋賀大会資料集』

日本考古学協会 2003 年滋賀大会実行委員会

太宰府市教育委員会 (2002) 『太宰府・佐野地区遺跡群 13』

### III. 報告にあたって

#### 1. 遺構報告

##### A. 遺構に関する呼称法

遺構性格を確定することは、調査所見の質および量のみならず、遺構が経てきた過去から現在に至る諸条件によっても得られる情報量に差異が生じることから、容易ではない。しかしこれまで太宰府市教委で報告してきた諸遺構には、住居・建物・溝・河川など遺構の性格を想起させるような記述を「慣例」的に行ってきた。以下にそれぞれの用語に関する、本報告での呼称法を明らかにしておく。

##### a-1. 住居

文献史側からの課題として提出されている、過去の共同体規模を導き出す根拠としての「住居」数について、考古学側からは遺構間の共時性ならびに遺構性格を根拠とした遺構数の把握が必要となる。一方で、安易に「住居」という遺構性格を想起させる名称付与によって報告することで事を終わらせてきた考古学側の怠慢を考えたとき、今一度遺構性格の検討と、性格付与根拠の提示を経る必要性を痛感することになった。ここでは、建物に関する呼称法に関して、「堅穴建物」呼称法を取ることも考えられるが、これまで市教委で報告してきた「慣例」を無視することによって生じる混乱を回避する目的から、性格を付与するための検討をまず行い、その後付与根拠を提示できるものに関しては、「」をはずした呼称法をとり、付与根拠が提示できないものに関しては、可能性として高い性格を「」付きで記載する必要がある。しかし本報告にて記載する堅穴住居として考えられる遺構については、その根拠提示が不十分、すなわち残存状況が悪く、根拠となる情報を収集することが困難であった。したがって、本文において「」無しの住居記載を行うが、そこには住居として提示する根拠が薄弱であることを前提として記載している。

##### a-2. 溝・流路・河川

人為性の有無およびその規模によって、適用する用語が異なる。人為性の高いものを溝とし、人為性の有無については明らかにし難いが、最終埋没において自然堆積層によって埋没しているものを流路としている。なお曖昧ながら一調査区内において遺構規模、この場合幅員が明らかにし難いほど大規模なもので、自然堆積によって埋没し、かつ定常的な流れがその堆積層から観察できるものについては、集落を取り巻く自然環境を明らかにする必要から、河川と呼称する。

##### B. 遺構報告に関する視点

遺構報告にあたっては、調査時の情報収集が全てであり、それを超える視点については情報を収集し得ていない。つまり先に述べた遺構性格付与根拠としてあげた各属性の検討を行う場合の情報に関しても、報告時の視点であり、調査途上における視点では残念ながらなかった。

ここに文化財の記録保存の欠点が露呈し、かつ調査よりも保護を行政上進めている理由がある。

## 2. 遺物報告

### A. 遺物選別作業

遺物選別作業手順については、遺構および土層から出土した遺物全てを業務分類に従って定性的な分類記載を行うことにある。しかし、従来太宰府市で実施してきた遺物選別にあたっては、古代以降の遺物記載のための分類に特化してきたこともあり、本報告にあたって主たる時期を占める弥生時代および古墳時代の遺物分類は行ってこなかった。そこで本報告にあたっては、弥生期および古墳期の遺物を分類し、業務分類として以下に示しておく。なお、考古学上の型式論にのっとりた分類は、後章にて詳述する。型式論に沿った分類と業務分類は、等しい関係にあるのが望ましいが、細片化した遺物の定性分析にあたって、属性認定を優先し包括的な分類であることが業務分類としては望まれる場合が多い。しかし、これは決して考古学的な分類と業務分類が乖離する必要性を説いているのではないことは、誤解していただきたい。

#### 【業務分類】

業務分類は、遺物の存否を可能な限り記載することを目的として案出された分類であり、遺物の残存状況によってその分類階層が異なってくる。分類するための観察可能属性数によって、後述する考古学分類に等しい関係となってくるが、逆の場合漠然とした分類へと低下することになる。しかし太宰府市の遺物記載方法として、遺構出土遺物全資料を遺物一覧として報告する方針であることから、分類階層が低下しようとも記載する方向で分類を行っている。具体的には下記のような階層がある。なお各階層は、型式ではなく形式の段階でとどまっていることが理解できる。多くの資料が破片であることが多く、型式までの分類であっては記載可能な資料が少なくなってしまうという経験則から生じたことであった。しかし、観察可能属性が多ければ多いほど型式へ細分してゆく必要はある。輸入陶磁器についても分類階層によって、産地—器種—形式—型式へと分類記載が細分化されてゆく（太宰府市教委、2000）。

階層 A	階層 B	階層 C
椀 c (高台貼付椀)	椀	
椀 a (無高台椀)		供膳具
杯 c (高台貼付杯)	杯	
杯 a (無高台杯)		
甕 a (外面刷毛調整甕)	甕	煮沸具
甕 b (外面叩き甕)		
壺 a (短頸壺)	壺	貯蔵具
壺 b (長頸壺)		

#### 【考古学分類】

型式学的な手法によって設定された分類で、「歴史的に意味のある」分類ということになる。先述した【業務分類】との違いは、【考古学分類】が属性—型式—形式の型式学的な分析階層

によって記載されるのに対し、【業務分類】が属性一型式を包括して形式階層のみを記載する点に差異がある。なおこれまで太宰府市にて実施してきた【業務分類】には、平安前期までの「杯 a」と平安後期に出現する「杯 a」には系譜関係は無く、形式的に別なものを「杯 a」として記載するなど理論的矛盾が内在している。このような点については、今後是正の方向で検討を要する課題である。

**a. 選別作業**

弥生時代中期の土器については、図4のように分類基準を設け、日常土器のうち広口壺形土器と甕形土器は田崎博之氏の編年案（田崎、1985）、その他の器種については武末純一氏の編年案（武末、1987）に準拠して時期比定をおこなった。また、いわゆる大型成人用甕棺については橋口達也氏の編年案（橋口、1979）を基準とした。

弥生時代後期の土器については、図5のように分類基準を設け、柳田康雄氏の編年案（柳田1987・2002）に準拠して時期比定をおこなった。

弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器については、図6のように分類基準を設けた。但し、弥生時代後期から古墳時代前期における壺・甕の底部や高坏の脚部については山村信榮氏の分類案（太宰府市教委、2001）に基づいて記載した。時期比定は柳田康雄氏の編年案（柳田1982・1991・2002）に準拠しておこなったが、久住猛雄氏の編年案（久住、1999）も同時に参照している。なお、これまで太宰府市内の弥生時代後期～古墳時代前期の報告において基準とされてきた山村氏の土器分類案（太宰府市教委、2001）と今回の分類案との対照関係は表7に示している。

**B. 棺法量に基づく呼称法**

一般的に、甕棺<sup>註1)</sup>は棺法量によって成人棺と小児棺とに二分され、被葬者の年齢層を想起させる呼称法が学史上取られてきている（橋口1978, pp.92-93）。しかし、これま

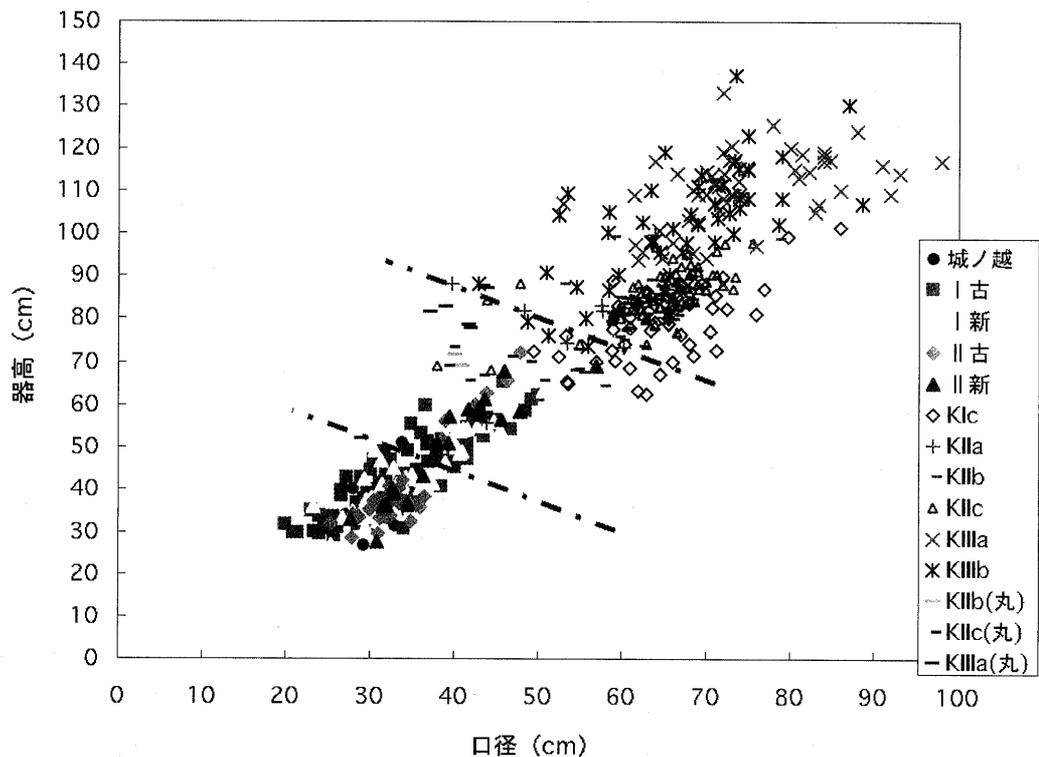


図3.型式ごとの口径と器高の相関関係

での発掘調査によって、成人棺に埋葬された未成人骨の例（橋口1979a, p.68 など）、福岡市西新町遺跡第10次調査における成人頭骸骨出土小児棺などの例（屋山2001, p.6）が確認されて

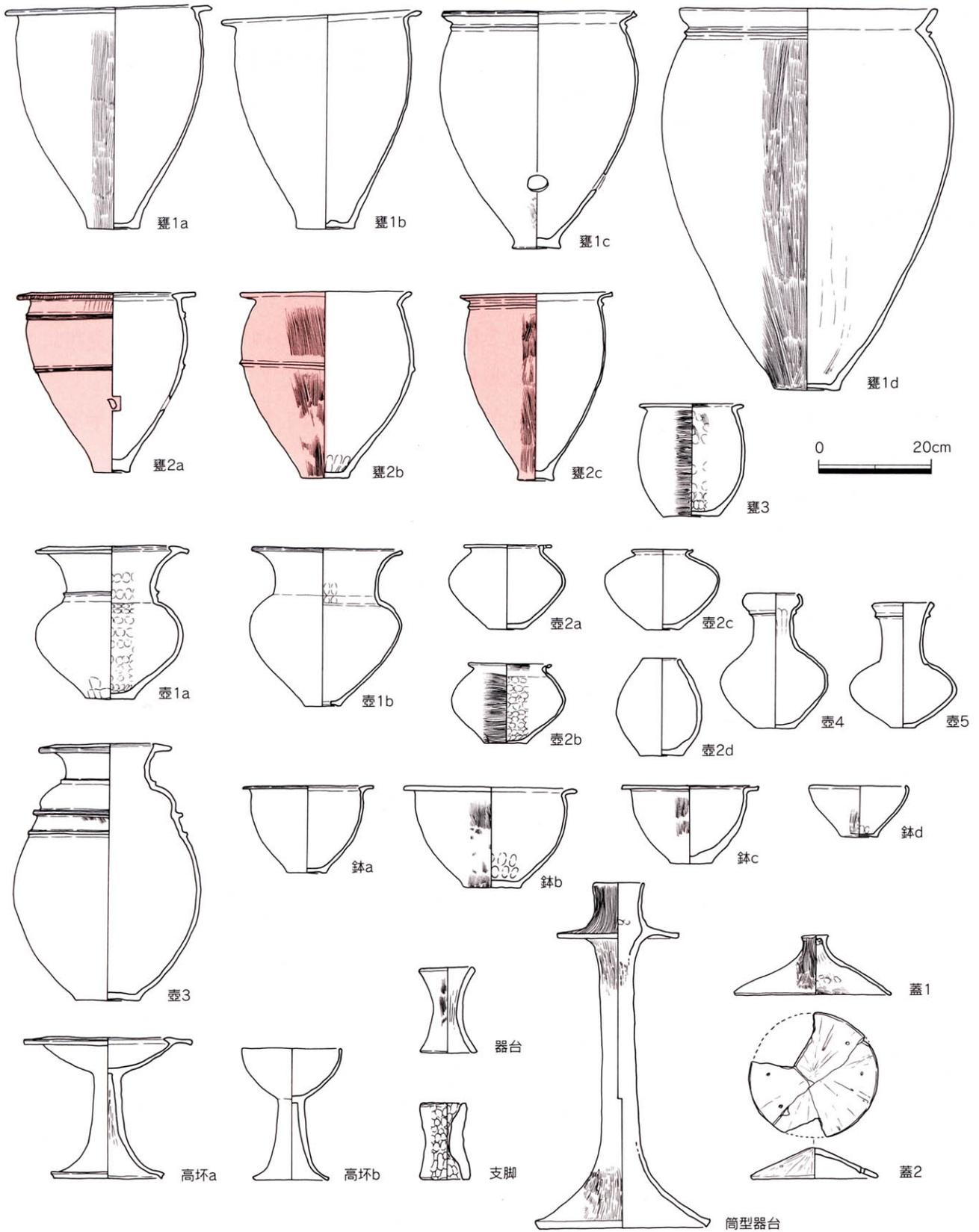


図4. 土器分類【弥生中期】(S=1/10)

甕1a・甕1b: 福岡県春日市原遺跡(木下修編1979)、甕1c・甕2c: 福岡県行橋市前田山遺跡(長嶺正秀編1987)、甕1d・甕2a・壺3・筒型器台: 福岡県福岡市那珂遺跡(山口謙治編1992)、甕2b: 福岡県小郡市横隈孤塚遺跡(速水信也編1985)、甕3・壺1a・壺2b・支脚: 福岡県福岡市比恵遺跡(杉山富雄編1986)、壺1b・鉢d: 福岡県福岡市那珂遺跡(下村智・荒巻宏行編1992)、壺4・鉢b・蓋1: 福岡県福岡市比恵遺跡(小林義彦編1985)、壺2a・壺2c・壺2d・壺5・鉢c・高环b・器台: 福岡県行橋市下稗田遺跡(長嶺正秀・末永弥義編1985)、鉢a: 福岡県前原市三雲遺跡(柳田康雄・小池史哲編1982)、高环a: 佐賀県鳥栖市安永田遺跡(山田正編1982)、蓋2: 福岡県福岡市板付周辺遺跡(杉山富雄編1986a)

\* 甕2cについては分類上において便宜的に丹塗りとした。なお、分類図は分類の指標となるように再トレース及び便宜的に一部加筆している。

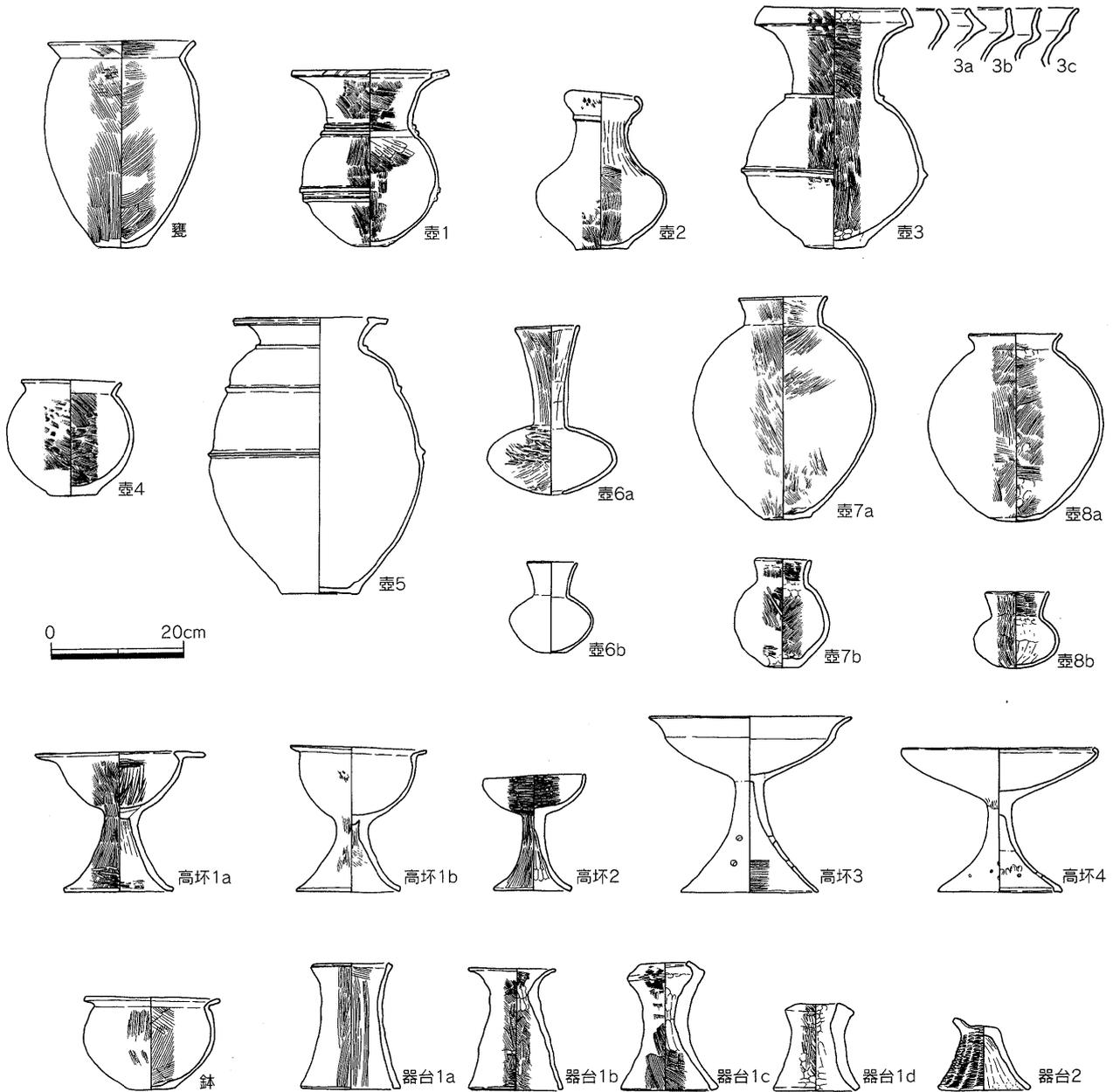


図5. 土器分類【弥生後期】(S=1/10)

壺・器台1c:福岡県太宰府市佐野地区遺跡群(中島恒次郎編2003)、壺1・壺6a:福岡県前原市三雲遺跡(小池史哲編1983)、壺2:福岡県福岡市板付遺跡(橋口達也編1979)、壺3・壺4・壺7b・壺8b・高坏1a・高坏2:福岡県福岡市比恵遺跡(杉山富雄編1986b)、壺5:佐賀県鳥栖市安永田遺跡(山田正編1982)、壺6b・器台2:福岡県小郡市大板井遺跡(片岡宏二編1982)、壺7a:福岡県小郡市三国の鼻遺跡(中島達也編1987)、壺8a・器台1b・器台1d:福岡県太宰府市佐野地区遺跡群(山村信榮編2001)、鉢:福岡県朝倉郡夜須町東小田遺跡(佐々木隆彦編1985)、高坏1b:福岡県小郡市井上北内原遺跡(速水信也編1984)、高坏3・高坏4:福岡県北九州市高島遺跡(小田富士雄編1976)、器台1a:福岡県朝倉郡夜須町金山遺跡(井上裕弘編1981)\*なお、分類図は分類の指標となるように再トレース及び便宜的に一部加筆している。

土器分類対照表

弥生時代後期		弥生時代終末期～古墳時代前期	
国分松本遺跡群	佐野地区(2001)	国分松本遺跡群	佐野地区(2001)
壺1	壺1,2	壺1	壺1,2
壺2	壺A1	壺2	壺F
壺3a	壺A2a~A2d	壺2	壺E3
壺3b	壺A3a	壺6	壺E2
壺3c	壺A3b	鉢1	鉢3
壺4	壺C1	鉢2	鉢2
壺6	壺B	鉢3	鉢4
壺7a	壺C2		
壺7b	壺C3		
壺8a	壺E1		
高坏3	高坏1~4		
鉢1	鉢3		
鉢4a	鉢4		
器台1a	器台1		
器台1b	器台2		
器台1c	器台3		
器台1d	器台4		
器台2	支脚		

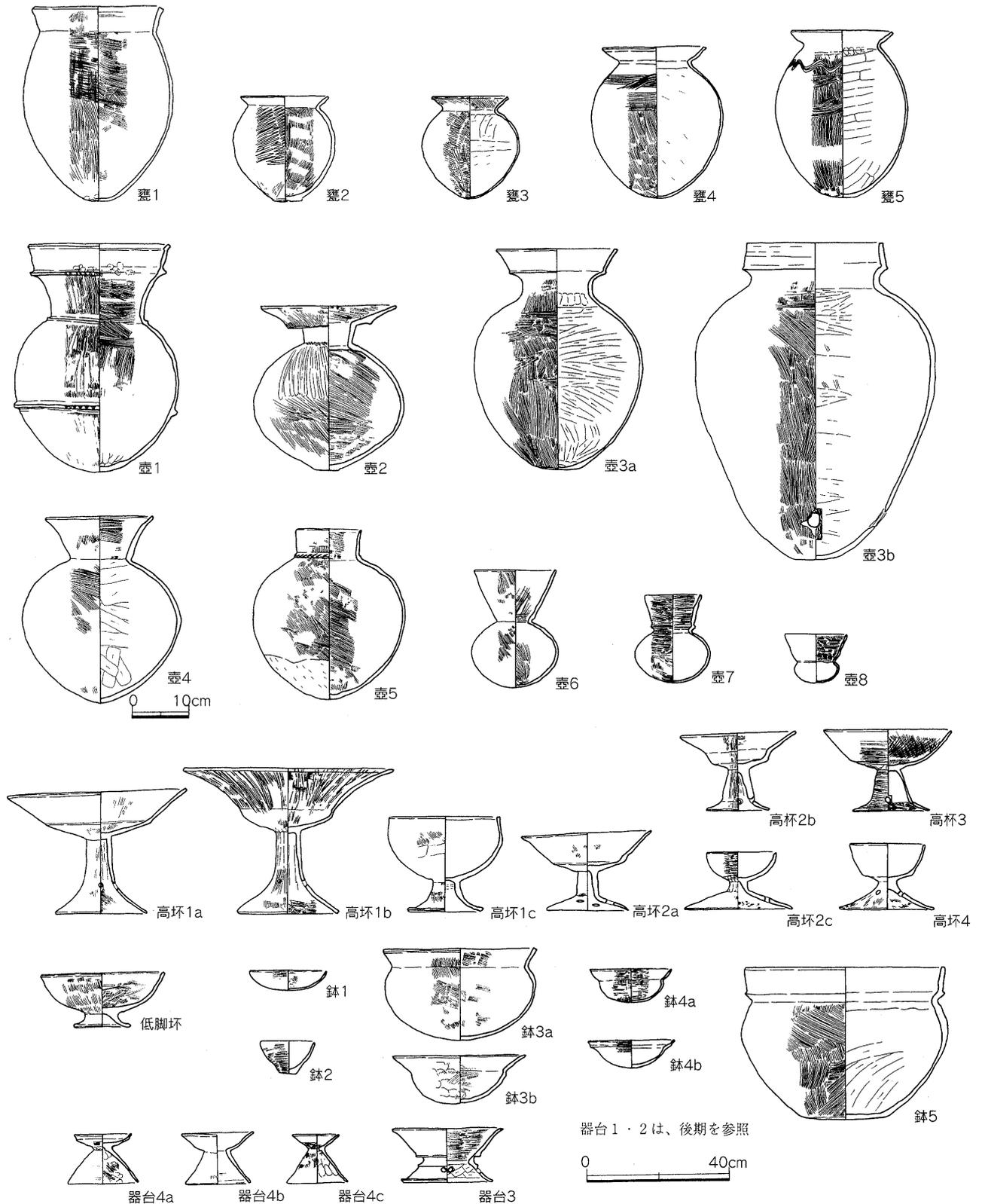
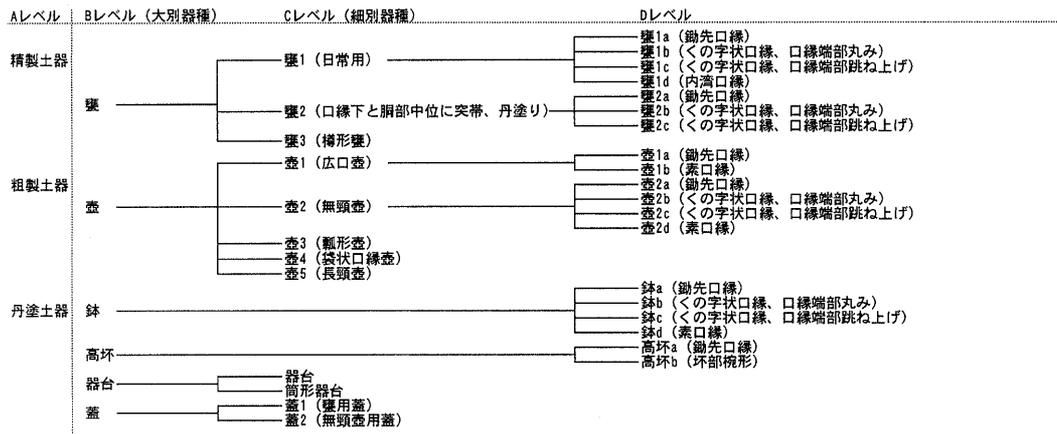


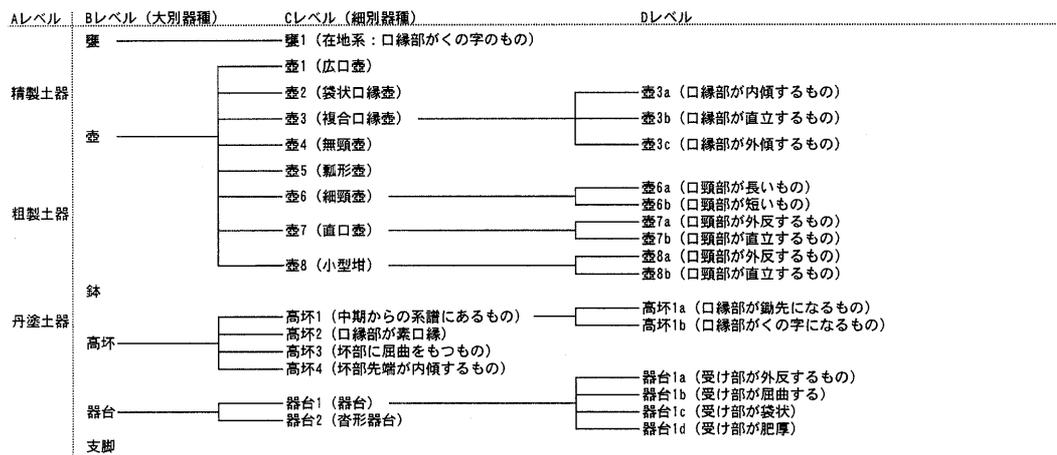
図6. 土器分類【弥生終末～古墳前期初頭】 (S=1/10・1/16)

甕1・壺4・高杯1a・高杯2a: 福岡県太宰府市佐野地区遺跡群(中島恒次郎編2003)、甕2: 福岡県筑紫郡那珂川町松木遺跡(沢田康夫編1985)、甕3・壺3b・壺5: 福岡県前原市三雲遺跡(柳田康雄・小池史哲編1982)、壺4: 福岡県福岡市那珂遺跡(山口譲治編1992)、甕5・壺7: 福岡県福岡市西新町遺跡(長家伸編1994)、壺1a: 福岡県福岡市西新町遺跡(折尾学編1982)、壺2・高杯4・鉢2: 福岡県筑紫郡那珂川町松木遺跡(沢田康夫編1984)、壺3a・鉢5・低脚杯: 福岡県福岡市西新町遺跡(森井啓次編2001)、壺8・器台4c: 福岡県福岡市湯納遺跡(栗原和彦1976)、高杯1b・高杯1c・鉢3a: 福岡県朝倉郡夜須町乙隈天道町遺跡(児玉真一編1989)、高杯2b・高杯2c: 福岡県小郡市津古生掛遺跡(柏原孝俊編1989)、高杯3・鉢4b・器台4a: 福岡県太宰府市佐野地区遺跡群(佐藤道文編2002)、鉢1・鉢3b・鉢4a: 福岡県太宰府市佐野地区遺跡群(山村信榮編2001)、器台4b: 福岡県前原市三雲遺跡(小池史哲編1983)、器台3: 福岡県福岡市西新町遺跡(重藤輝行編2000)\*高杯1d・器台1・2については後期の土器分類と同様であるため省略している。なお、分類図は分類の指標となるように再トレース及び便宜的に一部加筆している。

弥生時代中期の土器分類



弥生時代後期の土器分類



弥生時代終末期～古墳時代前期の土器分類



図7. 土器分類

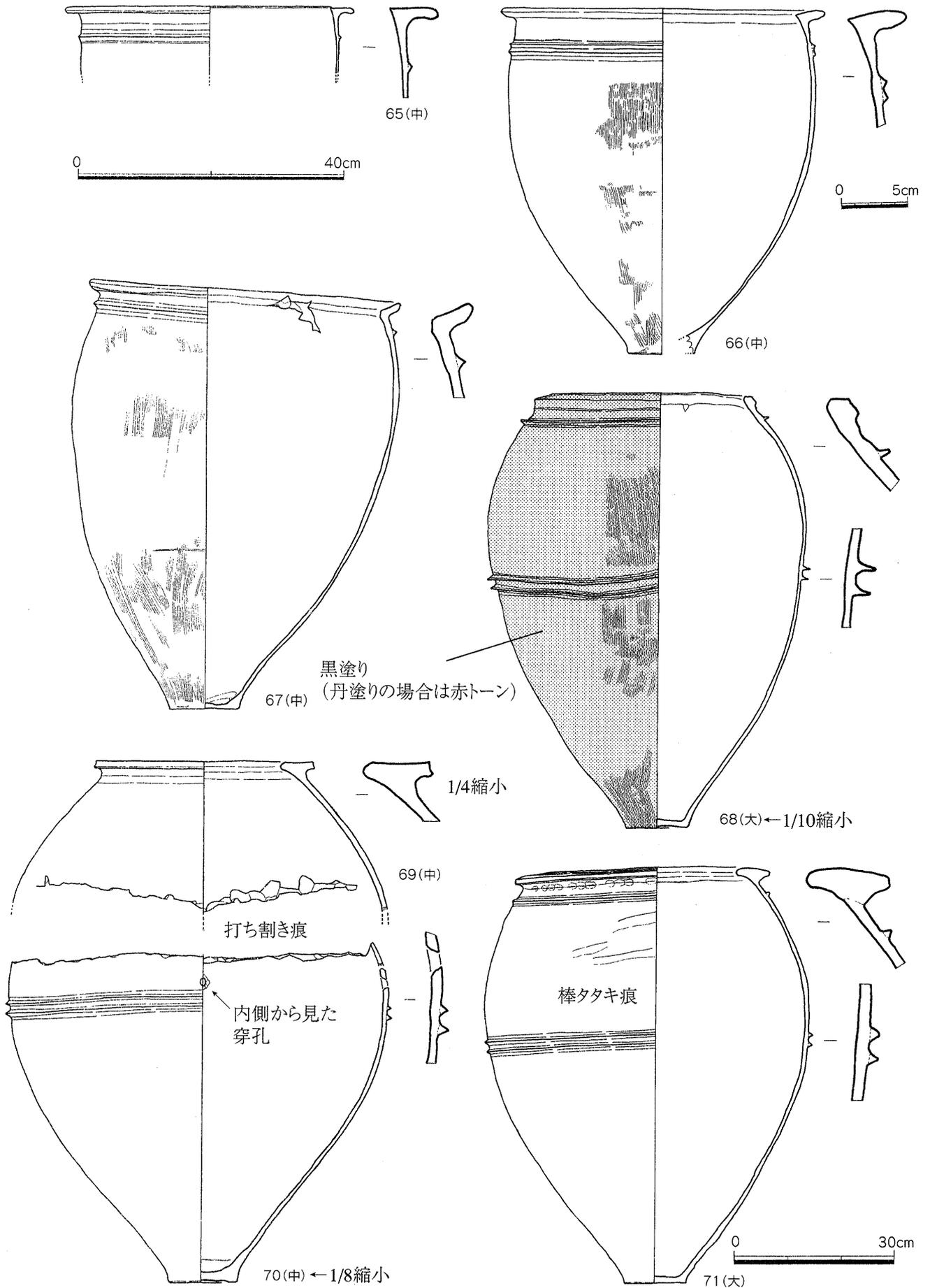


図8. 遺物実測図記載要項  
 ((大):1/10、(中):1/8、(小):1/6、口縁・突帯:1/4縮小で表示)

おり、棺の呼称において、被葬者の年齢層を想起させる呼称法を取ることは問題があると思われる。また、このことについては橋口達也氏も日常容器の転用された器高 50cm 以下の甕棺は、実際には、乳・幼児の埋葬に使用されたとして用語としては不適確であることを指摘している<sup>註2)</sup> (橋口 1978, pp.92-93、橋口 1990, pp.156-157)。このような点から、本報告においては、速水信也氏 (速水 1985, pp.61-62) や藤尾慎一郎氏 (藤尾 1989, pp.149-151) のように棺に利用された土器の法量に基づく判別基準を設定し、それによって「小型」「中型」「大型」などを冠した呼称法をとることとしたい。その判別基準については、当該遺跡群の周辺遺跡<sup>註3)</sup> から出土した甕棺<sup>註4)</sup> の法量 (口径・器高) を検討した。詳細な分析結果については次年度刊行予定の考察編において詳述するが、図 3 に基づき以下のような基準を設定した。ただし、必ずしも口径と器高が相関しているわけではなく、口径が小型に属し、器高が中型に属するような場合もある。そのような場合、器高を優先して呼称することにした。

小型棺：口径 20cm ～ 40cm 前後、器高 25cm ～ 45cm 前後

中型棺：口径 40cm ～ 55cm 前後、器高 45cm ～ 75cm 前後

大型棺：口径 55cm ～ 90cm 前後、器高 75cm ～ 130cm 前後

#### 【註】

註 1) ここでいう甕棺とは埋葬に使用されたすべての甕形土器を指すこととする。

註 2) 橋口達也氏は永岡遺跡の報告にあたってこの問題点について指摘している (橋口 1990, pp.156-157)。中期において器高 50 ～ 80cm までのものが小児棺にあたるものであるとするが、中期にはこの規模の棺が少ないことから、おそらく、幼児段階を生き延びたものは成人に達したであろうとしている。また、実際に小児人骨が残った事例からみた場合、小児の多くが小型のものに埋葬される一方で、大型のものに埋葬される場合もあったことを指摘している。これらのことから、氏は永岡遺跡の小型棺は幼児用のものであったとするが、呼称については通例に従うという形をとって成人棺・小児棺という呼称法をとっている。

註 3) 具体的には、当該遺跡群の北側に位置する狭義の福岡平野と南側に位置する筑紫野市域において、多量の甕棺墓が検出された遺跡の資料を取り扱った。ただし、甕棺の実測図等が公表されていない遺跡については、今回は取り扱っていない。また、上記地域においては K I c 式 (金海式) 段階の資料が十分に確保できなかったため、狭義の福岡平野からは外れるものの吉武遺跡群の資料も扱った。

註 4) 資料は当該遺跡群の甕棺墓地と同時期のおおよそ中期に属するものを取り扱った。具体的にはこれまで成人用と称されてきた「大型甕棺」のうち橋口氏の分類 (橋口 1979b) で K I c 式から K III b 式に属するもの、小児用と称されてきた主に日常容器を転用した「小型甕棺」で城ノ越式、須玖 I 式 (古・新)、須玖 II 式 (古・新) に属するものである。

#### 【引用・参考文献】

橋口達也 (1978) 「分類の基準」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 X X V 福岡県教育委員会

橋口達也 (1979a) 「ハサコの宮遺跡」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 X X X I 中巻 福岡県教育委員会

橋口達也 (1979b) 「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』 X X X I 中巻 福岡県教育委員会

橋口達也 (1990) 「永岡遺跡出土の甕棺および甕棺墓」『永岡遺跡 II』筑紫野市教育委員会

速水信也 (1985) 「総括」『横隈狐塚遺跡 II』下巻 小郡市教育委員会

藤尾慎一郎 (1989) 「九州の甕棺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 21 集 国立歴史民俗博物館

### C. 遺物観察事項

本書にて掲載する遺物において、特に注意し観察を行った視点は特筆すべきものは無いが、遺物製作から埋没までの「履歴」を観察するという考古学がこれまで培ってきた観察視点を実践したにすぎない。ただし、甕棺使用土器に関して、「タタキ」痕跡の観察については、従来から指摘されていたが、土器実測当初は観察項目から欠落していた。しかし、観察するにつれ「タタキ」痕跡と考えられるものが認められることが明らかとなり、その後は「タタキ」痕跡も観察項目に加え記載している。

#### c-1. 遺物実測図表記

本書に掲載した遺物実測図の表記方法は、図 8 に記載した表現方法をとっている。なお、接合痕跡に関しては、確実に観察できるもののみを記載しており、想定される箇所では観察できないものについては記載していない。また、遺物観察表を CD-ROM へ搭載している。その際の表記方法は、下記の通り。

また遺物の図化にあたっては、基本的に各出土遺構の最終埋没時期を示す資料を中心として実測を行ったが、この他、他地域からの搬入品と考えられるものや稀少な遺物についても積極的に図化を行っている。器面調整については、橋口達也氏 (橋口 1982) によってタタキ痕と認識された器面の凹凸が、当遺跡群から出土した甕棺の一部にも確認されたため、積極的に表現した。これらのタタキ痕の原体は、器面の凹みの大きさなどから、棒状工具である可能性が高いものと思われる。この他、刷毛目調整の切り合い関係などにも注目して、製作工程の復原に努めた。器面に丹塗りが施されているものには赤トーン、黒塗りが施されているものには黒トーンを貼っている。

##### c-1-1. 黒斑について

土器の表面に残された黒斑は、土器製作技術、とりわけ焼成方法の復元において重要な属性である。つまり、黒斑の有無や付着部位などは、焼成技術や焼成規模などの諸問題を考えるうえで不可欠な情報となりうる。これまで、黒斑に関する情報は報告段階で記載されることが少なく、記載された場合でも黒斑の有無のみであり、黒斑の位置や土器の接地面に関する情報は扱われてこなかった。今回の報告では、黒斑に関する体系的な研究をおこなっている小林正史氏らの成果 (小林ほか 2000、小林ほか 2003) をもとに、以下の 4 項目を中心に観察をおこなった。①黒斑の有無②黒斑の付着部位 (内外面、部位) ③黒斑の形状および状況 (白斑化や酸化) ④火色の有無である。ただし、破片資料が多く、観察可能な項目は大部分が①のみであった。そのため、本文中には黒斑に関する記載は行わず、観察表に記すのみとした。

##### c-1-2. 煤、コゲについて

煤、コゲは土器の使用状況を示す重要な属性である (小林 2003)。例えば、土器が煮沸具として使用された後、棺に転用されたと認定するには、煤・コゲが重要な指標となる。このような情報を得るために、今回は以下の 5 項目を中心に観察した。①煤・コゲの有無②煤・コゲの

付着部位③煤の酸化程度④吹きこぼれ痕の有無⑤コゲの形状(パッチ状、バンド状など)である。これらの情報について本文中にできるだけ記載し、転用の問題などについても言及している。

**【観察表について】**

**色調**：ミノルタ社製土色計 SPAD-503 を使用し、内外面ともに土器本来の色調を示す箇所を各3ヶ所ずつ測定し、その平均値をマンセル値で表示している。但し、黒斑・ススなどの付着により土器本来の色調を示す箇所が残存していない場合は色測していない。

**胎土**：外面に存在する砂粒のうち特徴的なものに関して、粒径 (mm 単位)、砂粒の色調 (白色・黒色・灰色など)、量 (かなり多量・多量・少量・ごく少量の4段階) を記している。

**焼成**：外面における調整痕跡の残存状況を判断基準として、かなり良好・良好・不良・かなり不良の4段階で記載している。

**残存**：残存部位 (口縁部・頸部・胴部上半・胴部下半・底部など) と全周に占める割合 (1/2 など) を記している。

**黒斑**：①黒斑の有無②黒斑の付着部位③黒斑の形状および状況 (白斑化や酸化) ④火色の有無を観察項目として記載している。

**煤・コゲ**：①煤・コゲの有無②煤・コゲの付着部位③煤の酸化④吹きこぼれ痕の有無⑤コゲの形状 (パッチ状、バンド状など) を観察項目として記載している。

**分類図に使用した報告書一覧**

- 井上裕弘編 (1981) 『金山遺跡』夜須町文化財調査報告書第4集 夜須町教育委員会
- 小田富士雄編 (1976) 『高島遺跡』北九州市埋蔵文化財調査会
- 折尾学編 (1982) 『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ』福岡市教育委員会
- 柏原孝俊編 (1989) 『津古生掛遺跡Ⅲ』小郡市文化財調査報告書第50集 小郡市教育委員会
- 片岡宏二編 (1982) 『大板井遺跡Ⅱ』小郡市文化財調査報告書第14集 小郡市教育委員会
- 木下修編 (1979) 『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第10集 福岡県教育委員会
- 栗原和彦編 (1976) 『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第4集 福岡県教育委員会
- 小池史哲編 (1983) 『三雲遺跡Ⅳ』福岡県文化財調査報告書第65集 福岡県教育委員会
- 児玉真一編 (1989) 『乙隈天道町遺跡』福岡県文化財調査報告書第86集 福岡県教育委員会
- 小林義彦編 (1985) 『比恵遺跡第7次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第117集 福岡市教育委員会
- 佐々木隆彦編 (1985) 『東小田遺跡群』福岡県文化財調査報告書第70集 福岡県教育委員会
- 佐藤道文編 (2002) 『太宰府・佐野地区遺跡群 13』太宰府市の文化財第62集 太宰府市教育委員会
- 沢田康夫編 (1984) 『松木遺跡Ⅰ』那珂川町文化財調査報告書第11集 那珂川町教育委員会
- 沢田康夫編 (1985) 『松木遺跡Ⅱ』那珂川町文化財調査報告書第12集 那珂川町教育委員会
- 重藤輝行編 (2000) 『西新町遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第154集 福岡県教育委員会
- 下村智・荒巻宏行編 (1992) 『那珂遺跡4』福岡市埋蔵文化財調査報告書第290集 福岡市教育委員会
- 杉山富雄編 (1986a) 『板付周辺遺跡調査報告書』(11) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第135集 福岡市教育委員会
- 杉山富雄編 (1986b) 『比恵遺跡第9・10次調査報告』福岡市埋蔵文化財調査報告書第145集 福岡市教育委員会
- 中島恒次郎編 (2003) 『太宰府・佐野地区遺跡群 16』太宰府市の文化財第66集 太宰府市教育委員会
- 中島達也編 (1987) 『三国の鼻遺跡Ⅳ津古脇田遺跡』小郡市文化財調査報告書第39集 小郡市教育委員会
- 長嶺正秀・末永弥義編 (1985) 『下稗田遺跡』行橋市文化財調査報告書第17集 行橋市教育委員会
- 長嶺正秀編 (1987) 『前田山遺跡』行橋市文化財調査報告書第19集 行橋市教育委員会

太宰府・国分地区遺跡群 1

長家伸編（1994）『西新町遺跡 3』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 375 集 福岡市教育委員会

橋口達也編（1979）「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』X X X I 福岡県教育委員会

速水信也編（1984）『井上北内原遺跡』小郡市文化財調査報告書第 20 集 小郡市教育委員会

速水信也編（1985）『横隈狐塚遺跡Ⅱ』上下巻小郡市文化財調査報告書第 27 集 小郡市教育委員会

森井啓次編（2001）『西新町遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第 157 集 福岡県教育委員会

柳田康雄・小池史哲編（1982）『三雲遺跡Ⅲ』福岡県文化財調査報告書第 63 集 福岡県教育委員会

山口譲治編（1992）『那珂 5』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 291 集 福岡市教育委員会

山田 正編（1982）『安永田遺跡本調査 2 年次概要報告書』鳥栖市文化財調査報告書第 15 集 鳥栖市教育委員会

山村信榮編（2001）『佐野地区遺跡 X I』太宰府市の文化財第 56 集 太宰府市教育委員会

#### IV. 調査組織

本書に掲載した調査および整理作業は、複数年度にわたることから、作業内容ごとの調査組織を列記する。なお調査担当者および整理報告担当者は、ゴシック体文字にて記載する。

##### 国分正尻遺跡 第 1 次調査（平成 3 / 1991 年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	富田 譲
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
調査	主任技師	川谷 豊
		山本信夫
		狭川真一
		<b>城戸康利</b>
		緒方俊輔
技 師	山村信榮	
	中島恒次郎	
	塩地潤一	
技師（囑託）	田中克子（3 年 10 月 1 日～）	

##### 国分千足町遺跡 第 4 次調査（平成 5 / 1993 年度）

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	中川シゲ子
	文化課長	佐藤恭宏
	埋蔵文化財係長	高田克二
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治

		川谷 豊
調査	主任技師	山本信夫
		狭川真一
		<b>城戸康利</b>
		緒方俊輔
		山村信榮 (4年7月1日～)
	技 師	山村信榮 (～4年6月30日)
		中島恒次郎
		塩地潤一
	技師 (囑託)	田中克子

**国分松本遺跡 第4次調査 (平成7 / 1995年度)**

**国分千足町遺跡 第5次調査 (平成7 / 1995年度)**

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	白木三男
	文化課長	花田勝彦
	文化財保護係長	高田克二 (～7年5月31日)
		和田敏信 (7年6月1日～)
	文化振興係長	大田重信
	主任主事	岡部大治
		川谷 豊
	主 事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一
		城戸康利
		山村信榮
		<b>中島恒次郎</b>
		重松麻里子 (～7年6月30日)
	技 師	井上信正
		高橋 学
	技師 (囑託)	下川可容子

**国分松本遺跡 第5次調査 (平成8 / 1996年度)**

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化振興係長	大田重信 (～8年6月30日)

		田中利雄 (8年7月1日～)
	主任主事	岡部大治
		川谷 豊
	主 事	今村江利子
調査	技術主査	山本信夫
	主任技師	狭川真一
		城戸康利
		山村信榮
		<b>中島恒次郎</b>
		井上信正
	技 師	高橋 学
		宮崎亮一
	技師 (嘱託)	下川可容子
		森田レイ子

**国分松本遺跡 第7次調査 (平成10 / 1998年度)**

総括	教育長	長野治己
庶務	教育部長	小田勝弥
	文化財課長	津田秀司
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫
	主任主事	藤井泰人
	主 事	今村江利子
	嘱 託	鈴木弘江
調査	技術主査	狭川真一
	主任技師	<b>城戸康利</b>
		<b>山村信榮</b>
		<b>中島恒次郎</b>
		井上信正
	技 師	<b>高橋 学</b>
		宮崎亮一
	技師 (嘱託)	下川可容子
		<b>森田レイ子</b>

**国分正尻遺跡 第2次調査 (平成12 / 2000年度)**

総括	教育長	長野治己 (～12月24日)
		關 敏治 (12月25日～)
庶務	教育部長	白石純一

	文化財課長	津田秀司（～3月31日） 木村和美（4月1日～）
	文化財保護係長	和田敏信
	文化財調査係長	山本信夫（～10月23日） 神原 稔（11月1日～）
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	野寄美希
	嘱 託	鈴木弘江
調査	技術主査	城戸康利
	主任技師	山村信榮 <b>中島恒次郎</b> 井上信正 高橋 学 宮崎亮一
	技師（嘱託）	下川可容子 森田レイ子 佐藤道文

**整理作業年度**（平成 14 / 2002 年度）

	総括	教育長	關 敏治
	庶務	教育部長	白石純一
		文化財課長	木村和美
		文化財保護係長	和田敏信
		文化財調査係長	神原 稔
		事務主査	藤井泰人
		主任主事	大石敬介
調査		主任主査	<b>城戸康利</b>
		技術主査	山村信榮 <b>中島恒次郎</b>
		主任技師	井上信正 高橋 学 宮崎亮一
		技師（嘱託）	下川可容子 森田レイ子 柳 智子 渡邊 仁

**整理作業・報告年度**（平成 15 / 2003 年度）

太宰府・国分地区遺跡群 1

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	白石純一
	文化財課長	木村和美
	文化財保護係長	和田敏信（～15年6月30日）
	（保護活用係長）	久保山元信（15年7月1日～）
	文化財調査係長	神原 稔（～平成15年9月30日）
	（調査係長）	永尾彰朗（平成15年10月1日～）
	事務主査	藤井泰人
	主任主事	大石敬介
調査	主任主査	<b>城戸康利</b>
	技術主査	山村信榮
		<b>中島恒次郎</b>
	主任技師	井上信正
		高橋 学
		宮崎亮一
	技師（囑託）	下川可容子
		森田レイ子
		柳 智子
		渡邊 仁

**【遺構・土層実測】**

城戸康利、中島恒次郎、上村英士（現筑後市教育委員会）、中西武尚（現大分市教育委員会）、小沢佳憲（現福岡県教育委員会）、山村信榮、井上信正、坂本雄介（現那珂川町教育委員会）、平島義孝（現大野城市教育委員会）、深江（佐藤）暁子（現大分市教育委員会）、柴田剛（現伊万里市教育委員会）、秋吉（井上）由紀子、永田佳子

**【遺構撮影】**

城戸康利、中島恒次郎、上村英士、中西武尚、山村信榮、井上信正、高橋学、平島義孝

**【遺物実測】**

**太宰府市教育委員会**

中島恒次郎、酒井三保子、松本里栄子、阿部浩子、森部順子、松隈里恵子

**九州大学**

九州大学大学院比較社会文化研究院

溝口孝司

九州大学大学院比較社会文化学府

重松辰治、渡邊誠、平美典（現鹿児島県立埋蔵文化財センター）

九州大学文学部

石田智子、城門義廣

**(株) 埋蔵文化財サポートシステム (実測委託事業として実施)**

中島朋子、今岡一恵、福田京子

**【実測図浄書】**

中島恒次郎、酒井三保子、松本里栄子、阿部浩子、森部順子、松隈里恵子

**【作表】**

笹隈加奈子、古賀美穂

本報告書に記載した調査および整理報告において、溝口孝司氏（九州大学大学院比較社会文化研究院助教授）および九州大学大学院比較社会文化研究学府学生諸氏の御指導・御協力があった。なお、整理報告にあたっては、九州大学大学院比較社会文化学府との共同作業として実施し、報告書作成にあたっては、共同執筆という形をとっている。なお執筆者以外の調査・整理作業の際の共同作業参加者は、下記のとおり。

小澤佳憲（現福岡県教育委員会）、平美典（現鹿児島県立埋蔵文化財センター）、井村公洋（当時九州大学大学院比較社会文化研究科院生）、石田智子（九州大学文学部学部生）

## V. 調査の概要

### 1. 国分松本遺跡 第4次調査

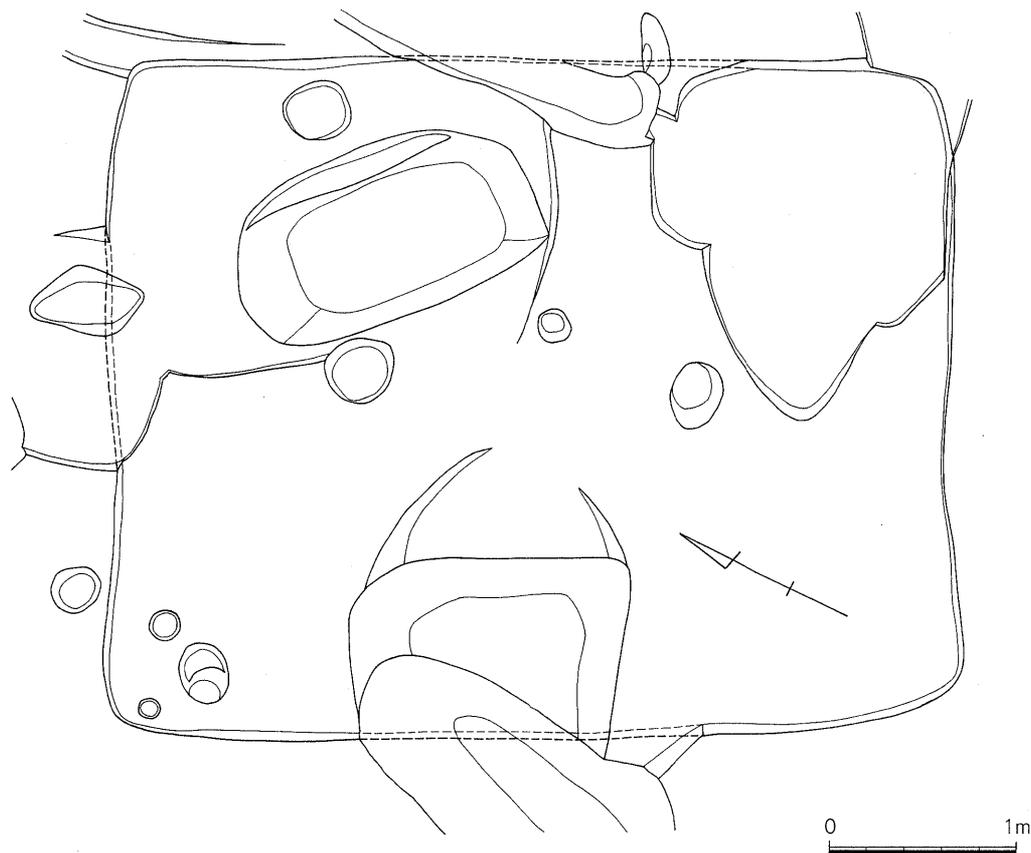
#### A. 調査に至る経過

調査地である太宰府市国分1丁目406-1において、平成5年1月に共同住宅建設を目的とした文化財取扱いに関わる問い合わせが建設業者より太宰府市教育委員会になされた。当地は、周辺に国分尼寺跡、国分正尻遺跡などが所在しており、弥生時代から古代にかけての遺跡分布域であることから試掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無および規模を確認した上で、共同住



図9. 松本遺跡 第4次調査 遺構配置図  
(番号のみは、全て甕棺墓)

4SI005



4SI225

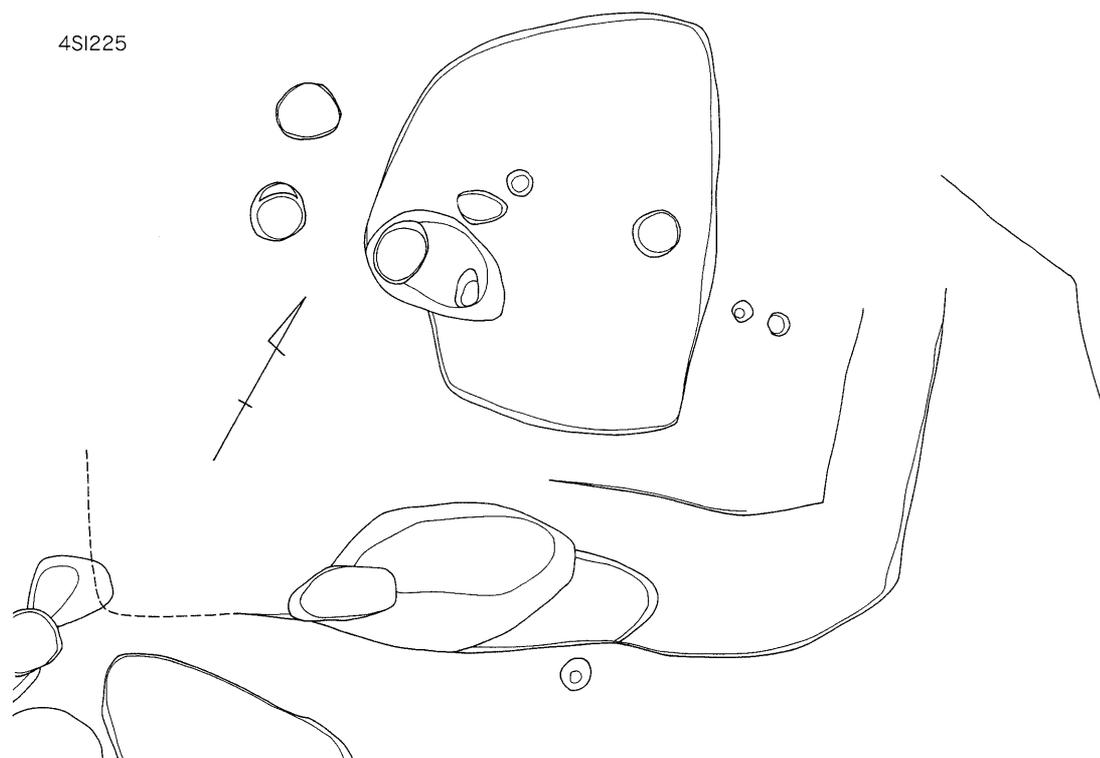


図10. 竪穴住居跡遺構実測図(1)

宅建設などの具体的開発内容によって調査の必要性について協議が必要となる旨を伝えた。その後、複数の問い合わせがあったが、平成6年3月に鉄筋コンクリート構造4階建て共同住宅建設の計画が具体的に提出されるに至り、平成6年12月13日に地権者である中嶋一男氏からの埋蔵文化財発掘調査承諾書の提出をもって、埋蔵文化財確認のための試掘調査を山本信夫が実施した。その結果、幅5mの溝一条および弥生時代のものと考え

られる小型棺をはじめとする遺構を複数確認した。現況地表面下約0.3m～0.5mの深さに遺構面が確認でき、開発計画が鉄筋コンクリート構造4階建て共同住宅建設ということもあり、遺跡破壊の可能性が極めて高いことから、協議の結果、記録保存のための発掘調査を実施する

ことで合意をみた。発掘調査は平成7年10月9日から同年12月5日にかけて実施した。発掘調査は中島恒次郎が担当した。開発対象面積は820 m<sup>2</sup>、調査面積は500 m<sup>2</sup>を測る。

## B. 基本土層

現耕作面より下位約0.3mの箇所に遺構面を検出した。表層部分は現耕作土および床土が観察でき、その下位に遺物包含層である茶色土がわずかに確認できた。また遺構検出時の土層として黒灰色土が観察できる。なお遺構再検出時は人工層位処理として黄茶色土で遺物を取り上げている。

## C. 遺構(図9)

### a. 竪穴住居

調査区北半部に残存状況は悪いながら3棟の竪穴住居を検出した。いずれも主柱穴2基を有する略方形の遺構で、建物方向がほぼ一致するものであった。

#### 4SI005(図10)

調査区北東部にて検出した竪穴住居で、住居中央部に2つの主柱穴を有する全体形状が長方形を呈するものである。長軸長4.3m、短軸長3.35mを測り、建物南側長軸辺に土坑を形成し相対する長軸辺沿いには何もなかったことから、この部分が入り口であると想定できる。貼り床の有無については、遺構残存状況が悪かったことから、基盤層内に掘り込まれていることしか確認できなかった。検出できた遺構の深さは残りの良いところで0.05m程度であり、極めて悪い状況であった。主

柱穴は、両者とも直径0.35mを掘り方とし、深さ0.5m～0.3mをそれぞれ測る。柱痕跡に関しては明確に確認できなかった。主柱穴間の距離は、任意中心間の計測で1.77mを測る。

#### 4SI220(図11)

調査区西部にて検出した竪穴住居で、他の2軒に比べ全体形状が明らかなものである。2基の主柱穴と屋内土坑、ならびに壁溝が検出できており、長軸長4.46m、短軸長3.98m

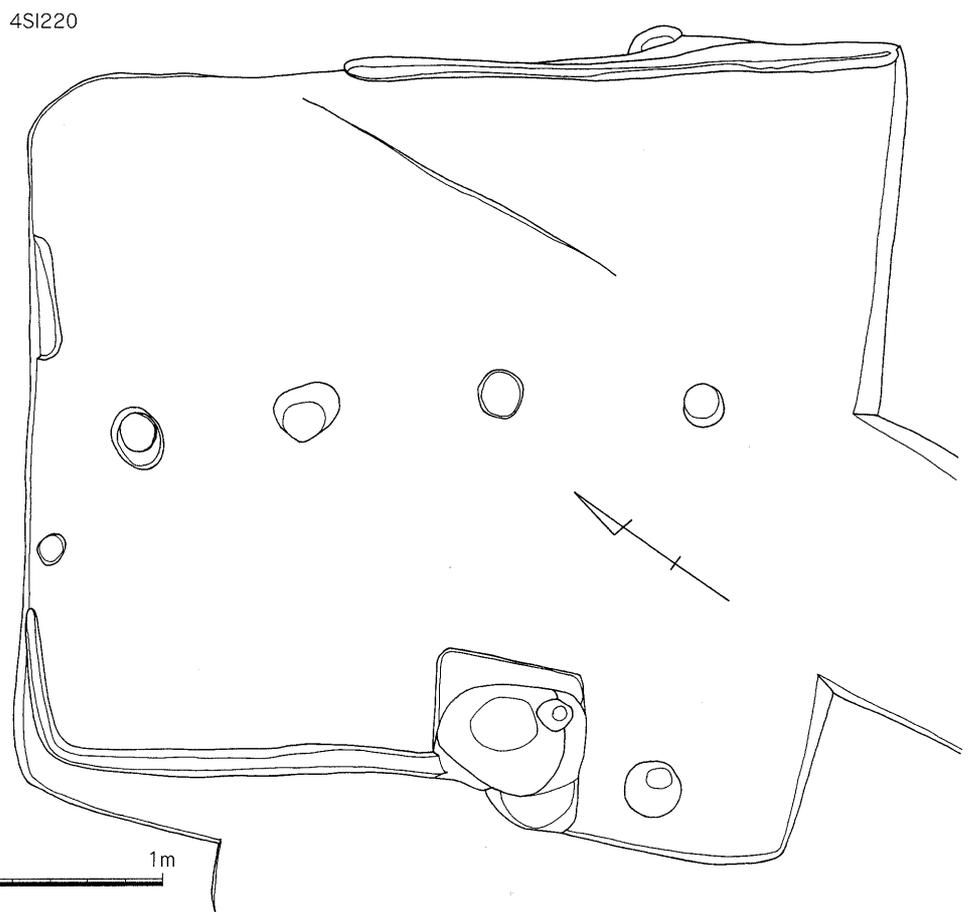


図11. 竪穴住居跡遺構実測図(2)

を測り、検出できた深さは、0.2mを測る。壁溝は南辺を除く各辺で検出できており、幅0.1m前後を残している。深さは住居床の高さを基点として0.07m程度と浅いものである。なお壁補強のための杭痕跡は明らかにできなかった。主柱については、調査中において判断したaおよびbの2基を抽出したが、他に2基確認している。全体の配置から推して柱穴aの北側に位置している穴が主柱穴である可能性もある。その規模は、aが直径0.3m、検出できた深さ0.2m、bが直径0.2m、検出できた深さは0.24mを測る。主柱の可能性を有するa北側の小穴は、直径0.32m、検出できた深さ0.41mを測る。任意中心間の距離は、a-b間で2.1m、a北側の小穴-b間で2.9mをそれぞれ測る。この遺構に関しては、ベッド状遺構を想定できるような土層変化を観察できなかった。

4SI225(図10)

調査区北西部にて検出した竪穴住居で、残存状況が悪く、主柱穴および屋内土坑と考えられるものならびに壁と考えられるわずかな凹みを検出したにすぎない。遺構全形については定かではないが、主柱穴と考えられる穴が2基確認できており、二本主柱を有する竪穴住居と考えられる。主柱穴の方向は、他の2軒(4SH005・4SH220)が北西-南東方向であるのに対して、北東-南西方向と90度近く異なっている。したがって建物主軸がこの住居のみ異なっていることになる。これが時期差であるのか、空間差であるのかは、出土した土器からは判断し難い。計測できる長軸長は4.70m、短軸長は遺構北辺が欠失していることから計測できない。主柱直径は、0.25m~0.3mで、残存する深さは0.4mを測る。また任意中心間での柱間は2.0mを測る。屋内土坑と考えられる遺構は、主柱穴の南にあり、住居南辺に平行に土坑主軸を有している。土坑長軸長は、1.92m、短軸長は0.79mを測り、この部分が入り口である可能性がある。この土坑のやや北側に建物主軸に沿うような凹みが観察できることから、ベッド状遺構が形成されていたと考えられる。なお貼床などの基盤層以外の土層は確認できていないことから、基盤層を直接床土とする住居であると考えられる。

b. 溝

4SD001(図12)

調査区を北西から南東に縦断する状況で検出した溝で、北西部分については、溝崩壊のためか土層図に記載したように河川と同様の形状を示し人為性は観察できない。しかし、溝南東半部分については、断面台形を呈しており溝岸部と溝底の高低差は残りの良い箇所では1m前後を測ることから、人為的に造られた可能性が高いと考えられる。溝内の堆積層の観察では、堆積

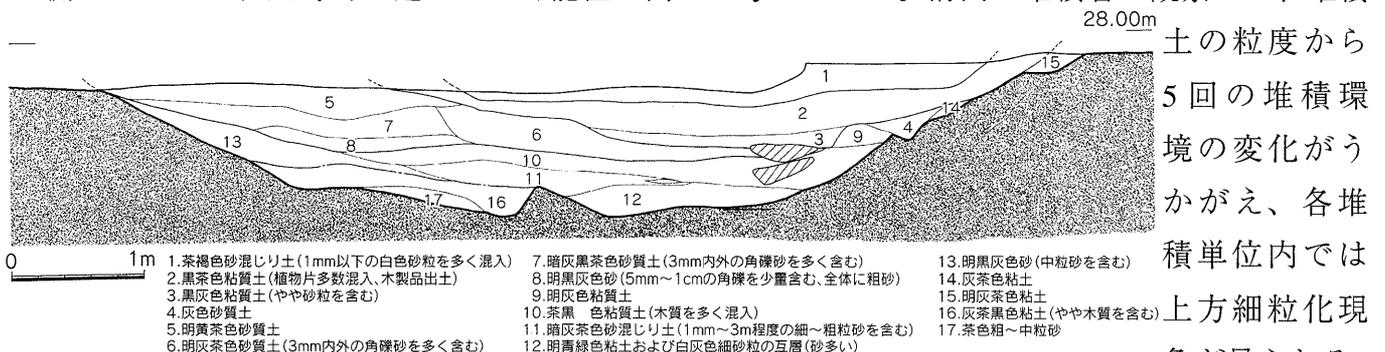


図12. 溝(4SD001)土層実測図

土の粒度から5回の堆積環境の変化がうかがえ、各堆積単位内では上方細粒化現象が見られる。

最終的には自然堆積によって埋没したものと考えられる。溝幅は最大幅 5.7m、最小幅 2.0m を測り、調査区外へ延伸しているが、当該調査区の南で調査を実施した国分松本遺跡第7次調査区で検出した溝（7SD265・290）へ接続するものと考えられる。なおこの溝から木製の弓、石剣と考えられる石製品が出土している。なおこの溝の各堆積層の時期は、最下層が弥生中期、中層部分が古墳前期、上層が古墳後期さらに上位の最上層では平安期であることを考えると、周辺遺構の掘削時における流入も想定できることから、溝の各堆積層出土遺物の最新時期以外のものは、周辺遺構からの混入の可能性が極めて高い。

#### 4SD022

調査区南に検出した溝で、検出できた他の遺構を全て切る状況で確認できた。遺構はほぼ東西方向に検出でき、溝底の高低差から東から西へ流れが想定できる。溝内の堆積土は、上位から茶灰色砂質土←灰茶色土←茶灰色砂混じり土が観察でき、粒度の規則性が見られず、不規則な堆積環境下で埋没したものと考えられる。なお調査区中央部では、溝底に小穴が多く検出でき、その部分において堆積土の広がりが観察できている。

#### c. 墓

墓域としては、調査区北東側に偏在する状況で確認でき、大型棺ならびに小型棺合わせて45基を確認している。なお墓分布域確認のため4SD022より南への基盤層断ち割りを実施したが、甕棺墓は確認できなかった。したがって、後述する国分松本遺跡第5・7次調査、国分正尻遺跡第2次調査地で甕棺墓を確認しており、そこへの連続性は考慮できないことになる。

##### c-1. 甕棺墓【小型棺】

#### 4ST010(図13)

調査区北東隅にて検出したもので、墓壙上半部分を既に欠失し、土器棺自体の破碎も顕著であった。さらに4SD002による攪乱も観察でき、残存状況が極めて悪い状況であった。したがって遺構規模に関しても明らかにし難い。なお先述したように4SD002による攪乱のため、単棺であったのか蓋構造を有するものであったのかについては、判然としない。棺挿入角度は約14.5度、棺挿入方向は、ほぼ北側からが想定できる。

#### 4ST015(図13)

調査区北東隅に検出した小型棺墓で、検出墓壙長軸長 1.02m、短軸長 0.62m を測る。甕棺墓上半を欠損しており棺自体も破碎が著しく、棺挿入方向については南東方向からと想定できそうであるが、墓壙底が土器破片のくい込みによって乱れており、確定的なことは判断し難い。

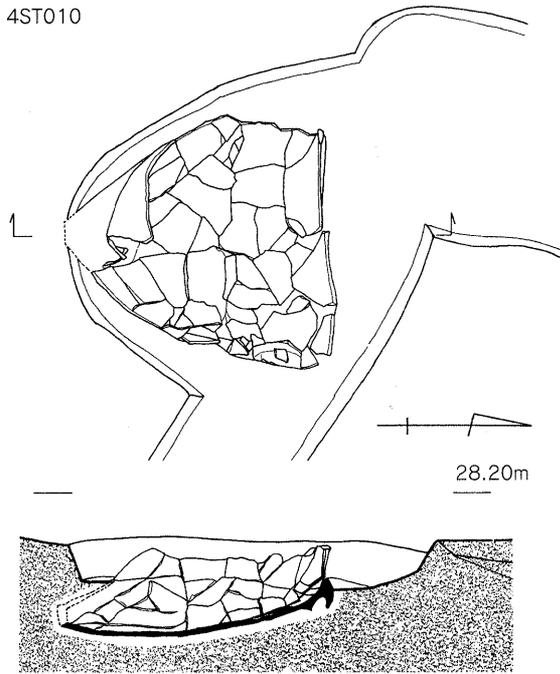
#### 4ST020(図13)

調査区北東部に検出したもので、検出墓壙長軸長 0.89m、短軸長 0.61m を測る。甕棺墓上半を欠損しており、特に上甕と考えられる土器は底部を欠損している。棺挿入角度は約15度を測り、挿入方向は北東方向を想定している。

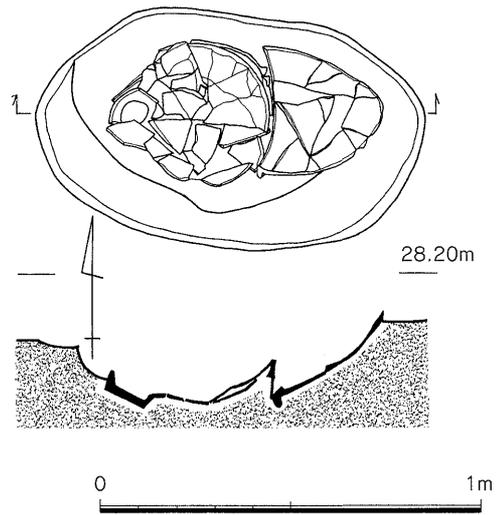
#### 4ST040(図13)

調査区東北部にて検出したもので、遺構の大半を欠失しており棺挿入方向ならびに角度を明らかにし難い。検出墓壙長軸長は 0.66m、短軸長は 0.36m を測る。上下甕棺の合わせ箇所外面

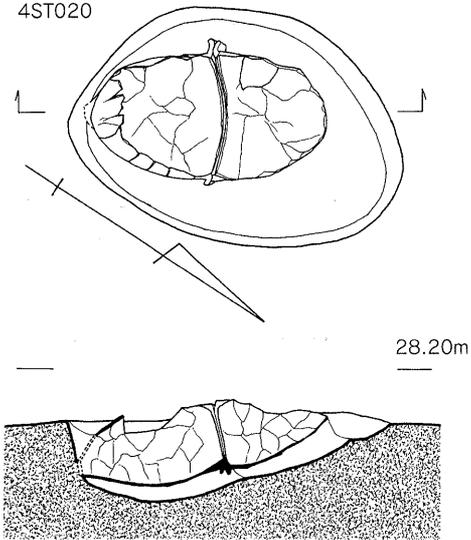
4ST010



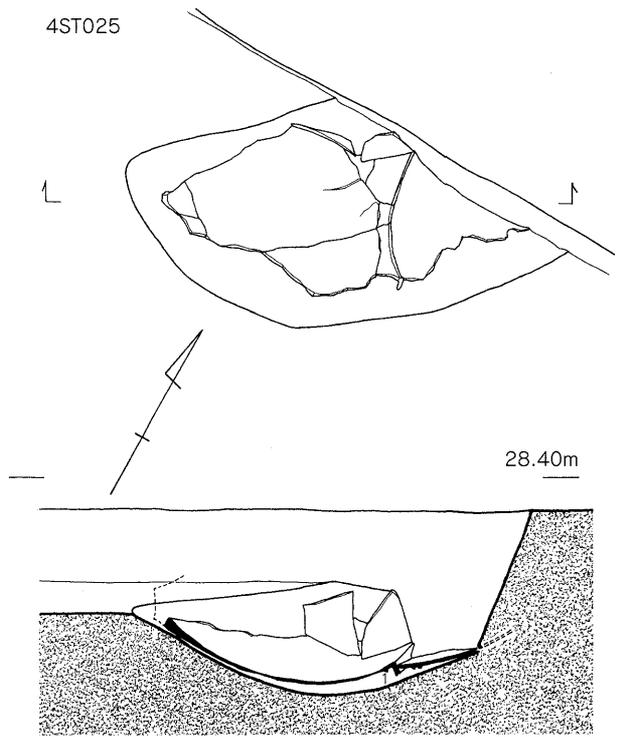
4ST015



4ST020

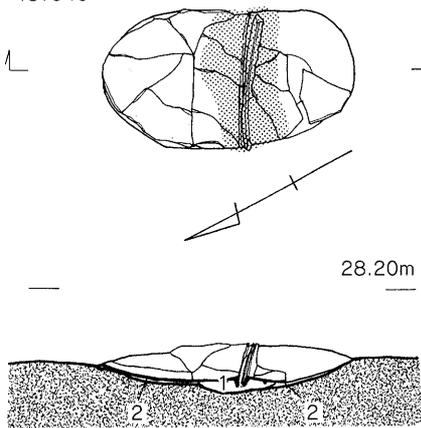


4ST025



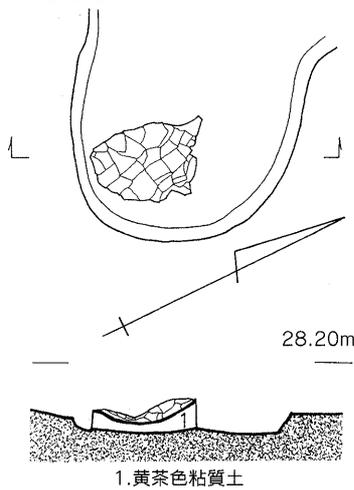
1. 茶灰砂土(流入したものか)

4ST040



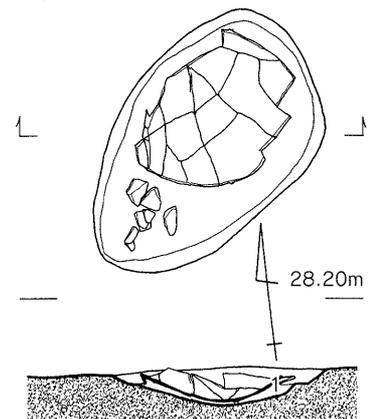
1. 白灰色粘土  
2. 灰茶色砂質土

4ST045



1. 黄茶色粘質土

4ST065



1. 灰茶砂土

図13. 甕棺墓遺構実測図(1)

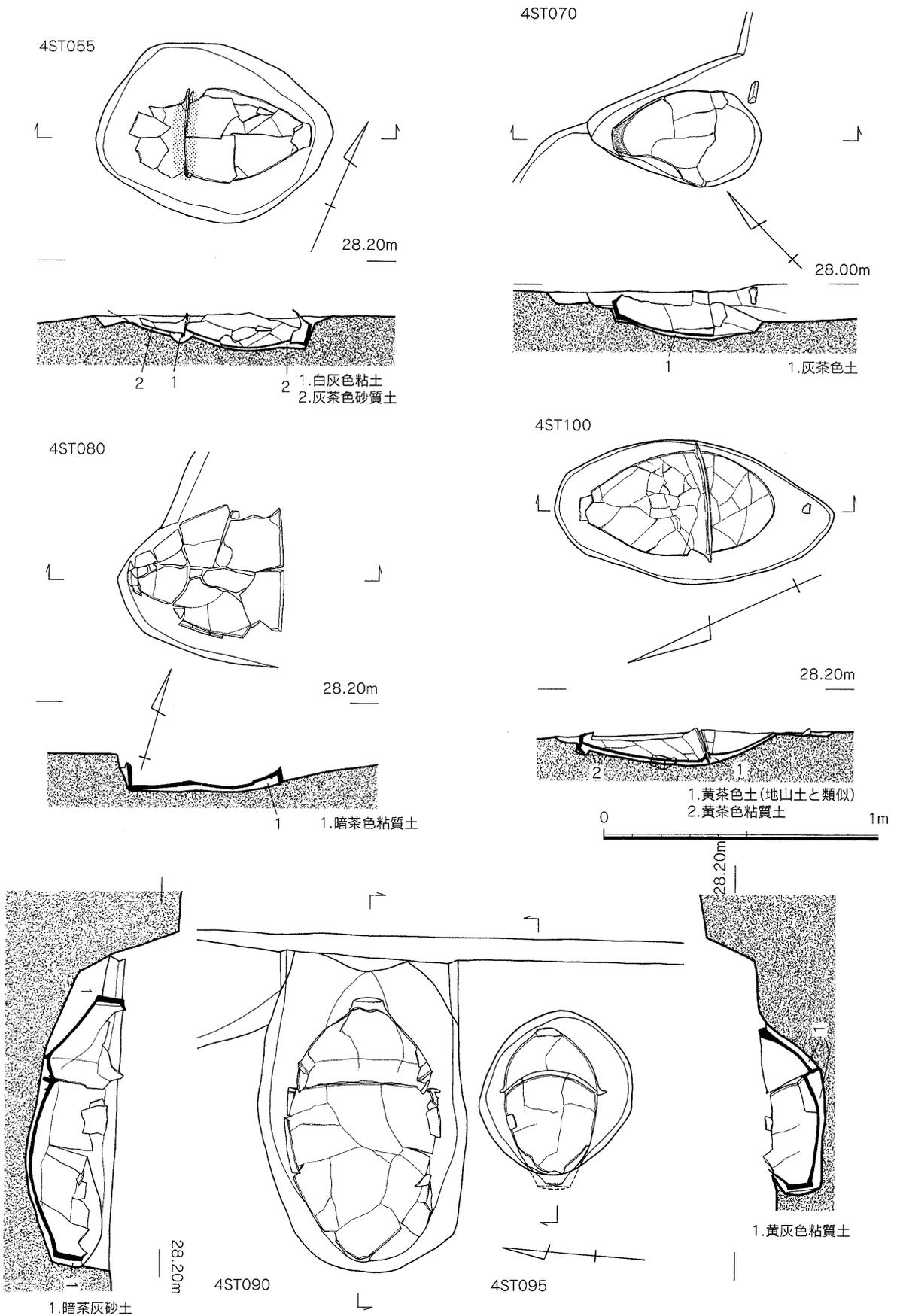


図14. 甕棺墓遺構実測図 (2)

には白色の粘土で目貼りされていた。

4ST045

調査区北部にて検出したもので、ごくわずかの棺転用土器と考えられる破片が残存していた。したがって、遺構規模などの詳細な情報に関しては、想像の域を出ない。また遺構性格に関しても、甕棺墓とする根拠に乏しいことも否めない。

#### 4ST055( 図 14)

調査区北部にて検出したもので、遺構上半部の多くが欠失しており、上甕については口縁部の一部を残してそのほとんどが失われている。検出墓壙長軸長 0.83m、短軸長 0.63m を測り、上下甕の合わせ目外面には白灰色粘土を目貼りしている。棺挿入方向は南西方向が想定され、挿入角度は 15.5 度を測る。

#### 4ST070( 図 14)

調査区北部にて検出したもので、4SH005 に切られることにより、遺構規模の半分以上が欠失する形で検出できている。検出できた残存墓壙長軸長は 0.52m、短軸長は 0.33m を測る。棺挿入方向については、遺構残存状況が悪いことから判断し難い。

#### 4ST085b( 図 20)

4ST085a に付帯する遺構として理解していたことから、4ST085b として記録化した。残存状況が悪く、遺構上位より圧縮されたような印象を受けた。なお 4ST085b は下位にある 4ST085a の上位に検出され、大型棺への小型棺挿入事例、いわば 4ST085a とは別人を被葬者として想定していたが、福岡市西新町遺跡第 10 次調査 ST017・ST018 の関係を見ると、同一人物である可能性も否定できない（福岡市、2001）。遺構規模に関しては、土器棺のみの検出であり、下位に検出した 4ST085a の墓壙との区別が判然としなかったことから、数値化できていない。

#### 4ST095( 図 14)

先述した 4ST090 に近接しかつ墓壙長軸方向を平行して造営されたもので、遺構上部を欠失している。検出墓壙長軸長は 0.64m、短軸長 0.52m を測り、墓壙底までの検出標高からの深さは 0.24m を測る。棺挿入角度は約 17 度、挿入方向は 4ST090 同様にほぼ東からと想定できる。

#### 4ST100( 図 14)

調査区中央部で検出したもので、遺構上半部を欠失している。また土圧によるためか底部が陥没しており、原位置の形状は保っていないものと判断される。検出墓壙長軸長は 0.98m、短軸長は 0.5m を測る。棺挿入方向は南西からと判断できる。なお棺挿入角度に関しては、上甕の多くが欠失してしまっており算出できなかった。

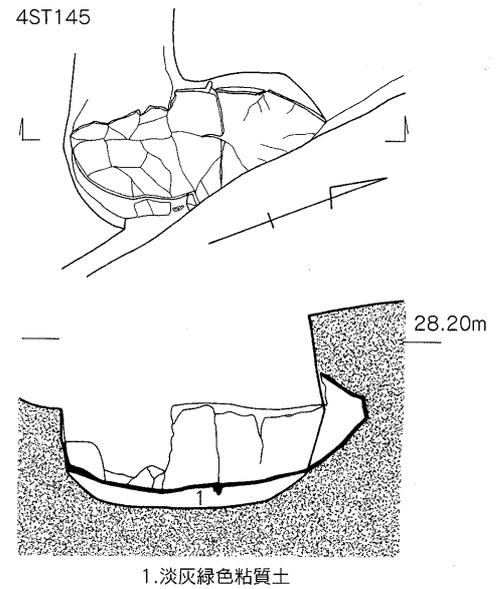
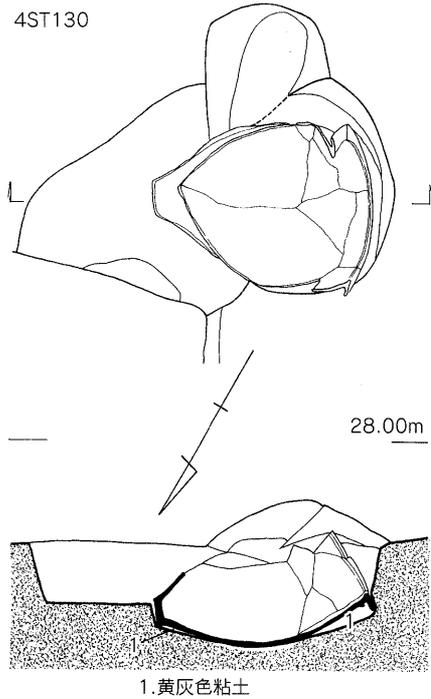
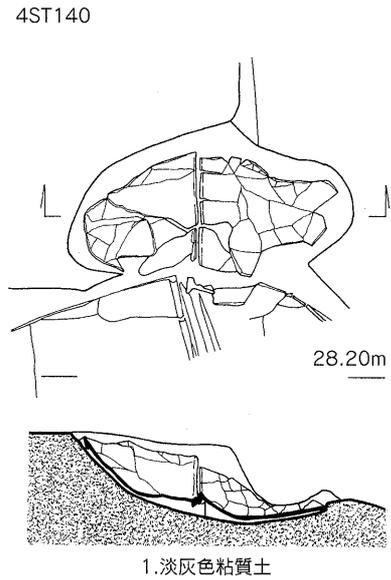
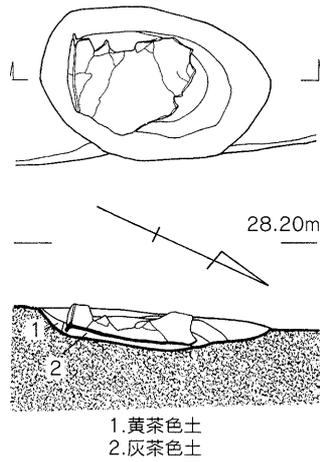
#### 4ST105( 図 15)

調査区中央やや東寄りに検出したもので、遺構の大半を欠失しており、遺構規模の計測に関しては残存状況の数値となる。検出墓壙長軸長は 0.6m、短軸長は 0.4m を測る。棺挿入方向は南東を想定できるが、棺挿入角度に関しては、上甕がその多くを欠失していることから明らかにし難い。

#### 4ST140( 図 15)

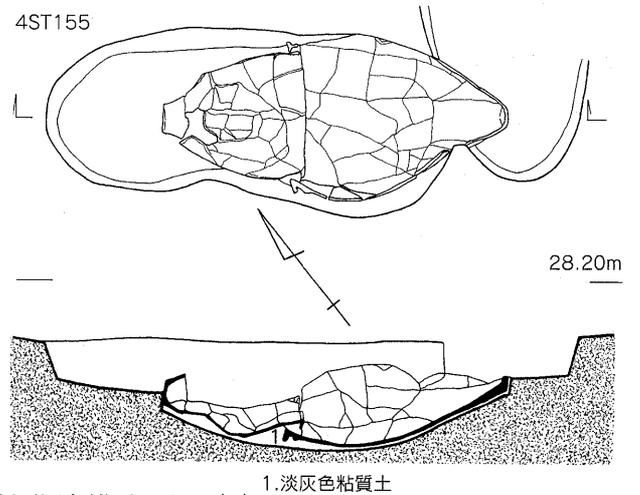
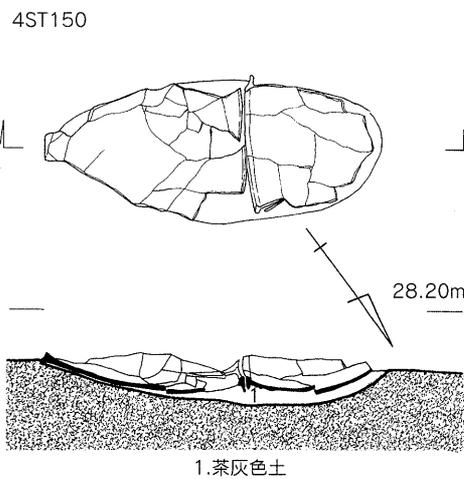
調査区中央部の東端に検出したもので、遺構南半部分を 4SD022 によって欠失している。遺構上半も欠失しており、遺構規模については残存状況の計測値ということになる。検出墓

4ST105  
 墳長軸長は0.74m、短軸長は0.45mを測る。棺挿入角度は棺の残存状況が悪いことから明らかにし難い。棺挿入方向はほぼ北からの挿入が想定できる。



4ST145( 図15)

調査区南東部において調査区境界で検出したもので、4SD022によって遺構上半を欠失している。調査区東側へ展開していることから、遺構全形については明らかにし難い。棺挿入角度は



約9度を測り、挿入方向は北東方向からの挿入が想定できる。

4ST155( 図15)

調査区中央部にて検出したもので、遺構上半を欠失している。遺構規模は、検出墓墳長軸

図15. 甕棺墓遺構実測図(3)

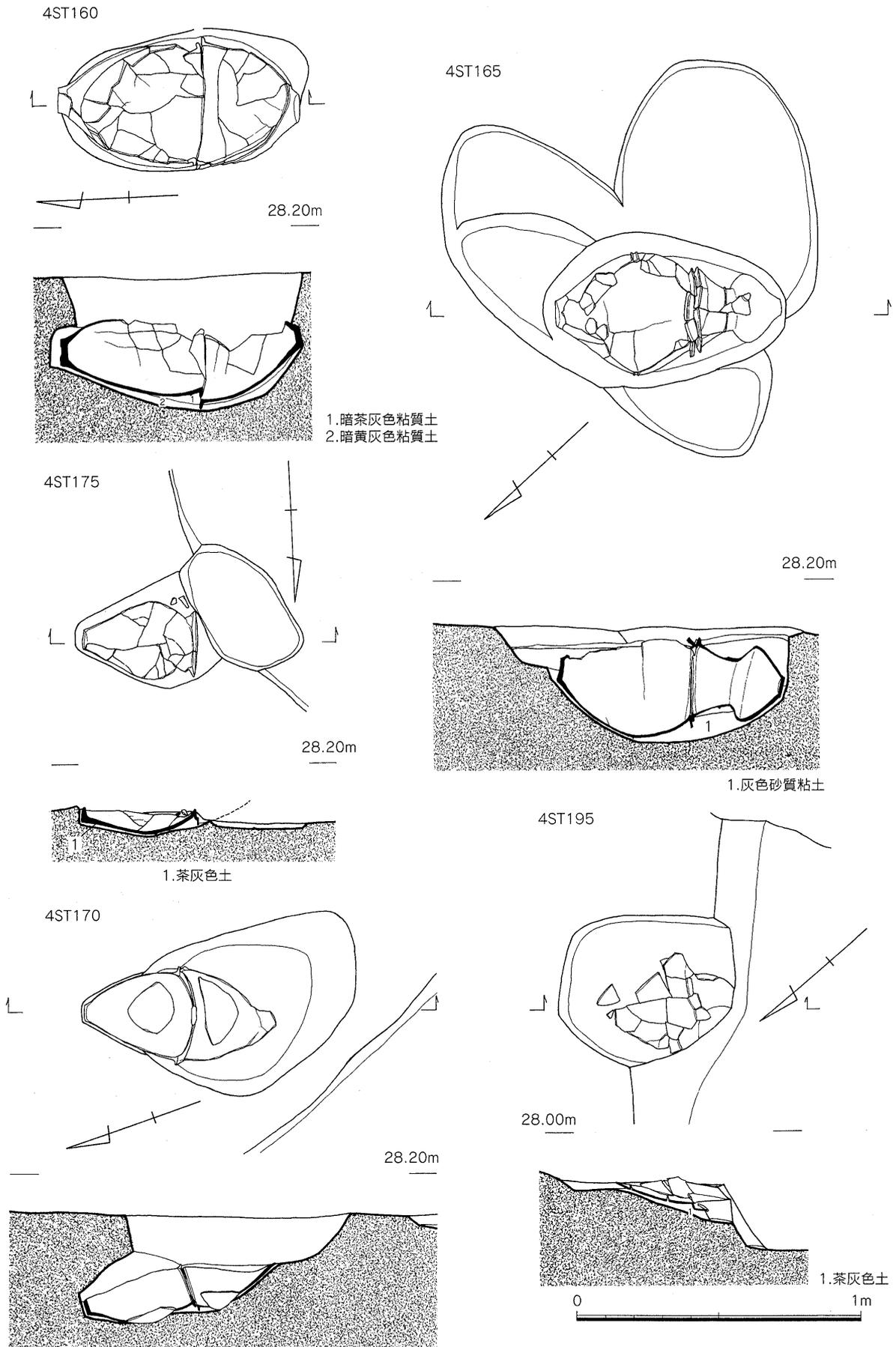


图16. 甕棺墓遺構実測図(4)

長 1.12m、短軸長 0.48m を測り、棺挿入角度はほぼ水平であった。棺挿入方向は南東方向から挿入されたものと考えられる。遺構切りあい関係から 4ST100 に切られている。なお先述した 4ST150 同様に墓壙底形状と棺形状の不一致からか、棺下部に陥没痕跡が観察できる。

#### 4ST165( 図 16)

調査区中央において検出したもので、遺構規模は検出墓壙長軸長 0.85m、短軸長 0.55m を測り、壺形土器と甕形土器を棺として使用している。検出標高から墓壙底までの深さは 0.41m を測る。棺挿入角度は 5 度を測り、棺挿入方向は北東方向からの挿入が想定できる。

#### 4ST170( 図 16)

調査区中央にて検出したもので、4SD001 に近接している。遺構規模は検出墓壙長軸長 0.98m、短軸長 0.57m を測り、墓壙掘り方が南東側に広がる傾向がある。棺挿入角度は約 16 度を測り、先述した墓壙掘り方の拡張状況からみて、南東方向からの棺挿入方向が想定できる。なお、調査時の観察ミスによって、上下棺の棺底部分を掘りすぎている。この小型棺については、劣化が著しく、取り上げることができなかった。口縁部のみを遺物図として掲載している。

#### 4ST175( 図 16)

調査区中央やや北寄りに検出したもので、4SD001 に墓壙南西側を削られていた。さらに棺上半部を欠失しており、棺の全形を想定することは困難であった。わずかに残存している棺の配置状況から、棺挿入方向はほぼ西側からと想定できる。

#### 4ST205( 図 17)

調査区東端部にて検出したもので、調査時の検出状況では、4ST135 に切られるような状況で検出した。ただし、4ST135 を先に確認し、その後 4ST205 の土器片を確認してことから、略測図に示したような前後関係になっている。したがって、詳細な精査によって検出できなかったこともあり、確認した遺構相互の前後関係に関しては定かではない。下棺を甕形土器、上棺に鉢形土器を使い棺としたもので、棺挿入角度が約 32.5 度を測り、棺挿入方向はほぼ東からを想定できる。遺構規模は、4ST135 調査によって、その多くが欠失しているため明らかにし難い。

#### 4ST215( 図 17)

調査区中央にて検出したもので、4SD001 に近接している。遺構規模は、検出墓壙長軸長 0.81m、短軸長 0.51m、墓壙底までの深さは、検出標高から 0.33m を測る。棺挿入角度は約 12.5 度で、棺挿入方向はほぼ西からの挿入が想定できる。棺上半部は、調査時の掘削によって欠失している。

### c-2. 甕棺墓【中型棺】

#### 4ST025( 図 13)

調査区北端部にて検出したもので、上甕と想定できる土器が調査区外へ展開していることから、遺構規模に関しては明らかにし難い。検出墓壙長軸長 1.16m、短軸長 0.59m を測る。棺挿入角度および方向に関しては、遺構状況が不明なため明らかにし難い。

#### 4ST035( 図 18)

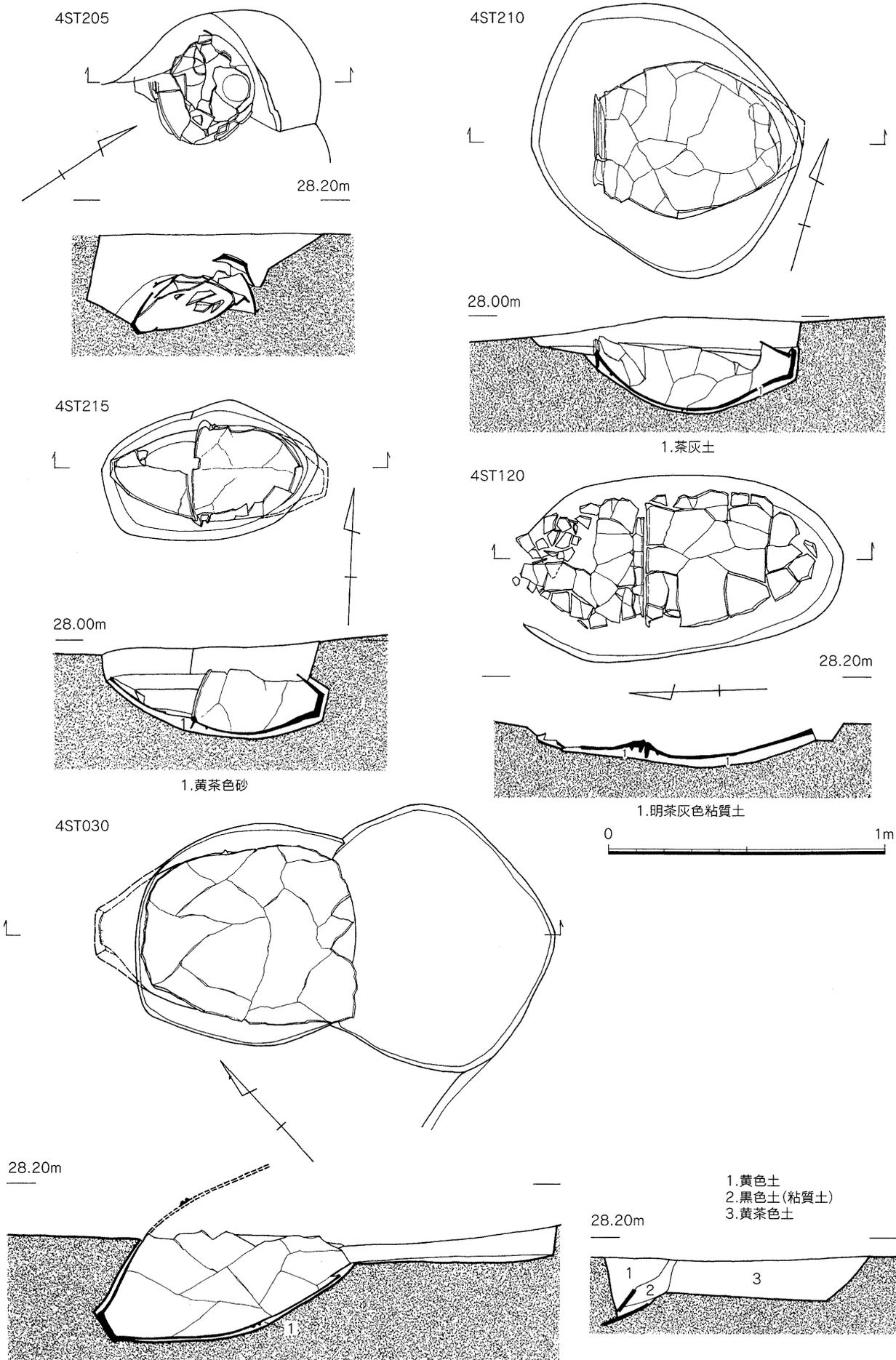


図17. 甕棺墓遺構実測図(5)

調査区北端付近にて検出したもので、遺構規模は、検出墓壙長軸長1.45m、短軸長1.25mを測る。なお墓壙北東側に張り出し部分があり、棺挿入角度9度、棺挿入方向は北西方向が想定できる。上甕棺底には直径約0.3mの範囲で朱が観察でき、その中から歯と考えられる遺存体を確認した。

4ST065(図13)

調査区北部、2SD001の東に近接して検出されたもので、遺構の大半を欠失している。検出墓壙長軸長は0.85m、短軸長は0.48mを測る。しかし、土器棺の口縁部方向が検出墓壙形状とは整合しておらず、見かけの墓壙である可能性が極めて高い。棺挿入方向はほぼ西からと想定できる。

4ST080(図14)

4SX013に切られていることから、遺構の約半分程度は欠失している。したがって、遺構全体規模については判然としない。検出できた残存墓壙長軸長は0.6m、短軸長0.59mを測る。棺挿入方向については、遺構残存状況が悪かったため明らかにし難い。

4ST090(図14)

調査区北西隅に検出したもので、後述する4ST095と隣接しかつ墓壙長軸方向を平行にしたものである。

上甕を鉢形土器、下甕に甕形土器を使用し、挿入角度9度、挿入方向はほぼ東側からと想定できる。遺構上半部は欠失している。遺構規模は、墓壙長軸長1.12m、短軸長0.73mを測る。なお墓壙長軸長は、遺構が調査区東へ延びる可能性があることから残存遺構規模となる可能性が残されている。

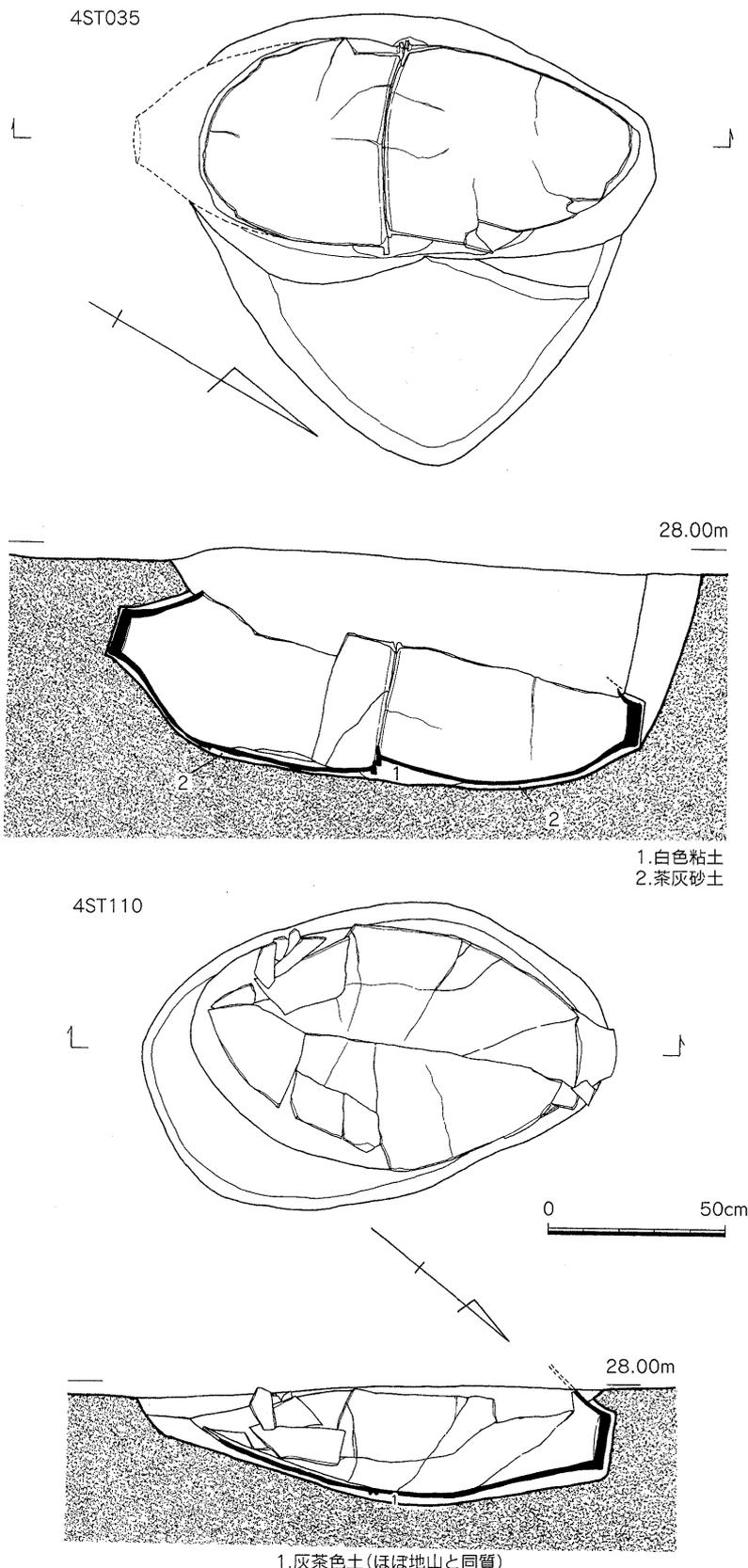
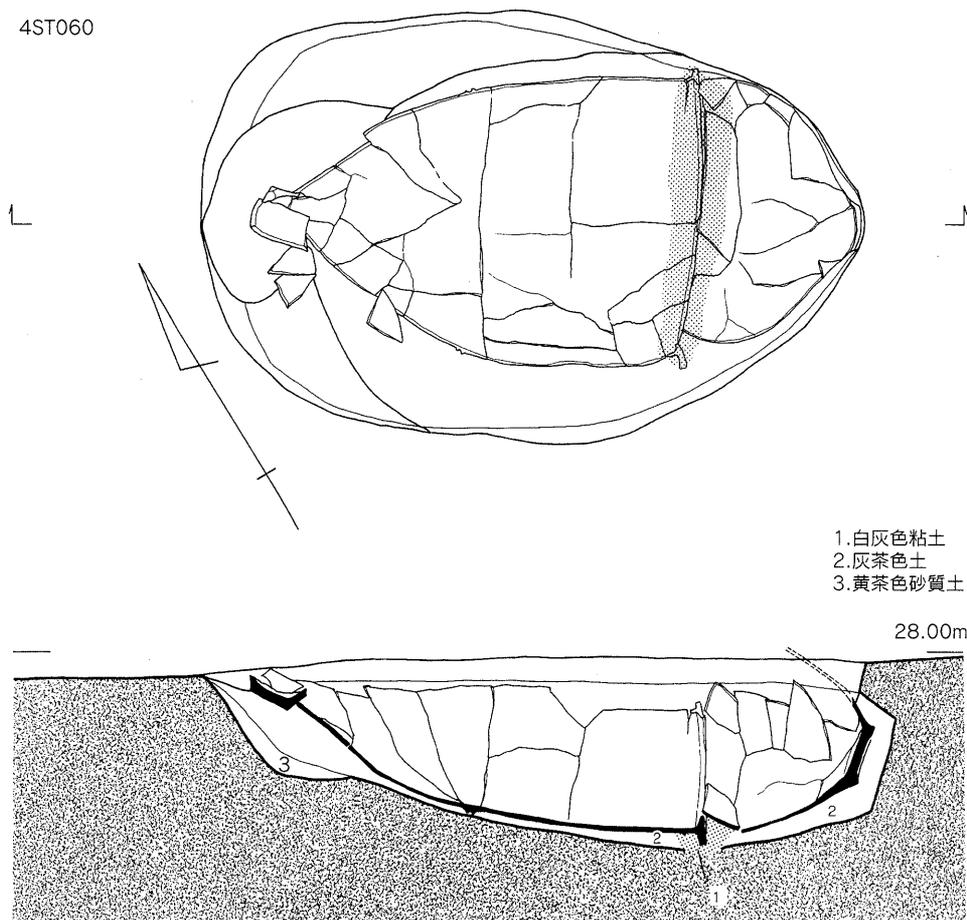
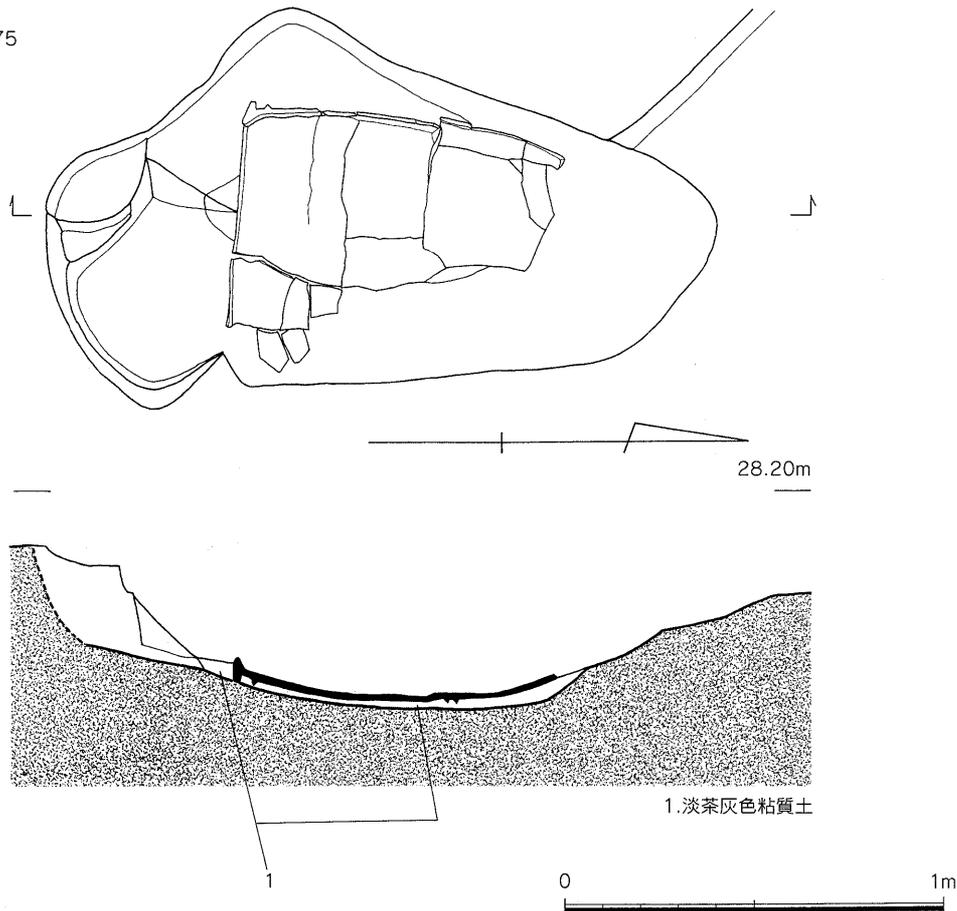


図18. 甕棺墓遺構実測図(6)

4ST060



4ST075



**4ST120( 図 17)**

調査区中央にて検出したもので、4ST100 に切られている。遺構検出面にて既に棺使用土器が確認できており、遺構の多くを後世の削平によって欠失していた。遺構規模は、検出墓壇長軸長 1.2m、短軸長 0.66m を測り、中型甕棺墓とした方がよいと判断される。棺挿入角度はほぼ水平、棺挿入方向はほぼ北が想定できる。

**4ST125( 図 23)**

調査区南東部にて検出したもので、4SD022 に切れ溝底部分より検出した。したがって、上棺の多くを欠失しており、墓壇規模全形に関しては明らかにし難い。下棺は完形の大型甕形土器を使用してい

図19. 甕棺墓遺構実測図(7)

るが、上棺は口縁部を欠失させたものを使用している。遺構規模は検出墓壙長軸長 1.35m、短軸長 0.9m を測る。棺挿入角度は約 28.5 度、棺挿入方向は南東方向が想定できる。

**4ST130( 図 15)**

調査区南東部やや東寄りに検出したもので、4SD022 に切られるように下位から確認できた。単棺であると考えられるが、土層観察を行わなかったことから、蓋に関する情報を得ることができなかつた。遺構規模に関しては、4SD022 にその多くを破壊されており、明らかにし難い。棺挿入角度は 15.5 度を測り、挿入方向は南西方向が想定できる。

**4ST150( 図 15)**

調査区中央やや東寄りにて検出したもので、遺構上半の多くを欠失している。したがって遺構規模、棺挿入角度ならびに挿入方向については求めることができ

なかつた。なお棺と墓壙との間には隙間が観察でき、埋棺時には墓壙底の形状と棺形状は一致しておらず、棺下部に破片化した形跡が観察できることから、棺内部の遺体の重みによって棺下部が破損したものと考えられる。

**4ST160( 図 16)**

調査区中央部やや東寄りにて検出したもので、墓壙規模を明確に検出しきれていない。検出墓壙長軸長 0.9m、短軸長 0.52m を測り、墓壙底までの検出標高からの深さは 0.47m を測る。挿入角度はほぼ水平で、土器棺底部のどちらかに、挿入のための墓壙が検出されるべきであ

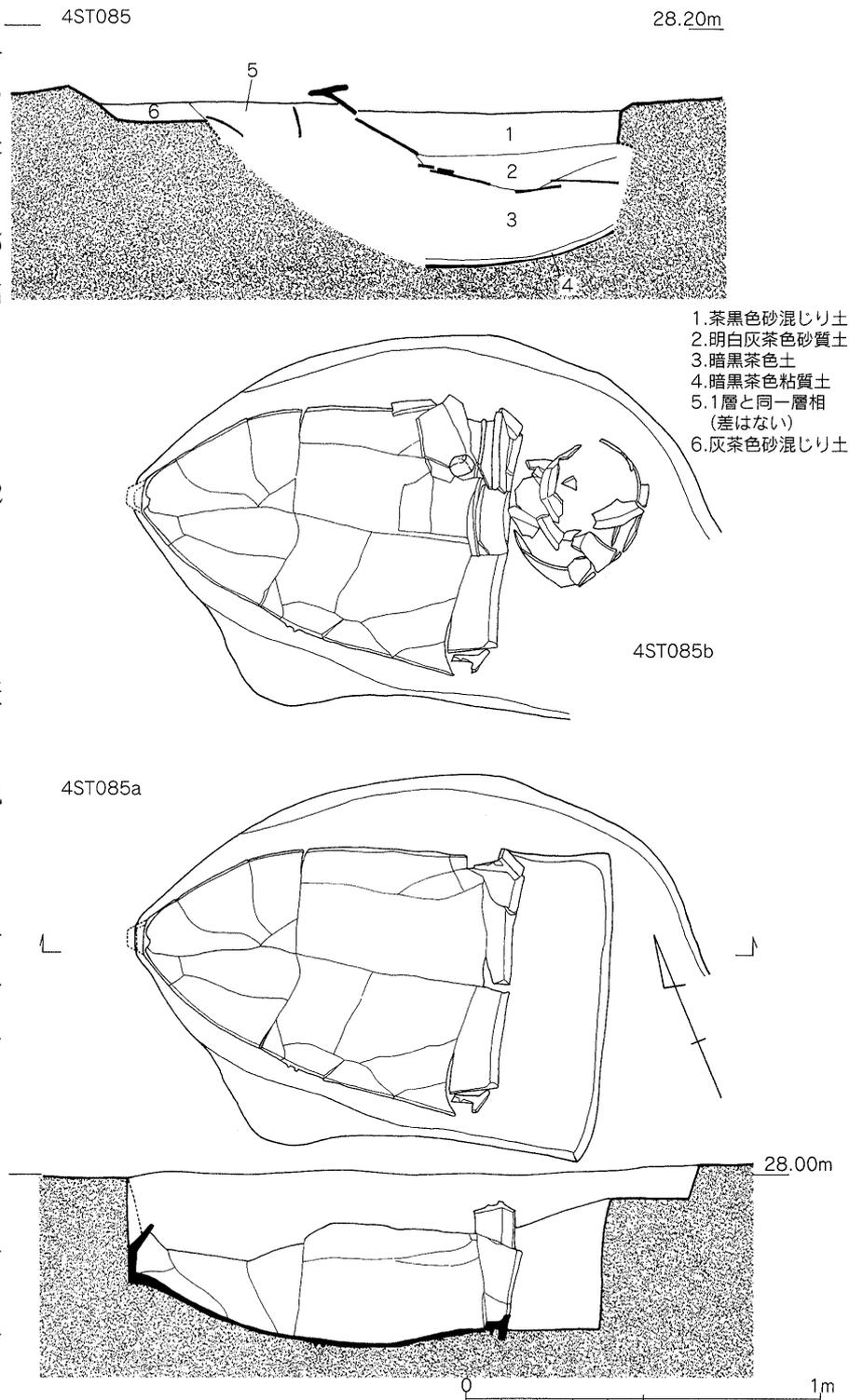


図20. 甕棺墓遺構実測図(8)

るが、先に述べたように十分精査できていないことから、棺挿入方向については明らかにし難かった。

**4ST185( 図 22)**

調査区北東部にて検出したもので、4SD003 に切られていることから、上棺底部付近を欠失している。棺挿入角度は 14 度、棺挿入方向は北東方向が想定できる。遺構規模は墓壙長軸長 1.58m、短軸長 0.65m を測る。検出標高から墓壙底までの深さは 0.72m を測る。上下棺ともに口縁部を欠失している。

**4ST195( 図 16)**

調査区中央東端にて検出したもので、4SD022 に切られており、墓壙ならびに棺本体の多くを欠失する状況で確認している。土器長軸方向から棺挿入方向は北東側である可能性が高いが、土器棺と考えられる土器自体の破碎状況が著しく、明らかにし難い。

**4ST210( 図 17)**

調査区中央にて検出したもので、中型棺に該当する。単棺で検出しており、調査時に既に土器棺口縁部が露出していたことから、蓋構造についての情報を得ることができなかつた。遺構規模は、検出墓壙長軸長 0.98m、短軸長 0.97 m を測り、棺挿入角度は

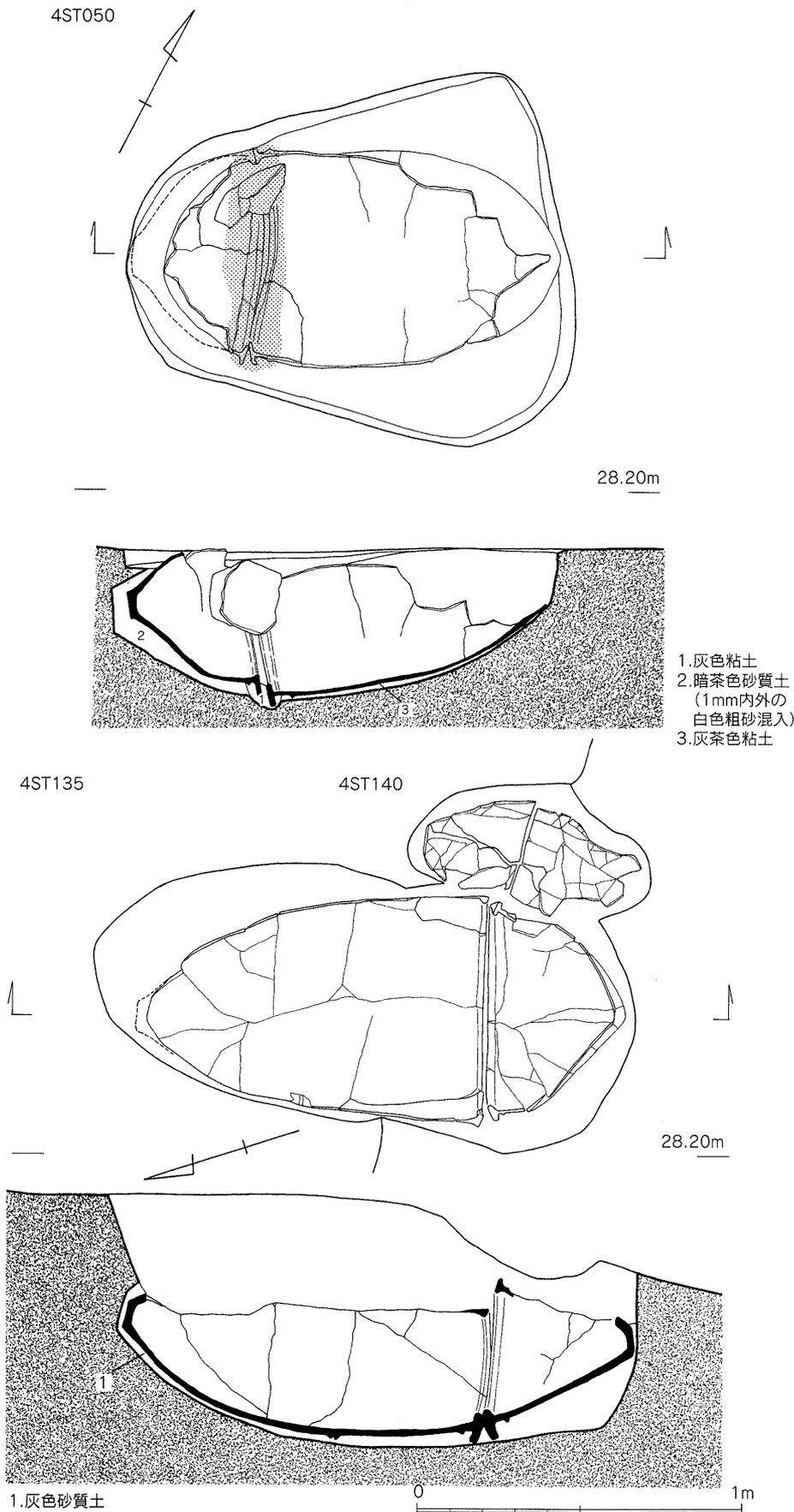


図21. 甕棺墓遺構実測図(9)

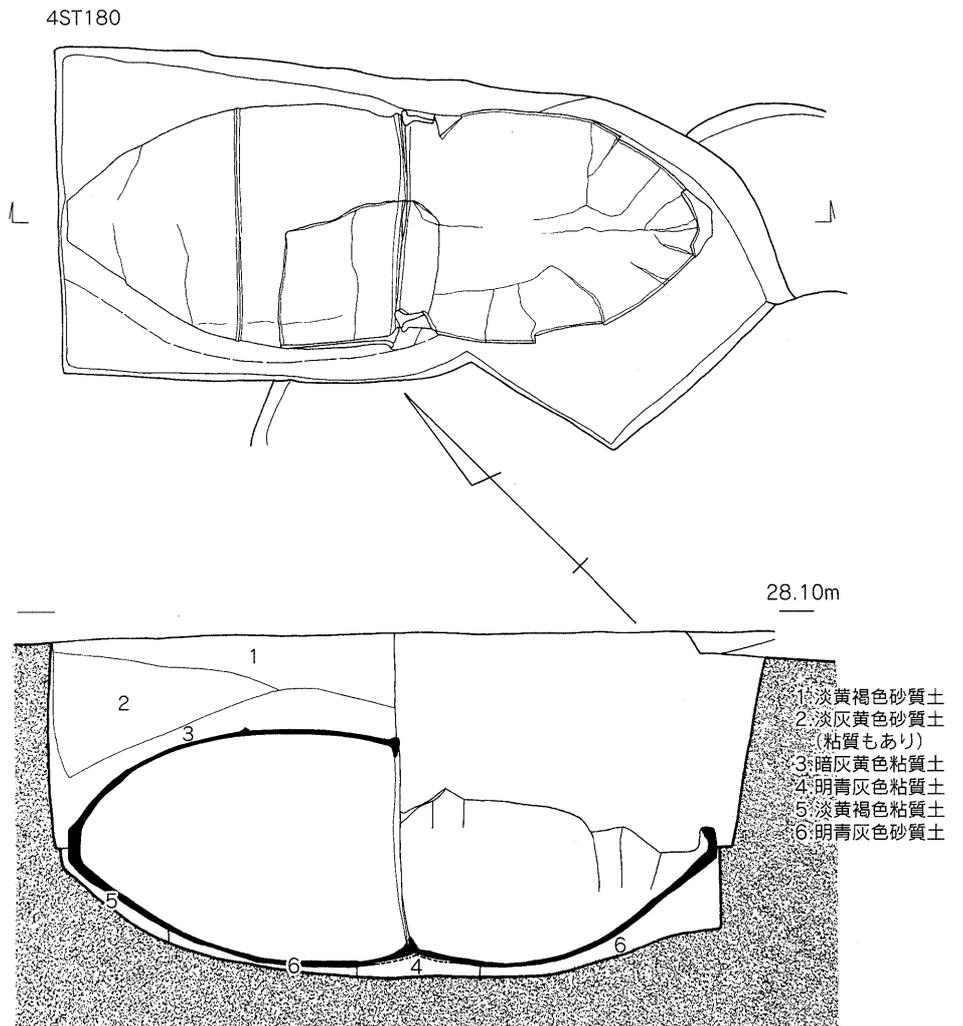
とができなかつた。遺構規模は、検出墓壙長軸長 0.98m、短軸長 0.97 m を測り、棺挿入角度は

約 6.5 度で、棺挿入方向は南西方向が想定できる。

**c-3. 甕棺墓【大型棺】**

**4ST030( 図 17)**

調査区北東部にて検出したもので、4SX013 によって棺上部を欠失していた。したがって、上下棺を有するものであったのかどうかは、棺上部の土層観察では、棺蓋を想定できそうな黒色粘質土が観察できており、このことを根拠とせざるを得ないが、単棺でかつ板様のものでの蓋が想定できる。棺挿入角度は約 31 度で、棺挿入方向は南東方向が想定できる。なお残存墓壙規模は、検出長軸長 0.90m、短軸長 0.81m を測る。



**4ST050( 図 21)**

調査区北部にて検出したもので、遺構規模は検出墓壙長軸長 1.35m、短軸長 1.05m を測る。棺上半部は既に欠損しており、墓壙底の深さは検出標高から 0.49m を測る。棺挿入角度約 12 度、挿入方向は南西方向が想定できる。上棺と下棺の合わせには白色粘土を用いた目貼りが行われていた。なお下棺と考えられる甕形土器の底部が、上棺である鉢形土器の内部にて出土している。出土位置の深

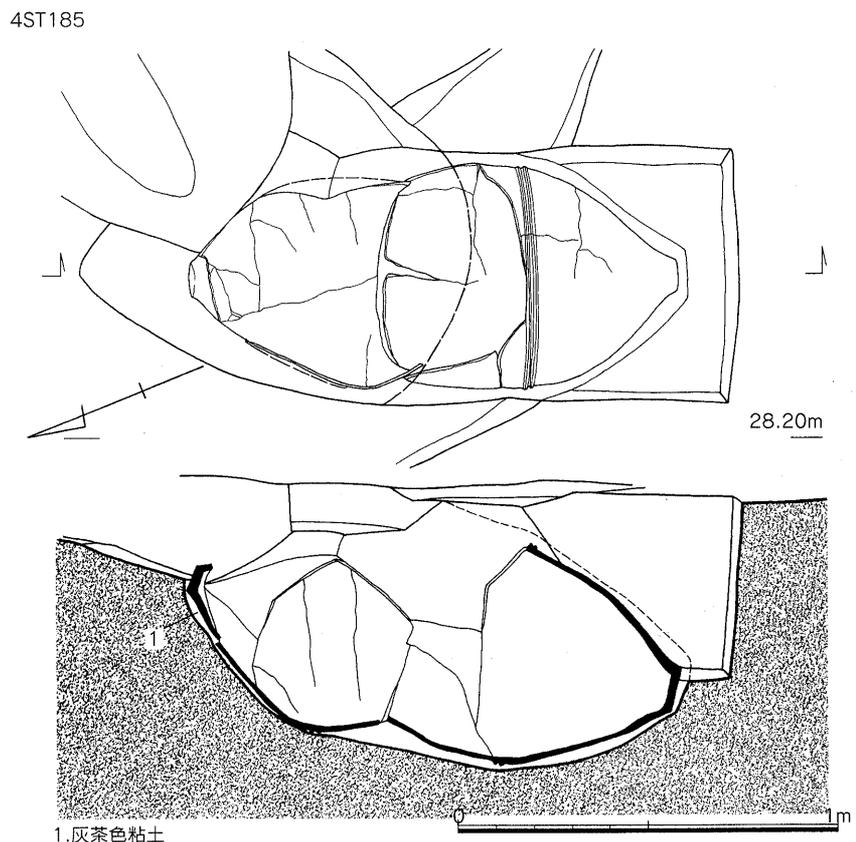
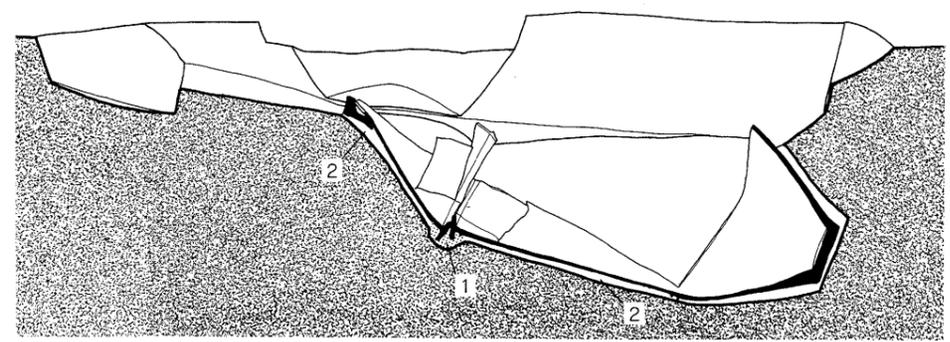
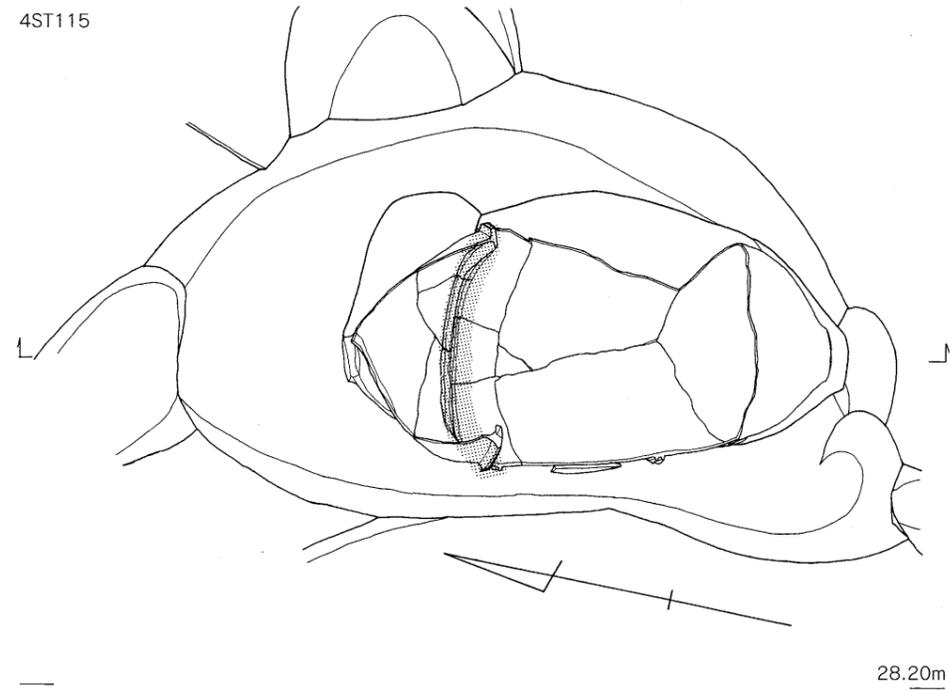
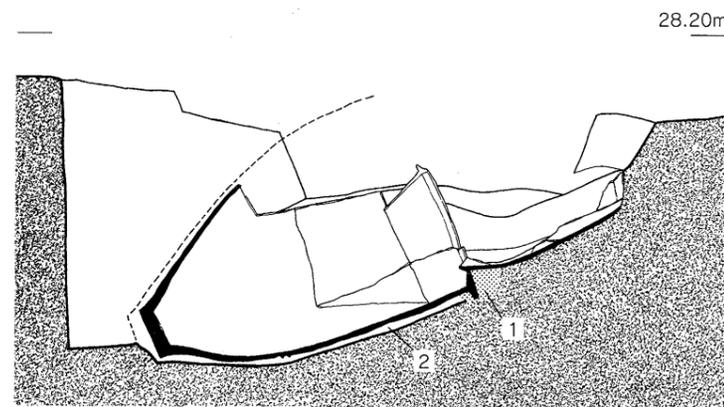
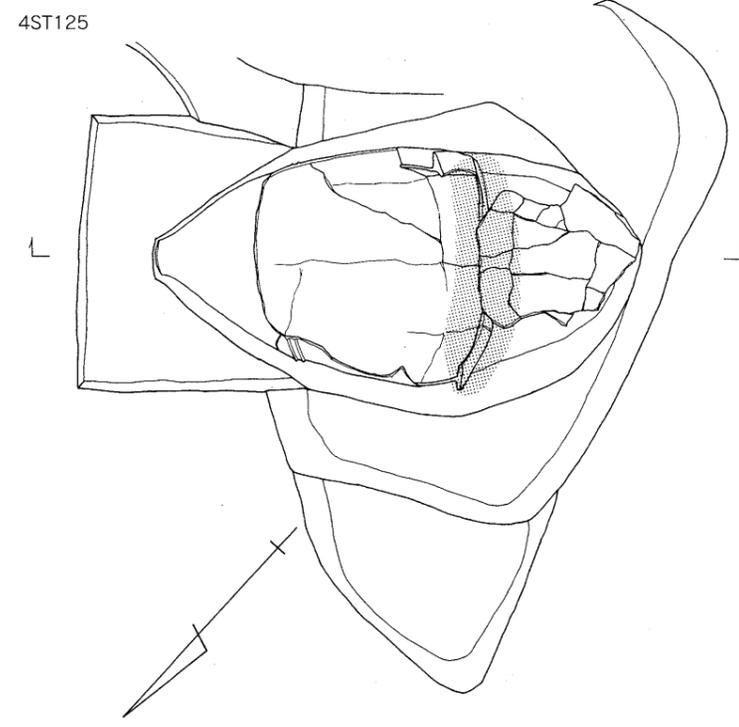


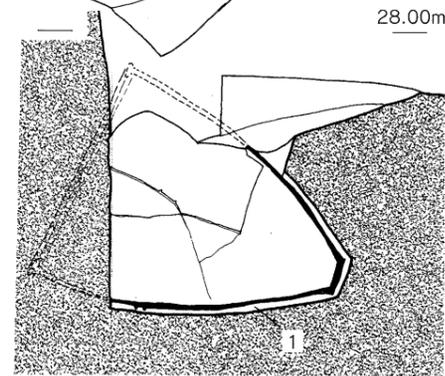
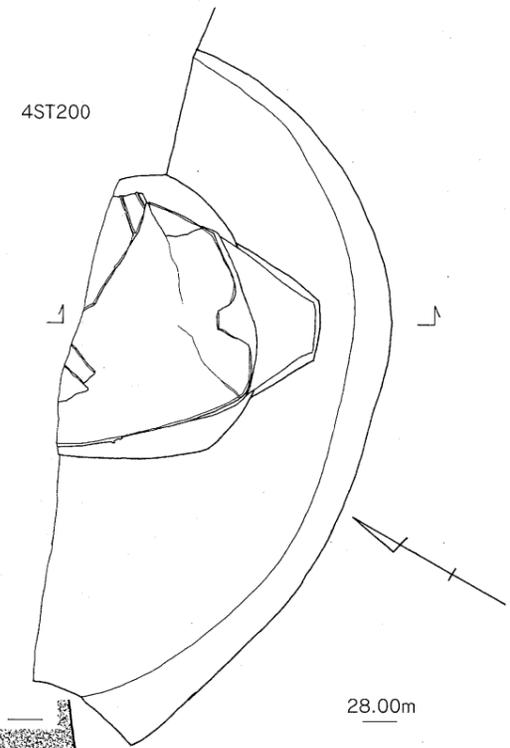
図22. 甕棺墓遺構実測図(10)



1. 目張り粘土  
2. 灰色砂



1. 白灰色粘土  
2. 茶灰砂土



1. 茶灰土

0 1m

图23. 甕棺墓遺構実測図(11)

さから、棺欠損時に移動した可能性が高い。

#### 4ST060( 図 19)

調査区北部にて検出したもので、大型の甕形土器と鉢形土器を使用していた。遺構規模は検出墓壙長軸長 1.71m、短軸長 1.13m を測る。上棺と下棺との合わせには白灰色粘土を用いて目貼りがなされていた。棺挿入角度は約 9.5 度、挿入方向は南東方向が考えられる。棺上半は欠損している。なお大型甕の底部内面付近が直径 0.08m ほどの円形の変色箇所が観察できた。

#### 4ST075( 図 19)

調査区北東部にて検出したもので、棺底部分を残して、その大半を欠損していた。したがって、遺構規模に関しての計測値も明らかにし難い。棺挿入角度は約 3 度、挿入方向は北西方向が想定できる。なお、棺使用土器口縁部における土層観察を怠ったため、単棺であるか否かを検討する材料に欠ける。隣接する 4ST180 との前後関係は、当該遺構が後出する。

#### 4ST085a( 図 20)

調査区北東部にて検出したもので、上位に先述した 4ST085b がのる。大型甕のみの検出で単棺である可能性が高い。閉塞装置に関しては、土層観察からは明らかにし難い。遺構規模は検出墓壙長軸長 1.34m、短軸長 1.03m、検出標高からの墓壙底までの深さは 0.5m を測る。棺挿入角度は、ほぼ水平、棺挿入方向は南東方向が想定できる。

#### 4ST110( 図 18)

調査区東部にて検出したもので、遺構の多くを後世の削平によって欠失していた。下棺のみの検出であり、残存墓壙長軸長は 1.32m、短軸長 0.83m を測るが、全体規模について明らかにし難い。棺挿入角度は約 13 度、棺挿入方向は南東方向が想定できる。

#### 4ST115( 図 23)

調査区北東隅にて検出したもので、多くの遺構に切られている。前後関係は下記のようなる。

【前後関係：左より上位】

4SD003 ← 4SX006 ← 4SH005 ← 4SX007 ← 4ST010・4ST015 ← 4ST080 ← 4ST115 ← 4SK026 ← 4ST200

上位の遺構によって、当該遺構の上半部が欠失しているが、上棺としては鉢形土器、下棺は大型甕形土器を使用している。遺構規模は、検出墓壙長軸長 1.37m、短軸長 0.8m を測り、上棺と下棺の合わせには白灰色粘土を用いて目貼りを行っていた。棺挿入角度は約 22.5 度、棺挿入方向は北北西方向が想定できる。

#### 4ST135( 図 21)

調査区東部にて検出したもので、4SD022 に切られている。4ST140 ならびに 4ST205 が接して検出できており、当該甕棺墓に付帯するものと考えられる。下棺を 4SD022 に切られることで、棺上半部分を欠失しており、遺構規模は検出墓壙長軸長 1.65m、短軸長 0.75m を測る。検出標高からの墓壙底までの深さは 0.76m を測る。棺挿入角度はほぼ水平で、棺挿入方向は南方を想定している。

#### 4ST180( 図 22)

調査区中央にて検出したもので、4ST075に切られている。遺構規模は墓壇長軸長1.85m、短軸長0.8mを測り、検出標高から墓壇底までの深さは0.93mを測る。棺挿入角度はほぼ水平、棺挿入方向は南東方向が想定できる。なお棺挿入のための階段状施設が想定できる

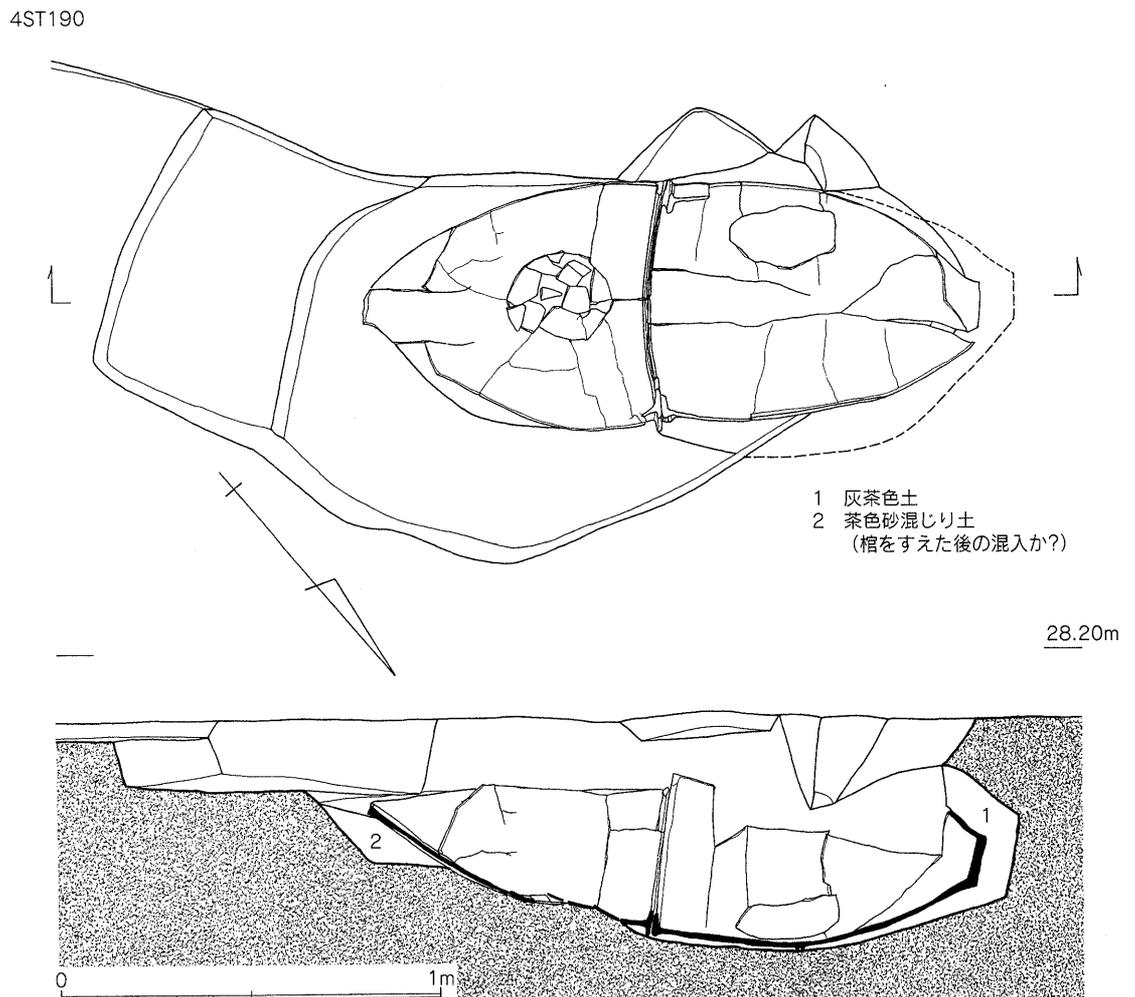


図24. 甕棺墓遺構実測図(12)

が、調査所見として得るべき情報に関しての視点に欠けていたことから、明らかにし難い。

#### 4ST190( 図 24)

調査区東部にて検出したもので、遺構上部を4SX019によって切られていることから欠失している。遺構規模は墓壇長軸長1.89m、短軸長0.75mを測り、検出標高から墓壇底までの深さは0.62mを測る。上棺中央部は、棺底部分が円形に割れており、遺体の重さで基盤層の凸部分によって割れたものと考えられる。棺挿入角度は10度、棺挿入方向は南東方向が想定できる。

#### 4ST200( 図 23)

調査区北東隅にて検出したもので、4ST115の項にて説明したように最も下位にて検出した。調査区北部へ展開しているものと考えられ、遺構規模全形については明らかにし難い。また単棺であるのか上棺を伴うものであるのかも追求できなかった。棺挿入角度は約24.5度、棺挿入方向は北西方向が想定できる。

### c-4. 木棺墓

#### 4ST009( 図 25)

調査区東中央部にて検出した遺構で、ほぼ長軸方向を南北に向けている。検出長軸長1.57m、短軸長1.12mを測り、深さは約0.2mを残している。遺構内には上位より黄色砂質土→茶黒灰色砂質土が堆積しているが、遺構西辺に長軸に沿う溝を確認しており、この部分に木板を立て

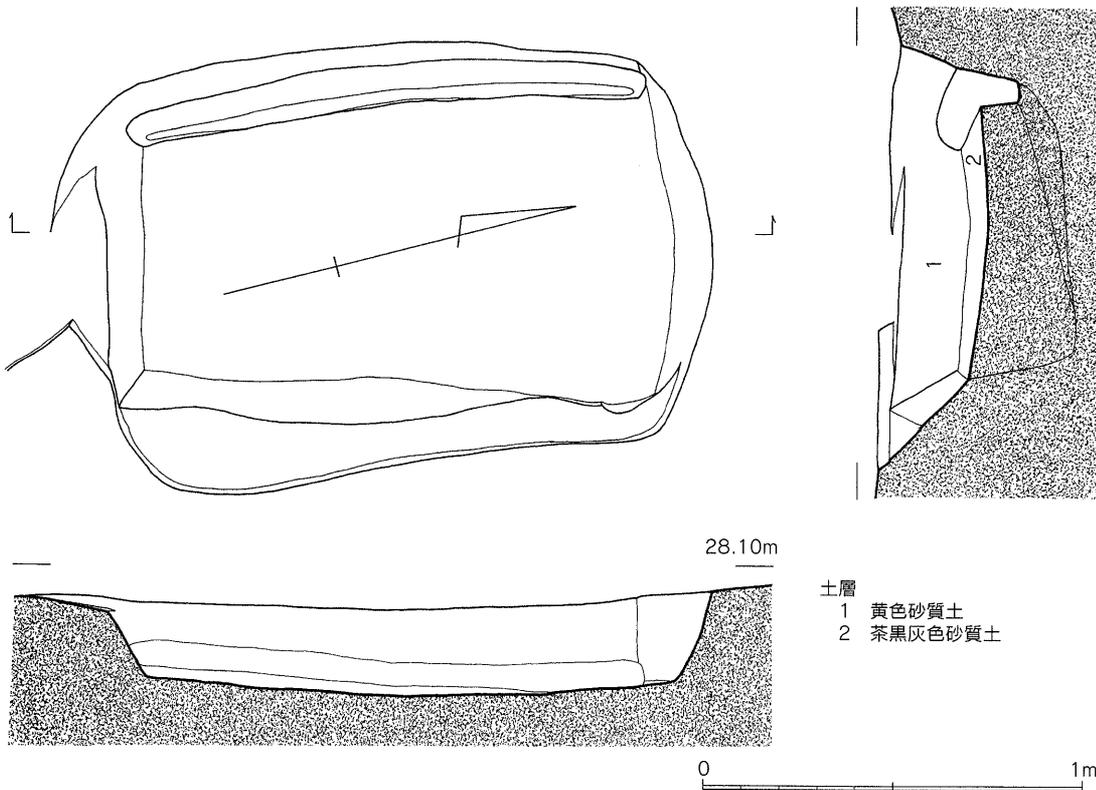


図25.木棺墓（4ST009）遺構実測図

たものと想定した場合、下位にある茶黒灰色砂質土は、この溝の底から堆積が始まることから、遺構には無関係の堆積土である可能性もある。遺構西辺にのみ溝を確認しており、木棺墓であると断定するに「は躊躇するが、当初木棺墓を

想定しての調査を怠ったことから残りの各辺での観察を行っていない。したがって消極的ではあるが、ここでは木棺墓と想定しておく。遺構内からは副葬・供献を想定させる遺物の出土はなく、遺構造営時期の特定には至っていない。

#### d. その他の遺構

##### 4SX016・017・019

調査区東部にて検出したもので、凹み状のものである。4SX019内の土層差に解消できるものと考えられ、作業上機械的に分けたにすぎない。当該遺構の下位には、4ST110など多くの甕棺墓が検出されていることから、埋棺のための掘り返しによる土層の乱れであるとも考えられる。

#### D. 遺物

##### a. 竪穴住居

##### 4SI005（図26-1～5）

##### 古式土師器

**高坏（1）** 高坏坏部の口縁部である。外面は刷毛目調整が施された後に、小型精製器種に施されるような精緻な横方向のミガキが施されている。

**甕（2～5）** 2は甕の頸部と思われるが、器面の風化が著しく詳細は不明である。3～5は甕4（布留式甕）の口縁部片である。3は直線的に立ち上がり、口唇部はヨコナデによって平坦化され、内側に突出している。4はわずかに内湾し、口唇部が若干肥厚している。5は口縁部が内湾し、口唇部を丸くおさめている。

4SI005b (図

26-6)

弥生土器

高坏 (6)

高坏の脚部

と思われ、

時期につい

ては不明で

あるが、胎

土などから

弥生土器であると思われる。端部は丁寧にヨコナデされており、外面と内面の一部に丹塗りが施される。

【埋没時期】 甕4の存在から判断して古墳時代前期と考えられる。

4SI220 (図 26-7・8)

古式土師器

甕 (7・8) 7は甕2 (いわゆるV様式系甕) の口縁部である。8は甕4の口縁部片だが、やや厚めで口唇部の先端を外側に折り曲げている。

4SI220c (図 26-9・10)

古式土師器

壺 (9) 壺8の頸部から胴部にかけての破片である。器面は摩耗しており調整等については不明である。

甕 (10) 甕4の口縁部片で直線的に立ち上がる。

【埋没時期】 甕から判断して古墳時代前期と考えられる。

b. 溝

4SD001 茶灰色砂質土 (図 27-1~5)

図化したものの他に瓦の破片や6世紀末から7世紀初頭に位置づけられる須恵器の甕、坏身×坏蓋、その他古式土師器が多数出土している。

須恵器

坏 (1~3) 1は坏aである。時期は奈良時代後半である。2は完形の坏身であ

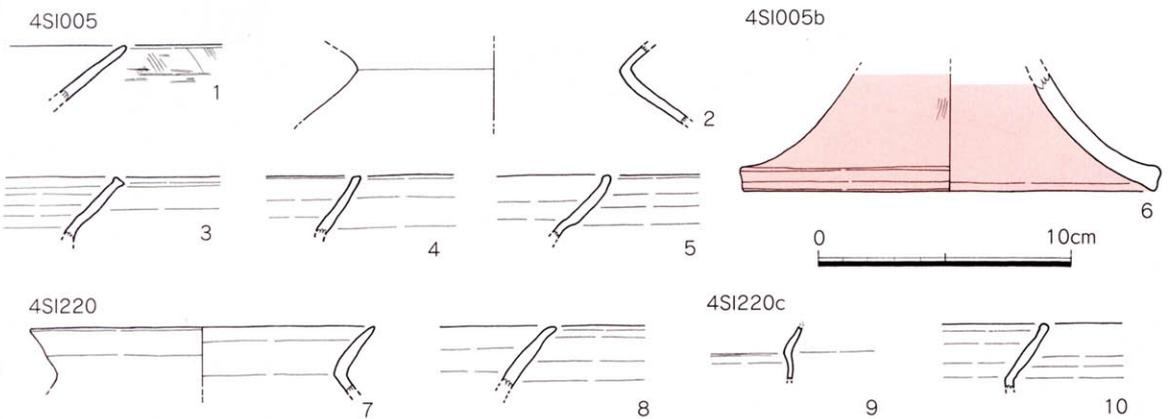


図26. 竪穴住居跡出土遺物実測図(S=1/3)

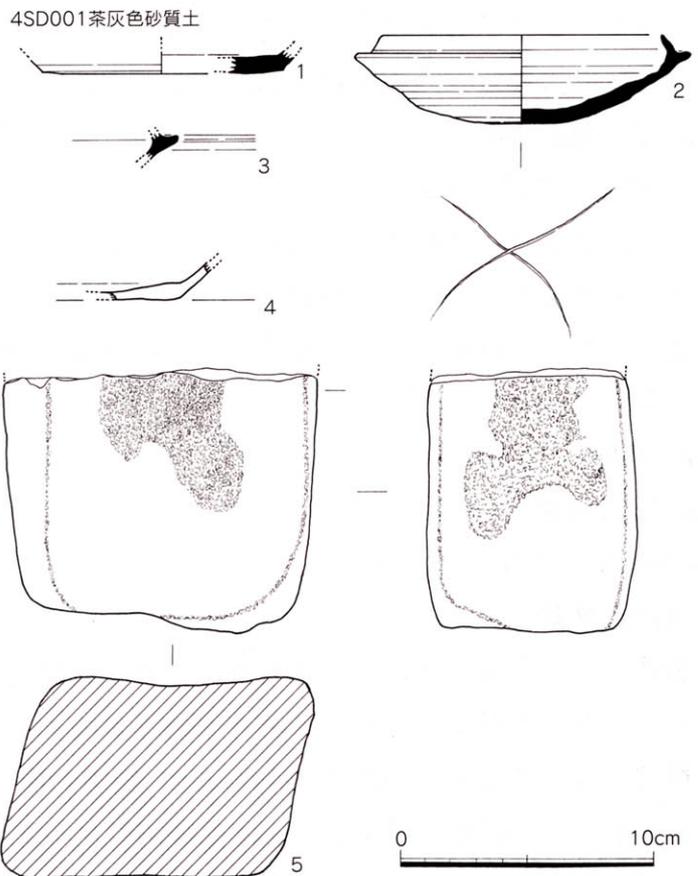


図27. 溝出土遺物実測図(1) (S=1/3)

4SD001黒色粘土 (1)

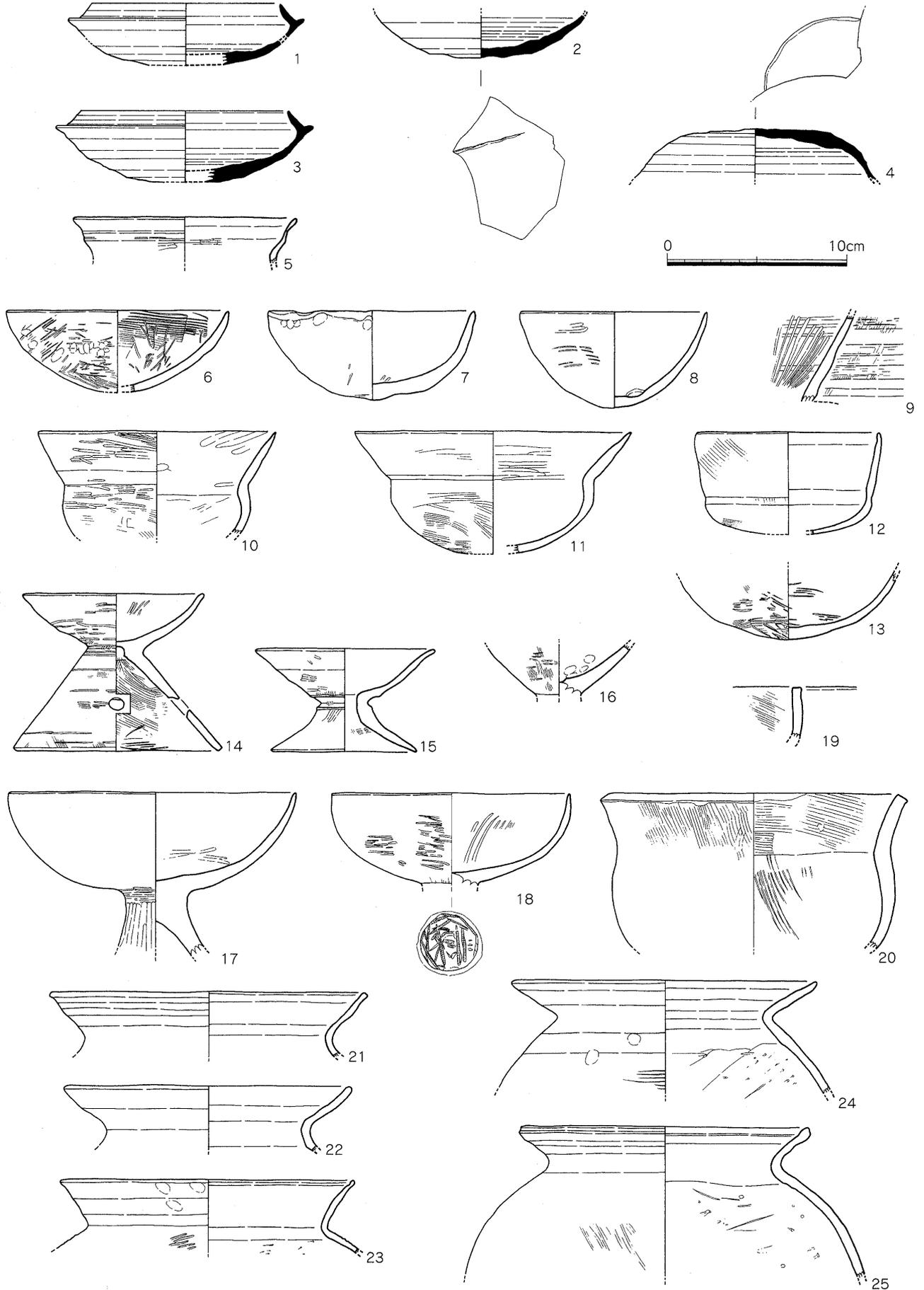


図28. 溝出土遺物実測図(2) (S=1/3)

る。口径が大きいこと、底部内面に意識的に押し出したような痕跡が見られること、外面がケズリであることから身部と判断した。時期は6世紀末から7世紀初頭である。底部には「X」字のようなヘラ記号がある。切り合い、ヘラの挿入角度から右利きの人によるものであろう。3は坏蓋×坏身である。小破片のため時期については古墳時代後期以降としか判断できない。

#### 土師器

小皿(4) 小皿の底部片である。時期は平安時代以降である。器面風化のため詳細は不明である。

#### 石製品

砥石(5) 花崗岩製の砥石である。半分欠損しているが、大型で二面に摩耗痕が見られる。また、中央にはわずかに敲打痕が見られる。

【埋没時期】土師器の小皿から判断すると平安時代以降に位置づけられる。

#### 4SD001 黒色粘土 (図 28・29 - 1 ~ 38)

4SD001は弥生時代の甕棺墓地を破壊して形成されており、図化したものの他に、K II b式の丸みをおびた甕棺、K II c式の大形棺、K III a式の大形棺・鉢の大きな破片が出土している。また、混入と考えられるが縄目タタキの平瓦の破片が出土している。

#### 須恵器

坏(1~4) 1~3は坏身である。2の底部にはヘラ記号の一部が見られる。4は坏蓋で口唇部付近を一部欠損している。外面にはヘラ記号の一部が残存している。これらの須恵器の時期は、すべて6世紀末から7世紀初頭である。

#### 土師器

壺(5) 壺と思われるが、口縁部が約1/7ほど残存するのみで、時期は不明である。二重口縁様を呈するが、全形の推定は困難である。口縁部の内外面に横方向のミガキが観察できる。

#### 古式土師器

鉢(6~8・10~12) 6~8は鉢1である。6・7の外面には煤、内面にはコゲが付着している。10・11は鉢4a(小型丸底鉢)である。10の外面は刷毛目が施された後、横方向のミガキにより仕上げられるが、小型精製器種のような整った細かいミガキとは異なる。一方、11の外面は刷毛目のみによる仕上げで、口縁部内面には横方向の比較的単位の大きなミガキが施されている。屈曲部のやや上位に稜線が入っているが、これは、口縁部を外方へ折り曲げた後、口縁部のヨコナデの際に生じたものである。12は珍しい形態であるが、ここでは鉢として分類したが、脚付き器種となるかもしれない。外面の段になった部分にも刷毛目が残存している点から、刷毛目を施した後にナデによって段を成形したことが分かる。

小型器台(14~16) 14・16は小型器台4cで、15は小型器台4bである。14は器面が摩耗しているが、調整の残存状況から刷毛目を施した後、小型精製器種にみられるような横方向の精緻なミガキが施される。坏部と脚部の接合部の内面には大きな円形の窪みがある。15は、いわゆるX字型の器台とは若干形態が異なるが、この種の器台と考えられる。外面は刷毛目調整後、ミガキが施されている。16もまた、外面は刷毛目を施した後、横方向の精緻なミガキにより仕上げられる。外面には煤、内面にはコゲが付着している。

4SD001黒色粘土 (2)

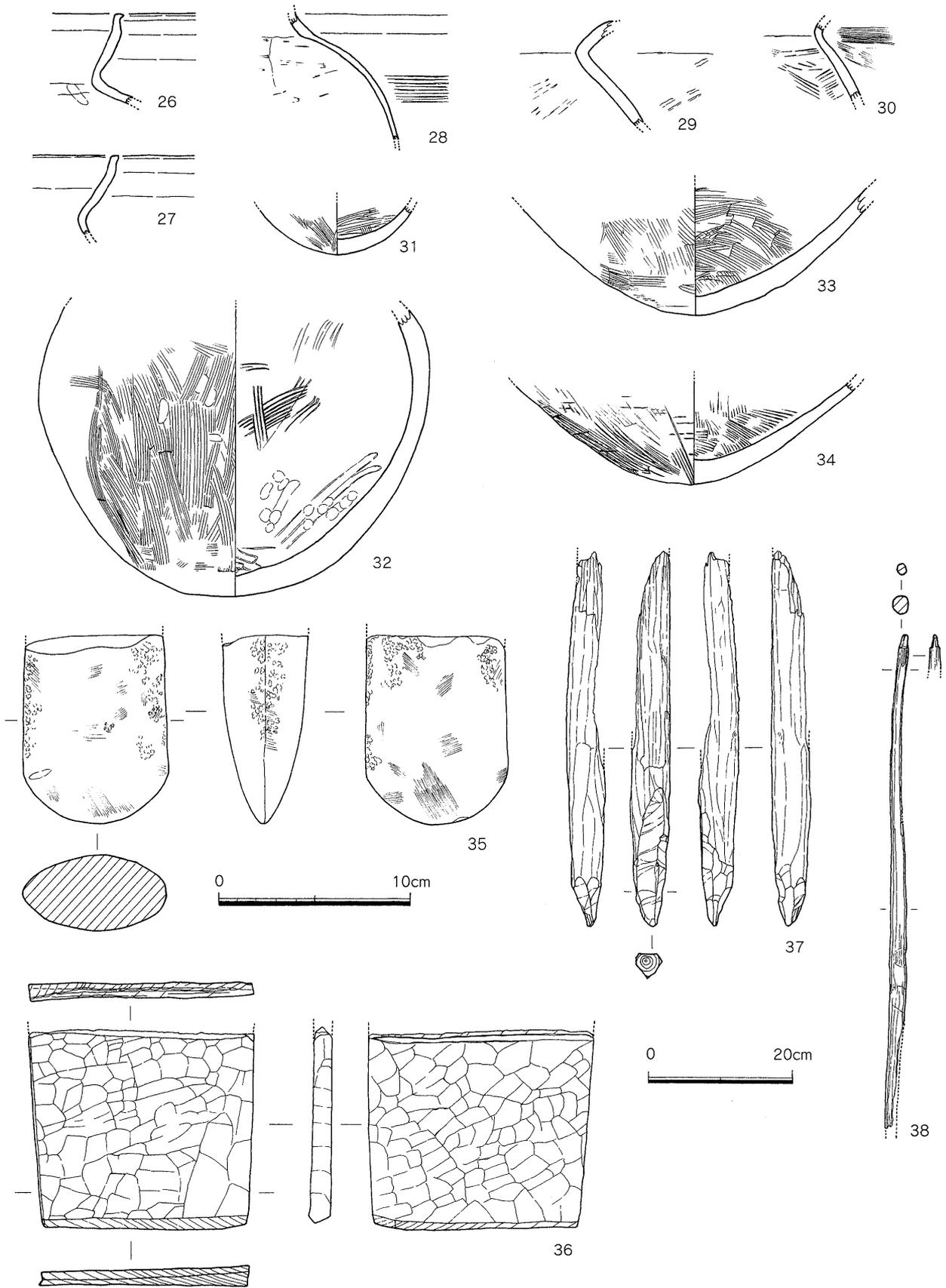


図29. 溝出土遺物実測図(3) (S=1/3・1/8)

4SD001灰色砂質土 (1)

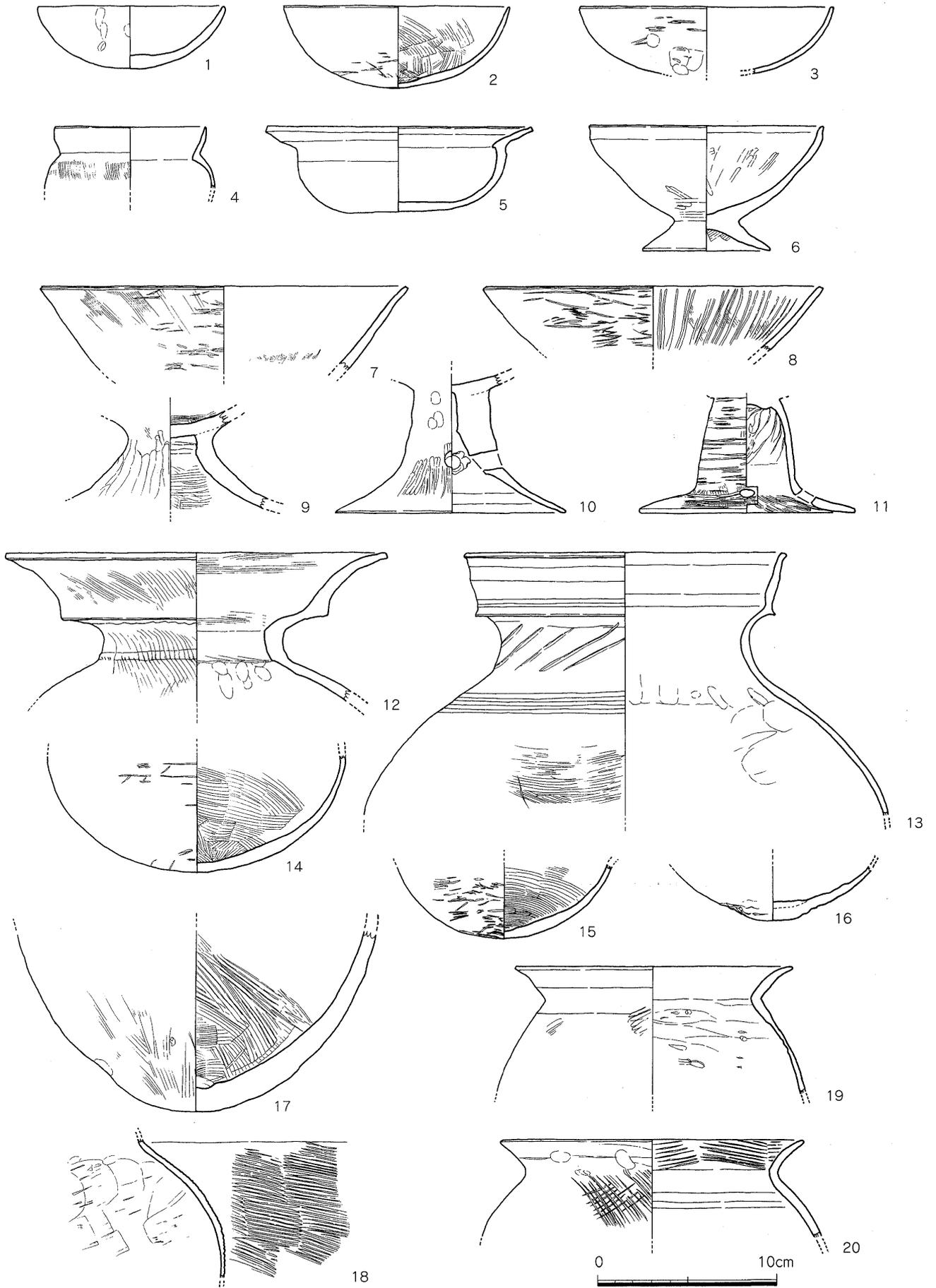


図30. 溝出土遺物実測図(4) (S=1/3)

**高坏 (17・18)** 17・18は坏部の形状から高坏2cであると思われる。17は坏部と脚部を接合した後に横方向のミガキを施し、さらに脚部には縦方向のミガキを施している。18は口唇部のほとんどを欠損しているが、坏部の他の部分は残存している。器面はかなり風化しているが、残存部分から判断すると、外面には小型精製器種のような精緻なミガキが施され、内面には暗文風の放射状のミガキが施されていたと考えられる。また、他の器種と比べ、かなり赤味の強い胎土が使用されている。脚部接合部には、刷毛目工具のような板状工具によって、接合のための刺突がなされている。このような痕跡は、坏部と脚部の接合が付加法によって行われたことを示す(次山1993, p.53)。ただし、坏部側に刺突がなされており、本来ならば脚部側になされるものである。

**壺 (9・13)** 9は壺6の口頸部の破片、13は壺6の底部片である。9の口頸部の最下部には胴部との接着面が明瞭に残っている。外面には縦方向の刷毛目調整の後、横方向の精緻なミガキが施され、内面には横方向のミガキの後、口唇部の方向に向かって放射状に暗文風のミガキが施される。13には内外面ともにミガキが施されるが、外面のミガキは横方向の精緻なミガキであり、胎土も水漉し粘土に近いものを使用した精製品である。

**甕×鉢 (19・20)** 19・20は内外面とも粗い刷毛目を施した粗製品である。

**甕 (21～30)** 23は甕3である。胎土は他の甕よりも赤味が強い。外面にはタタキ痕が認められ、内面はケズリによって調整されている。29・30は器壁が厚く、甕1(在地の甕)とも甕3・甕4とも異なることから、甕2と考えられるが、破片ゆえ断定はできない。21・22・24～28は甕4であるが、口縁部形態は多様である。21・22はともに内湾する口縁部で、口唇部を丸くおさめるものである。24の口縁部は直線的であり、口唇部付近で内湾する。肩部には櫛状工具による平行沈線文が施される。25の口縁部はやや外反し、口唇部は肥厚しており、外面側は面をもつようにヨコナデが施されている。甕4の典型的なものとはやや異なる特徴を示す個体である。26・27は口縁部片であるが、やや立ち気味で口唇部は外側に折れる。28は甕形土器の胴部片で、肩部には甕4によくみられるタイプのヨコハケが施されている。これらの甕の多くは外面に煤が(21、22、25、26、27、28、30)、内面にコゲが付着している(21、22、25、26、28)。このことから、これらの甕は煮沸具として使用されたものと考えられる。

**壺×甕底部 (31～34)** 31は小型壺または甕の底部である。丸底状を呈し、煤・コゲが付着している。32は壺の胴部と考えられる。外面には縦方向の刷毛目、底部付近にはナデ調整が施されている。内面の底部付近には指ナデのような痕跡、指頭圧痕等が多数観察できる。また、胴部内面には刷毛目が施されている。また、本個体については二次使用(転用)の状況が確認できる。すなわち、壺を横に寝かせたような状態(胴部中位で接地させた状態)にしたことを想定させる位置に煤・コゲの付着がみられる。このことは、本個体が壺として使用された後、破損などの何らかの理由によって煮沸具に転用された可能性を示唆する。33・34は丸底の底部である。内外面ともに刷毛目が施される。33にはコゲが付着し、34には煤・コゲが付着している。これらの状況から33・34は甕の底部である可能性が高い。

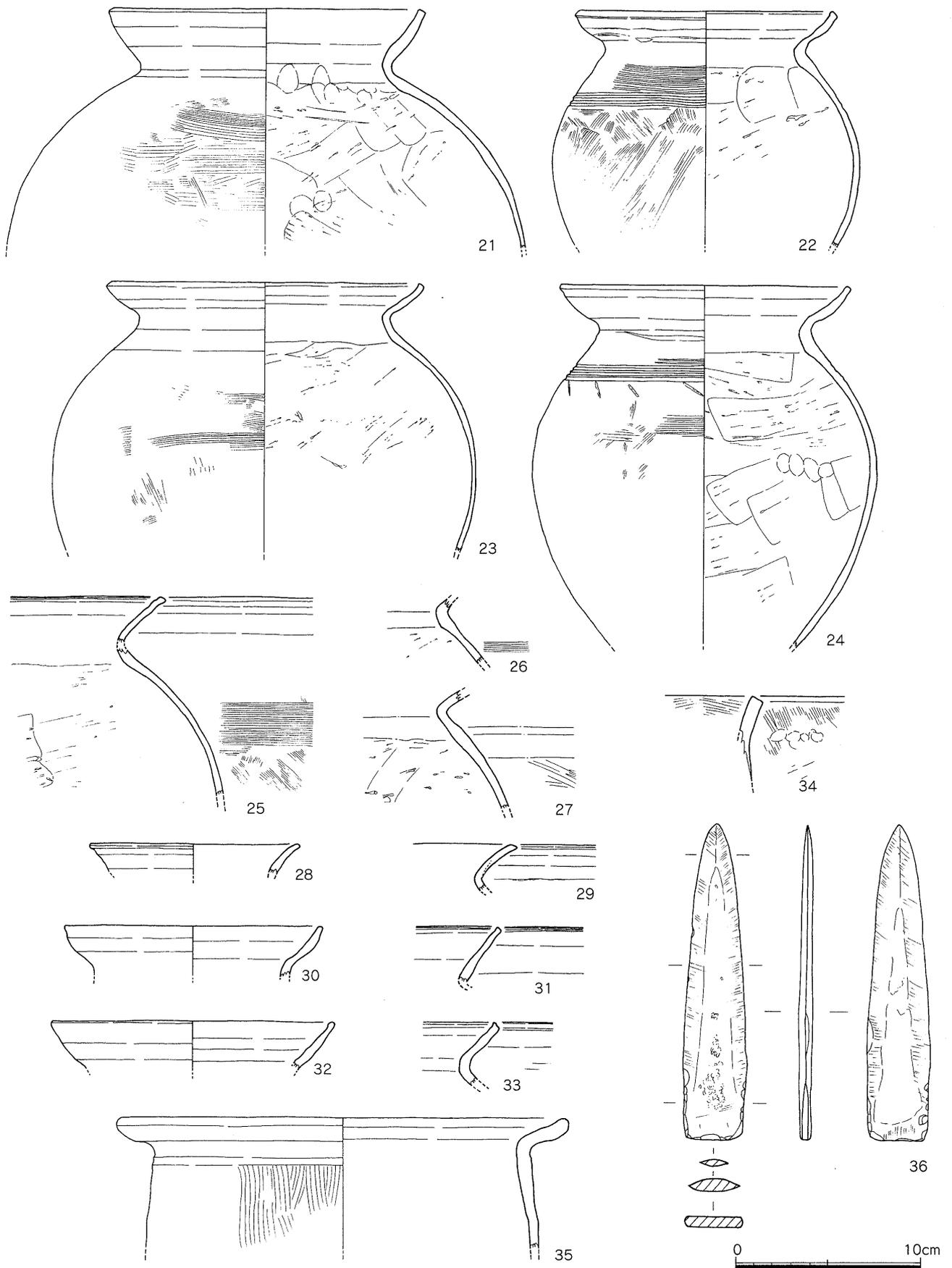


図31.溝出土遺物実測図(5) (S=1/3)

4SD001灰色砂質土 (3)

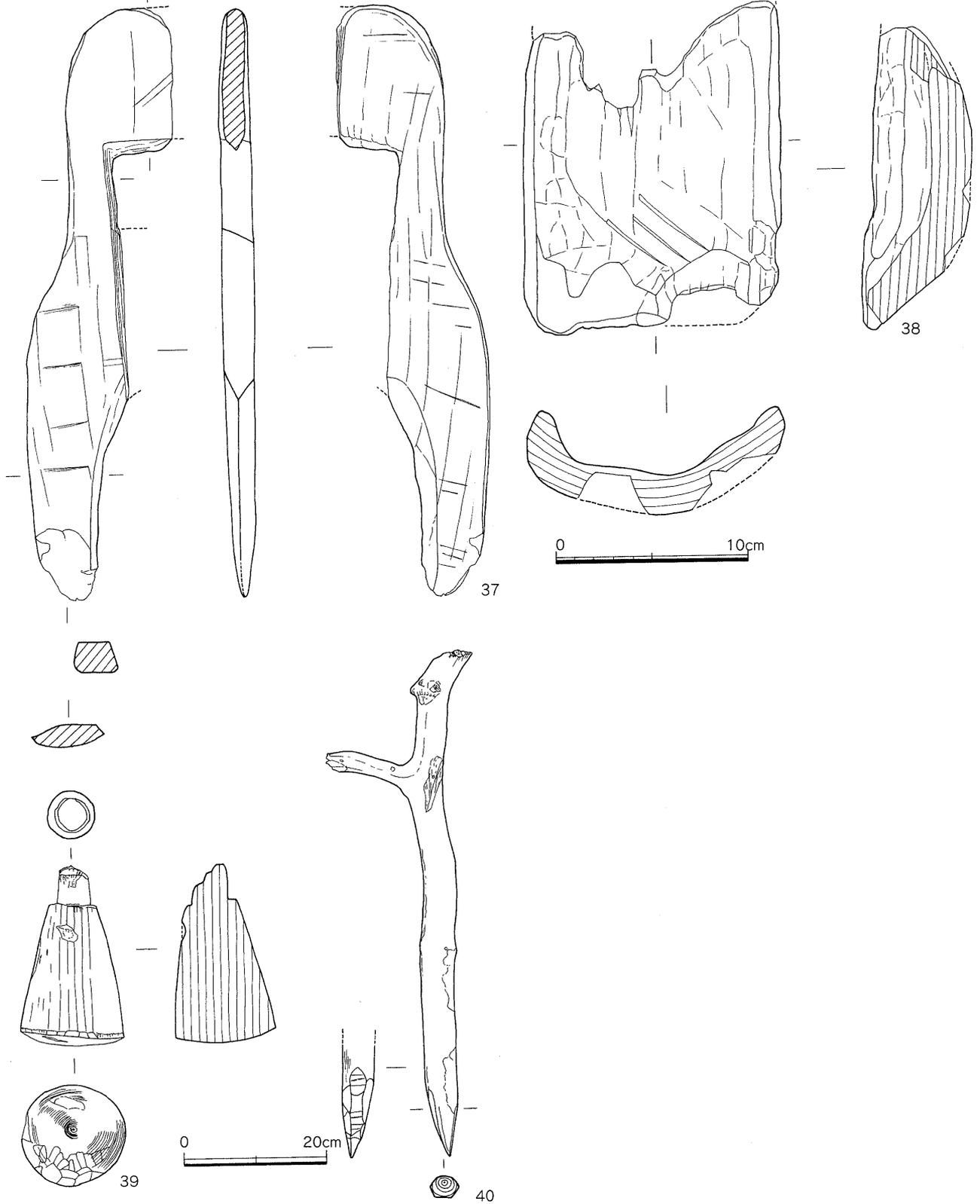


図32.溝出土遺物実測図(6) (S=1/3・1/8)

石製品

石斧(35) 玄武岩製の太型蛤刃石斧である。刃部のみの出土である。側縁には敲打痕が見られ、刃縁には使用痕が観察される。

## 木製品

**杵** (36) 杵である。両面を平滑にするため細かく加工している。用途については不明である。現状で縦 10.2cm、横 11.0cm、厚さ 1.0cm を測る。

**杭** (37) 杭である。表面全面が黒色化しており、何らかの事情で火を受けた材である。現状で全長 52.5cm、幅 5.6cm、厚さ 5.5cm を測る。

**弓** (38) 丸木弓である。約 6 割程度残存していると思われる。先端を両側から削り込んで柄状の弭をつくりだしている。中央部分と想定される位置に 2 カ所窪んだ部分があり、握りの痕跡とも考えられる。全長 69.0cm、幅 2.4cm、厚さ 2.7cm を測る。

**【埋没時期】** 黒色粘土層からは多数の古式土師器に伴って須恵器が出土している。これらの須恵器から判断すると、6 世紀末から 7 世紀初頭の時期の埋没と判断される。古式土師器については、後述する下層の灰色砂質土層の古式土師器より若干新しい傾向が見られる。

### 【参考文献】

次山淳 (1993) 「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第 40 巻第 2 号, pp.47-71

## 4SD001 灰色砂質土 (灰茶砂) (図 30 ~ 32 - 1 ~ 40)

図化したものの他、黒色粘土層と同様に、K III a 式の大型棺・鉢、K III b 式の大型棺、K II b・K II c・K III a 式の丸みをおびた甕棺の大きな破片が出土している。

## 古式土師器

**鉢** (1 ~ 3・5) 1 ~ 3 は鉢 1 で、手づくね様の粗製品である。2・3 は器面が風化しているため詳細は不明だが、横方向の精緻なミガキが残存しており、胎土も精良で、比較的丁寧な製作されていることがわかる。2 には外面の胴部中位に帯状に煤が、内面の対応する部分にコゲが付着している。5 は鉢 4a でほぼ完形である。底部外面にはケズリが施され、置いた時に安定するようにという意識が働いている。

**低脚坏** (6) 低脚坏である。坏部上半・脚部を大幅に欠損している。山陰地方に特有の低脚坏と思われる。白っぽい胎土が使用されている。

**高坏** (7 ~ 11) 7・8 は高坏の坏部である。両者ともに小型精製器種様の横方向の精緻なミガキが施される。8 の坏部内面には暗文風の放射状のミガキが施されている。9 ~ 11 は高坏の脚部である。11 は高坏 3 の脚部であると思われる。脚部外面はいずれもミガキによって仕上げられるが、9・10 は比較的粗いつくりであるのに対して、11 は細かい刷毛目の後、横方向の精緻なミガキにより仕上げられている。11 は胎土も精良であり、9・10 と比較して精製度が高い。

**壺** (4・12・13) 4 は壺 8 (小型丸底壺) である。胴部外面は縦方向の刷毛目調整であり、粗製品である。12 は壺 2 で畿内系の二重口縁壺である。口頸部はほぼ完存する。頸部と肩部の縦方向の刷毛目は連続しており、刷毛目を施した後、頸部を成形 (折り曲げ) したことがわかる。内面にも頸部折り曲げ時の指頭圧痕が観察できる。13 は壺 3a で山陰系の二重口縁壺である。口縁部は山陰地方の壺・甕の口縁部に特徴的な丁寧なヨコナデによって調整されており、その単位が明瞭に観察される。頸部や肩部にも、山陰地方の壺に特徴的な、刷毛目工具様の工具による切れ長の刺突文、櫛状工具による平行沈線文が施されている。

**底部** (14～17) 14・15は他の個体と異なり、精良な胎土で製作されている。しかし、両者ともに煤・コゲが付着しており、煮沸具として使用されたことが分かる。16は、いわゆるV様式甕特有の平底底部の名残りをとどめたような形態を呈し、底部内面中央部には粘土の充填がみられる。17は壺の底部と思われる。底部付近は押し出したような形態をとるが、内面ではそれに対応するような痕跡はみられない。

**甕** (18～33) 18は甕3で庄内式の甕である。外面には左方上がりのタタキが施されている。外面には煤、内面にはコゲが付着している。19・20・28は甕2、いわゆるV様式系甕である。19・20はタタキによって成形され、20はその後、縦方向の刷毛目により仕上げられている。19の内面はケズリであるのに対して、20はナデである。同一系統の甕でも調整法が異なる点が注目される。また、胎土においても19は他の個体と比べて橙色味の強い胎土が使用されている。21～27・29～33は甕4(布留式甕)である。口縁部形態は多様で、内湾するもの(21～24・30・32)、直線的なもの(25・31・33)、外反するもの(29)などがある。口唇部形態も、丸くおさめるもの(21・24・30)、面をもつもの(25・29)、面をもちややつまみ上げたもの(22・23・33)、凹むもの(31)、肥厚するもの(32)など多様である。外面調整は基本的に肩部にヨコハケ、それ以下は縦もしくは斜方向の刷毛目によって仕上げられ、内面はケズリである。また、肩部には、櫛状工具による平行沈線文や、刷毛目工具様工具による列点文(刺突文)が施される(22・24)。すべての個体に煤の付着が確認され、コゲも22・24～26・29で確認できることから、これらの煮沸具としての使用が確認される。

**器台** (34) 器台1aで内外面刷毛目の粗雑なつくりである。

### 弥生土器

**甕** (35) 甕1cでいわゆる跳ね上げ口縁部をもつ遠賀川以東系の甕である。口縁部から胴部上半にかけて全周の約1/7程度残存する。時期は須玖I式古段階である。外面には煤が付着し、吹きこぼれの痕跡を残すことから、煮沸具としての使用が確認される。

### 石製品

**石剣** (36) 泥質片岩製の石剣である。基部端から3cmは刃部を作り出しておらず、柄を付けて使用したものと考えられる。断面はレンズ形を呈す。

### 木製品

**鋏** (37) 三又鋏である。片側のみ残存しているが、なで肩の頭部で、刃部はV字状の切り込みによってつくり出されており、柄孔は方形であると思われる。現状で全長30.9cm、刃部長10.3cm、幅7.8cm、最大厚1.6cmをはかる。表面には加工痕が観察できる。

**盤×槽** (38) 平面長方形を呈する盤もしくは槽であると考えられる。片側が欠損しており実際の大きさは不明である。短辺方向では丸底を呈し、長辺方向では隅丸逆台形状に削り抜かれている。両側面の上端は幅の狭い面をつくる。現状では、全長17.3cm、幅13.4cm、厚さ5.5cmをはかる。

**錘** (39) もじり編み用の錘である。図面では縦になっているが、ヨコ型のもので、本来ならば円錐の上にある棒状の部分の先にさらに同じような円錐形のものが頂部を向き合わせる形で

もう一つ存在するものと推測される。渡辺誠氏の分類によれば、民具資料では最も一般的な形態に近いものである（渡辺 1981, p.29）。全長 9.35cm、幅 5.4cm、厚さ 5.3cm をはかる。

**杭 (40)** 杭である。自然木をそのまま利用し、先端部分のみ加工している。全長 70.8cm、幅 20.3cm、厚さ 4.5cm。

**【埋没時期】** 多数出土している古式土師器から、古墳時代前期前半に位置づけられる。下層の茶色腐植土層（後述）より、若干新しい傾向はあるものの、ほとんど時期差はないものと思われる。

**【参考文献】**

渡辺誠 (1981) 「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌』第 66 巻第 4 号, pp.28-54

**4SD001 茶色腐植土 (図 33 - 1 ~ 7)**

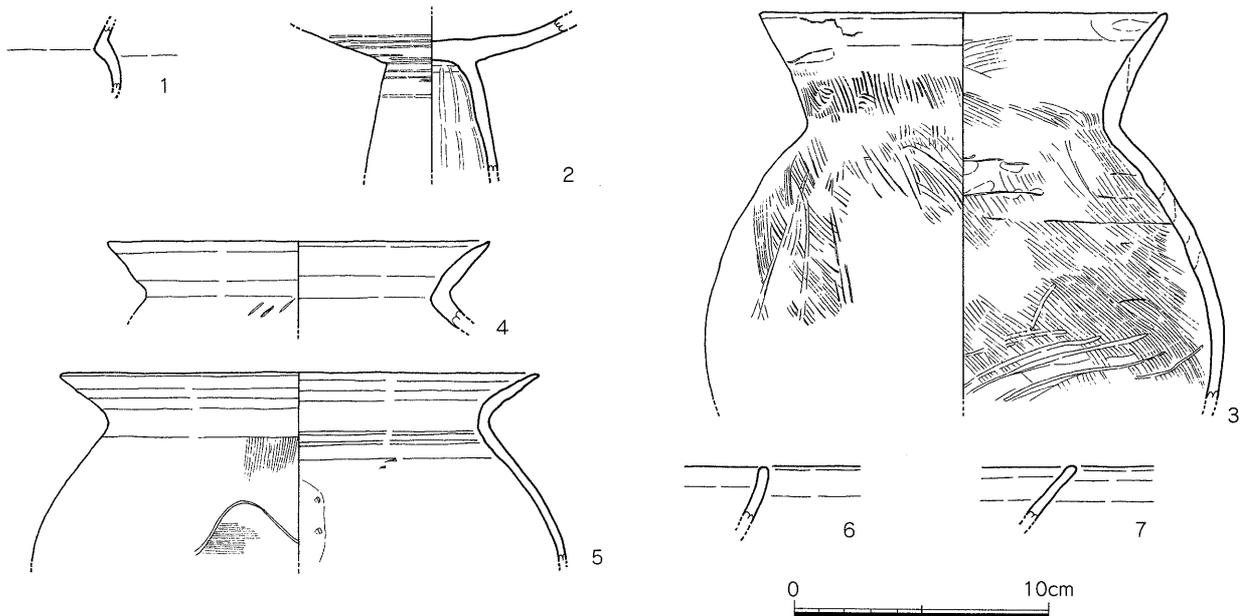
**古式土師器**

**壺 (1)** 壺 8 の破片である。

**高坏 (2)** 高坏で、坏部下半と脚部上半のみ残存している。坏部や脚部に横方向のミガキが施される点、脚部がエンタシス状を呈する点から、高坏 3 の脚部であると思われる。

**壺×甕 (3)** 壺×甕である。壺 5 か。内外面ともに粗い刷毛目が施され、内面の胴部下半にはミガキ様の痕跡が認められる。断面観察から、口縁部は外傾接合、胴部は内傾接合によって成形されていることがわかる。特に、胴部は、内面粘土接合部の割れの状態から比較的細めの粘土紐を積み上げた工程が観察できる。外面全体に煤が付着している。

4SD001 茶色腐植土



4SD001 灰色粗砂

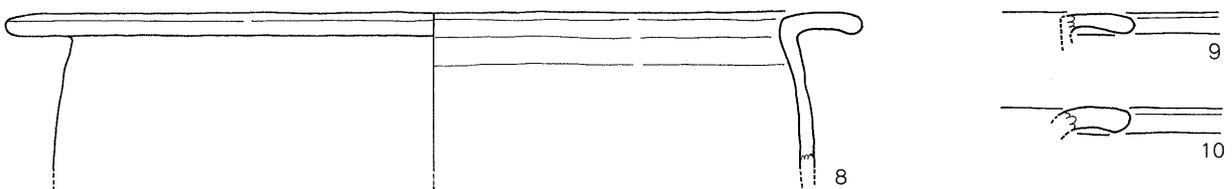


図33.溝出土遺物実測図(7) (S=1/3)

**甕(4～7)** 4は甕2で口縁部はヨコナデ調整をおこない、頸部付近には刺突文が施されている。5～7は甕4である。5は口縁部が直線的な形態で古い様相を呈し、肩部にヘラ状工具による波状文が施されている。外面全体に煤が、口縁部内面にはコゲが付着している。6は内湾し口唇部を丸くおさめる口縁形態で、7は直線的で、口唇部を平坦にする口縁形態のものである。

**【埋没時期】** 茶色腐植土層の埋没時期は、甕2・4、高坏3が出土している点から弥生時代終末から古墳時代前期前半にかけてであると考えられる。

**4SD001 灰色粗砂 (図33-8～10)**

**弥生土器**

**甕(8～10)** 8～10は甕1bである。

**【埋没時期】** これらの甕から本層の埋没時期は須玖Ⅱ式古段階と考えられる。

**4SD022 (図9-1～7)**

図化したものの他に、縄目タタキの平瓦の破片や弥生土器が出土している。

**土師器**

**椀(1)** 椀c1で、高台の破片である。器面の風化が著しく、詳細は不明である。

**坏(2)** 坏cの高台破片のみである。

**須恵器**

**坏(3・5・6)** 3は坏の口縁部の破片である。5・6はともに坏cで、それぞれ高台付近の約1/3、約1/4残存している。5は高台部分に粘土紐を貼り付けることによって成形している。

**甕×壺(4)** 4は口縁部片である。

**甕(7)** 甕の口縁部で約1/5ほど残存している。口唇部は粘土紐を新たに貼り付けることによって成形している。

**4SD022 茶灰色砂質土 (図34-8)**

**古式土師器**

**壺×鉢(8)** 8は壺8鉢4aである。胴部全周の約1/5のみ残存している。器面は摩耗しており、調整などの詳細は不明である。古墳時代前期のものである。

**【形成・埋没時期】** 土師器の坏cと須恵器は奈良時代の遺物で、土師器の椀c1は平安時代前期の遺物である。溝の形成時期についてはSD001を切っていることからそれより新しくなるこ

4SD022

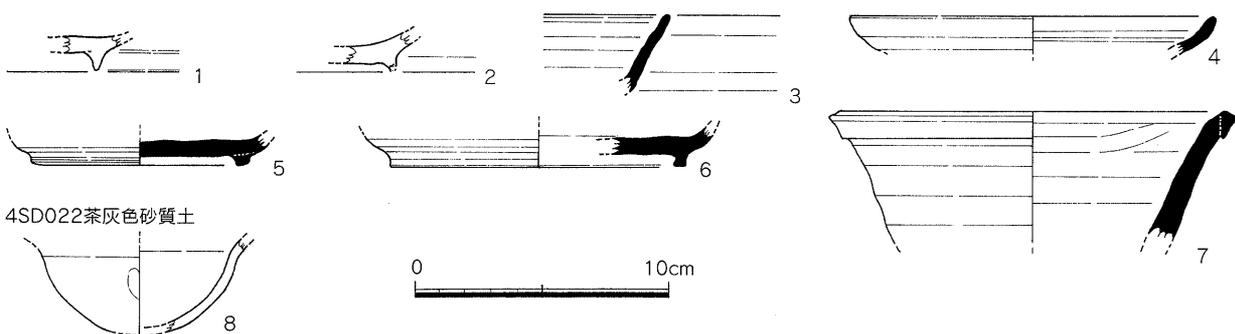


図34.溝出土遺物実測図(8) (S=1/3)

とは確実であるが断定はできない。埋没時期については、土師器の椀c1から平安時代前期と考えられる。

### c. 墓

遺構図面上は形をとどめている場合でも、胎土の風化が激しく図化できなかったものもある。

#### c-1. 甕棺【小型棺】

##### 4ST015 (図35-1・2)

##### 弥生土器

**甕 (1・2)** 1は中型のいわゆる丸みをおびた甕棺と呼ばれるものである。ほぼ完形である。胴部中位には二条の断面M字状突帯をやや間隔をあけて貼り付けている。内外面ともナデ調整で仕上げているが、内面の胴部上半にはナデによって消された刷毛目の起点痕がわずかに観察できる。2は小型の甕1aである。口縁部から胴部下半にかけて全周の約1/2ほど残存している。外面は縦方向に刷毛目が施されているが、その切り合い関係から工具の動きは下部から上部へ、工程は上部から下部へと進行したことがわかる。内面はナデ仕上げであるが、刷毛目が一部に観察でき、ナデを施す前に刷毛目調整をおこなっていることが確認される。1・2ともかなり白味の強い精良な胎土である。

【形成時期】中期前半～中頃(KⅢa式・須玖Ⅰ式新段階)であろう。

##### 4ST020 (図35-3・4)

##### 弥生土器

**甕 (3・4)** 3は小型の甕1aである。口縁部から胴部下半まで残存しているが、全周の約1/2が欠損している。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデ調整である。また、煤とコゲが付着している。煤は外面の口縁部から胴部上半にかけて付着しているが、胴部下半は煤が酸化しており、強い加熱を受けたと思われる。コゲは外面酸化部に位置的に対応する内面に付着している。これらのことからこの甕は煮沸具から甕棺へと転用されていることが明らかである。4は小型の甕1aである。口縁部から底部まで残存するが、口縁部から胴部にかけて全周約1/2ほどが欠損している。断面観察から、口縁部はくの字状に折り曲げた後、内面側に粘土紐をヨコナデによって貼り付けることで鋤先口縁を成形していることが確認される。外面は縦方向の刷毛目が施され、その切り合い関係から工具の動きは甕下部から上部へ、工程は上部から下部へと進行したことが確認できる。内面には明瞭なナデの痕跡が観察できる。また、煤とコゲが付着している。煤は外面の胴部下半にバンド状に付着している。底部付近の煤は酸化しており、強い加熱を受けたと思われる。この煤と位置的に対応する形で、コゲが内面の胴部下半にバンド状に、また底部にも付着している。これらのことから、この甕も煮沸具から甕棺へと転用されていることが明らかである。3・4とも胎土は比較的橙色の強い色調を呈し、酷似することから、同時に製作された可能性が考えられる。

【形成時期】中期後半(須玖Ⅱ式古段階)と考えられる。

##### 4ST040 (図35-5・6)

##### 弥生土器

甕 (5・6) 5は小型の甕 1aである。口縁部から胴部下半にかけて全周の約1/4程度残存している。口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内外面ともにナデにより仕上げられている。6は小型の甕 1aである。口縁部のみ、全周の約1/4が残存している。口縁部下の突帯は剥離している。

【形成時期】 中期前半 (須玖 I 式古段階) である。

4ST045 (図 36 - 7)

弥生土器

甕 (7) 甕の胴部破片である。外面は縦・斜方向の刷毛目調整が施されている。

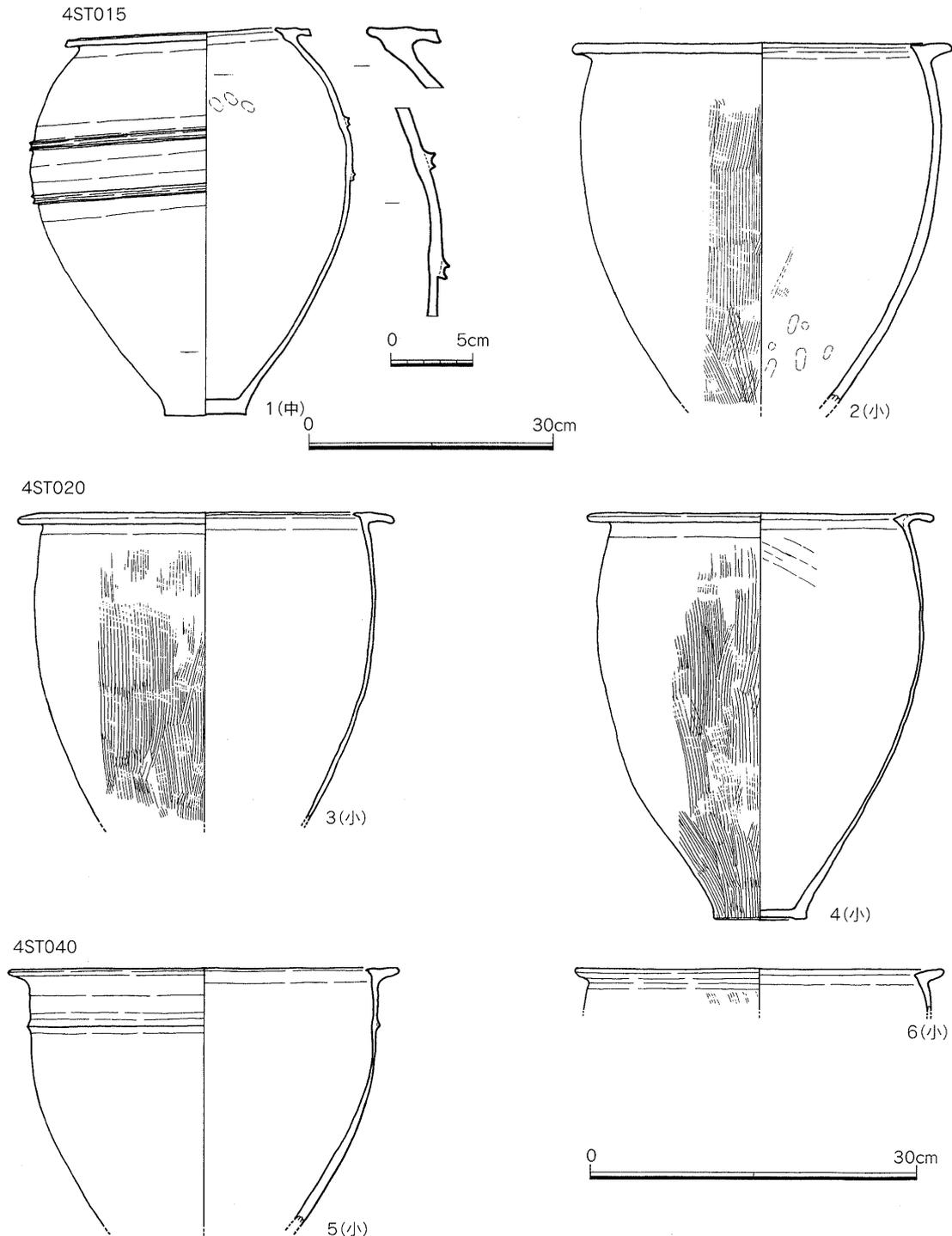


図35.甕棺墓出土遺物実測図(1) (S=1/4・1/6・1/8)

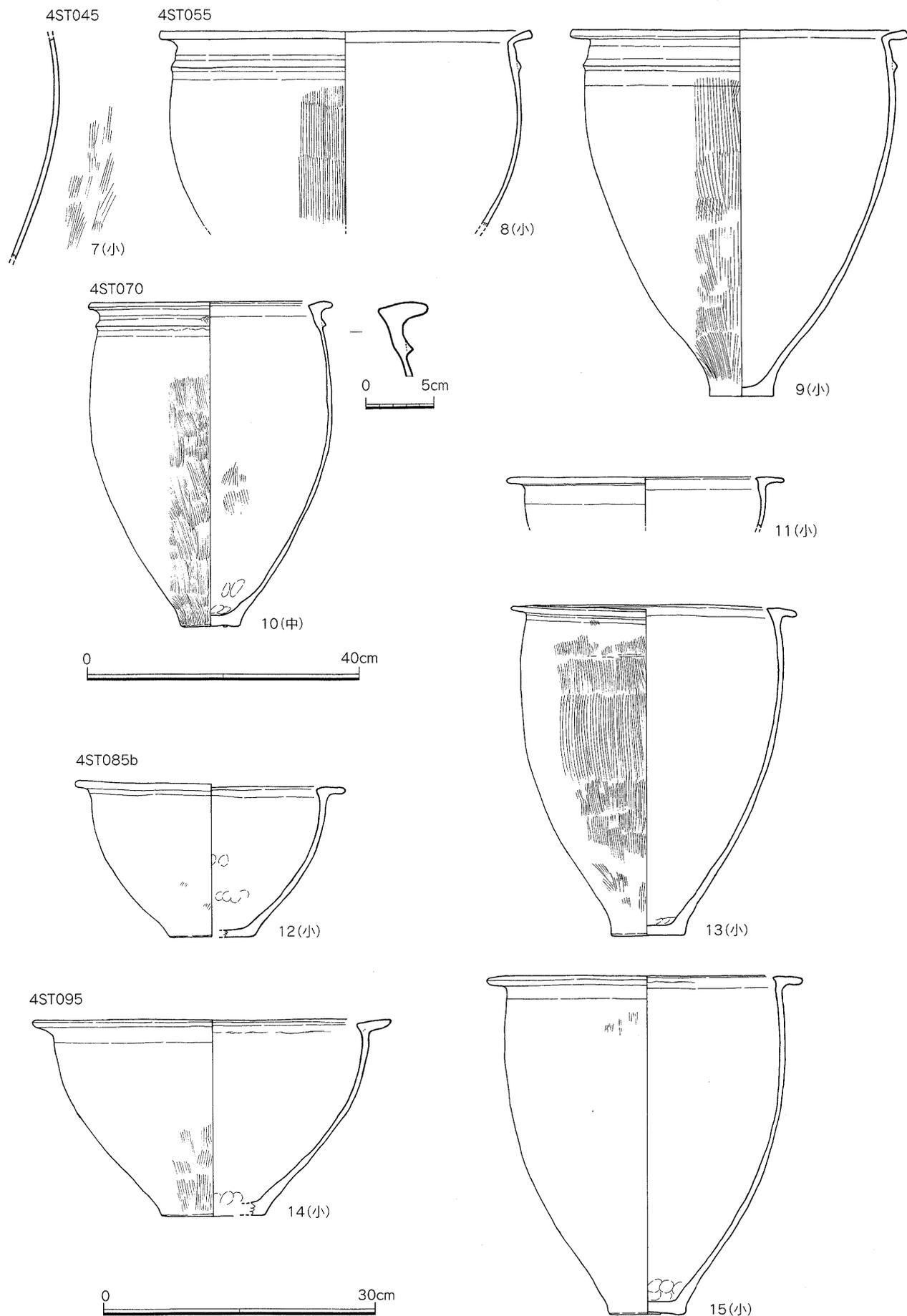


図36.甕棺墓出土遺物実測図(2) (S=1/4・1/6・1/8)

【形成時期】 時期は不明である。

4ST055 (図 36 - 8・9)

#### 弥生土器

**甕** (8・9) 8は小型の甕 1bである。口縁部から胴部下半の全周の約1/3が残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面には縦方向の刷毛目、内面にはナデが認められる。9は小型の甕 1bである。口縁部から底部まで残存しているが、全周の約1/3ほどを欠く。口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付ける。外面は刷毛目、内面はナデにより調整される。特に内面のナデは、単位は不明であるが、上部10cmほどは横方向のナデ、それより下位は縦方向のナデによって調整されているのが観察できる。8・9ともに白味の強い精良な胎土である。

【形成時期】 これらの個体は、いわゆるくの字状口縁部をもつが、中期後半以降のそれとは細かな特徴を異にする。底部形態、ならびに胴部のプロポーションから見て、中期前半(須玖I式新段階)に属するものであろう。

4ST070 (図 36 - 10・11)

#### 弥生土器

**甕** (10・11) 10は中型の甕 1aである。口縁部から底部まで残存するが、口縁部から胴部下半にかけて、全周の1/3程度欠損している。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。刷毛目が突帯を貼り付けた際のヨコナデによって切られており、刷毛目調整の後に突帯の貼り付けがおこなわれたことがわかる。内面にも刷毛目が残存するが、ナデによる仕上げである。外面全体に煤が付着し、特に胴部下半部は煤が酸化しており、強い加熱を受けたものと思われる。これらのことから、煮沸具としての使用の後、棺に転用されたことがわかる。11は小型の甕 1aである。口縁部から胴部上半にかけて全周の約1/6程度残存している。内外面とも器面が剥落しており調整は不明である。

【形成時期】 中期前半(須玖I式新段階)である。

4ST085b (図 36 - 12・13)

#### 弥生土器

**鉢** (12) 鉢 aである。底部付近を全周約2/3ほど欠くが、ほぼ完形である。外面の底部付近にはタタキのような痕跡が観察される。また、内面の粘土帯の接合部と思われる部分には指頭圧痕が観察でき、粘土帯の接合部を入念に指によって押さえていることが窺える。

**甕** (13) 小型の甕 1aである。ほぼ完形である。口縁部直下のヨコナデのかかる部位に刷毛目が僅かにのこる点から、口縁部のヨコナデは胴部外面の刷毛目調整の後におこなわれたことが確認される。12・13ともに白味の強い精良な胎土である。

【形成時期】 中期前半(須玖I式新段階)である。

4ST095 (図 36 - 14・15)

#### 弥生土器

**鉢** (14) 鉢 aである。口縁部から底部にかけて残存するが、全周の約1/2が欠損している。外

面は縦方向の刷毛目調整の後ナデ仕上げ、内面もナデ仕上げである。

**甕** (15) 小型の甕 1a である。胴部上半部を全周の約  $1/2$  ほど欠くものの、他の部分は口縁部から底部まで残存している。外面は摩耗が激しく、僅かに刷毛目が観察できる程度であるが、内面はナデ仕上げであり、底部付近には指頭圧痕がみられる。14・15 ともに強い橙色を呈する。

【形成時期】 中期前半（須玖 I 式新段階）である。

4ST100 (図 37 - 16・17)

#### 弥生土器

**甕** (16・17) 16 は小型の甕 1c である。口縁部と、接合しない他の部位破片が残存している。内外面ともに器面の摩滅が著しく、調整は不明である。17 は小型の甕 1a である。口縁部から底部にかけて全周の約  $1/2$  が残存している。口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面は若干摩滅しているが縦方向の刷毛目調整がみられ、内面はナデが施されている。また、外面には煤の付着が観察でき、胴部中位は濃く下半は薄い点から、胴部下半は酸化がおこっているものと判断され、強い加熱を受けていたと思われる。しかし、内面にコゲの付着は観察されない。煮沸具から甕棺への転用は確認できる。

【形成時期】 中期前半（須玖 I 式新段階）である。

4ST105 (図 37 - 18)

#### 弥生土器

**甕** (18) 18 は小型の甕 1a である。口縁部から胴部下半にかけて全周の約  $1/4$  ほどが残存している。外面は縦方向の刷毛目、内面は縦方向のナデにより仕上げられる。口縁部は、断面観察より、くの字に折り曲げた後、粘土紐を内面側に付し、ヨコナデによって鋤先口縁を成形していることが判明する。

【形成時期】 中期前半（須玖 I 式新段階）である。

4ST140 (図 37 - 19・20)

#### 弥生土器

**甕** (19・20) 19 は小型の甕 1a である。口縁部から胴部下半にかけて全周の約  $1/4$  ほどが残存している。外面の胴部上半には縦方向の刷毛目調整が残存している。20 は小型の甕 1a である。口縁部から胴部下半にかけて全周の約  $1/2$  ほど残存している。内外面ともに摩滅が激しく器面調整は不明瞭であるが、外面には縦方向の刷毛目調整がわずかに残存する。

【形成時期】 中期後半（須玖 II 式古段階）である。

4ST145 (図 37 - 21・22)

#### 弥生土器

**甕** (21・22) 21 は小型の甕 1a である。口縁部から胴部下半にかけて全周の約  $1/2$  ほどが欠損するが、底部は完形である。内外面ともに摩滅が激しく器面調整は不明である。22 は小型の甕 1a である。口縁部から胴部下半にかけて全周の  $3/4$  ほどが残存している。内外面ともに摩滅が激しく器面調整は不明である。21・22 ともに白味の強い精良な胎土である。

【形成時期】 中期前半（須玖 I 式新段階）である。

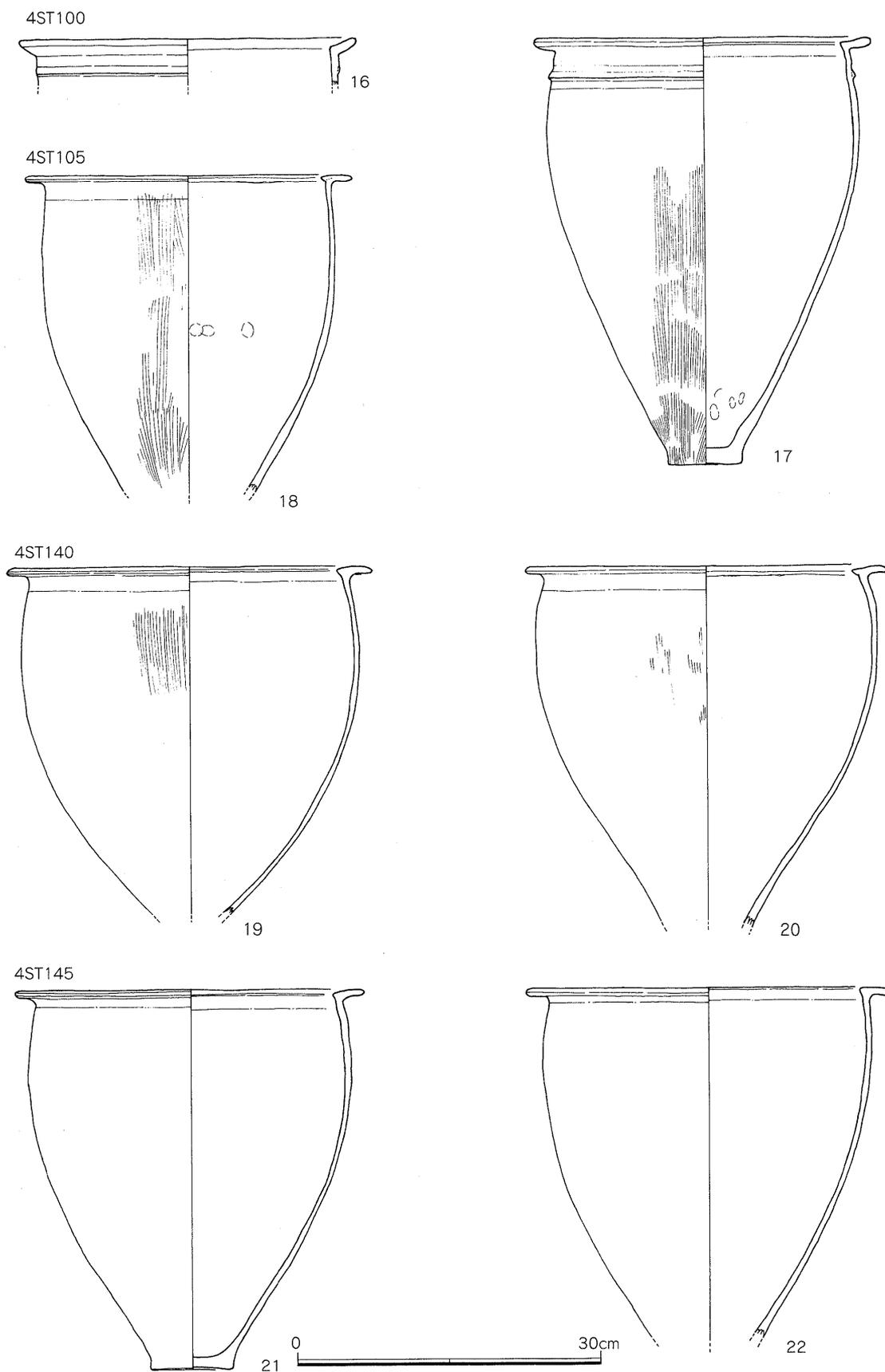


図37.甕棺墓出土遺物実測図(3) (S=1/6)

4ST155 (図 38 - 23・24)

弥生土器

**甕** (23・24) 23は中型の甕 1aである。胴部上・中位の一部と底部の全周1/2ほどを欠損しているが、ほぼ完形である。外面は縦方向の刷毛目によって調整されている。また、突帯剥離部を観察すると刷毛目が確認でき、刷毛目調整後突帯の貼り付けが行われていることがわかる。内面はナデによって仕上げられているが、刷毛目調整工具の起点痕が観察でき、ナデ以前に刷毛目調整がおこなわれたことが確認される。断面観察から、底部から胴部への成形方法は、粘土円盤上に粘土紐を積み上げるものであったことがわかる。外面の胴部中位には煤が付着しており、対応する位置の内面にはバンド状にコゲが付着している点から、煮沸具としての使用後、甕棺に転用されたものと思われる。24は小型の甕 1aである。口縁部から胴部にかけて1/2ほど欠損しているが、底部は完形である。外面の刷毛目は、単位どうしの切り合いから工具の動きは胴部下位から上位へ、工程は胴部上位から下位へと進行したことが判明する。

【形成時期】中期中頃(須玖Ⅰ式新段階～Ⅱ式古段階)である。

4ST165 (図 38 - 25・26)

弥生土器

**壺** (25) 壺 1aである。一部欠損するものの、ほぼ完形である。頸部下半に三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。頸部外面は褐色を呈するが、本来全面が褐色を呈していたのか、また、意識的な褐色化なのかについては、器面の風化のため不明である。

**甕** (26) 中型のもので、いわゆる丸みをおびた甕棺様の形態を呈する甕形土器である。胴部下半部が若干欠損しているもののほぼ完形である。胴部最大径部位にいわゆる作り一条見かけ二条の突帯をヨコナデによって貼り付けている。器面は風化が激しいが、調整は内外面ともナデ仕上げと思われる。外面は黒塗りで、所々に丹塗りのような痕跡が観察できる。この痕跡は特に黒斑周囲に見られ、イネ科植物が燃料に使用されたことを示す火色の可能性もあるが、器面風化のため断定はできない。

【形成時期】中期前半(須玖Ⅰ式新段階・KⅡc式)である。

4ST170 (図 38 - 27・28)

弥生土器

**甕** (27・28) 27は小型の甕 1aである。口縁部及び胴部下半の破片のみ残存している。内外面とも摩滅が著しく調整は不明だが、わずかに外面の胴部下半に刷毛目が認められる。28は小型の甕で、胴部下半から底部にかけての破片である。外面の胴部下半には縦方向の刷毛目が観察できる。

【形成時期】中期後半(須玖Ⅱ式古段階)である。

4ST175 (図 38 - 29・30)

弥生土器

**壺×甕** (29) 29は口縁部の破片のみ残存しており、壺か甕か不明である。

**甕** (30) 30は小型の甕 1aである。口縁部から胴部下半にかけての破片である。外面は縦方向

の刷毛目調整後部分的ナデを施し、内面もナデをおこなっている。

【形成時期】 中期後半（須玖Ⅱ式古段階）である。

4ST205（図 39 - 31・32）

#### 弥生土器

**壺×甕**（31） 壺あるいは甕の胴部中位から底部であり、全周の約 2 / 3 ほど欠損している。胴部最大径のやや上位で打ち欠かされている。胴部最大径部位に突出度の高い突帯がヨコナデによって貼り付けられている。器面は風化が激しく、特に内面は剥落が著しい。底部の断面観察から、粘土円盤の外側に粘土紐を一つ巻き付けた後、その上に粘土紐を積み上げていくという手法で成形されたことが推定される。外面は黒塗りと思われ、塗料が突帯・胴部・底部の一部に残存している。

**甕**（32） 小型の甕 1a である。底部のみ欠損している。外面には縦方向の刷毛目が施されるが、切り合いの観察と工具の動きの観察から、工具の動きは胴部下位から上位へ、工程は胴部上位から下位へ進行したことがわかる。内面はナデ調整がおこなわれている。

【形成時期】 中期前半（須玖Ⅰ式新段階）である。

4ST215（図 39 - 33・34）

#### 弥生土器

**甕**（33・34） 33 は小型の甕 1a である。口縁部から胴部下半の全周約 2 / 5 ほどが残存している。口縁部の内面側では粘土紐が付け加えられた状況が観察でき、口縁部をくの字に曲げた後、その内側に粘土紐を付け加えることで、鋤先口縁を形成したことがわかる。外面の胴部上半には縦方向の刷毛目調整が、内面には主に縦方向のナデがみられる。34 は小型の甕 1a である。口縁部を全周の約 1 / 4、底部を約 1 / 2 欠損するが、他は残存している。口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。また、口縁部と突帯の間に刷毛目が残存している点から、縦方向の刷毛目調整の後、突帯を貼り付けていることがわかる。また、内面にも縦・斜方向の刷毛目が施されおり、ナデ消しはおこなわれていない。なお、突帯貼り付け部の内面側には刷毛目が残存せず、指頭圧痕のみが残存している点からすると、内外面の刷毛目調整が終了した後、内面を指でナデるように内側から押さえながら突帯を貼り付けたと思われる。内面は全体的に褐色化している。33・34 ともに白味の強い精良な胎土である。

【形成時期】 中期後半（須玖Ⅱ式古段階）である。

4ST235（図 39 - 35）

#### 弥生土器

**甕**（35） 小型の甕 1a である。口縁部のみ残存している。口縁部内外面ともヨコナデによって仕上げられている。

【形成時期】 中期後半（須玖Ⅱ式古段階）である。

#### c-2. 甕棺【中型棺】

4ST010（図 40 - 36）

#### 弥生土器

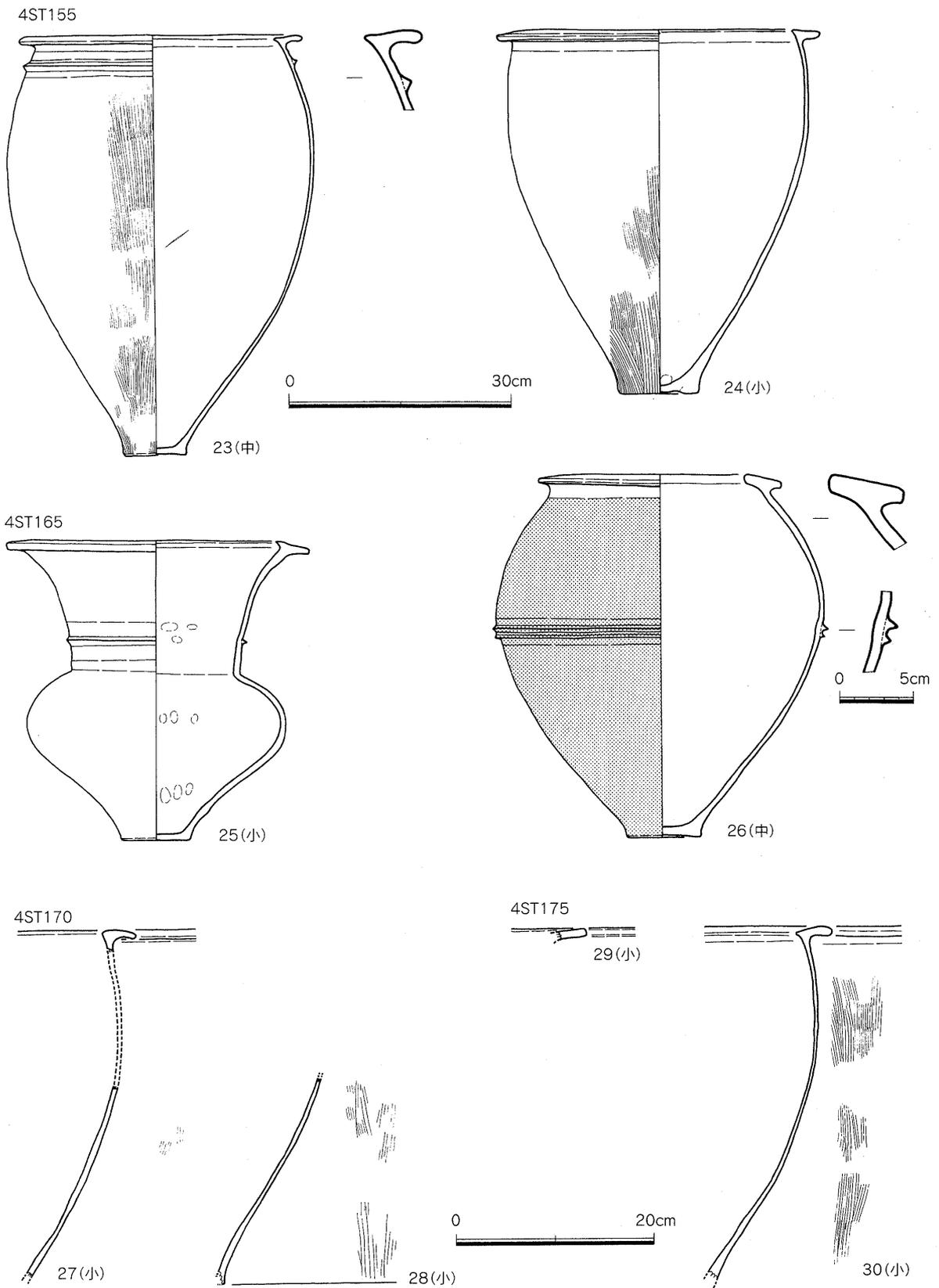


図38.甕棺墓出土遺物実測図(4) (S=1/4・1/6・1/8)

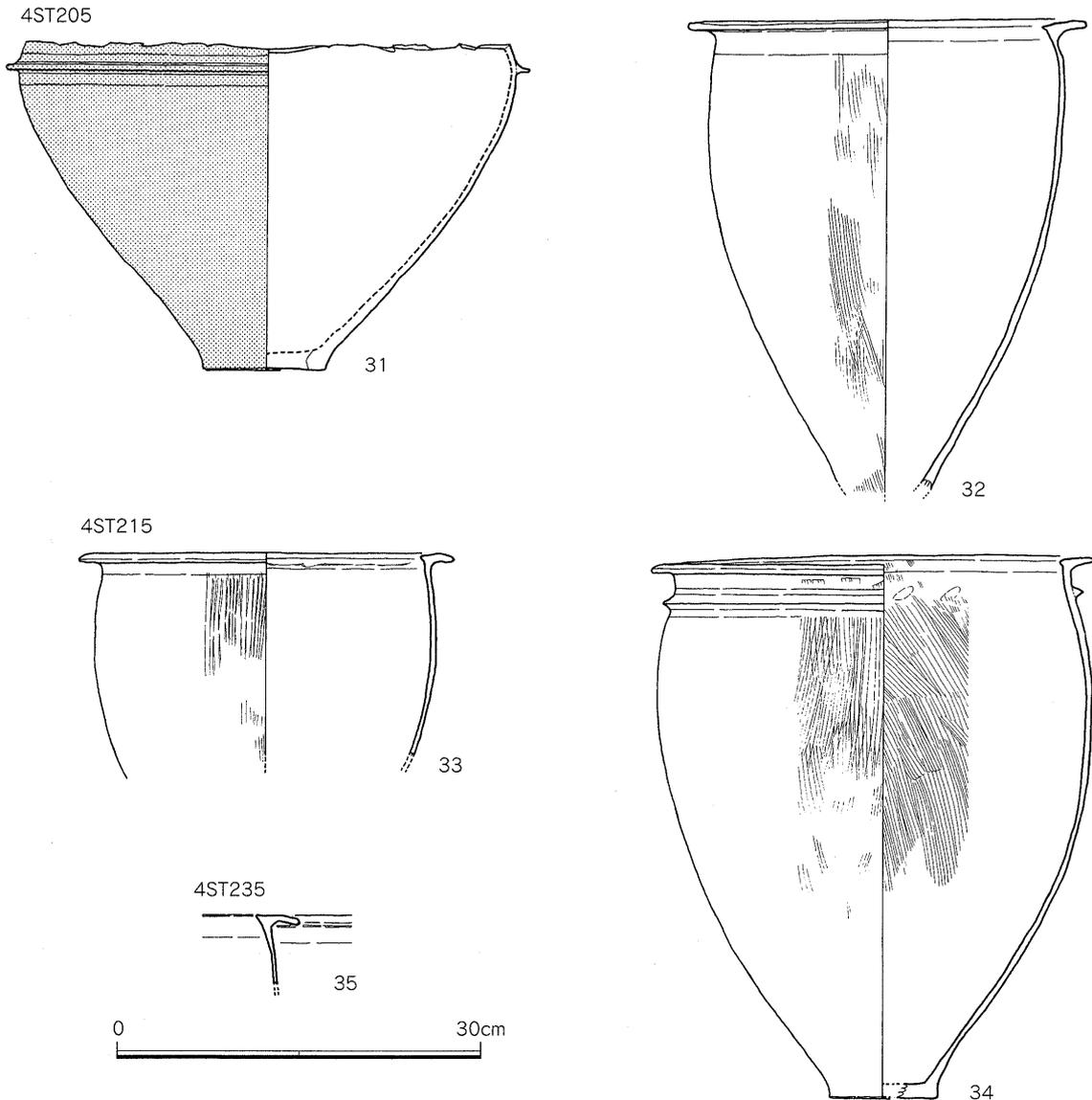


図39.甕棺墓出土遺物実測図(5) (S=1/6)

**甕(36)** 中型の甕1aである。口縁部から胴部中位までのうち全周の約 $1/3$ ほどを欠損するが、他の部分は残存している。口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面には縦方向の刷毛目がみられる。また、外面には煤が全面に付着しているが、底部付近では煤が酸化しており、強い加熱を受けたものと思われる。このことから煮沸具としての使用の後、甕棺へと転用されたことがわかる。色調は比較的強い橙色を呈する。

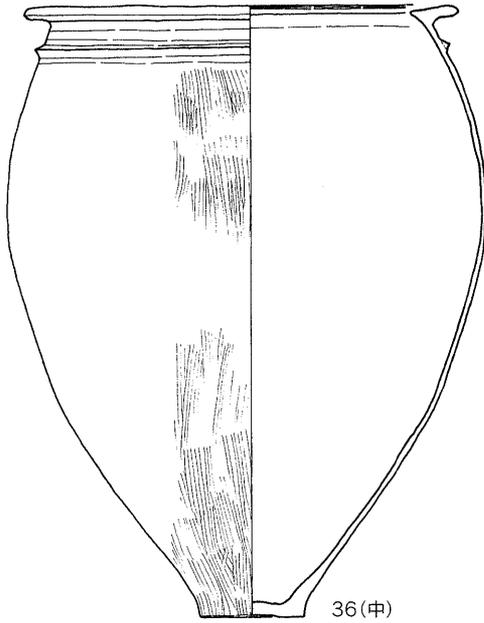
【形成時期】 中期前半（須玖I式新段階）である。

4ST025（図40 - 37・38）

#### 弥生土器

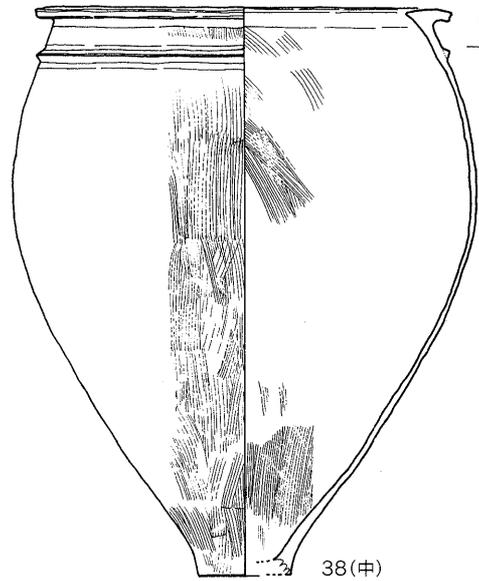
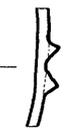
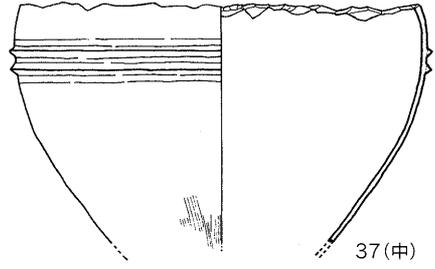
**甕(37・38)** 37は中型の甕の胴部である。突帯のすぐ上を打ち欠いており、打ち欠き部分から胴部下半にかけての部分が全周の約 $1/4$ ほど残存している。胴部最大径には二条の三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内外面とも摩滅が激しいため調整は不明瞭だが、外面の胴部下半にはわずかに縦方向の刷毛目が観察できる。38は中型の甕1aである。口縁部から底部付近まで残存しているが、口縁部の全周約 $1/10$ 、胴部約 $3/5$ 、底部の大部分を欠損し

4ST010

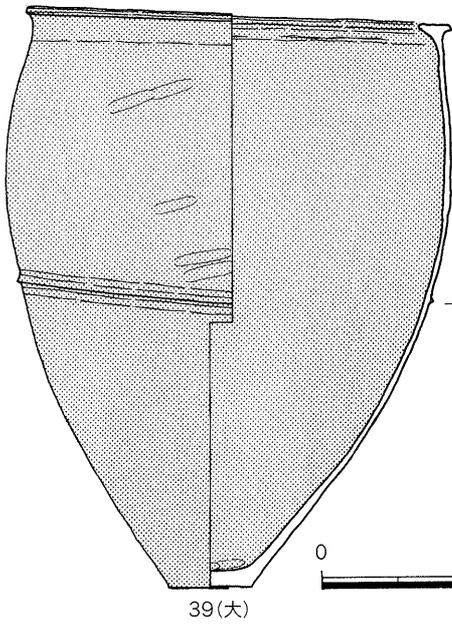


0 5cm

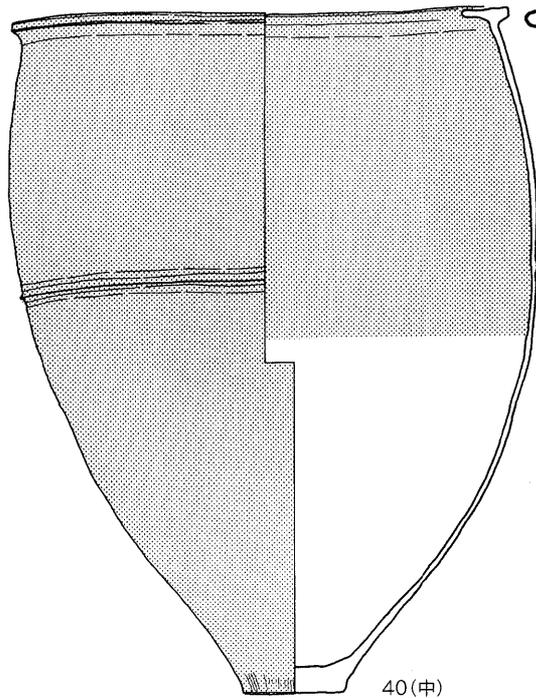
4ST025



4ST035



0 30cm



0 40cm

4ST065

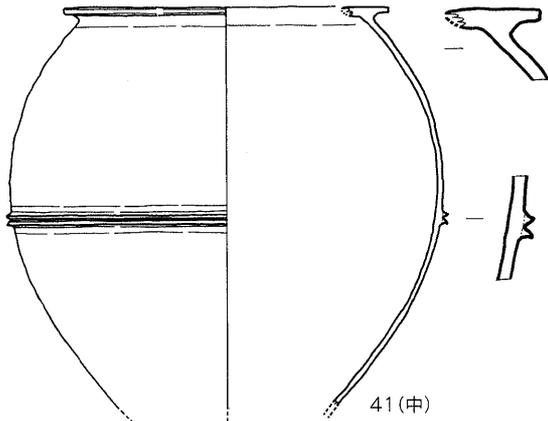


図40. 甕棺墓出土遺物実測図(6) (S=1/4・1/8・1/10)

ている。口唇部はヨコナデによって凹む。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付ける。内外面ともに縦・斜方向の刷毛目が施される。特に外面は口縁部と突帯の間に施された刷毛目が突帯貼付のためのヨコナデによって消されている点から、胴部を刷毛目によって調整した後、突帯を貼り付けたと確認される。外面には全面的に煤が付着し、内面の胴部下半にもパッチ状のコゲが付着している。このことから、煮沸具としての使用の後、甕棺に転用されたことが分かる。

【形成時期】 中期前半（須玖Ⅰ式新段階）である。

4ST035（図40－39・40）

#### 弥生土器

甕（39・40） 39はほぼ完形の大型棺である。口縁部内側口唇部にはヨコナデによる明確な面が形成される。胴部中位には小さな三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。胴部内外面ともにナデ仕上げであるが、外面の胴部上半には棒状の工具によるタタキの痕跡が観察できる。内外面ともに黒塗りである。40は中型の甕棺である。ほぼ完形である。胴部中位よりやや上に小さな三角突帯を貼り付けている。内外面ともにナデが施されているが、外面の底部付近には刷毛目が残存しており、ナデ仕上げの前に刷毛目による調整が行われたことがわかる。外面は全面、内面は胴部上半が黒塗りである。

【形成時期】 中期前半（KⅡb式）である。

4ST065（図40－41）

#### 弥生土器

甕（41） 丸みをおびた甕棺である。口縁部から胴部下半にかけて全周の約1／3残存する。胴部最大径は胴部中位にあり、その位置にいわゆる作り一条見かけ二条の突帯をヨコナデによって貼り付けている。内外面ともにナデによる仕上げである。

【形成時期】 中期前半（KⅡc式）である。

4ST080（図41－42）

#### 弥生土器

甕（42） 中型の甕1aである。口縁部から底部にかけて残存するが、全周の1／2ほどを欠損する。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内外面ともに縦方向の刷毛目が施されている。外面の刷毛目は切り合いから、工具の動きは胴部下位から上位へ、工程は胴部上位から下位へと進行したことが分かる。内面は一部に刷毛目が残存するものの、基本的にナデによる仕上げである。外面全体に煤が付着し、さらには吹きこぼれの痕跡も確認できることから、炊飯のような、強火で一気に煮沸する調理に用いられたことが推測される。また、内面には底部付近にパッチ状のコゲが付着している。以上のことから、煮沸具としての使用後、甕棺へと転用されたことが明らかである。

【形成時期】 中期後半（須玖Ⅱ式古段階）である。

4ST090（図41－43・44）

#### 弥生土器

**壺 (43)** 壺の胴部である。胴部上半を打ち欠いており、胴部中位から底部にかけての全周約  $3/5$  ほどが残存している。胴部最大径部位には二条の断面コの字状突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面ともに縦方向の刷毛目調整後ナデを施しており、刷毛目調整工具の起点痕が外面底部付近や内面に見られる。また胴部中位の突帯間では横方向の刷毛目調整がみられる。全体的に外面は褐色化している。

**甕 (44)** 中型の甕 1a である。口縁部全周約  $1/2$ 、胴部下位約  $1/3$  ほどを欠損するが、他は残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付ける。内面の口縁部下位約 10cm ほどと底部付近には指頭圧痕が観察でき、ナデを施す前におこなったと思われる刷毛目

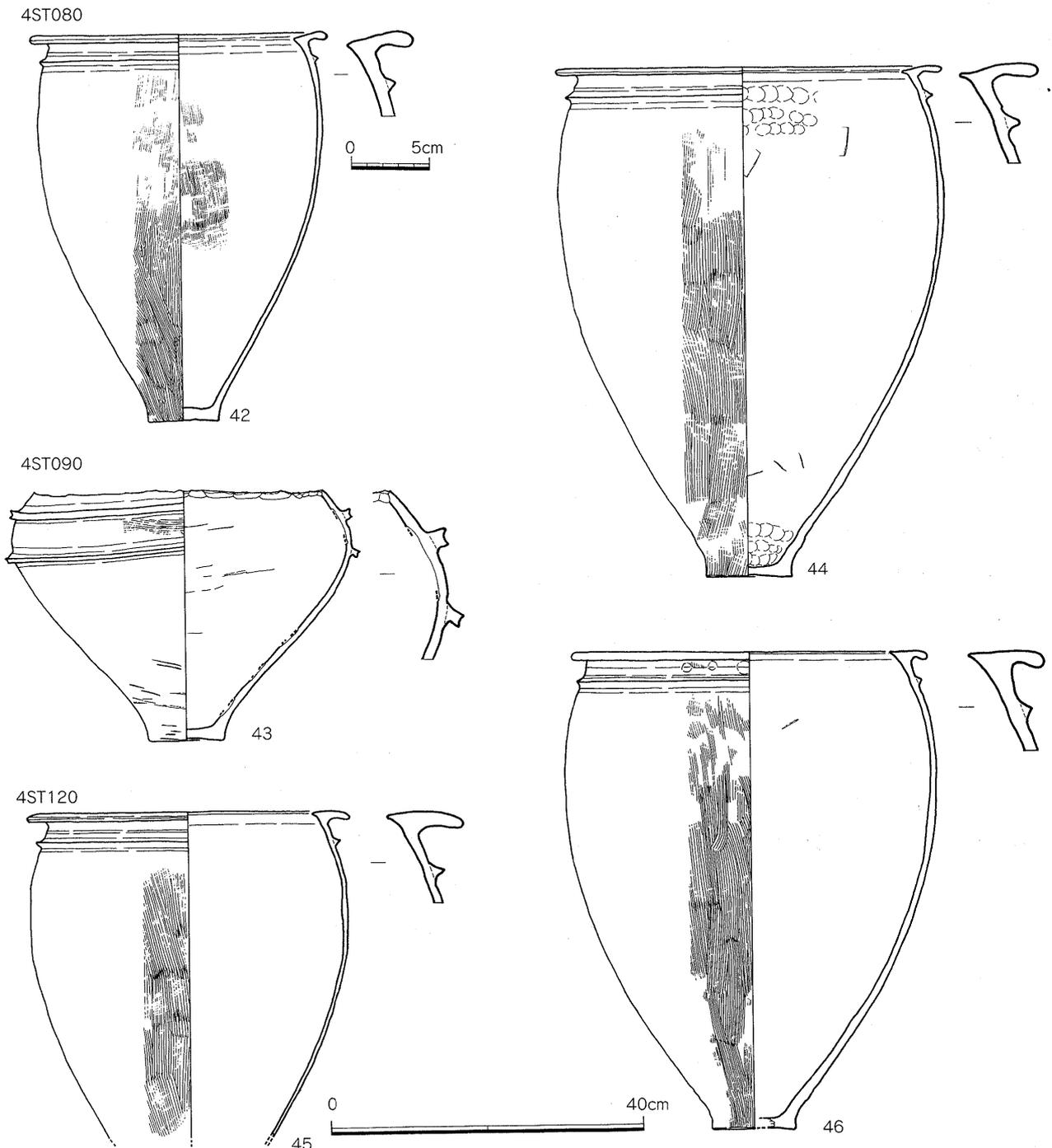


図41.甕棺墓出土遺物実測図(7) (S=1/4・1/8)

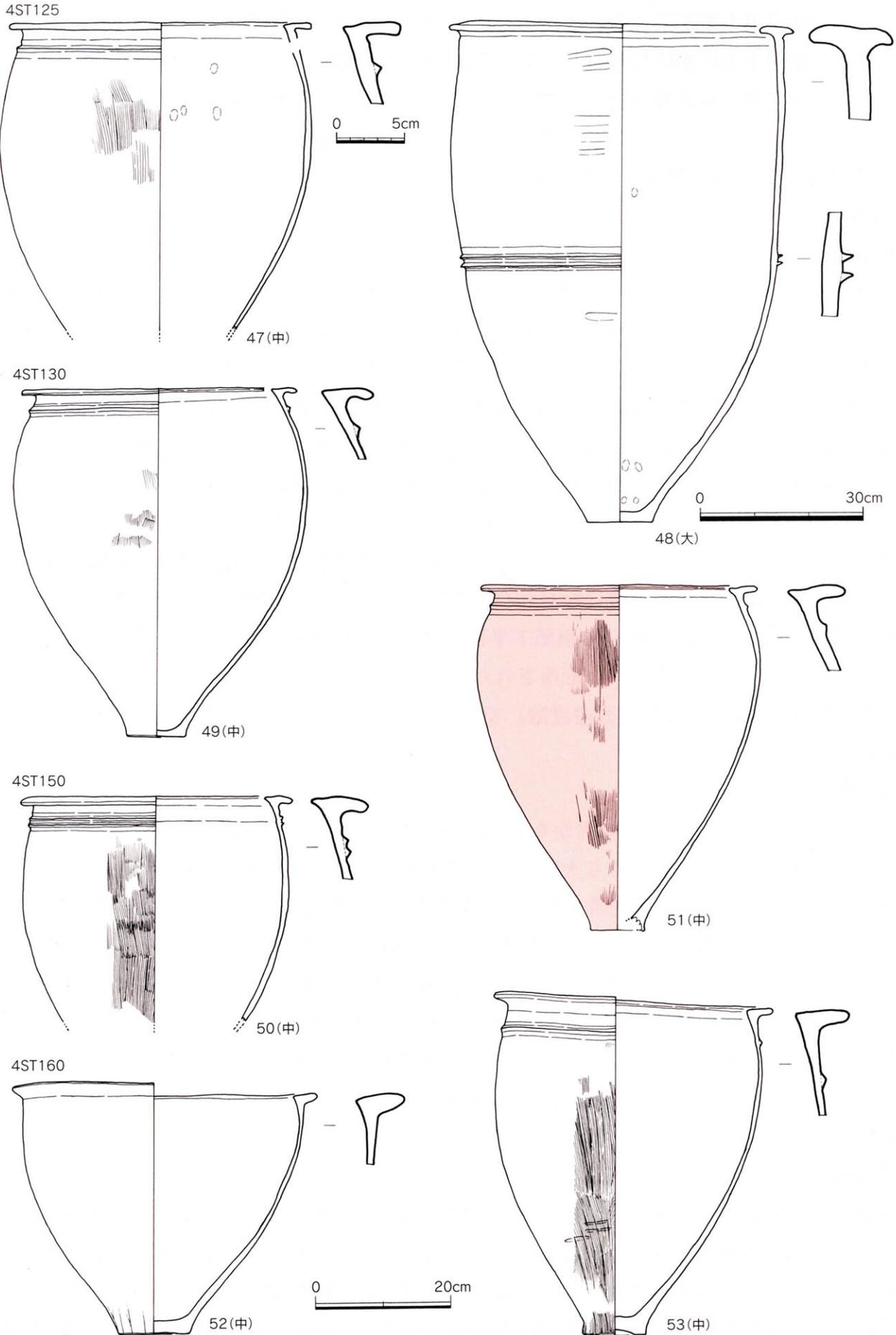


図42. 甕棺墓出土遺物実測図(8) (S=1/4・1/8・1/10)

調整工具の起点痕も胴部にみられる。また、外面には縦方向の刷毛目調整が認められる。煤が口縁部から胴部下半にかけて付着し、吹きこぼれの痕跡も確認できることから、炊飯のような、強火で一気に煮沸する調理が行われたことが想定される。コゲも内面胴部下半にパッチ状に付着している。これらのことから、煮沸具として使用の後、甕棺へ転用されたことがわかる。

【形成時期】 中期前半（須玖Ⅰ式新段階）である。

#### 4ST120（図41－45・46）

##### 弥生土器

**甕**（45・46） 45は中型の甕1aである。口縁部から胴部下半にかけて全周の約1／3が残存している。口縁部下に三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデで仕上げられている。また、外面の突帯付近や胴部下半に煤が付着しており、煮沸具から甕棺へと転用されたことがわかる。46は中型の甕1aである。口縁部から底部にかけて器体全周の約1／3ほどが残存する。口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付ける。外面は縦方向の刷毛目が施されるが、口縁部と突帯の間にも刷毛目が残存する点から、胴部全体を刷毛目調整した後、突帯をヨコナデにより貼り付けたことが確認される。また、粘土帯の接合によって生じる凹凸とは異なる、タタキによるものと推測される器面の凹凸が観察できる。内面の胴部上半には、ナデ調整前に行われた刷毛目調整の工具起点痕が観察できる。煤が外面全体に付着し、内面には口縁部から胴部下半にかけてパッチ状のコゲが付着していることから、煮沸具として使用の後、甕棺へと転用されたことがわかる。

【形成時期】 中期後半（須玖Ⅱ式古段階）である。

#### 4ST125（図42－47・48）

##### 弥生土器

**甕**（47・48） 47は甕1aで口縁部から胴部下半まで残存し、器体全周1／3ほどを欠く。日常容器の形態を呈しつつもかなり大型の土器であり、本報告で設定した基準では中型に位置付けられる。口縁部下には三角突帯を有する。胴部上半には縦方向の刷毛目が観察できる。また、外面には胴部中位に煤が付着し、内面にもパッチ状のコゲが観察できることから、煮沸具として使用後、甕棺に転用されたものと判明する。48は大型の甕棺である。口縁部・胴部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。胴部中位には小さな二条の三角突帯をヨコナデによって貼り付ける。外面には棒状の工具によるタタキの痕跡が観察できる。

【埋没時期】 中期前半（須玖Ⅰ式新段階・KⅡc式）である。

#### 4ST130（図42－49）

##### 弥生土器

**甕**（49） 中型の甕1aである。胴部は器体全周の約1／4ほどを欠損するが、ほぼ完形である。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付ける。内外面とも摩滅が激しいため調整は不明瞭だが、外面の胴部中位にはわずかに縦方向の刷毛目が観察できる。外面の口縁部から胴部下半にかけて煤が付着している。底部付近の煤は酸化している。酸化部分とそれ以外との境界は明瞭であり、酸化箇所は強い加熱を受けたことが推定される。これらのことから、煮沸具と

しての使用後、甕棺へと転用されたものと判断できる。

【形成時期】中期後半（須玖Ⅱ式古段階）である。

4ST150（図42－50・51）

#### 弥生土器

甕（50・51）50は中型の甕1aである。口縁部から胴部下半にかけて全周の約2／3ほど残存している。口縁部下には断面M字状の突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデによって仕上げている。外面全面に煤が付着し、内面の胴部上半には帯状にコゲが付着している。これらのことから、煮沸具として使用後、甕棺へと転用されたことがわかる。51は中型の甕1aである。口縁部から底部まで残存しているが、そのうち口縁部から胴部中位までは器体全周の約1／3、それ以下は1／4ほど残存している。口縁部下に三角突帯をヨコナデにより貼り付ける。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデによって仕上げている。口縁部には丹塗りの痕跡が認められる。胴部外面は風化しており丹塗りの痕跡は認められないが、本来は外面全面に丹塗りが施されていたと考えられる。

【形成時期】中期後半（須玖Ⅱ式古段階）である。

4ST160（図42－52・53）

#### 弥生土器

鉢（52）鉢aである。完形である。内外面ともに摩滅が激しいが、底部外面には刷毛目原体の痕跡が観察できる。

甕（53）中型の甕1aである。ほぼ完形である。口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付ける。また、刷毛目は突帯によって切られており、刷毛目調整後に突帯が貼付されたことが明確である。外面胴部下半には刷毛目の下にタタキの痕跡が観察できる。また、刷毛目調整は、切り合いから、工具の動きは器体下位から上位へ、工程は器体上位から下位へと進行したことが確認できる。

【形成時期】中期前半（須玖Ⅰ式新段階）である。

4ST185（図43－54・55）

#### 弥生土器

甕（54・55）54は中型のいわゆる丸みをおびた甕棺の口縁部を打ち欠いた個体である。胴部最大径部位に二条の三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面は刷毛目調整の後ナデ仕上げ、黒塗りを施す。内面は剥離が著しいが、一般的な器面の風化とは異なる様相を呈す。55も中型の丸みおびた甕棺の口縁部を打ち欠いたものと思われる。胴部最大径部位に二条の三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内面には斜方向の刷毛目が観察できるが、仕上げはナデによる。

【形成時期】中期中頃（KⅢa式）と思われる。

4ST195（図43－56）

#### 弥生土器

甕（56）中型の甕の胴部上半から底部にかけての破片である。内外面ともに摩滅しており、

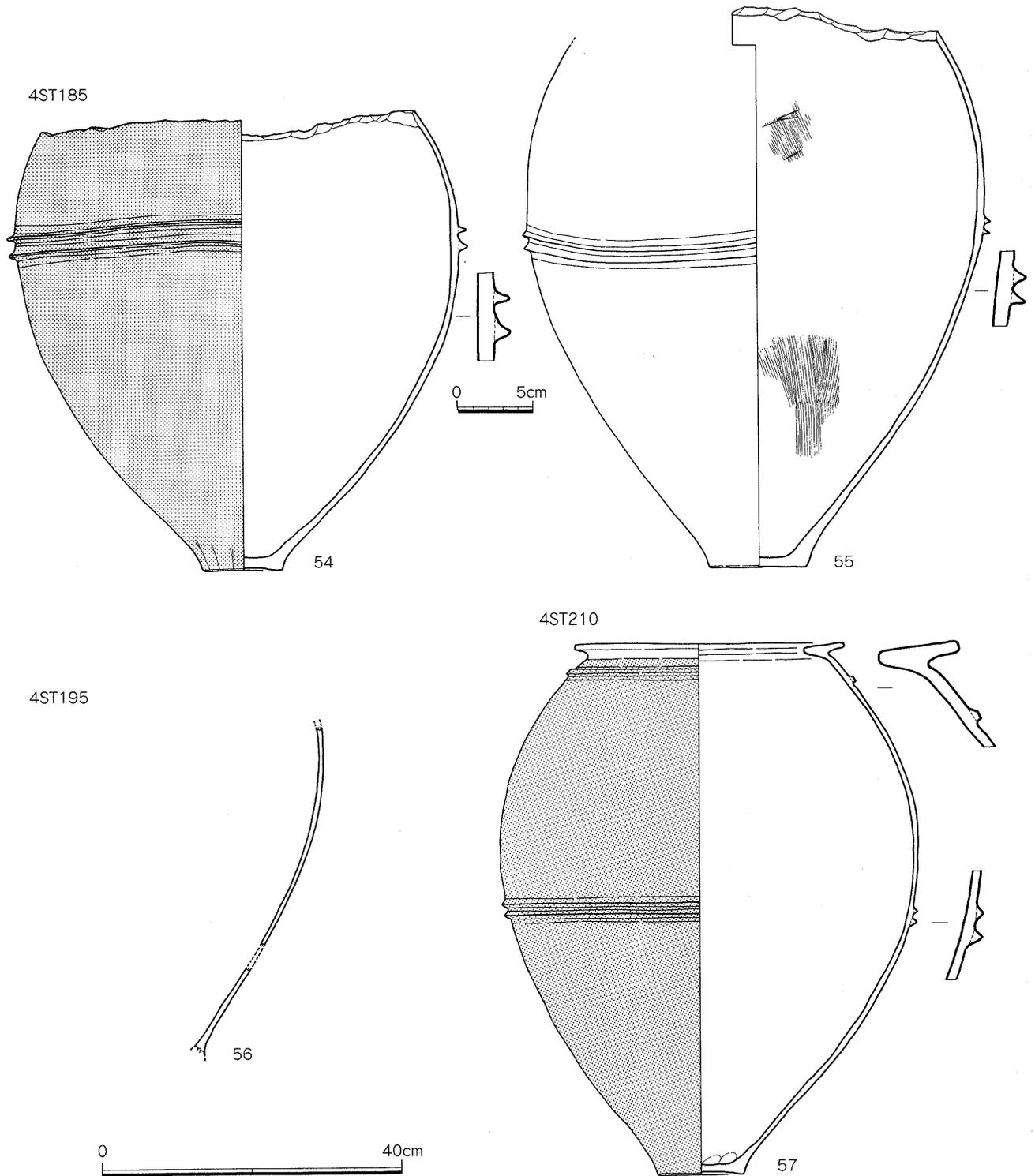


図43. 甕棺墓出土遺物実測図(9) (S=1/4・1/8)

調整は不明である。外面の胴部には煤が付着しており、煮沸具として使用後甕棺に転用している。

【形成時期】不明である。

4ST210 (図43 - 57)

弥生土器

甕 (57) 中型のいわゆる丸みをおびた甕棺である。口縁部から底部まで残存しているが、胴部上半の全周約1/3を欠損する。口縁部下に断面M字状(コの字状)の突帯を、胴部最大

径よりやや下位に二条の三角突帯をヨコナデによって貼り付ける。口縁部下できれいに割れていることから、口縁部の直下まで粘土帯を積み上げたのち、口縁部を積み上げたと考えられる。白っぽい精良な胎土である。外面は全体的に褐色を呈するが、黒塗りによるものか、もしくは意図的な褐色化の結果かは判断が難しい。

【形成時期】 中期中頃 (K III a 式) であると思われる。

4ST240 (図 44 - 58・59)

弥生土器

**甕 (58・59)** 58 は中型の甕 1a である。胴部の一部、底部の全周約 1/3 ほどを欠損する。口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデで仕上げている。外面は口縁部から胴部下半まで煤が付着しており、煮沸具として使用後、甕棺へと転用されたと考えられる。59 は中型のいわゆる丸みをおびた甕棺である。口縁部から頸部にかけて器体全周の約 1/2、胴部 1/4 ほどを欠失する。胴部最大径部位に二条の小さな三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内面はナデ仕上げだが、刷毛目調整工具の起点痕が胴部中位に観察できる。外面は褐色を呈するが、黒塗りによるものか、意図的な褐色化作用の結果かの判断は難しい。

【形成時期】 中期前半 (須玖 I 式新段階・K II c 式) である。

c-3. 甕棺【大型棺】

4ST030 (図 45 - 60)

弥生土器

**甕 (60)** 大型の甕棺である。胴部突帯から上位は丸みを帯びず、直線的に立ち上がる。口縁

4ST240

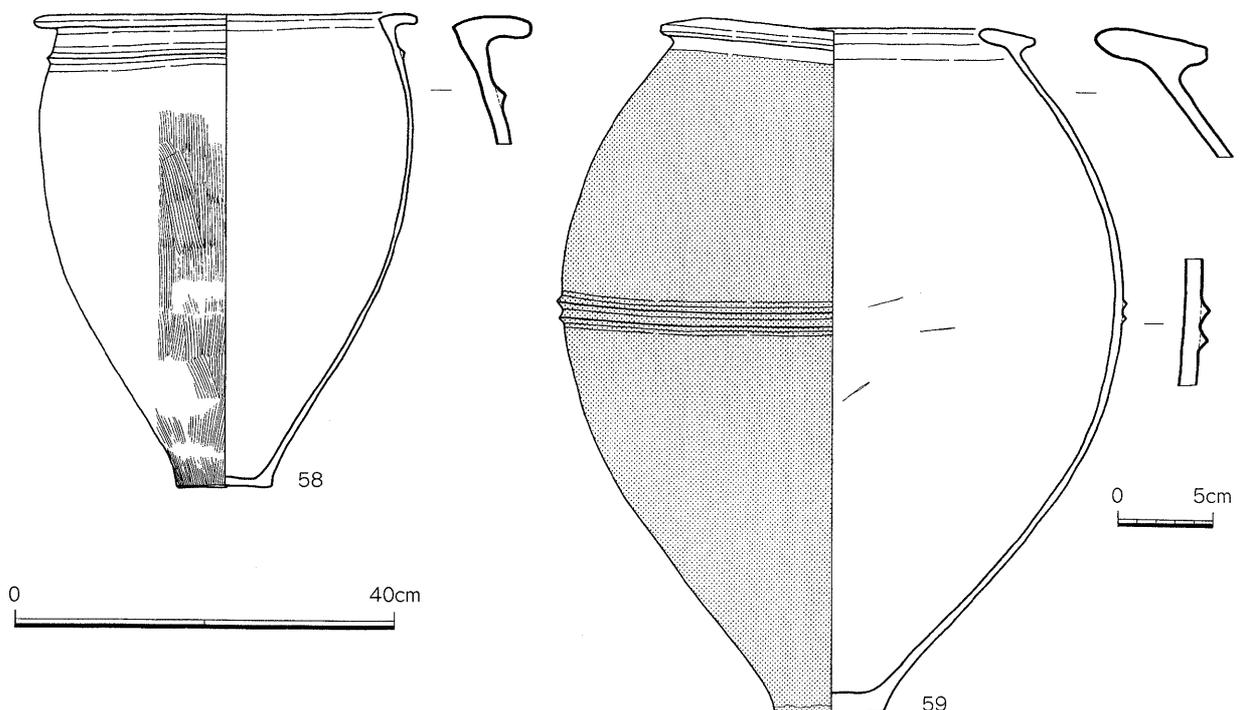


図44. 甕棺墓出土遺物実測図(10) (S=1/4・1/8)

部を欠き、胴部上半も器体全周の約1/2ほどを欠損している。胴部中位には二条の三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面の胴部下半には縦方向のナデの痕跡が観察され、内面もナデ調整と考えられる。外面の褐色化は、黒塗りによるものの可能性が強い。

【形成時期】 中期前半から中頃（KⅡc～KⅢa式）であろう。

4ST050（図45-61・62）

#### 弥生土器

**鉢**（61） 鉢aである。口縁部から底部まで残存しているが、器体全周の約1/3を欠失する。口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内面には指頭圧痕列が観察され、粘土帯の圧着にともなうものであることが明らかである。また、内面の口縁部より下方10cm弱程度の部位を境として上位と下位とではナデの方向が異なる。上位は横方向、下位は縦方向である。

**甕**（62） 大型の甕棺である。口縁部を全周の約1/3ほど欠失するが、ほぼ完形である。口縁部下に三角突帯を、胴部中位よりやや下位に二条の三角突帯をヨコナデにより貼り付ける。外面胴部には棒状の工具によるタタキの痕跡が認められる。また、外面底部には刷毛目が残存する点から、タタキで成形の後、刷毛目調整をおこない、ナデ仕上げられたことが判明する。また、内面は、胴部突帯部位の上下でナデの方向が異なる（上位：横方向、下位：縦方向）。このことから、胴部下半を鉢状に成形した後、内外面を調整して半乾燥させて、その後胴部上半の成形をおこなったものと考えられる。内外面ともかなり橙色が強い。

【形成時期】 中期中頃（KⅢa式）である。

4ST060（図45-63・64）

#### 弥生土器

**壺**（63） 壺であり、胴部上半を打ち欠いて棺蓋として使用している。打ち欠き部分の胴部全周の約1/8ほどを欠いている。内外面ともにナデによって仕上げられているが、内面では刷毛目調整工具の起点痕も観察できる。

**甕**（64） 64は大型の甕棺である。口縁部から胴部にかけて全周の約1/8ほどを欠損する。口縁部下に一条の三角突帯、胴部中位よりやや下位に二条の三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面には棒状工具によるタタキの痕跡が観察でき、細かい刷毛目調整による調整が行われている。

【形成時期】 中期中頃（KⅢa式）である。

4ST075（図46-65）

#### 弥生土器

**甕**（65） 大型の甕棺である。口縁部から胴部下半まで残存するが、器体全周の約1/2を欠損している。口縁部下に三角突帯、胴部下半に突出度の高い二条の三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。胴部の二条の突帯のうち、下位の突帯は先端部がやや上方に跳ね上がり気味となる特徴がある。外面の胴部上半には棒状工具によるタタキの痕跡が観察できる。また、内面には、ナデ調整の前に、かなり目の粗い刷毛目が横・斜方向に施されている。白味の強い

精良な胎土である。

【形成時期】中期中頃（KⅢa式）である。

4ST085a（図46-66）

#### 弥生土器

**甕**（66）66は大型の甕棺である。ほぼ完形である。口縁部下に端部をわずかに面取りした三角突帯、胴部中位よりやや下に二条の三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。胴部外面には棒状工具によるタタキの痕跡が観察できる。また、外面底部付近には縦方向の刷毛目調整が若干残存している。外面は黒塗りである。色調は強い橙色を呈する。

【形成時期】中期中頃（KⅢa式）である。

4ST110（図46-67・68）

#### 弥生土器

**甕**（67・68）67は大型の甕棺である。胴部下半の約1/3ほどしか残存していない。断面M字状の突帯をヨコナデによって貼り付けている。調整は内外面ともにナデ仕上げである。外面は褐色を呈しているが、黒塗りによるものか、もしくは意図的な褐色化作用によるものかの判断は難しい。68は大型の甕棺である。口縁部および胴部全周の約1/2ほどを欠損している。口縁部下には一条のコの字突帯、胴部には二条の三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。口縁部下の突帯は端部が下方へと若干拡張しており、突帯側面のヨコナデの後、突帯端部を面とりのためさらにヨコナデしたことがわかる。内外面ともにナデによって仕上げられているが、所々に刷毛目が残存していることから、刷毛目調整後ナデが施されたことがわかる。また、刷毛目調整工具の起点痕が外面の胴部上半に観察できる。外面は黒塗りである。内外面ともに橙色が強い。

【形成時期】中期中頃（KⅢa式）であろう。

4ST115（図47-69・70）

#### 弥生土器

**鉢**（69）鉢である。突帯の一部を欠損しているが、ほぼ完形である。口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面は縦・斜方向の細かな刷毛目調整である。口縁部と突帯の間に刷毛目の起点／終点痕が残存している点、突帯下位の刷毛目が突帯貼付に伴うヨコナデによって切られている点、突帯の剥離部分に刷毛目が残存している点から、胴部の刷毛目調整後、突帯を貼り付けたことが判明する。内面の底部付近はまず、縦方向に指でナデ上げた後、底部を横方向にナデ、その後、さらにやや上位から縦方向に粗い刷毛目を施している。また、粘土帯の接合部と思われる位置には圧着時の指頭圧痕が観察できる。外面は黒塗りである。

**甕**（70）大型の甕棺である。ほぼ完形である。口縁部下に三角突帯、胴部中位に二条の三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。これらの突帯はヨコナデに特徴があり、先端部が独特な形態を呈している。外面の胴部上半には棒状工具によるタタキの痕跡が観察でき、タタキの後、細かな縦方向の刷毛目調整により器面を平滑化したと思われる。外面は黒塗りである。

【形成時期】中期中頃（KⅢa式）である。

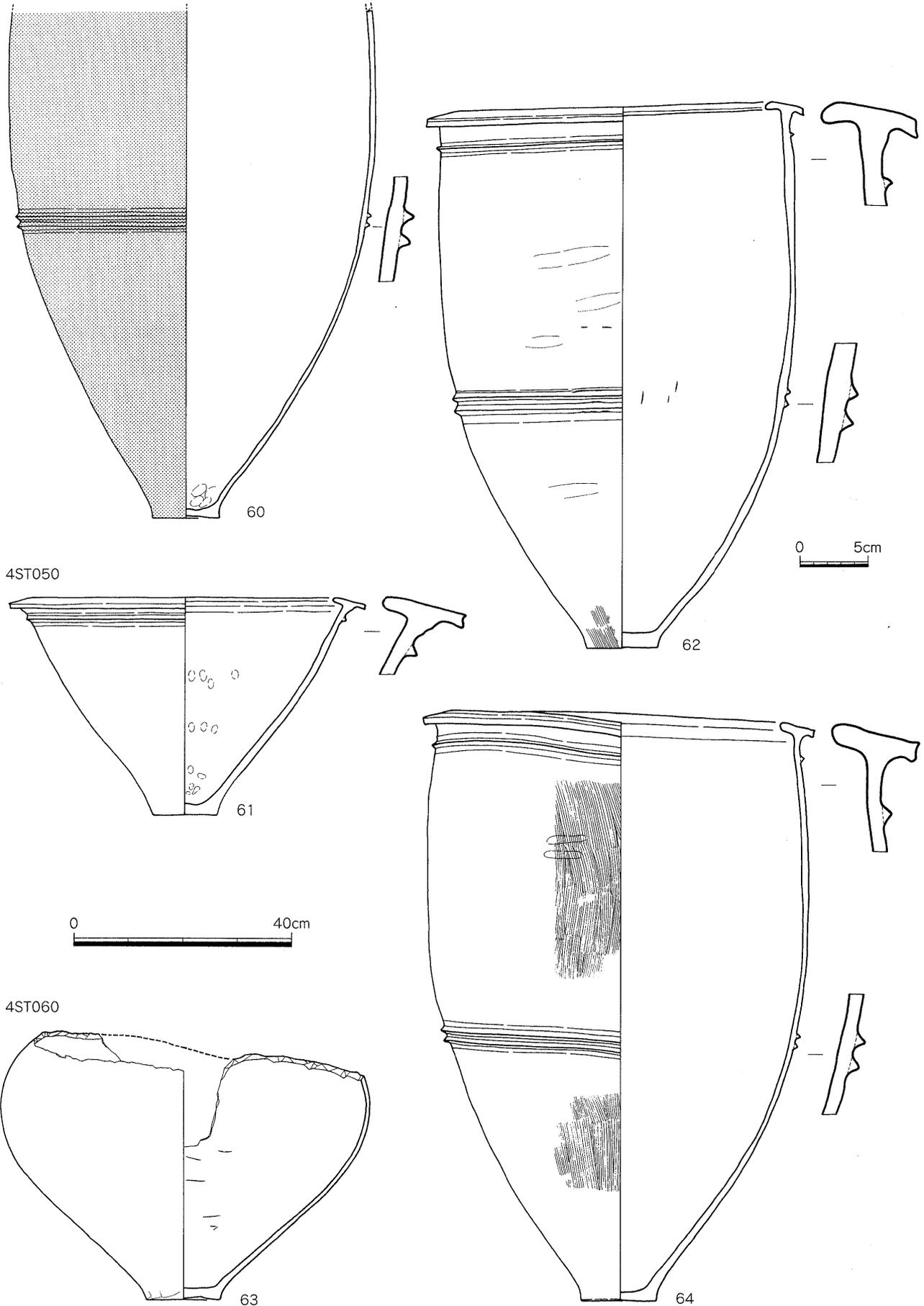
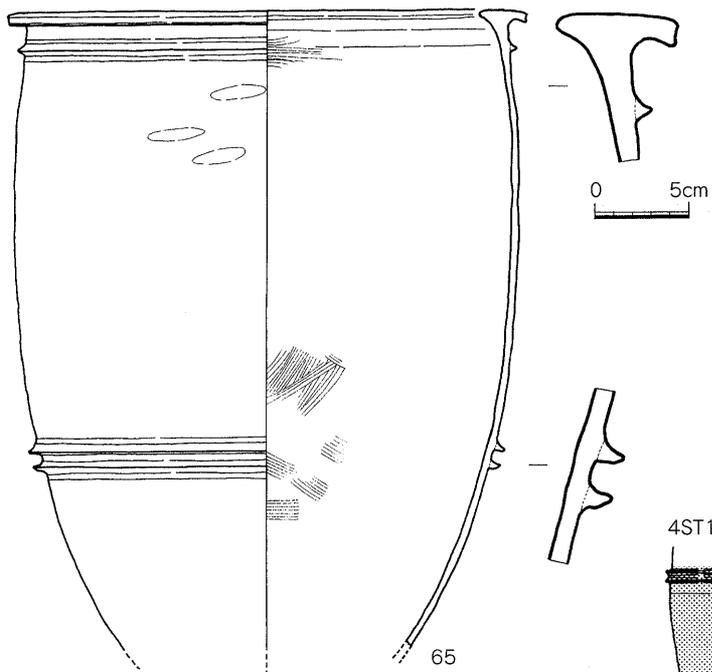
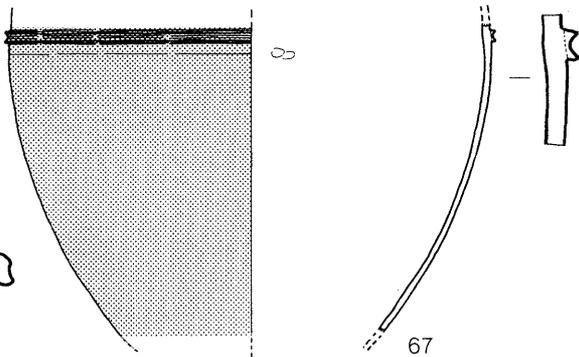


図45. 甕棺墓出土遺物実測図(11) (S=1/4・1/10)

4ST075



4ST110



4ST085a

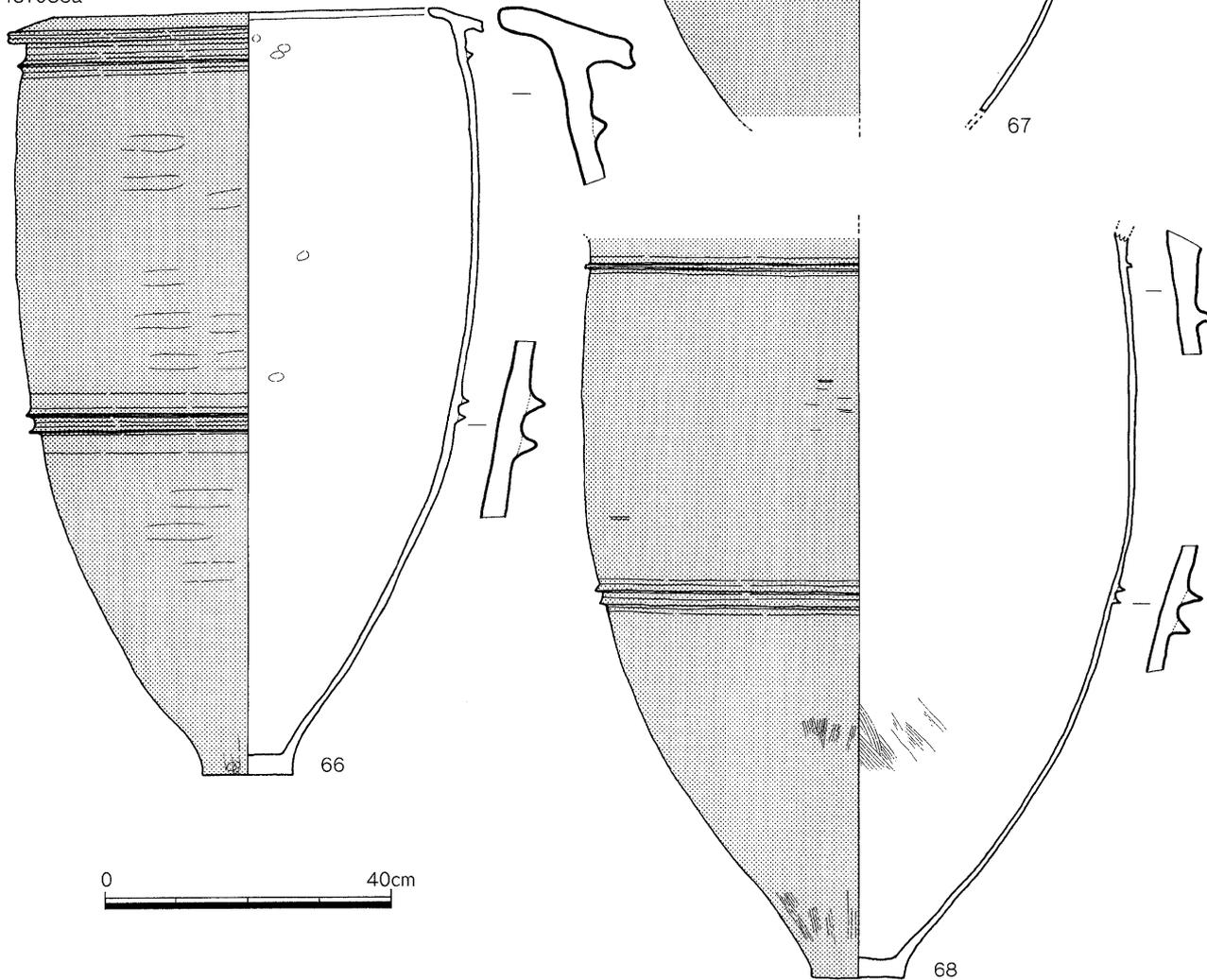


图46. 甕棺墓出土遺物実測図(12) (S=1/4·1/10)

4ST115

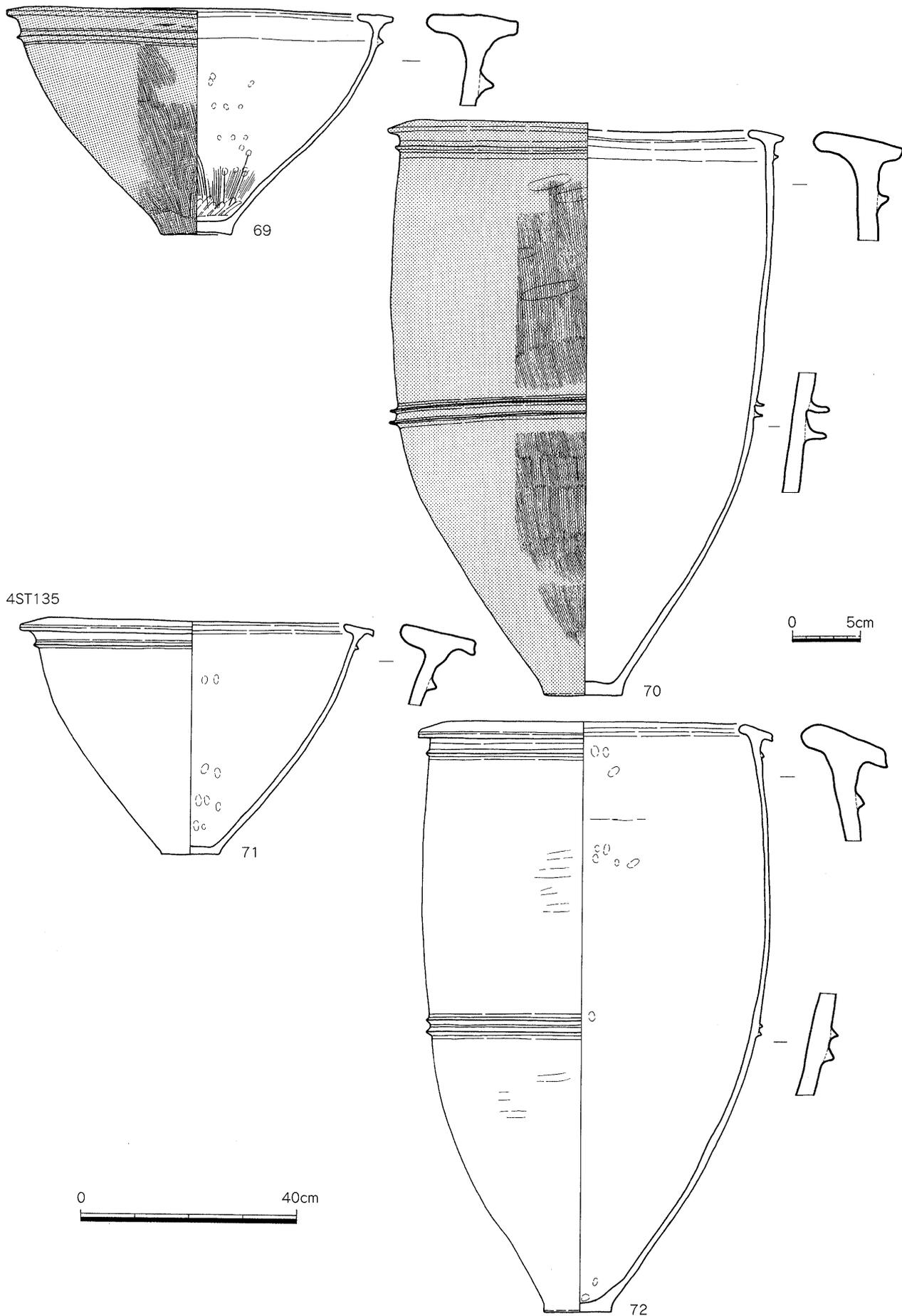


图47. 甕棺墓出土遺物実測図(13) (S=1/4·1/10)

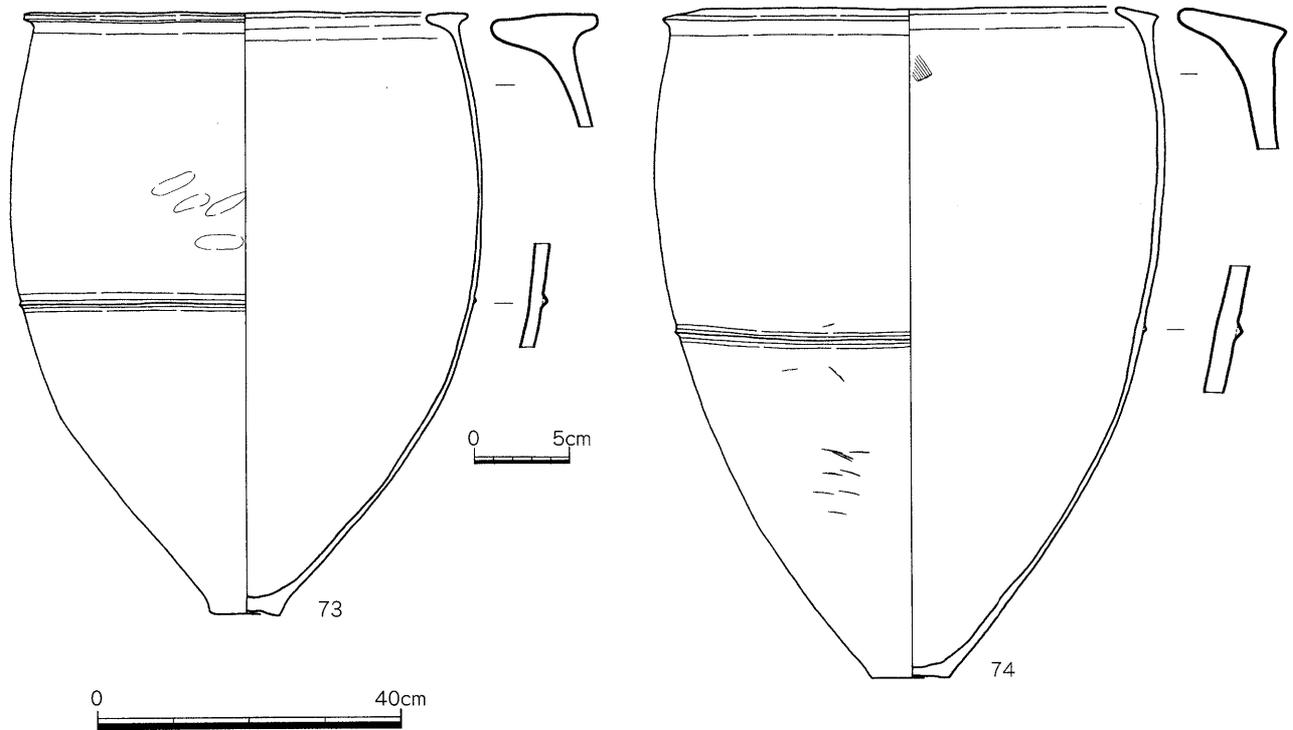
4ST135 (図 47 - 71・72)

弥生土器

**鉢 (71)** 鉢 a である。完形である。口縁部下に三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。器面調整は内外面ともナデによる仕上げである。内面には粘土帯の接合部と思われる位置に指頭圧痕が観察できる。

**甕 (72)** 大型の甕棺である。完形である。口縁部下に三角突帯、胴部中位に二条の小さな三角突帯をヨコナデによって貼り付ける。外面には棒状工具によるタタキの痕跡が観察できる。

4ST180



4ST190

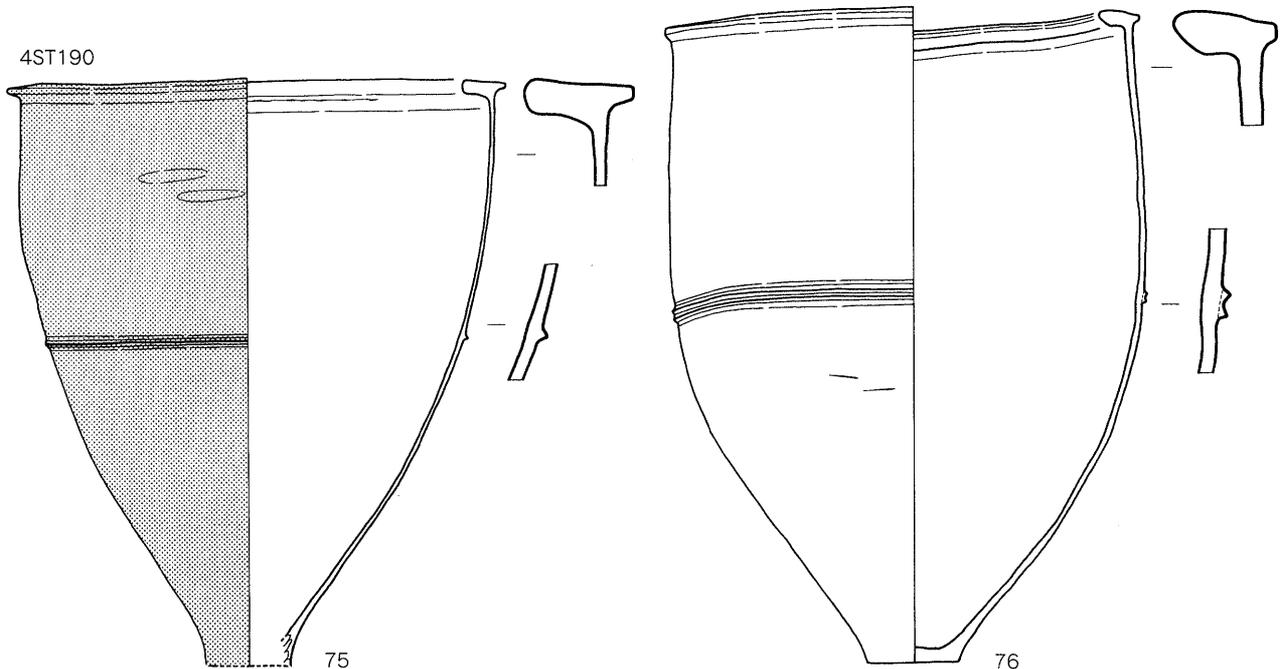


図48. 甕棺墓出土遺物実測図(14) (S=1/4・1/10)

内面はナデ仕上げているが、刷毛目調整工具の起点痕も観察できる。

【形成時期】 中期中頃 (K III a 式) である。

4ST180 (図 48 - 73・74)

弥生土器

甕 (73・74) 73 は大型の甕棺である。ほぼ完形である。胴部中位に小さな三角突帯をヨコナデにより貼り付ける。胴部上半には棒状工具によるタタキの痕跡が観察できる。74 は大型の甕棺である。ほぼ完形である。口縁部の外面側への張り出しは非常に小さい。胴部中位には小さな三角突帯をヨコナデにより貼り付ける。内外面はナデにより仕上げられているが、所々に刷毛目調整工具の起点痕が観察される。

【形成時期】 中期前半 (K II b 式) である。

4ST190 (図 48 - 75・76)

弥生土器

甕 (75・76) 75 は大型の甕棺である。胴部中位から下半にかけての器体全周の約 1/3 と底部を欠失する。口縁部は大きく内側に張り出している。胴部中位に小さな三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。また、外面の胴部上半には棒状工具によるタタキの痕跡が観察できるが、その後内外面ともにナデ仕上げている。外面は黒塗りである。76 は大型の甕棺である。ほぼ完形である。口縁部は内側に大きく張り出す。胴部中位にはいわゆる作り一条見かけ二条の突帯がヨコナデによって貼り付けられている。内外面ともにナデ仕上げであるが、外面には刷毛目調整工具の起点痕も観察できる。

4ST200

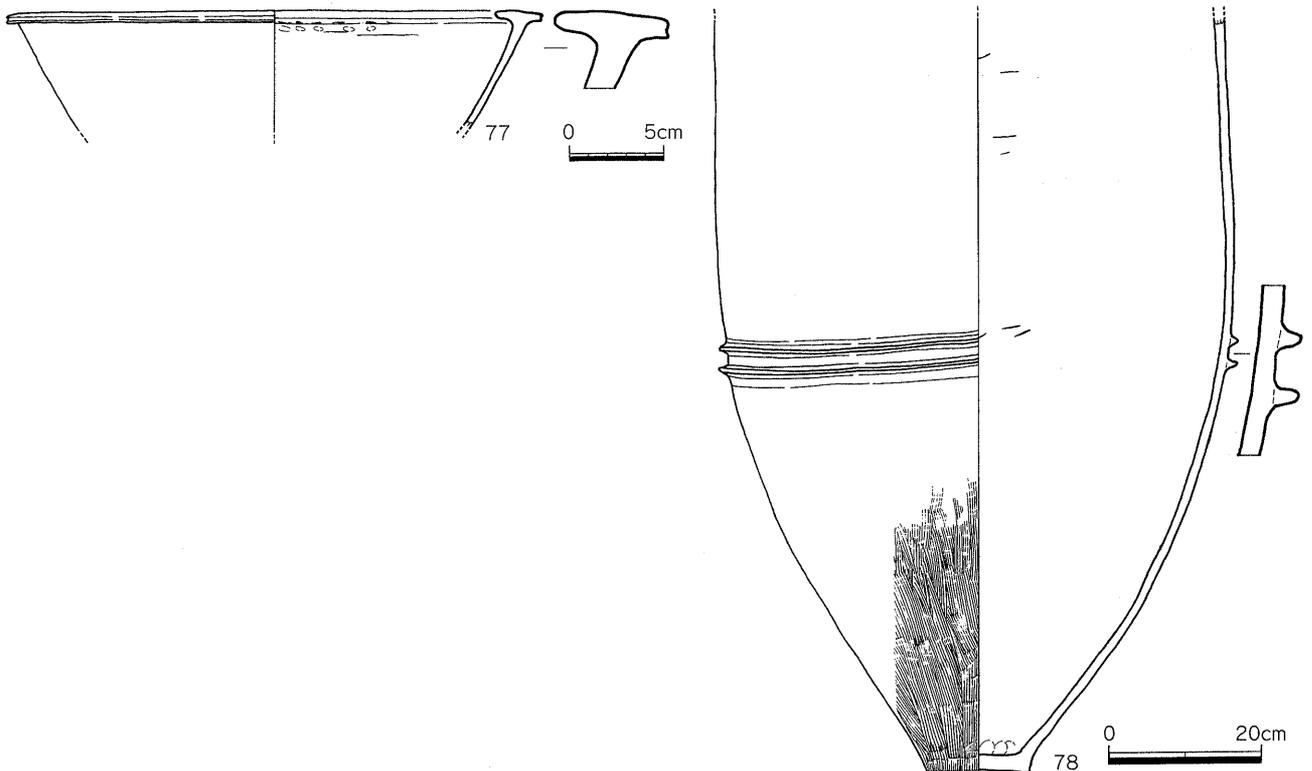


図49. 甕棺墓出土遺物実測図(15) (S=1/4・1/10)

【形成時期】 中期前半 (K II b 式) である。

4ST200 (図 49 - 77・78)

**弥生土器**

**鉢 (77)** 鉢 a である。口縁部から胴部上半にかけての全周約 1 / 4 が残存する。内外面ともにナデ調整である。

**甕 (78)** 大型の甕棺である。口縁部を欠損するが、胴部以下はほぼ完形である。胴部中位よりやや下方に突出度の高い三角突帯を二条ヨコナデによって貼り付けている。外面の胴部下半には刷毛目調整が残存している。また、内面はナデで仕上げているが、刷毛目調整工具の起点痕が観察される。77・78 とも白味の強い精良な胎土である。

【形成時期】 中期中頃 (K III a 式) であろう。

**d. 土坑**

4SK026 (図 50 - 1)

**弥生土器**

**壺 (1)** 壺 1b である。口頸部の約 1 / 10 ほど残存している。内外面とも丹塗りで、外面には縦方向のミガキ、内面には横方向のミガキが施されている。

【形成・埋没時期】 1 から須玖 II 式段階であると思われる。

**e. その他の遺構**

**e-1.ST115 堆積土中出土遺物 (図**

51 - 1 ~ 4)

遺構内堆積土中から出土したもので、遺構崩壊によって上位にあった、土器が混入したものと考えられることから、ここでは、甕棺としては扱わず、堆積土出土遺物として記述する。

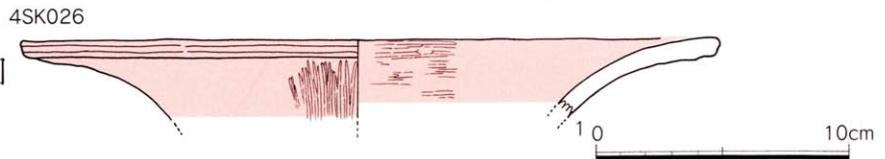


図50. 土坑出土遺物実測図 (S=1/3)

**弥生土器**

**甕 (1 ~ 4)** 1 と 2、3 と 4 はそれぞれ胎土や色調から同一個体の可能性がある。1 は小型の甕 1a である。口縁部から胴部上半にかけて残存しているが、全周の約 1 / 2 ほどを欠損している。口縁部は、断面観察から、くの字に折り曲げた後、内面に粘土紐を貼り付けて成形していることがわかる。外面は縦方向の刷毛目を施した後、上半はナデによって仕上げられている。内面はナデが施されているが、刷毛目調整工具の起点痕が確認でき、刷毛目を施した後ナデ仕上げられたことがわかる。2 は甕で、胴部から底部にかけて残存しているが、全周の約 1 / 2 を欠損している。図上復元のため、胴部径が 1 とは異なるが、1 の胴部下半の可能性がある。3 は甕 1a で口縁部から胴部中位まで残存している。器面は風化しており、詳細は不明であるが、おそらく内外面ともナデによって器面調整がなされているものと思われる。4 は底部であるが、胎土や色調等から 3 の底部の可能性がある。底部の形態および成形方法より須玖 I 式新段階以降と思われる。外面には刷毛目工具の動きは下位→上位の方向である。

【形成時期】 中期前半 (須玖 I 式新段階) のものである。

e-2. 小穴、凹み

4ST150 (堆積土中)

4SX007 (図 52 - 1)

古式土師器

高坏 (1) 高坏 1a × 2a の坏部片で、精緻な横ミガキが施される。

4SX009 (図 52 - 2)

弥生土器

壺 (2) 壺 1b の口縁部で、内外面とも丹塗りである。

4SX011 (図 52 - 3・4)

古式土師器

鉢 (3) 鉢 1 である。

甕 (4) 甕 4 である。肩部の沈線は刷毛目を切っており、刷毛目調整の後に施されている。煤が口縁部と胴部中位に付着している。

4SX012 (図 52 - 5)

弥生土器

甕 (5) 甕 1a の口縁部片である。

4SX013 (図 52 - 6)

弥生土器

甕 (6) K III a 式の甕棺の口縁部片である。

4SX016 (図 52 - 7)

古式土師器

甕 (7) 甕 4 の口縁部片である。口縁部は直線的で口唇部を若干つまみあげるものである。

4SX018 (図 52 - 8)

弥生土器

甕 (8) 中型の丸みをおびた甕棺で K II b × K II c 式に属

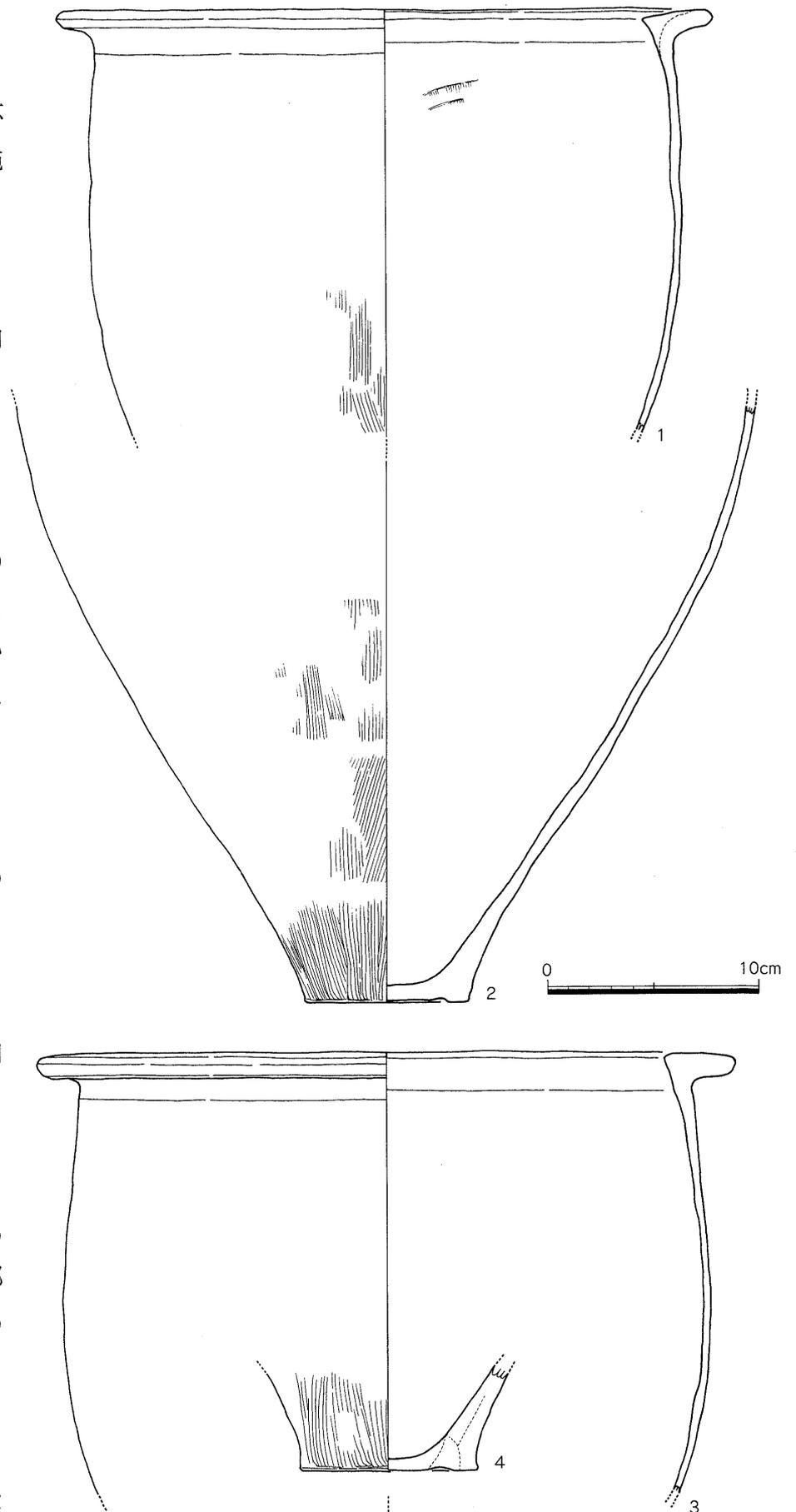


図51. 甕棺墓堆積土中出土遺物実測図 (S=1/3)

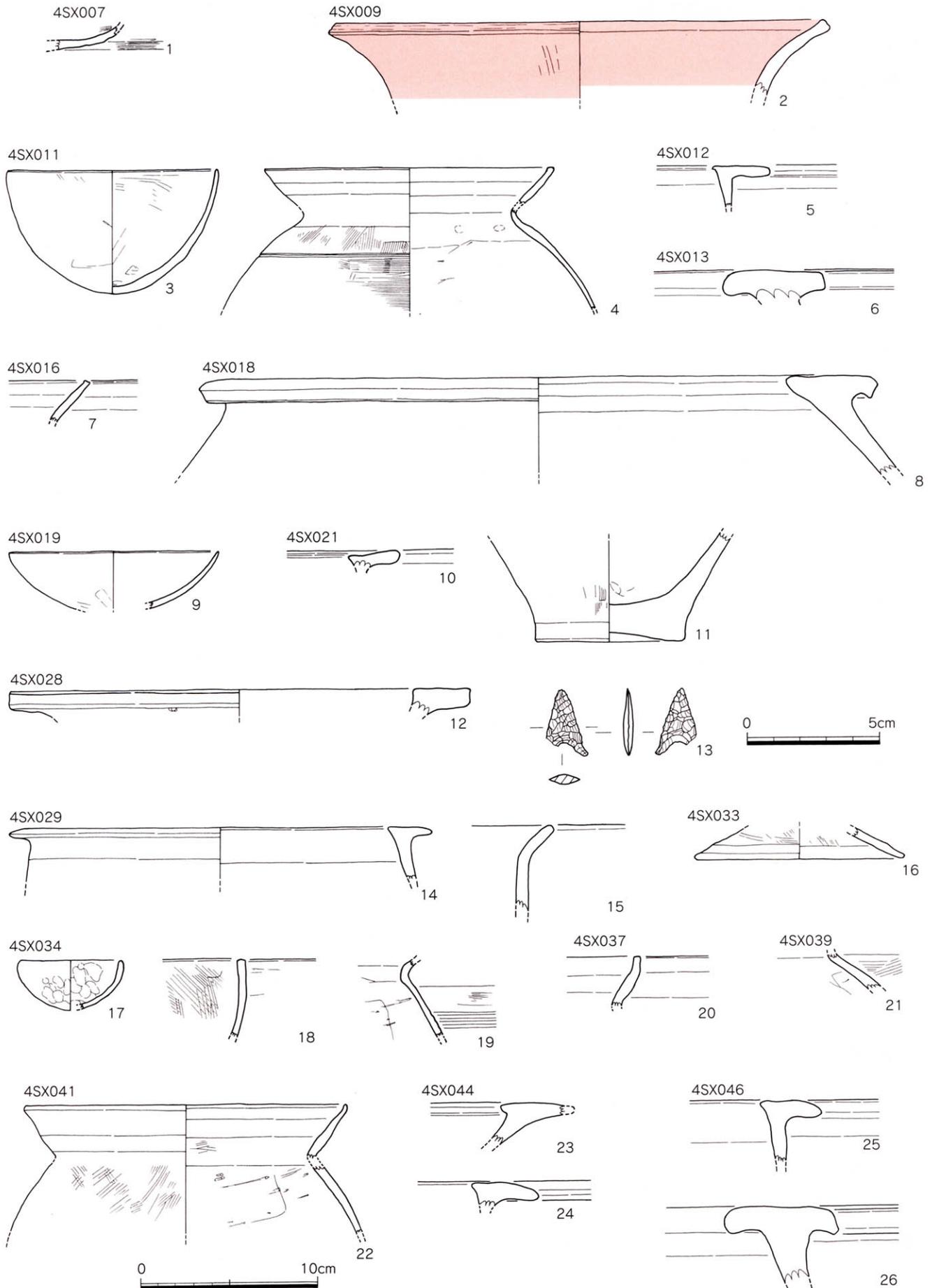


図52. その他の遺構出土遺物実測図(S=1/2・1/3)

するものである。口縁部の約1/8が残存している。口縁部はヨコナデ調整が施されている。

**4SX019** (図 52 - 9)

**土師器×瓦器**

**丸底坏×椀** (9) 土師器の丸底坏あるいは瓦器椀であると思われる。約1/7程度残存している。器面は風化しているが、僅かにミガキが確認される。白色の胎土である。時期は平安時代後期(大宰府XⅡ期)と考えられる。

**4SX021** (図 52 - 10・11)

**弥生土器**

**甕** (10・11) 10は甕1aの口縁部片であり、11は甕の底部である。

**4SX028** (図 52 - 12・13)

**弥生土器**

**壺** (12) 壺1aの高坏aの口縁部片である。

**石製品**

**石鏃** (13) 黒曜石製の打製石鏃である。基部に4.5mmの抉りが入り、凹基式である。脚部は片方を欠損するが、やや外反する形状を呈している。また、先端もごくわずかに欠損している。

**4SX029** (図 52 - 14・15)

**弥生土器**

**甕** (14・15) 14は甕1aで、口縁部の約1/10が残存している。15は、くの字口縁の甕であるが、口縁部破片であり、詳細は不明である。

**4SX033** (図 52 - 16)

**土師器**

**脚部** (16) 土師器の脚部と考えられる。約1/4程度残存している。

**4SX034** (図 52 - 17 ~ 19)

**古式土師器**

**鉢** (17・18) 17は手づくね土器で器面には指頭圧痕が多数観察できる。18は鉢1で口縁部破片である。

**甕** (19) 甕4の胴部片である。肩部には櫛状工具による平行沈線文が施され、内面にコゲが付着している。

**4SX037** (図 52 - 20)

**古式土師器**

**甕** (20) 甕4の口縁部片である。外面に煤が付着している。

**4SX039** (図 52 - 21)

**古式土師器**

**甕** (21) 甕4の胴部片で、煤が付着している。

**4SX041** (図 52 - 22)

**古式土師器**

甕 (22) 甕 3×4 で口縁部から胴部上半の約 1 / 7 が残存している。口縁部は直線的で口唇部を少しつまみあげている。肩部には横方向の刷毛目が施されておらず、形式的には古い様相を示す。

4SX044 (図 52 - 23・24)

弥生土器

高坏 (23) 高坏 a の口縁部片である。

甕 (24) 甕 1a の口縁部片である。

4SX046 (図 52 - 25・26)

弥生土器

甕 (25・26) 25 は甕 1a の口縁部片である。26 は K Ⅲ a 式の甕棺の口縁部片である。

f. 土層

表土 (図 53 - 1)

表土からは図化したものの他に、縄目タタキの平瓦や格子目タタキの丸瓦が出土している。

須恵器

坏 (1) 坏身である。口縁部から胴部にかけてのうち約 1 / 6 残存している。時期は古墳時代後期であるが、表土の時期を示すものではない。

黒灰土 (図 53 - 2・3)

黒灰土からは図化したものの他に、縄目タタキ・格子目タタキの平瓦・軒丸瓦・丸瓦、奈良時代の須恵器の鉢 b・高坏・坏・坏身、土師器の坏 d など出土している。

須恵器

坏×皿 (2) 坏×皿である。口縁部約 1 / 10 残存している。時期は平安時代前期である。

土師器

坏 (3) 坏 a である。底部片で時期は平安時代前期である。

【埋没時期】 この他にも多数の出土遺物があるが、これらの遺物から、黒灰土はおおよそ平安時代前期以降に堆積したものと思われる。

E. 小結

検出できた遺構を整理すると、最も古期に位置づけられる遺構は、弥生中期に位置づけられる甕棺墓群で小型棺 19 基、中型棺 15 基、大型棺 11 基を検出し、国分域において最もまとまった甕棺墓群が周辺に展開していることが明らかとなった。これまで国分域においては、当該遺跡群の東部に位置する筑前国分尼寺跡、陣ノ尾遺跡において小型棺の展開は確認できていたが、大型棺も含めた甕棺墓の展開は、太宰府市域においては南部に位置する吉ヶ浦遺跡の調査以来のことであった。今次調査にお

表土  
ける甕棺墓調査は、担当者の認識不足から十分な情報を得ることができなかつた。したがって、後に調査を実施する周辺調査に

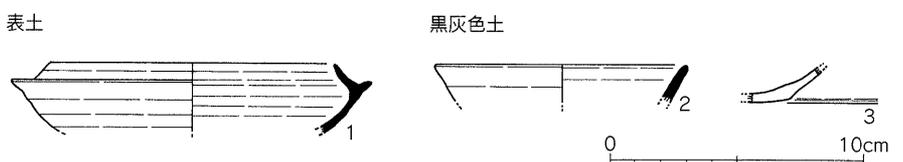


図53. 土層出土遺物実測図(S=1/3)

において収集した情報とは明らかに劣る内容となっている。例えば、国分松本遺跡第7次調査にて確認した整地層と甕棺墓との関係が、今次調査地まで展開していたかどうかの情報、棺内堆積土に関する情報が欠如している。

ついで、弥生後期終末から古墳前期初頭に位置づけられる竪穴住居と、堆積土の最下層の形成時期から同時期に形成されたと考えられる溝がある。竪穴住居に関しては、報告文にて記述してきたように、残存状況が極めて悪く、用途を限定する情報収集ができていない。また溝については、後述する国分松本遺跡第7次調査にて検出した溝7SD235、7SD265、7SD290、7SD375へ接続するものと考えられる。今次調査で検出した溝4SD001は、最上層から須恵器杯が出土しており、帰属型式から神ノ前2号窯跡出土杯と同一型式と考えられ、想定される実年代としては6世紀末から7世紀初頭の時間幅内の一点が考えられる。溝の性格に関しては、断面V字状を呈していることから人為性が高いが、集落を防衛のための施設かどうかは、今次調査周辺の調査成果を加味しても明らかにし難い。

この後、奈良期の東西溝の形成まで人為的営みは検出できていない。奈良期の東西溝は、その位置から鏡山推定条坊案の外に位置しており、かつ条坊痕跡と異なって一条のみの確認であることから、条里痕跡の可能性はある。しかし太宰府において条里遺構の明確な検出例がないこと、特に当該遺跡群周辺での検出例がないことから、設計規則が明らかでなく、4SD022の性格を確定するには至っていない。これを初例として今後の事例増加後検証を行ってゆきたい。

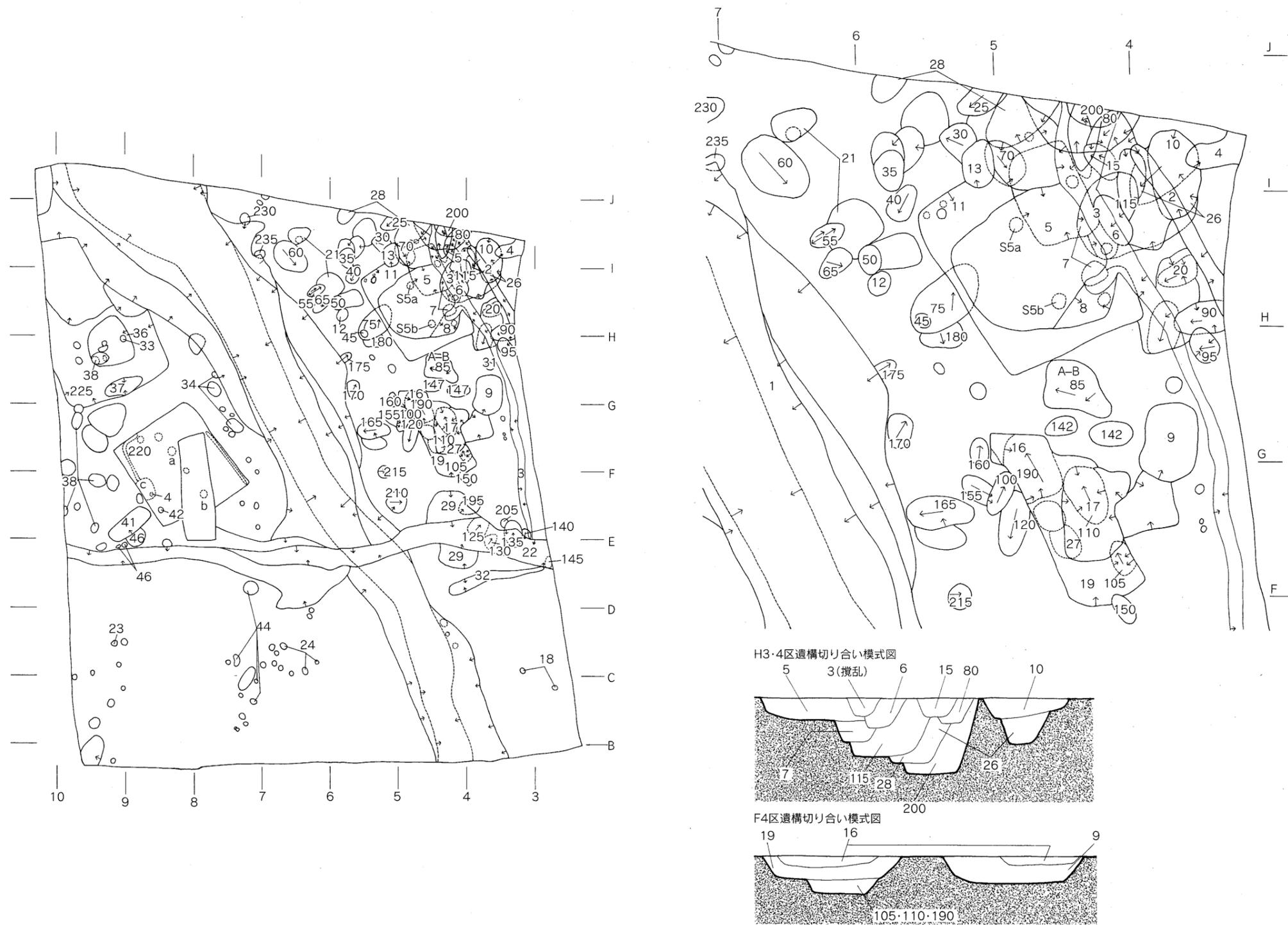


図54. 松本遺跡 第4次調査遺構略測図・土層模式図

## 2. 国分松本遺跡 第5次調査

### A. 調査に至る経過

調査地である太宰府市国分1丁目425-9、425-11、425-12、425-14において、平成8年7月22日に貸店舗建設を土地利用目的として埋蔵文化財取り扱いに関する問い合わせがなされた。周辺にて弥生時代の集落および墓が確認されていることから、当該地においても遺跡が確認される可能性が極めて高いと判断され、土地利用目的および建物設計などから埋蔵文化財取り扱いについて協議が必要となり、問い合わせ者である大和ハウス工業と協議を重ねた結果、保護法57条の提出により判断が必要と考えられたため、計画図とともに保護法57条の2の届出を

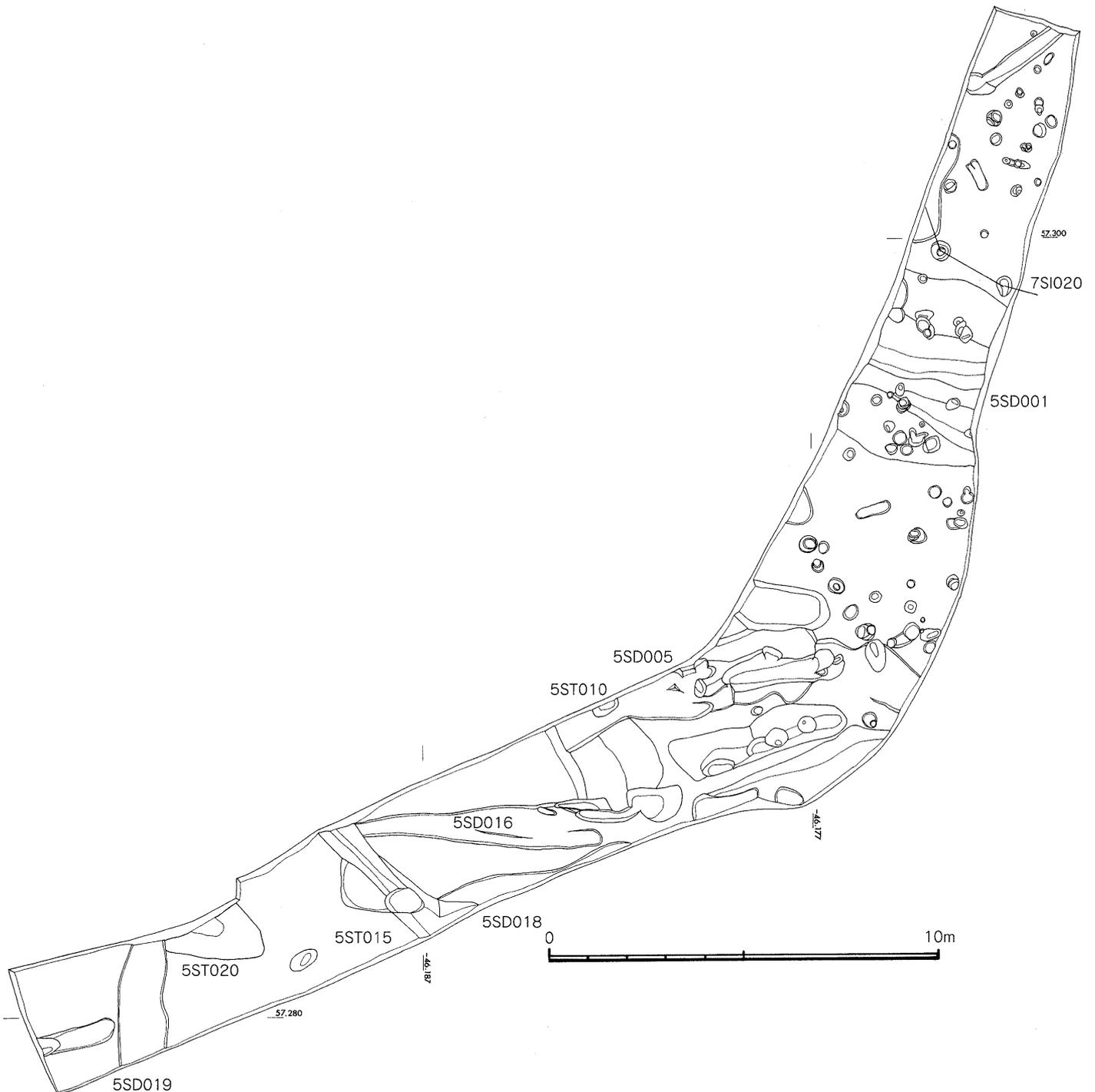


図55.松本遺跡 第5次調査 遺構配置図

求めた。提出された図面からは、遺跡破壊は確認できなかったことから、対象地全域に関する記録保存の必要性は見られなかったが、対象地の南に計画されている正尻一紺町線道路との境界部分について、記録保存のための調査が必要と判断され、協議を重ねた結果、平成8年11月26日～平成9年1月10日にかけて調査を行った。対象地面積は990 m<sup>2</sup>、調査面積は140 m<sup>2</sup>を測る。調査は中島恒次郎が行った。

**B. 基本土層 (図 56)**

約0.6mの耕作土が検出され、その下位に0.1mほどの黒茶色土の遺物包含層が観察できた。この遺物包含層下に遺構が検出された。遺構形成面は、黄色土であり安定した基盤層に遺構が形成されている。遺構検出時の土層としては、黄灰色土および調査区南西部については茶灰色砂層が堆積していたことから、この土色名で遺物を取り上げている。

**C. 遺構**

**a. 竪穴住居**

調査途上では竪穴住居の存在は確認していなかったが、その後隣地を調査した国分松本遺跡第7次調査において、円形の配される支柱穴が確認でき5次調査区まで展開することが明らかとなった。詳細については、7次調査報告において詳述する。

**b. 溝**

隣地である国分松本遺跡7次調査地（以下「7次調査」と記載）からの延長部分であると考えられる遺構が検出できている。お顕著な遺物の出土がなかったことから遺構番号を付与しなかったが調査区南において7次調査にて検出した7SD070の延長溝を検出している。

**5SD001**

調査区北半部にて検出した溝で、隣地である7次調査にて検出した溝7SD001主流と同一の遺構と考えられる。断面形状は、当該調査区においては台形を呈してお

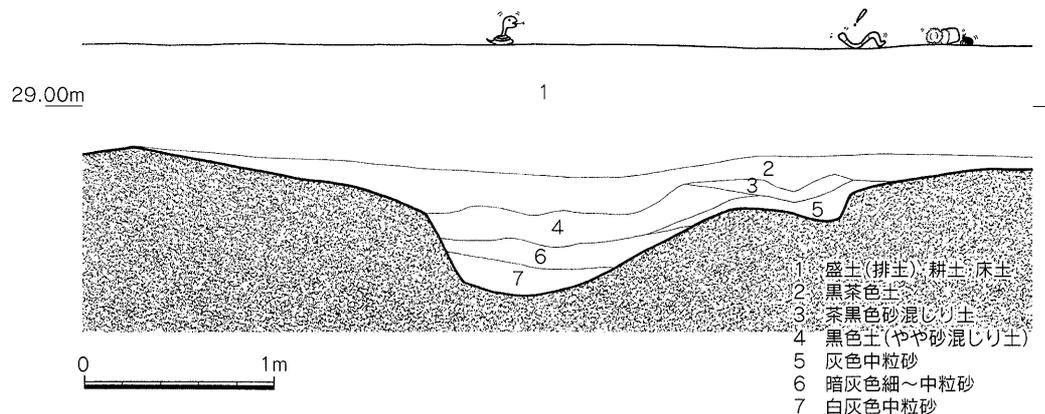


図56. 溝 (5SD001) 土層実測図

り、短軸長4.91mを測り、検出できた深さは0.76mを測る。溝内の堆積状況の観察では、下位には砂が堆積し、上位へゆくにつれて細粒化傾向にある。ただし中間層として5層には粗い中粒砂が堆積しており、5SD001の堆積環境復原としては、常時水の流れが想定でき、次第に管理されなくなった後、自然に放置されたものと考えられる。

**5SD005**

調査区中央部にて検出した溝で、隣地である7次調査で検出した7SD001枝流の西側延長部分と考えられる。短軸長2.35mを測る。遺構残存状況から調査区東では溝が欠失しており、

7SD001 枝流と不連続であるかのように見えるが、相互の遺構配置から同一遺構であると考えられる。溝内の堆積土は、下位が灰色中粒砂が上位が黒茶色土が堆積しており上方細粒化が看取できた。

### 5SD016

5SD005 の南に接して検出した溝で、調査上別遺構として認識しておいたが、報告にあたっては、5SD005 の分岐に伴う同一遺構であると考えられる。遺構の残存状況から、溝底部分の凹凸による分岐であると解される。溝内の堆積層は、下位が灰色の中粒から細粒砂で上位が茶色土が堆積しており、上方細粒化傾向であることが観察できた。

### c. 墓

#### c-1. 甕棺墓【小型棺】

##### 5ST015( 図 57)

調査区南端部にて検出した小型棺で、土器形状から甕および壺を用いたものと考えられる。遺構残存状況は、棺上半が欠失するなどそのほとんどが無くなっているものと考えられる。遺構観察から上下の弁別は困難であるが、土器状況から見ると甕が下位で壺が上位になる可能性はある。検出長軸長は、0.86m、短軸長は 0.48m、検出深さは 0.17m を測る。土器棺は、基盤層直上に埋置され、土器同士には接着剤としての粘土は観察できなかつた。

5ST015

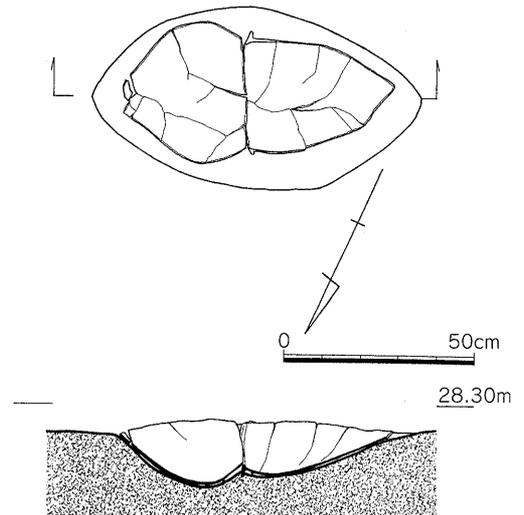


図57. 甕棺墓遺構実測図(1)  
(S=1/20)

#### c-2. 甕棺墓【大型棺】

##### 5ST010( 図 57)

調査区中央部西端に検出した大型棺で、調査区外へ展開していることから、全形については判然としない。検出長軸長は 1.8m、短軸長は  $0.46m + \alpha$ 、検出深さは 0.3m を測る。墓壙底の傾斜から北側の棺が上位、南側の棺が下位と推定する。なお上下棺の接合部には接着剤としての白緑色粘土が用いられていた。

##### 5ST020( 図 58)

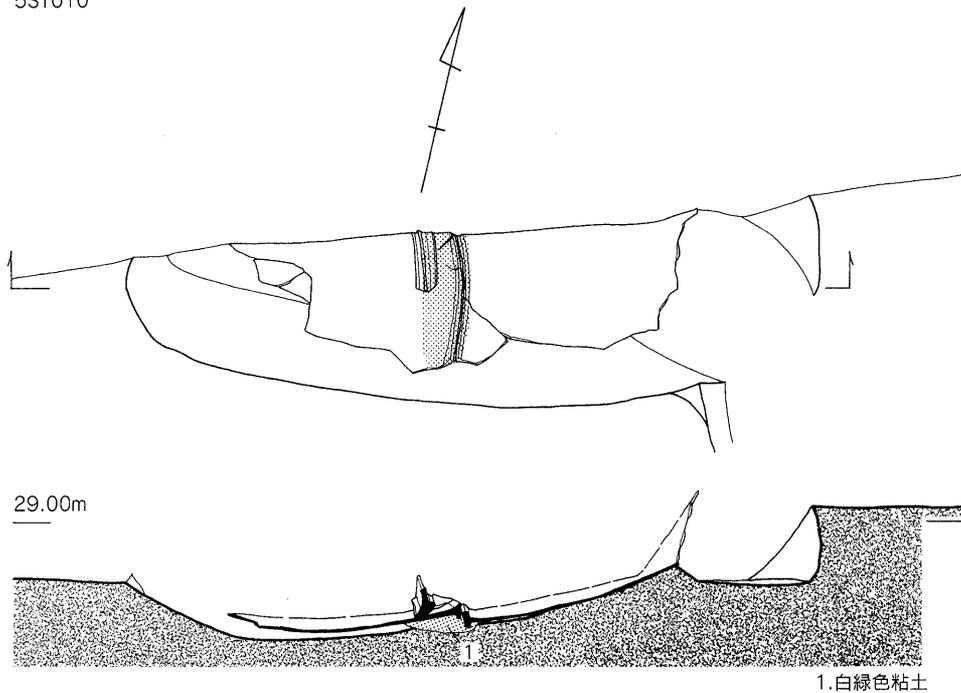
調査区南東隅に検出した大型棺で、一部調査区外へ展開していることから、全形については判然としない。推定箇所を含む検出長軸長は 2.0m、短軸長 1.12m を測り、残存する深さは約 0.61m を測る。検出された棺の状況から南東棺が上甕 (5ST020 ①)、北西棺が下甕 (5ST020 ②) と考えられ、南東側から北西へ棺が挿入されたものと考えられる。上甕と下甕の接合部には接着剤としての白緑色粘土が残存していた。なお上甕と下甕の接合部分において、棺埋置後に棺同士が開いたため、棺内部へ粘土が侵入していた。

### D. 遺物

#### a. 溝

##### 5SD001 灰茶色土 ( 図 59 - 1 ~ 4)

5ST010



弥生土器

甕 (1 ~ 4) 1 ~ 3は小型の甕 1bの口縁部片である。4は遠賀川以東系の甕 1cであり、口縁端部をヨコナデによって若干上方に跳ね上げている。

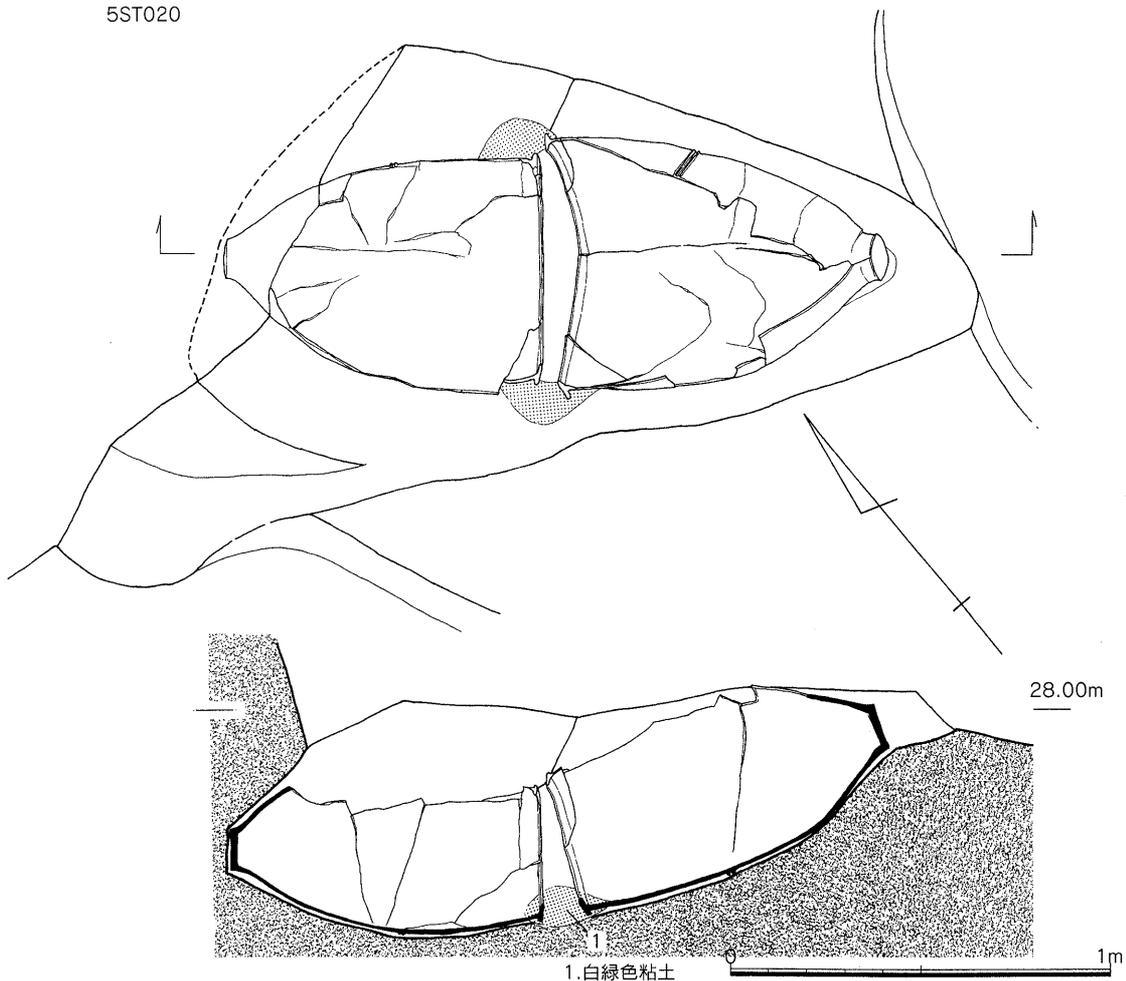
【埋没時期】中期後半(須玖Ⅱ式新段階)か。

5SD001 黒茶土 (図59-5~10)

弥生土器

壺 (5) 壺4の頸部であり、全周の約1/5ほどが残存している。間隔をあけて二条の断面M字状突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面は丹塗りである。

5ST020



甕 (6 ~ 8) 6 ~ 8は甕 1bの口縁部片であり、6は全周の1/5程度残存している。いずれも内外面摩耗してお

図58. 甕棺墓遺構実測図(2)

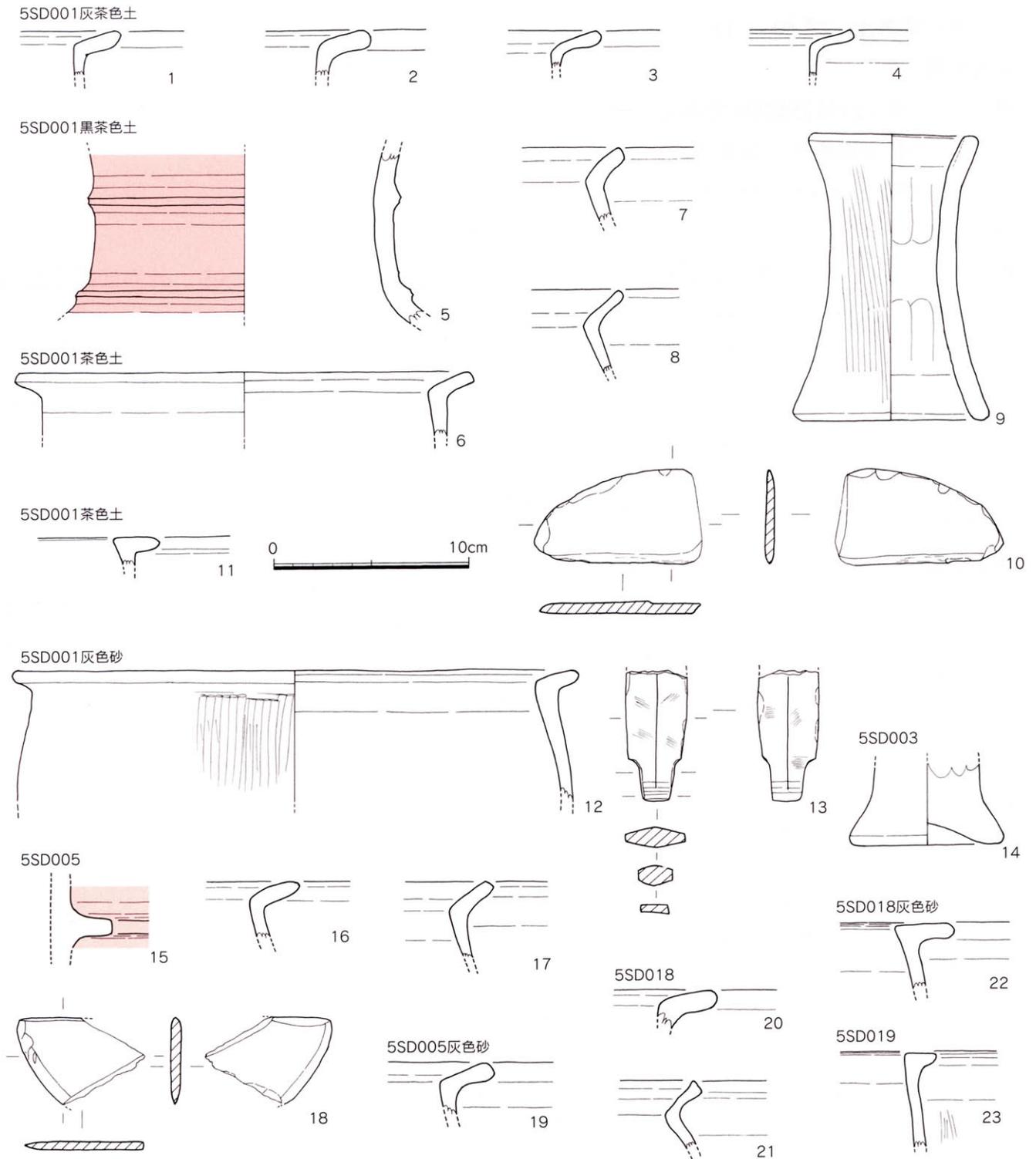


図59. 溝出土遺物実測図(S=1/3)

り、調整は不明である。

**器台 (9)** 完形の器台である。外面は縦・斜方向の刷毛目、内面は上下方向のナデで調整している。

**石製品**

**石鎌 (10)** 粘板岩製の石鎌である。先端をやや欠損している。

**【埋没時期】** 中期後半 (須玖Ⅱ式新段階) である。

**5SD001 茶色土 (図 59 - 11)**

**弥生土器**

甕 (11) 甕 1a の口縁部片である。

【埋没時期】 中期前半 (須玖 I 式古段階) である。

**5SD001 灰砂 (図 59 - 12・13)**

**弥生土器**

甕 (12) 甕 1a の口縁部から胴部上半であり、全周の約 1 / 6 残存している。外面は縦方向の粗い刷毛目、内面はナデ調整と思われる。

**石製品**

石剣 (13) 砂岩製の有茎式石剣である。断面六角形を呈している。剣としての機能を有さず再利用品の可能性もあるが、研磨面はきわめて精緻である。

【埋没時期】 中期前半 (須玖 I 式古段階) である。

**5SD003 (図 59 - 14)**

**弥生土器**

甕 (14) 甕の底部であり、全周の約 1 / 2 程度残存している。外面は摩滅しており調整痕は不明瞭だが、おそらくナデで仕上げていると思われる。2 ~ 3 ミリ程度の白色砂粒をかなり多量に含んだ胎土である。

【埋没時期】 中期初頭 (城ノ越式) である。

**5SD005 (図 59 - 15 ~ 18)**

**弥生土器**

壺 (15) 壺 3 の突帯片であるが、内面は剥落している。突帯は突出度の高いコの字状を呈する。外面は丹塗りである。

甕 (16・17) 16・17 は甕 1b の口縁部片である。

**石製品**

石包丁 (18) 粘板岩製の石庖丁であり、外湾刃半月形を呈する。刃部にやや刃こぼれが見られる。

**5SD005 灰砂 (図 59 - 19)**

**弥生土器**

甕 (19) 甕 1b の口縁部片である。

【埋没時期】 中期後半 (須玖 II 式新段階) である。

**5SD018 (図 59 - 20・21)**

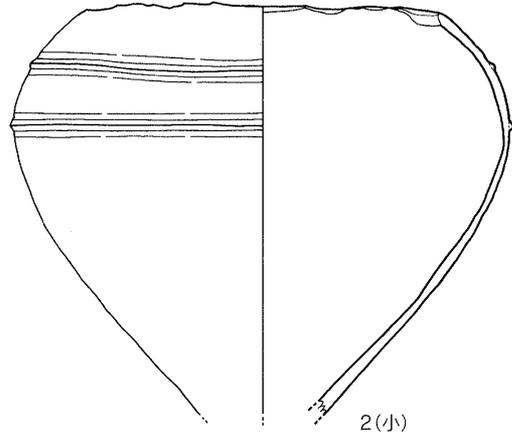
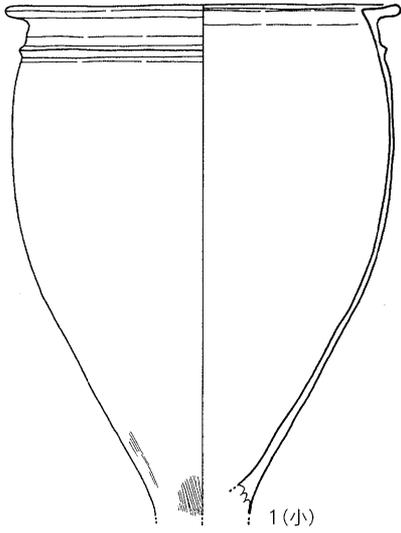
**弥生土器**

甕 (20・21) 20 は甕 1b、21 は甕 1c の口縁部片である。21 は口縁端部を若干上方に跳ね上げている。

**5SD018 灰色砂 (図 59 - 22)**

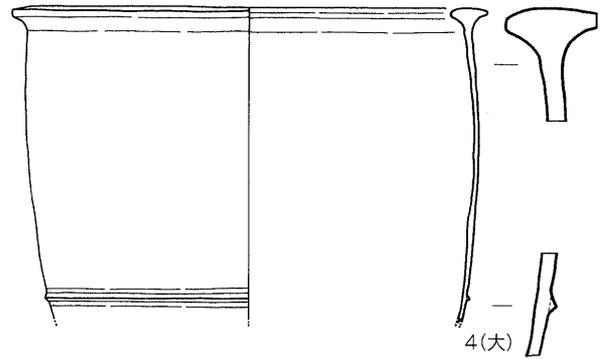
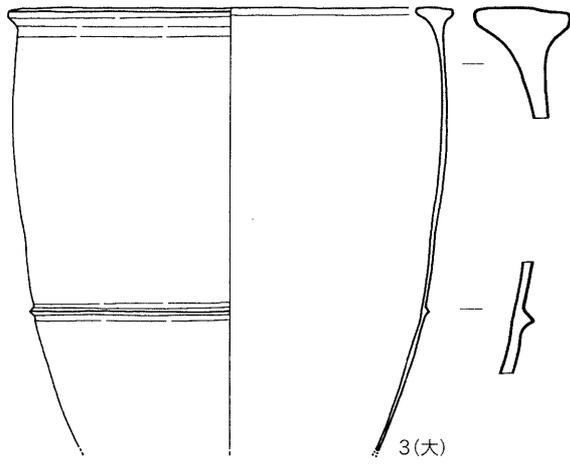
**弥生土器**

5ST015



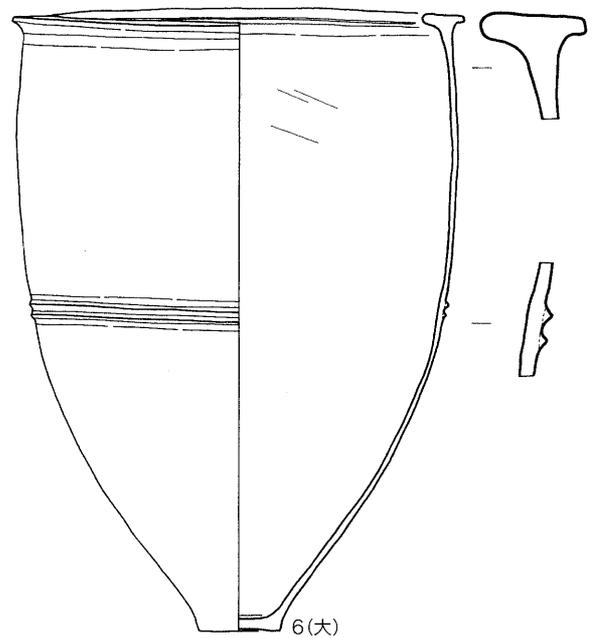
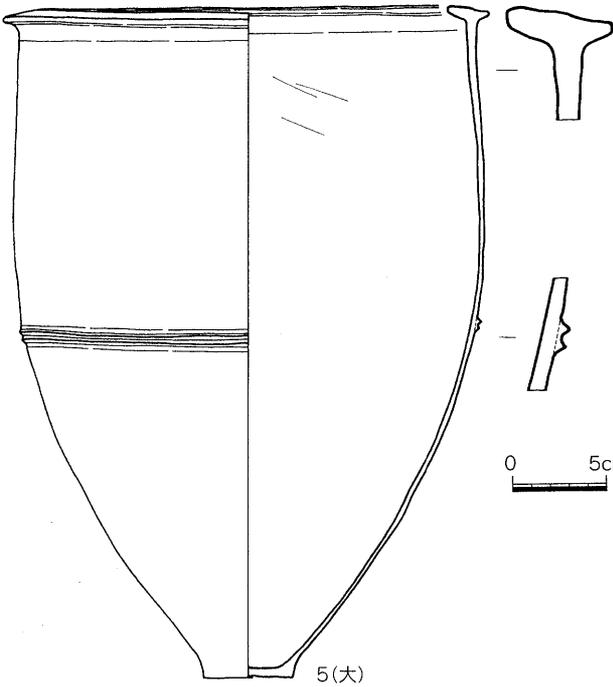
0 30cm

5ST010



0 50cm

5ST020



0 5cm

图60. 甕棺墓出土遺物実測図(S=1/4・1/6・1/10)

**甕 (22)** 甕 1a の口縁部片である。内外面とも摩滅しており、調整は不明である。

【埋没時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式) である。

**5SD019** (図 59 - 23)

#### 弥生土器

**甕 (23)** 甕 1a の口縁部片である。外面には若干ではあるが縦方向の刷毛目が残存している。内面は摩滅しているがおそらくナデ調整であろう。

【埋没時期】 中期初頭 (城ノ越式) である。

#### b. 墓

##### b-1. 甕棺墓【小型棺】

**5ST015** (図 60 - 1・2)

#### 弥生土器

**甕 (1)** 小型の甕 1a である。口縁部から底部付近まで器体全周の約 1 / 2 程度残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面は摩耗のため調整は不明であるが、底部付近には縦方向の刷毛目が若干残っている。内面はナデで仕上げているものと思われる。また、底部の断面には接合痕が観察される。

**壺 (2)** 壺である。胴部上半で打ち欠いており、胴部中位から胴部下半が全周の約 1 / 2 残存している。胴部中位にはやや間隔をあけて二条の小さな三角突帯を貼り付けている。内外面とも摩耗しており、器面調整は不明である。

【形成時期】 中期前半 (須玖Ⅰ式新段階) である。

##### b-2. 甕棺墓【大型棺】

**5ST010** (図 60 - 3・4)

#### 弥生土器

**甕 (3・4)** 3 は大型の甕棺である。口縁部から胴部下半の全周約 1 / 4 ほど残存している。胴部中位には一条の三角突帯を貼り付けている。器面調整は内外面ともナデで仕上げている。4 も大型の甕棺である。口縁部から胴部中位の全周約 1 / 4 ほどが残存している。口縁部の外面・内面ともヨコナデにより面とりされている。また、胴部中位には小さな三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内外面とも器面は摩耗しており、調整は不明である。

【形成時期】 中期前半 (KⅡb式) である。

**5ST020** (図 60 - 5・6)

#### 弥生土器

**甕 (5・6)** 5 は完形の大型の甕棺である。口縁部の外面・内面ともヨコナデによる面取りがなされ、口縁部上面の外側は強いヨコナデによって凹んでいる。胴部中位にはいわゆる作り一条見かけ二条の突帯をヨコナデによって貼り付けている。器面調整は内外面ともナデ調整だが、内面の胴部上半には刷毛目調整工具の痕跡も残存している。6 も完形の大型甕棺である。口縁部の外面はヨコナデにより面とりされている。また胴部中位にはいわゆる作り一条見かけ二条の突帯をヨコナデによって貼り付けている。器面調整は内外面ともナデ調整だが、胴部内面上

半には刷毛目調整工具の痕跡も残存している。

【形成時期】中期前半（K II c式）である。

c. その他の遺構（小穴、凹み）

5SX002（図61-1）

弥生土器

甕（1） 城ノ越式の甕の底部であり、全周の約1/2ほど残存している。外面には指頭圧痕が残っている。

5SX007（図61-2）

弥生土器

甕（2） 甕1bの口縁部であり、全周の約1/8ほど残存している。内外面とも摩滅しており、調整等は不明である。

5SX008（図61-3）

弥生土器

甕（3） 甕1aの口縁部片である。原因は不明だが口縁部上面が一部赤色化している。

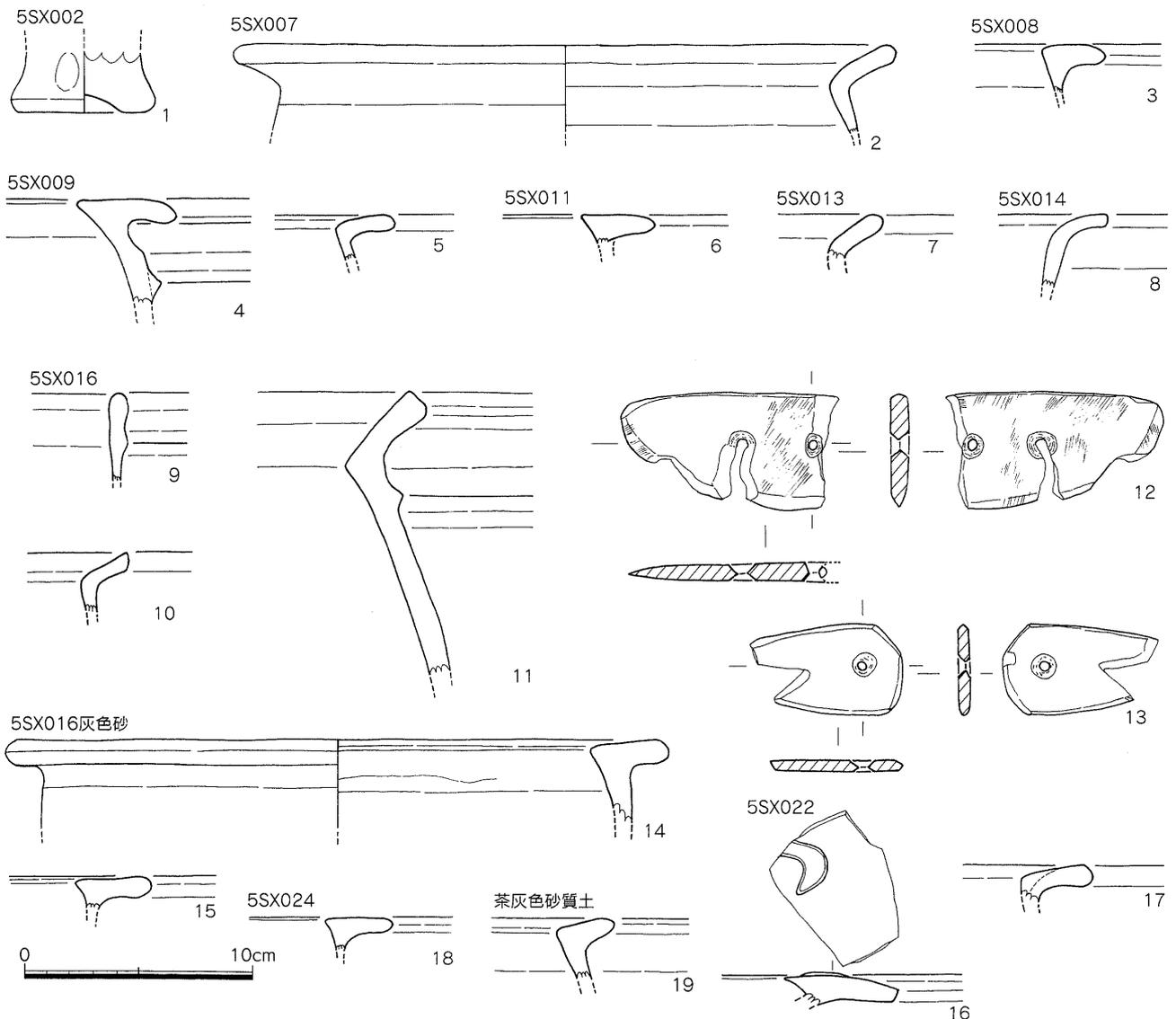


図61. その他の遺構・土層出土遺物実測図(S=1/3)

**5SX009** (図 61 - 4・5)

**弥生土器**

**甕** (4・5) 4は甕1aの口縁部片である。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けているが、口縁部整形時のヨコナデと突帯を貼り付ける際のヨコナデによって、口縁部と三角突帯の間には突帯状に隆起している部分がある。5は甕1bの口縁部片である。口縁部上面には黒班がある。

**5SX011** (図 61 - 6)

**弥生土器**

**甕** (6) 甕1aの口縁部片である。

**5SX013** (図 61 - 7)

**弥生土器**

**甕** (7) 甕1bの口縁部片である。口縁部内面には黒班がある。

**5SX014** (図 61 - 8)

**弥生土器**

**壺** (8) 壺1bの口縁部片の可能性が考えられる。内外面とも器面が摩耗しており、調整は不明である。

**SX016** (図 61 - 9 ~ 13)

**弥生土器**

**壺** (9) 遠賀川以東に分布中心をもつ壺5の口縁部片である。外面の口縁端部より若干下がった位置に一条の三角突帯を形成しているが、作り出しによるものか貼り付けによるものかの判断は困難である。

**甕** (10・11) 10は甕1cの口縁部片である。口縁端部をヨコナデにより若干跳ね上げている。11は甕1bの口縁部から胴部上半の破片である。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面とも器面が摩滅しており、調整は不明である。

**石製品**

**石包丁** (12) 弱変成の凝灰岩製石庖丁であり、外湾刃半月形を呈する。回転穿孔を行い、刃部から孔にかけて溝状に欠損している。

**用途不明** (13) 板状のもので、泥岩製の用途不明石器である。

**5SX016 灰色砂** (図 61 - 14・15)

**弥生土器**

**甕** (14・15) 14・15は甕1aの口縁部片であり、14は全周の約1/8程度残存している。また、14の内面には粘土帯の継ぎ目が観察される。

**5SX022** (図 61 - 16・17)

**弥生土器**

**壺** (16) 壺1aの口縁部片である。口縁部上面には勾玉状の浮文を貼り付けている。

**甕** (17) 甕1bの口縁部片である。口縁部内面には粘土紐の継ぎ目が明瞭に残っている。

5SX024 (図 61 - 18)

弥生土器

甕 (18) 甕 1a の口縁部片である。

d. 土層

茶灰砂土 (図 61 - 19)

弥生土器

甕 (19) 甕 1a の口縁部片である。ヨコナデによって口縁部を整形している。

E. 小結

今次調査は極めて狭小な調査区であり、各遺構の全貌について明らかにすることはできなかった。検出できた遺構は、弥生中期の甕棺墓で小型棺 1 基、大形棺 2 基であった。溝 5SD001 ならびに 5SD005 は弥生中期に埋没しており、隣接調査区の 7SD001 ならびに 7SD375 に接続するものと考えられる。さらに弥生中期と考えられる竪穴住居が 1 棟検出されているが、今次調査では遺構性格すら把握できていない。なお甕棺墓の確認によって 4 次調査で確認した甕棺墓域の広がりや当該調査区の位置まで広がっていることが観察でき、今後はどこまで広がるの

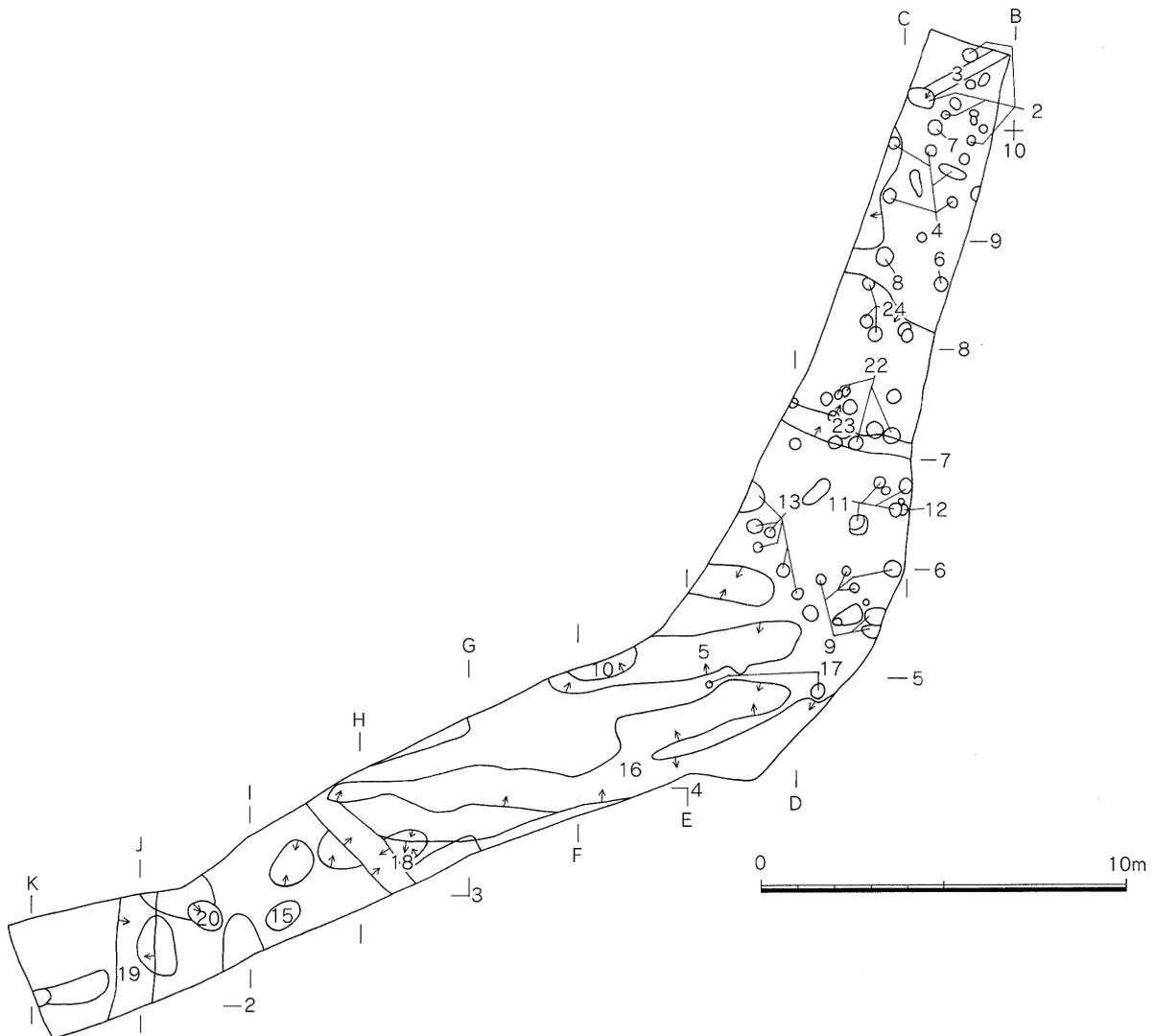


図62.松本遺跡 第5次調査 遺構略測図(S=1/200)

かを含めた調査視点が必要となってくる。当該調査区では、その後の人為的な営みが検出できておらず、周辺調査区の状況とは異なっている。

### 3. 国分松本遺跡 第7次調査

#### A. 調査に至る経過

平成7年度に実施した公共事業関係埋蔵文化財事前協議において、平成8年度事業として建設課より道路新設（正尻－紺町線）が事業計画として提出された。当該地については、周辺の調査実績から弥生時代における集落・墓が包蔵されている可能性が高いことから、道路新設に先立ち記録保存としての発掘調査を行うことで、建設課と協議を進め、平成10年に発掘調査を行うことで合意をみた。開発対象面積は1050 m<sup>2</sup>、調査面積は870 m<sup>2</sup>を測り、調査は平成10年10月5日～平成11年3月31日で実施した。調査地番は、太宰府市国分1丁目406－3外10筆。

#### B. 基本土層

約0.6mのマサ土による造成土および旧耕作土除去後、薄層である0.2mほどの床土層を除去すると直下に遺構検出面が現れる。調査区全体として黄色系の粘土層を遺構形成面として展開しているが、調査区南西部へゆくにつれて、灰色系の砂質土へと変化している。なお遺物取り上げに際して分層した土層名については、図130に略述する。

#### C. 遺構(図63)

調査区全域に渡って遺構が形成されている。概ね北部が掘立柱建物、竪穴住居、溝などの居住関係遺構が展開し、調査区中央部には甕棺墓が展開する墓域となる。さらに南では再び溝や小穴が主体となる居住域と考えられる遺構群が展開しているが、北部ほど明瞭に遺構性格が付与できるものは確認できなかった。時代は、弥生中期を主体として古墳前期にまで及んでいる。

##### a. 掘立柱建物

###### 7SB040(図64)

調査区北東部にて検出した建物で、5間×3間の構造をとる。梁行4.75m×桁行6.75mを測り、建物占有面積32.06m<sup>2</sup>を測る。建物は遺構の前後関係から7SD001灰茶色砂堆積後に建物柱穴が確認できている。状況解釈としては、溝堆積途中における建物建造が考えられるが、建物廃絶後に柱を残したまま溝掘削がなされた可能性も残っている。溝形状を確認した後に上層からの堆積土を除去しつつ柱穴を確認した点から考えると後者の可能性が高いと考えられ、建物廃絶後に溝7SD001が造営されたものと解したほうが蓋然性は高いと考えられる。桁行方向南東-北西方向の建物方向をとり、梁方向で東側の柱間が狭い構造をとり、柱痕跡が残存している7SB040hでは、柱径0.16mほどが考えられる。

###### 7SB055(図64)

先述した7SB040に隣接して検出したもので、調査区外へ展開しており調査区内で遺構全形を観察することができなかった。建物柱方向は7SB040と平行しており、単純には解釈できないが同時存在を暗示している可能性が高い。当該建物もやはり溝7SD001の下位から検出できていることから、その前後関係を知ることができる。

##### b. 竪穴住居

###### 7SI020(図64)

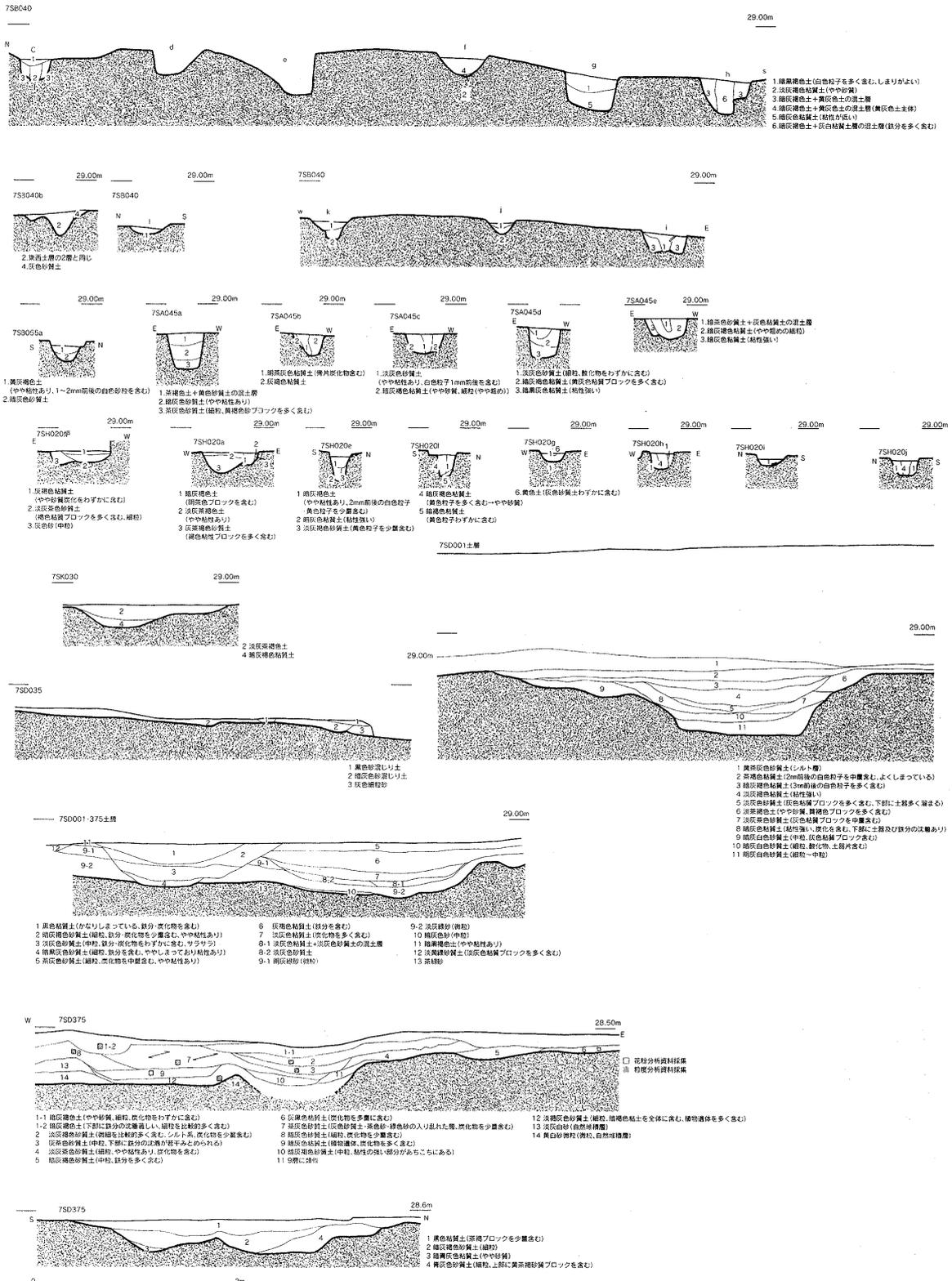


図64. 各遺構土層実測図(1)



図63. 松本遺跡 第7次調査 遺構配置図

先に報告した国分松本遺跡5次調査から展開してきた竪穴住居と考えられ、建物壁は既に欠失しており、支柱穴と考えられる規則性のある小穴を確認した。各柱間は1.3m～1.6mを測り、円形の住居跡であると推定する。柱間での直径であるが6mほどが計測できることから、遺構規模としてはそれ以上ということになる。遺構残存状況が極めて悪いことから、遺構に付帯する諸遺物は確認できていない。今次調査および周辺調査では、当該遺構と同時期の竪穴住居はこの遺構のみであった。

### c. 柵

#### 7SA045(図64)

調査区北半東端部にて検出したもので、直径0.3m前後の穴が連続して検出されたことから、柵と考えた。検出長10.5mを測り、一部調査区外へ展開しているが、5間の柱穴を確認している。

#### 7SA065

調査区北半西寄りにて確認したもので、当初掘立柱建物を想定していたが、柱の展開がみられなかったことから、柵と解した。調査区内では3間の柱が確認でき、検出長3.3mを測る。

### d. 溝

#### 7SD001(図64)

調査区北半を南東から北西へ検出したもので、後述する7SD375に切られている。溝幅5m～5.6mを測り、検出標高から溝底までの深さは0.6mを測る。調査当初において、切り合い関係を把握することなく、土層の上下関係のみに視点を置き遺物を取り上げていた。7ラインより2条の溝があることが明らかとなり、土層模式表で表現したような上下関係で各土層を把握する。したがって遺物取り上げに際しては、全てS-1で取り上げており、そこに付加される土層名称で上下関係を把握するという煩雑な結果となった。堆積土層の状況から大略的に上方細粒化傾向がうかがえるが、間層として砂層が観察されるなど、流速の漸移的な低下ではなく、不規則ながら流速の変化が観察できる。しかし最後は低速化し土の堆積をもって埋没したものと考えられる。

#### 7SD070

調査区中央にて検出したもので、調査区を南東から北西へ斜向している。遺構の前後関係は切り合いから7SD375に切られており、調査区内で検出した観察結果からは、調査区中央にてほぼ直角に曲折している。遺構内堆積土は、下記状況で観察できた。なお調査区反転後の南調査区では堆積土が複雑化し、古流速が錯綜ないしは、流れ中心の頻繁な移動を物語る堆積相の変化が観察でき、検出溝最大幅5.5m、検出長約12mを測る。検出標高から溝底までの深さは、0.91mを測る。調査区北側へゆくにつれて溝の深さが浅くなる傾向がうかがえる。

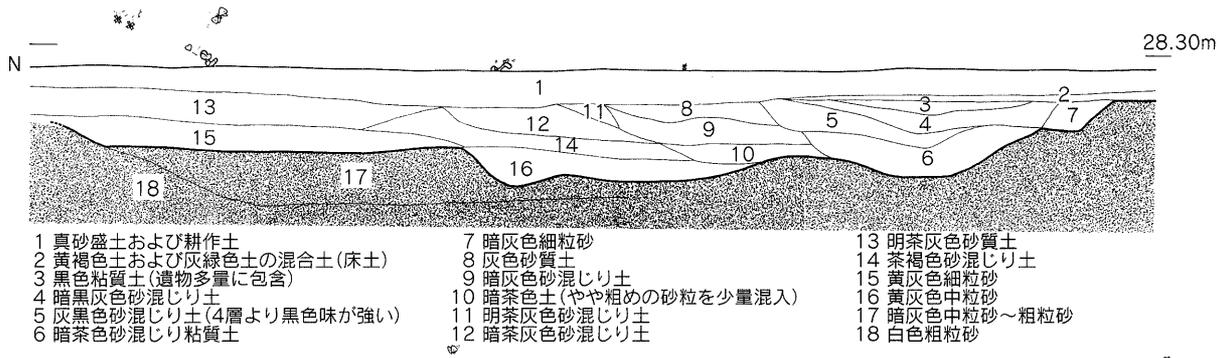
【堆積土：上位より】

暗灰色粘質土←淡灰色土←暗黒色砂混じり粘土←灰色粘土←黄灰色粘質土←灰黄色砂混じり粘質土

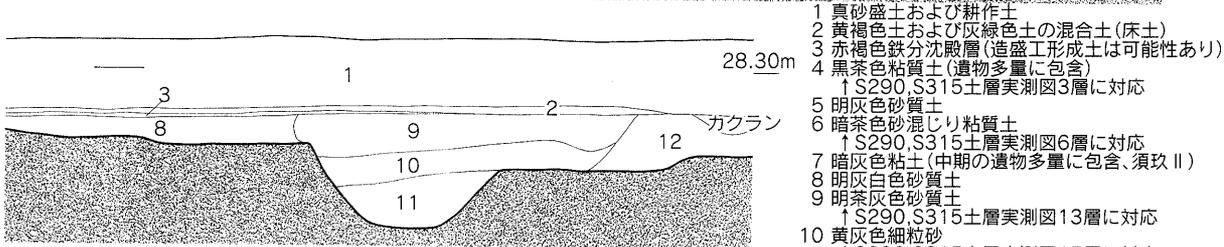
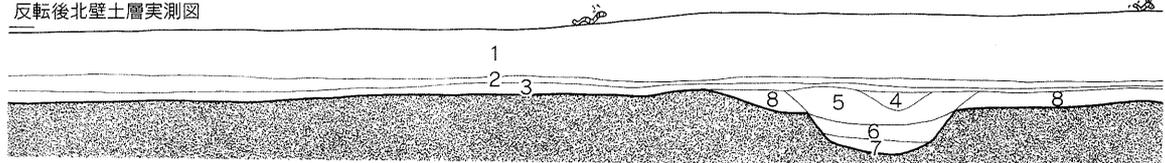
#### 7SD094

調査区中央にて検出したもので、調査区を南東から北西へ斜向している。遺構規模は、溝幅0.7m前後を測り、検出標高から0.08mを測る。遺構内堆積土は上位から茶白色粗粒砂←赤茶

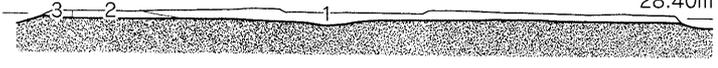
7SD290・315・330土層実測図



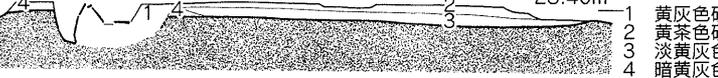
反転後北壁土層実測図



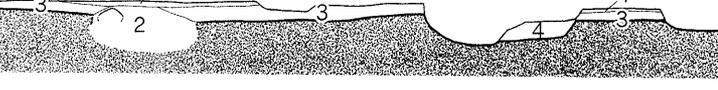
整地土層①



整地土層②



整地土層③



整地土層④



整地土層⑤



図65. 各遺構土層実測図(2)

色土であった。

#### 7SD235 (7SD315)

調査区西部にて検出した溝で、溝堆積層上面に甕棺墓群が形成されている。また複数の溝が錯綜しており、後述する各溝との前後関係を整理すると下記のようなになる。

7SD290 ← 7SD235 (7SD315) ← 7SD265 (7SD330)

遺構規模は、幅 3.0m 前後、深さ 0.9m 前後を測る。堆積層は上位より灰褐色土←明茶色砂←灰緑色砂であった。

#### 7SD265 (7SD330)

調査区西部にて検出した溝で、先述した 7SD290 他から切られており、最も下位に位置付けられる。遺構規模は、最下層であったこともあり、明らかにし難く、深さ 0.22m ほどを測る。

#### 7SD290( 図 65)

調査区西部にて検出した溝で、調査区内を曲折しつつ南北に縦断している。遺構規模は溝幅 2.0m、検出長 12m を測り、検出標高から溝底までの深さは 0.66m を測る。遺構内堆積土は上位より茶灰色砂←黒色土が観察できる。当該遺構は、調査区北部にて欠失する。

#### 7SD375( 図 64)

調査区北半にて検出した溝で、調査区をほぼ東西に弧を描くような形状で確認している。7SD001 を切っており、幅 1.3m ～ 3m、検出長約 30m、深さは 0.5m 前後をそれぞれ測る。堆積層は上方細粒化傾向を手がかりに観察すると、2 ユニットに分類でき、流速の変化を読み取ることができる。当該遺構は国分松本遺跡第 5 次調査 SD016 へ連続するものと考えられる。

### e. 墓

今次調査にて検出した墓と考えられる遺構は、甕棺墓のみであった。これまで周辺調査にて先に報告してきた国分松本遺跡第 4・5 次調査にて多くの甕棺墓を検出しており、当該地一帯が弥生期の墓域であったことがあらためて確認できた。なおこれまでの調査では、甕棺墓調査への認識不足から、棺内土層の観察を怠っていた。しかし、棺埋置時期を特定するためにも、棺内土層の観察が必要と考え、今次調査より棺内堆積土の観察を行うことにした。棺内土層の観察から導き出せるものとして、棺内堆積土は墓壙上位の堆積土の流入によって形成されるが、その流入土の質によって、いつ埋置されたものであるのか、つまり今次調査で集落造成土（以下「造成土」と記載）と考えられる黄茶色土を鍵層とした場合、この黄茶色土が流入しているものは、造成土形成前のものであり、流入していないものは、その後形成されたものであるとの見通しがつく。なお棺内への流入の有無は極めて偶然性に左右されるため、先の検証根拠と為し得るかどうかは、その場の状況観察によるしかない。したがって、棺埋置時期特定のための観察項目として捉える。

検出できた甕棺墓は、54 基であった。

#### e-1. 甕棺墓【小型棺】

##### 7ST005( 図 66)

調査区北東隅にて検出したもので、下棺と考えられる甕形土器の破片が確認できた。棺内

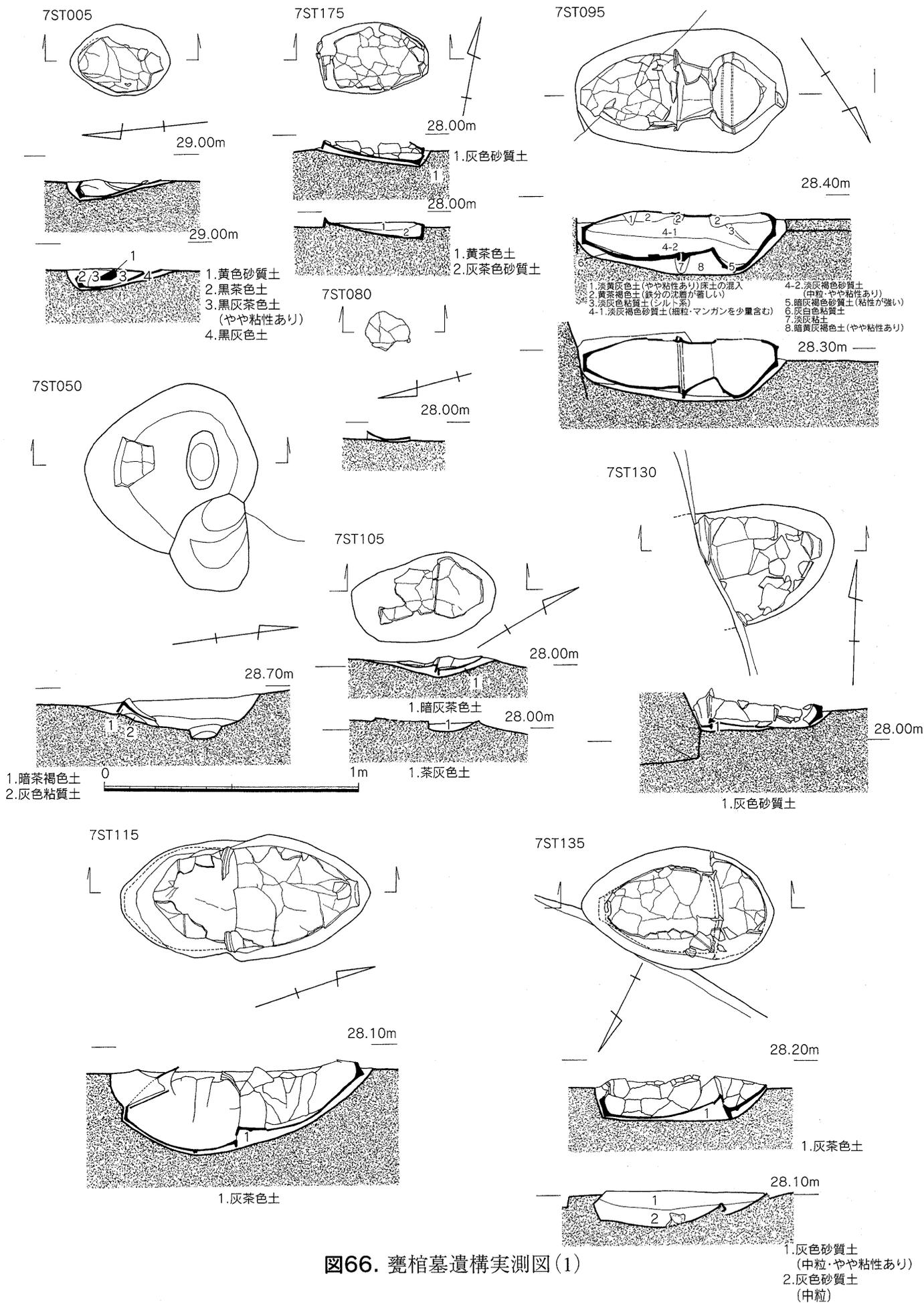


図66. 甕棺墓遺構実測図(1)

堆積土は、上位より黄色砂質土←黒茶色土←黒灰茶色土であった。最も上位にある黄色砂質土は、水平堆積を呈し、遺構検出面直上にある旧耕作土床土（以下「床土」と記載）と考えられ、後述する造成土（黄茶色土）と同質ではない。検出できた墓壙規模は長軸長 0.4m、短軸長 0.275m、検出標高からの墓壙底までの深さは 0.75m を測る。棺挿入角度は約 30 度、挿入方向はほぼ南からが想定できる。

#### 7ST050( 図 66)

調査区北東部にて検出したもので、棺使用土器の検出が顕著ではなかったことから、棺内土層の観察を怠ってしまった。「下棺」口縁部のみの検出で、埋置状況としては可能性のみが指摘でき、甕棺墓としての根拠としてはやや低い。したがってここでは参考程度にとどめておきたい。遺構規模は長軸長 0.67m、短軸長 0.67m、検出標高からの「墓壙底」までの深さは 0.12m を測る。「棺」挿入角度は 32 度、挿入方向はほぼ南からが想定できる。

#### 7ST075( 図 70)

調査区南西部にて検出したもので、上棺の多くが後世の削平によって欠失していた。棺内堆積土は、上位より黄茶色土←灰茶色砂質土←暗灰茶色砂質土←灰白色粗粒砂であった。最上層の黄茶色土は、水平堆積でありやはり遺構検出面直上にある床土と考えられる。墓壙規模は残存長軸長 0.9m、短軸長 0.56m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.4m を測る。棺挿入角度は約 22 度、棺挿入方向は南西方向が想定できる。

#### 7ST080( 図 66)

棺使用土器と考えられる土器片のみの検出で、先述した 7ST050 より遺構性格付与根拠に乏しいものである。調査区南西部にて検出したもので、残存土器長軸長 0.17m を測る。

#### 7ST095( 図 66)

調査区南隅にて検出したもので、壺形土器と甕形土器を合わせたものであった。棺内堆積土は上位より、淡黄灰色土（床土）←黄茶褐色土（造成土）←淡灰色粘質土←淡灰褐色砂質土（上方細粒化）←暗灰褐色砂質土←灰白色粘質土で棺底付近にて観察できた 2 層を除いて、全て棺上位からの流入土と考えられるが、すべて水平堆積をしていることから、一箇所の棺欠損部からの流入ではなく、数箇所ないしは壺形土器口縁部から体部下位にかけて大きく欠損していることから、この部分からの多量流入による堆積が想定できる。墓壙規模は、残存長軸長 0.82m、短軸長 0.48m を測り、検出標高から墓壙底までの深さは 0.26m を測る。棺挿入角度はほぼ水平、棺挿入方向は北西方向が想定できる。

#### 7ST105( 図 66)

調査区西部にて検出したもので、遺構残存状況が後世の削平によって極めて悪く、棺内土層観察も茶灰色土（床土）を確認しただけで、十分に行えていない。墓壙規模ならびに棺挿入角度はしたがって明らかにし難い。棺使用土器の長軸方向は北東 - 南西軸が想定できる。

#### 7ST115( 図 66)

調査区西部にて検出したもので、遺構上部を欠失している。棺内土層は上位より黄灰色砂質土（造成土）←灰色砂質土（上方粗粒化）であり、上位の黄灰色砂質土は、下棺口縁部の崩壊

によって流入したものと考えられる。墓壙規模は検出長軸長 0.975m、短軸長 0.34m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.49m を測る。棺挿入角度は約 12 度、棺挿入方向は北東方向が想定できる。

#### 7ST130( 図 66)

調査区西部にて検出したもので、後世の溝によって遺構の半分が欠失していた。したがって遺構規模については計測できなかった。棺内土層は、床土のみの単一層であった。棺挿入方向はほぼ西からを想定している。

#### 7ST135( 図 66)

調査区中央部にて検出したもので、後世の溝によって遺構の一部を欠失している。棺内土層は、灰色砂質土の単一層で上方細粒化傾向がうかがえる。墓壙規模は、検出長軸長 0.75m、短軸長 0.48m を測り、検出標高から墓壙底までの深さは 0.18m を測る。棺挿入角度は約 23.5 度、挿入方向は南西方向が想定できる。

#### 7ST150( 図 67)

調査区西部にて検出したもので、遺構の大半を後世の削平によって欠失していた。棺内土層に関する情報も、遺構残存状態が極めて悪いことから収集できなかった。棺使用土器の状態は先述した 4ST145 同様で破碎状況が著しい。遺構規模の内、長軸方向の規模ならびに棺挿入方向に関する情報は遺構残存状況から得難い。棺長軸方向は、北西 - 南東軸が想定できる。墓壙規模の中で、検出短軸長は 0.45m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.075m を測る。

なお調査所見から、先の 4ST145 ならびに当該遺構は 4ST140 に接しており、4ST140 を中心として意図的に挿入された小型棺であると考えられる。

#### 7ST155( 図 67)

調査区北西部にて検出したもので、遺構上面を後世の削平によって欠失している。棺内土層は上位より灰茶色砂質土←暗灰茶色砂質土が水平堆積しており、欠失箇所から流入したものと考えられる。遺構規模は、検出墓壙長軸長 0.64m、短軸長 0.46m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.435m を測る。棺挿入角度は約 37 度、棺挿入方向は東が想定できる。

#### 7ST165( 図 67)

調査区北西部にて検出したもので、遺構上部の大半を後世の削平により欠失している。棺内土層は、上位より黄茶色土←灰茶色砂質土が水平堆積しており、最上層の黄茶色土は旧耕作土としての床土と考えられる。遺構規模は、検出墓壙長軸長 0.595m、短軸長 0.395m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.29m を測る。棺挿入角度は 36 度、棺挿入方向は南南西方向が想定できる。

#### 7ST170( 図 67)

調査区北西端にて検出したもので、小型甕形土器を 3 個体連結させたものであった。埋置状況は、両側の棺を先に埋置し、真中のものをその上に置くという状況であった。棺内土層は、上位より灰黄茶色砂質土←灰茶色砂質土（上方粗粒化）であった。灰黄茶色砂質土は、下位の土層を断ち切るように観察されることから、上位からの根穴などの土層と考えられる。一方下

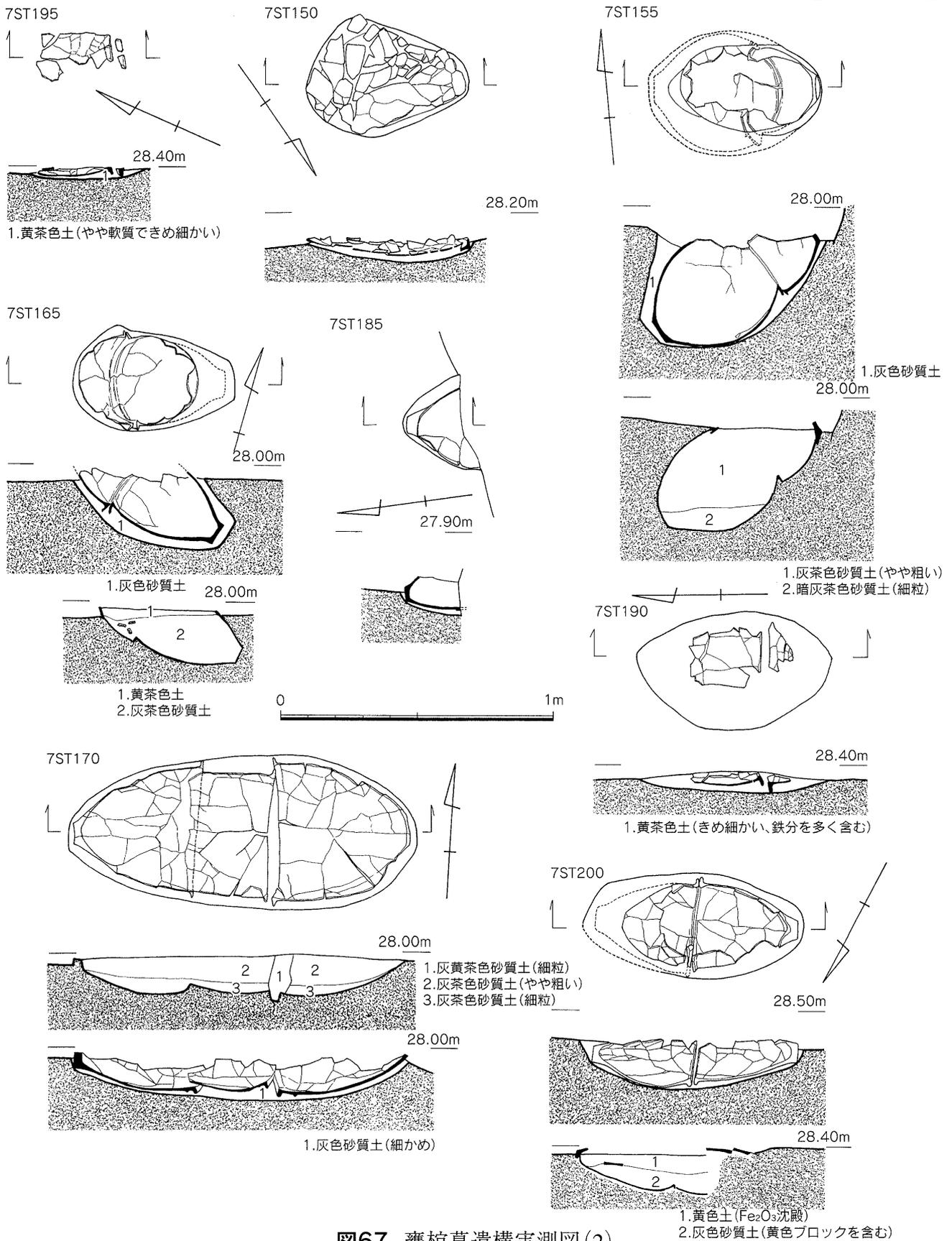


図67. 甕棺墓遺構実測図(2)

層の灰茶色砂質土は上方粗粒化傾向がうかがえ、棺内流入土の流入速度が次第に速まったことが想定できる。遺構規模は、検出墓壙長軸長 1.27m、短軸長 0.56m、検出標高から墓壙底までの深さ 1.6m をそれぞれ測る。棺挿入角度はほぼ水平、棺挿入方向は棺自体が水平であること

から、水平埋置された可能性が高い。したがって、東西方向が棺長軸方向として観察できる。

#### 7ST185( 図 67)

調査区北西部にて検出したもので、反転前の調査区南端にて確認した。遺構上半を欠失し、調査区南部へ展開するものと考えられることから、遺構全形については明らかにし難い。棺長軸方向はほぼ南北方向と推定できる。

#### 7ST190( 図 67)

調査区中央部にて検出したもので、遺構の多くを後世の削平によって欠失していた。遺構内堆積土に関しても、残存状況が極めて悪いことから観察できなかった。遺構規模は検出墓壙長軸長 0.715m、短軸長 0.425m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.075m であった。棺挿入角度は残存状態が不良なため明らかにし難いが、観察できる範囲ではほぼ水平ではないかと考えられる。棺挿入方向は不明であるが棺長軸方向はほぼ南北であった。

#### 7ST195

調査区中央部にて検出したもので、先述した 7ST190 よりもさらに残存状況が悪く、2 個体の甕形土器が合わせてあることから甕棺墓として認定している。したがって棺内堆積土、遺構規模、棺挿入角度などの観察事項については明らかにし難い。棺長軸方向は南東 - 北西方向であると考えられる。

#### 7ST200( 図 67)

調査区中央部にて検出したもので、遺構上半を後世の削平によって欠失していた。棺内堆積土は上位より黄色土←灰色砂質土であり、最上層の黄色土は酸化第 2 鉄の沈殿層で、旧耕作土における床土と考えられる。遺構規模は検出墓壙長軸長 0.81m、短軸長 0.39m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.18m を測る。棺挿入角度はやや上棺側が高いもののほぼ水平と考えられ、棺挿入方向は南西方向からの挿入が想定できる。

#### 7ST210( 図 68)

調査区中央部にて検出したもので、遺構上部ならびに棺使用土器の片方の多くが欠失していた。棺内土層は上位より黄茶色土←灰茶色砂質土で、やはり上位に床土が堆積していた。遺構規模は検出墓壙長軸長 1.09m、短軸長 0.46m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.16m であった。棺挿入角度はほぼ水平と考えられ、棺挿入方向は明らかにし難いものの、棺長軸方向は南西 - 北東方向が観察できる。

#### 7ST215( 図 68)

調査区中央部にて検出したもので、遺構上半部が後世の削平によって欠失していた。棺内土層は上位より黄茶色土←灰色砂質土が堆積しており、上層の黄茶色は旧耕作土における床土であると考えられ、当該遺構は造成土である黄色土を切って造営されている。遺構規模は、検出墓壙長軸長 1.08m、短軸長 0.535m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.145m を測る。棺挿入角度は、ほぼ水平で、棺挿入方向は明らかにし難いものの、棺長軸方向は南東 - 北西方向が観察できる。

#### 7ST220( 図 68)

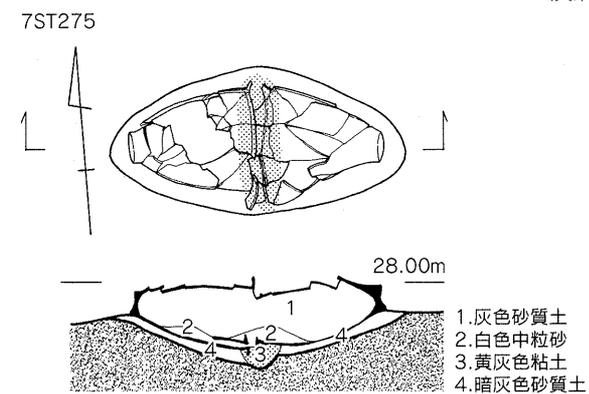
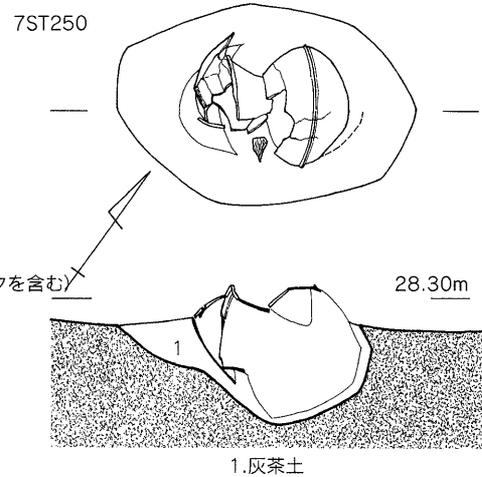
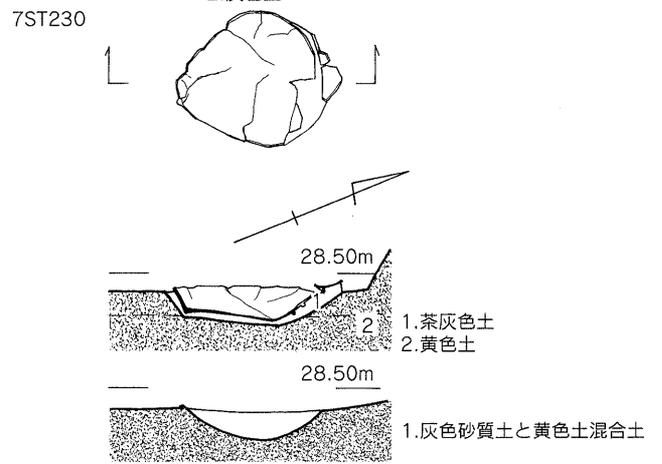
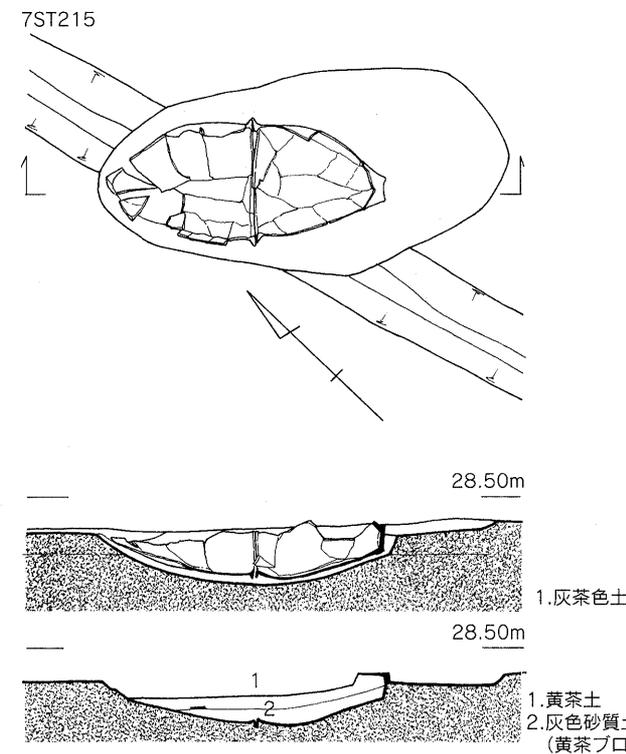
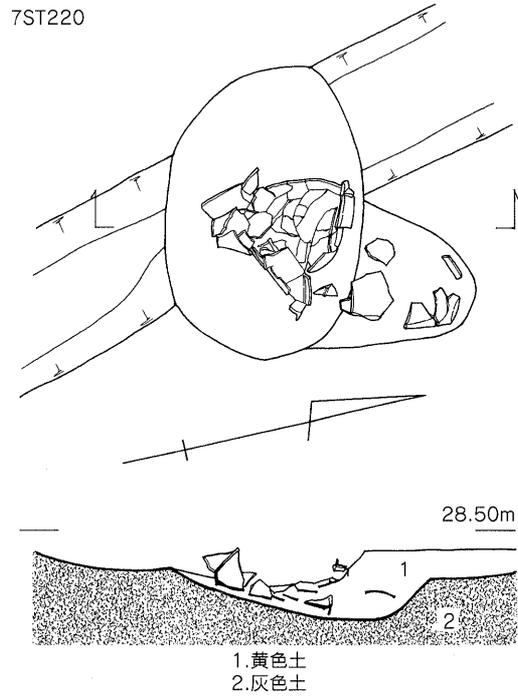
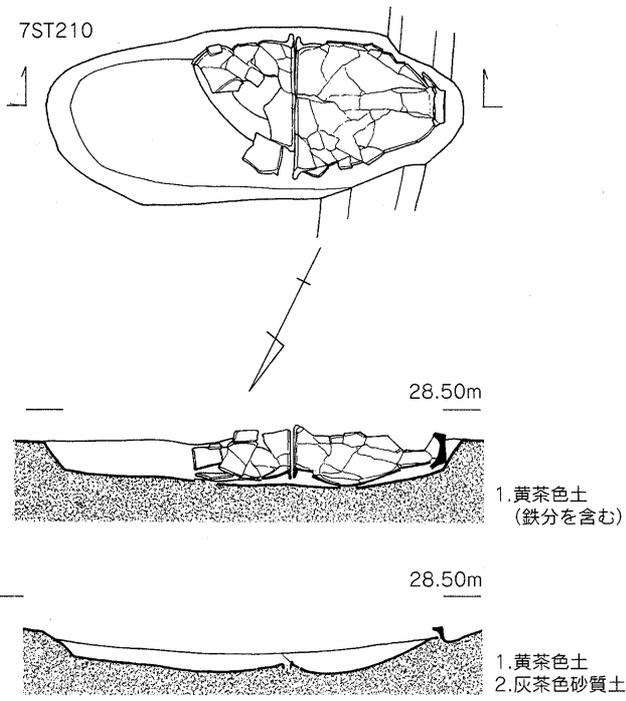


図68. 甕棺墓遺構実測図(3)

調査区中央部にて検出したもので、棺使用土器も含め遺構全体が攪乱されたような状況が観察できる。しかし部分的に棺使用土器が原位置を保持しているのではないかと考えられる箇所があり、この部分から甕棺墓であったものと推定した。観察可能な部分での遺構規模は、検出墓壙長軸長 0.85m、短軸長 0.4m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.15m を測る。棺挿入角度ならびに棺挿入方向に関しては明らかにし難いものの、棺長軸方向は北東－南西方向がかるうじて観察可能であった。なお棺破碎方向としては、西方向からの外圧を受けたように西方から東方向への棺使用土器の移動が観察できている。

#### 7ST230( 図 68)

調査区中央東寄りにて検出したもので、下棺使用土器と考えられる土器ならびに上棺使用土器の口縁部が残存している状態で、遺構残存状況は極めて悪い状況であった。棺内堆積土は、黄色砂質土および黄色土の混合土が堆積しており、造成土である黄色土を切って造営されている。遺構規模は検出墓壙長軸長 0.44m、短軸長 0.36m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.12m を測る。棺挿入角度は遺構残存状況が不良なため明らかにし難く、棺挿入方向に関しても同様である。しかし棺長軸方向は南西－北東方向が観察できる。

#### 7ST250( 図 68)

調査区中央北寄りにて検出したもので、壺形土器を下棺として使用し、閉塞装置として土器破片を用いていた。造成土下にて検出したもので、棺内土層は棺使用土器の破損部分から造成土である黄色土が上位にわずかに流入しており、多くは灰色砂質土が堆積していた。遺構規模は検出墓壙長軸長 0.78m、短軸長 0.53m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.37m を測る。棺挿入角度は 15.5 度を測り、棺挿入方向は南西方向が想定できる。

#### 7ST260( 図 69)

調査区西部にて検出したもので、遺構上半部分を後世の削平によって欠失している。棺内土層は上位より白色粗粒砂←灰色細粒砂←黄灰色細粒砂←灰色中粒～細粒砂←灰色極細粒砂(下位は粘性が高い)が観察できた。上棺使用土器の陥没状況から最下層の灰色極細粒砂のみが、棺が破損しない時点での堆積土と考えられる。遺構規模は検出墓壙長軸長 0.81m、短軸長 0.47m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.34m を測る。棺挿入角度は約 14 度、棺挿入方向は北東方向が想定できる。

#### 7ST270( 図 69)

調査区中央部にて検出したもので、造成土下に形成されていた。棺内土層は、上位より灰褐色粘質土←茶灰色砂質土←灰色砂質土が堆積していた。上下棺使用土器の合わせには淡灰色粘土を用いて目貼りが行われていた。遺構規模は検出墓壙長軸長 1.27m、短軸長 0.54m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.37m を測る。棺挿入角度は約 8 度、棺挿入方向は南西方向が想定できる。

#### 7ST275( 図 68)

調査区中央北寄りにて確認されたもので、下位に重なるように 7ST295 が造営されている。なお造成土下位にて検出できた。棺内土層は、上位より灰色砂質土←白色中粒砂が観察でき、

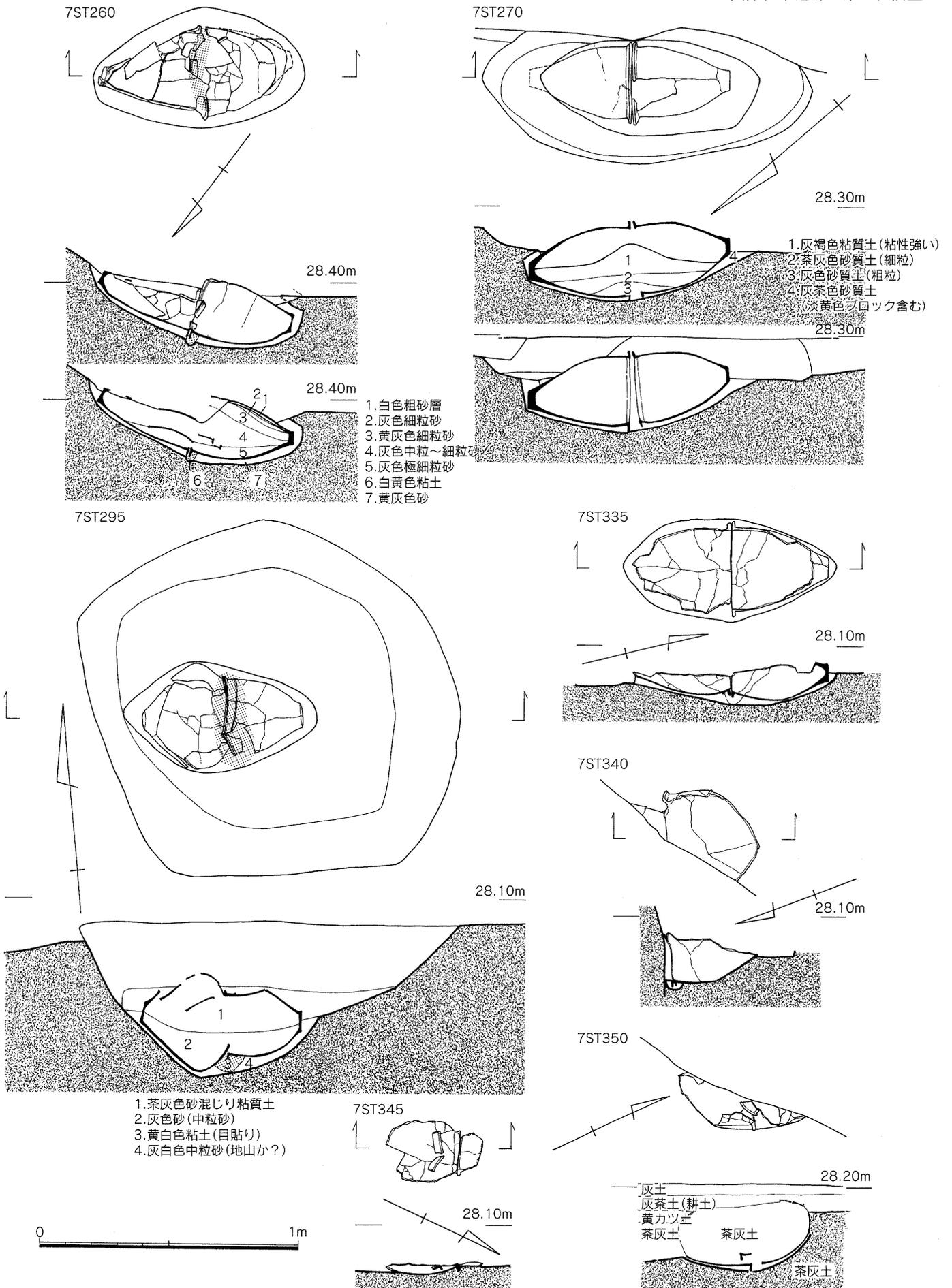
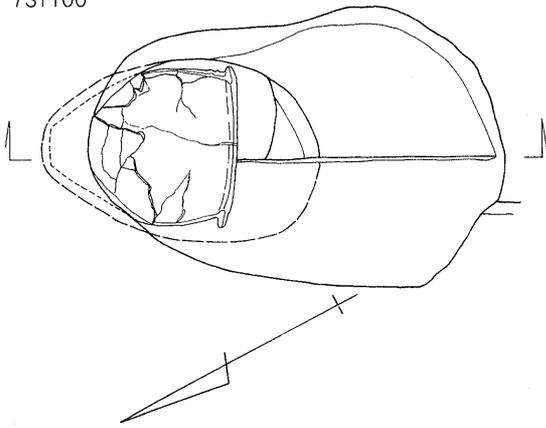
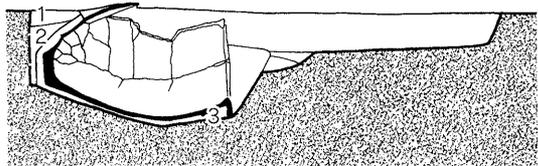


図69. 甕棺墓遺構実測図(4)

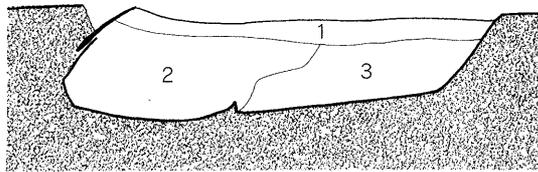
7ST100



28.50m



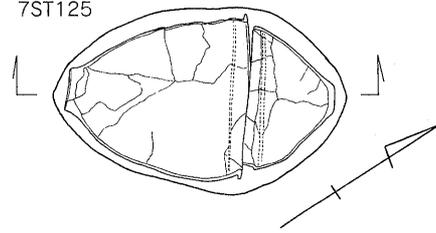
28.50m



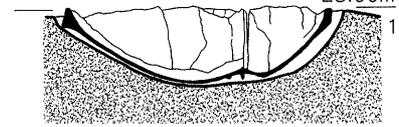
- 1.黄茶色土
- 2.灰茶色土
- 3.灰茶色砂質土 (鉄分を含む)

- 1.黄茶色土
- 2.灰色粘質土 (黄色土ブロックを少量混入)
- 3.灰色砂質土

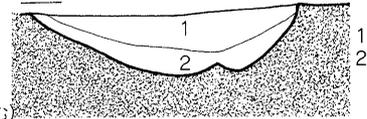
7ST125



28.00m



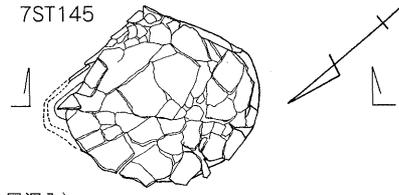
28.00m



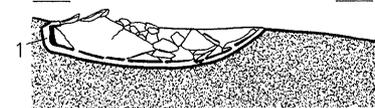
- 1.灰茶色土

- 1.黄茶色砂質土
- 2.黄茶色粘質土 (漸移的に移行するが下位程細粒になる)

7ST145

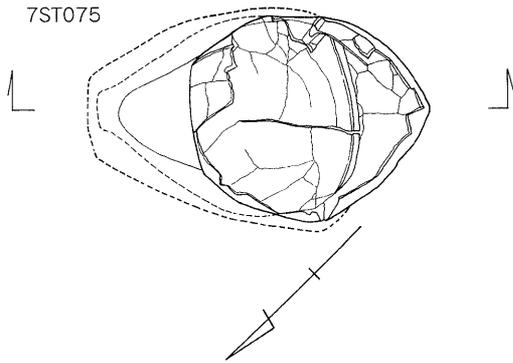


28.10m

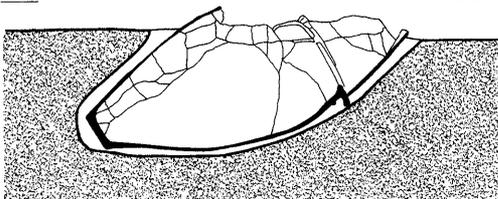


- 1.砂色土

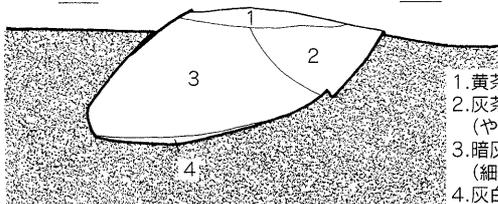
7ST075



28.00m



28.00m

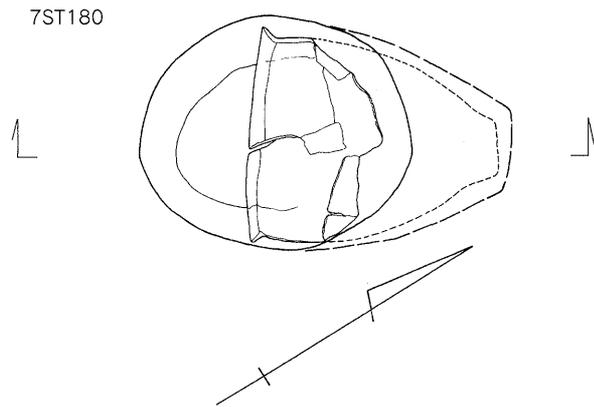


- 1.灰色砂質土 (細粒)

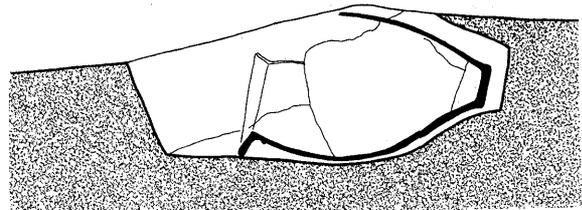
- 1.黄茶色土
- 2.灰茶色砂質土 (やや粗い)
- 3.暗灰茶色砂質土 (細粒)
- 4.灰白色ジャリ層



7ST180



28.00m



28.00m

- 1.灰色砂質土
- 2.暗茶色粒子を多く含む灰色砂質土
- 3.灰色粗粒砂

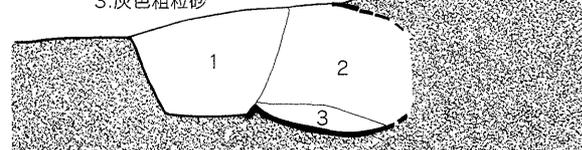


図70. 甕棺墓遺構実測図(5)

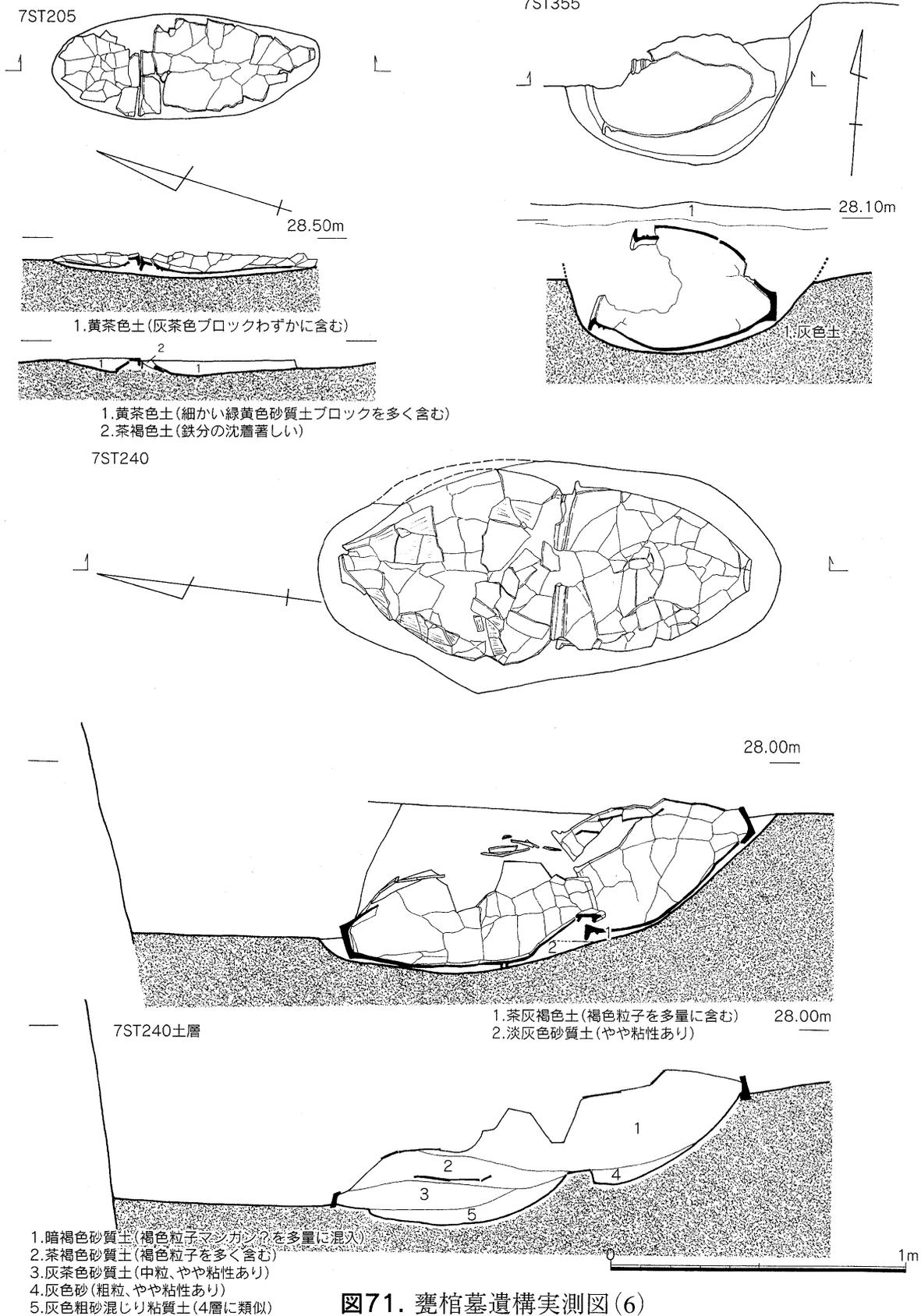
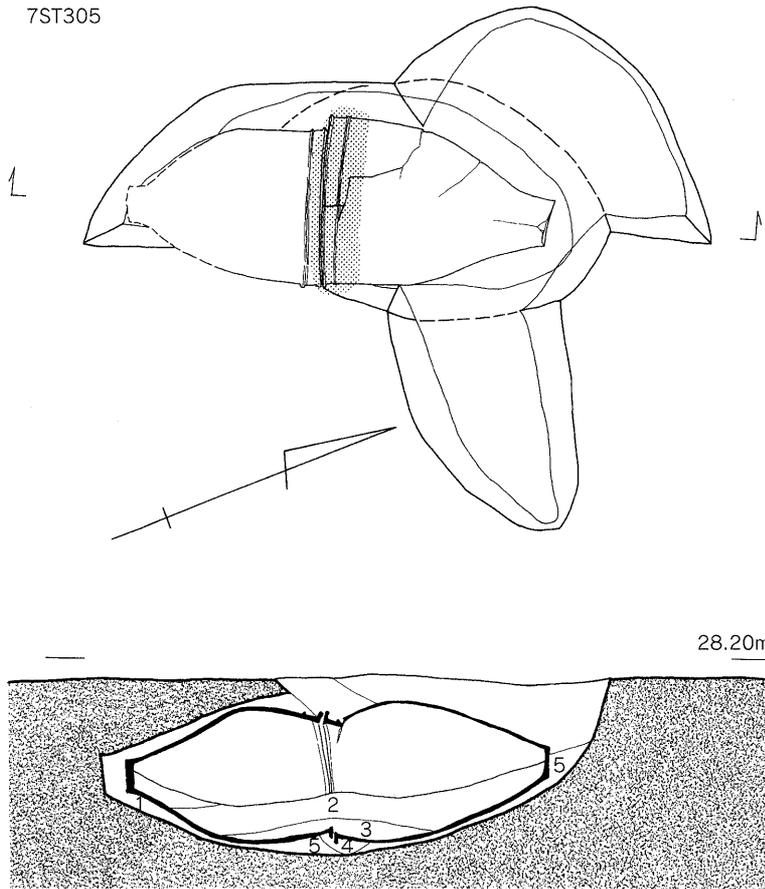


図71. 甕棺墓遺構実測図(6)

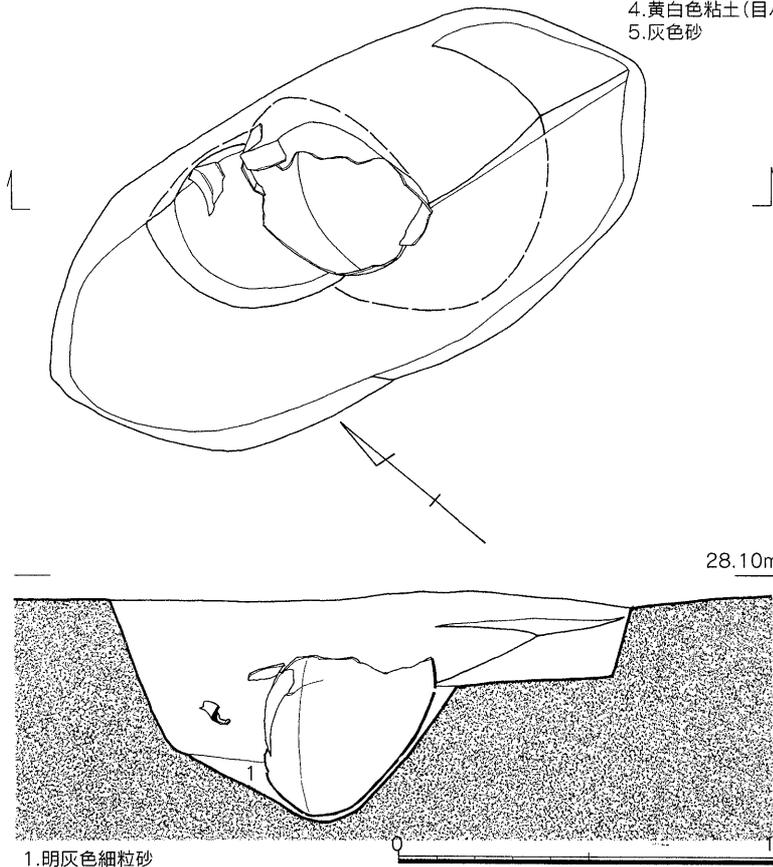
棺使用土器上部の崩落破片と棺内堆積土との関係から、棺内土はすべて棺埋置後の崩落土と考えられる。両者の棺使用土器の合わせには黄灰色粘土を使って目貼りがなされている。遺構規模は検出墓壙長軸長 0.775m、短軸長 0.385m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.24m を測る。棺挿入角度はほぼ水平で、棺挿入方向は明らかにし難いものの、棺長軸方向はほぼ東西であっ

7ST305



7ST310

- 1. 白色中粒砂
- 2. 灰色粘土
- 3. 白灰色細粒砂～中粒砂
- 4. 黄白色粘土(目バリ)
- 5. 灰色砂



1. 明灰色細粒砂

図72. 甕棺墓遺構実測図(7)

た。

**7ST295( 図 69)**

調査区中央北寄りにて確認されたもので、略五角形の墓壇掘り方の下位に棺埋置が行われていた。棺内土層は上位より茶灰色砂混じり粘質土←灰色中粒砂が観察でき、上下棺合わせには黄白色粘土を用いて目貼りが行われている。棺には壺形土器と甕形土器を用いており、遺構規模は棺埋置箇所外側の墓壇として、検出長軸長 1.53m、短軸長 1.39m、検出標高から墓壇底までの深さは 0.59m を測る。棺埋置角度は 3 度、棺挿入方向はほぼ東西方向が想定できる。

**7ST335( 図 69)**

補足調査にて確認したもので、全体調査区の西部にて検出した。遺構上半部分が後世の削平によって欠失している。遺構規模は検出墓壇長軸長 0.82m、短軸長 0.41m を測り、検出標高から墓壇底までの深さは 0.12m であった。棺長軸方向は、北東 - 南西方向が想定できる。上下棺の合わせには白色粘土による目貼りが観察できる。

**7ST340( 図 69)**

補足調査にて確認したもので、全体調査区の西部にて検出した。遺構の大半が後世の削平によって欠失しており、棺使用土器が僅かに残存するのみであった。検出遺構規模は、長軸長 0.38m、短軸長 0.23m を測る。棺長軸方向は、北東 - 南西方向が想定できる。

**7ST345( 図 69)**

補足調査にて確認したもので、全体調査区の西部にて検出した。遺構の大半が調査区外へ展開しており、遺構規模の詳細に関しては明らかにし難い。棺長軸方向は、ほぼ南北方向が想定できる。上下棺の合わせには白色粘土による目貼りが観察できる。

**7ST350( 図 69)**

補足調査にて確認したもので、全体調査区の西部にて検出した。遺構の大半が調査区外へ展開しており、遺構規模の詳細に関しては明らかにし難い。棺長軸方向は、南西 - 北東方向が想定でき、棺内土層は茶灰色土の単一層であった。

**7ST355( 図 71)**

補足調査にて確認したもので、全体調査区の西部にて検出した。遺構の大半が調査区外へ展開しており、遺構規模の詳細に関しては明らかにし難い。棺長軸方向は、北西 - 南東方向が想定できる。なお調査区内での確認作業では、単棺の可能性が高く閉塞装置の確認を行ったが明らかにできなかった。

**7ST360( 図 73)**

補足調査にて確認したもので、全体調査区の西部にて検出した。遺構の大半が後世の削平ならびに工事によって欠失しており、遺構規模は明らかにし難い。棺長軸方向は、北西 - 南東方向が想定できる。

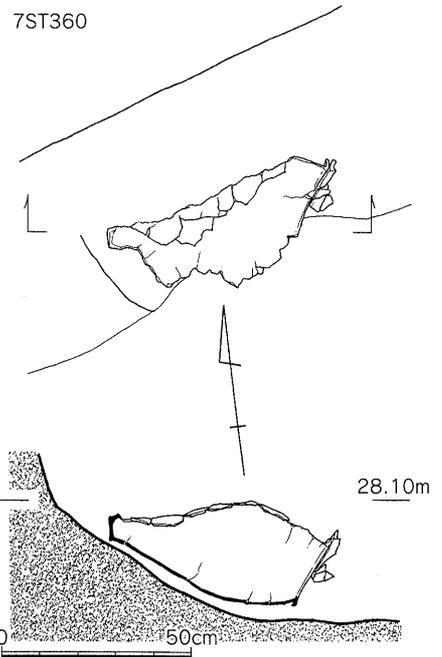


図73. 甕棺墓遺構実測図(8)

**e-2. 甕棺墓【中型棺】**

**7ST100( 図 70)**

調査区ほぼ中央にて検出したもので、遺構上半を欠失している。棺内堆積土は上位より茶黄色土（造成土）←灰色粘質土←灰色砂質土であった。棺内土層観察と合わせて、閉塞装置の質について検討を行ったが、土層観察からは明確な結論は導き出せなかった。墓壙規模は検出長軸長 1.22m、短軸長 0.74m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.31m を測る。棺挿入角度は約 6 度、挿入方向は南西方向が想定できる。

**7ST125( 図 70)**

調査区西部にて検出したもので、棺上半部を欠失している。棺内土層は上位より黄茶色砂質土←黄茶色粘質土で相互の層境界は厳密には決し難い。上方細粒化傾向がうかがえるものと判断される。両者とも造成土。墓壙規模は検出長軸長 0.77m、短軸長 0.49m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.2m をそれぞれ測る。棺挿入角度はほぼ水平で、棺挿入方向は南西方向が想定できる。

**7ST145( 図 70)**

調査区西部にて検出したもので、遺構上部の多くを欠失している。棺内堆積土の情報は、遺構残存状況が極めて悪いことから収集できていない。棺使用土器の状態も破碎状況が著しく、平面形状から推して、墓壙外にまで棺使用土器の破片が確認できることから、一旦破碎された後再度配置したような印象を受ける。墓壙規模は明らかにし難いが、検出短軸長は 0.46m、検

出標高から墓壙底までの深さは0.135mを測る。棺挿入角度は計測できないものの、棺挿入方向は南西方向が想定できる。

**7ST175( 図 66)**

調査区北西部にて検出したもので、7ST240を切って検出された。遺構のほとんどを後世の削平によって欠失しており、棺内土層は上位より黄茶色土(床土)←灰茶色砂質土であった。遺構規模は、検出墓壙長軸長0.435m、短軸長0.27m、検出標高から墓壙底までの深さは0.11mを測る。棺挿入角度は約11度、棺挿入方向は南西方向が想定できる。

**7ST180( 図 70)**

調査区北西部にて検出したもので、遺構上部を構成の削平によって欠失している。棺内堆積土は、上位より灰色砂質土←暗茶色粒子を多く含む灰色砂質土←灰色粗粒砂であり、灰色砂質土は棺外土層、あとの2層は棺内土層として考えることができる。なお最上層と下位の二層との層境界に何らかの閉塞装置の痕跡確認を意図していたが、明確に確認はできなかった。遺構規模は検出墓壙長軸長0.99m、短軸長0.62m、検出標高から墓壙底までの深さは0.41mを測る。棺挿入角度はほぼ水平、棺挿入方向は南西方向が考えられる。

**7ST205( 図 71)**

調査区中央部にて検出したもので、遺構上部の多くを後世の削平によって欠失している。棺内土層は、上位より黄茶色土←茶褐色土で、その多くを床土である1層が占めている。遺構規模は、検出墓壙長軸長0.905m、短軸長0.36m、検出標高から墓壙底までの深さは0.08mを測る。棺挿入角度は、遺構残存状況が極めてよくないため明らかにし難い。したがって棺挿入方向は明らかにし難く、棺長軸方向は南東-北西方向が考えられる。

**7ST240( 図 71)**

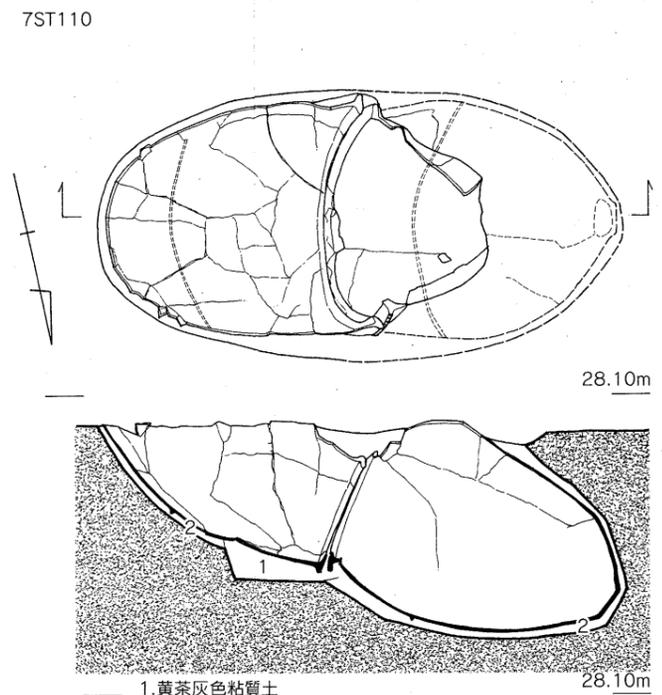
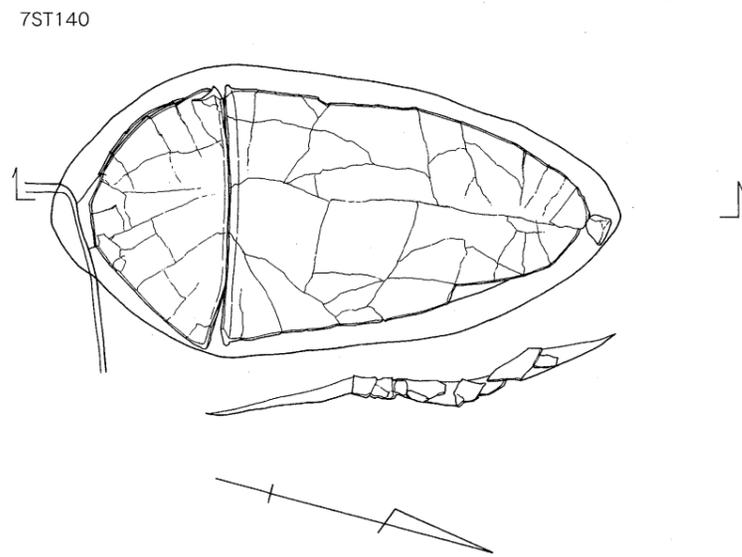
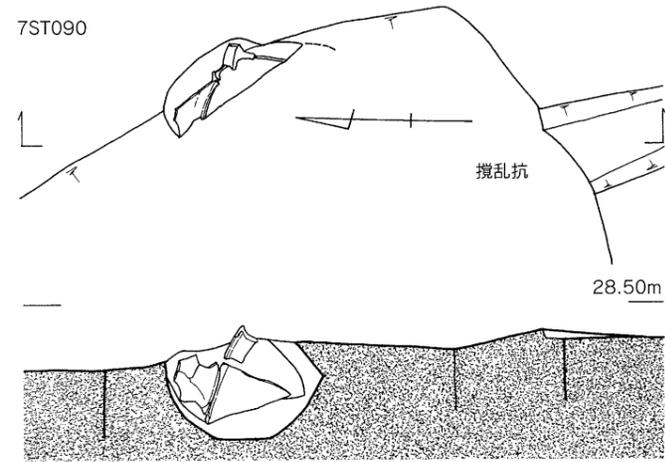
調査区北西部にて確認したもので、7SD235を調査中に検出したこともあり、棺内土層に関する情報を収集できていない。遺構規模は、検出墓壙長軸長1.51m、短軸長0.74m、検出標高から墓壙底までの深さは0.55mを測る。棺挿入角度は17.5度、棺挿入方向は南からを想定できる。

**7ST305( 図 72)**

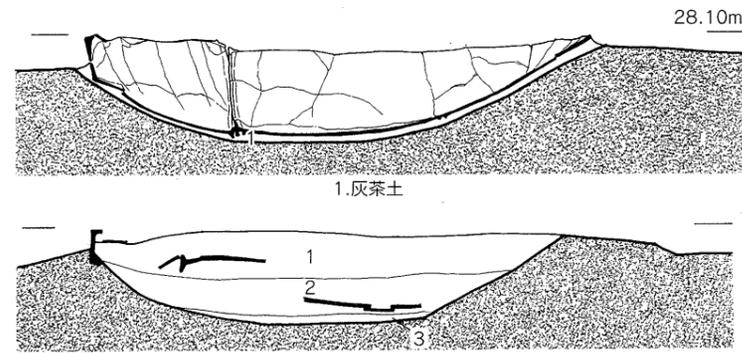
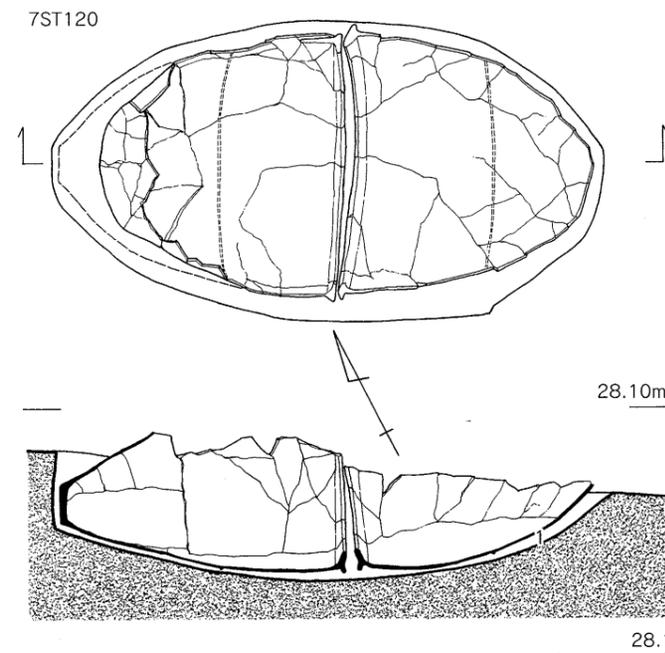
調査区中央北寄りにて検出したもので、棺内土層は上位より白色中粒砂←灰色粘土←白灰色細粒～中粒砂であった。なお棺内には空洞部分が多く、棺埋置後の環境としては良好であったものと推定する。上下棺合わせには黄白色粘土によって目貼りされていた。遺構規模は検出墓壙長軸長1.33m、短軸長0.62m、検出標高から墓壙底までの深さは0.46mを測る。棺挿入角度は約2.5度、棺挿入方向は北東方向が想定できる。

**7ST310( 図 72)**

調査区中央にて検出したもので、造成土下位にて検出した。結果として壺形土器体部のみを使用したもので、当初遺構性格を判断できないまま調査を行っていたこともあり、棺内土層の観察を怠ってしまっている。遺構規模は、検出墓壙長軸長1.05m、短軸長0.71m、検出標高から墓壙底までの深さは0.59mを測る。棺挿入角度は明確ではないものの、約12度が想定でき

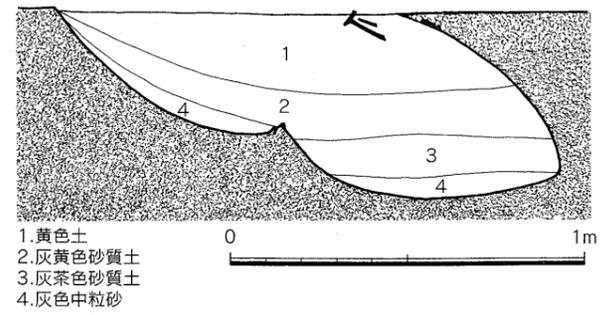


1. 黄茶灰色粘質土  
2. 灰茶色土

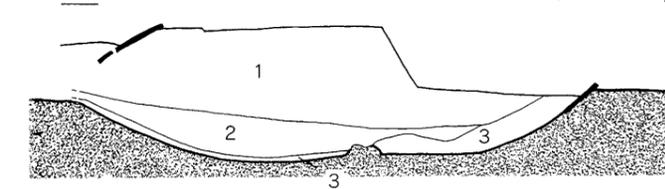


1. 灰茶土

1. 灰茶色砂質土 (中粒)  
2. 灰色砂質土 (細粒)  
3. 淡灰色砂質土 (粗粒)



1. 黄色土  
2. 灰黄色砂質土  
3. 灰茶色砂質土  
4. 灰色中粒砂



1. 灰茶土

1. 灰色砂質土 (細粒)  
2. 灰褐色砂質土 (細粒)  
3. 淡灰色砂質土 (粗粒)

图74. 甕棺墓遺構実測図(9)

そうである。棺挿入方向は、北西方向からの挿入が考えられる。

### e-3. 甕棺墓【大型棺】

#### 7ST090( 図 74)

調査区中央にて検出したもので、墓壙のほぼ全体にわたって盗掘坑によって欠失していた。したがって遺構規模の全体については明らかにできない。わずかに残された上下棺使用土器の口縁部のみが確認できた。なお盗掘坑内から石製剣の破片が1点出土しており、棺内に入れられていた可能性もある。

#### 7ST110( 図 74)

調査区西部にて検出したもので、上棺の大半ならびに下棺の口縁部が欠失していた。上下棺ともに大型甕形土器を使用しているが、下棺使用土器は底部が欠損していた。棺内土層は上位より黄色土←灰黄色砂質土←灰茶色砂質土←灰色中粒砂が観察でき、遺構規模は検出墓壙長軸長 1.49m、短軸長 0.77m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.62m をそれぞれ測る。棺挿入角度は 23.5 度、棺挿入方向は北西方向が想定できる。

#### 7ST120( 図 74)

調査区西部にて確認したもので、上棺底部付近を後世の農業施設によって欠失していた。棺内土層は上位より灰色砂質土←灰褐色砂質土←淡灰色砂質土であった。遺構規模は検出墓壙長軸長 1.55m、短軸長 0.84m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.41m をそれぞれ測る。棺挿入角度は約 6.5 度、棺挿入方向は南東方向が想定できる。

#### 7ST140( 図 74)

調査区西部にて確認できたもので、遺構上半を後世の削平によって欠失していた。土棺内層は上位より灰茶色砂質土←灰色砂質土←淡灰色砂質土が観察できた。下棺と考えられる大型甕形土器の体部下位の破片が、墓壙外に配列したように確認できており、後世の攪乱行為による移動かどうかは明らかにし難い。遺構規模は、検出墓壙長軸長 1.6m、短軸長 0.835m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.29m を測る。棺挿入角度はほぼ水平が想定でき、棺挿入角度は北北西からが想定できる。

#### 7ST160( 図 75)

調査区西部にて検出したもので、上棺使用土器の底部ならびに遺構上部を後世の削平によって欠失していた。棺内土層は上位より黄茶色土←灰茶色砂質土←暗灰色粗粒砂が堆積していた。遺構規模は検出墓壙長軸長 1.51m、短軸長 0.75m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.505m をそれぞれ測る。棺挿入角度は 14 度、棺挿入方向は南東方向が想定できる。

#### 7ST225( 図 75)

調査区中央にて確認したもので、造成土下位に形成されていたものと考えられる。棺使用土器のあり方に違和感があり、下棺と考えられる大型甕形土器の遺構上半部分の破碎が著しく、これら破碎された破片が敷き詰められたような印象を受ける。棺内土層は上位より黄灰色砂質土←白灰色粘質土←灰色砂質土であり、上層である黄灰色砂質土は造成土の可能性が高い。また墓壙に関しても、棺埋置坑とはズレた位置に棺使用土器が置かれており、当初の棺埋置位置

とは異なっている可能性がある。したがって、遺構規模に関しては最終確認墓壙規模として理解していただきたい。検出墓壙長軸長 2.12m、短軸長 1.2m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.46m を測る。棺挿入角度はほぼ水平、棺挿入方向は明らかにし難いが、棺長軸方向はほぼ東西であると想定できる。

#### 7ST255( 図 75)

調査区中央南寄りで検出したもので、先述した 7ST225 と同様に、棺使用土器上半部が破碎され、再度敷き直されたような印象を受ける。特に下棺は棺使用土器体部上半部分を意図的に欠損させている一方で、下棺使用土器のものと考えられる土器の口縁部が棺上半部に据えられていた。この一連の現象は、先の 7ST225 と同様な現象として捉えられるが、この現象が埋棺者の行為なのか、二次的な行為による現象なのかは、周辺状況を加味した考察が必要となるため後述する。

棺内土層は上位より暗茶灰色砂質土（酸化第二鉄沈澱層）←暗茶灰色砂質土←白色粗粒砂←茶灰色粘土←明白灰色粘土←白色中粒砂であった。観察状況として、最下層の白色中粒砂を除く各層には上棺と考えられる土器破片が混入しており、棺埋置後の崩落土として考えられる。その一方でこれら棺内土層上面に再度棺使用土器破片が置かれていることになる。

遺構規模は、検出墓壙長軸長 1.35m、短軸長 0.81m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.45m をそれぞれ測る。棺挿入角度は約 7 度、棺挿入方向は南西方向が想定できる。

#### 7ST280( 図 76)

調査区中央南端部にて確認したもので、遺構自体が南へ伸びるものと考えられ、遺構規模全形については明らかにし難い。当該遺構出土土器棺は、今次報告遺跡内において最も古期のもので、調査区内での状況では単棺と考えられる。なお閉塞装置に関する情報を得ることができなかったことから、明らかにできない。棺内土層は上位より灰褐色粘質土←灰茶色粘質土←灰茶色砂質土であった。遺構規模は先述したように明らかにし難いが、棺挿入角度 6.5 度、棺挿入方向は南東方向が想定できる。なお棺上半部分が細片化しており、見方によっては、これまで記載してきた 7ST225・7ST255 同様に破片配置とも見える。

#### 7ST285( 図 76)

調査区中央にて検出したもので、後述する 7ST320 とは切り合い関係があり、当該遺構が後出する。棺内土層は上位から灰色シルト層←茶灰色砂質土←淡灰緑茶色砂質土（細粒）←淡灰色砂質土（中粒）である。各層ともに水平堆積しているが、棺使用土器破片の混入状況から上位二層は明らかに棺崩壊時の堆積層と考えられる。また各層の粒度が上方細粒化傾向を示していることから、棺内堆積土全てが棺崩壊時の土層の可能性が高いと判断される。

遺構形状は、棺埋置箇所南東側に階段状の付帯施設が確認できており、南方向から納棺のための進入路としての利用方法が想定できる。なおこの付帯施設内の堆積土は、上位より暗黄灰褐色砂質土←灰褐色砂質土←明灰褐色砂質土であった。土層観察からは明確な人為性は看取できず、自然堆積の可能性も残る。しかし土層層相からは堆積に要する時間幅は析定できないことから、納棺後の放置期間を想定すべきかどうかは明らかにし難い。遺構規模は、埋棺部分

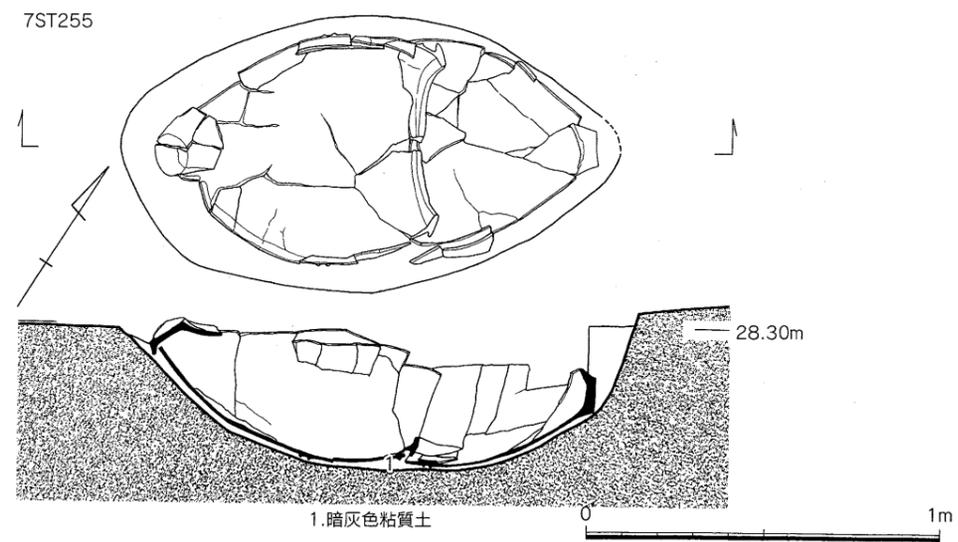
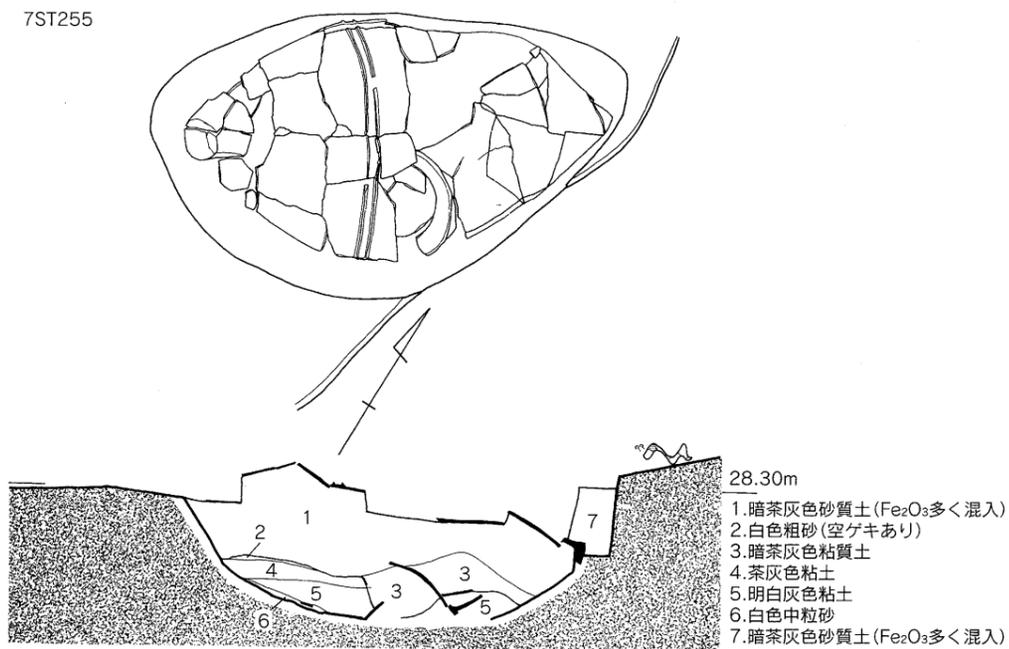
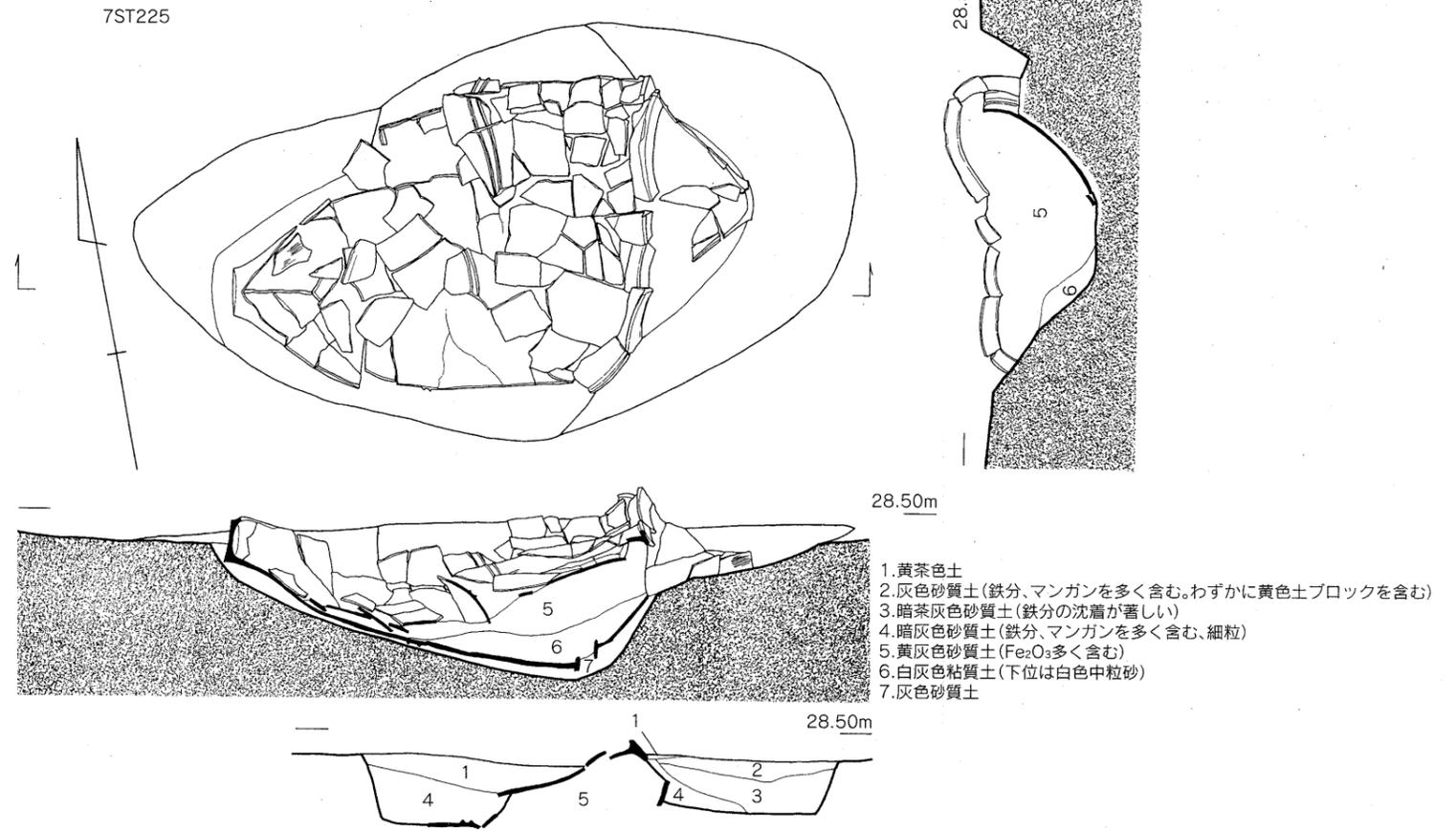
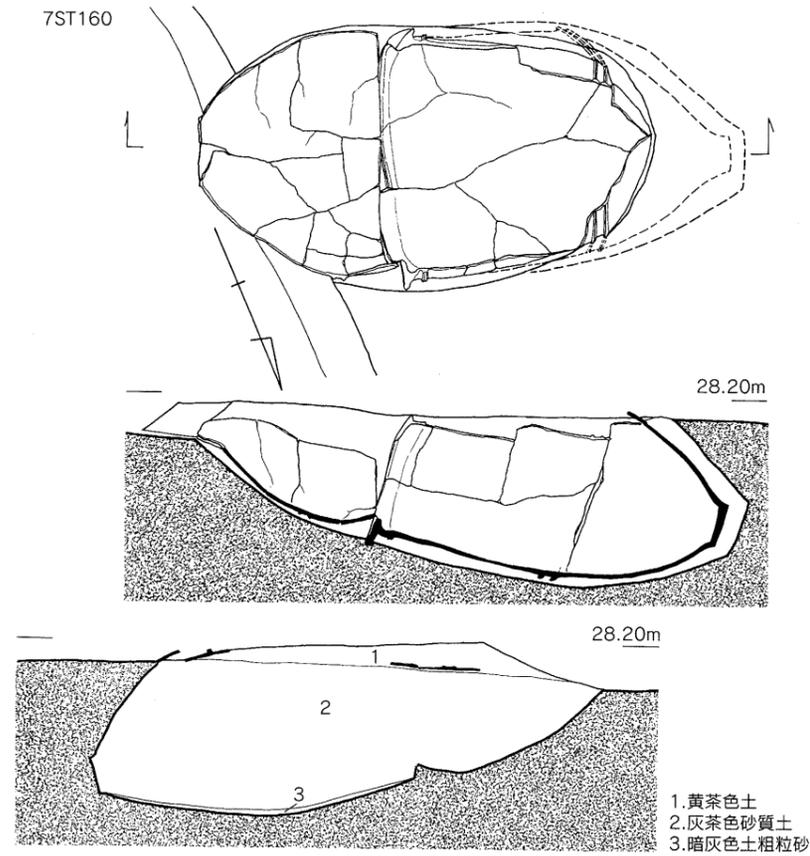
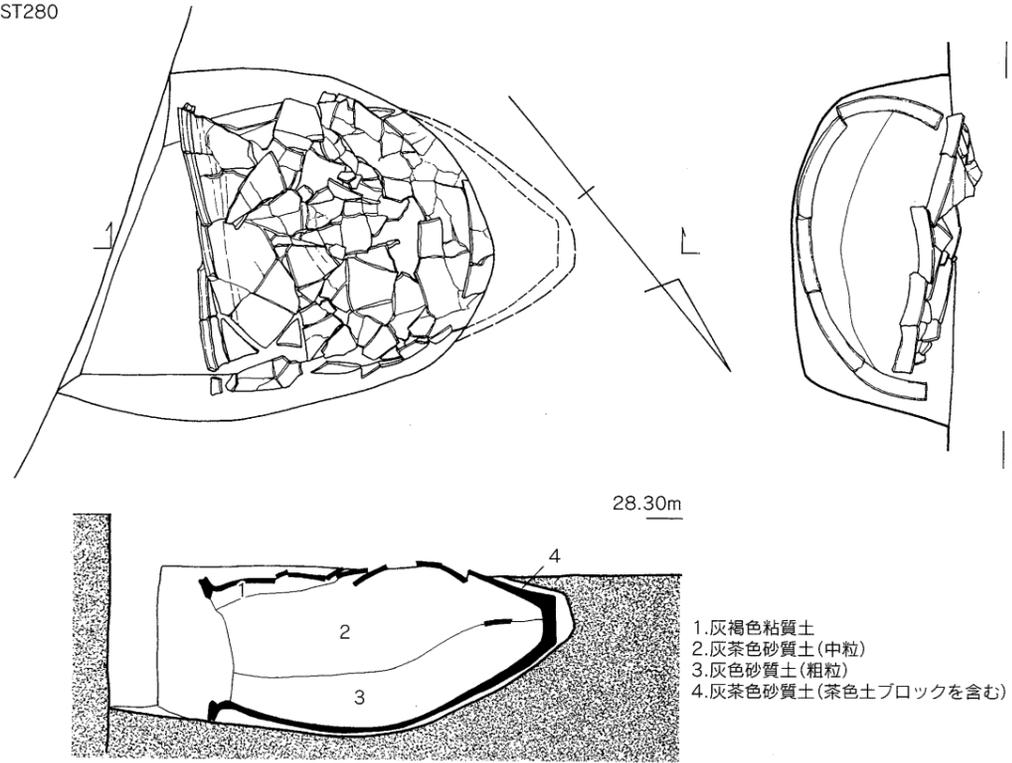
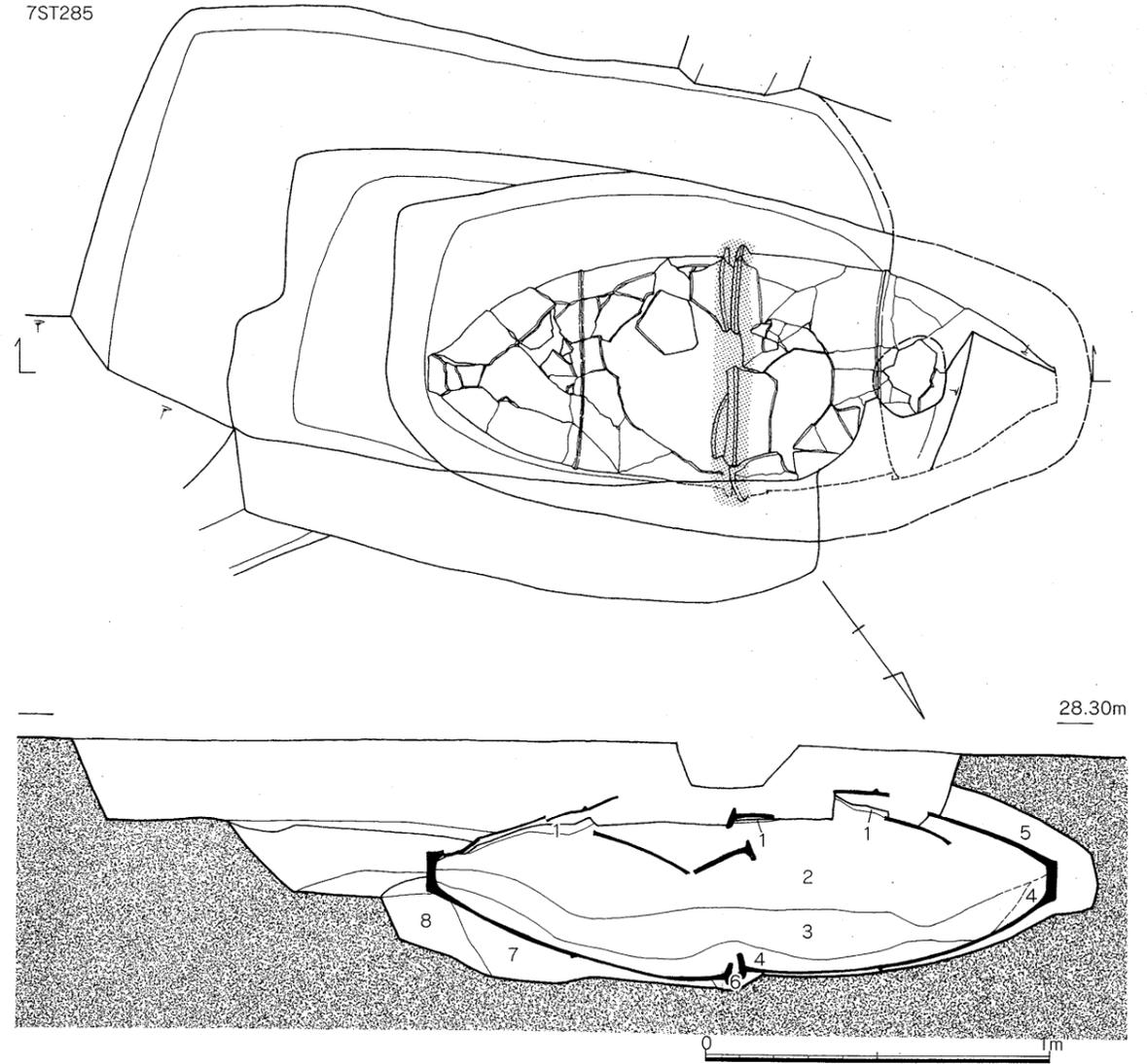


図75. 甕棺墓遺構実測図(10)

7ST280



7ST285



7ST325

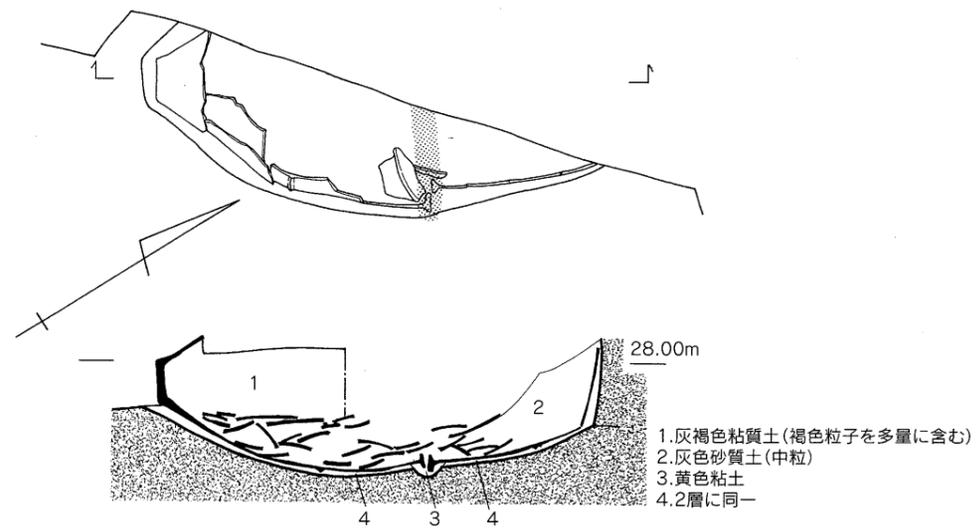
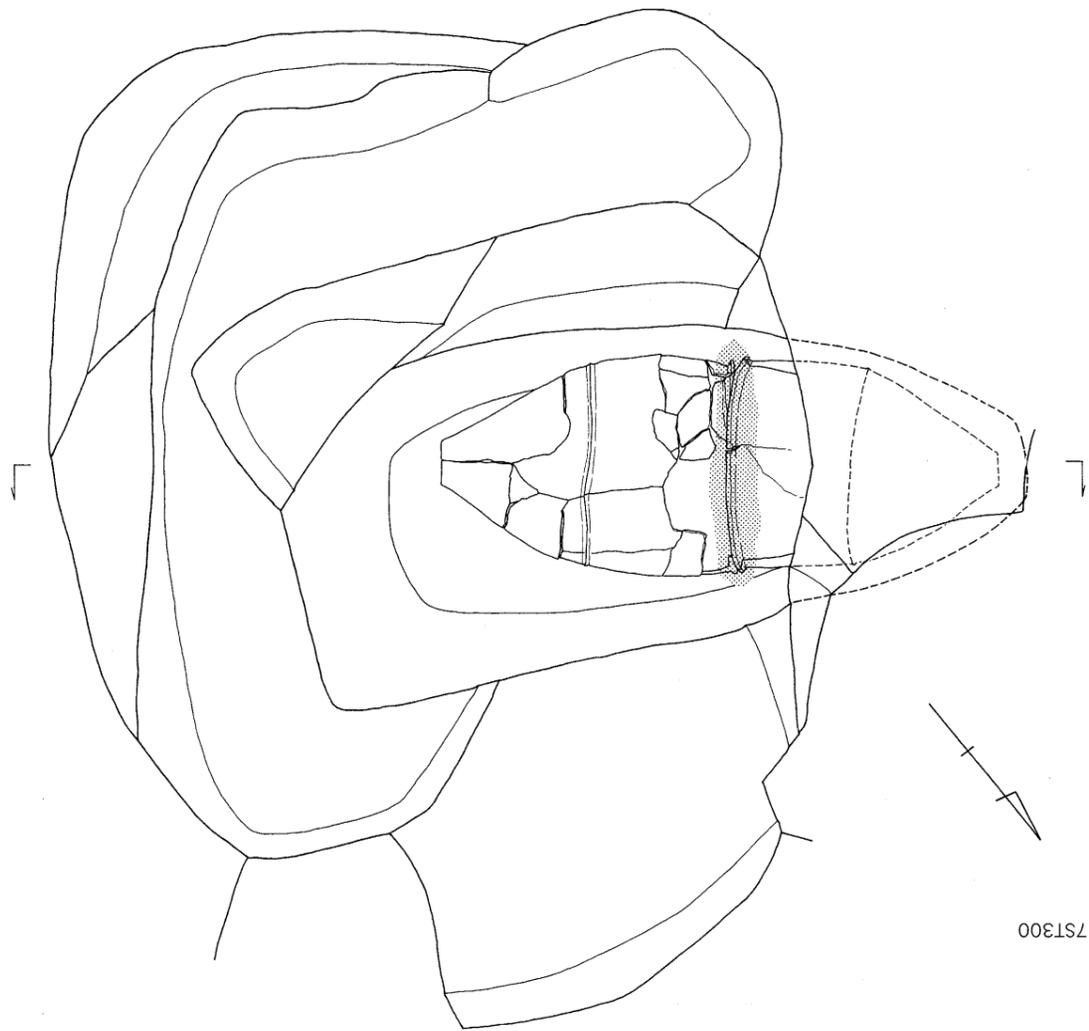
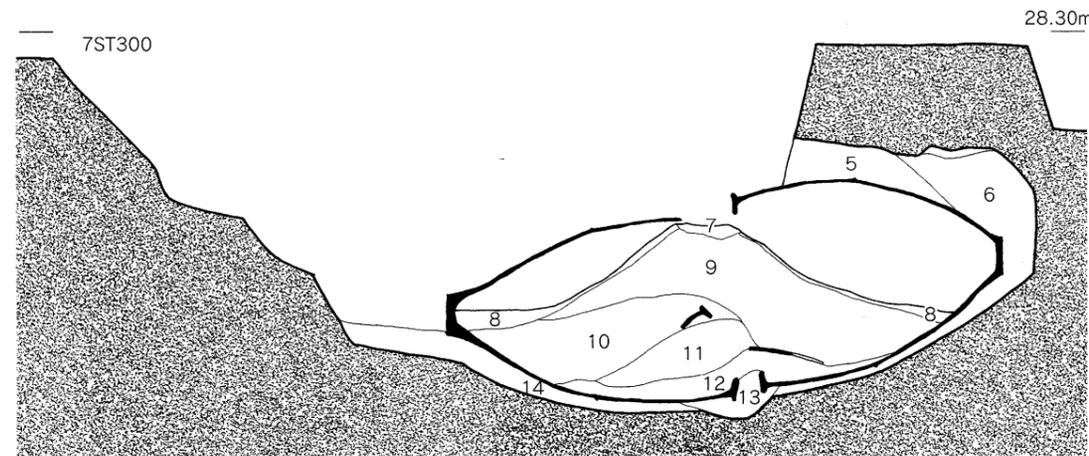


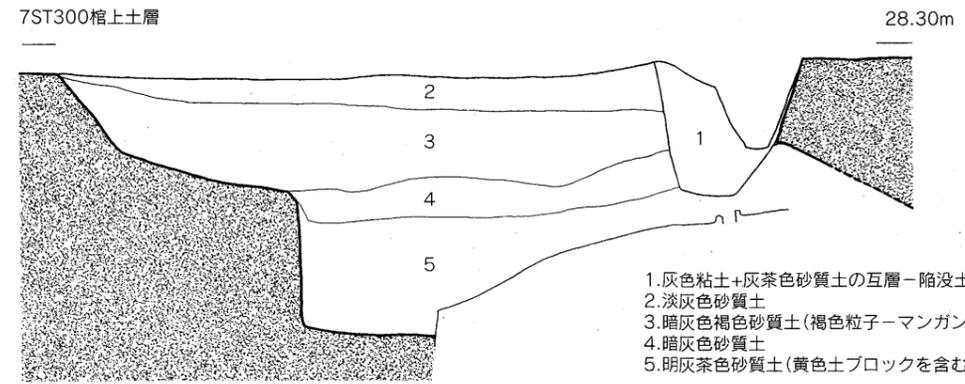
図76. 甕棺墓遺構実測図(11)



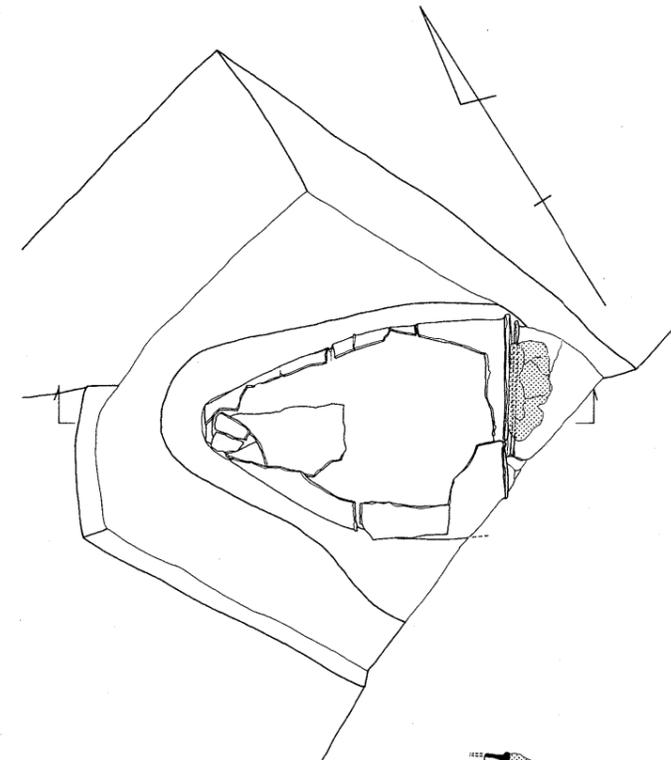
00E1SL



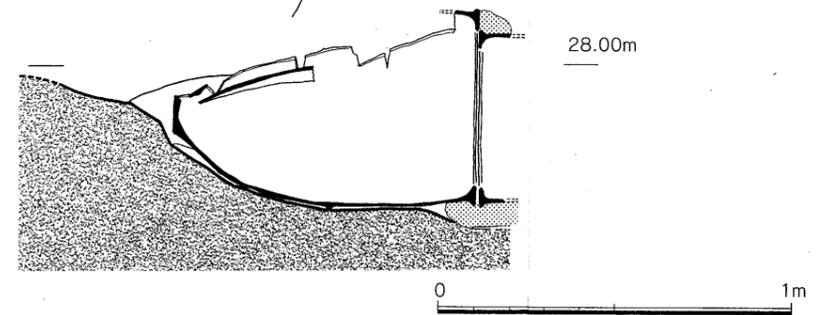
- 5. 灰色粘土+灰茶色砂質土の互層-陥没土
- 6. 淡灰黄色砂質土(やや粘性あり、細粒)
- 7. 茶灰色土(灰色砂混り)
- 8. 淡灰色粘質土(シルト系)
- 9. 淡灰茶色砂質土(やや粘性あり)
- 10. 茶灰色砂質土(粗粒)
- 11. 灰緑茶色砂質土(細粒)
- 12. 淡緑灰色砂質土(やや粘性あり、極めて細かい粒子)  
(下部に灰茶色シルト質土が部分的にあり)
- 13. 黄色粘土
- 14. 灰色砂質土(粗粒)



- 1. 灰色粘土+灰茶色砂質土の互層-陥没土
- 2. 淡灰色砂質土
- 3. 暗灰色褐色砂質土(褐色粒子-マンガン、鉄分を多量に混入)
- 4. 暗灰色砂質土
- 5. 明灰茶色砂質土(黄色土ブロックを含む)



7ST370



0 1m

図77. 甕棺墓遺構実測図(12)

のみは長軸長 2.05m、短軸長 1.31m を測り、納棺時の付帯施設までを加味した場合は、長軸長 2.94m、短軸長 1.31m、検出標高から墓壙底までの深さは 0.72m を測る。棺挿入角度はほぼ水平で、付帯施設のあり方を考慮した場合の納棺方向は南方向から棺埋置場所へ進入し、棺挿入方向は南東方向が想定できる。

7ST300( 図 77)

調査区中央南寄りで確認したもので、先の 7ST285 ならびに後述する 7ST320 の東側に検出している。当該遺構にも先述した 7ST285 同様に階段状の付帯施設が確認でき、この付帯施設

内の堆積土は、おそらく納棺後の埋棺時の埋土と考えられたことから情報を収集した。結果は上位より灰色粘土・灰茶色粘質土の互層(陥没土) ← 淡灰色砂質土 ← 暗灰褐色砂質土 ← 暗灰色砂質土 ← 明灰茶色砂質土であった。明らかな人為性堆積物とする根拠に乏しく、水平堆積であったということのみが根拠として上げられる。なお最上層の陥没土は、下位にある棺の合わせ部分の隙間に合致していることから、棺内への泥流入にともなう陥没と推定できる。棺内堆積土は、上位より灰色砂混じり茶灰色土 ← 淡灰色粘質土 ← 淡灰茶色砂質土 ← 茶灰色砂質土 ← 灰緑茶色砂質土 ← 淡緑灰色砂質土であり、棺使用土器の破片混入状況から最下層を除く上位の堆積土は明らかに棺崩壊時のものと考えられる。なお最下

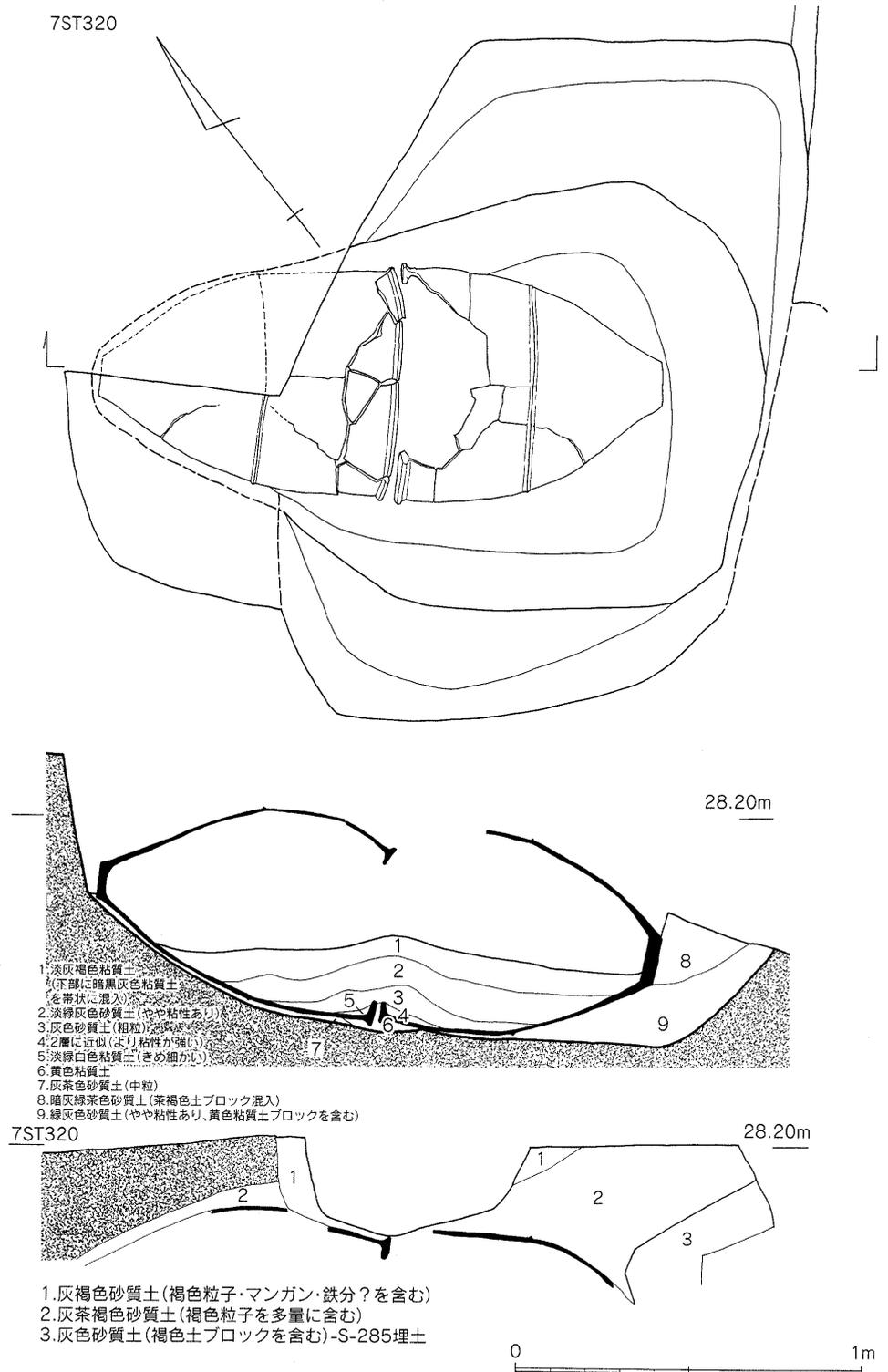


図78. 甕棺墓遺構実測図(13)

層に関しては、納棺後の遺体腐敗土ないしは崩壊までの流入土であると考えられる。

遺構規模は、埋棺部分の長軸長 2.06m、短軸長 0.9m を測り、納棺時の付帯施設を加味した場合の長軸長は 2.7m、短軸長 2.31m、検出標高から墓壇底までの深さは 1.06m をそれぞれ測る。棺挿入角度は約 5.5 度を測り、付帯施設のあり方を考慮した場合、納棺時の進入方向は南からを想定でき、棺挿入方向は南東方向であった。

#### 7ST320( 図 78)

調査区中央部にて確認したもので、先述した 7ST285 に切られており、先行するものである。遺構残存状況は良好で、棺内への流入土も少なく今次調査において最も良好な状況で確認できた。棺内堆積土は、上位より淡灰褐色粘質土←淡緑灰色砂質土←灰色砂質土←淡緑灰色砂質土←淡緑白色粘質土であり、棺上面の僅かな陥没からの進入土と考えられる。堆積土は薄く、棺内には空洞状の空間が多く残されていた。

遺構形状は、棺埋置箇所南東部分に階段状の付帯施設が検出され、その状況から西ないしは東からの納棺行為が想定できる。ただし棺埋置箇所南には先述した 7ST285 が造営されており、この部分の付帯施設が欠失してしまっている可能性も残されている。遺構規模は埋棺部分の長軸長 1.95m、短軸長 1.22m を測り、付帯施設までを加味した場合は、長軸長 1.975 m、短軸長 1.96m を測る、検出標高から墓壇底までの深さは 0.82m を測る。棺挿入角度は 8 度、付帯施設を考慮した納棺時の進入方向は東西方向が想定でき、棺挿入方向は南東方向であった。

#### 7ST325( 図 76)

調査区中央北端にて確認したもので、調査区北側へ展開するものと考えられ、遺構全形については明らかにし難い。棺内には棺崩壊後の土の流入が顕著であり、上位より灰褐色砂質土←灰色砂質土であった。これらに混じって棺使用土器の破片が混入している。遺構規模に関しては明らかにし難く、棺挿入角度はほぼ水平であった。棺長軸方向は南方向が想定できる。

#### 7ST370( 図 77)

調査終了後の補足調査にて検出したもので、調査区の中央南端部で確認している。遺構規模は調査区南へ展開することから明らかにし難い。不時発見に近い状況での確認であったことから、観察事項が限定されるものの、棺内土層は上位より暗灰褐色粘土←淡灰茶色土が流入していた。上下棺の合わせには、淡黄色粘土による目貼りが行われている。棺挿入角度はほぼ水平で、棺長軸方向は西方が想定できる。

### f. 土坑

#### 7SK030

調査区北端部にて検出したもので、7SD035 が連続している。溝 7SD001 へ先の 7SD035 を介して溜め枡状を呈しており、一連の遺構として解することが可能と考える。長軸長 1.6m、短軸長 1.2m の長方形を呈し、深さは 0.2m 前後を測る。堆積土は暗灰色土が堆積していた。

#### 7SK365( 図 79)

補足調査にて検出したもので、調査区外へ展開するものと考えられ、全形に関しては明らかにし難い。検出標高から土坑底までの深さは、0.42m を測り、遺構内から壺形土器などが出土

している。遺構内堆積土は、上位から暗灰色土←淡灰色土（砂混じり）であった。

7SK365

**D. 遺物**

**a. 掘立柱建物**

7SB040 (図 80 - 1)

弥生土器

甕 (1) 甕 1b の口縁部片である。

7SB040f (図 80 - 2・3)

弥生土器

甕 (2) 甕 1b の口縁部から胴部上半の破片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

土製品

投弾 (3) 土製の投弾である。一部欠損している。表面をナデ仕上げている。

7SB040g (図 80 - 4・5)

弥生土器

甕 (4・5) 4・5 は甕 1a の口縁部から胴部上半の破片である。4 は口縁部下に突出度の低い三角突帯を貼り付けている。5 の外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。

7SB040h (図 80 - 6)

弥生土器

甕 (6) 甕 1b の口縁部片である。

7SB040i (図 80 - 7)

弥生土器

器種不明 (7) 底部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

7SB040j (図 80 - 8)

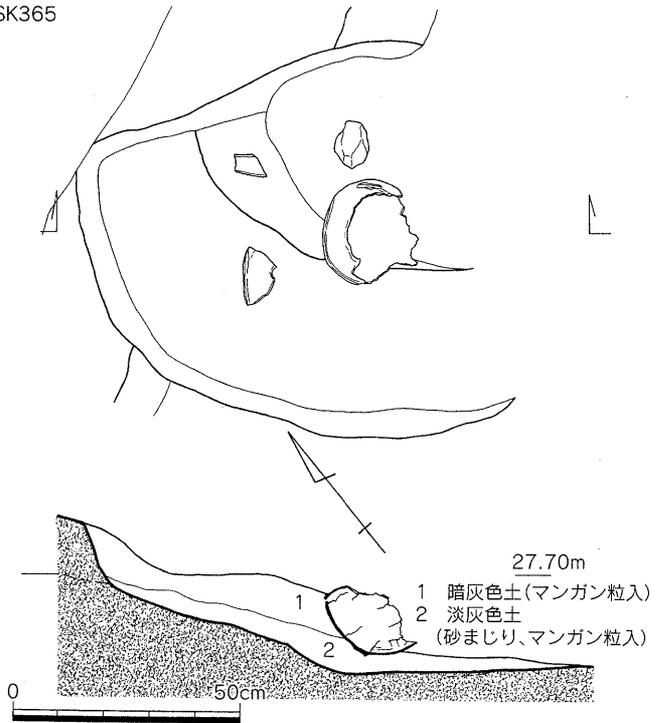


図79. 7SK365 遺構実測図 (13)

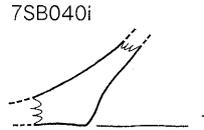
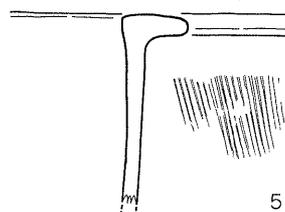
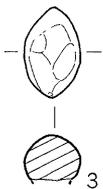
7SB040

7SB040g

7SB040h

7SB040j

7SB040f



7SB055

7SB040m

7SB065



図80. 掘立柱建物出土遺物実測図 (S=1/3)

弥生土器

器種不明 (8) 底部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

7SB040m (図 80 - 9)

弥生土器

甕 (9) 甕 1a の口縁部片である。外面には煤が付着している。

【埋没時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式古段階) である。

7SB055 (図 80 - 10)

弥生土器

器種不明 (10) 底部片である。内面にはナデ調整が観察される。

【廃絶時期】 中期前半 (須玖Ⅰ式) と考えられる。

7SB065 (図 80 - 11・12)

弥生土器

甕 (11・12) 11・12 は甕 1b の口縁部片である。

【形成・埋没時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式) である。

b. 竪穴住居

7SI020f (図 81 - 1)

弥生土器

壺 (1) 壺 1a の口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

【形成・埋没時期】 中期初頭 (城ノ越式) である。

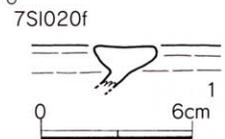


図81. 竪穴住居跡出土遺物実測図 (S=1/3)

c. 柵

7SA015 (図 82 - 1)

弥生土器

甕 (1) 甕 1a の口縁部片である。口縁端部を欠損している。

【形成・埋没時期】 中期前半 (須玖Ⅰ式新段階) である。

7SA045 (図 82 - 2 ~ 4)

弥生土器

壺 (2) 壺 1a の口縁部片である。外面には斜方向のミガキ調整が施されている。内外面ともに丹塗りである。

甕 (3・4) 3は甕 1b、4は甕 1c の口縁部片である。内外面ともに器面風化が著しく、調整等は不明である。

【埋没時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式) である。

d. 溝

7SD001 茶色土 (図 83 - 1 ~ 3)

弥生土器

甕 (1・2) 1・2は甕 1b の口縁部片である。器面は摩滅しており、調整等は不明である。

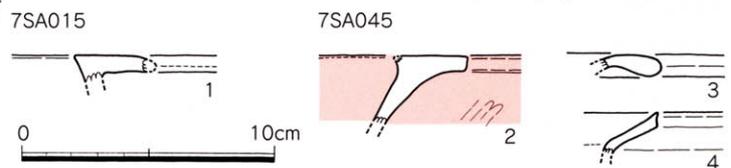


図82. 柵列出土遺物実測図 (S=1/3)

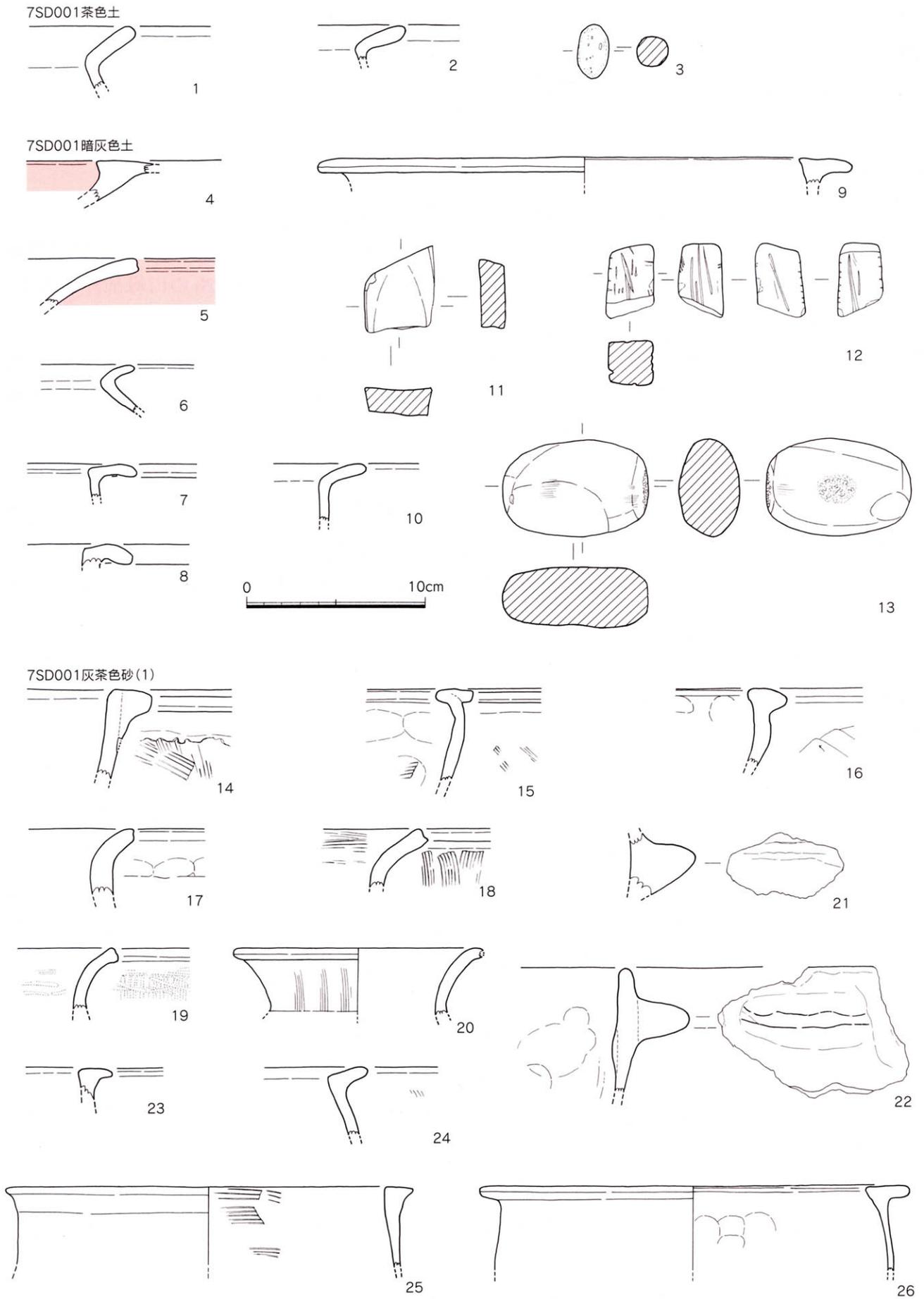


图83. 溝出土遺物実測図(1) (S=1/3)

## 石製品

**投弾 (3)** 凝灰岩製の石製投弾である。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式新段階）である。

**7SD001 暗灰色土**（図 83 - 4 ~ 13）

## 弥生土器

**高坏 (4)** 高坏 a の口縁部片である。内面には丹塗りが施されている。

**壺 (5・6)** 5 は壺 1b の口縁部片である。口縁端部はヨコナデにより凹んでいる。器面は摩滅しており、調整等は不明であるが、外面には丹塗りが施されている。6 は壺 2b の口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

**甕 (7 ~ 10)** 7 ~ 9 は甕 1a の口縁部であり、9 は全周の約 1 / 6 程度が残存している。9 の外面には煤が付着している。10 は甕 1b の口縁部片である。器面風化が激しく、調整等は不明である。

## 石製品

**砥石 (11・12)** 11 は砂岩製の小型砥石である。表面は均等に窪んでいる。12 は砂岩製の小型砥石である。四面ともに使用しており、側面には多くの線状痕が入る。

**磨石 (13)** 玄武岩製の磨石である。表面右側には敲打痕が観察され、裏面中央には擦り面が見られる。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式新段階）である。

**7SD001 灰茶色砂**（図 83 ~ 85 - 14 ~ 44）

## 弥生土器

**鉢 (14 ~ 16)** 14 ~ 16 は鉢 a の口縁部片である。14 は粘土紐を口縁部上端まで積み上げた後、口縁部外面側に太い粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形している。粘土紐が剥離した部分には斜方向の刷毛目が残存しており、刷毛目調整後に口縁部が成形されたことがわかる。15 は口縁部を内湾させた後、外側への折り曲げ、あるいは、外面側に粘土紐を新たに付加することによって口縁部が成形されたと思われる。外面は斜方向の刷毛目調整、内面は刷毛目調整後ナデ仕上げたものと思われる。外面の口縁部下から胴部上半にかけて煤が付着している。16 は内外面ともにナデ調整により仕上げられている。

**壺 (17 ~ 20)** 17 ~ 20 は壺 1b の口縁部片である。口縁端部の形態は各個体で異なっている。17・19 は平坦な面を形成している。18 は凹みを形成している。20 は丸みをもたせている。器面調整については、17 は内外面ともにナデ調整、18 の外面には縦方向の刷毛目調整、内面には横方向の刷毛目調整、19 の外面には縦方向後横方向のミガキ調整、内面には横方向のミガキ調整、20 の外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。

**把手 (21・22)** 21・22 は把手を有する胴部の破片である。22 は口縁部が残存しており、鉢 d と考えられる。両個体ともに砂粒を多く含む粗製品である。

**甕 (23 ~ 39)** 23 ~ 28 は甕 1a の口縁部であり、25 は全周の約 1 / 6、26 は全周の約 1 / 6、27 は全周の 1 / 4、28 は全周の約 1 / 5 程度が残存している。外面の器面調整は、摩滅して

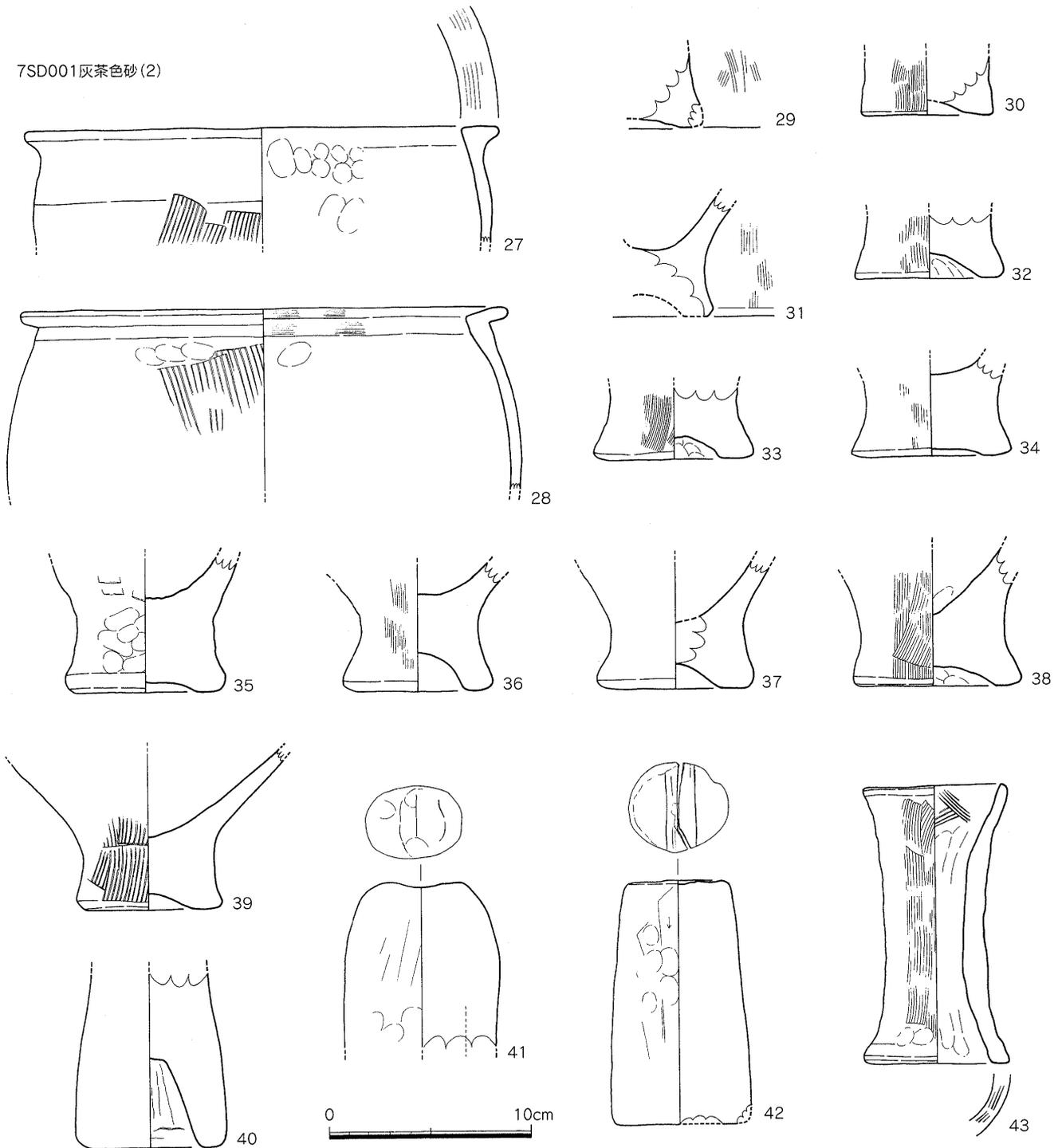
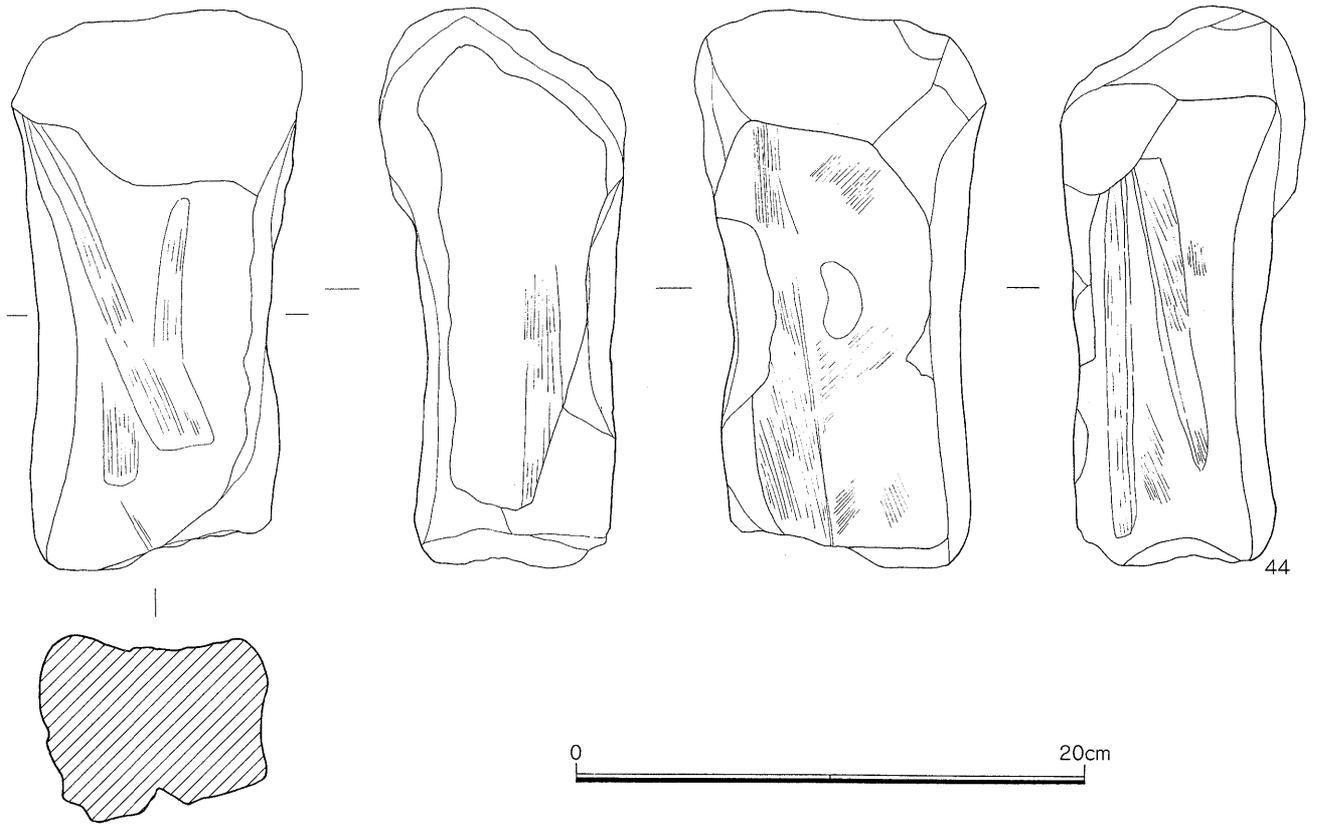


図84. 溝出土遺物実測図(2) (S=1/3)

いるものを除いて、基本的に刷毛目調整が施されている。25・28の内面には横方向の刷毛目調整が施されており、26・27の内面には指頭圧痕が確認される。27は口縁部上面にも刷毛目調整が施されている。25・27の外表面には煤が付着し、28の外表面には煤、内面にはコゲが付着している。29～39は甕の底部である。外表面には縦方向の刷毛目調整が施されているものが多いが、35には指頭圧痕が顕著に確認される。内面は各個体ともにナデ調整により仕上げられている。38・39の外表面には煤、31・34～38の内面にはコゲが付着している。

**器台 (43)** ほぼ完形の器台である。外表面は縦方向の刷毛目調整、内表面は刷毛目調整とナデ調整により仕上げられている。脚部下端の一部には刷毛目を確認されることから、刷毛目調整に

7SD001灰茶色砂(3)



7SD001淡灰茶色砂

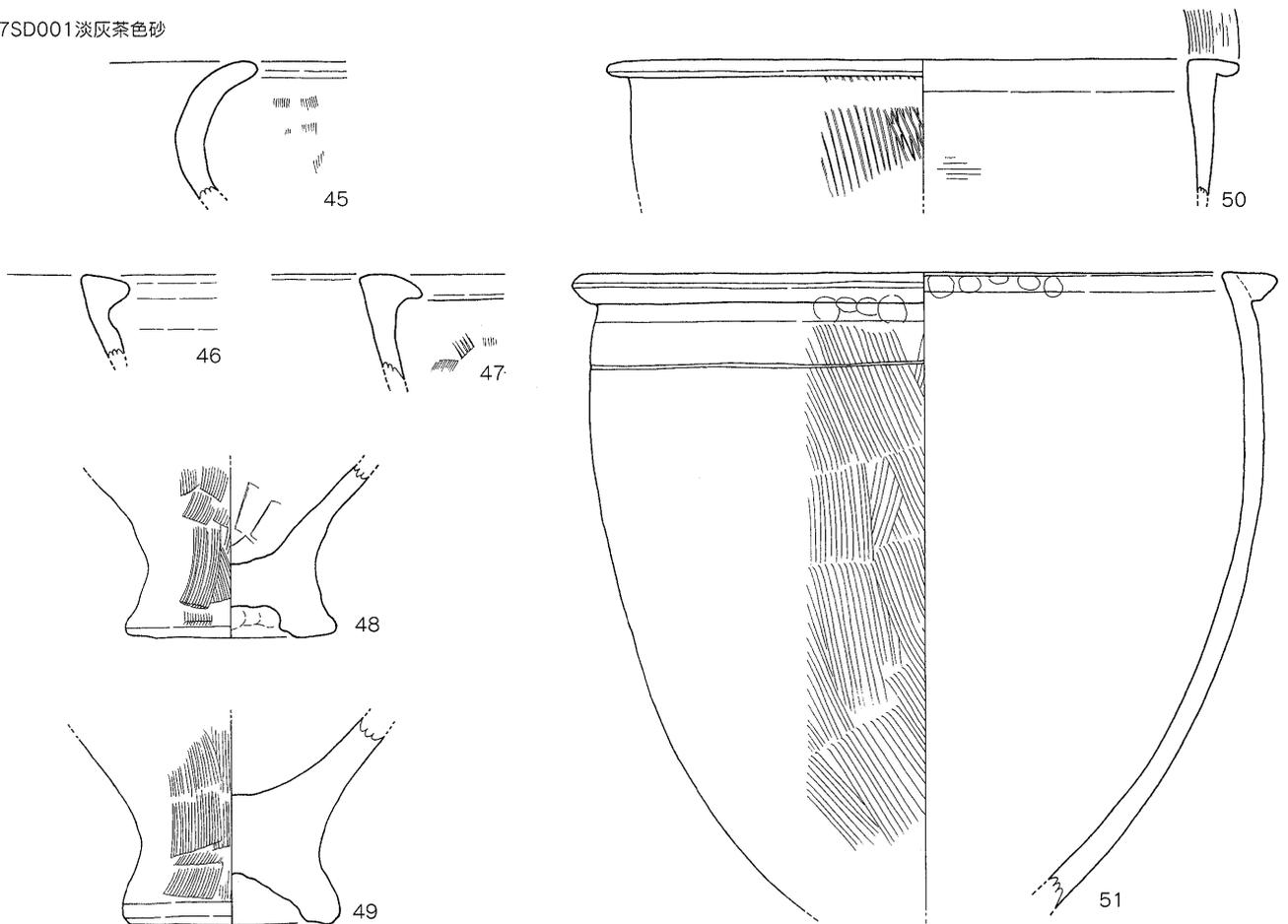


图85. 溝出土遺物実測図(3) (S=1/3)

よって平坦化した後、ナデ仕上げたものと思われる。

### 土製品

**用途不明製品** (40～42) 40～42は不明土製品である。40は器台かとも考えられるが、用途不明である。41・42は精良な胎土が使用されている。41・42の上端部は僅かに凹んでおり、何かを載せていた痕跡と考えられる。40は器面風化が激しく調整は不明だが、41・42はナデ調整で仕上げている。42の器面には煤が付着している。

### 石製品

**砥石** (44) 砂岩質の大型砥石である。四面ともに使用している。

【埋没時期】 中期初頭から中期前半 (城ノ越式～須玖I式古段階) である。

### 7SD001 淡灰茶色砂 (図 85 - 45～51)

#### 弥生土器

**壺** (45) 壺 1b の口縁部片である。外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。外面には煤、内面にはコゲが付着している。

**甕** (46～51) 46・47・50は甕 1a の口縁部であり、50は全周の約 1/8 程度が残存している。50の外面には縦方向の刷毛目調整が観察されるが、口縁部直下の刷毛目は口縁部整形時のヨコナデにより切られていることから、刷毛目調整の後、ヨコナデが施されたことがわかる。口縁部上面にも刷毛目調整が施されている。50の外面には煤、内面にはコゲが付着している。51は甕 1a の口縁部から胴部下半であり、完存している。口縁部は粘土紐を口縁部上端まで積み上げた後、外面に粘土紐を新たに貼り付けることによって、口縁部が成形されている。口縁部成形時の指押さえの痕跡が口縁部内外面において観察される。外面には縦・斜方向の刷毛目調整が施され、口縁部よりやや下には刷毛目調整後に一条の沈線がめぐらせている。51の外面には煤、内面にはコゲが付着している。特に、胴部下半の煤は酸化しており、強い加熱を受けたものと思われる。48・49は甕の底部片である。兩個体ともに外面には縦方向の刷毛目調整が施され、内面はナデ調整により仕上げられている。48の内面には刷毛目調整工具の痕跡が確認される。48の外面には煤、内面にはコゲが付着している。

【埋没時期】 中期初頭 (城ノ越式) である。

### 7SD001 黒褐色粘土 (図 86 - 52・53)

#### 弥生土器

**壺** (52) 壺の底部であり、完存している。内外面ともに横・斜方向のミガキ調整により仕上げられている。外面には煤が付着し、内面にはコゲが付着していることから、煮沸具として使用されたことがわかる。

### 土製品

**紡錘車** (53) 完形の土製紡錘車である。直径は約 3.6cm、厚さ約 0.9cm をはかる。

【形成・埋没時期】 前期末～中期初頭 (城ノ越式) である。

### 7SD035 (図 86 - 54・55)

#### 弥生土器

7SD010 黒褐色粘土

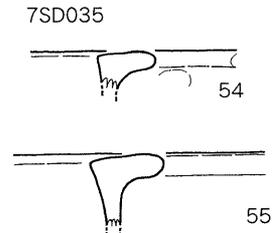
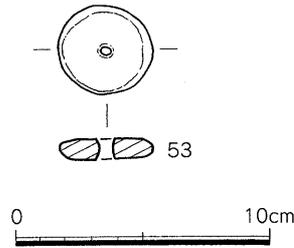
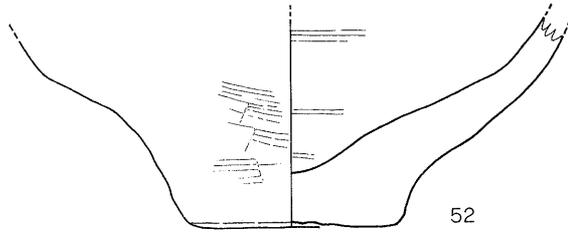


図86. 溝出土遺物実測図(4) (S=1/3)

**甕 (54・55)** 54・55は甕 1a の口縁部片である。器面風化が著しく調整等は不明であるが、54 の口縁部下には指頭圧痕が観察される。54 の外面には煤が付着している。

【形成・埋没時期】 中期前半 (須玖 I 式古段階) である。

7SD070 (図 87 - 1 ~ 6)

### 弥生土器

**高坏 (1)** 高坏 a の口縁部片である。器面の磨耗が著しく、調整等は不明である。

**壺 (2・3)** 2は壺 1a の口縁部片である。器面の磨耗が著しく、調整等は不明である。3は壺 3 の胴部上半であり、全周の 1 / 2 程度が残存している。頸部との境界部には三角突帯、胴部中位には断面コ字状と M 字状の突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面には刷毛目調整、内面には指頭圧痕が観察される。外面は全面丹塗りである。

**甕 (4 ~ 6)** 4・5は甕 1b の口縁部片である。4の口縁端部は丸く収め、5は平坦面をもつように仕上げられている。4の外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。6は甕 1d の口縁部片である。口縁部はかなり立ち上がっており、型式学的に新しい傾向を示す。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。

【埋没時期】 中期後半 (須玖 II 式新段階) である。

7SD070 茶灰色土 (図 87 - 7・8)

### 弥生土器

**甕 (7・8)** 7は甕 1a、8は甕 1b の口縁部片である。両個体ともに器面風化が著しく、調整等は不明である。

【埋没時期】 中期後半 (須玖 II 式古段階) である。

7SD070 黒褐色土 (図 87 - 9 ~ 11)

### 弥生土器

**甕 (9・10)** 9・10は甕 1b の口縁部であり、10は全周の約 1 / 5 程度が残存している。10の外面には刷毛目調整工具の痕跡が観察される。

### 土製品

**投弾 (11)** 土製投弾であるが、一部欠損している。

【埋没時期】 中期後半 (須玖 II 式新段階) である。

7SD070 暗褐色粘土 (図 87・88 - 12 ~ 26)

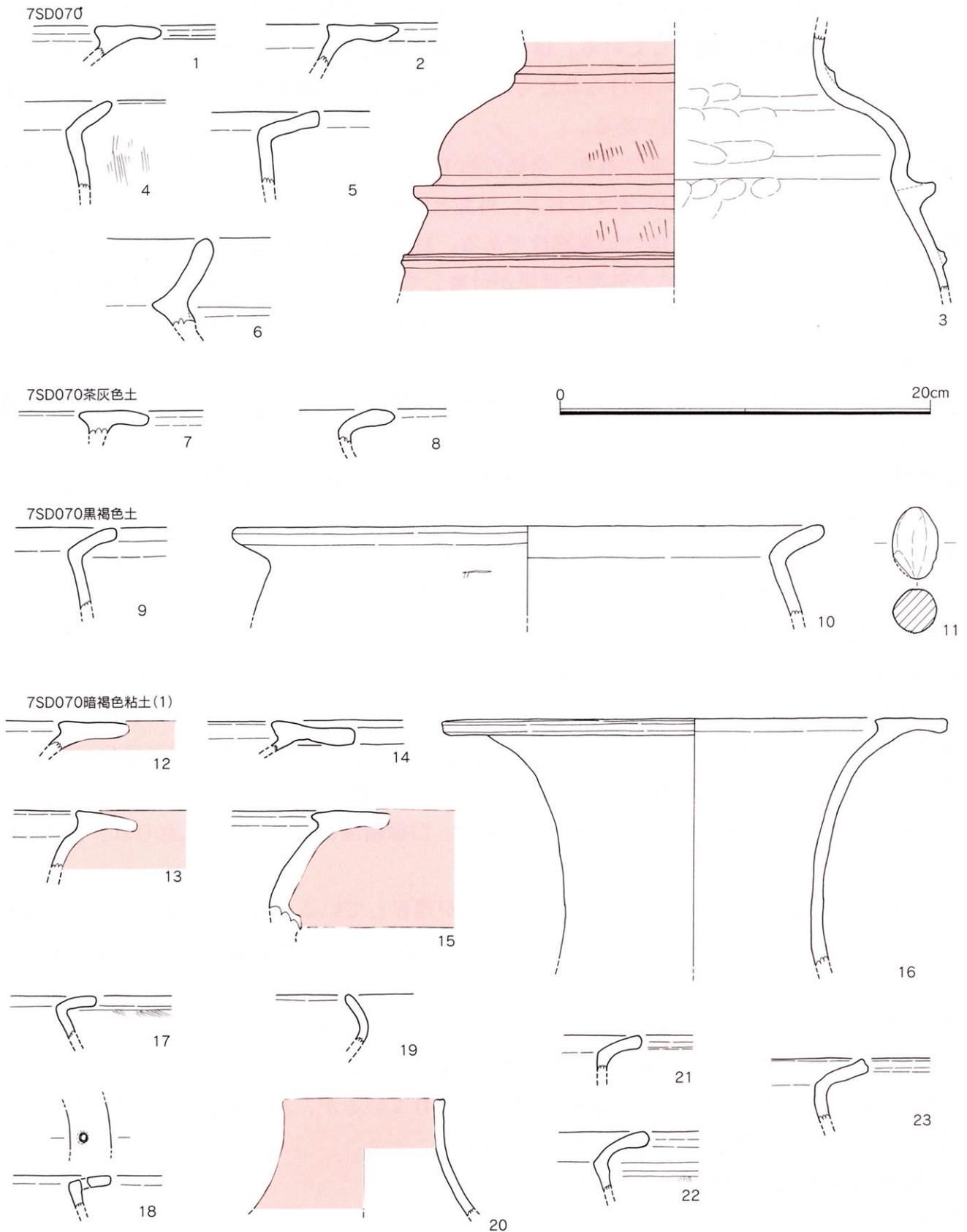


図87. 溝出土遺物実測図(5) (S=1/3)

弥生土器

壺 (12 ~ 19) 12 ~ 14は壺 1aの口縁部片、15・16は壺 1aの口縁部から頸部の破片であり、16は全周の約1/5程度が残存している。15は頸部に断面コ字状突帯をヨコナデにより貼り

付けている。12・13・15は外面丹塗りである。17・18は壺2bの口縁部片である。17の外面には斜方向の刷毛目が残存している。18は口縁部に穿孔をもつものである。断面観察から、孔は口縁部の上下両方向から開けられたものと思われる。19は壺4の口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

**器台** (20) 筒形器台の口縁部であり、全周の約1/2が残存している。口径はそれほど大きくないので、小型の筒形器台と考えられる。外面と内面の一部に丹塗りが施されている。

**甕** (21～23) 21・22は甕1bの口縁部片である。22の口縁部下にはヨコナデによって生じた突帯状の隆起がみられる。22の外面には煤が付着している。23は甕1cの口縁部片である。いわゆる遠賀川以東系の甕であり、口縁端部をヨコナデにより跳ね上げている。

### 石製品

**石斧** (24) 頁岩製の扁平片刃石斧である。前主面の鑄は明瞭であり、表面には酸化鉄が少量付着する。

**石庖丁** (25) 粘板岩製の石庖丁であり、外湾刃半月形を呈する。破片のため孔は遺存せず、背部には研磨を施さない、もしくは剥離している。表面には酸化鉄が付着している。

**砥石** (26) 花崗岩製の大型砥石である。研磨で使用した後に両側から溝状の研磨を行っている。表面には酸化鉄が多数付着している。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式新段階）である。

### 7SD070 灰褐色粘土（図88-27～30）

#### 弥生土器

**高坏** (27) 高坏の脚部であり、全周の約2/3程度が残存している。外面は器面風化が著しく、調整等は不明であるが、脚部内面には成形時の絞り痕が観察される。

**壺×高坏** (28) 壺1a×高坏aの口縁部片である。口縁端部には刻み目が入れられ、外面と内面の一部には丹塗りが施されている。

**壺** (29) 壺の頸部であり、全周の約1/2程度が残存している。頸部と胴部の境界には突帯が貼り付けられ、突帯上にはX字状の刺突文が刻まれている。内外面ともに斜方向の粗い刷毛目調整が施されている。

**甕** (30) 甕1bの口縁部から胴部上半の破片である。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。

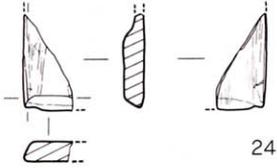
【埋没時期】 29のような弥生時代後期の土器も含まれているが、全体としては中期後半（須玖Ⅱ式新段階）が本土層の埋没時期と考えられる。

### 7SD070 暗灰色粘土（図88-31～39）

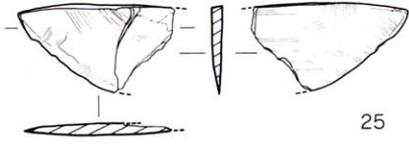
#### 弥生土器

**壺** (31～34) 31は壺1aの口縁部片である。口縁端部下端には刻み目が施されている。内外面ともに丹塗りである。32は壺2dの口縁部片である。口縁部よりやや下に三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面は丹塗りである。33は壺2bの口縁部片である。外面の口縁部下には粘土紐の接合痕が観察される。外面は丹塗りである。34は壺4の口縁部片である。外

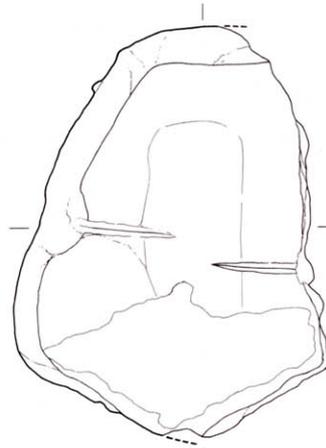
7SD070暗褐色粘土(2)



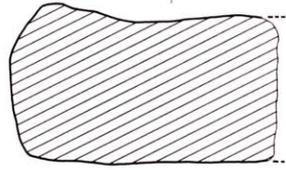
24



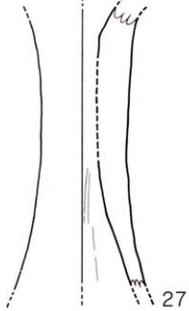
25



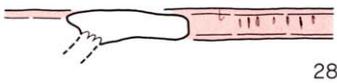
26



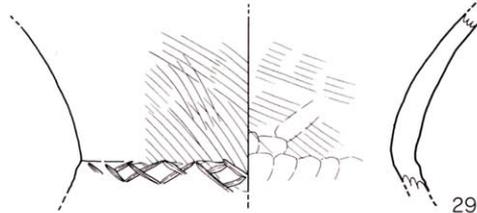
7SD070灰褐色粘土



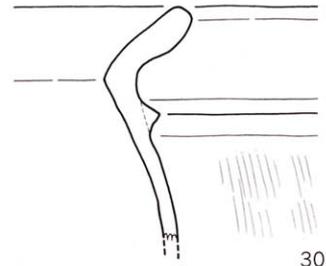
27



28

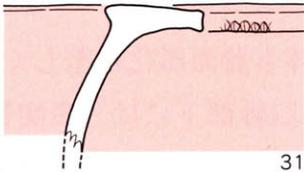


29



30

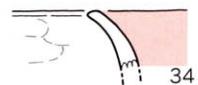
7SD070暗褐色粘土



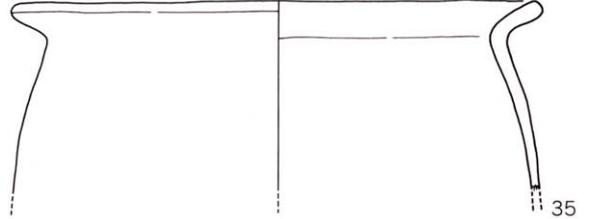
31



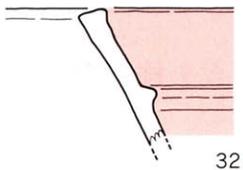
33



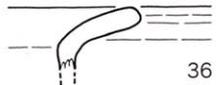
34



35



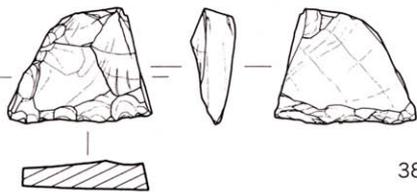
32



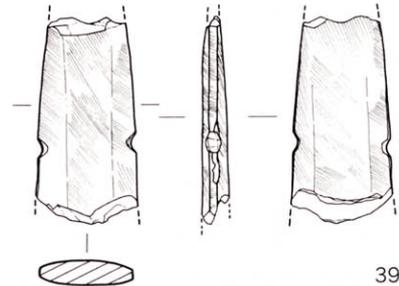
36



37



38



39

图88. 溝出土遺物実測図(6) (S=1/3)

面には丹塗りが施され、内面にはナデ調整が観察される。

**甕** (35～37) 35は甕1bの口縁部から胴部上半であり、全周の1/4程度が残存している。36は甕1bの口縁部片である。35・36ともに器面風化が激しく、調整等は不明である。37は甕1dの口縁部片である。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。器面風化が著しく、調整等は不明である。

### 石製品

**スクレイパー** (38) サヌカイト製のスクレイパーである。刃部はやや粗いながらも、全体に剥離を施している。

**石剣** (39) 粘板岩製の石剣である。基部のみが残存し、側面に柄を付けるための抉りが見られる。

【埋没時期】 図化していないが、弥生時代後期の甕の胴部片が出土しているが、混入品と考えられ、全体的には中期後半（須玖Ⅱ式新段階）が埋没時期と考えられる。

### 7SD070 茶色砂質土 (図 89 - 40)

#### 弥生土器

**甕** (40) 甕1aの口縁部片である。外面には煤、内面にはコゲが付着している。

【埋没時期】 中期前半（須玖Ⅰ式新段階）である。

### 7SD070 淡灰色土 (図 89 - 41)

#### 弥生土器

**甕** (41) 甕1bの口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式新段階）である。

### 7SD070 暗黒色砂混じり粘土 (図 89 - 42～47)

#### 弥生土器

**甕** (42～45) 42・43は甕1b、44は甕1cの口縁部片である。いずれの個体も器面風化が著しく、調整等は不明である。45は甕1dの口縁部から胴部上半の破片である。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面には縦方向、内面には横・斜方向の粗い刷毛目調整が施されている。

### 石製品

**石庖丁** (46) 粘板岩製の石庖丁であり、外湾刃半月形を呈する。背部は研ぎを施さないか、剥離している。刃部には刃こぼれが見られる。

### 土製品

**投弾** (47) 完形の土製投弾である。表面はわずかに摩耗しているが、ナデ調整で作りあげた痕跡が認められる。

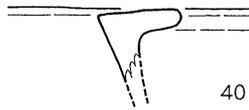
【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式新段階）である。

### 7SD070 茶褐色砂 (図 89 - 48)

#### 弥生土器

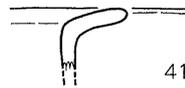
**甕** (48) 甕1aの口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

7SD070 茶色砂質土



40

7SD070 淡灰色土

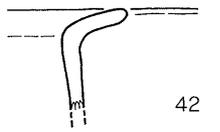


41

国分松本遺跡 第7次調査



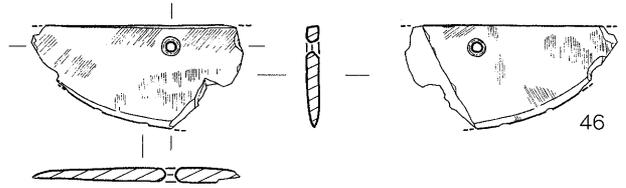
7SD070 暗黒色砂混粘土



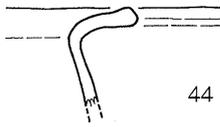
42



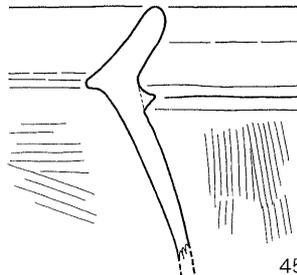
43



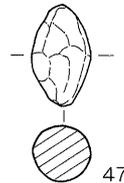
46



44

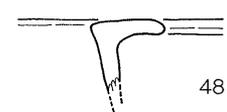


45



47

7SD070 茶褐色砂



48

図89. 溝出土遺物実測図(7) (S=1/3)

【埋没時期】中期前半(須玖I式新段階)と考えられる。

7SD070 灰色粘土 (図 90 ~ 93 - 49 ~ 75)

### 弥生土器

**鉢×高坏 (49)** 鉢dあるいは高坏bの口縁部であり、全周の約1/4が残存している。内外面ともに丹塗りである。

**高坏 (50)** 高坏aの口縁部片である。内外面ともに器面風化が著しく、調整等は不明である。内面は丹塗りである。

**壺 (51 ~ 63)** 51・52は壺1aの口縁部片であり、52は全周の約1/7程度が残存している。51は外面が丹塗りである。53・54は壺1bの口縁部であり、53は全周の約1/5、54は全周の約1/4程度が残存している。53の外面には縦方向のミガキ調整が施されているが、暗文となる可能性もある。53の外面と口縁部内面には丹塗りが施されている。55は壺の頸部から底部であり、全周の約5/6程度が残存している。胴部最大径部位には三角突帯が貼り付けられている。外面には縦・横方向のミガキ調整、内面にはナデ調整が施されており、内面には指頭圧痕が残存している箇所もある。56は壺1aの口縁部から頸部であり、全周の約3/4が残存している。糸島地域を中心に多くみられる形態の壺である。断面M字状突帯を頸部にやや間隔をあけて二条貼り付けている。単位は不明瞭だが、外面はミガキ調整により仕上げられているものと思われる。外面および口縁部内面は丹塗りである。57は壺の胴部片である。胴部最大径部位には断面M字状突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面は丹塗りである。58は壺1bの口縁部から頸部であり、全周の約1/3程度が残存している。遠賀川流域以東に多くみられる形態の壺と思われる。頸部には二条の三角突帯をやや間隔をあけて貼り付けている。内面には、粘土紐接合痕や絞りの痕跡が観察される。外面と口縁部内面は丹塗りである。59は壺4の口縁部から頸部であり、全周の3/4程度が残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。頸部外面には刷毛目調整が施され、内面には成形時の絞り痕跡が観察される。外面は丹塗りである。60は壺1の頸部から胴部であり、全周の1/2程度

が残存している。頸部には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。器面風化が著しく、調整等は不明であるが、器面がピンク色に変色している箇所が観察される。61・62は壺の胴部から底部であり、61は完存、62は全周の1/2程度が残存している。61の胴部最大径部位には断面M字状突帯がヨコナデにより貼り付けられている。外面にはミガキ調整がわずかに観察され、底部内面には指頭圧痕がみられる。62は内外面ともにナデ仕上げであり、外面には丹塗りも施している。63は壺3の胴部であり、全周の約1/2が残存している。頸部と胴部

7SD070灰色粘土(1)

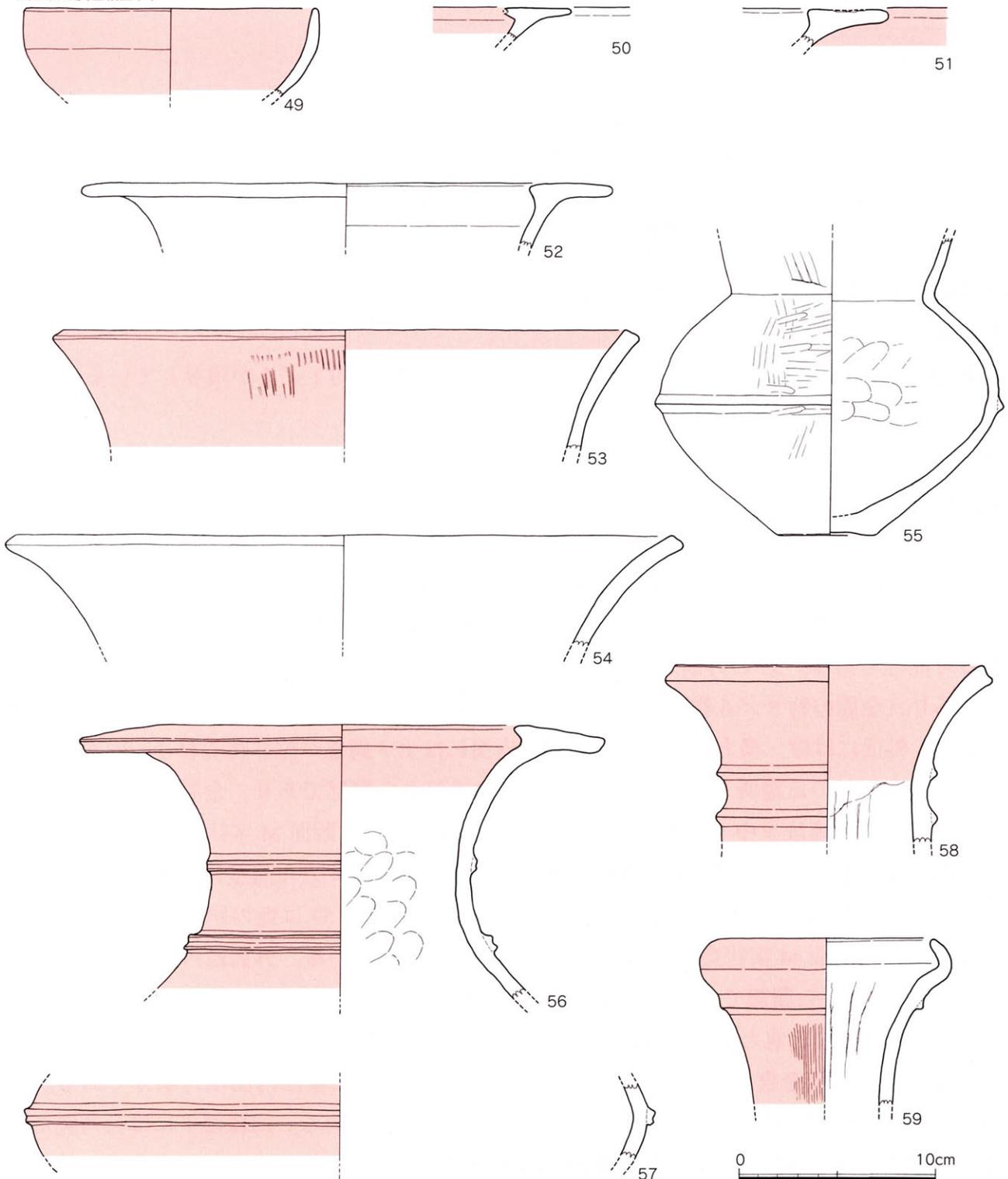


図90. 溝出土遺物実測図(8) (S=1/3)

7SD070灰色粘土(2)

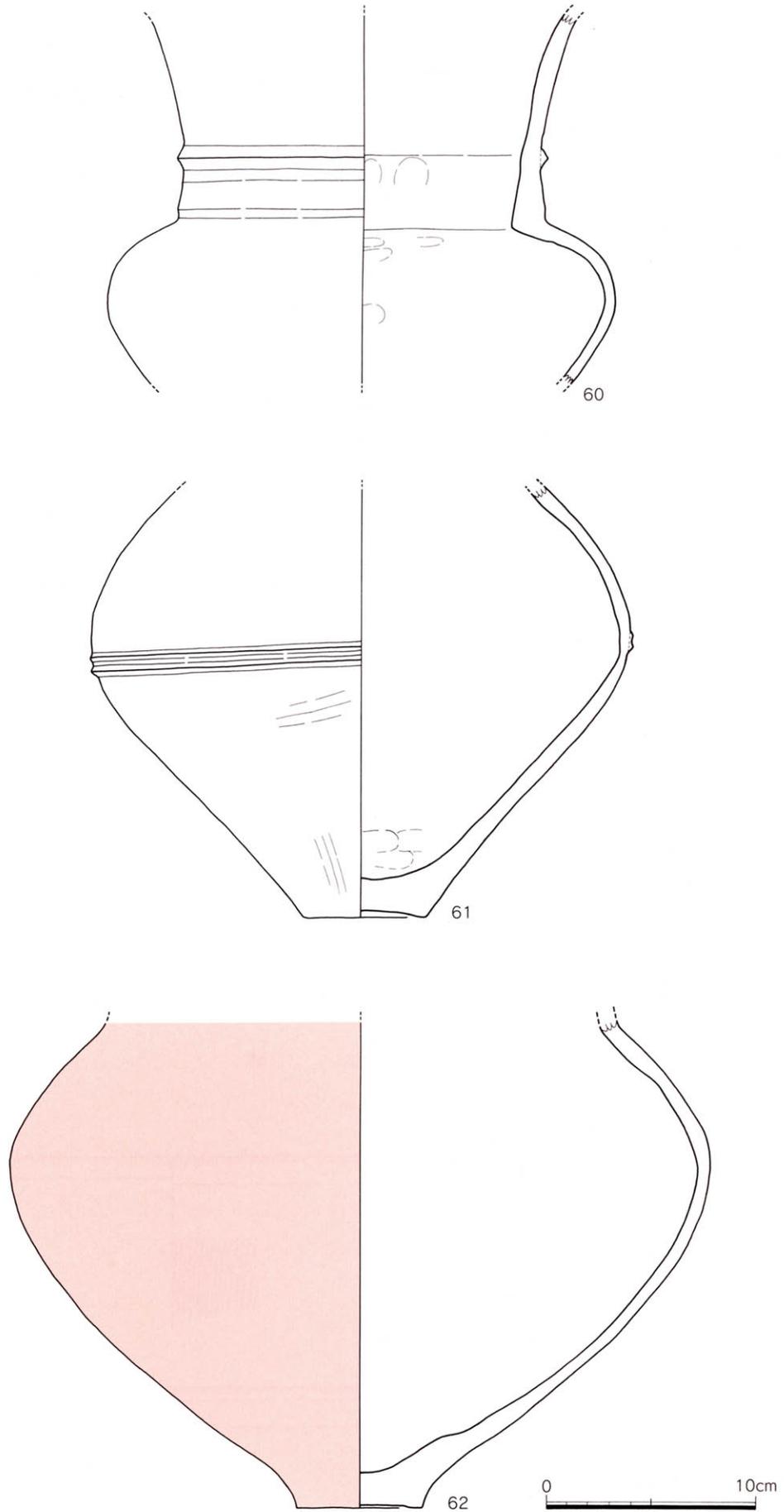


図91. 溝出土遺物実測図(9) (S=1/3)

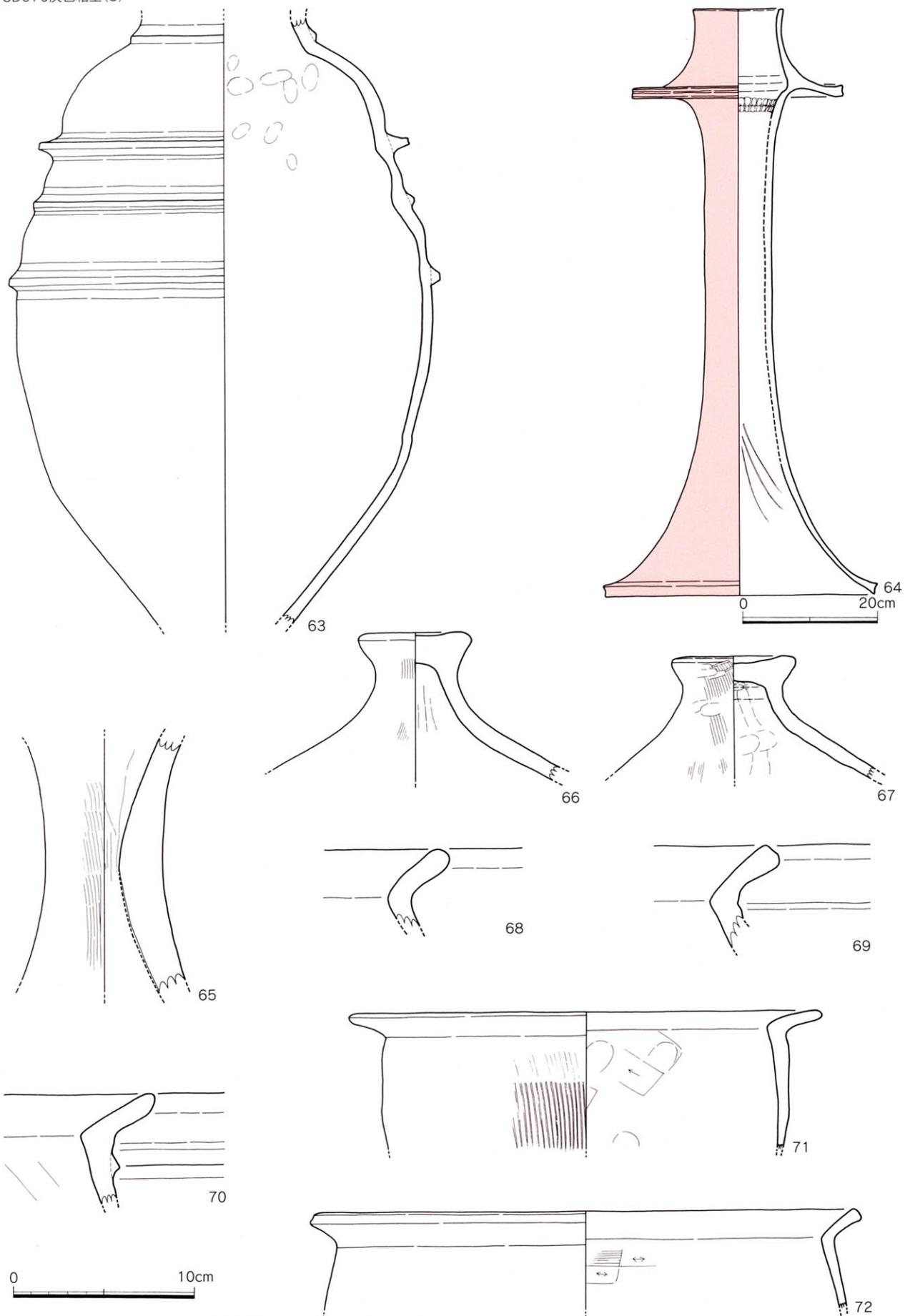


図92. 溝出土遺物実測図(10) (S=1/3・1/8)

の境界には三角突帯を一条、胴部上半には断面コ字状突帯を三条貼り付けている。内外面ともにナデ調整により仕上げられており、胴部内面上半には指頭圧痕が観察される。

**器台 (64～65)** 64は筒形器台であり、ほぼ完形である。外面はナデ調整により仕上げられ、筒部内面の上部には二段の指頭圧痕列、下部には絞り痕跡が観察される。外面は全面丹塗りであったと思われる。65は器台の筒部であり、全周の約3/4が残存している。外面には縦方向の刷毛目調整が施され、内面には絞り痕跡が観察される。

**蓋 (66・67)** 66・67は蓋1の天井部から胴部であり、66は全周の約4/5、67は約2/3程度が残存している。両個体ともに外面は縦方向の刷毛目調整、内面はナデ調整が施されている。66の外面には煤が付着している。

**甕 (68～72)** 68～72は甕1bの口縁部であり、71は全周の約1/6、72は全周の約1/4程度残存している。68・69は器面風化が著しく、調整等は不明である。70の口縁部下にはヨコナデにより三角突帯が貼り付けられている。71の外面には縦方向の刷毛目調整、内面にはナデ調整が施されている。72は器面風化が激しいが、内面の一部に横方向の刷毛目調整が観察される。70～72の外面には煤、内面にはコゲが付着している。

### 石製品

**石鎌 (73)** 緑色片岩製の石鎌である。先端部を欠損し、表面の風化が激しい。

**叩石×磨石 (74)** 泥岩製の叩石あるいは磨石である。欠損が大きいため全形は不明である。全面に研磨痕が見られる。

**石斧 (75)** 玄武岩製の太型蛤刃石斧である。刃部のみの出土であるが、今山産のものであり、使用痕も見られる。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式新段階）である。

### 7SD070 淡灰色粘土 (図 93 - 76)

#### 弥生土器

**甕 (76)** 甕の底部片である。内外面ともにナデ仕上げている。内面にはコゲが付着している。

【埋没時期】 76は中期初頭（城ノ越式）だが、他に丹塗土器片が出土していることから、本土層の埋没時期は中期後半（須玖Ⅱ式）であろう。

### 7SD070 黄灰色粘質土 (図 93 - 77・78)

#### 弥生土器

**甕 (77・78)** 77・78は甕1aの口縁部片である。77の内面にはナデ調整の痕跡が観察される。77・78ともに外面には煤、内面にはコゲが付着している。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式古段階）である。

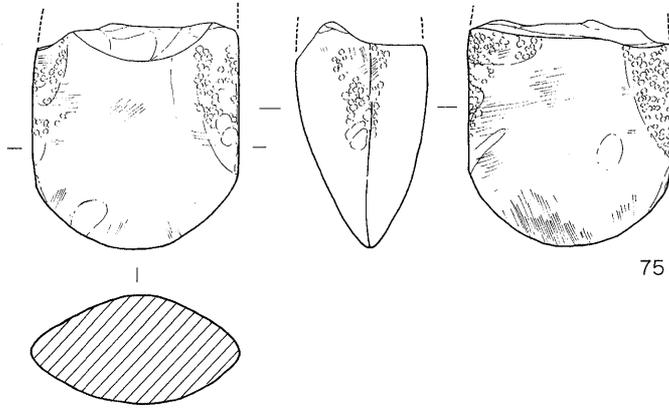
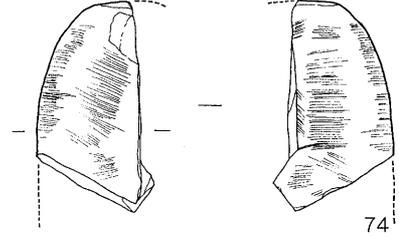
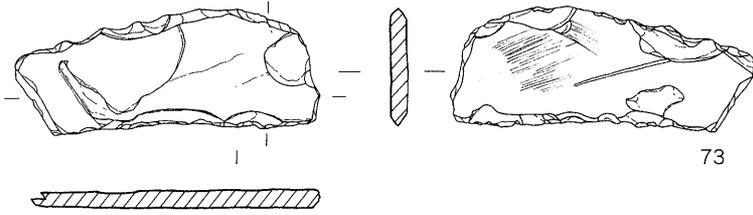
### 7SD070 灰黄色砂混じり粘質土 (図 93 - 79・80)

#### 弥生土器

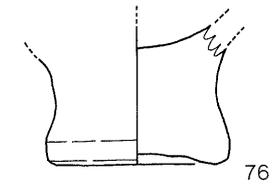
**甕(79・80)** 79は壺1b、80は甕1aの口縁部片である。79の外面、80の内面はナデ仕上げている。80の外面には煤が付着している。

【形成・埋没時期】 中期初頭（城ノ越式）である。

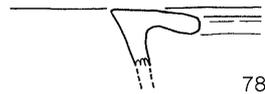
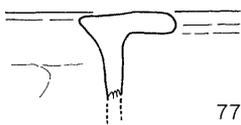
7SD070灰色粘土(4)



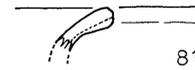
7SD070淡灰色粘土



7SD070黄灰色粘質土



7SD104



7SD070灰黄色砂混粘質土

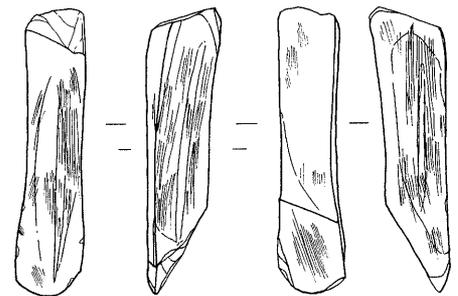
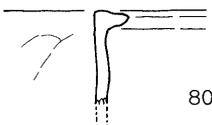
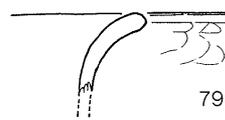


図93. 溝出土遺物実測図(11) (S=1/3)

7SD104 (図 93 - 81・82) 82 全体

弥生土器

甕 (81) 甕 1b の口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

石製品

砥石 (82) 頁岩質の小型砥石である。四面全てを使用し、うち三面には中央に溝状の研ぎがみられる。

【形成・埋没時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式) である。

7SD235 灰褐色土 (図 94 - 1)

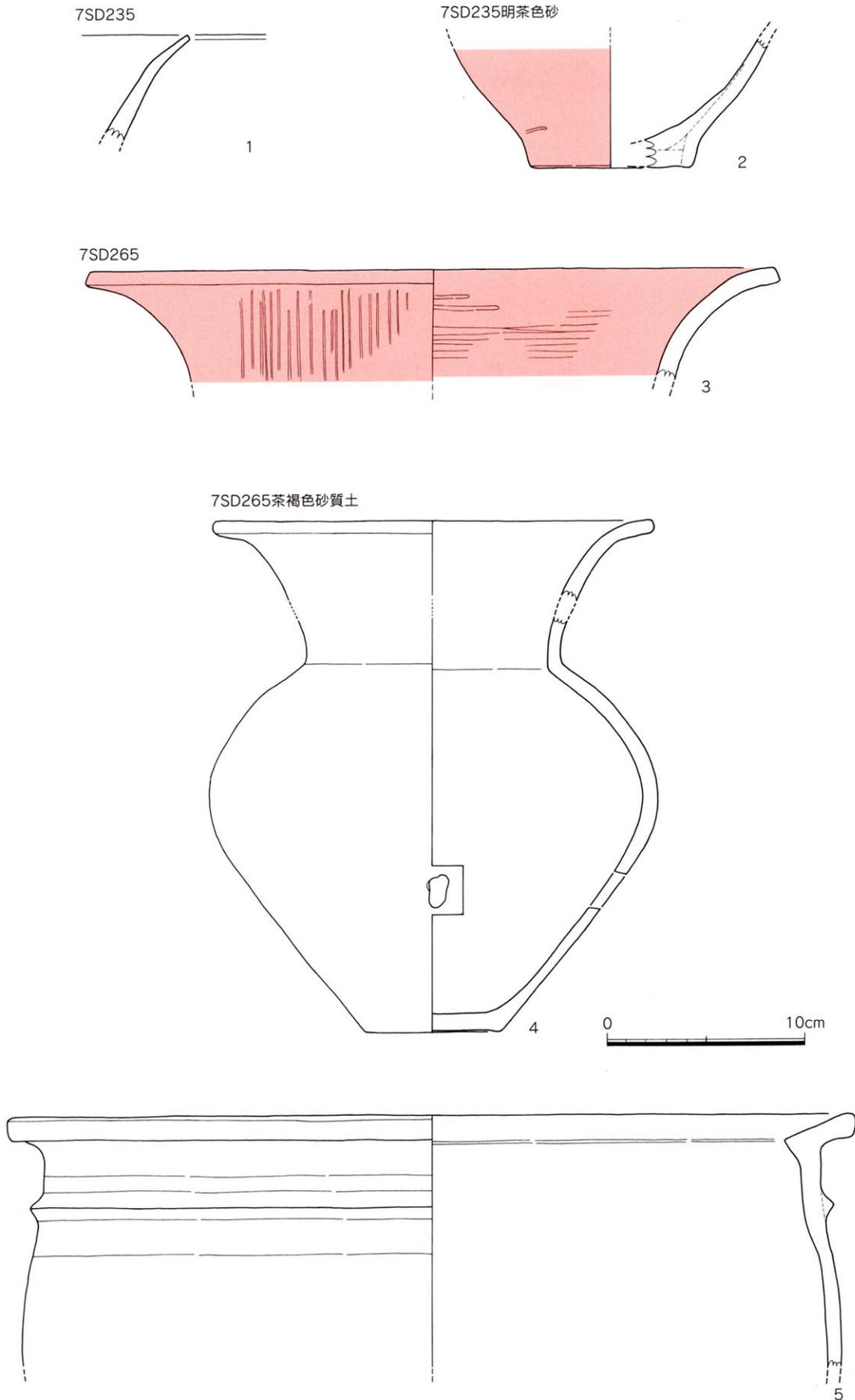


図94. 溝出土遺物実測図(12) (S=1/3)

### 弥生土器

壺 (1) 壺 1b の口縁部片であろう。器面風化が激しく、調整等は不明である。

【埋没時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式) であろうか。

7SD235 明茶色砂 (図 94 - 2)

### 弥生土器

器種不明 (2) 底部であり、全周の約 1 / 3 が残存している。外面には丹塗りが施されている。

【埋没時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式) と考えられる。

7SD265 (図 94 - 3)

### 弥生土器

壺 (3) 壺 1b の口縁部であり、全周の約 1 / 7 程度が残存している。外面には縦方向、内面には横方向のミガキ調整が施されている。内外面ともに丹塗りでである。

7SD265 茶褐色砂土 (図 94 - 4・5)

### 弥生土器

壺 (4) 壺 1b の口縁部から底部であるが、胴部から底部は全周の約 1 / 4 ほどを欠損している。内外面ともにナデ仕上げている。胴部下半には穿孔が施されている

甕 (5) 甕 1a の口縁部から胴部上半であり、全周の約 1 / 2 が残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面ともにナデ仕上げである。外面には煤、内面にはコゲが付着している。

【埋没時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式古段階) である。

7SD290 茶灰色砂 (図 95 - 1 ~ 4) 3 全体、4 全体

### 弥生土器

高坏 (1) 高坏 3 の坏部片であり、全周の約 1 / 10 程度が残存している。器面風化が著しいが、坏部外面には刷毛目が若干認められる。

壺 (2) 壺 3a の口縁部片である。口縁部は直線的に内傾し、ヨコナデにより仕上げられている。

甕 (3) 中型の甕棺であり、胴部上半から底部付近までの全周約 1 / 2 程度が残存している。底部は残存していないが、かなり丸底に近い形態と考えられる。胴部下半部には断面コ字状突帯をヨコナデにより貼り付け、突帯上には斜方向の刺突文を入れている。外面はタタキによる成形後、刷毛目調整により仕上げられている。内面は刷毛目調整により仕上げられている。

### 石製品

石斧 (4) 玄武岩製の石斧である。断面扁平で側面にはわずかに面を持つため、今山産ではないと思われる。

【埋没時期】 3 の底部付近の形態から判断すると、弥生時代終末期と考えられる。

7SD290 黒色土 (図 95 ~ 98 - 5 ~ 27) 9 全体、19 全体

### 弥生土器

甗 (5) 甗の胴部下半から底部であり、完存している。外面はナデ調整、内面は縦方向の刷毛目調整により仕上げられている。底部内面付近には絞り痕が観察できる。

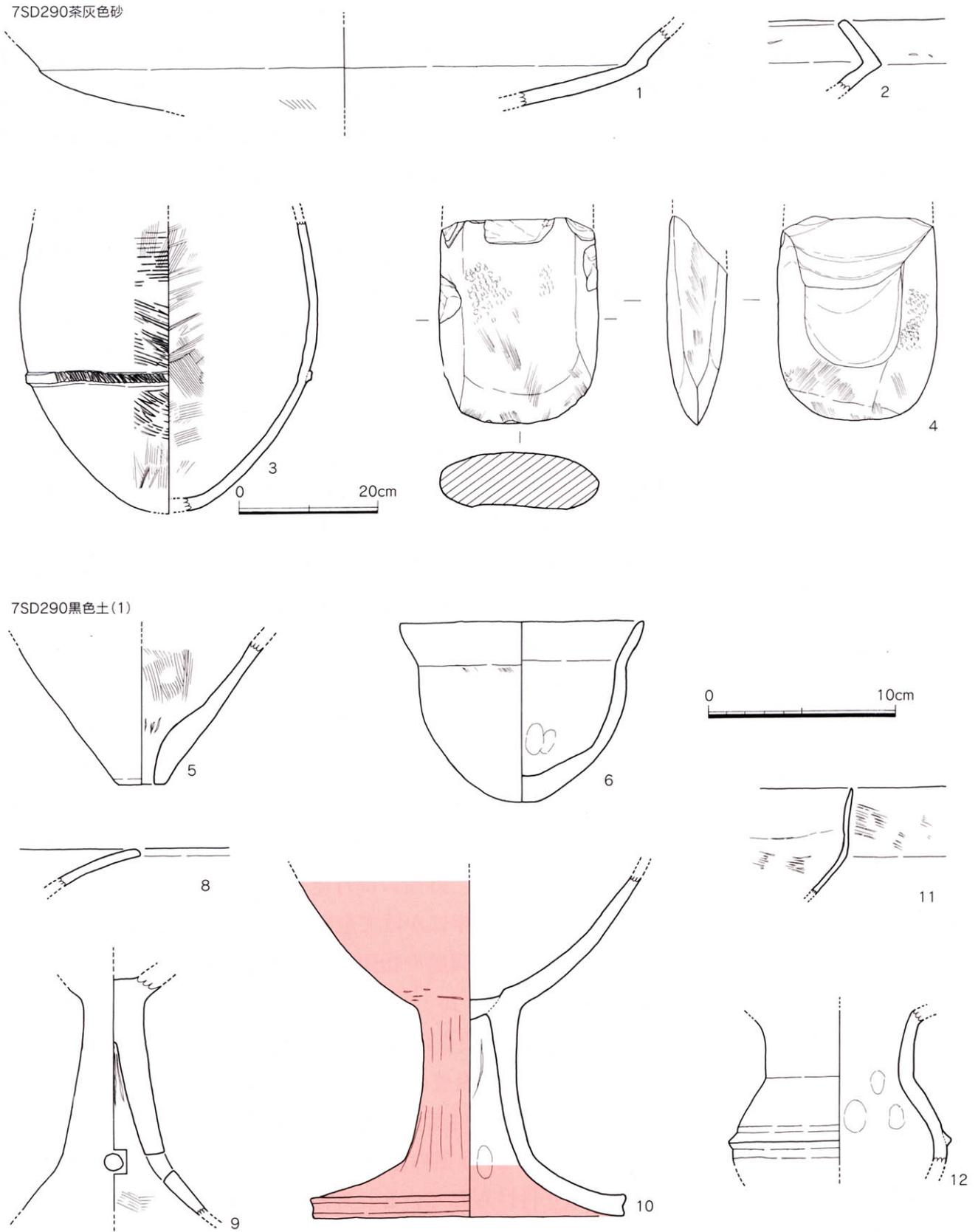


図95. 溝出土遺物実測図(13) (S=1/3・1/8)

**鉢×壺(6)** 鉢4a×壺8であり、口縁部から底部にかけて全周の約3/4程度が残存している。内外面ともにナデ調整であり、底部内面付近には指頭圧痕がみられる。

**高坏(8~10)** 8は高坏3の口縁部片である。両個体ともにヨコナデにより仕上げられている。

9は高坏の脚部であり、円形の透かしを有する。外面にはナデ調整、内面には横・斜方向の刷毛目調整が施され、内面には脚部成形時の絞り痕が観察できる。10は高坏の坏部中位から脚裾部であり、全周の約2/3程度が残存している。坏部内外面にはナデ調整、脚部外面には縦方向のミガキ調整が施され、脚部内面には絞り痕が認められる。また、外面の坏部と脚部の境界付近には調整工具痕が観察される。外面全面と脚部内面には丹塗りが施されている。

**壺** (11～18) 11は壺3の口縁部片と考えられるが、このタイプの壺としては器壁が薄く、口唇部もやや尖り気味であるため、別のタイプとなる可能性もある。内外面ともに斜方向の刷毛目調整であり、内面と断面には粘土紐の接合痕が観察できる。外面には煤が付着している。12は小型壺の頸部から胴部であり、全周の1/3程度が残存している。胴部最大径部位付近には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面ともにナデ調整であり、胴部内面には指頭圧痕が残存している。13～15は壺3の口縁部片であり、13は壺3c、14・15は壺3aである。ただし、13については口縁部の外反度が強く、壺2（畿内系二重口縁壺）の模倣品である可能性も考えられる。残存状況は、13が全周の約1/3、14はほぼ全周、15は全周の約1/10が残存している。13の複合口縁部の屈曲部にはV字状の刺突文が、14の屈曲部には小さな刺突文が施されている。15の複合口縁部の屈曲部は、断面観察から粘土紐を貼り付けることで成形していることがわかる。すべて内外面ともにナデ調整により仕上げられているが、15の頸部外面には刷毛目が残存しており、刷毛目調整後ナデ仕上げられたことがわかる。16・17は壺3の頸部から胴部上半であり、16は全周の約1/8、17は約1/3が残存している。両個体ともに、頸部と胴部の境界には三角突帯を貼り付け、突帯上には斜方向の刺突文が施されている。内外面ともにナデ調整である。18は中期の壺1であり、頸部から底部にかけて全周の約3/4程度が残存している。胴部最大径部位に断面M字状突帯を貼り付けている。突帯貼付部の内面には指頭圧痕が観察でき、突帯貼付時に内面側を押さえた際の痕跡と考えられる。内外面ともにナデ調整により仕上げられている。外面には丹塗りが施されている。

**器台** (19) 19は器台1bであり、受部から筒部下半にかけて全周の約3/4程度が残存している。外面は器面風化が著しいが、胴部内面にはナデ調整や指頭圧痕が観察できる。

**甕** (20～24) 20・21は甕の口縁部片である。20・21ともに頸部の屈曲度は緩い。両個体ともにナデ調整により仕上げられている。22は甕2の口縁部の可能性が考えられる。全周の約1/5程度が残存している。内外面ともにナデ調整により仕上げられている。23は甕の口縁部であり、全周の約1/5程度が残存している。外面には刷毛目調整が残存しており、刷毛目調整の後、ナデ仕上げられたことがわかる。24は甕の胴部であり、全周の1/6程度が残存している。三角突帯がヨコナデにより貼り付けられている。外面は縦・斜方向の刷毛目調整、内面はナデ調整である。ただし、突帯の剥離した箇所には刷毛目調整が施されており、刷毛目調整後、突帯を貼り付けたことがわかる。

**器種不明** (25～27) 25～27は底部片であり、25が全周の約1/5、26は約1/3、27は約1/5程度が残存している。25は平底の名残りを残す形態であり、26は丸底、27は平底である。25は内外面ともに刷毛目調整により仕上げられている。25の外面には煤が厚く付着している。

7SD290黒色土(2)

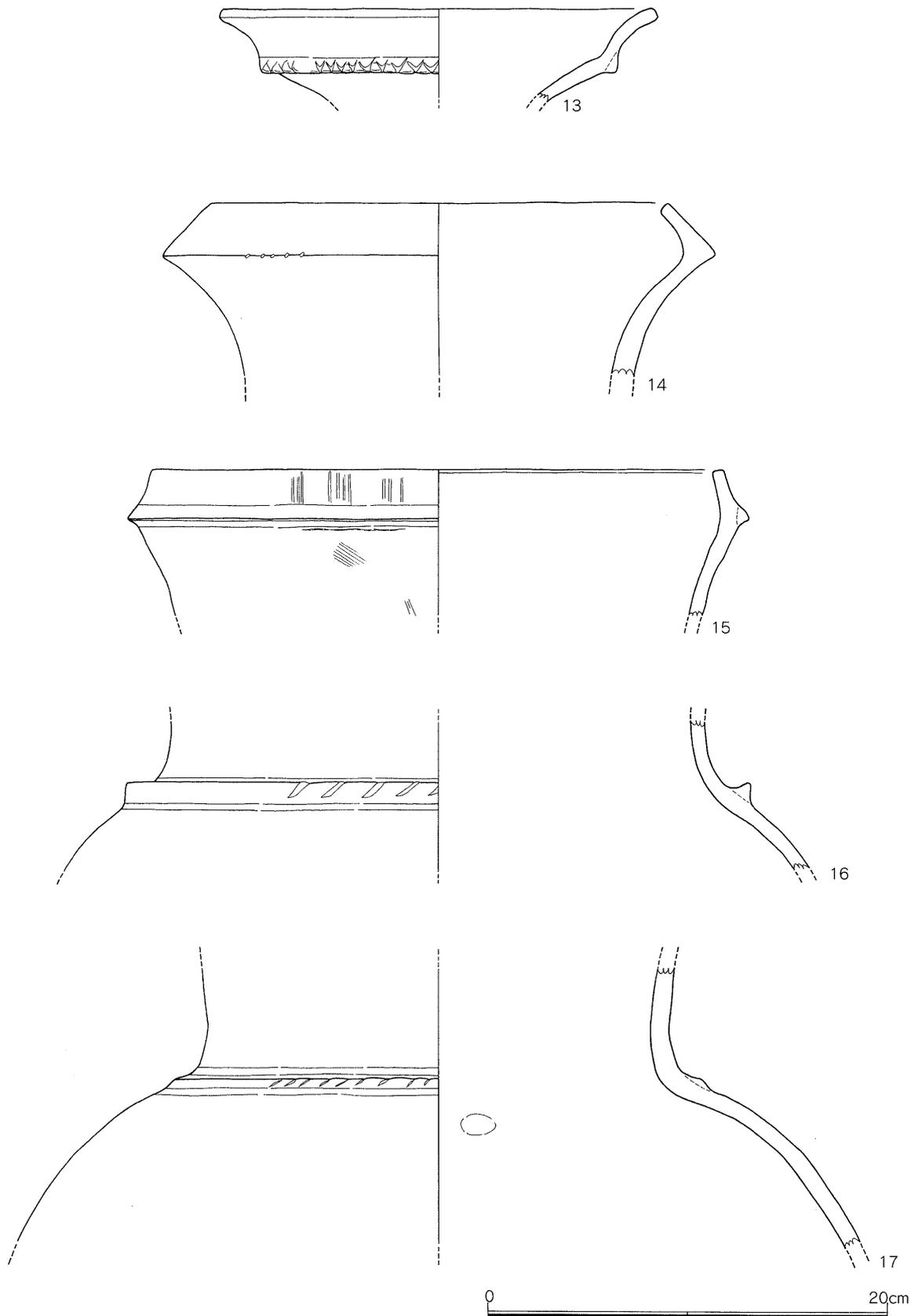


図96. 溝出土遺物実測図(14) (S=1/3)

26・27については器面が磨耗しており、調整等は不明である。

【埋没時期】 13 や 22 などから判断すると、弥生時代終末期から古墳時代前期と考えられる。

7SD315 (図 99 - 1 ~ 7)

7SD290黒色土(3)

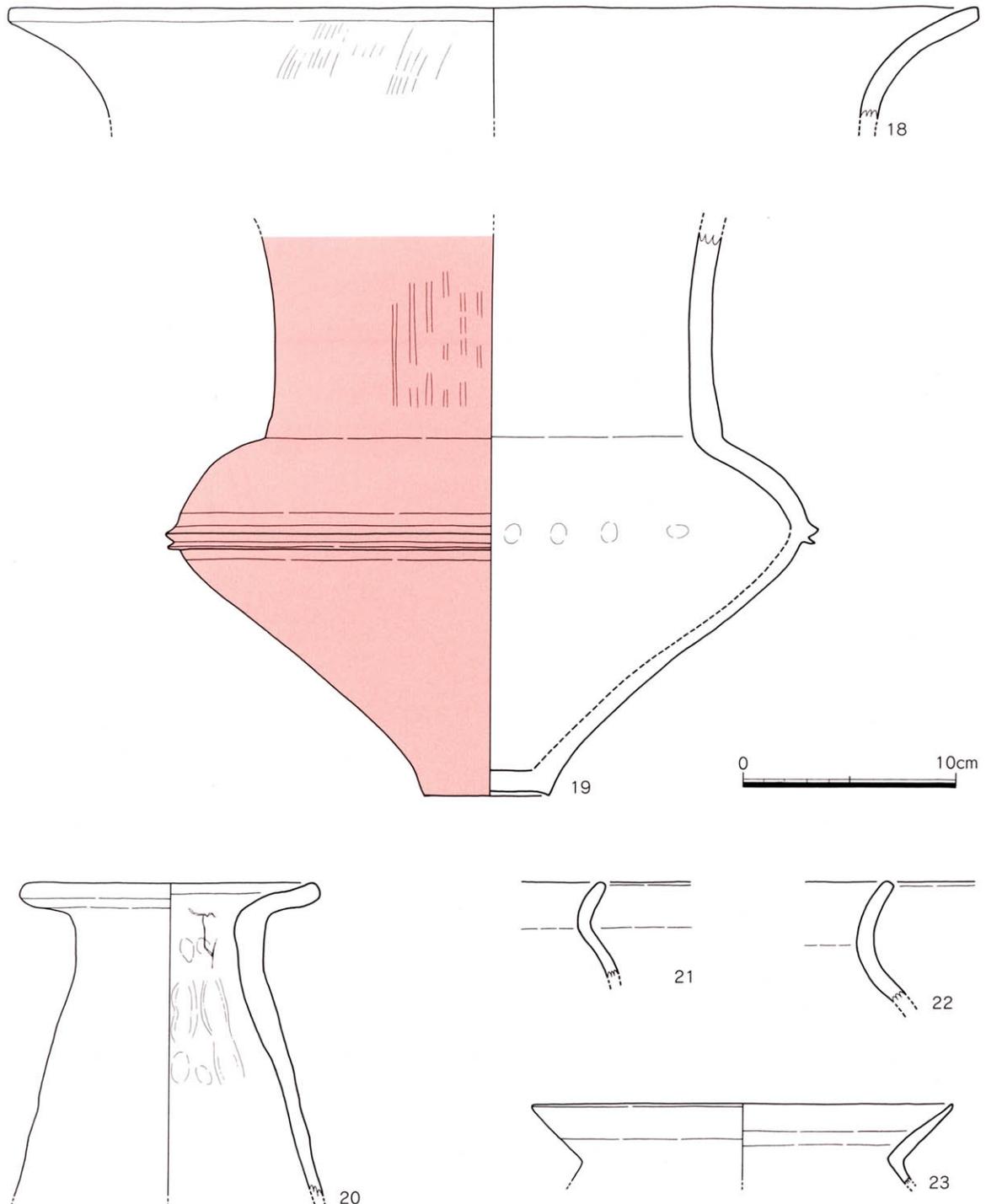


図97. 溝出土遺物実測図(15) (S=1/3)

弥生土器

高坏 (1) 高坏の脚部であり、全周の約2/3が残存している。外面はナデ仕上げられている

が、裾部付近には縦方向のミガキ調整が施されている。内面には絞り痕が観察される。

**甕 (2・7)** 2は甕3の口縁部から胴部上半と底部である。口縁部から胴部上半は全周の約1/3が残存し、底部は完存している。同一個体として図上復元したが、器厚が異なっており、別個体の可能性も考えられる。口縁部には近接して二ヶ所、穿孔が施されている。外面は全面丹塗りである。7は中型の、いわゆる丸みをおびた甕棺である。口縁部から胴部上半の全周約1/2、底部の約3/4程度が残存しているが、胴部下半を欠損しており、図上復元している。口縁部下・胴部上半・胴部中位には断面M字状突帯を一条ずつヨコナデにより貼り付けている。内外面ともにナデ仕上げている。

**壺 (5・6)** 5は壺1bの口縁部から底部であるが、胴部下半を欠損している。口縁部から胴部上半は全周の約2/3が残存し、底部は完存している。胴部最大径部位には断面M字状突帯をヨコナデにより貼り付けている。頸部外面には縦方向のミガキ調整、頸部内面には横方向のミガキ調整が施されている。胴部は内外面ともにナデ仕上げている。外面全面と内面の口縁部から頸部には丹塗りが施されている。6は壺1aの口縁部から底部であるが、頸部から胴部の全周約1/2程度を欠損している。頸部と胴部の境界部には一条の三角突帯、胴部には二条の

7SD290黒色土(4)

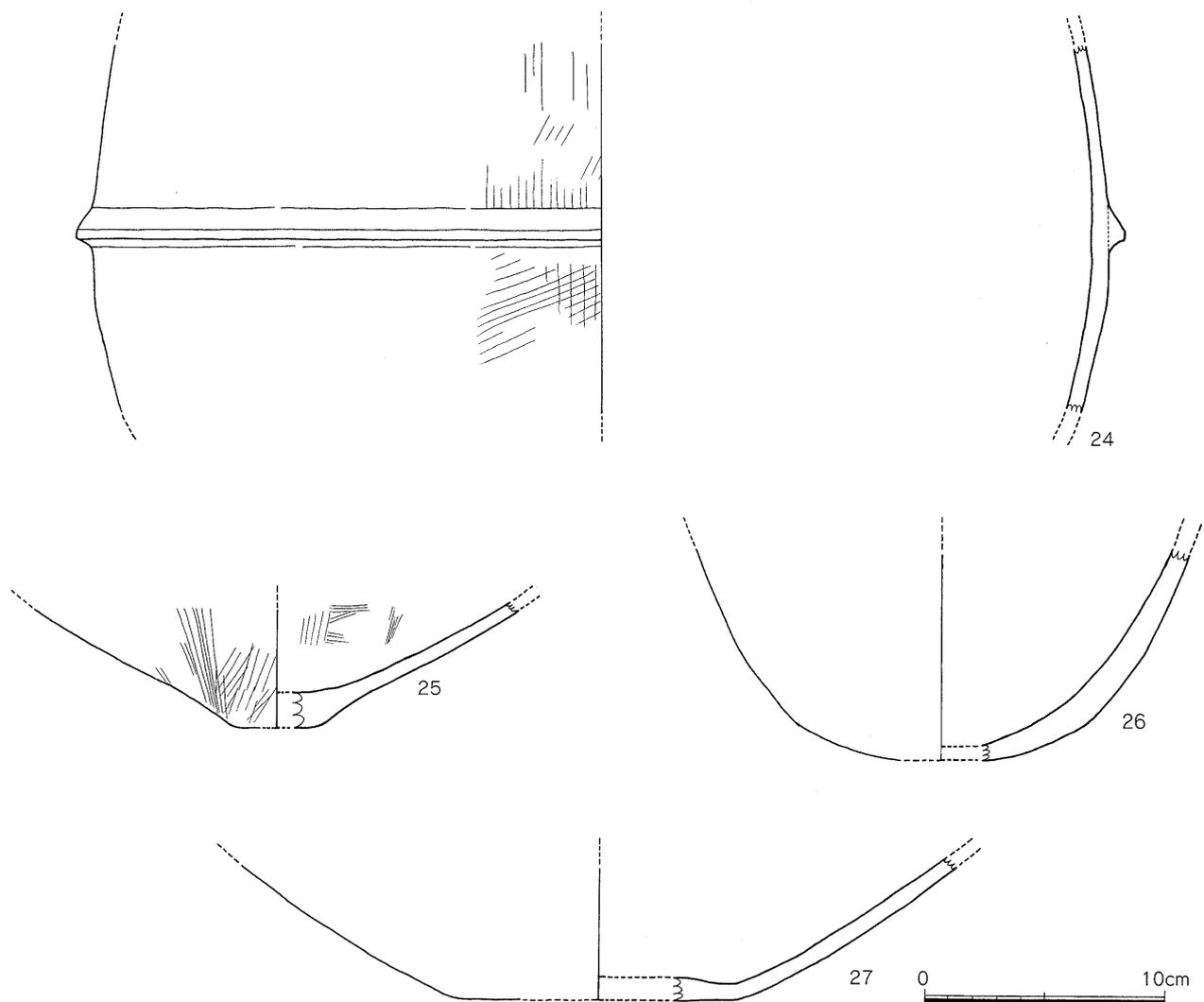


図98. 溝出土遺物実測図(16) (S=1/3)

断面 M 字状突帯をヨコナデにより貼り付けている。口縁端部には縦方向に刻み目を入れた後、横方向に一条の沈線をめぐらせている。内外面ともにナデ仕上げられている。

### 石製品

石鏃 (3) 頁岩製の凹基式磨製石鏃である。身が非常に薄く、先端を欠損する。

石剣 (4) 粘板岩製の石剣である。鑄が入らず、中央に不明瞭ながらも、わずかに面が見られる。断面は六角形あるいはレンズ形を呈する。

【埋没時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式) である。

### 7SD315 茶色土 (図 99 - 8 ~ 10)

#### 瓦質土器

火鉢 (8) 火鉢と考えられる。外面には、断面が丸みをおびた突帯を二条貼り付け、突帯間には花卉形のスタンプ文を施している。内面と口縁部上面はナデ仕上げている。

#### 弥生土器

甕 (9) 後期の甕の口縁部片である。外面には斜方向の刷毛目調整が施されている。内面には粘土紐の接合痕が確認される。

壺 (10) 壺 2b の口縁部から底部であり、全周の約 2 / 3 が残存している。外面は全面丹塗りである。

【埋没時期】 瓦質土器は上位からの混入と考えられ、当該土層の堆積時期は、弥生時代後期以降であろうと考えられる。

### 7SD315 灰色土 (図 99 - 11・12)

#### 弥生土器

高坏 (11) 高坏 a の口縁部であり、全周の約 1 / 8 が残存している。内外面ともにナデ仕上げている。胎土は非常に精良である。

壺 (12) 壺 1b の口縁部片である。内外面ともにナデ仕上げている。胎土は非常に精良である。

【埋没時期】 中期前半 (須玖Ⅰ式) である。

### 7SD330 (図 100 - 1)

#### 弥生土器

壺 (1) 壺 2b の口縁部であり、全周の約 1 / 3 が残存している。内外面ともにナデ仕上げている。外面と口縁部内面は丹塗りである。

### 7SD330 茶色土 (図 100 - 2・3)

#### 弥生土器

甕 (2) 中型の、いわゆる丸みをおびた甕棺である。口縁部の全周約 1 / 8 程度が残存している。口縁端部には刻み目が入れられ、口縁部下には断面 M 字状突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面ともにナデ調整により仕上げられている。

壺 (3) 壺 2b の口縁部から底部であり、全周の約 1 / 2 が残存している。口縁部には円形の孔が穿孔されている。外面には刷毛目調整の後、ナデ調整が施されている。内面はナデ仕上げられている。外面と口縁部内面は丹塗りである。

7SD315

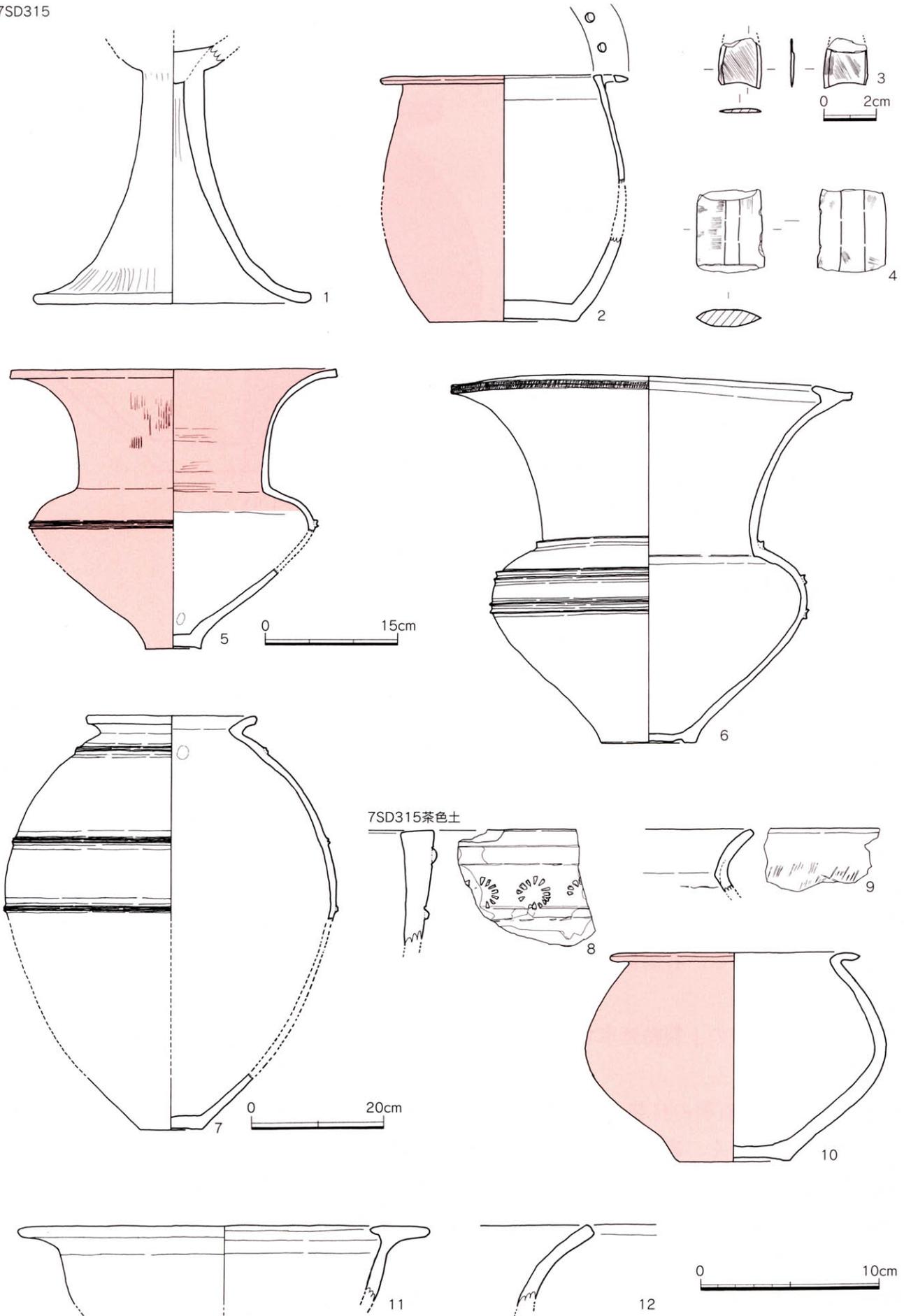


图99. 溝出土遺物実測図(17) (S=1/2·1/3·1/6·1/8)

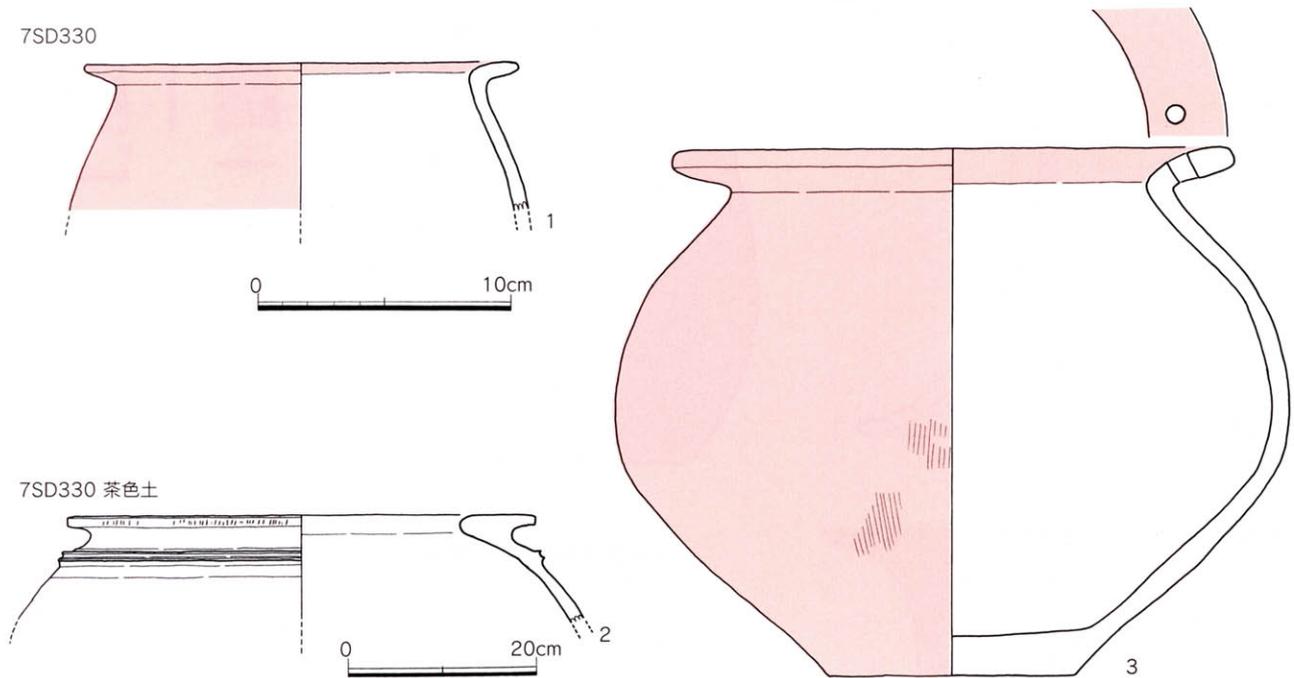


図100. 溝出土遺物実測図(18) (S=1/3・1/8)

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式）である。

7SD375 茶褐色土（図 101 - 1 ~ 18）

### 弥生土器

**壺**（1～6） 1・2は壺1aの口縁部片である。1の口縁端部は丸みをもち、2は平坦な面をもつ。両個体ともに器面は摩滅しており、調整等は不明である。3は壺胴部の破片である。有軸羽状文が描かれている。切り合い関係から判断すると、羽状文を描いた後に、横方向の沈線を描いていることがわかる。4・5は壺2bの口縁部であり、5は全周の約1/4程度が残存している。器面は摩滅しており、調整等は不明である。6は壺3の突帯片である。壺3に特徴的な突出度の高い断面コ字状突帯である。

**器台**（7） 筒形器台の鏢状部の破片である。断面観察から、粘土紐の接合状況がわかる。

**甕**（8～12） 8～11は甕1bの口縁部片、12は甕1bの頸部から胴部であり、全周の約1/5程度が残存している。各個体ともに摩滅しており、調整等は不明である。

### 土製品

**紡錘車**（13） 完形の土製紡錘車である。器面には指頭圧痕が観察され、ナデ仕上げられている。

### 石製品

**石鏃**（14） 黒曜石製の打製石鏃である。側面にはわずかだが抉りが入り、アメリカ式の様相を呈す。脚部は長く、裏面中央部には局部磨製を施している。先端と片脚を欠損する。

**石庖丁**（15） 粘板岩製の石庖丁である。外湾刃半月形と思われ、回転穿孔を施す。

**石剣**（16） 粘板岩製の石剣である。身は厚く、鑄が明確に通る、刃部面には刃こぼれが見られる。石理の文様が剣身に沿ってはいる。

**石斧**（17・18） 17は刃部を欠損しているが、粘板岩製の扁平片刃石斧と思われる。表面には酸化鉄がわずかに付着している。18は玄武岩製の柱状片刃石斧である。身のみであり、断面

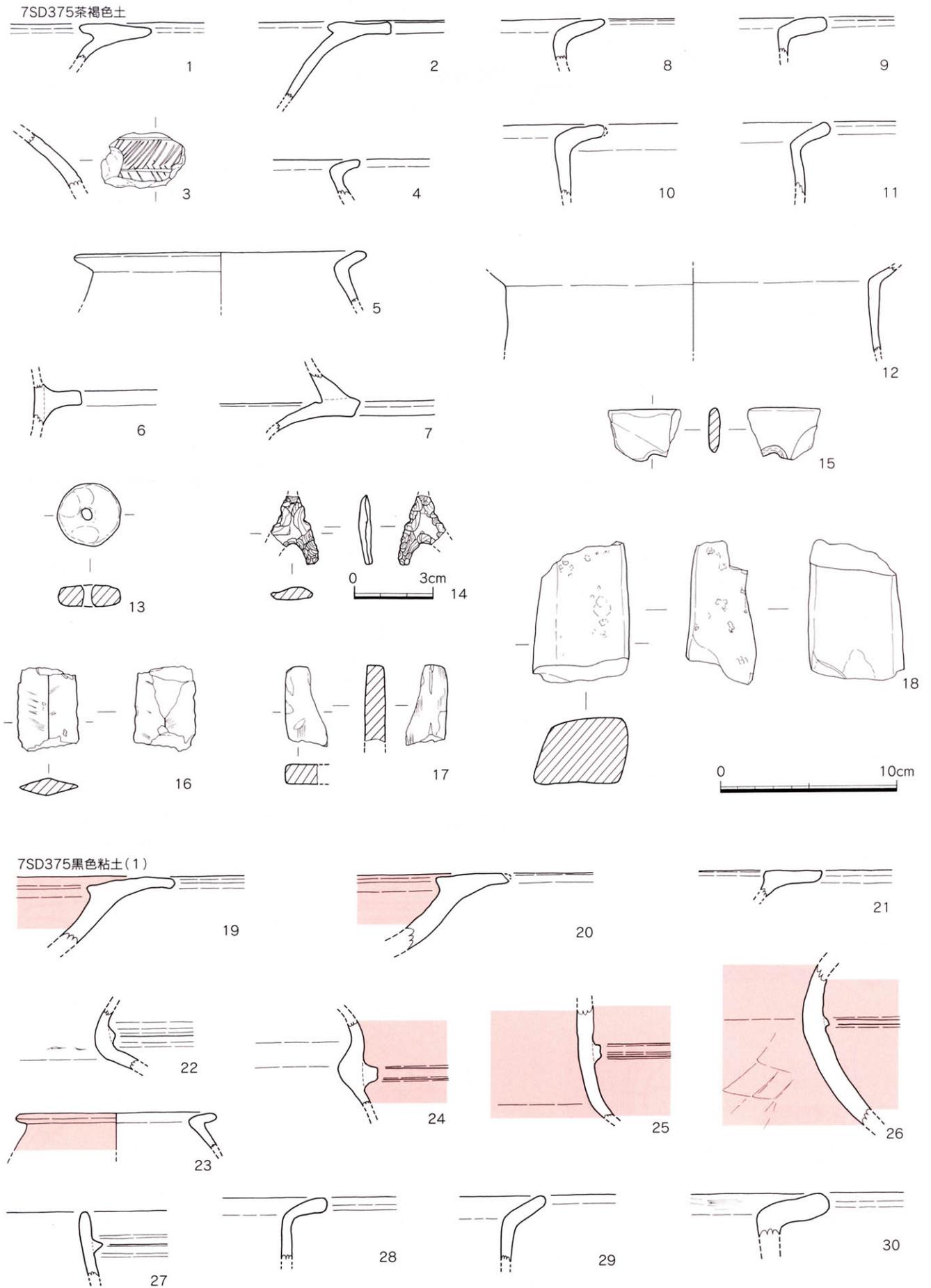


図101. 溝出土遺物実測図(19) (S=1/2・1/3)

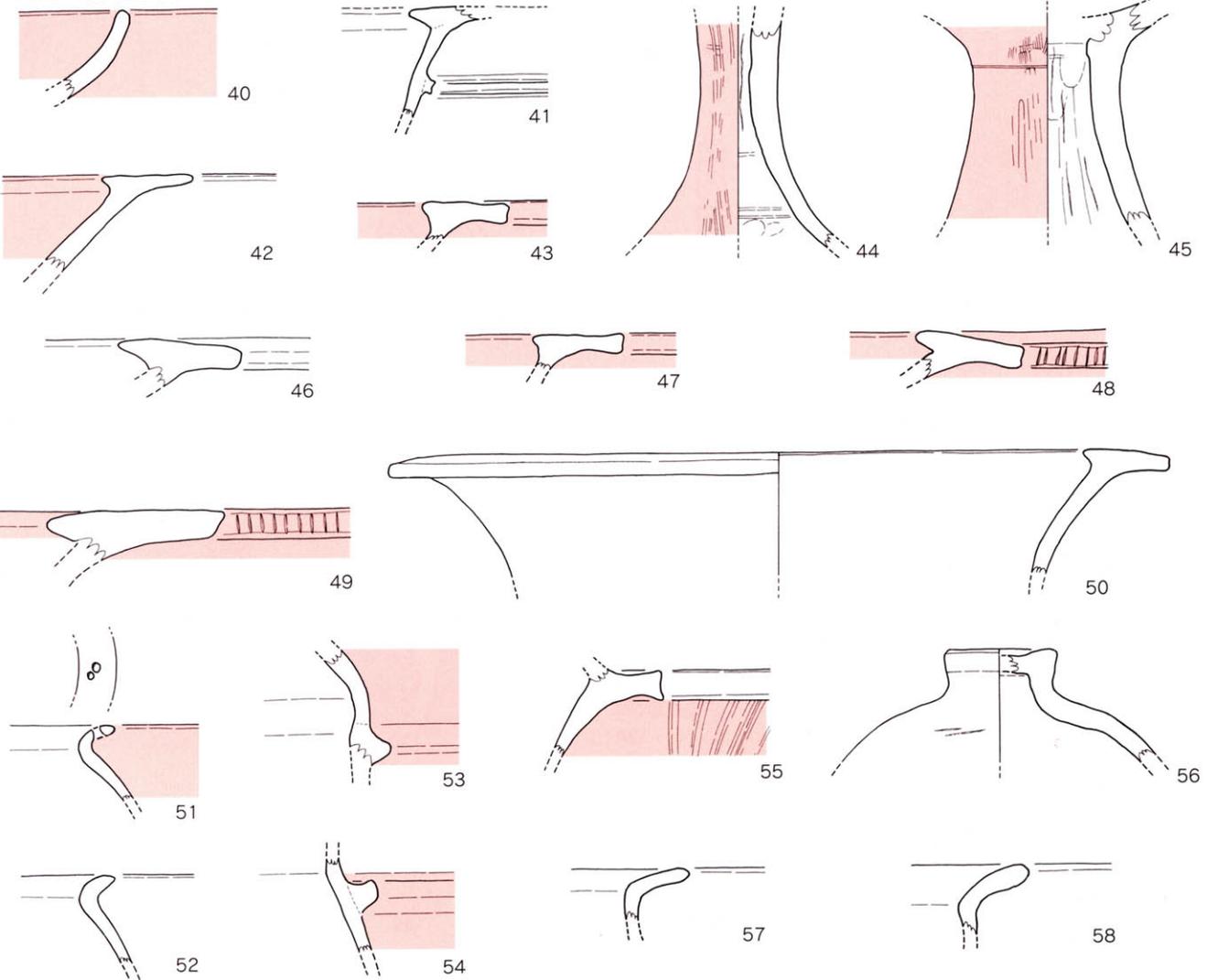
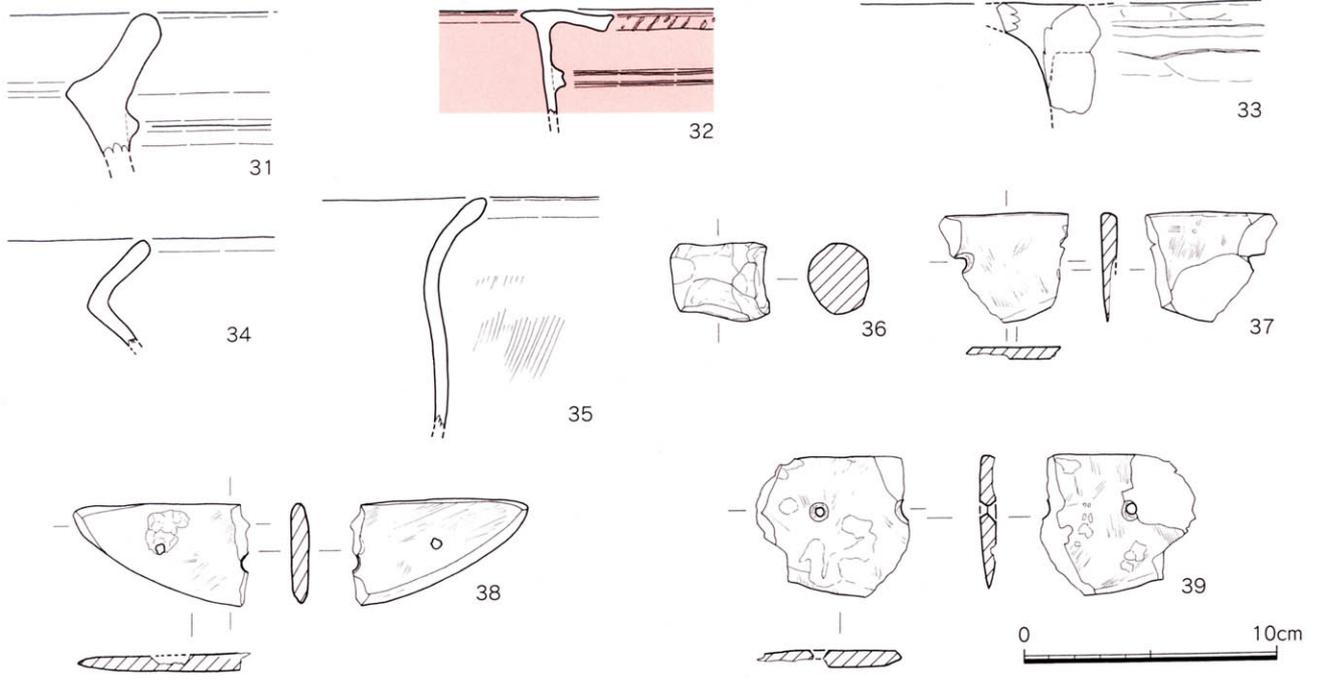
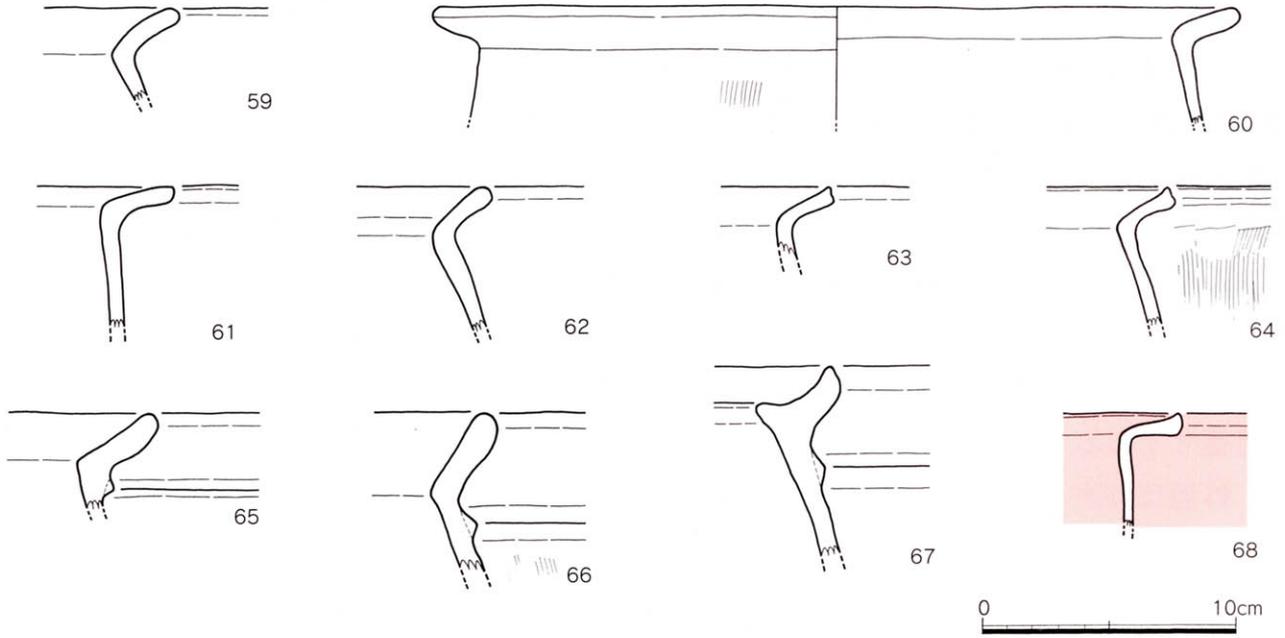


図102. 溝出土遺物実測図(20) (S=1/3)

7SD375黒褐色砂(2)



7SD375灰色砂(1)

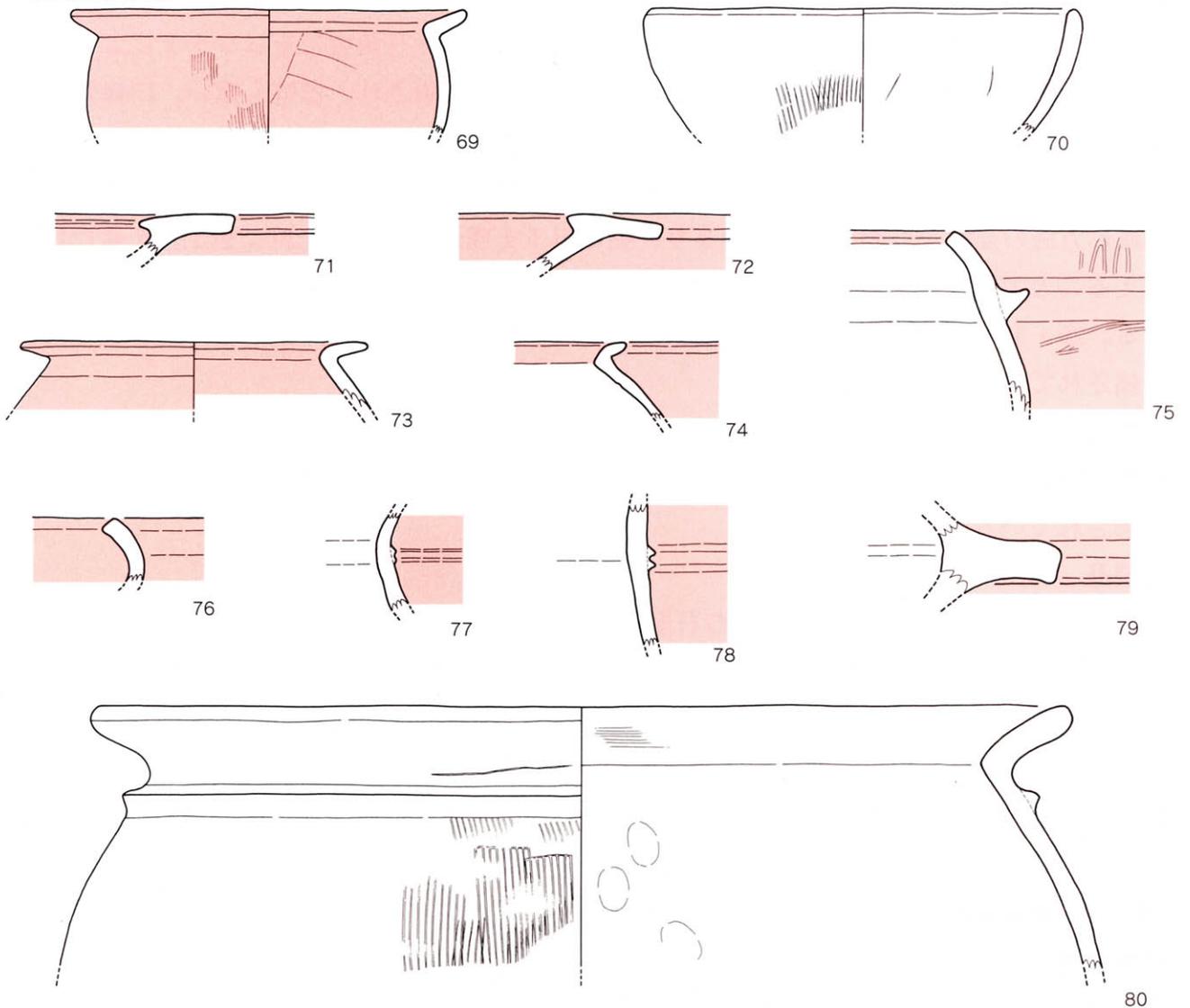


図103. 溝出土遺物実測図(21) (S=1/3)

は不定形な方形を呈する。基部に近いか。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式新段階）である。

### 7SD375 黒色粘土（図 101・102 - 19～39）

#### 弥生土器

**高坏（19～21）** 19～21は高坏aの口縁部片である。各個体ともに器面が摩滅しており、調整等は不明である。19・20の内面には丹塗りが施されている。

**壺（22～27）** 22は壺1の頸部から胴部の破片である。屈曲部にはヨコナデにより三角突帯を貼り付けている。23は壺2bの口縁部であり、全周の約1/4程度が残存している。外面は丹塗りである。24は壺3の胴部片であり、胴部屈曲部には断面コ字状突帯を貼り付けている。外面は丹塗りである。25・26は壺4の頸部片である。両個体ともに突帯を貼り付けており、25の突帯は断面M字状を呈している。26の内面には刷毛目調整工具の痕跡が観察される。25・26ともに内外面には丹塗りが施されている。27は壺5の口縁部片である。口縁部よりやや下がった位置に三角突帯を貼り付けている。

**甕（28～35）** 28・30は甕1bの口縁部片である。30の口縁部内面には横方向の刷毛目調整が施されている。31は甕1dの口縁部片である。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。32は甕2aの口縁部片である。精良な胎土が使用され、器壁も薄い。口縁端部には斜方向の刻み目が入れられ、口縁部下には断面M字状突帯がヨコナデにより貼り付けられている。内外面ともに丹塗りである。33は大型甕棺の口縁部片である。欠損しているが、口縁部成形方法の推測が可能である。つまり、頸部以下を成形後、その上位に粘土紐を新たに付け加えることで口縁部を成形していると思われる。29・34・35は後期の甕の口縁部片と考えられる。29・34は器面風化が著しく、調整等は不明である。35の外面には斜方向の刷毛目調整が施されている。

#### 土製品

**用途不明製品（36）** 把手状を呈する土製品だが、用途などは不明である。指押さえによって成形されている。

#### 石製品

**石庖丁（37～39）** 37は凝灰岩製の石庖丁である。背部のみしか残存しないが、外湾刃半月形を呈すると思われる。38は凝灰岩製の石庖丁である。外湾刃半月形を呈する。未使用であり、片面からのみの穿孔であるため、穿孔途中に破損したものと考えられる。39は凝灰岩製の立岩産石庖丁である。両端を大きく欠損するが、外湾刃半月形を呈すると思われる。

【埋没時期】 後期の土器や須恵器も出土しているが、全体的には当該土層の埋没時期は中期後半（須玖Ⅱ式新段階）に位置付けられる。

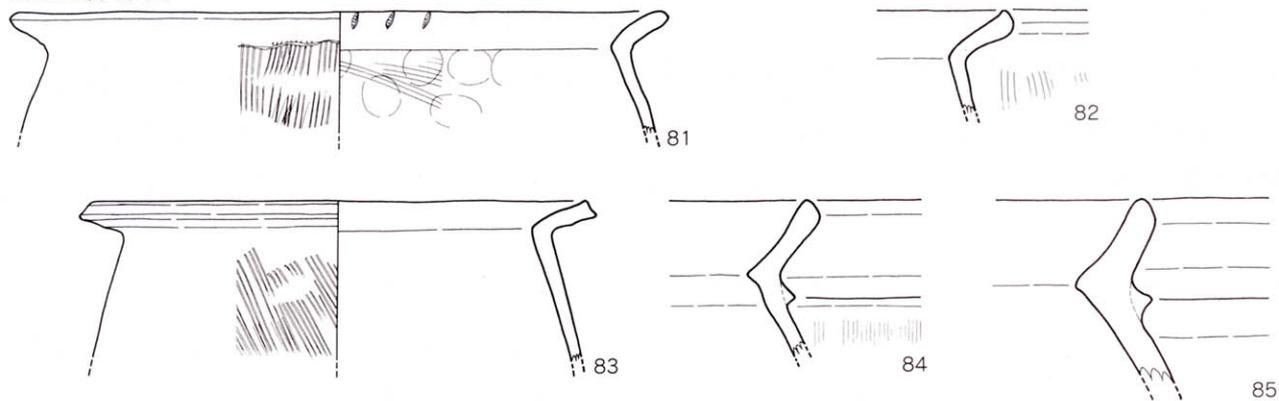
### 7SD375 黒褐色砂（図 102・103 - 40～68）

#### 弥生土器

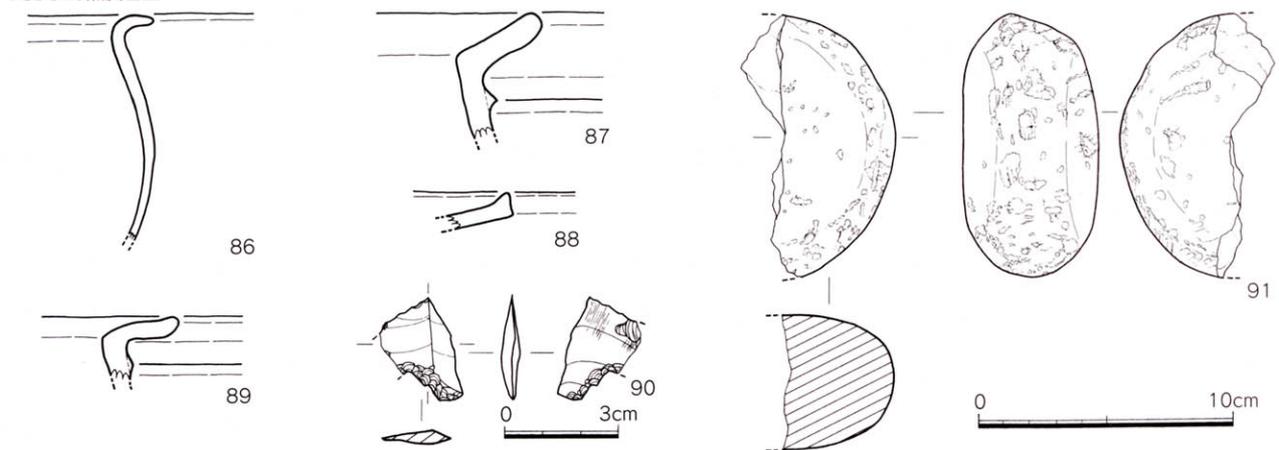
**鉢×高坏（40）** 鉢dあるいは高坏bの口縁部片である。内外面ともに丹塗りである。

**高坏（41～45）** 41～43は高坏aの口縁部片である。41は口縁部のやや下に断面M字状

7SD375灰色砂(2)



7SD375黒灰色土



7SD375暗灰色砂

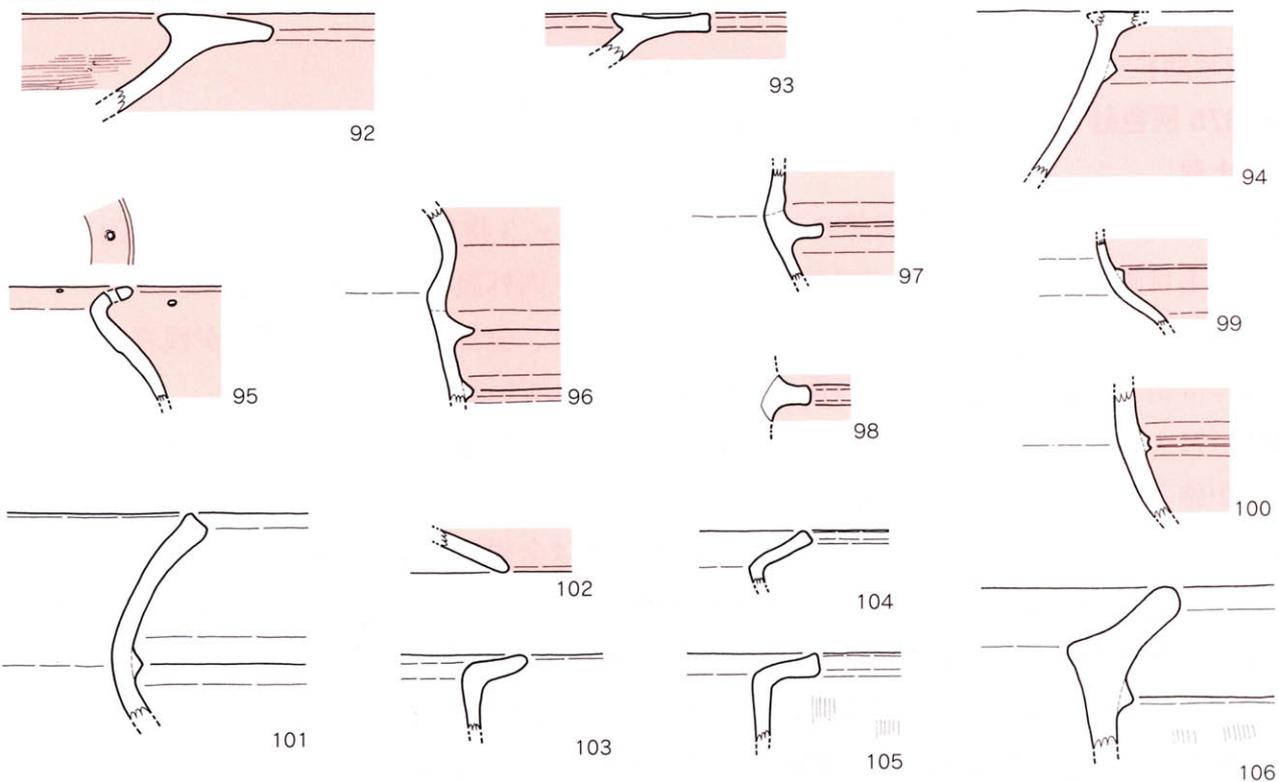


图104. 溝出土遺物実測図(22) (S=1/2·1/3)

突帯をヨコナデにより貼り付けている。42の内面、43の内外面には丹塗りが施されている。44・45は高坏の脚部であり、ともに全周の約1/2程度が残存している。外面には縦方向のミガキ調整が施され、内面はナデ調整により仕上げられている。ともに外面は丹塗りである。

**高坏×壺** (46・47) 46・47は高坏あるいは壺の口縁部片である。47の内外面には丹塗りが施されている。

**壺** (48～54) 48～50は壺1aの口縁部片であり、50は全周の約1/7程度が残存している。48・49は口縁端部に刻み目が入れられ、内外面ともに丹塗りが施されている。51・52は壺2bの口縁部片である。51の口縁部には小さな円孔が近接して二ヶ所あけられている。51の外面は丹塗りである。53・54は壺3の胴部片である。いずれも突帯を貼り付けているが、53は三角突帯、54は断面コ字状突帯である。ともに外面には丹塗りが施されている。

**器台** (55) 筒形器台の鏝状部の破片である。外面には縦方向のミガキ調整が施されており、暗文である可能性も考えられる。外面は丹塗りである。

**蓋** (56) 蓋1の天井部であり、全周の約1/3程度が残存している。外面には工具痕と思われる痕跡が観察される。

**甕** (57～68) 57～62・65・66は甕1bの口縁部片であり、60は全周の約1/6程度が残存している。65・66の口縁部下には三角突帯が貼り付けられている。60の外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。57・62・65の外面には煤、57・62の内面にはコゲが付着している。63・64は甕1cの口縁部片である。64の外面には縦方向の刷毛目調整、内面にはナデ調整が施されている。64の外面には煤、内面にはコゲが付着している。67は甕1dの口縁部片である。口縁部下にはヨコナデにより三角突帯を貼り付けている。外面には煤が付着している。68は甕2cの口縁部片である。内外面ともに丹塗りが施されている。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式新段階）である。

**7SD375 灰色砂** (図 103・104 - 69～85)

### 弥生土器

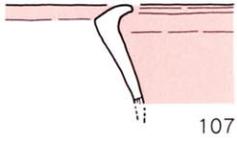
**鉢** (69) 鉢bの口縁部から胴部であり、全周の約1/3程度が残存している。外面には縦方向の刷毛目調整、内面にはナデ調整が施されている。内外面ともに丹塗りである。

**鉢×高坏** (70) 鉢dあるいは高坏bの口縁部であり、全周の約1/8程度が残存している。外面には刷毛目調整が施され、内面はナデ仕上げられている。

**高坏** (71・72) 71・72は高坏aの口縁部片である。精良な胎土が使用され、内外面ともに丹塗りが施されている。

**壺** (73～78) 73・74は壺2bの口縁部であり、73は全周の約1/8程度が残存している。73の外面にはミガキ調整、内面にはナデ調整が施されている。内外面ともに丹塗りである。74は器面が摩滅しており、調整等は不明であるが、外面と口縁部内面には丹塗りが施されている。75は壺3の口縁部片である。口縁部よりやや下位に三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。口縁部外面には逆U字形の暗文が観察される。外面と口縁端部には丹塗りが施されている。76は壺4の口縁部片、77・78は壺4の頸部片である。77・78には断面M字状突帯をヨコナデに

7SD375明茶色土

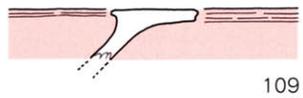


107

7SD375黒灰色粘土(1)



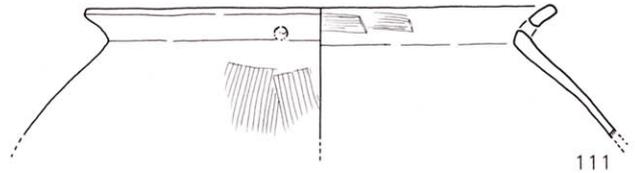
108



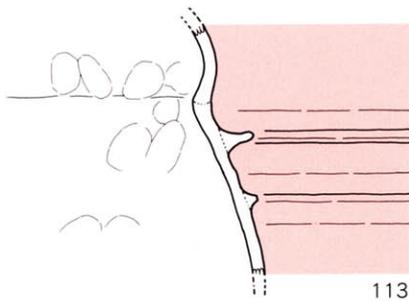
109



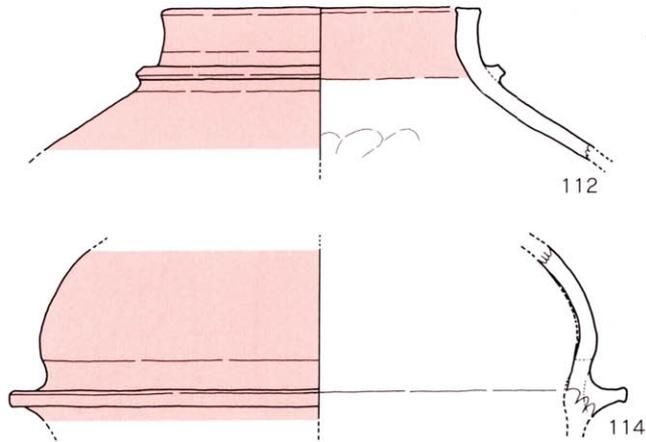
110



111



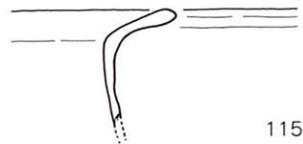
113



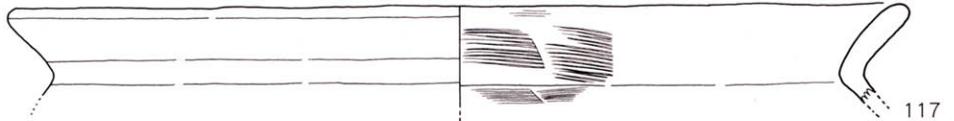
112



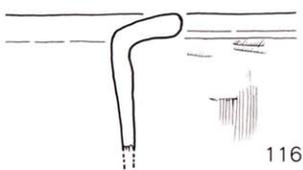
114



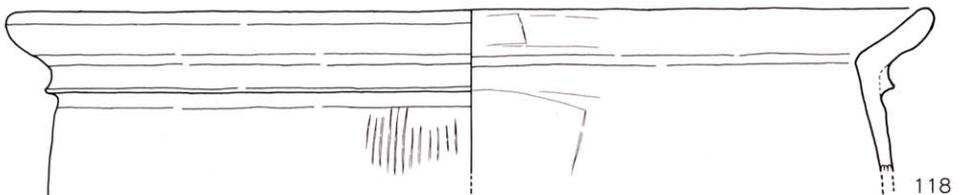
115



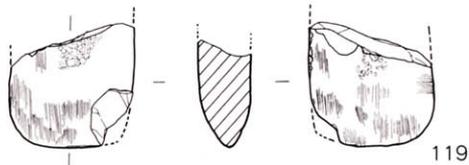
117



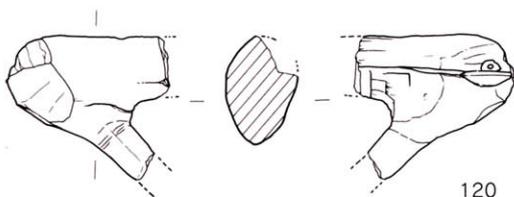
116



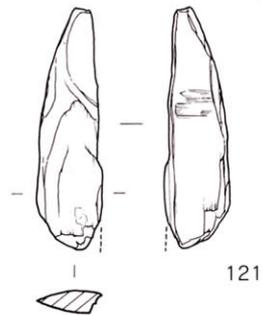
118



119



120



121



図105. 溝出土遺物実測図(23) (S=1/3)

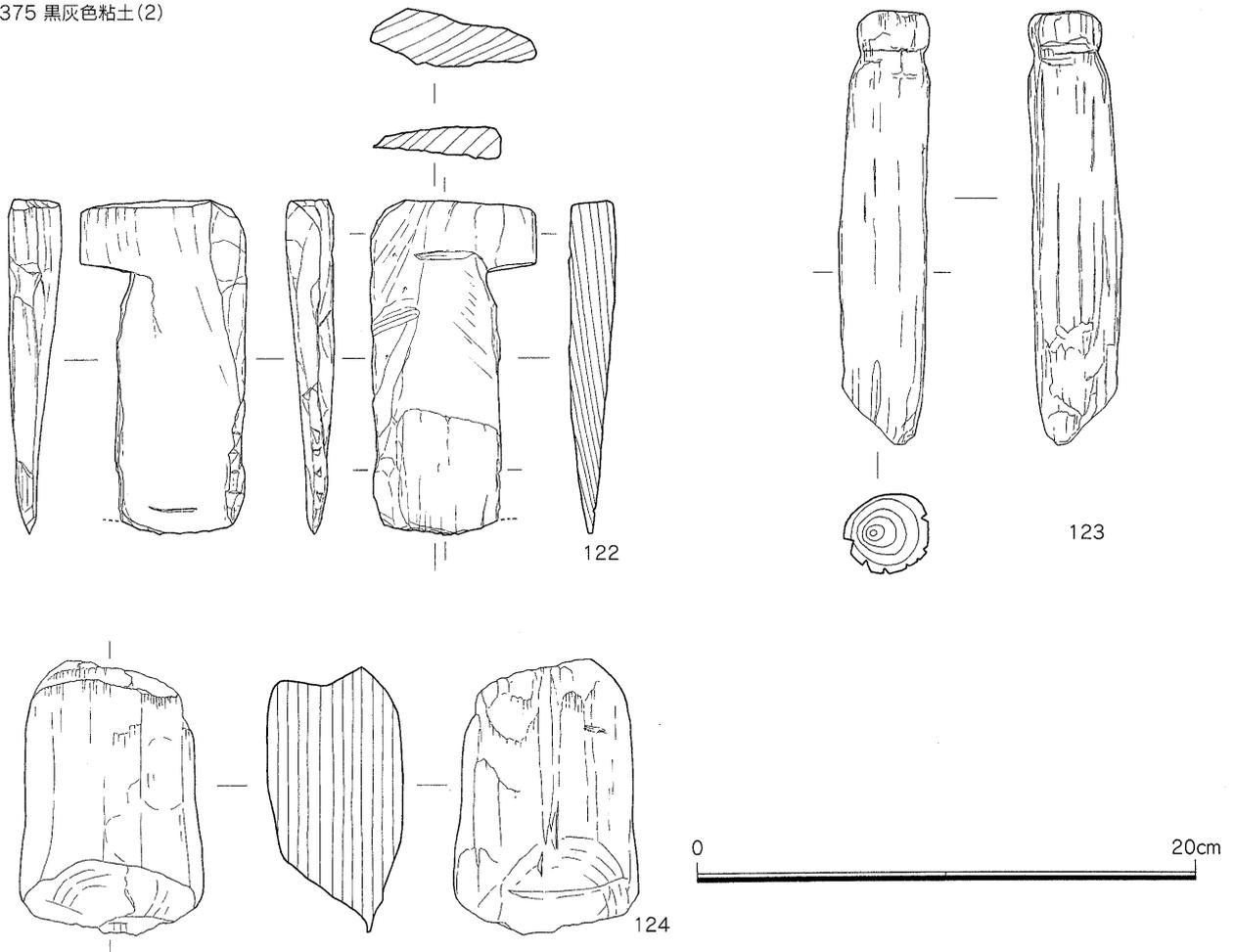


図106. 溝出土遺物実測図(24) (S=1/3)

より貼り付けている。76の内外面、77・78の外面には丹塗りが施されている。

**器台** (79) 筒形器台の鏢状部の破片である。外面は丹塗りである。

**甕** (80～85) 80・81は甕1bの口縁部から胴部上半であり、ともに全周の約1/6程度が残存している。80は口縁部下に三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。80の外面には縦方向の刷毛目調整、内面にはナデ調整、81の外面には縦方向の刷毛目調整、内面には斜方向の刷毛目調整が施されている。両個体ともに口縁部外面には粘土紐接合痕が観察される。81の口縁部内面には刷毛目状工具による刺突文が施されている。81の外面には煤、内面にはコゲが付着している。82・83は甕1cの口縁部片である。両個体ともに外面には縦・斜方向の刷毛目調整、内面にはナデ調整が施されている。82は外面に煤が付着している。84・85は甕1dの口縁部片である。ともに内湾しながら立ち上がる口縁部形態を呈し、口縁部下には三角突帯を貼り付けている。84の胴部外面には刷毛目調整が施されている。84は外面に煤が付着している。

【埋没時期】 中期後半(須玖Ⅱ式新段階)である。

7SD375 黒灰色土 (図104 - 86～91)

### 弥生土器

**壺** (86) 壺2bの口縁部から胴部の破片である。器面は摩滅しており、調整等は不明である。

**甕** (87～89) 87は甕1dの口縁部片である。口縁部下に三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。88・89は甕1cの口縁部片である。89は口縁部下に突出度の低い三角突帯を貼り付け

ている。

### 石製品

**石鏃未製品 (90)** 黒曜石製の石鏃の未製品であろうか。脚部を作り出しているが、他の部分には剥離が見られないため、脚部を一部作り出した際の欠損と思われる。

**叩石 (91)** 凝灰岩製の叩石である。正面左側に叩き面が見られる。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式新段階）である。

### 7SD375 暗灰色砂（図 104 - 92 ~ 106）

#### 弥生土器

**高坏 (92 ~ 94)** 92 ~ 94 は高坏 a の口縁部片である。94 は口縁部下に三角突帯を貼り付けている。92 の内面は横方向のミガキ調整によって仕上げられている。92・93 は内外面、94 は外面に丹塗りが施されている。

**壺 (95 ~ 101)** 95 は壺 2b の口縁部片である。口縁部には円形の穿孔があり、外面と口縁部内面には丹塗りが施されている。96 ~ 98 は壺 3 の胴部片である。96 には二条の三角突帯を貼り付けているが、97・98 には断面コ字状突帯を貼り付けている。いずれの個体も、きめの細かい精良な胎土によって製作されており、外面は丹塗りである。99・100 は壺 4 の頸部片である。99 には三角突帯、100 には断面 M 字状突帯を貼り付けている。ともに外面は丹塗りである。101 は壺の口縁部片である。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。

**蓋 (102)** 蓋 2 の口縁部片である。外面は丹塗りである。

**甕 (103 ~ 106)** 103 は甕 1b の口縁部片である。104・105 は甕 1c の口縁部片である。105 は外面に煤が付着している。106 は甕 1d の口縁部片である。口縁部下には三角突帯を貼り付けている。外面には縦方向の刷毛目調整が観察される。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式新段階）である。

### 7SD375 明茶色土（図 105 - 107）

#### 弥生土器

**壺 (107)** 壺 2b の口縁部片である。外面と口縁部内面は丹塗りである。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式）である。

### 7SD375 黒灰色粘土（図 105・106 - 108 ~ 124）

#### 弥生土器

**高坏 (108・109)** 108・109 は高坏 a の口縁部片である。109 は内外面ともに丹塗りである。

**壺 (110 ~ 114)** 110 は壺 2a の口縁部片である。器面は摩滅しており、調整等は不明である。111 は壺 2b の口縁部から胴部であり、全周の約 1 / 3 程度が残存している。口縁部には円形の穿孔がなされる。外面には縦方向の刷毛目調整、口縁部内面には横方向の刷毛目調整が施され、胴部内面はナデ仕上げられている。112 は短頸壺の口縁部片であり、全周の約 1 / 4 程度が残存している。口縁部のやや下に断面コ字状突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面ともにナデ調整により仕上げられており、外面と口縁部内面は丹塗りである。113・114 は壺 3

の胴部であり、114は全周の約1/5程度が残存している。113には二条の三角突帯が貼り付けられているが、上位の突帯の突出度が高い一方、下位の突帯の突出度は低い。114には一条の断面コ字状突帯を貼り付けている。113の内面には指頭圧痕が顕著に観察される。113・114ともに外面は丹塗りである。

**甕(115～118)** 115～117は甕1bの口縁部であり、117は全周の約1/7程度が残存している。116の外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。117の口縁部内面には横方向の刷毛目調整が施されている。117の外面には煤、内面にはコゲが付着している。118は甕1dの口縁部であり、全周の約1/7程度が残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面には縦方向の刷毛目調整が施され、内面は横方向にナデ仕上げられている。外面には全面に煤が付着しており、吹きこぼれの痕跡が明瞭に残存している。

### 石製品

**石斧(119)** サヌカイト製の石斧である。両刃ではあるが、小さく扁平なため、用途は不明である。

### 木製品

**斧柄(120)** 斧の柄である。枝分かれした木の股部を利用し、幹の部分を台部、枝の部分を握部とする。大部分を欠損しており、鉄斧の柄か石斧の柄かは不明である。

**刀子(121)** 破片のため詳細は不明であるが、刃部をつくり出していることから刀子様のものと考えられる。現状で、全長9.5cm、幅2.6cm、厚さ0.9cmをはかる。

**広鋏(122)** 広鋏の破片である。半分以上を欠損しているが、右側面および角が残存しており平面は方形であったことがわかる。上方に柄孔の一部が残存しており、残存部分から柄孔は方形であったと思われる。現状で、全長13.4cm、幅6.6cm、厚さ1.8cmをはかる。

**棒状木製品(123)** 上端部付近を削って括れ部をつくり出している棒状の木製品である。破片であり、用途など詳細については不明である。現状で、全長17.4cm、幅3.6cm、厚さ3.1cmをはかる。

**用途不明製品(124)** 破片のため、用途など詳細は不明である。表面には加工された痕跡が観察される。現状で全長11.0cm、幅7.4cm、幅5.4cmをはかる。

**【埋没時期】** 須恵器片が出土しているが、本土層の埋没時期は中期後半(須玖Ⅱ式新段階)であろう。

### 7SD375 黒色砂 (図107 - 125～140)

### 弥生土器

**壺(125～130)** 125は壺1の胴部片である。胴部最大径部位に断面M字状突帯を貼り付けている。外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。外面は丹塗りである。126は壺2bの口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。127は壺の胴部片である。断面M字状突帯を二条貼り付けている。内面にはナデ調整の痕跡が観察される。外面は丹塗りである。128・129は壺3の突帯片である。断面コ字状突帯の端部はヨコナデにより若干凹んでいる。128の外面は丹塗りである。130は壺5の口縁部片である。口縁部外面には三角突帯を貼り付

7SD375黒色砂

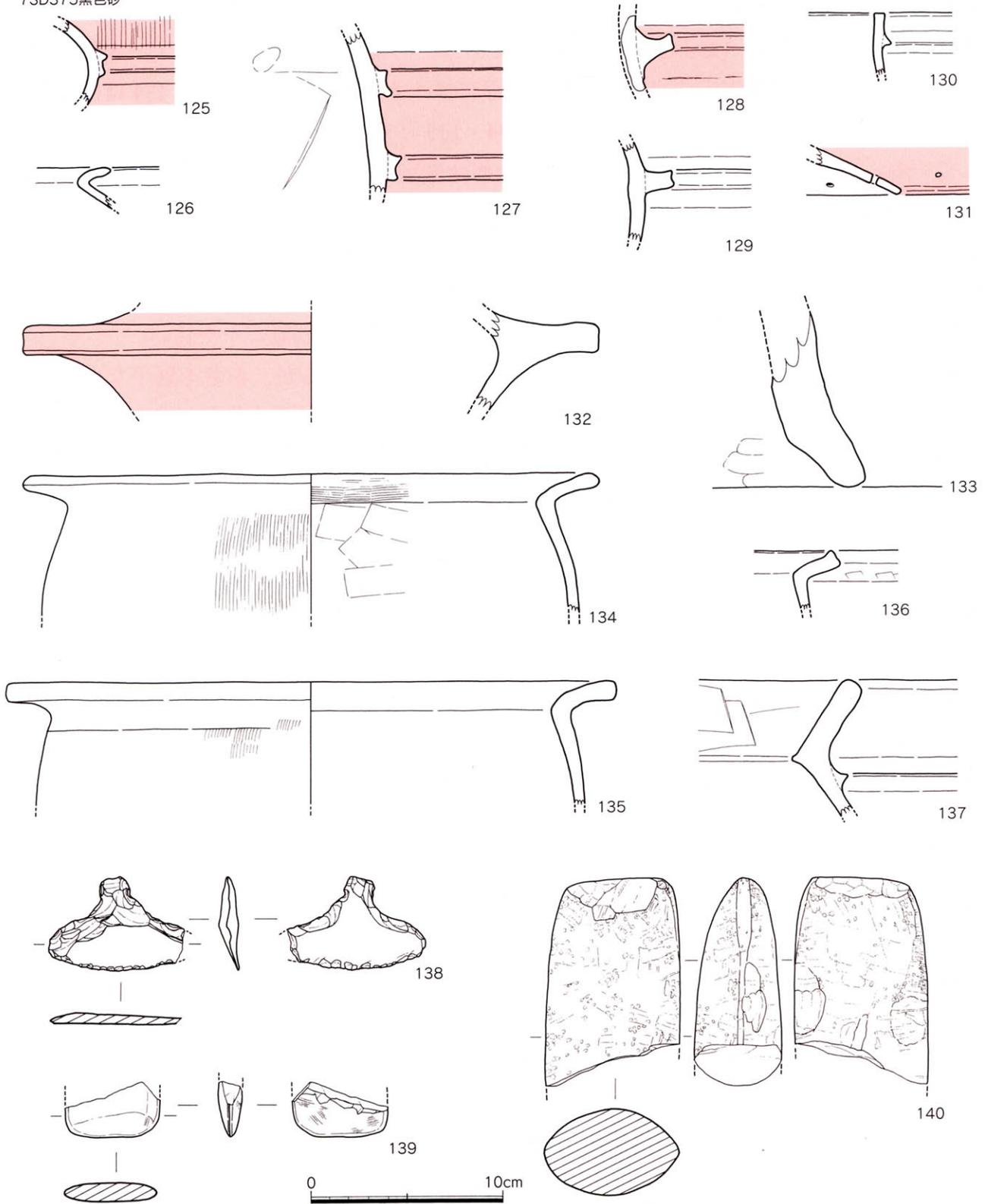


図107. 溝出土遺物実測図(25) (S=1/3)

けている。

**蓋 (131)** 蓋2の破片である。口縁部には穿孔が施されている。外面は丹塗りである。

**器台 (132)** 筒形器台の鏢状部であり、全周の約1/6程度が残存している。外面は丹塗りである。

**支脚 (133)** 支脚の裾部片である。内面には横方向のナデ調整の痕跡が観察される。

**甕 (134 ~ 137)** 134・135は甕1bの口縁部であり、両個体ともに全周の約1/6程度が残存している。外面には縦方向の刷毛目調整、内面にはナデ調整が施されるが、134は口縁部内面には横方向の刷毛目調整が施されている。134・135ともに外面には煤、内面にはコゲが付着している。136は甕1cの口縁部片である。器面は摩滅しており、調整等は不明であるが、口縁部外面には工具痕が確認される。137は甕1bの口縁部片である。口縁部下には三角突帯を貼り付けている。口縁部内面には横方向のナデ調整が観察される。外面には煤が付着している。

### 石製品

**石匙 (138)** 粘板岩製の石匙である。完形品であるが、刃部の剥離がやや甘い。

**石斧 (139・140)** 139は粘板岩製の石斧である。両刃ではあるが、小さく扁平なため、用途は不明である。140は玄武岩製の大型蛤刃石斧である。刃部を欠損するが、典型的な今山産の石斧である。表面にはやや凹凸が見られるが、敲打の後、研磨を施しており、完成品と思われる。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式新段階）である。

7SD375 青灰白砂（図108 - 141）

### 弥生土器

**甕 (141)** 甕1bの口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式古段階）である。

7SD375 灰褐色土（図108 - 142 ~ 149）

### 弥生土器

**高坏 (142)** 高坏aの口縁部片である。器面は摩滅しており、調整等は不明である。

**壺 (143)** ミニチュアの壺である。口縁部以外はほぼ完形である。外面には刷毛目調整、内面にはナデ調整が施されている。

**甕 (144)** 甕1aの口縁部片である。内面には指頭圧痕が確認される。

### 土製品

**紡錘車 (145)** 完形の土製紡錘車である。器面が摩滅しており、調整は不明である。

### 石製品

**石剣 (147・148)** 147は粘板岩質の有茎式石剣である。断面菱形で、鎬が茎付近にまで通るが、茎部分ではやや明瞭でない。石理の文様が剣身に沿って入る。148は粘板岩製の有茎式石剣である。切先と刃部をやや欠損するが、ほぼ完形である。鎬は茎の中ほどまで入るが、表面においては、横方向に研磨を施し、消してある。石理の文様が剣身に沿って入る。

**石斧 (146・149)** 146は頁岩製の扁平片刃石斧である。刃部を一部欠損するが、前主面の鎬は明瞭である。149は玄武岩製の大型蛤刃石斧である。基部のみの出土であるが、今山産の石斧であろう。表面にはやや凹凸が見られる。

【埋没時期】 中期中頃（須玖Ⅰ式新段階～Ⅱ式古段階）である。

7SD375 淡灰色粘土（図108 - 150・151）

### 弥生土器

壺 (150・151) 150・151は壺1bの口縁部であり、150は全周の約1/5程度が残存している。150の外面は刷毛目調整の後、ナデ調整により仕上げられ、内面はナデ調整により仕上げられている。151の外面には縦方向の刷毛目調整、内面にはナデ調整が施されている。

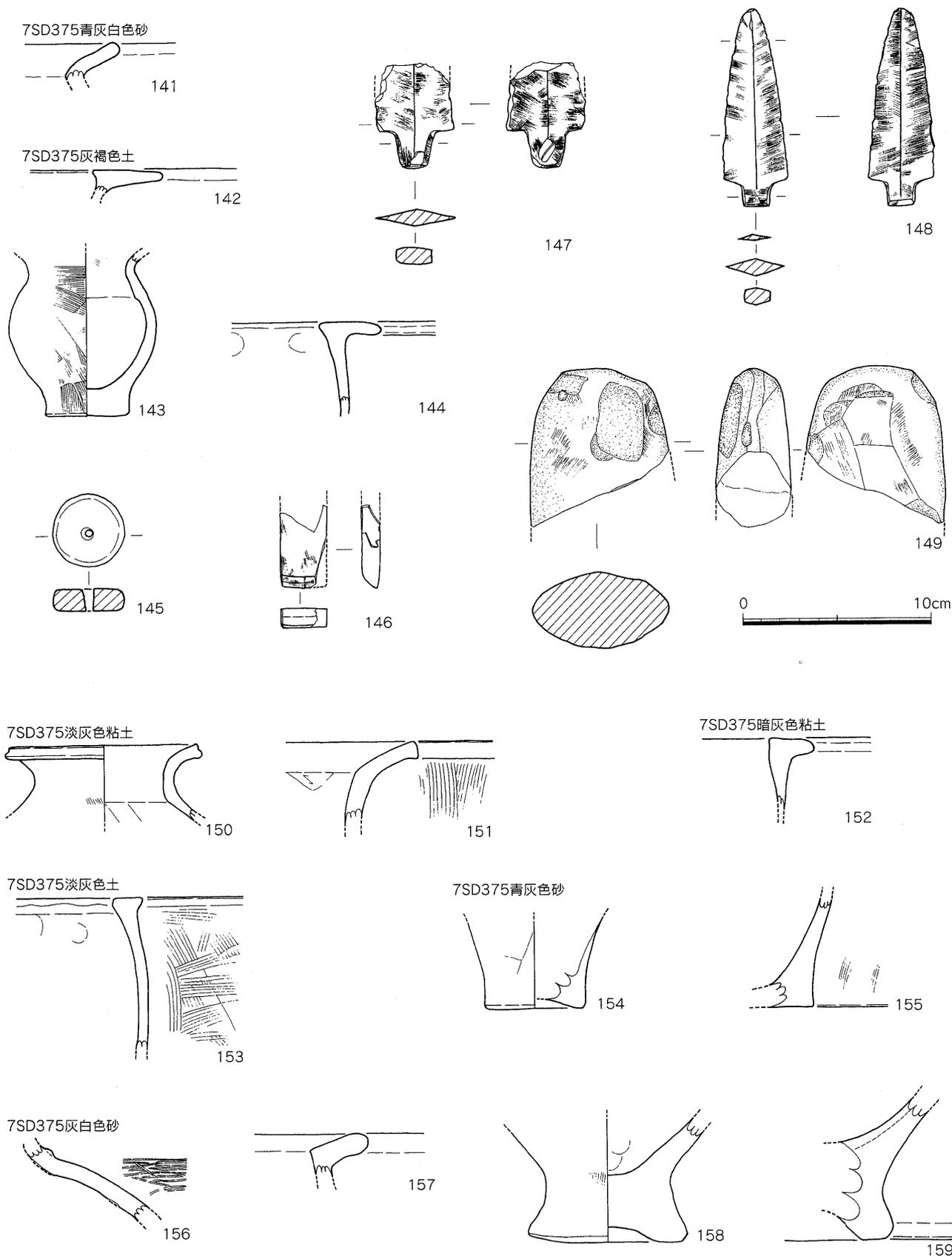


図108. 溝出土遺物実測図(26) (S=1/3)

【埋没時期】 中期初頭（城ノ越式）である。

7SD375 暗灰色粘土（図 108 - 152）

弥生土器

甕（152） 甕 1a の口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

【埋没時期】 中期前半（須玖 I 式古段階）である。

7SD375 淡灰色土（図 108 - 153）

弥生土器

甕（153） 甕 1a の口縁部から胴部上半の破片である。口縁部上面をヨコナデにより平坦化している。外面には刷毛目調整、内面にはナデ調整が施されている。外面には煤が付着している。

【埋没時期】 中期初頭（城ノ越式）である。

7SD375 青灰色砂（図 108 - 154・155）

弥生土器

甕（154・155） 154・155 は甕の底部であり、154 は全周の約 1 / 3 程度が残存している。154 の外面は底部付近を横方向、胴部下半を縦方向のナデ調整により仕上げている。155 の外面は器面が摩滅しており不明瞭だが、縦方向の刷毛目調整が施されているものと思われる。155 の外面には煤、内面にはコゲが付着している。

【埋没時期】 中期前半（須玖 I 式）である。

7SD375 灰白色砂（図 108 - 156 ~ 159）

弥生土器

壺（156） 壺の胴部片である。肩部付近に突出度の低い三角突帯を貼り付けている。外面には横方向のミガキ調整、内面にはナデ調整が施されている。

甕（157 ~ 159） 157 は甕 1a の口縁部片である。158・159 は甕の底部であり、158 の底部は完形である。ともに器面は摩滅しており、調整等は不明である。

【埋没時期】 中期初頭から中期前半（城ノ越式～須玖 I 式古段階）である。

e. 墓

e-1. 甕棺墓【小型棺】

7ST005（図 109 - 1）

弥生土器

甕（1） 小型の甕である。胴部から底部にかけて器体全周の約 1 / 4 程度残存している。内外面ともに器面の風化が著しく調整等は不明であるが、内面の底部付近には指頭圧痕が残っている。

【形成時期】 不明である。

7ST050（図 109 - 2）

弥生土器

甕（2） 小型の甕 1b である。口縁部から胴部上半にかけて全周の約 1 / 4 程度残存している。頸部外面にみられる粘土紐の接合痕や断面観察から、折り曲げではなく、頸部以下を成形後、

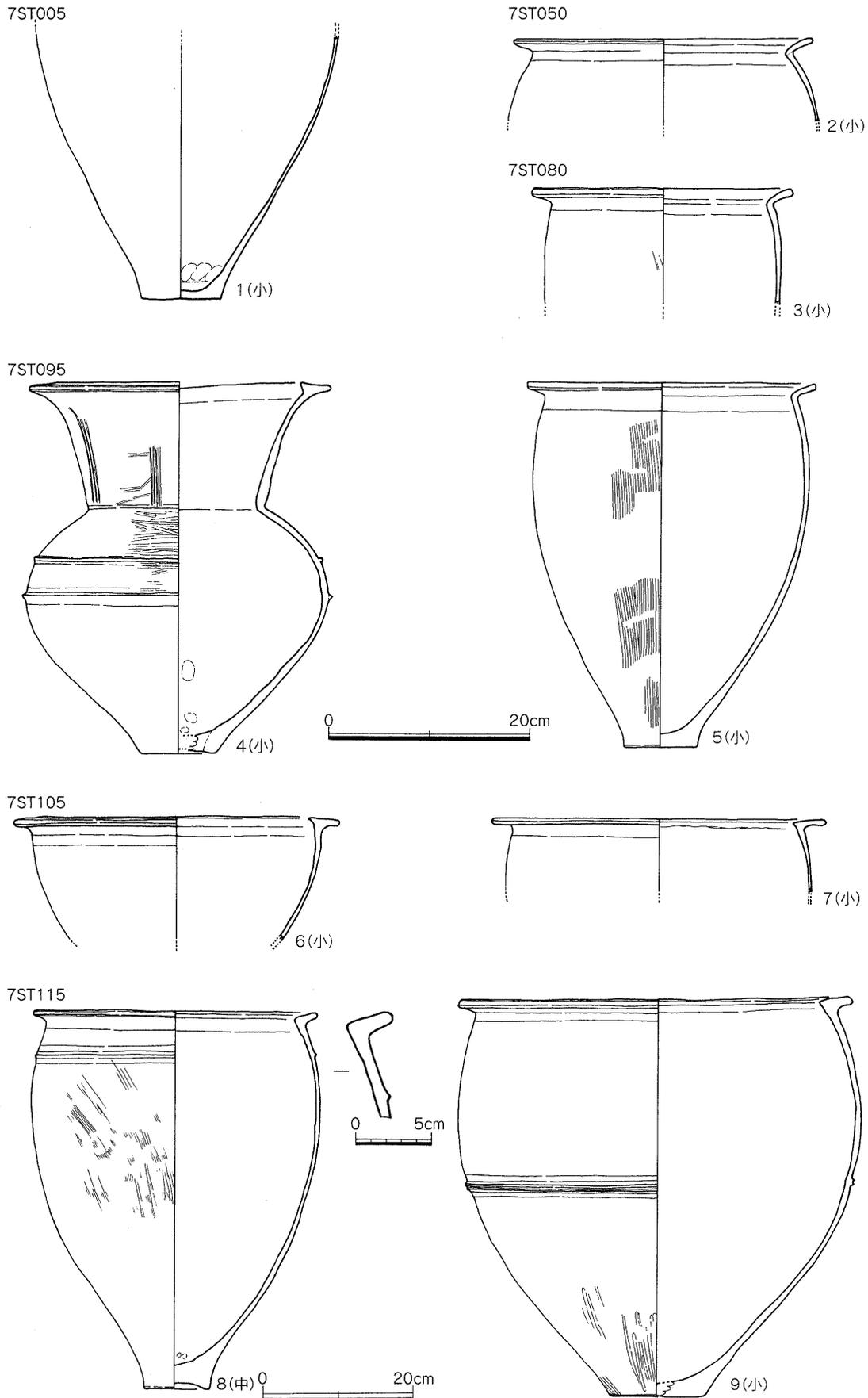


図109. 甕棺墓出土遺物実測図(1) (S=1/4・1/6・1/8)

その上位に粘土紐を新たにつけ加えることで口縁部を成形している。また、器面は風化しており、内外面の調整は不明である。

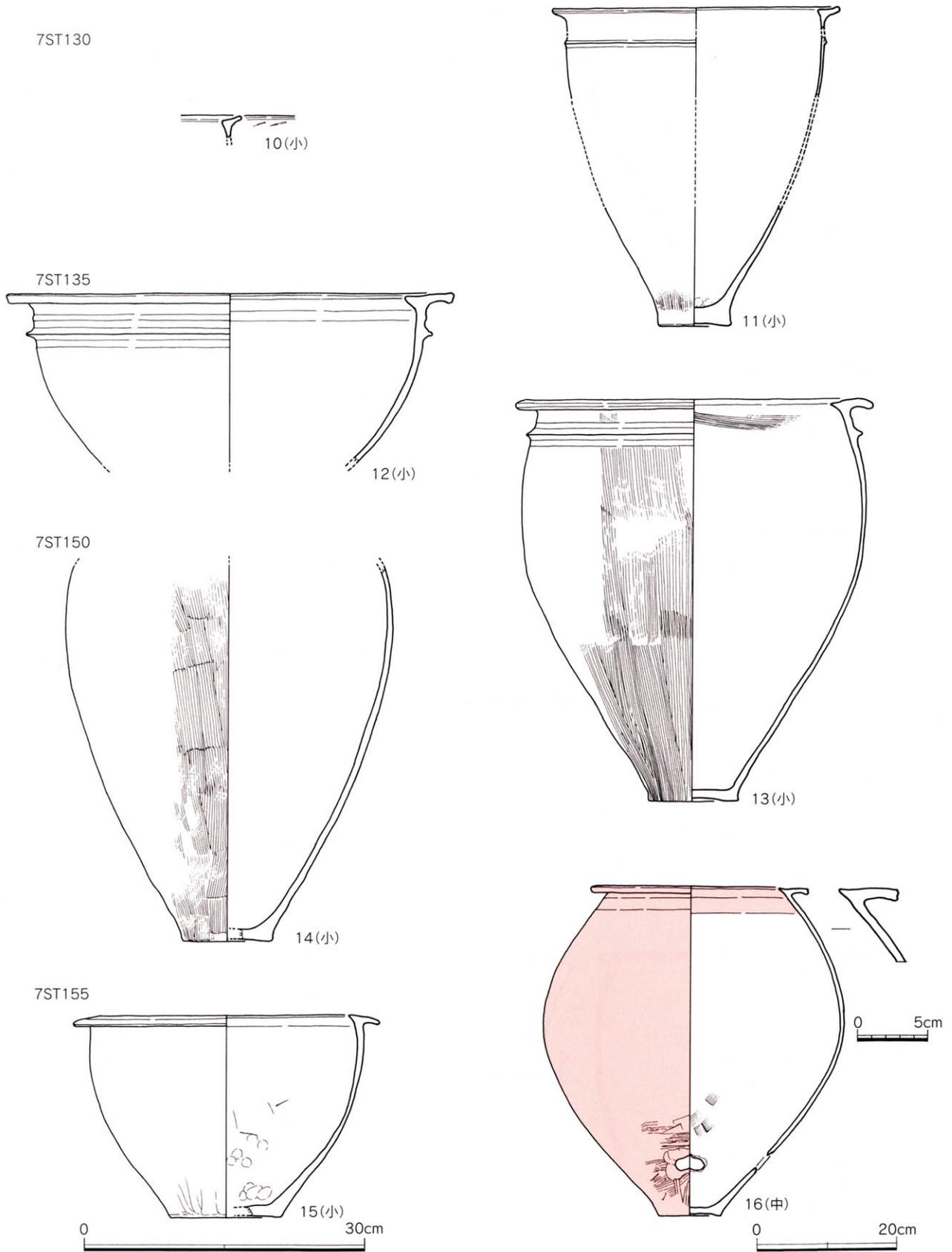


図110. 甕棺墓出土遺物実測図(2) (S=1/4・1/6・1/8)

【形成時期】 中期後半（須玖Ⅱ式古段階）であろう。

7ST080（図30-3）

弥生土器

**甕 (3)** 小型の甕 1b である。口縁部から胴部上半にかけて全周の約 1 / 6 程度残存している。内外面ともに器面が風化しており調整等の詳細は不明であるが、外面には若干縦方向の刷毛目が観察できる。

【形成時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式新段階) であろう。

7ST095 (図 109 - 4・5)

#### 弥生土器

**壺 (4)** 壺 1a である。口縁部を全周の約 1 / 4、胴部から底部にかけては約 1 / 2 程度欠損している。胴部上位と中位にはやや間隔をあけて二条の三角突帯を貼り付けている。外面上位には横方向のミガキ、内面にはナデが施される。口頸部には数条で一単位の暗文が残存部に 4ヶ所施されており、その間隔から推定すると全体で 6ヶ所に施されていたものと考えられる。

**甕 (5)** 小型の甕 1b である。口縁部を一部欠損するが、ほぼ完形である。外面は縦方向の刷毛目調整が観察できるが、内面の調整は器面の風化が著しく不明である。また、外面の胴部中位には煤が付着しており、煮沸具としての使用後、甕棺に転用されたことがわかる。色調は白色を呈する。

【形成時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式古段階) である。

7ST105 (図 109 - 6・7)

#### 弥生土器

**鉢 (6)** 鉢 a である。口縁部から胴部下半にかけて全周の約 1 / 3 程度残存している。内面はナデ調整されているが、外面は風化が著しく調整は不明である。

**甕 (7)** 小型の甕 1a である。口縁部から胴部上半にかけて全周の約 1 / 4 程度残存している。器面は風化しており調整などは不明であるが、口縁部内面には粘土紐の接合痕と思われる部分が認められる。

【形成時期】 中期前半 (須玖Ⅰ式新段階) である。

7ST115 (図 109 - 8・9)

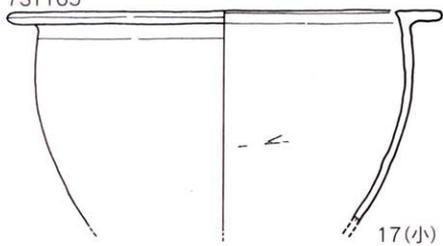
#### 弥生土器

**甕 (8・9)** 8 は中型の甕 1a である。器体全周の約 2 / 3 程度が残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面とも器面が風化しており調整などについては不明な点が多いが、外面には縦・斜方向の刷毛目調整が部分的に観察できる。また、外面には胴部上半に煤が付着しており、煮沸具として使用後、甕棺へと転用されたことがわかる。9 は小型の丸味の強い甕である。一部欠損するがほぼ完形である。胴部が張った丸みを帯びる形態であり、胴部中位には断面 M 字状の突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面の底部付近には縦方向のミガキが、胴部には横方向のミガキが施されるが単位は不明瞭である。また、外面の胴部中位には煤、内面にはパッチ状にコゲが付着しており、煮沸具として使用後、甕棺に転用されたことがわかる。色調は強い橙色を呈する。

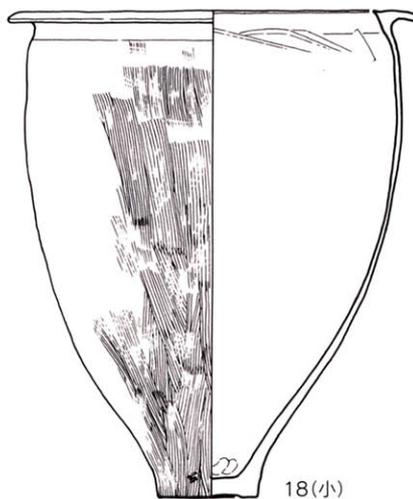
【形成時期】 中期前半 (須玖Ⅰ式古段階) である。

7ST130 (図 110 - 10・11)

7ST165

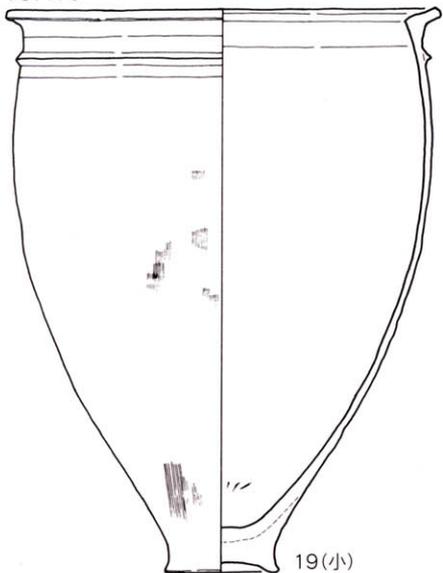


17(小)

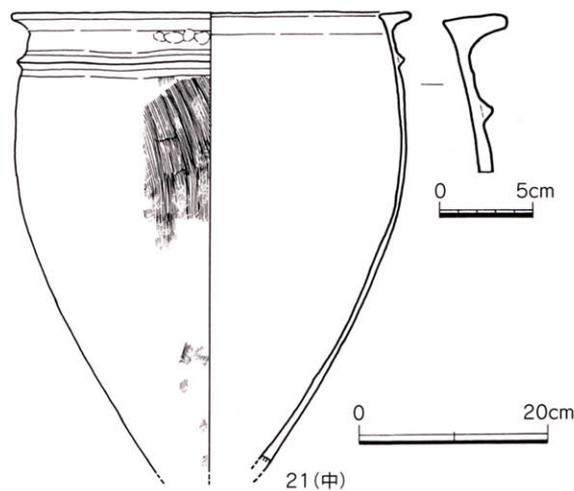


18(小)

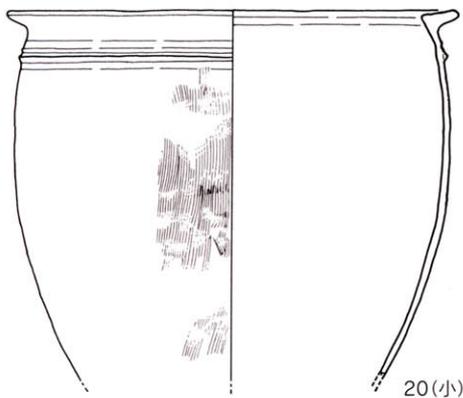
7ST170



19(小)

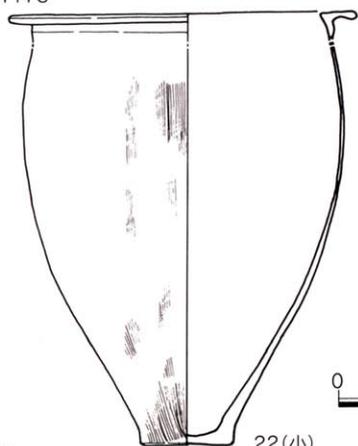


21(中)



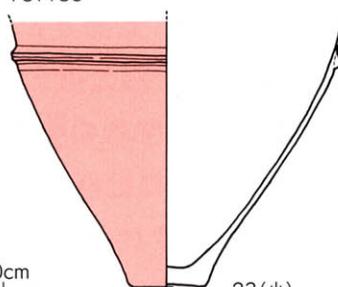
20(小)

7ST175



22(小)

7ST185



23(小)

弥生土器

图111. 甕棺墓出土遺物実測図(3) (S=1/4・1/6・1/8)

**甕** (10・11) 10は小型の甕1aの口縁部片である。口縁部下に刷毛目調整工具の痕跡が観察できる。11は小型の甕1aである。口縁部から胴部上半にかけて全周の約 $1/4$ と、底部が残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。胴部の内外面は摩耗のため調整の詳細は不明である。しかし、外面底部には縦方向の刷毛目調整が残存しており、これらはヨコナデによって切られている。

【形成時期】 中期前半（須玖Ⅰ式古段階）である。

7ST135 (図110 - 12・13)

#### 弥生土器

**鉢** (12) 鉢aである。口縁部から胴部下半にかけて全周の約 $1/2$ 程度残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。表面は風化しており、調整など詳細は不明である。

**甕** (13) 小型の甕1aである。口縁部から胴部にかけて全周の約 $1/2$ 程度が欠損している。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。また、口縁部と突帯の間に刷毛目が観察でき、ヨコナデによってこれが切られていることから、刷毛目調整後に突帯を貼り付けていることがわかる。外面には縦方向の刷毛目が、内面はナデ仕上げであるが、口縁部付近には横方向の刷毛目調整が残っている。外面の刷毛目は一貫して下位の刷毛目が上位の刷毛目を切っており、胴部上位から下位へと調整が進行したことがわかる。工具の動きは胴部下位から上位に向けてである。外面には口縁部や胴部下半に煤が付着しており、内面にもパッチ状にコゲが付着している。これらのことから煮沸具として使用後、甕棺に転用されたことがわかる。

【形成時期】 中期後半（須玖Ⅱ式古段階）である。

7ST150 (図110 - 14)

#### 弥生土器

**甕** (14) 小型の甕であり、胴部の一部と底部の全周約 $1/3$ 程度が残存している。外面は縦方向の刷毛目調整で、上位の刷毛目が下位の刷毛目に切られていることから、胴部の上位から下位へと刷毛目調整が進行したことがわかる。内面は風化のため調整などの詳細は不明である。

【形成時期】 不明である。

7ST155 (図110 - 15・16)

#### 弥生土器

**鉢** (15) 鉢aである。口縁部から胴部上半にかけて器体全周の約 $3/4$ 、胴部下半から底部にかけて約 $1/3$ 程度が残存している。内外面ともに丁寧にナデ調整が施されているが、内面には刷毛目調整工具の起点痕も残存している。外面の底部付近には縦方向のナデの単位が観察でき、内面の胴部下半には指頭圧痕が観察される。

**甕×壺** (16) 中型の甕1a×壺2aである。口縁部を一部欠損するが、ほぼ完形である。丸みをもつ形態であり、胴部下半には横長の穿孔が施される。調整は外面の胴部下半が横方向、底部付近が縦方向のミガキであり、内面はナデ調整であるが、内外面ともに刷毛目調整工具の起点痕も残存している。また、外面と口縁部内面は丹塗りである。

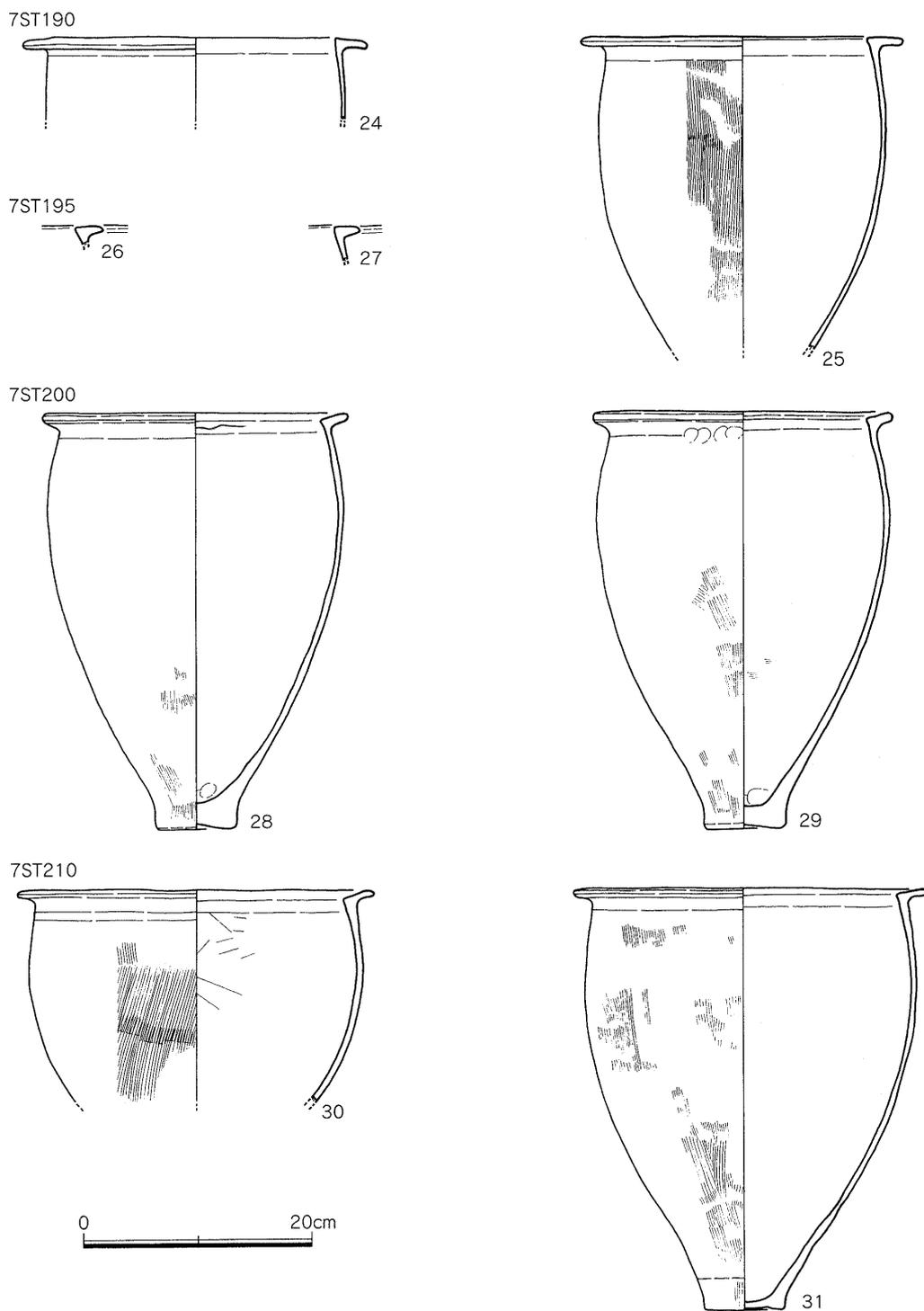


図112. 甕棺墓出土遺物実測図(4) (S=1/6)

【形成時期】 中期前半（須玖Ⅰ式新段階）である。

7ST165（図111 - 17・18）

弥生土器

鉢（17） 鉢aである。口縁部から胴部下半にかけて全周の約1/2程度残存している。内外面ともにナデ調整である。内面には刷毛目調整工具の起点痕が観察でき、刷毛目調整の後ナデ仕上げられたと思われる。

甕（18） 小型の甕1aである。口縁部と胴部の全周約1/2程度が欠損している。外面は縦方

向の刷毛目調整であり、底部付近には細筋のタタキ痕が観察できる。また、外面の刷毛目は下位の単位が上位の単位を切っており、上位から下位へと刷毛目調整が進行したことがわかる。工具は胴部下位から上位方向に動かされている。内面はナデ調整であり、口縁部付近ではナデの切り合い関係が明瞭に観察できる。色調は強い白色を呈する。

【形成時期】中期後半（須玖Ⅱ式古段階）である。

7ST170（図 111 - 19 ~ 21）

#### 弥生土器

**甕**（19 ~ 21）19は小型の甕 1a である。器体全周の約 1 / 2 程度が残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付ける。断面観察から、底部は基底部上に丸底状に成形された鉢状部をのせる形で作られていることがわかる。内外面ともに器面の風化が著しいが、外面は縦方向の刷毛目調整が観察できる。外面の底部付近には横方向のナデが施されている。また、外面の胴部中位には煤が付着しており、煮沸具として使用后、甕棺へと転用されたことがわかる。20は小型の甕 1a である。口縁部から胴部下半にかけて全周の約 1 / 2 程度が残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデで貼り付けている。外面は縦方向の刷毛目調整、内面は摩耗のため不明である。また、外面には口縁部から胴部にかけて煤が付着しており、煮沸具として使用后、甕棺に転用されたことがわかる。21は中型の甕 1a である。口縁部から胴部下半にかけて全周の約 1 / 2 程度が残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内外面ともに風化しているが、外面の胴部上半には縦・斜方向の刷毛目調整が観察できる。また、外面の胴部上半に煤が付着し、下半部では煤が酸化しているため、強い加熱を受けたことがわかる。煮沸具としての使用の後、甕棺に転用されている。

【形成時期】中期前半（須玖Ⅰ式古段階）である。

7ST175（図 111 - 22）

#### 弥生土器

**甕**（22）小型の甕 1a である。胴部上半から底部にかけて全周の約 1 / 2 程度が残存している。内外面ともに若干摩耗しているが、外面は縦方向の刷毛目調整、内面はナデ調整である。また、外面は全体的に煤が付着し、内面の胴部上半にはコゲが付着している。これらのことから、煮沸具として使用后、甕棺に転用されたことがわかる。

【形成時期】中期前半（須玖Ⅰ式新段階）である。

7ST185（図 111 - 23）

#### 弥生土器

**甕**（23）小型の甕で、胴部下半から底部にかけて全周の約 2 / 3 程度残存している。胴部下半には断面 M 字状突帯をヨコナデによって貼り付けている。調整については内外面ともに摩耗しており詳細は不明である。外面は全面丹塗りである。

【形成時期】不明である。

7ST190（図 112 - 24・25）

#### 弥生土器

**甕(24・25)** 24は小型の甕1aである。口縁部から胴部上半が全周の約1/4程度残存している。内外面ともに器面は風化しており、詳細は不明である。25は小型の甕1aである。口縁部から胴部下半にかけて全周の約1/4程度残存している。外面は縦方向の細かい刷毛目調整が行われている。内面は器面の荒れが激しく調整は不明である。

【形成時期】 中期前半（須玖I式新段階）である。

**7ST195** (図 112 - 26・27)

#### 弥生土器

**甕(26・27)** 26は小型の甕1aの口縁部片である。器面は風化しており、調整などは不明である。27は小型の甕1aの口縁部片である。器面は風化しており、調整などは不明である。

【形成時期】 中期前半（須玖I式古段階）である。

**7ST200** (図 112 - 28・29)

#### 弥生土器

**甕(28・29)** 28は小型の甕1aである。口縁部から胴部にかけて全周の約1/2程度と底部が残存している。外面は縦方向の刷毛目調整後ナデ調整が行われており、内面もナデ調整である。また、口縁部内面には粘土紐接合痕と思われる箇所が観察できる。29は小型の甕1aである。口縁部から胴部中位の全周約1/2程度が欠損している。内外面ともに刷毛目調整後、ナデで仕上げている。また、外面の口縁部下には指頭圧痕が見られる。28・29とも色調は強い白色を呈する。

【形成時期】 中期前半（須玖I式古段階）である。

**7ST210** (図 112 - 30・31)

#### 弥生土器

**甕(30・31)** 30は小型の甕1aである。口縁部から胴部下半にかけて全周の約1/2程度が残存する。外面は斜方向の刷毛目調整であり、上下の刷毛目の切り合い関係から、上位から下位という順序で刷毛目調整が進行したことがわかる。内面には刷毛目調整工具の起点痕が多数確認されるが、刷毛目自体は丁寧にナデ消されている。31は小型の甕1aである。口縁部から底部が全周の約1/2程度残存している。外面は全体的に縦方向の刷毛目調整で、底部付近は刷毛目調整後横方向のナデによって調整されていることがわかる。内面には丁寧なナデが施されている。

【形成時期】 中期前半（須玖I式新段階）である。

**7ST215** (図 113 - 32・33)

#### 弥生土器

**甕(32・33)** 32は小型の甕1aである。口縁部から底部の全周約1/2程度が残存している。外面は縦方向の刷毛目調整後ナデ仕上げられており、内面もナデで仕上げている。33は小型の甕1aである。口縁部から胴部下半の1/2程度が欠損している。外面は風化しているが、若干残存している箇所から判断すると刷毛目調整後ナデ仕上げられたものと思われる。内面もナデで仕上げているが、刷毛目調整工具の起点痕も観察できる。ともに色調は強い白色を呈す

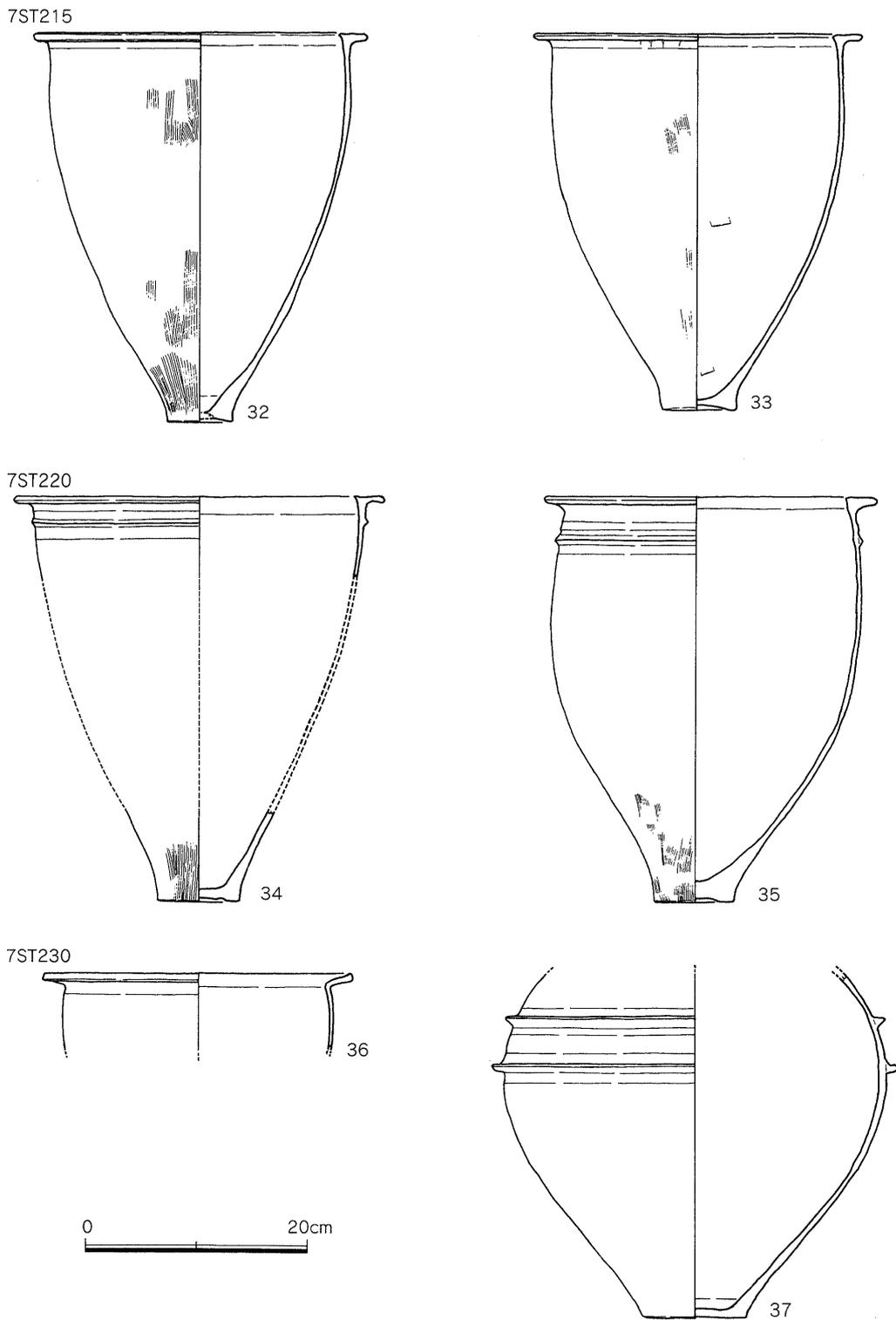


図113. 甕棺墓出土遺物実測図(5) (S=1/6)

る。

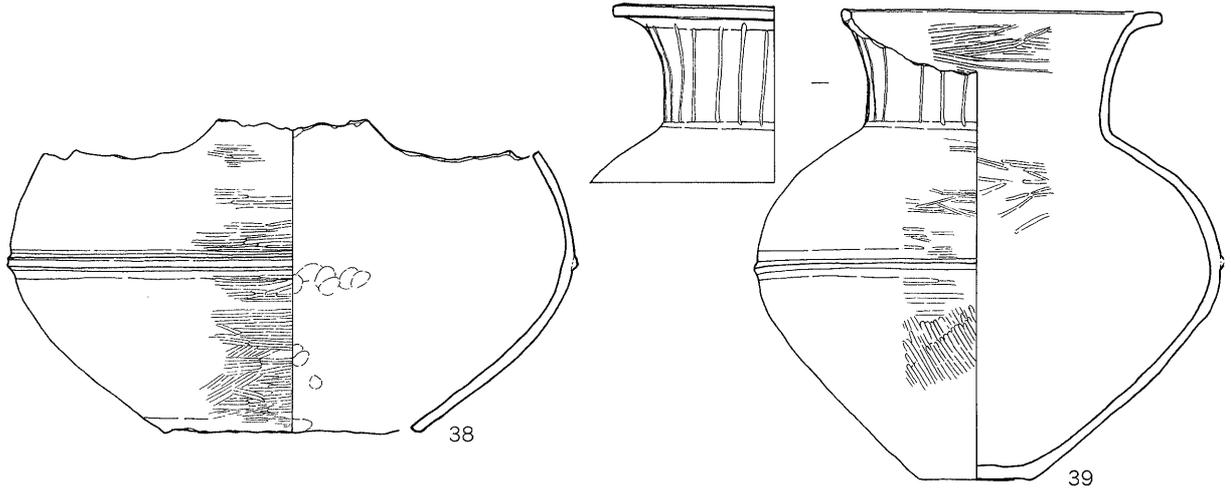
【形成時期】 中期前半（須玖Ⅰ式新段階）である。

7ST220（図113 - 34・35）

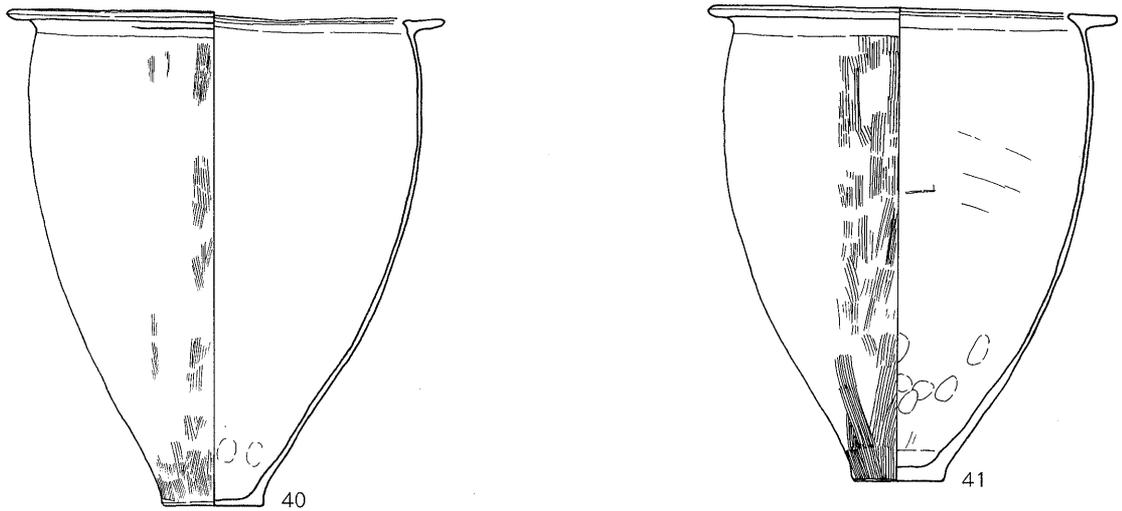
弥生土器

甕（34・35） 34は小型の甕1aである。口縁部全周約1/2と胴部破片、底部が残存する。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付ける。外面の底部付近には縦方向の刷毛目が

7ST250



7ST260



7ST270

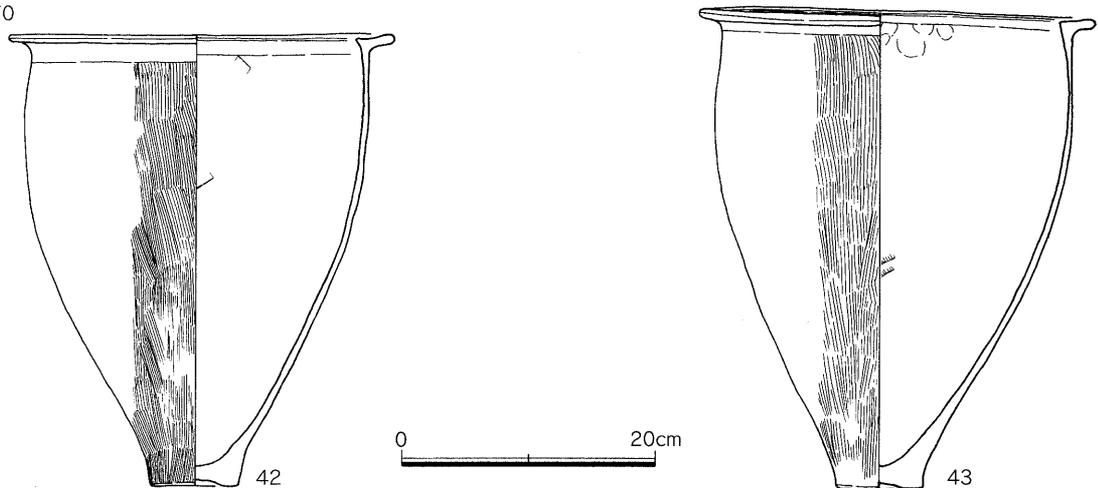


図114. 甕棺墓出土遺物実測図(6) (S=1/6)

観察できるが、それ以外は器面が摩滅しており調整などは不明である。35は小型の甕1aである。口縁部から底部の器体全周約1/2程度が残存する。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付ける。外面は底部に刷毛目が残存することから、刷毛目調整後ナデ調整、内面はナデ調整によって仕上げられている。

【形成時期】 中期前半（須玖I式新段階）である。

## 7ST230 (図 113 - 36・37)

## 弥生土器

**甕 (36)** 小型の甕 1c である。口縁部から胴部上半が全周の約 1 / 4 程度残存している。いわゆる遠賀川以東系の甕であり、口唇部を意識的に上方へヨコナデすることによって跳ね上げ口縁を形成している。内外面とも器面は風化しており、調整などは不明である。

**壺 (37)** 壺である。胴部上位は欠損し、胴部から底部にかけての器体全周の 1 / 3 程度が残存している。胴部上位にはやや間隔をあけて二条の三角突帯を貼り付けており、特に下位の突帯は突帯先端がはね上げられている。内外面とも摩滅しているが、ナデ調整と思われる。

【形成時期】 中期前半 (須玖 I 式新段階) である。

## 7ST250 (図 114 - 38・39)

## 弥生土器

**壺 (38・39)** 壺である。胴部上端・下端部ともに打ち欠かれており、胴部のみ全周の 1 / 4 程度残存している。胴部中位には断面 M 字様の突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面は横方向のミガキ調整が施され、内面はナデ仕上げで指頭圧痕が観察される。また、外面は全体的に褐色化しているが、意図的な発色の可能性がある。39 は壺 1a である。口縁部から底部にかけて全周の約 2 / 3 程度が残存している。口頸部には、縦方向の暗文が一条ずつ等間隔に施される。胴部中位には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。調整は外面の胴部上半は横方向のミガキ、下半は斜方向のミガキで、内面の口頸部・胴部上半には横方向のミガキが施される。

【形成時期】 中期中頭から中期前半 (城ノ越式～須玖 I 式古段階) である。

## 7ST260 (図 114 - 40・41)

## 弥生土器

**甕 (40・41)** 40 は小型の甕 1a である。ほぼ完形である。外面は縦方向の刷毛目調整、内面はナデ調整であり、底部内面には指頭圧痕が観察できる。41 は小型の甕 1a である。胴部の一部を欠損するが、ほぼ完形である。外面は縦方向の刷毛目調整、内面はナデ調整であるが、刷毛目調整工具の痕跡や指頭圧痕も観察できる。

【形成時期】 中期前半 (須玖 I 式新段階) である。

## 7ST270 (図 114 - 42・43)

## 弥生土器

**甕 (42・43)** 42 は小型の甕 1a である。ほぼ完形である。外面は縦方向の刷毛目調整、内面はナデ調整が施される。内面にはナデ消された刷毛目の起点痕が観察できる。また、胴部下半には煤が付着し、煮沸具としての使用後、甕棺へ転用されたことがわかる。色調は強い橙色を呈する。43 は小型の甕 1a である。完形である。外面は縦方向の刷毛目調整で、内面にも断片的に刷毛目調整痕が観察でき、刷毛目調整後ナデ仕上げられたことがわかる。胴部外面には全面に煤が付着し、底部付近の煤は酸化しており、強い加熱を受けたものと思われる。また、内面の胴部下半にもバンド状にコゲが付着していることから、この土器は煮沸具としての使用後、

甕棺に転用されたものと考えられる。色調は強い橙色を呈する。

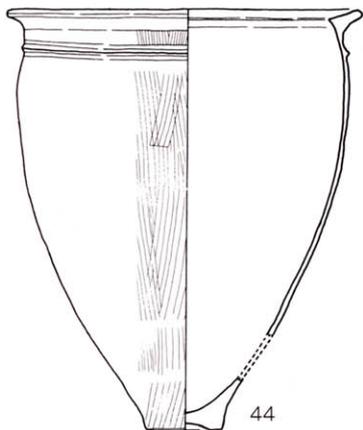
【形成時期】 中期前半（須玖 I 式新段階）である。

7ST275（図 115 - 44・45）

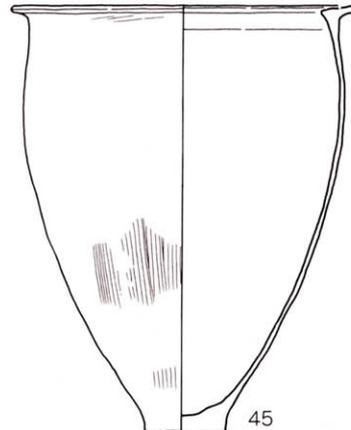
弥生土器

甕（44・45） 44 は小型の甕 1a である。胴部下半を若干欠損しているが、ほぼ完形である。口縁部下の三角突帯はヨコナデによる作り出し突帯である。また、刷毛目が突帯作り出しの際のヨコナデに切られているので、縦方向の刷毛目調整の後、突帯の成形が行われたことがわか

7ST275

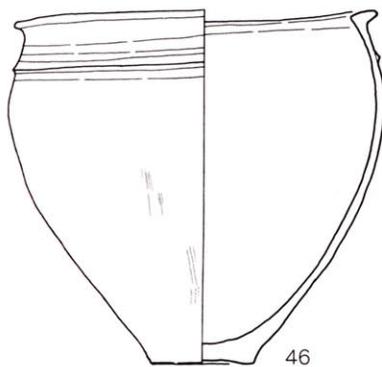


44

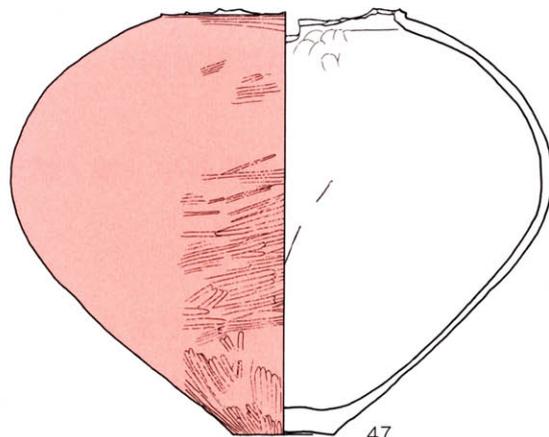


45

7ST295

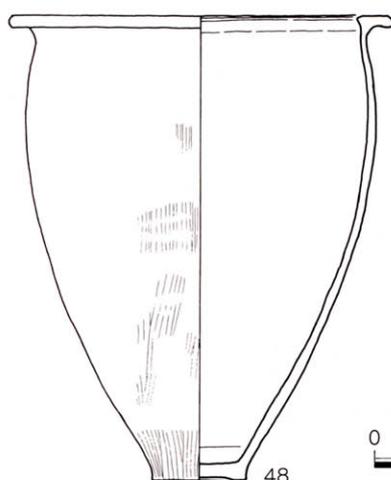


46

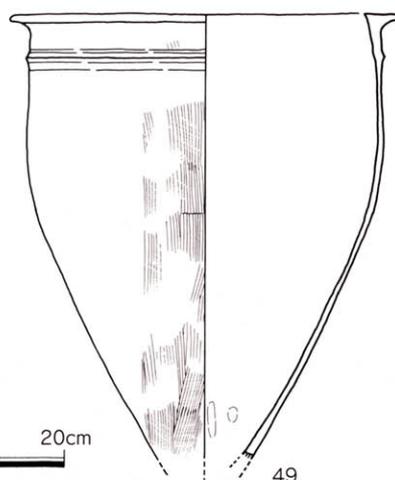


47

7ST335



48



49

0 20cm

図115. 甕棺墓出土遺物実測図(7) (S=1/6)

る。胴部から底部の外面には縦方向の刷毛目がみられるが、内面は器面の荒れが激しく調整は不明である。外面の口縁部から胴部にかけて煤が付着し、内面の胴部下半にはコゲも付着していることから、煮沸具としての使用後、甕棺に転用されたことがわかる。45は小型の甕1aである。ほぼ完形である。外面は縦方向の刷毛目調整が施されており、口縁部下には刷毛目調整工具痕の痕跡も観察できる。内面は器面が荒れており調整不明である。外面の胴部中位には煤が付着しており、煮沸具としての使用後、甕棺に転用されたことがわかる。

【形成時期】中期前半（須玖I式古段階）である。

7ST295（図115－46・47）

#### 弥生土器

甕（46） 小型の甕1aである。一部欠損するが、ほぼ完形である。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面は縦方向の刷毛目調整後ナデを施し、内面もナデで仕上げている。外面は全体的に煤が付着し、内面も器面風化のため不明確ではあるが褐色化しており、コゲの可能性が考えられる。これらのことから、煮沸具として使用後、甕棺に転用されたと考えられる。

壺（47） 壺の胴部から底部であり、器体全周がほぼ残存する。口頸部は三角突帯の直上で打ち欠かされている。外面の胴部には横方向のミガキが施され、底部付近は縦方向のミガキによって調整されている。内面はナデ調整であり、刷毛目調整工具の起点痕も観察できる。また、痕跡程度だが外面には丹塗りが残存しており、本来は全面丹塗りであったと思われる。46・47とも色調は強い橙色を呈する。

【形成時期】中期初頭から中期前半（城ノ越期～須玖I式古段階）である。

7ST335（図115－48・49）

#### 弥生土器

甕（48・49） 48は小型の甕1aである。口縁部から底部にかけて全周の1／2程度が残存している。外面は縦方向の刷毛目調整、内面はナデ調整である。また、煤が外面の胴部上半から下半にかけて付着し、底部付近では煤が酸化しており、強い加熱を受けたものと思われる。内面は底部と胴部中位（バンド状）にコゲが付着している。これらのことから煮沸具としての使用の後甕棺に転用されたことがわかる。49は小型の甕1aある。口縁部から胴部下半にかけて全周の約1／3程度が残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面は縦方向の刷毛目調整、内面はナデ調整である。また、外面の胴部下半には煤が付着し、内面の胴部中位にはコゲがバンド状に付着していることから、煮沸具として使用後甕棺に転用されたことがわかる。

【形成時期】中期前半（須玖I式新段階）である。

7ST340（図116－50）

#### 弥生土器

甕（50） 小型の甕1aである。口縁部から胴部上半の器体全周の約1／4程度が残存している。外面は刷毛目調整後ナデで仕上げている。

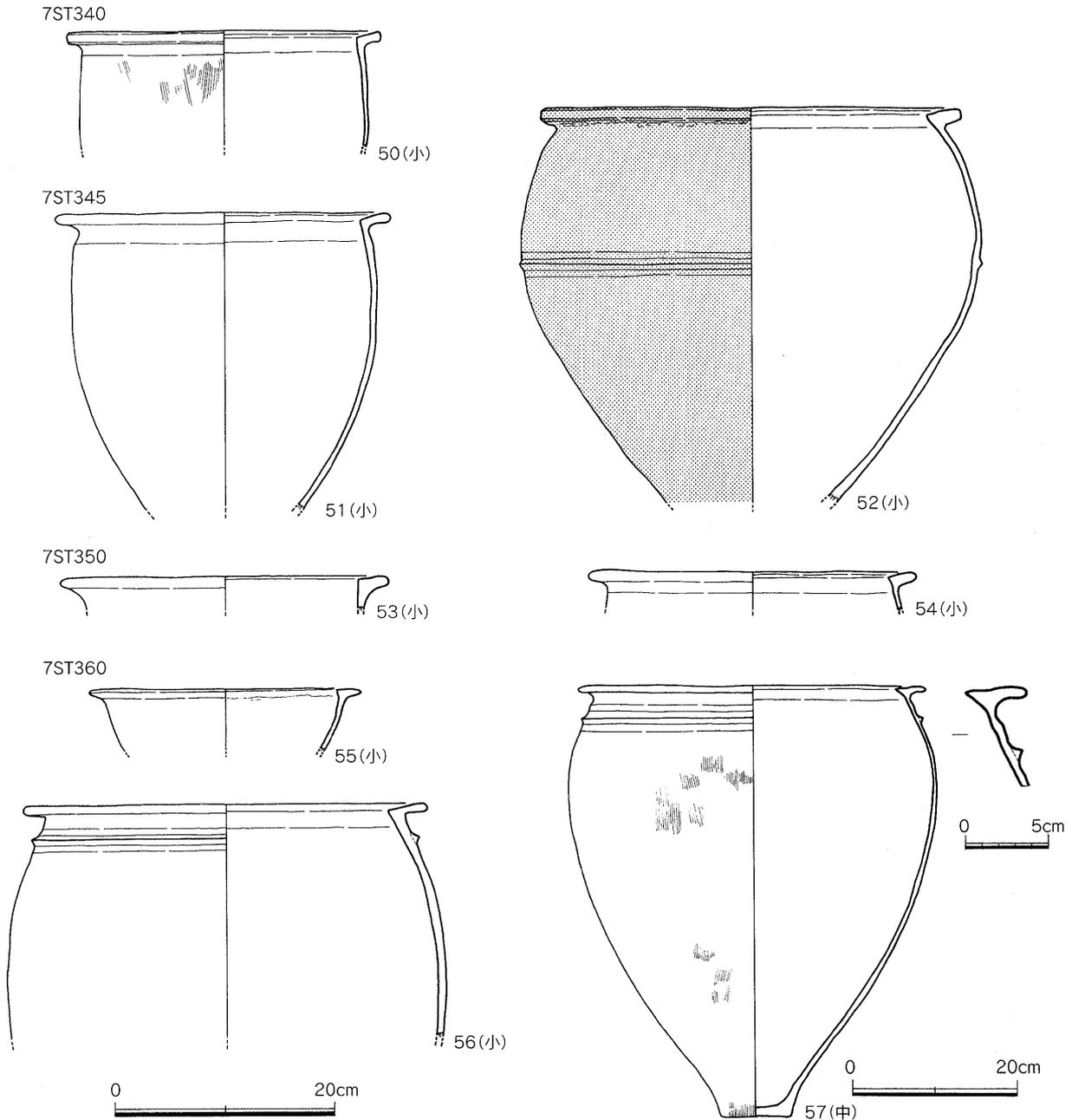


図116. 甕棺墓出土遺物実測図(8) (S=1/4・1/6・1/8)

【形成時期】 中期前半（須玖Ⅰ式古段階）である。

7ST345（図116 - 51・52）

弥生土器

甕（51・52） 51は小型の甕1aである。口縁部から胴部下半にかけて全周の約1/4程度残存している。調整などについては器面が風化しており、詳細は不明である。52は小型の丸味の強い甕である。口縁部から胴部下半にかけて全周の約1/3程度が残存している。胴部中位には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。全体的に丸みをおびた形態で口縁部下には刷毛目調整工具の終点痕が観察できる。内外面の剥落が著しく調整等の詳細については不明である。外面は黒塗りである。

【形成時期】 中期前半（須玖Ⅰ式古段階）である。

**7ST350 (図 116 - 53・54)****弥生土器**

**甕 (53・54)** 53は小型の甕 1aである。口縁部が全周の約1/6程度残存している。器面は風化しており、調整などは不明である。54は小型の甕 1aである。口縁部が全周の約1/9程度残存している。

【形成時期】 中期前半 (須玖 I 式古段階) である。

**7ST360 (図 116 - 55 ~ 57)****弥生土器**

**鉢 (55)** 鉢 a である。口縁部から胴部上半にかけて全周の約1/4程度残存している。内外面はナデ調整と思われる。内面の口縁部下には粘土紐接合痕と思われるひびが観察できる。

**甕 (56・57)** 56は小型の甕 1aである。口縁部から胴部上半にかけて全周の約1/4程度が残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内外面ともに器面は風化しているため調整などは不明瞭であるが、外面には刷毛目がわずかに残存している。57は中型の甕 1aである。器体全周の約1/2程度が残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面の一部には縦方向の刷毛目調整が観察でき、内面はナデ調整であろう。また、外面には胴部中位から下半にかけて煤が付着しており、内面にはパッチ状にコゲが付着している。これらのことから煮沸具として使用後、甕棺へ転用されたことがわかる。

【形成時期】 中期前半 (須玖 I 式新段階) である。

**e-2. 甕棺墓【中型棺】****7ST075 (図 117 - 58・59)****弥生土器**

**甕 (58・59)** 58は中型の甕で、胴部上半は打ち欠かれており、胴部下半が全周の約1/2程度残存している。外面は縦方向の刷毛目調整をした後ナデで仕上げられており、内面もナデで仕上げられている。外面の胴部下半には煤が付着し、内面にはコゲが付着していることから、煮沸具としての使用の後、甕棺に転用されたことがわかる。59は中型の甕 1aである。口縁部から底部まで残存しているが、口縁部から胴部上半の全周の約1/2程度が欠損している。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面は縦方向の刷毛目調整後ナデ調整、内面はナデ調整である。また、胴部外面には全面に煤が付着し、内面にはパッチ状にコゲが付着している。これらのことから煮沸具として使用後、甕棺に転用されたことがわかる。

【形成時期】 中期中頃 (須玖 I 式新段階～II 式古段階) である。

**7ST100 (図 117 - 60)****弥生土器**

**甕 (60)** 中型の甕 1a である。口縁部から底部まで残存しているが、口縁部から胴部上半の全周約1/4が欠損している。口縁部下には断面 M 字状突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面は縦方向の刷毛調整であるが、口縁部と突帯の間にある刷毛目が突帯に切られていること

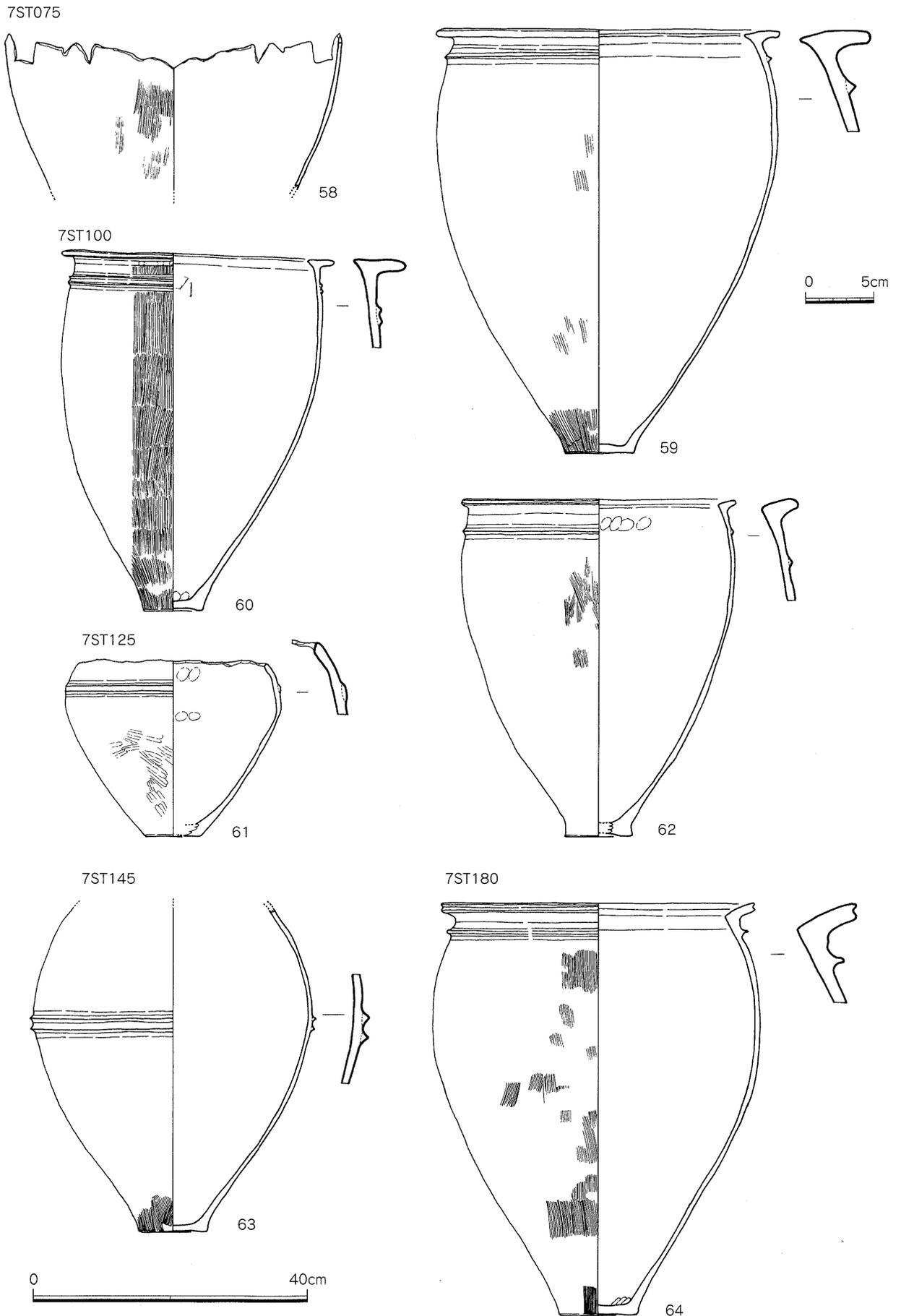


図117. 甕棺墓出土遺物実測図(9) (S=1/4・1/8)

から、刷毛調整後、突帯を貼り付けたことがわかる。内面はナデで仕上げられているが、口縁部付近には刷毛目調整工具の起点痕も認められる。胴部外面全面に煤が付着しており、煮沸具としての使用後、甕棺に転用されたことがわかる。

【形成時期】中期前半（須玖Ⅰ式新段階）である。

7ST125（図117－61・62）

#### 弥生土器

壺（61） 壺である。胴部の全周約1／2、底部の全周約1／3程度が残存している。胴部上半部分は打ち欠かされている。胴部中位には突帯がめぐっていたと思われるが摩耗のため痕跡程度に残存しているにすぎない。外面は比較的大きな単位の斜方向のミガキがみられる。内面はナデ調整しており、一部指頭圧痕も観察される。

甕（62） 中型の甕1aである。口縁部から胴部の器体全周約1／2、底部の約2／3程度が欠損している。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面は縦方向の刷毛調整後ナデ、内面はナデ調整であるが、突帯貼付部付近の内面には指頭圧痕が残存している。外面は胴部上半に煤が付着し、胴部下半は酸化しており、強い加熱を受けたと思われる。また、内面の胴部下半にはパッチ状のコゲが付着していることから、煮沸具として使用後甕棺に転用されたことがわかる。

【形成時期】中期前半（須玖Ⅰ式古段階）である。

7ST145（図117－63）

#### 弥生土器

甕（63） 中型の甕である。胴部上半から底部にかけて、器体全周の約1／3程度が残存している。いわゆる丸みをおびた甕棺の範疇に含められよう。胴部には二条の三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内外面ともに器面が風化しているが、外面の底部付近には縦方向の刷毛調整が観察できる。

【形成時期】中期中頃（KⅢa式）か？

7ST180（図117－64）

#### 弥生土器

甕（64） 中型の甕1aである。ほぼ完形である。口唇部は強いヨコナデにより凹んでいる。また、強いヨコナデによって、外面の口縁部下に貼り付けられた三角突帯も突出度の高いものとなっている。外面には縦方向の刷毛調整、内面の底部付近には指頭圧痕が残存している。外面には煤が胴部中位に付着しており、内面にはパッチ状にコゲが付着している。これらのことから煮沸具として使用後、甕棺に転用されたことがわかる。

【形成時期】中期前半（須玖Ⅰ式新段階）である。

7ST205（図118－65・66）

#### 弥生土器

甕（65・66） 65は中型の甕1aである。口縁部から胴部上半にかけて全周の約1／5程度が残存している。外面の口縁部下には小さな三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。器面

は風化しており調整等の詳細については不明である。66は中型の甕1aである。口縁部から底部にかけて全周の約1/4程度が残存している。外面の口縁部下には断面M字様の突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面は縦方向に刷毛調整されているが、胴部上半は器面の風化が激しく刷毛状原体の単位は不明である。また、煤が胴部上半に付着しており、煮沸具としての使用の後、甕棺に転用されている。

【形成時期】中期前半（須玖I式新段階）である。

7ST240（図118-67・68）

#### 弥生土器

甕（67・68）67は中型の甕1aである。ほぼ完形である。口縁部内面を打ち欠いている。外面の口縁部下にはヨコナデにより三角突帯を貼り付けている。外面は縦方向の刷毛調整、内面はナデ調整である。外面の胴部下半には沈線が10cmほど横方向に引かれており、切り合い関係から刷毛調整後に施されたものであることがわかる。外面の胴部中位には煤が付着しており、煮沸具としての使用の後甕棺に転用されたことがわかる。68はほぼ完形の甕棺である。口縁部の外側・内側ともに打ち欠かれている。外面の口縁部下に突出度の高い一条のコの字状突帯、胴部中位に突出度の高い二条の三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面は全面縦方向の刷毛調整、内面はナデ調整である。外面は黒塗りで、内面には一部にコゲ様の炭化物が付着しているが、黒塗りによるものではない。

【形成時期】中期中頃（KⅢa式）である。

7ST255（図118-69～71）

#### 弥生土器

甕（69～71）69は中型の、いわゆる丸みをおびた甕棺である。胴部中位で打ち欠きによって70から切り離されたものである。口縁部から胴部上半の全周約1/3程度が残存している。内外面ともナデ調整であり、特に口縁部の内面はヨコナデの単位が明瞭に観察できる。70は胴部上半で打ち欠きによって69から切り離されたものであり、胴部下半から底部のみ残存している。胴部中位にはヨコナデによって二条の三角突帯を貼り付けている。打ち欠かれた部分の直下に穿孔が認められるが、孔径が小さく、金属棒様のもので突き通したかの様相を呈する。しかし、器面の観察から、調査時のボーリング棒の刺突等によるものでないことは確実である。内外面ともにナデ調整が施されている。71は大型のいわゆる丸みをおびた甕棺である。ほぼ完形である。口縁部下に一条、胴部中位に二条の三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面は摩滅しており器面調整は不明だが、内面はナデ調整である。また、外面の口縁部直下には指頭圧痕が、胴部上半には棒状工具によるタタキ痕が観察できる。

【形成時期】中期中頃（KⅢa式）である。

7ST305（図119-72・73）

#### 弥生土器

甕（72・73）72は中型の甕1aである。底部を全周の約1/2弱欠損するがほぼ完形である。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面は縦・斜方向の刷毛調整、内面

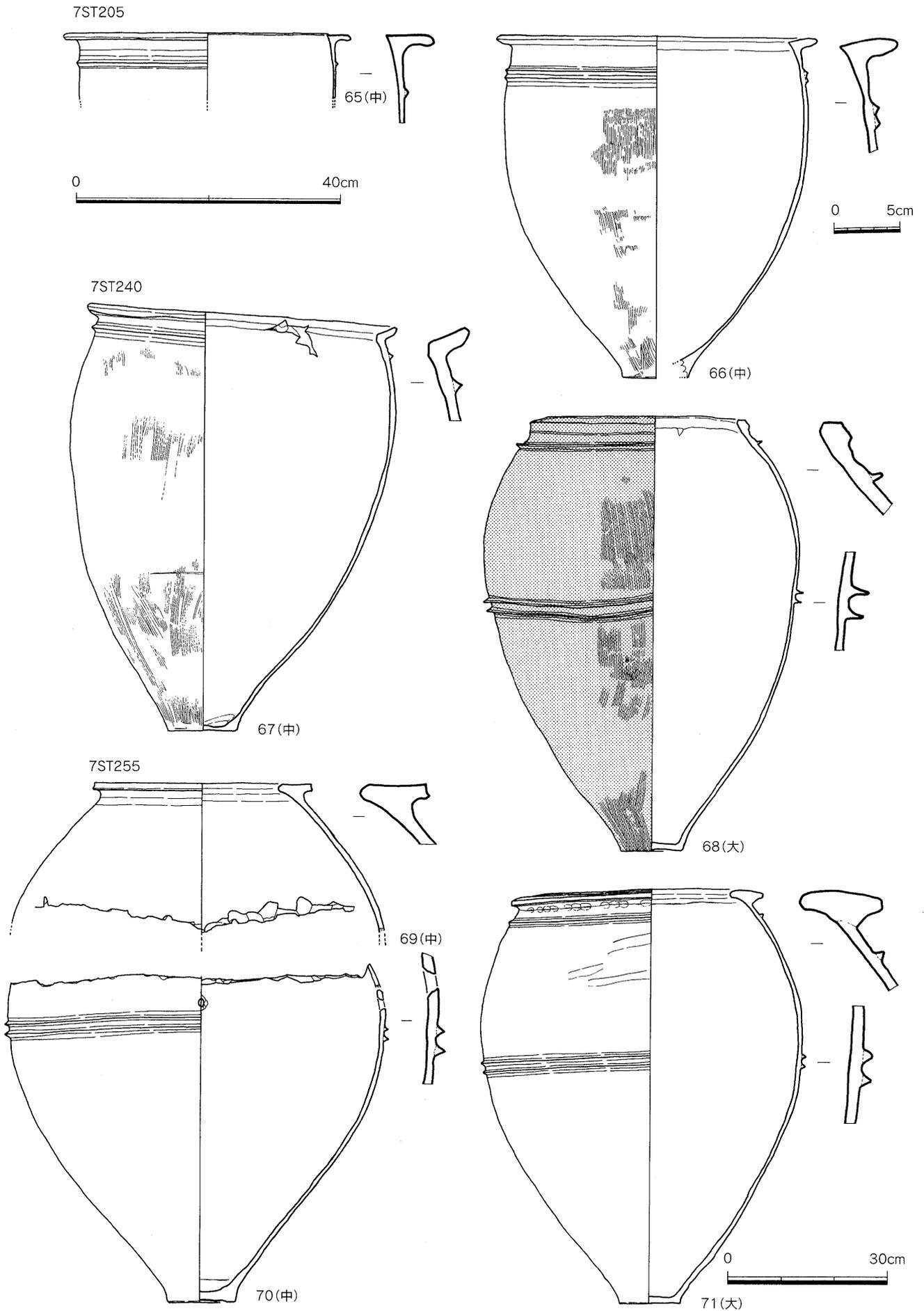


図118. 甕棺墓出土遺物実測図(10) (S=1/4・1/8・1/10)

はナデ調整である。73は中型の甕1aである。一部欠損するがほぼ完形である。口縁部下には三角突帯を貼り付けているが、貼り付けの際の突帯下部のヨコナデは一部沈線化している。外面は縦方向の刷毛調整、内面はナデ調整である。口縁部内面には指頭圧痕が残存している。内外面とも全体的に褐色化している。

【形成時期】中期前半（須玖Ⅰ式新段階）である。

7ST310（図119-74）

#### 弥生土器

壺（74）壺1aである。口縁部から胴部上半にかけて器体全周の約1/2程度を欠損する。口唇部の上端と下端に刻み目が施され、頸部と胴部の境界には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面には横・斜・縦方向のミガキ、口頸部内面には縦方向のミガキの後、横方向のミガキが施される。胴部内面は器面の風化が著しく、調整などは不明である。

【形成時期】中期初頭（城ノ越式）である。

7ST355（図119-75）

#### 弥生土器

甕（75）中型の甕1aである。口縁部の全周約1/2、胴部の全周約1/3程度が欠損している。口縁部下には、二条の三角突帯をヨコナデにより貼り付けているが、ヨコナデの切り合い関係から突帯貼り付けのためのヨコナデが施された後に口縁部をヨコナデしていることがわかる。内外面に縦方向の刷毛調整が観察でき、内面は刷毛調整後ナデ調整が施されている。また、外面の胴部全体に煤が付着するが、下半はやや薄くなり酸化しており、強い加熱を受けたものと思われる。内面には胴部上半にバンド状、さらにパッチ状のコゲが付着し、煮沸具として使用後、甕棺に転用されたことが判明する。

【形成時期】中期中頃（須玖Ⅰ式新段階～Ⅱ式古段階）である。

### e-3. 甕棺墓【大型棺】

7ST090（図120-76・77）

#### 弥生土器

鉢（76）鉢aである。外面には縦方向の刷毛調整が施されているが、口縁部下の刷毛目はヨコナデによって切られており、刷毛調整後ヨコナデを行ったことがわかる。内面は摩滅のため調整不明である。

甕（77）大型の甕棺である。口縁部下に三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。口縁部はヨコナデによって成形されており、口縁部内面端は面とりされている。内外面の調整はともにナデと考えられる。76・77ともに色調は強い橙色を呈する。

【形成時期】中期中頃（KⅢa式）である。

7ST110（図120-78・79）

#### 弥生土器

甕（78・79）78は大型の甕棺である。口縁部から胴部下半にかけて全周の約1/2程度が残存している。胴部中位に三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。器面は風化しており詳細

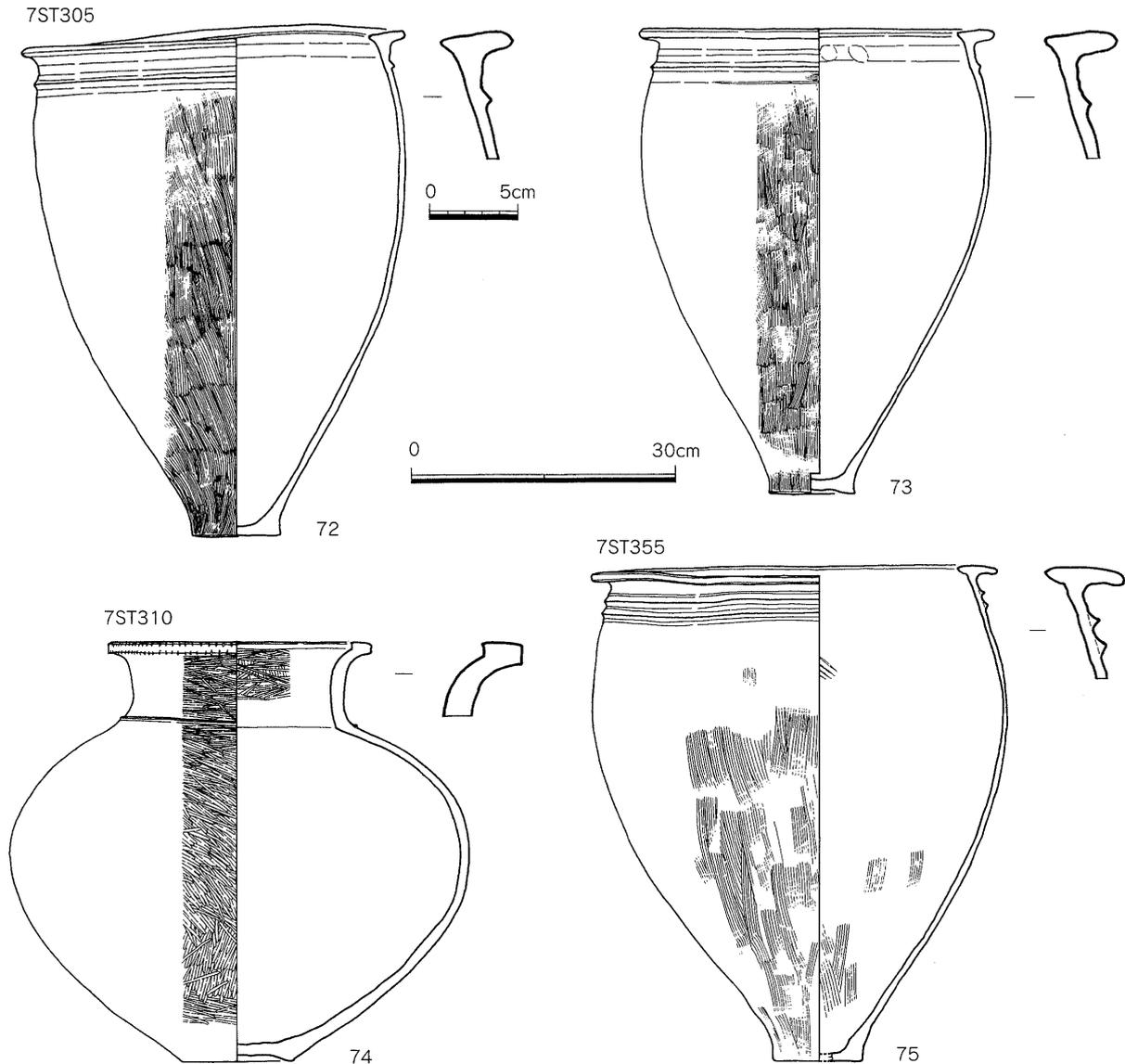


図119. 甕棺墓出土遺物実測図(11) (S=1/4・1/8)

は不明だが、おそらく内外面ともナデ調整と考えられる。外面は黒塗りである。79は大型の甕棺である。口縁部から胴部下半にかけて全周の約1/2程度が残存している。胴部中位に小さな三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。口縁部には刻み目が施されている。内外面ともに器面が風化しているが、外面の胴部下半と内面の口縁部付近には刷毛目が観察できるので、刷毛調整後ナデ調整が行われたものと思われる。色調は強い白色を呈する

【形成時期】中期前半 (K II b 式) である。

7ST120 (図 120 - 80・81)

弥生土器

甕 (80・81) 80は大型の甕棺である。口縁部から胴部下半にかけて約1/2程度が残存している。胴部中位に三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面はナデ調整、内面は器面が摩滅しており調整不明である。内面の口縁部付近には指頭圧痕が残存している。81は大型の甕棺である。口縁部から胴部上半にかけて全周の約1/2程度が欠損している。胴部中位には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内外面ともにナデ調整だが、外面の胴部上半に

は棒状工具によるタタキの痕跡が観察できる。

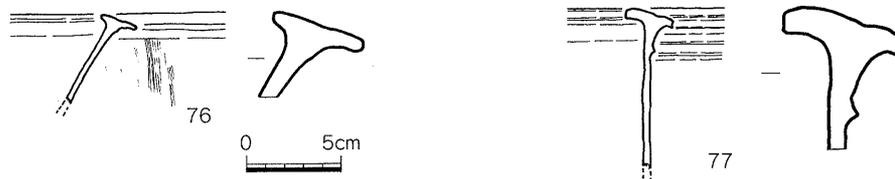
【形成時期】 中期前半 (K II b 式) である。

7ST140 (図 121 - 82・83)

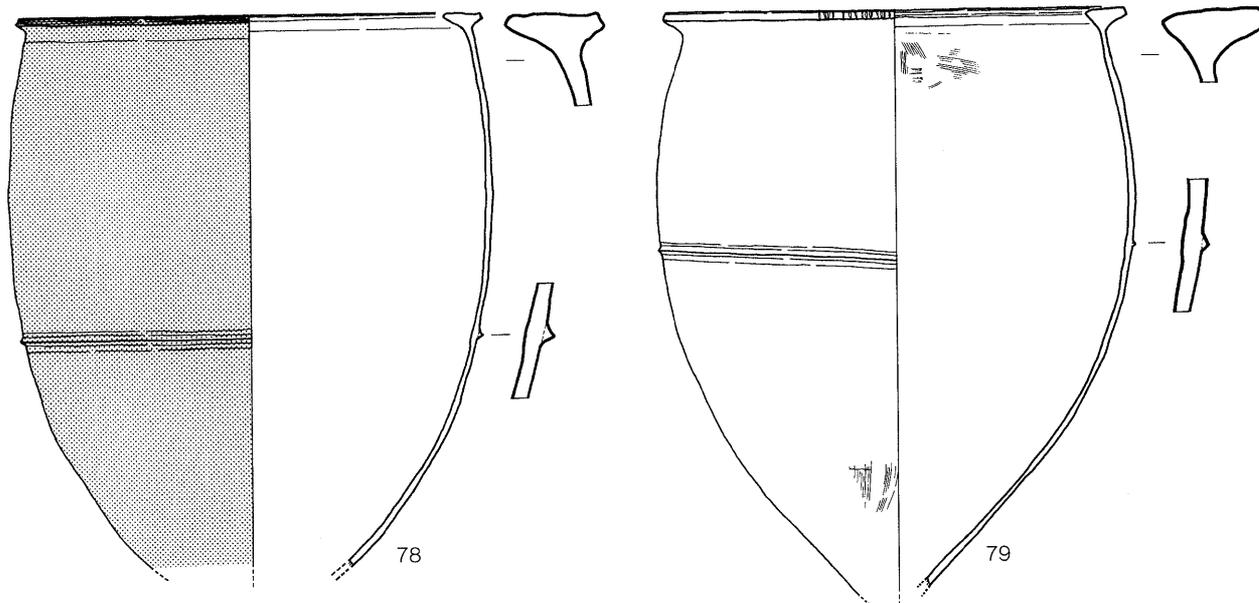
### 弥生土器

鉢 (82) 鉢 a である。口縁部から底部にかけて全周の約 1 / 2 程度残存している。内外面ともにナデ調整であり、底部内面には指頭圧痕が残存している。

7ST090



7ST110



7ST120

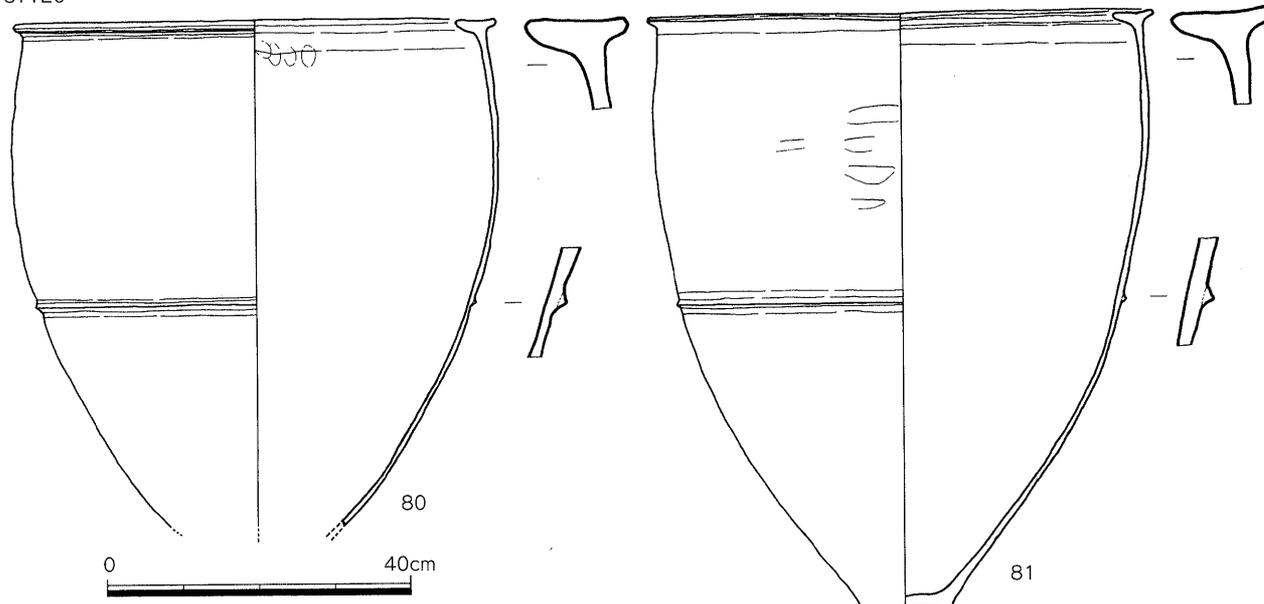
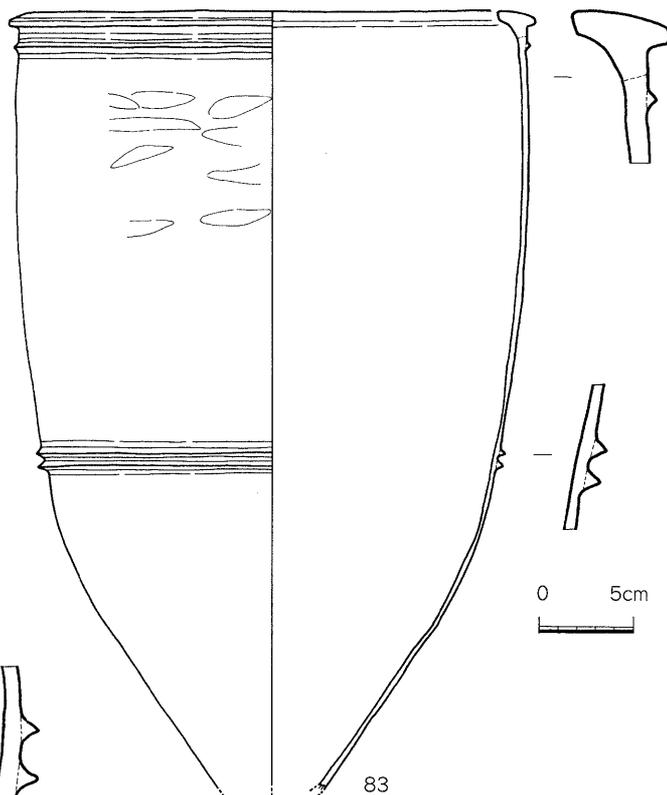
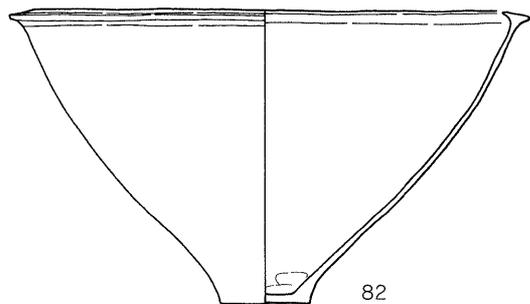


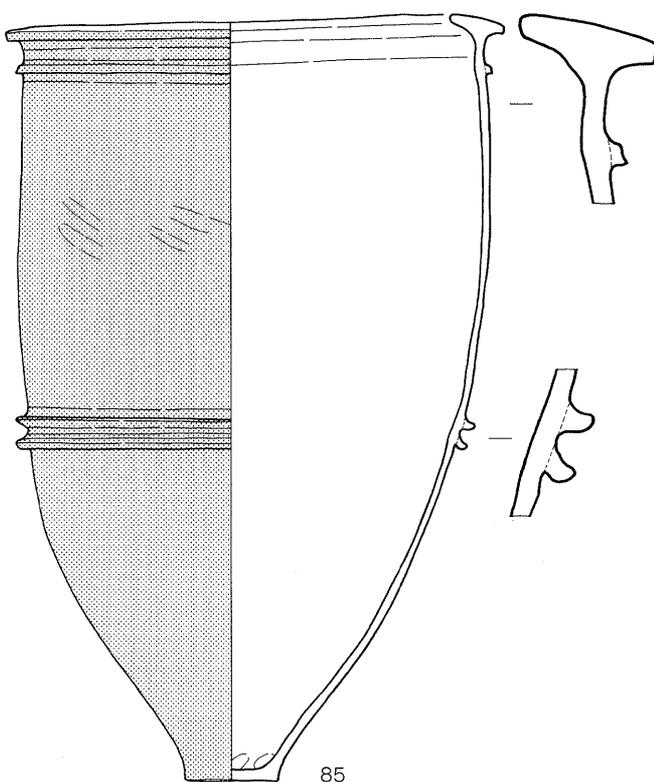
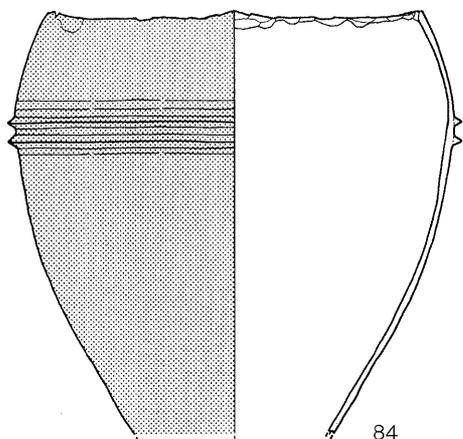
図 120. 甕棺墓出土遺物実測図 (12) (S=1/4・1/10)

7ST140



0 5cm

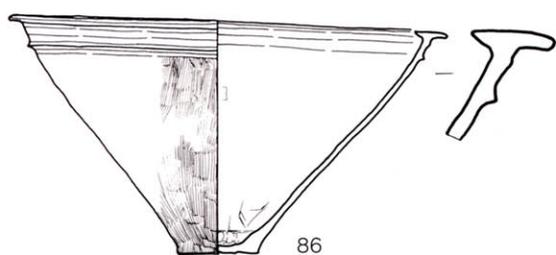
7ST160



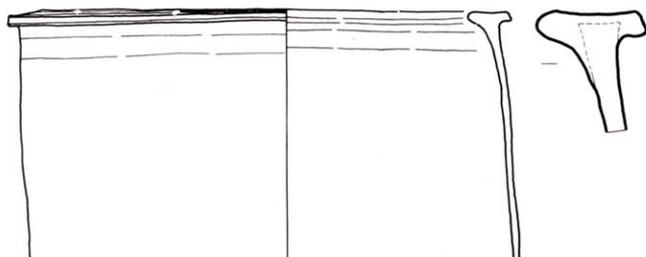
0 40cm

图121. 甕棺墓出土遺物実測図(13) (S=1/4・1/10)

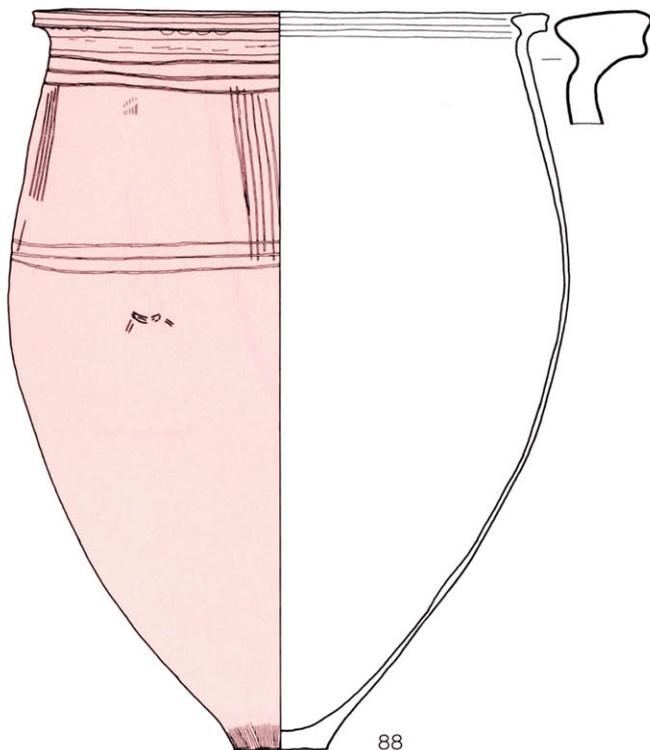
7ST225



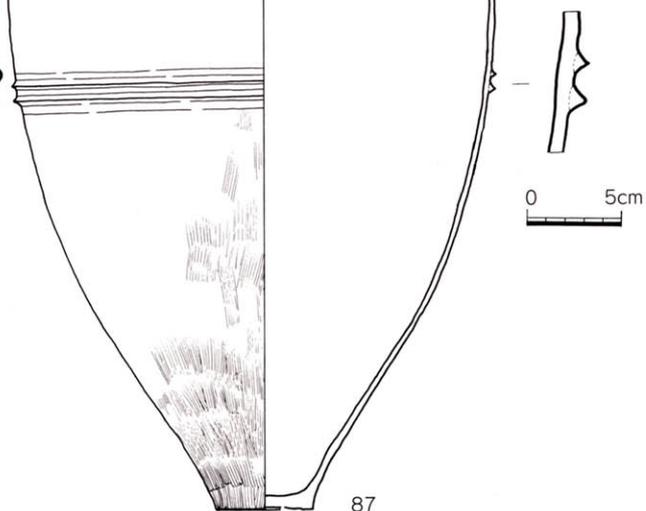
86



7ST280



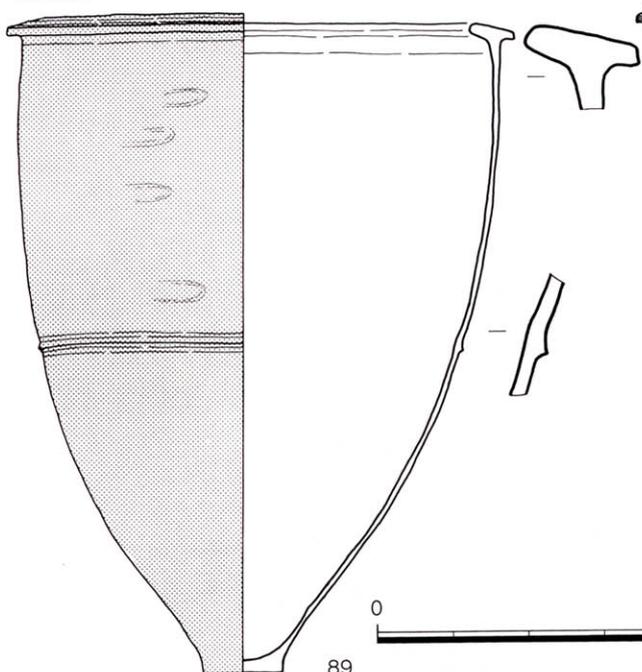
88



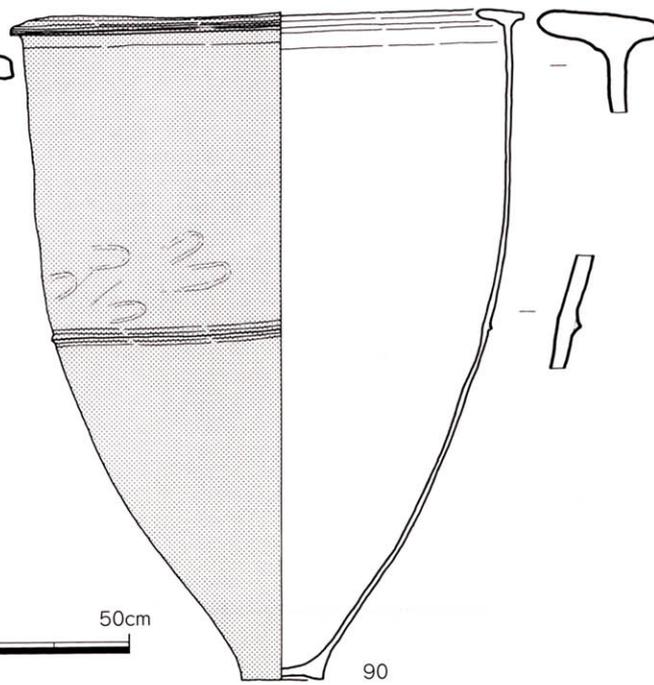
87

0 5cm

7ST285



89



90

0 50cm

図122. 甕棺墓出土遺物実測図(14) (S=1/4・1/10)

**甕 (83)** 大型の甕棺である。口縁部から胴部下半にかけて全周約 2 / 5 程度が残存している。口縁部の内面端部はヨコナデによって平坦な面を形成している。口縁部下に一条、胴部中位に二条の三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内外面ともナデ調整だが、外面の胴部上半には棒状工具によるタタキ痕が観察できる。

【形成時期】 中期中頃 (K III a 式) である。

7ST160 (図 121 - 84・85)

#### 弥生土器

**甕 (84・85)** 84 は大型のいわゆる丸みをおびた甕棺である。胴部上半は打ち欠かれ、胴部上半から胴部下半にかけて全周の約 1 / 2 程度が残存している。胴部中位には二条の三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面はナデ調整である。外面は黒塗りであるが、やや褐色がかかった色調を呈する。85 は大型の甕棺である。口縁部から胴部下半の全周約 1 / 2 程度が残存している。口縁部外面端部はヨコナデにより面とりされている。口縁部下に一条の断面M字状突帯、胴部中位には二条の三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。胴部突帯は特異な形態を呈し、先端がはね上げられている。内外面ともにナデ調整だが、外面の胴部上半には棒状工具によるタタキ痕が見られる。また、外面は黒塗りである。

【形成時期】 中期中頃 (K III a 式) である。

7ST225 (図 122 - 86・87)

#### 弥生土器

**鉢 (86)** 鉢 a である。一部欠損するものの完形である。口縁部下に三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。調整は外面が縦方向の刷毛、内面がナデ調整である。また、内面の底部付近には刷毛調整工具の起点痕や指頭圧痕が顕著に観察できる。

**甕 (87)** 大型の甕棺である。ほぼ完形である。口縁部外面端はヨコナデにより面とりされている。胴部中位には二条の三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面はナデ調整であるが、胴部下半には縦方向の刷毛調整が観察でき、刷毛調整後ナデ調整を行ったことがわかる。内面はナデ仕上げられている。色調は強い橙色を呈する。

【形成時期】 中期前半 (K II c 式) である。

7ST280 (図 122 - 88)

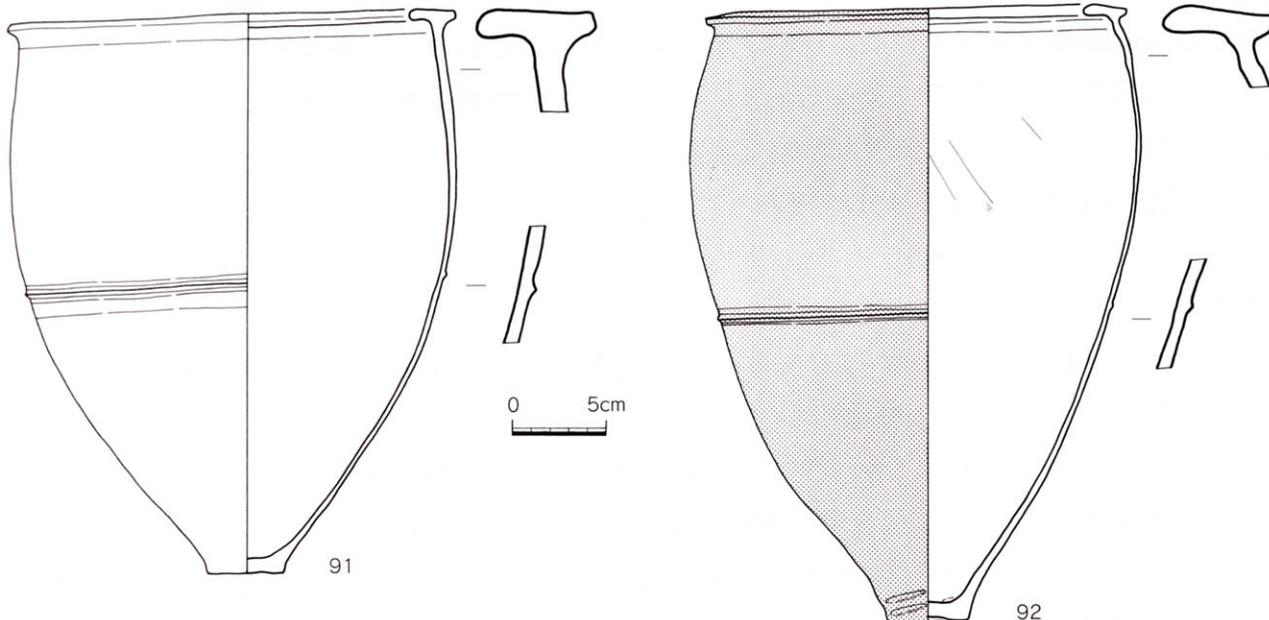
#### 弥生土器

**甕 (88)** 大型の甕棺である。一部欠損するが、ほぼ完形である。胴部上半には口縁部下・胴部上半にそれぞれ三本の沈線をめぐらせ、さらにそれらの間を縦方向の四～六本を一単位とする沈線文 (推定) 六単位により区画する。胴部中位にはシカのような動物を表現したと思われる線刻絵画が描かれている。内外面ともにナデ調整によって仕上げられているが、外面には刷毛目調整痕が観察でき、刷毛調整後ナデ仕上げられたことがわかる。また、外面の口縁部直下には指頭圧痕や刷毛目工具の終点痕が集中して見られる。外面は全面丹塗りである。

【形成時期】 前期末 (K I c 式) である。

7ST285 (図 122 - 89・90)

7ST300



7ST320

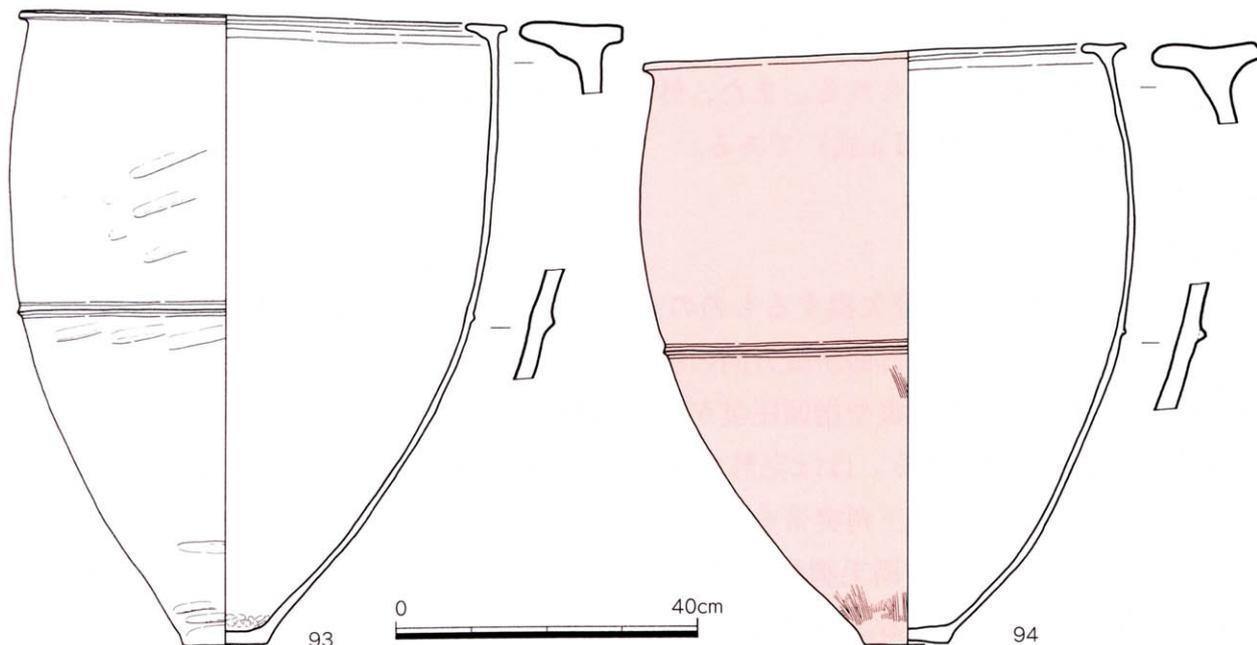


図123. 甕棺墓出土遺物実測図(15) (S=1/4・1/10)

**弥生土器**

**甕** (89・90) 89は大型の甕棺である。胴部を一部欠損するが、ほぼ完形である。胴部中位に小さな三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面ともにナデ調整であり、外面の胴部上半には棒状工具によるタタキ痕が散見される。外面は黒塗りである。90は大型の甕棺である。完形である。口唇部には凹線様の強いヨコナデがかけられ、胴部中位には小さな三角突帯がヨコナデにより貼り付けられている。内外面ともにナデ調整だが、外面の胴部上半には棒状工具によるタタキ痕が観察できる。外面は黒塗りである。

【形成時期】 中期前半 (K II c式) である。

**7ST300** (図 123 - 91・92)

**弥生土器**

**甕 (91・92)** 91は大型の甕棺である。完形である。胴部中位に小さな三角突帯がめぐっているが、ヨコナデによる貼り付けか作り出しかの判断は困難である。内外面とも器面は風化しており、調整等の詳細は不明である。外面は褐色化している。92は大型の甕棺である。完形である。胴部形態は上半がふくらむ、K II b式に典型的な形態を呈するが、口縁部はK II c式に多くみられる、やや外傾した形態である。胴部中位には小さな三角突帯をめぐらせるが、ヨコナデによる貼り付けか作り出しかの判断は難しい。内外面ともに刷毛調整痕が僅かではあるが散見され、刷毛調整後ナデ調整を行ったものと思われる。また、外面の底部付近には棒状工具によるタタキ痕が観察できる。外面は黒塗りである。

【形成時期】 中期前半 (K II b式) である。

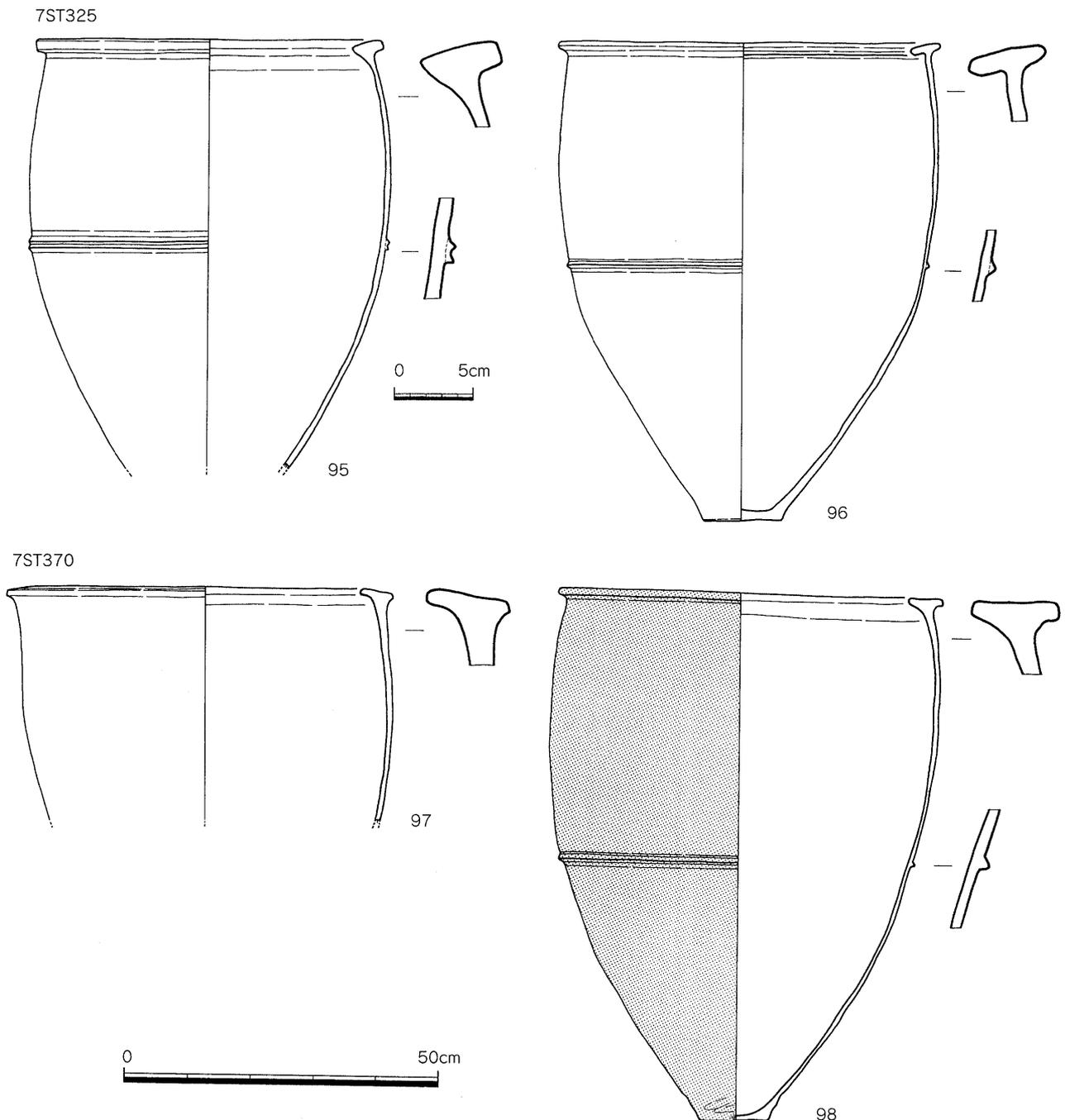


図124. 甕棺墓出土遺物実測図(16) (S=1/4・1/10)

7ST320 (図 123 - 93・94)

弥生土器

**甕** (93・94) 93は大型の甕棺である。一部欠損しているが、ほぼ完形である。胴部中位には小さな三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面ともにナデ調整であるが、外面の胴部・底部付近には棒状工具によるタタキ痕が観察でき、底部内面付近には指頭圧痕が多数観察できる。94は大型の甕棺である。ほぼ完形である。胴部中位に三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面ともナデ調整であるが、突帯付近や底部付近に刷毛調整痕が観察でき、刷毛目調整後ナデ調整を行ったことがわかる。口縁部や胴部に赤色顔料が残存しており、本来丹塗りであったものと思われる。

【形成時期】 中期前半 (K II b 式) である。

7ST325 (図 124 - 95・96)

弥生土器

**甕** (95・96) 95は大型の甕棺である。口縁部から胴部下半にかけて全周の約2/3程度が残存している。口縁部は内傾しており、口唇部はヨコナデによる明瞭な面をもつ。胴部中位には小さな断面M字状突帯を貼り付けている。内外面ともにナデ調整である。96は大型の甕棺である。口縁部から底部にかけて全周の約2/3程度が残存している。胴部中位には小さな三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内外面ともにナデ調整である。

【形成時期】 中期前半 (K II b 式) である。

7ST370 (図 124 - 97・98)

弥生土器

**甕** (97・98) 97は大型の甕棺である。口縁部から胴部上半のみ残存している。内外面ともに器面は風化しており調整などの詳細については不明である。98は大型の甕棺である。一部欠損するもののほぼ完形である。胴部中位にはヨコナデにより三角突帯を貼り付けている。内外面とも基本的にナデ調整であるが、底部付近には棒状工具によるタタキ痕や刷毛目が観察でき、これらの成形・調整行為の後ナデ調整が行われている。外面は黒塗りで、やや褐色がかっている。

【形成時期】 中期前半 (K II b 式) である。

f. 土坑

7SK011 (図 125 - 1 ~ 3)

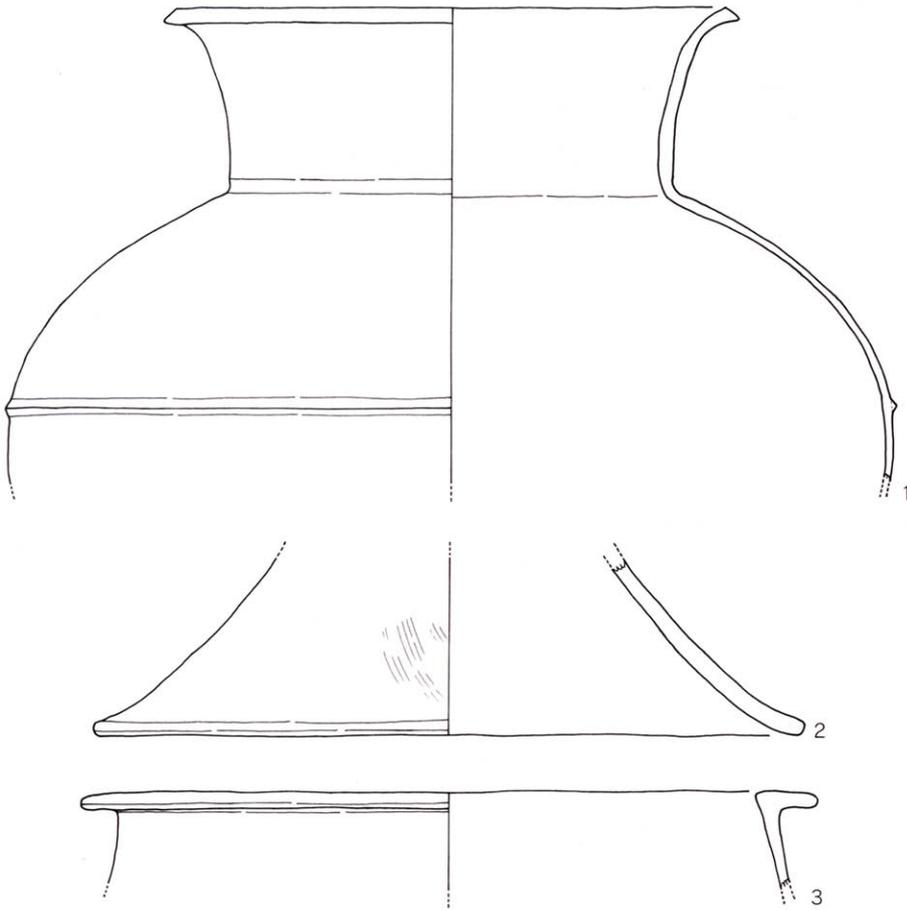
弥生土器

**壺** (1) 壺 1b の口縁部から胴部中位であり、全周の約1/3が残存している。胴部中位には突出度の低い三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面ともに器面風化が著しく、調整等は不明である。

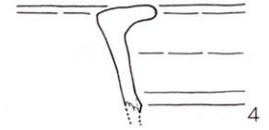
**蓋** (2) 蓋 1 の口縁部付近であり、全周の約1/8が残存している。外面には斜方向の刷毛目調整がわずかに観察される。口縁部内外面には煤が付着している。

**甕** (3) 甕 1a の口縁部であり、全周の約1/8が残存している。内外面ともに器面風化が著しく、調整等は不明である。外面には煤が付着している。

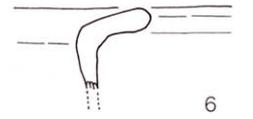
7SK011



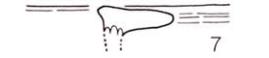
7SK030



7SK059



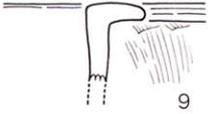
7SK061



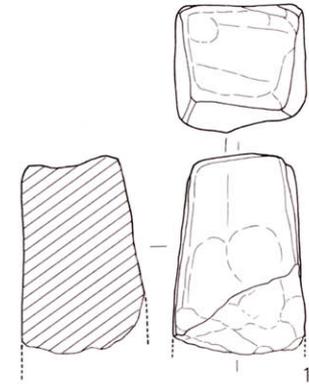
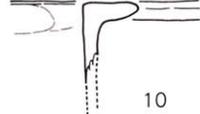
7SK072



7SK074



7SK078



7SK365

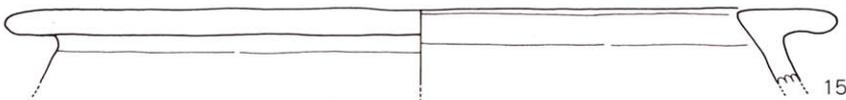
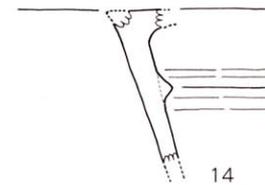
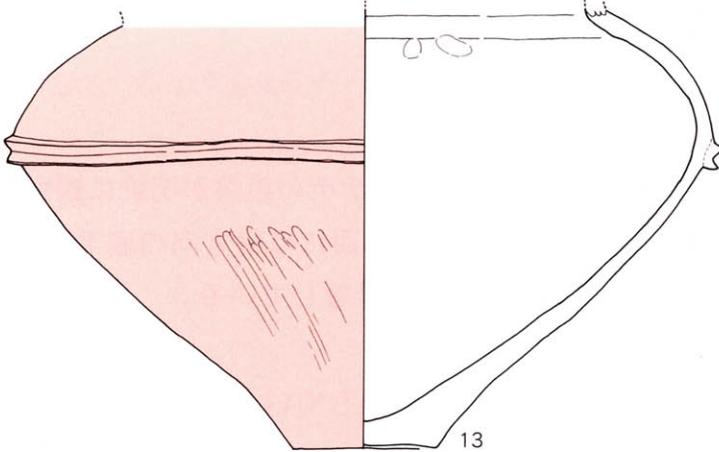


图125. 土坑出土遺物実測図(S=1/3)

【埋没時期】 中期前半（須玖Ⅰ式新段階）である。

7SK030（図 125 - 4）

#### 弥生土器

甕（4） 甕 1a の口縁部片である。口縁部下には、突出度の低い三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面ともに器面風化が著しく、調整等は不明である。

【埋没時期】 中期前半（須玖Ⅰ式古段階）である。

7SK059（図 125 - 5・6）

#### 弥生土器

甕（5・6） 5は甕 1a、6は甕 1b の口縁部片である。5・6ともに内外面の器面風化が著しく、調整等は不明である。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式古段階）である。

7SK061（図 125 - 7）

#### 弥生土器

甕（7） 甕 1a の口縁部片である。

【埋没時期】 中期前半（須玖Ⅰ式新段階）である。

7SK072（図 125 - 8）

#### 弥生土器

壺（8） 壺 1a の口縁部片である。

【形成・埋没時期】 中期初頭（城ノ越式）である。

7SK074（図 125 - 9）

#### 弥生土器

甕（9） 甕 1a の口縁部片である。外面には縦・斜方向の刷毛目調整、内面にはナデ調整が施されている。

【埋没時期】 中期前半（須玖Ⅰ式古段階）である。

7SK078（図 125 - 10～12）

#### 弥生土器

甕(10・11) 10は甕 1a の口縁部片である。口縁部内面にはヨコナデの痕跡が明瞭に観察される。11は甕底部であり、全周の約 3 / 4 程度が残存している。外面には縦方向の刷毛目調整、内面には指頭圧痕が観察される。外面には煤、内面にはコゲが付着している。

#### 土製品

用途不明製品（12） 用途不明な土製品である。下端部を欠損している。表面にはナデ調整の痕跡が観察される。

【埋没時期】 中期前半（須玖Ⅰ式古段階）である。

7SK365（図 125 - 13～15）

#### 弥生土器

壺（13） 壺の胴部から底部であり、全周の約 3 / 4 が残存している。胴部中位には下方を向

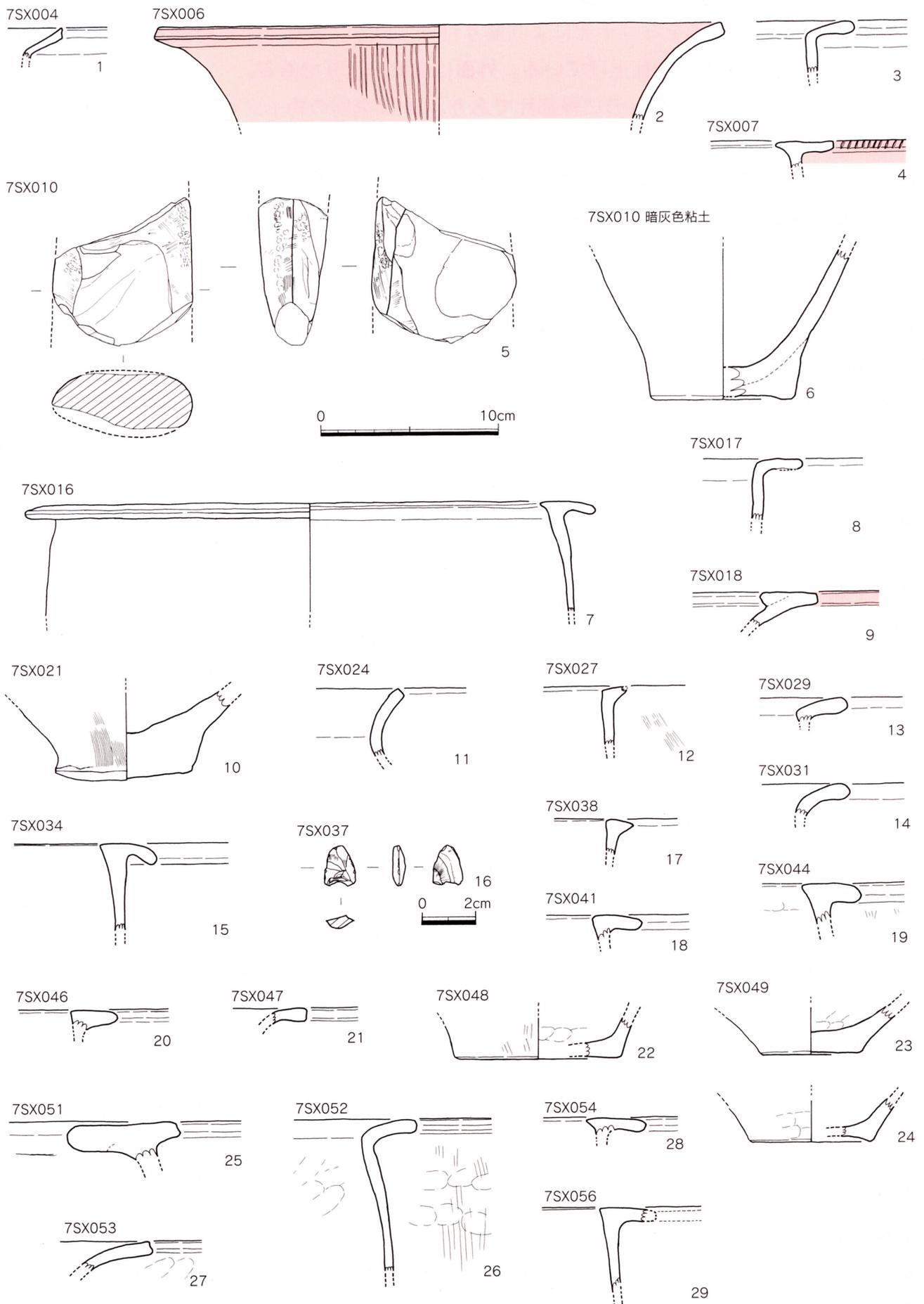


図126. その他の遺構出土遺物実測図(1) (S=1/2・1/3)

いた断面 M 字状の突帯をヨコナデにより貼り付けている。胴部下半には斜方向のミガキ調整を施し、内面はナデ調整で仕上げている。外面は全面丹塗りである。

**甕 (14・15)** 14・15 は甕 1a の口縁部片であり、15 は全周の約  $1/6$  が残存している。14 の口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。

【形成・埋没時期】 中期中頃 (須玖 I 式新段階～須玖 II 式古段階) である。

#### g. その他の遺構 (小穴、凹み、整地層、土器集中箇所)

**7SX004** (図 126 - 1)

##### 弥生土器

**甕 (1)** 甕 1c の口縁部片である。口縁端部をヨコナデにより跳ね上げている。

**7SX006** (図 126 - 2・3)

##### 弥生土器

**壺 (2)** 壺 1b の口縁部であり、全周の約  $1/9$  が残存している。外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。内外面ともに丹塗りである。

**甕 (3)** 甕 1b の口縁部片である。口縁端部がやや肥厚している。

**7SX007** (図 126 - 4)

##### 弥生土器

**甕 (4)** 甕 2a の口縁部片である。口縁端部には斜方向の刻み目を入れている。外面には丹塗りが施されている。

**7SX010** (図 126 - 5)

##### 石製品

**石斧 (5)** 玄武岩製の太型蛤刃石斧である。表面・基部・刃縁を大きく欠損する。敲打痕や研磨が見られ、今山産石斧と思われる。

**7SX010 暗灰色粘土** (図 126 - 6)

##### 弥生土器

**甕 (6)** 甕の底部であり、全周の約  $1/3$  が残存している。断面観察から、底部は基底部上に丸底状に成形された鉢状部を接合していることがわかる。内外面ともに器面風化が著しく、調整等は不明である。内面にはコゲが付着している。

**7SX016** (図 126 - 7)

##### 弥生土器

**甕 (7)** 甕 1a の口縁部であり、全周の約  $1/8$  が残存している。外面には煤、内面にはコゲが付着している。

**7SX017** (図 126 - 8)

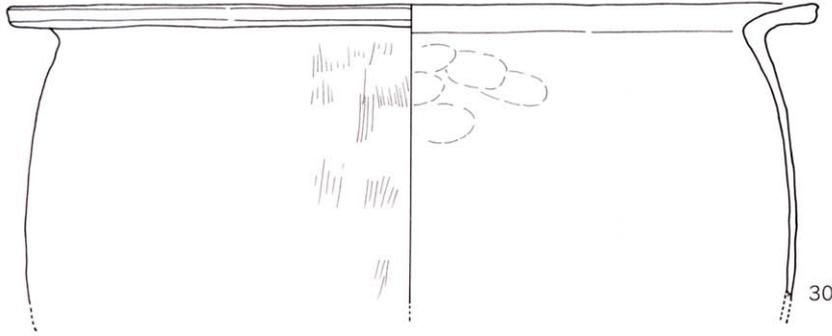
##### 弥生土器

**甕 (8)** 甕 1b の口縁部片である。内外面ともに器面風化が著しく、調整等は不明である。

**7SX018** (図 126 - 9)

##### 弥生土器

7SX060



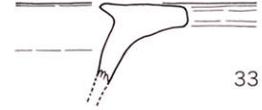
7SX062



7SX063



7SX064



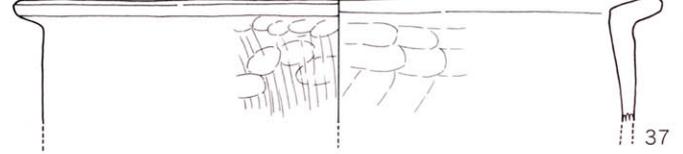
7SX068



7SX071



7SX073



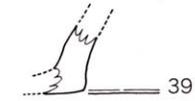
7SX069



7SX076



7SX077



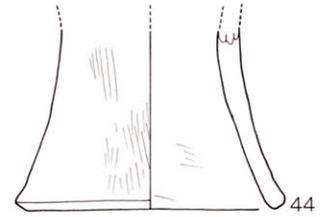
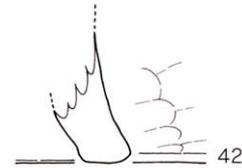
7SX082



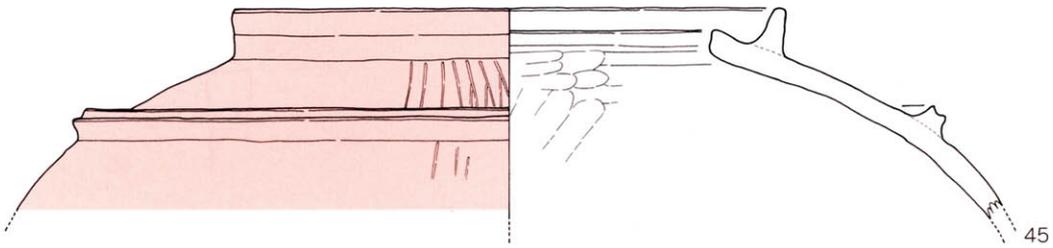
7SX084



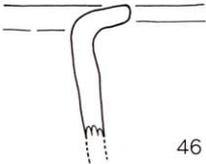
7SX079



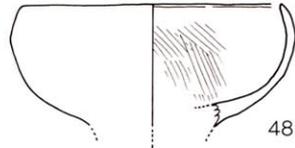
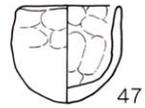
7SX085



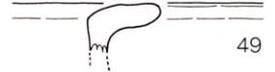
7SX087



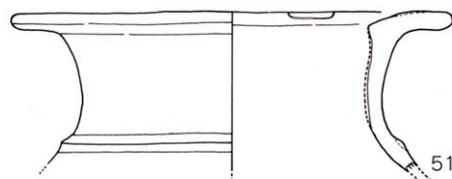
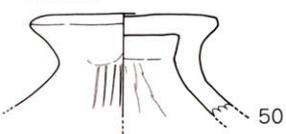
7SX088



7SX091



7SX092



7SX098

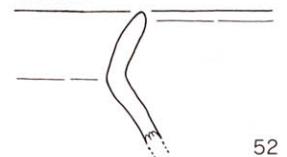


図127. その他の遺構出土遺物実測図(2) (S=1/3)

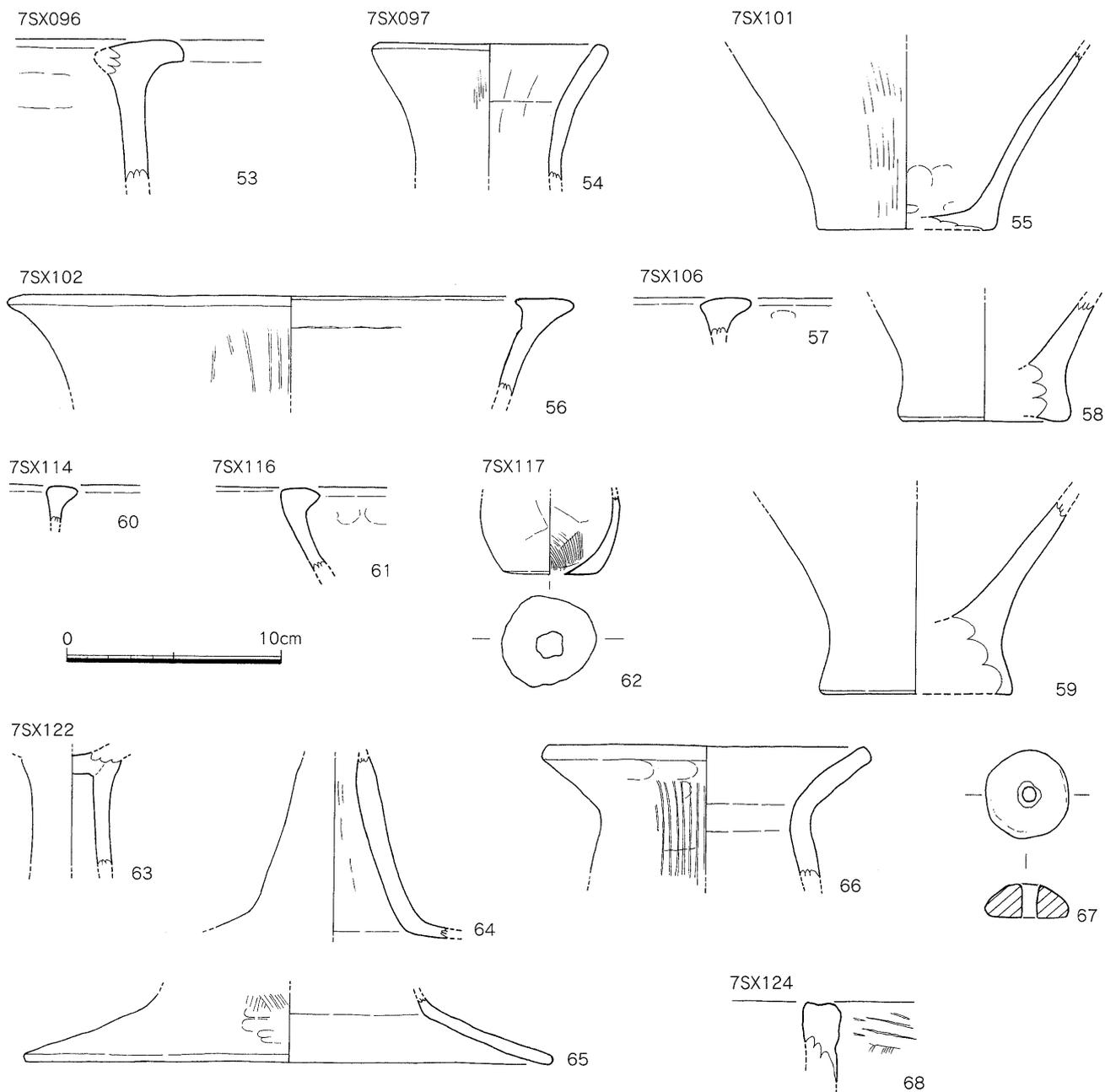


図128. その他の遺構出土遺物実測図(3) (S=1/3)

壺 (9) 壺 1a の口縁部片である。口縁端部と口縁部上面には丹塗りが残存している。

7SX021 (図 126 - 10)

弥生土器

甕 (10) 甕の底部であり、完存している。外面は縦・斜方向の刷毛目調整だが、底部付近には粘土紐の接合痕がみられる。

7SX024 (図 126 - 11)

弥生土器

壺 (11) 壺 1b の口縁部片である。内外面ともに器面風化が著しく、調整等は不明である。

7SX027 (図 126 - 12)

弥生土器

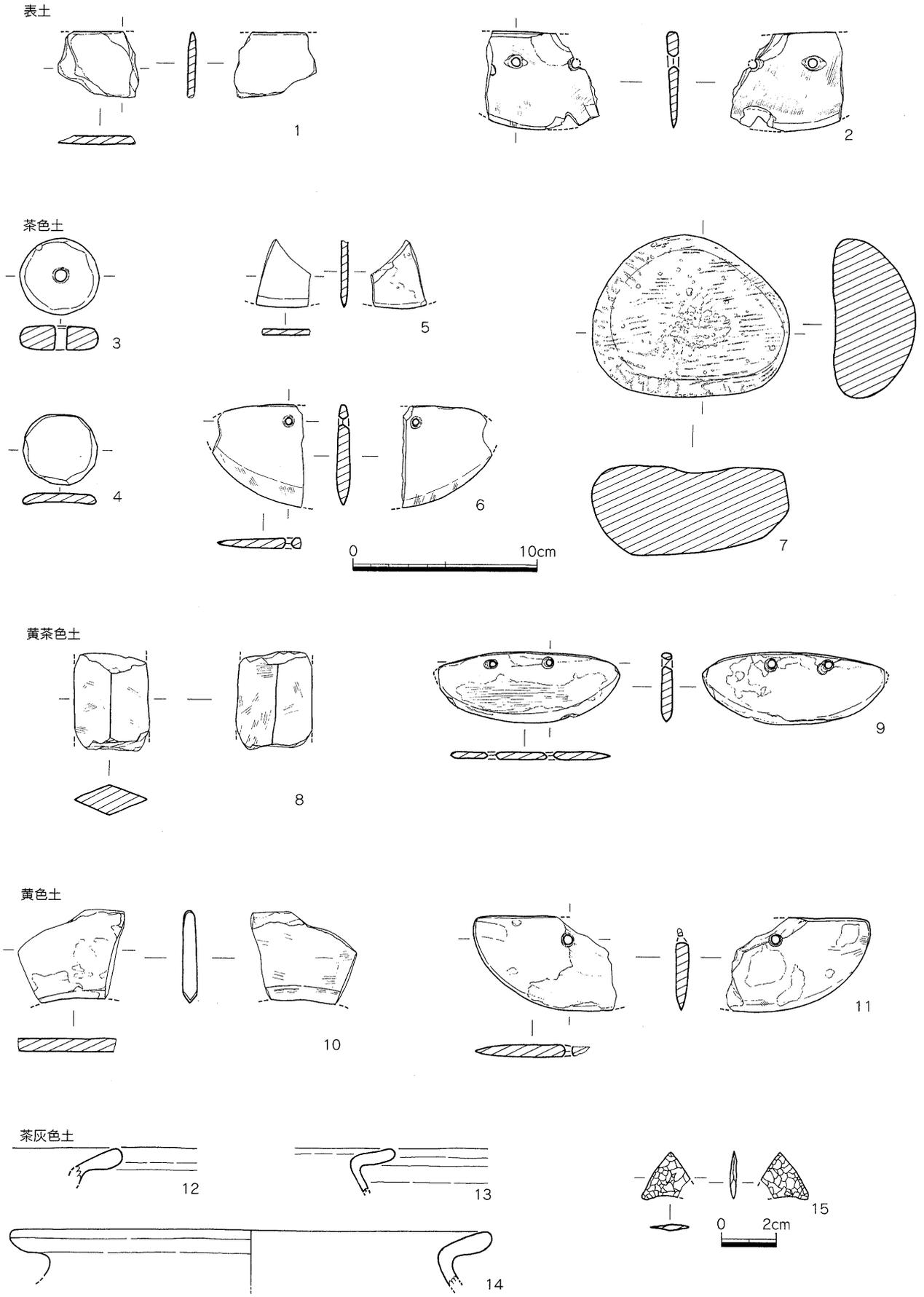


图129. 土層出土遺物実測図 (S=1/2·1/3)

甕 (12) 甕 1a の口縁部片である。外面には斜方向の刷毛目調整が施されている。

7SX029 (図 126 - 13)

弥生土器

甕 (13) 甕 1b の口縁部片である。外面には煤が付着している。

7SX031 (図 126 - 14)

弥生土器

甕 (14) 甕 1b の口縁部片である。

7SX034 (図 126 - 15)

弥生土器

甕 (15) 甕 1a の口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

7SX037 (図 126 - 16) 16 全体

石製品

石鏃(16) 黒曜石製の剥片鏃である。凹基式を呈する。先端と片脚をごくわずかに欠損するが、ほぼ完形である。

7SX038 (図 126 - 17)

弥生土器

甕 (17) 甕 1a の口縁部片である。

7SX041 (図 126 - 18)

弥生土器

甕 (18) 甕 1a の口縁部片である。

7SX044 (図 126 - 19)

弥生土器

甕 (19) 甕 1a の口縁部片である。外面には若干だが刷毛目が残存している。

7SX046 (図 126 - 20)

弥生土器

甕 (20) 甕 1a の口縁部片である。

7SX047 (図 126 - 21)

弥生土器

甕 (21) 甕 1b の口縁部片である。

7SX048 (図 126 - 22)

弥生土器

器種不明 (22) 底部であり、全周の約 1 / 4 が残存している。外面には縦方向の刷毛目調整が施され、内面には指頭圧痕が確認される。

7SX049 (図 126 - 23・24)

弥生土器

器種不明 (23・24) 22・23 は底部であり、23 は全周の約 2 / 3、24 は全周の約 1 / 4 が残存

している。23の内面には指頭圧痕が確認される。24の外面には横方向にナデ調整を施した痕跡が観察される。

7SX051 (図 126 - 25)

**弥生土器**

甕 (25) 大型甕棺の口縁部片である。口縁部内面には粘土紐の接合痕が観察される。

7SX052 (図 126 - 26)

**弥生土器**

甕 (26) 甕 1b の口縁部から胴部の破片である。外面には縦方向の刷毛目調整を施した後、部分的にナデ調整を施している。内面はナデ仕上げている。外面には煤、内面にはコゲが付着している。

7SX053 (図 126 - 27)

**弥生土器**

壺 (27) 壺 1b の口縁部片である。外面には指頭圧痕が確認される。

7SX054 (図 126 - 28)

**弥生土器**

甕 (28) 甕 1a の口縁部片である。

7SX056 (図 126 - 29)

**弥生土器**

甕 (29) 甕 1a の口縁部片である。口縁端部を欠損している。器面風化が著しく、調整等は不明である。

7SX060 (図 127 - 30)

**弥生土器**

甕 (30) 甕 1b の口縁部から胴部中位であり、全周の約 1 / 4 が残存している。外面には縦方向の刷毛目調整が施され、内面には指頭圧痕が観察される。

7SX062 (図 127 - 31)

**弥生土器**

甕 (31) 甕 1b の口縁部片である。

7SX063 (図 127 - 32)

**弥生土器**

甕 (32) 甕 1a の口縁部片である。

7SX064 (図 127 - 33)

**弥生土器**

壺 (33) 壺 1a の口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

7SX068 (図 127 - 34)

**弥生土器**

甕 (34) 甕 1a の口縁部片である。

7SX069 (図 127 - 35)

弥生土器

甕 (35) 甕 1b の口縁部片である。

7SX071 (図 127 - 36)

弥生土器

甕 (36) 甕 1a の口縁部片である。外面には刷毛目調整が施されているが、上位には内外面ともに指頭圧痕が観察される。

7SX073 (図 127 - 37)

弥生土器

甕 (37) 甕 1a の口縁部であり、全周の約 1 / 5 が残存している。外面には縦方向の刷毛目調整が施されているが、内外面ともに指頭圧痕も観察される。外面には煤が付着している。

7SX076 (図 127 - 38)

弥生土器

器種不明 (38) 底部片である。内外面ともに指頭圧痕が観察される。

7SX077 (図 127 - 39)

弥生土器

甕 (39) 甕の底部片である。内面にはコゲが付着している。

7SX079 (図 127 - 40)

弥生土器

甕 (40) 甕 1a の口縁部片である。

7SX082 (図 127 - 41・42)

弥生土器

甕 (41) 甕 1a の口縁部片である。外面には若干だが刷毛目が観察される。

支脚 (42) 支脚の裾部片である。外面には指頭圧痕が顕著に確認される。

7SX084 (図 127 - 43・44)

弥生土器

甕 (43) 甕 1b の口縁部片である。

器台 (44) 器台の裾部であり、全周の約 1 / 4 程度が残存している。外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。

7SX085 (図 127 - 45)

弥生土器

壺 (45) 壺 3 の口縁部であり、ほぼ完存する。口縁部付近には非常に突出度の高い三角突帯、やや下がった位置には断面 M 字状突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面には縦方向のミガキによる暗文、内面にはナデ調整が観察される。外面は丹塗りである。

7SX087 (図 127 - 46)

弥生土器

**甕 (46)** 甕 1b の口縁部片である。内外面ともに器面風化が著しく、調整等は不明である。

**7SX088** (図 127 - 47・48)

**土師器**

**手づくね土器 (47)** ほぼ完形の手づくね土器である。内外面ともに指頭圧痕が顕著に観察される。

**椀×高坏 (48)** 椀あるいは高坏と思われ、全周の約 1 / 2 が残存している。内面には斜方向の刷毛目調整が施されている。

**7SX091** (図 127 - 49)

**弥生土器**

**甕 (49)** 甕 1b の口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

**7SX092** (図 127 - 50・51)

**弥生土器**

**蓋 (50)** 蓋 1 の天井部であり、完存する。外面には縦方向の粗い刷毛目調整が施され、内面には絞りの痕跡が観察される。外面には煤、内面にはコゲが付着している。

**壺 (51)** 壺 1a の口縁部から頸部であり、全周の約 1 / 6 が残存している。頸部には突出度の低い三角突帯が貼り付けられている。口縁部上面には円形浮文が貼り付けられている。

**7SX096** (図 128 - 53)

**弥生土器**

**甕 (53)** 甕 1a の口縁部片である。内面にはナデ調整の痕跡が観察される。

**7SX097** (図 128 - 54)

**弥生土器**

**器台 (54)** 器台の受け部であり、全周の約 1 / 3 が残存している。内外面ともに器面風化が著しいため不明瞭だが、外面には刷毛目、内面には絞りの痕跡が観察される。

**7SX098** (図 128 - 52)

**弥生土器**

**甕 (52)** 後期の甕の口縁部片である。器面風化が激しく、調整は不明である。

**7SX101** (図 128 - 55)

**弥生土器**

**甕 (55)** 甕の底部であり、全周の約 1 / 4 が残存している。外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。内面の底部付近には指頭圧痕が観察される。外面には煤、内面にはコゲが付着している。

**7SX102** (図 128 - 56)

**弥生土器**

**壺 (56)** 壺 1a の口縁部であり、全周の約 1 / 6 が残存している。外面には縦方向のミガキ調整が施されている。内面には粘土紐の接合痕が観察される。

**7SX106** (図 128 - 57 ~ 59)

## 弥生土器

甕 (57～59) 甕 1a の口縁部片である。外面には指頭圧痕が確認される。58・59 は甕の底部であり、58 は全周の約  $1/6$ 、59 は約  $1/3$  が残存している。両個体ともに器面風化が激しく、調整等は不明である。59 の内面にはコゲが付着している。

7SX114 (図 128 - 60)

## 弥生土器

甕 (60) 甕 1a の口縁部片である。外面には煤、内面にはコゲが付着している。

7SX116 (図 128 - 61)

## 弥生土器

甕 (61) 甕 1a の口縁部片である。外面には指頭圧痕が観察される。外面には煤が付着している。

7SX117 (図 128 - 62)

## 弥生土器

鉢 (62) 小型の鉢の胴部から底部であり、全周の約  $4/5$  が残存している。底部中央には孔が穿たれている。外面はナデ仕上げられ、内面には刷毛目調整が施されている。

7SX122 (図 128 - 63～67) 64 全体・詳細 (脚部接着面)

## 弥生土器

高坏 (63～65) 63・64 は高坏の脚部であり、63 は全周の約  $1/2$ 、64 は約  $3/4$  が残存している。64 の内面には絞り痕が観察される。65 は高坏の脚裾部であり、全周の約  $1/6$  が残存している。

器台 (66) 器台の受け部であり、全周の約  $1/4$  が残存している。外面には縦方向の粗い刷毛目調整が施され、内面はナデ仕上げられている。

## 土製品

紡錘車 (67) 完形の土製紡錘車である。下面には丹塗りかと思われる痕跡が観察される。

7SX124 (図 128 - 68)

## 弥生土器

支脚 (68) 支脚の破片である。外面には若干だが刷毛目が観察される。

## h. 土層

h-1. 表土 (図 129 - 1・2)

## 石器

石庖丁 (1・2) 1 は粘板岩製の石庖丁である。背部のみの出土だが、外湾刃半月形を呈すると思われる。2 は輝緑凝灰岩製の石庖丁である。外湾刃半月形を呈する。孔縁は両孔ともに左右にずれ、正円をなさない。

h-2. 茶色土 (図 129 - 3～7)

## 土製品

紡錘車 (3) 完形の土製紡錘車である。

円盤状土製品 (4) 完形の円盤状土製品である。土器片を利用したものであり、周囲を打ち欠いて円盤状に成形している。調整等については不明だが、煤が付着している。

**石製品**

**石庖丁 (5・6)** 5は粘板岩製の石庖丁である。身しか残存しておらず、全形は不明である。6も粘板岩製の石庖丁である。外湾刃半月形を呈すると思われるが、側縁に抉りが入り、孔が非常に小さい。

**磨石 (7)** 玄武岩製の磨石である。中央の径 25mm ほどのすり面が見られる。

**h-3. 黄茶色土 (図 129 - 8・9)****石製品**

**石剣 (8)** 粘板岩製の石剣である。身のみ残存する。身は厚く、鑄が明確に通るが、裏面上下端は、多少研磨しすぎたため鑄が曲っている。

**石庖丁 (9)** 凝灰岩製の石庖丁である。杏仁形を呈する。裏面右孔は、二度穿孔を試みている。表面は風化が激しく、一部しか研磨面を残さない。

**h -4. 黄色土 (図 129 - 10・11)****石製品**

**石鎌 (10)** 砂岩製の石鎌である。背部は、途中で段状をなしている。

**石庖丁 (11)** 凝灰岩製の石庖丁である。外湾刃半月形と思われ、表面には酸化鉄が多量付着し、風化が激しい。

**茶灰土 (図 129 - 12 ~ 15)****弥生土器**

**甕 (12 ~ 14)** 12 ~ 14 は甕 1b の口縁部片であり、14 は全周の約 1 / 6 程度が残存している。14 の口縁端部には煤が付着している。

**石製品**

**石鎌 (15)** サヌカイト製の凹基式打製石鎌である。片脚は欠損しており、剥離は粗い。

**E. 小結**

調査当初では、既調査成果から弥生期における生活関連遺構ないしは墓の検出が予想された。調査の結果、報告文にて記載してきたように、弥生期に限って述べると調査区東半部では掘立柱建物などの生活関連遺構が展開し、一方西半部では甕棺墓を主体とする墓関連遺構が多く検出された。弥生後期終末から古墳前期初頭に形成されたと考えられる遺構に関しては、調査区西半部にて検出できた溝があり、この溝は今次調査区の北に位置する松本遺跡第4次調査区にて検出した南北溝(4SD001)に接続するものと考えられる。ただし4次調査での所見では、当該溝の埋没時期は古墳終末の時間幅の中の1点が考えられるのに対して、今次調査区での所見では古墳前期初頭の1点までしか下り得ない。両調査区間の空間地から古墳終末期に埋没した溝が新たに合流するのか、溝という性格上今次調査の所見が「見かけ」の埋没時期を示しているのかは、既調査成果からは導き出せない。今後の課題となる。

今次調査成果の特筆すべき点としては、墓域を覆う「造成土」の検出であり、弥生前期末に造営が開始された墓域が、中期後半まで継続しているが、中期後半のある時期に墓域を造成する行為が想定できるように、墓そのものが破壊されている。しかし完全な破壊を行っているの

ではなく、「復旧」を行った形跡も観察され、当時の人々の墓に対する「意識」の一端をうかがうことができる。この「造成」行為の後、生活空間としての土地利用がなされており、弥生後期における集落「淘汰」の一環としての現象と捉えるべきなのか、単に集落拡大と解釈するのかは、周辺状況が明らかでないだけに問題が残る。しかし墓が破壊され、全く異なる土地利用を行っていることを考慮すると、造墓集団の墓維持意識とは異なる、ないしは意識欠如集団による土地改良がなされたと解することはできるであろう。

弥生期に形成されたと考えられる溝群（7SD001・7SD070・7SD375）に関しては、先行すると考えられる7SD001の最下層ならびに7SD070最下層出土遺物から弥生前期末に形成されており、溝形状から7SD001は調査区北東部から南西部へ突出する形状を呈していることなどから、調査区北東部に生活空間が形成され、いったん何もない空間がありさらに西にいたって7SD070の溝がさらに西部に広がる墓域との境界溝として形成されていると読み取ることも可能である。ただし調査区自体が狭小であり、各々の遺構の空間的な意味を解釈するには無理があり、周辺調査成果の合成によって解釈してゆくべき課題である。



図130. 国分松本遺跡 第7次調査 遺構略測図

## 4. 国分正尻遺跡 第1次調査

### A. 調査にいたる経過

調査地は国分1丁目420-1他にあたり、御笠川に落ちる沖積段丘面の縁に位置している。平成3年7月22日に地権者より宅配便の集配センター建築を行うにあたり、埋蔵文化財についての問い合わせがあった。当該地は南バイパス（当時、現国道3号線）に隣接し、道路築造に当たっての調査では遺跡は確認されてなかった。そのため調査地も遺構がないことも予測されたため、同年8月5日に重機を用いて確認調査を実施した。その結果弥生時代の遺物を含む遺構を検出した。地権者と協議を行い、建築物により破壊される部分について発掘調査を実施することとなった。現地の調査は同年10月7日から10月18日に実施した。開発面積は1414㎡、調査面積は200㎡である。調査は城戸康利が担当した。

### B. 基本土層

調査前の土地利用は水田であった。耕作土、床土を除去すると黒茶色土の包含層が検出された。包含層は南側で0.2m程度で北側に行くにしたがい薄くなっている。遺構面は砂礫交じりの黄色土を基調とし、部分的に淡灰色砂の上に展開する。遺構面は1面であり、地山は河川堆積層と考えられる。床土に湿抜き溝がめぐらされ、発掘調査中も遺構に水が溜まり、水捌けが悪い土地であることがわかった。遺構面の標高は27m前後で北端が高く南端との比高差は0.2mほどである。

### C. 遺構(図131)

遺構群は調査区の北西側に集中し中央から北東側は散漫になる。それぞれの遺構の性格はよくつかめない。

#### a. 溝

##### 1SD005

調査区の南東を南西-北東にはしる溝である。長さ6m、幅0.2～0.9m、深さ0.05～0.35mを測り、幅広部分が一番深い。埋土は灰褐色の砂質土である。西側に平行するようにS-13が伸びているが同時並存していたかどうかは不明である。

#### b. 土坑

##### 1SK010

調査区北側で検出した土坑である。長円形を呈し長辺1.6m、短辺1.2m、深さ0.4mを測る。橙色土混じりの黒色土の埋土である。

##### 1SK030

調査区中央で検出した土坑である。楕円形を呈し三段掘りで西側が深くなっている。長辺1m、短辺0.8m、深さは遺構面から0.15m、0.3m、0.35mである。

#### c. その他の遺構

##### 1SX015

調査区南西隅で検出した小穴である。長円形を呈し長辺1.1m、短辺0.8mで、三段掘りになっている。深さは遺構面からそれぞれ0.1、0.2、0.5mを測る。

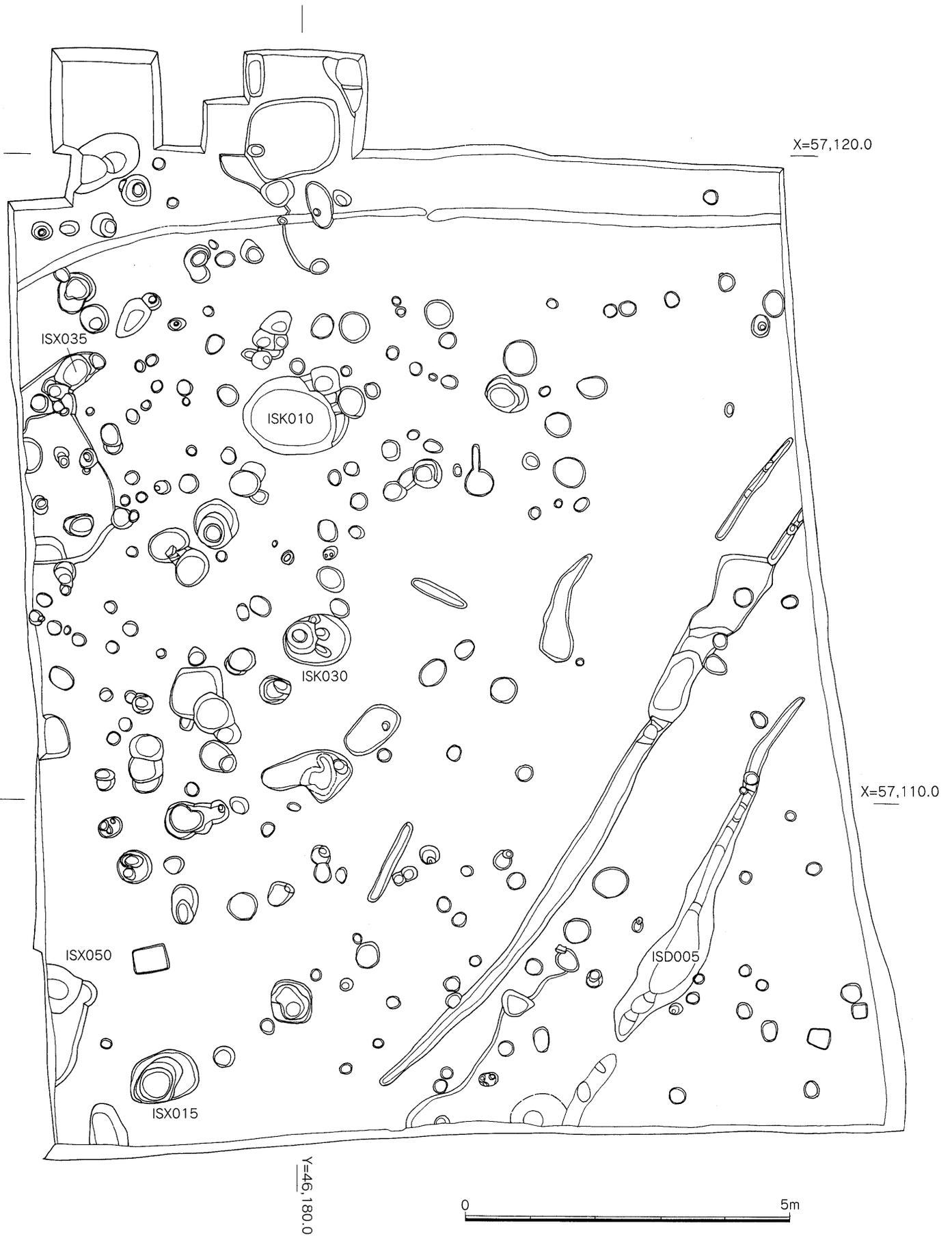


図131. 正尻遺跡 第1次調査 遺構略測図 (S=1/80)

1SX035

調査区の北西で検出した小穴である。S-24の底面で検出した。直径0.5mほどの略円形で、深さは遺構面から約0.5mである。

1SX050

調査区の南西で検出した小穴である。S-49に切られている。直径0.8mほどの略円形と考えられ、深さは約0.3mである。

D. 遺物

a. 溝

1SD005 (図132-1~8)

弥生土器

壺×高坏 (1) 壺あるいは高坏の口縁部片である。口縁部上面には若干赤色顔料が残存しており、本来は全体的に丹塗りであった可能性がある。

甕 (2~6) 2・3・5・6は甕1bの口縁部片である。3の口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。5・6の口縁部外面には刷毛目の起点/終点痕とも考えられる細長い凹みが観察できる。3の突帯付近には煤、3・6の口縁部にはコゲが付着している。4は甕1cの口縁部片である。口縁端部と口縁部内面をヨコナデすることによって若干跳ね上げている。

鉢 (7) 鉢bの口縁部から胴部であり、全周の約1/8が残存している。内外面とも器面が風

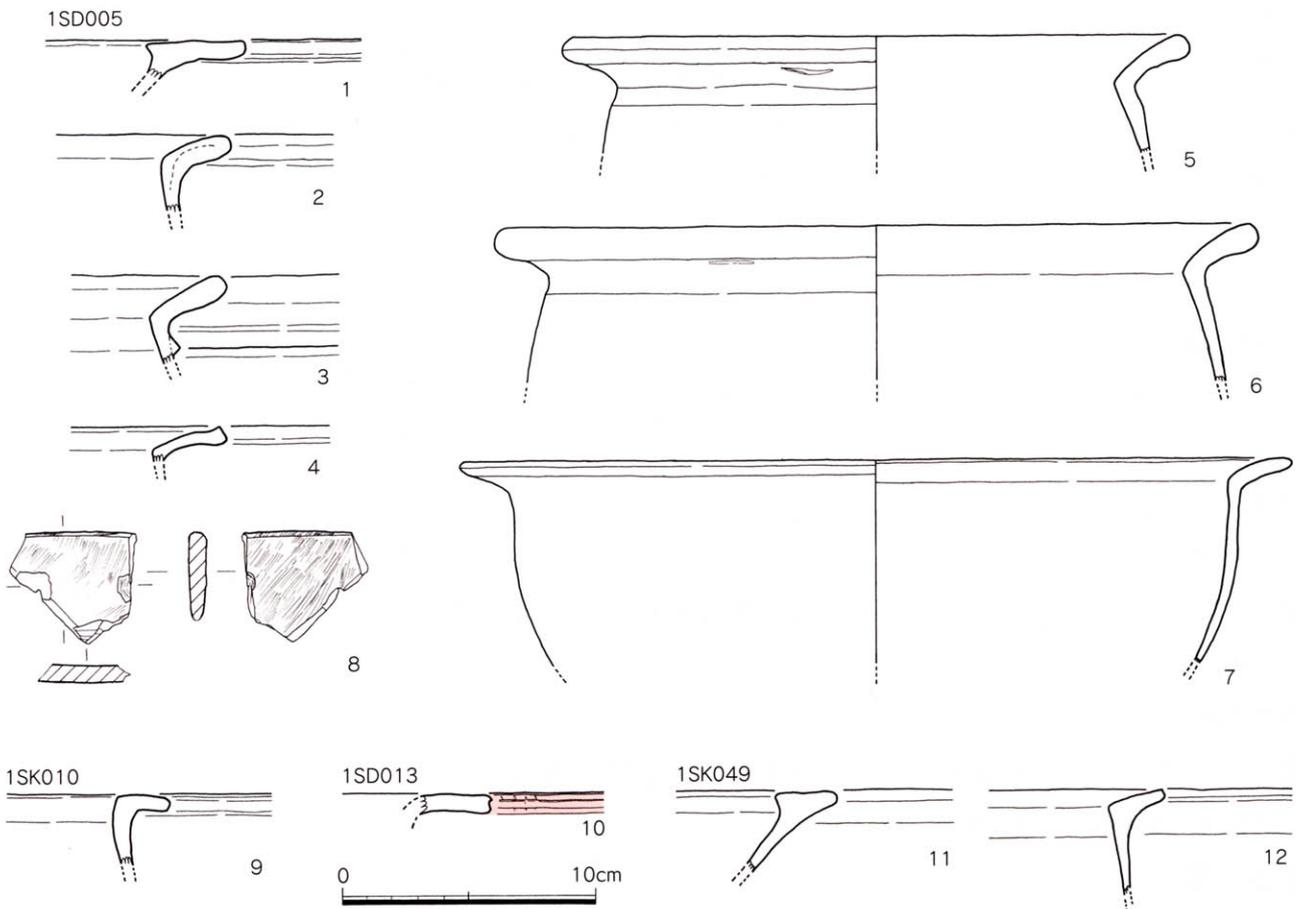


図132. 溝・土抗出土遺物実測図(S=1/3)

化しており、調整は不明である。なお、口縁部には煤が付着している。

### 石製品

**石包丁 (8)** 粘板岩製の石包丁であり、外湾刃半月形を呈する。全体的に破損が激しいが、一部残存する下縁は刃部を形成せず丸く研いである。穿孔時に欠損したため何らかの形で再利用しようとしたためと思われる。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式新段階）である。

**1SD013** (図 132 - 10)

### 弥生土器

**壺×甕(10)** 壺 1b あるいは甕 2a の口縁部片であろう。口縁端部は縦方向に刻み目を入れた後、横方向のヨコナデによる凹線あるいは沈線文を一条めぐらせている。外面は丹塗りである。

【埋没時期】 中期中頃（須玖Ⅰ式新段階～Ⅱ式古段階）である。

### b. 土坑

**1SK010** (図 132 - 9)

### 弥生土器

**甕 (9)** 甕 1b の口縁部片である。内外面ともナデによって調整している。

【埋没時期】 中期後半（須玖Ⅱ式古段階）である。

**1SK049** (図 132 - 11・12)

### 弥生土器

**高坏 (11)** 高坏 a の口縁部片である。内外面はナデによって調整されていると思われる。

**甕 (12)** 甕 1a の口縁部片である。器面が風化しており、調整は不明である。

【形成・埋没時期】 中期前半（須玖Ⅰ式）である。

### c. その他の遺構（小穴）

**1SX001** (図 133 - 1)

### 弥生土器

**甕 (1)** 甕 1a の口縁部片である。口縁端部付近が垂れ下がっており、須玖Ⅱ式古段階のものである。

**1SX002** (図 133 - 2)

### 弥生土器

**甕 (2)** 甕 1a の口縁部片である。口縁端部を若干尖らせた形態にしている。

**1SX003** (図 133 - 3)

### 弥生土器

**甕 (3)** 甕 1b の口縁部片である。口縁端部を肥厚させている。

**1SX004** (図 133 - 4・5)

### 弥生土器

**甕 (4・5)** 4・5 は甕 1b の口縁部片である。

**1SX006** (図 133 - 6)

**弥生土器**

甕 (6) 甕 1b の口縁部片である。口縁端部はヨコナデによって面を形成している。

1SX007 (図 133 - 7)

**弥生土器**

甕 (7) 甕 1b の口縁部から胴部上半にかけての破片である。口縁部屈曲部のヨコナデによって端部が若干肥厚した形態となっている。外面は器面が風化しており調整は不明だが、内面はナデ調整であろう。

1SX008 (図 133 - 8・9)

**弥生土器**

甕 (8・9) 8・9 は甕 1b の口縁部片である。9 はヨコナデによって口縁端部をごくわずかにつまみ上げている。

1SX009 (図 133 - 10)

**弥生土器**

甕 (10) 甕 1b の口縁部片である。断面観察から口縁部は粘土を引き延ばした後、外側に折るかえすことによって成形した可能性と、くの字に折り曲げた後、口縁部の外面側に新たに粘土をつけ加えた可能性が考えられる。なお、外面には煤が付着している。

1SX011 (図 133 - 11・12)

**弥生土器**

甕 (11・12) 11・12 は甕 1a の口縁部片である。11 の口縁部下には二条あるいは部分的に三条の沈線文がめぐっている。

1SX014 (図 133 - 13)

**弥生土器**

高坏 (13) 高坏 a の口縁部片である。口縁部上面の外面側はヨコナデによって凹みを形成している。

1SX015 (図 133 - 14)

**弥生土器**

甕 (14) 甕 1a の口縁部片である。内外面ともナデで調整していると思われる。

1SX017 (図 133 - 15)

**弥生土器**

甕 (15) 甕 1a の口縁部片である。口縁端部が若干垂れ下がっている。また、口縁部上面には黒班が観察できる。

1SX018 (図 133 - 16)

**弥生土器**

甕 (16) 甕 1a の口縁部片である。

1SX019 (図 133 - 17・18)

**弥生土器**

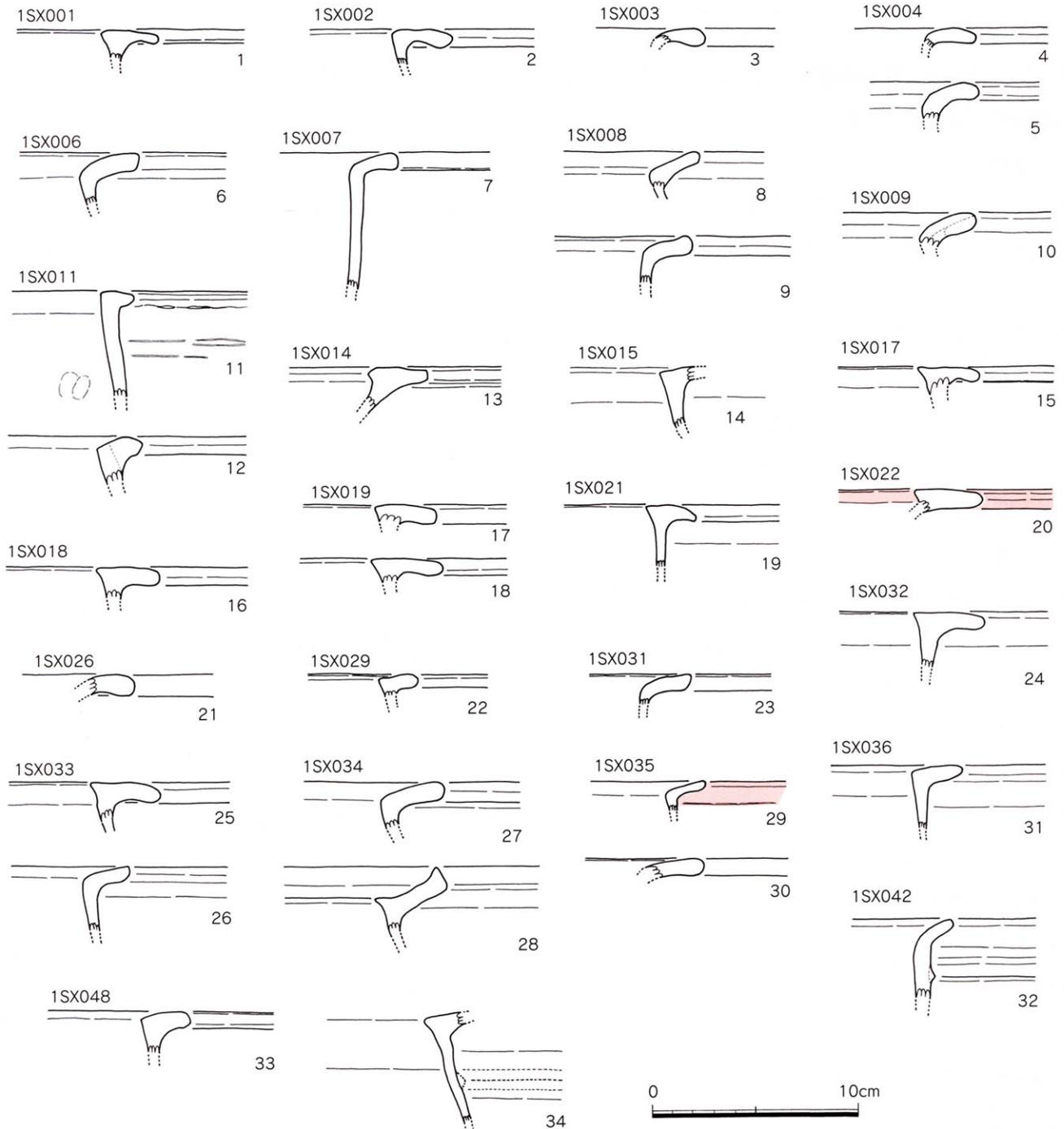


図133. その他の遺構出土遺物実測図(S=1/3)

**甕 (17・18)** 17・18は甕1aの口縁部片である。両者とも若干外側に傾いている。17の外面には煤が付着している。

**1SX021 (図133-19)**

**弥生土器**

**甕 (19)** 甕1aの口縁部片である。砂粒をほとんど含まない精緻な胎土である。

**1SX022 (図133-20)**

**弥生土器**

**壺×高坏 (20)** 壺1aもしくは高坏aの口縁部片である。口縁部外面・上面・内面が丹塗りである。

1SX026 (図 133 - 21)

弥生土器

甕 (21) 甕 1b の口縁部片である。ヨコナデによって口縁端部が若干肥厚している。

1SX029 (図 133 - 22)

弥生土器

甕 (22) 甕 1a の口縁部片である。径 5mm 程度の黒雲母を含んでいる。

1SX031 (図 133 - 23)

弥生土器

甕 (23) 甕 1b の口縁部片である。口縁部内面をヨコナデによってくぼませることで、若干だが端部を上方につまみ上げた形態となっている。

1SX032 (図 133 - 24)

弥生土器

甕 (24) 甕 1a の口縁部片である。やや外側に傾いた鋤先口縁である。

1SX033 (図 133 - 25・26)

弥生土器

甕 (25・26) 25 は甕 1a の口縁部片である。外面には煤が付着している。26 は甕 1b の口縁部片である。

1SX034 (図 133 - 27・28)

弥生土器

甕 (27・28) 27 は甕 1b、28 は甕 1d の口縁部片である。28 の口縁端部はヨコナデによって上方に跳ね上げている。

1SX035 (図 133 - 29・30)

弥生土器

壺 (29) 壺 2b の口縁部片である。外面は丹塗りである。

甕 (30) 甕 1b の口縁部片である。ヨコナデによって口縁端部が若干肥厚した形態となっている。

1SX036 (図 133 - 31)

弥生土器

甕 (31) 甕 1a の口縁部片である。

1SX042 (図 2 - 32)

弥生土器

甕 (32) 前期の甕の口縁部片である。口縁部下にはヨコナデによって三角突帯を貼り付けている。また、内面にはコゲが付着している。

1SX048 (図 133 - 33・34)

弥生土器

甕 (33・34) 33・34 は甕 1a の口縁部片である。34 の口縁部下には三角突帯を貼り付けてい

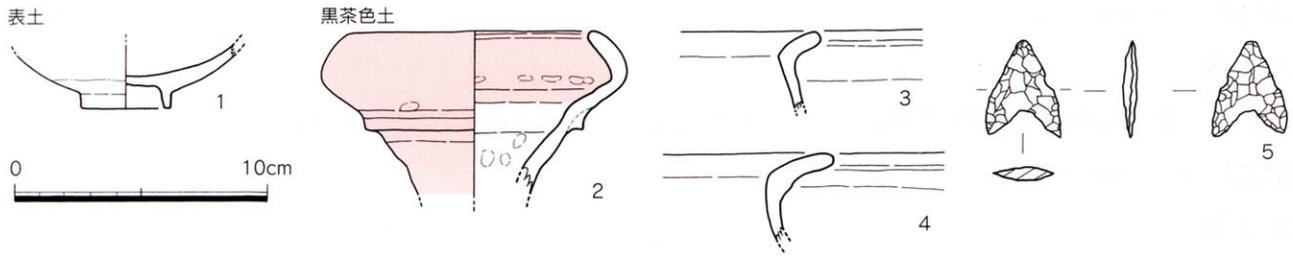


図134. 土層出土遺物実測図(S=1/3)

たと思われる痕跡がある。

#### d. 土層

耕土+黒茶土 (図134-1)

#### 青磁

碗(1) 碗の高台の破片である。外面の上部と内面に釉が施されている。

黒茶土 (図134-2~5)

#### 弥生土器

壺(2) 壺4の口縁部から頸部であり、全周の約1/4ほどが残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内外面ともナデで調整していると思われ、特に内面には指頭圧痕が残存している。外面と口縁部内面は丹塗りである。

甕(3・4) 3・4は甕1bの口縁部片である。4の外面屈曲部付近はヨコナデによって若干だが三角突帯状に隆起している。また、4の口縁部内面にはコゲが付着している。

#### 石製品

石鏃(5) サヌカイト製の打製石鏃である。凹基式であり、基部を6mmほどくぼませている。調整は粗く、一側面には抉り状の剥離も認められる。

#### E. 小結

調査地は弥生時代中期中~後半の集落の一部と考えられるが、地形的に河川に近接しており堆積土の状況からも安定的な立地とはいえない。小穴群を中心に土坑、溝などを検出しているが、これらの関係性は不明である。弥生時代以降の遺構は検出されておらず、古墳時代遺構の土地利用も不明である。今後の周辺の調査とあわせて再検討する必要がある。



図135. 正尻遺跡 第1次調査 遺構略測図(S=1/100)

## 5. 国分正尻遺跡 第2次調査

### A. 調査に至る経過

平成11年10月7日に建設課より農道改良事業として、国分1丁目425番における埋蔵文化財取り扱いの有無について協議がなされた、この地番周辺において国分松本遺跡として4・5・7次調査を実施し、弥生時代中期における墓域、集落が検出されており、当該地番においても埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いと判断された。担当課である建設課と協議を行った結果、平成12年度当初に調査を実施することで合意し、記録保存としての発掘調査を実施した。開発対象面積は160㎡、調査面積は128㎡を測り、調査は平成12年4月3日～6月16日に実施した。調査は中島恒次郎が行った。

### B. 基本土層

農道として利用されていたことから、表層にはアスファルト、路盤工のバラスが敷設されている。その下位に旧耕作土および床土が観察され、床土除去後に灰茶色土の遺物包含層が堆積している。ここまでの層厚は約0.3cmほどであった。遺構内堆積土は、遺構切りあい関係から見ると黒色土・黒茶色土←茶灰色土である。

### C. 遺構(図136)

#### a. 掘立柱建物

##### 2SB020

調査区中央にて検出した掘立柱建物で、調査区南へ展開するものと考えられることから、全体規模については明らかにし難い。桁行方向を南北として仮定すると桁行柱間は、2.4mを測り、梁行柱間は2.96mを測る。なお2SD015の最上層を除去後に柱穴を検出しており、柱最下部は基盤層まで到達していた。

##### 2SB035

調査区中央にて検出した掘立柱建物で、先の2SB020同様、調査区南へ広がっているものと考えられる。桁行柱間は2.40m、梁行柱間は西側が2.00m、東側が2.24mを測り、わずかに東側が広い。当該遺構と2SD015の関係は、2SD015最下層である黒色土除去後に確認しており、建物建築時期は2SD015形成前といことになる。

#### b. 溝

##### 2SD002

調査区東端部にて検出した東西溝で、検出長約1.0m、幅0.4m、深さ0.08mを測り、灰茶色土が堆積していた。極めて残存状況が悪く、遺構配置図として提示した箇所以外の状況は明らかにし難い。

##### 2SD010

調査区東半部にて検出した南北溝で、西に張り出すような円弧を描く形状をとる。検出長4.60m、幅0.86m、深さ0.22mをそれぞれ測る。遺構内には上位から黒茶色土←灰茶色土が堆積しており、溝内からは散在的に遺物が出土している。

##### 2SD015

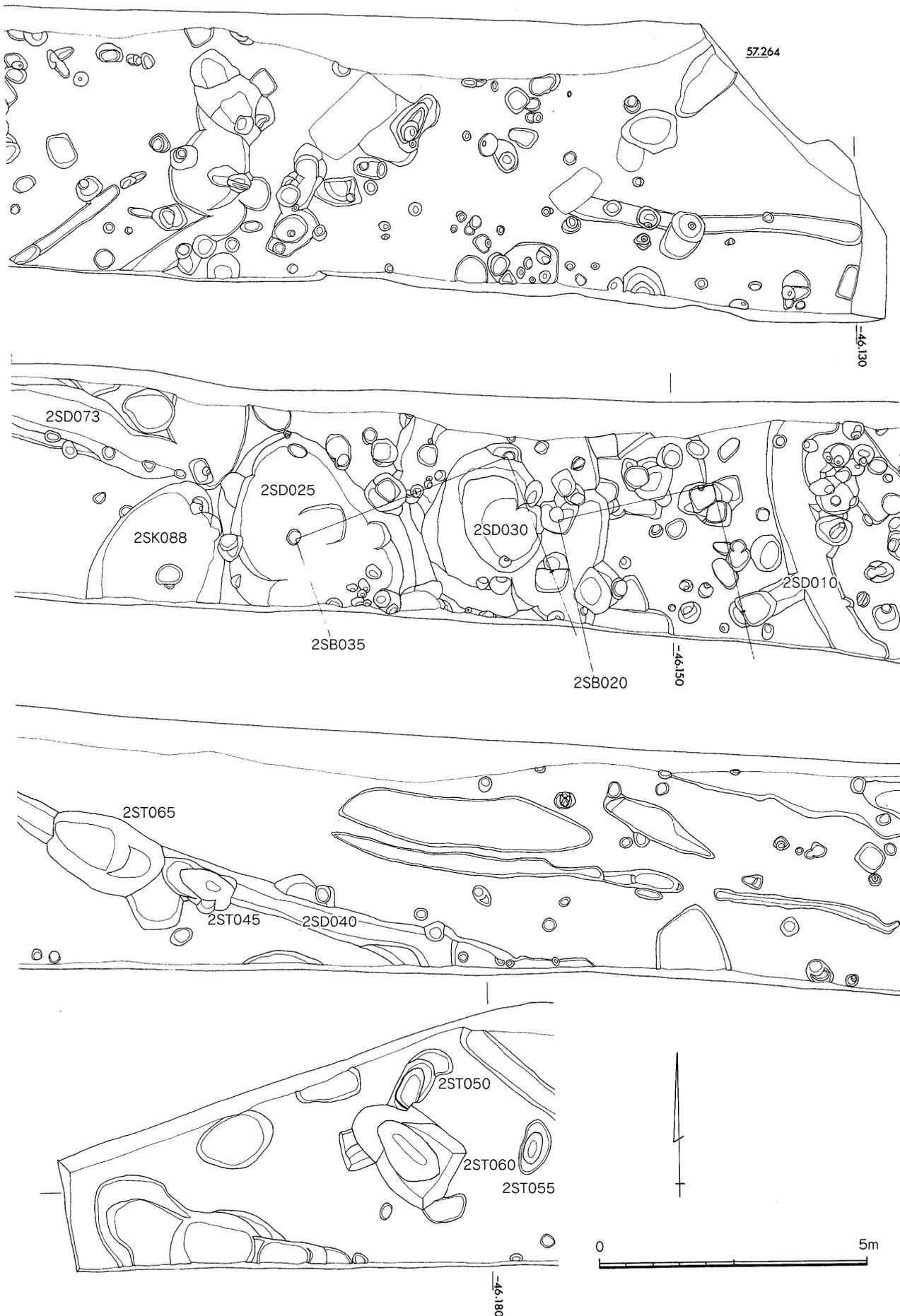


図136. 正尻遺跡 第2次調査 遺構配置図

調査区ほぼ中央付近で検出した南北溝で、検出長 3.40m、幅 3.66m、深さ 0.66m を測る。2SD015 は調査過程において複数の遺構が検出でき、遺構埋没過程において遺構形成のための時間幅が想定で

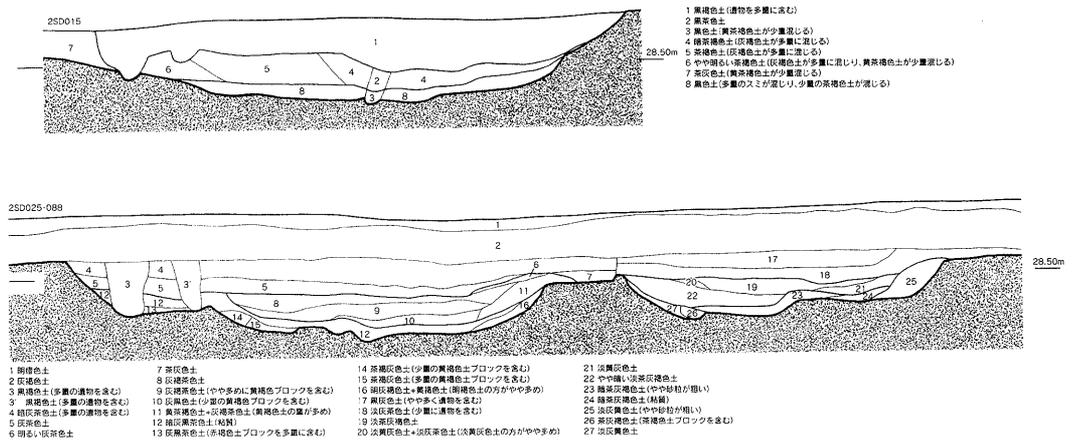


図137. 溝推積土層実測図 (S=1/60)

きる。堆積土および遺構の前後関係は、土層模式図に示している (図 156)。当該遺構内からは、散在的に遺物が出土しており、溝内の堆積土の上下関係は、下記ようになる。

**【堆積土】**

灰黒色土←茶色土←灰茶色土←茶黒色土←黄褐色土←黒色土

**2SD025**

先述した 2SD015 の西側に隣接して検出した溝で、検出長 11.90m、幅 3.6m、深さ 0.40m を測る。当該溝は調査区南端部においてはほぼ南北方向を示しているが、北端部においては西に大きく振れるように走向を曲折する。西に走向を振った状況は後述する 2SD040 と平行するような状況が観察できる。当該遺構についても 2SD015 同様に、調査過程において複数の遺構が確認されており、遺構埋没過程において遺構形成のための時間幅が想定できる。堆積土および遺構の前後関係は、土層模式図として示している (図 156)。当該遺構内からは、散在的に遺物が出土しており、溝内の堆積土の上下関係は、下記ようになる。

**【堆積土】**

茶色土←茶灰色土←炭化物を多く含む黒灰色粘土←茶黄色砂質土

**2SD030**

2SD015 の調査過程において検出した溝で、2SD015 の東に偏在して検出した。2SD015 の堆積土の差とも理解できるが、遺構形状が明確に確認できたことから、再掘削行為を想定し 2SD030 として区別した。遺構規模は、検出長 3.40m、幅 1.70m、深さ 0.55m を測る。遺構内堆積土は黒色土が堆積している。

**2SD040**

調査区西半部にて検出した溝で、先述した 2SD025 と平行するように検出できた。遺構規模は、検出長 11.60m、幅 0.6m、深さ 0.19m を測る。遺構内堆積土は、黒茶色土の単一層であった。なお当該遺構に切られるように 2ST045・2ST065・2ST055 が検出されている。しかしこれら墓の標識痕跡 (墳丘その他の標識物の有無) が調査情報として収集できなかったことから、墓域を意図的に破壊したのか否かについては明らかにし難い。

c. 墓

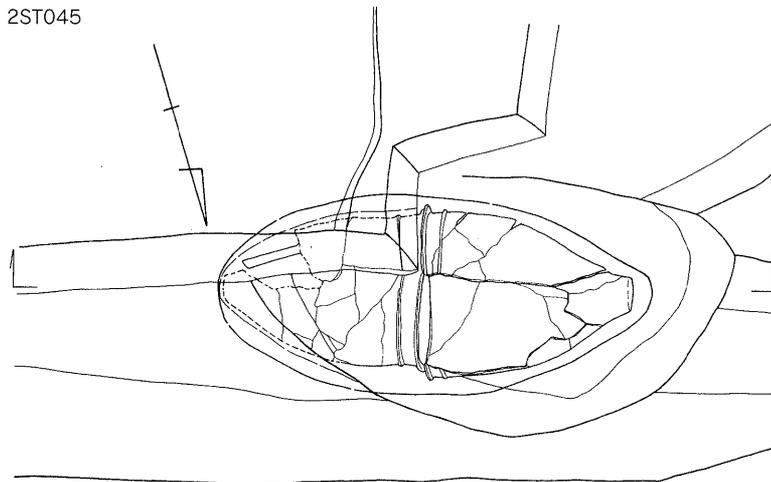
c-1. 甕棺墓【小型棺】

2ST050( 図 138)

調査区西部に検出した小型甕棺墓で、検出墓壙長軸長 1.08m、短軸長 0.5m を測る。墓壙底の高低差は観察できなかつたが、甕棺の検出状況から北東方向からの挿入が考えられる。甕棺内には茶灰色粘土←茶白色砂質土←暗灰色細粒砂←灰色砂質土が堆積していた。

2ST055( 図 139)

2ST045



調査区西部にて検出した小型甕棺墓で、検出墓壙長軸長 1.05m、短軸長 0.6m を測る。墓壙底の高低差は先述した 2ST050 同様に観察できなかつた。検出状況が既に棺露出状況であったことから、棺挿入方向に関しては明らかにし難い。2SD040 に切られている。棺内には上位から暗灰色粘土←灰白色砂質土が堆積している。

c-2. 甕棺墓【中型棺】

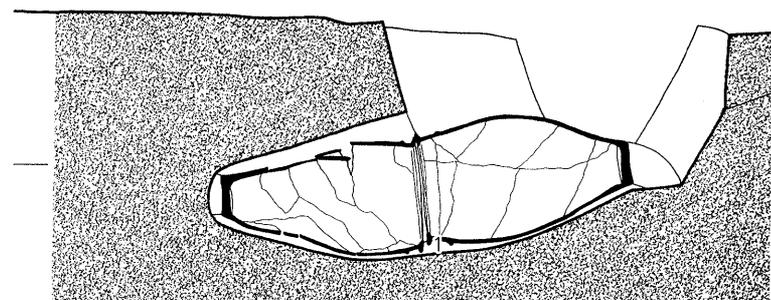
2ST045( 図 138)

調査区西部にて検出したもので、2SD040 に切られていた。棺挿入角度は約 5.5 度を測り、北東方向からの棺挿入方向が観察できた。検出墓壙長軸長 1.37m、短軸長 0.69m を測り、検出標高から墓壙底までの深さは 0.65m を測る。棺内には上位より淡黒茶色粘質土←黒茶色土←淡灰褐色粘質土（粗粒砂を含んでいる）が堆積していた。

c-3. 甕棺墓【大型棺】

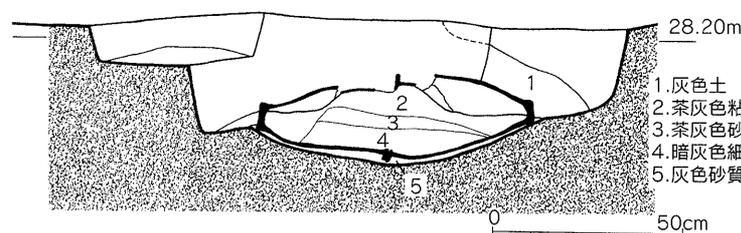
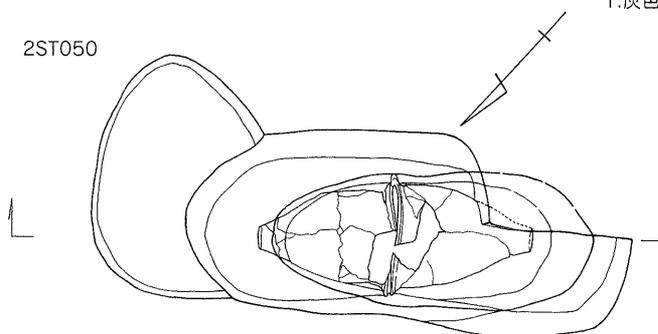
2ST060( 図 140)

調査区西端部にて検出した大型甕棺墓で、検出墓壙長軸長 2.15m、短軸長 1.5m を測り、棺挿入角度は約 1.5 度を測る。棺の挿入方向は南東側と想定できる。検出標高から墓壙



1. 灰色砂質土

2ST050

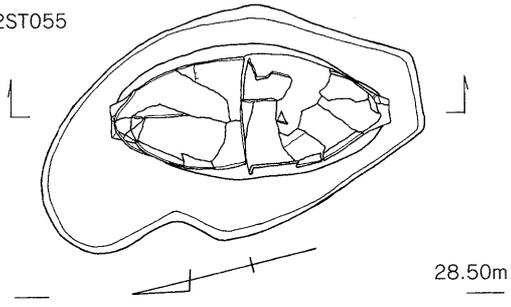


- 1. 灰色土
- 2. 茶灰色粘土
- 3. 茶灰色砂質土
- 4. 暗灰色細粒砂
- 5. 灰色砂質土

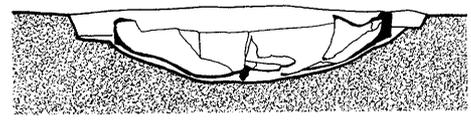
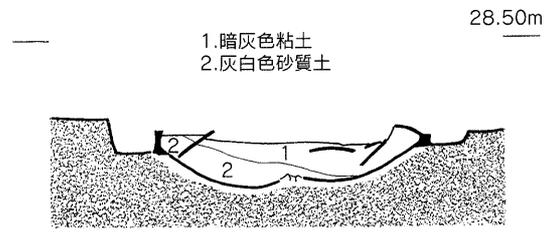
0 50cm

図138. 甕棺墓遺構実測図(1)

2ST055



2ST055 土層実測図



2ST065

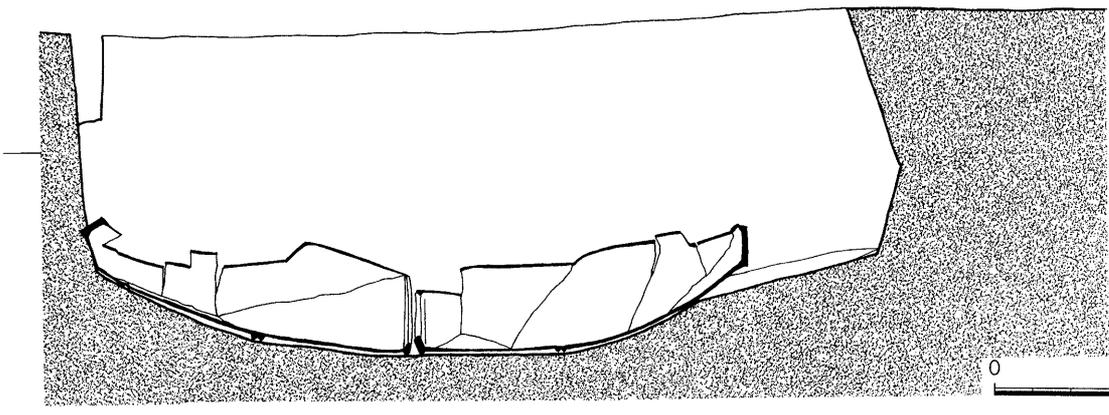
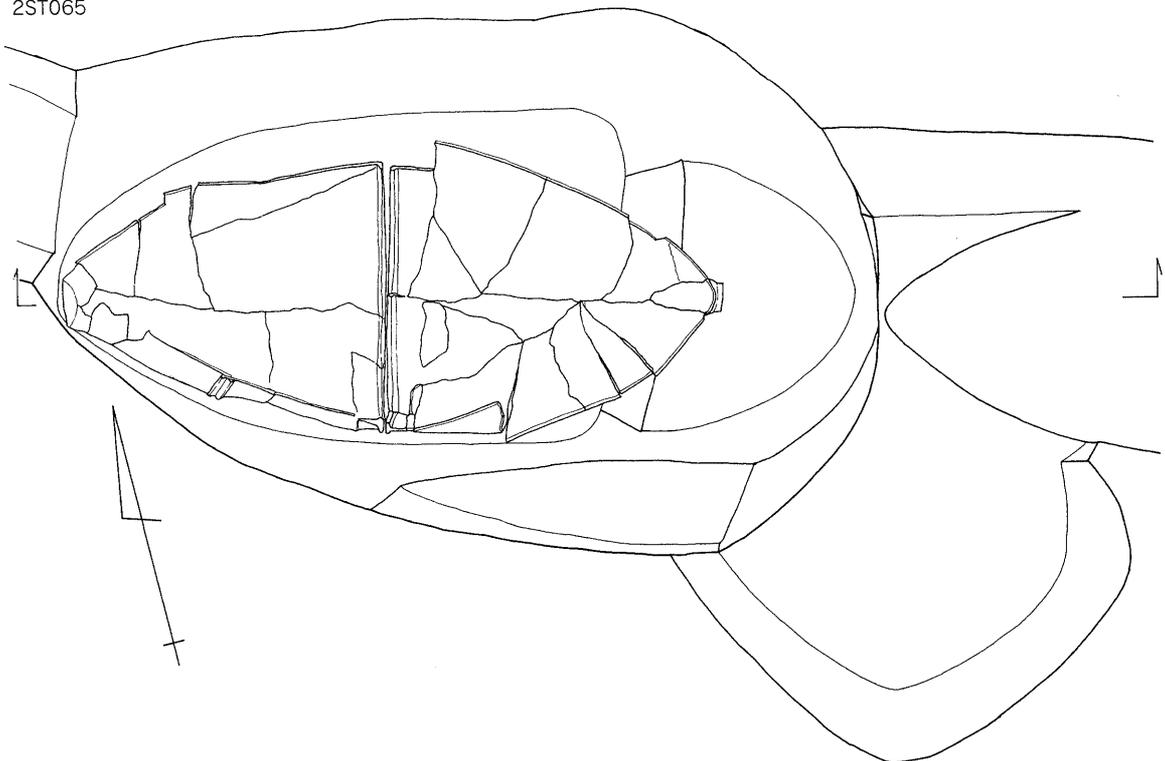


图139. 甕棺墓遺構実測図(2)

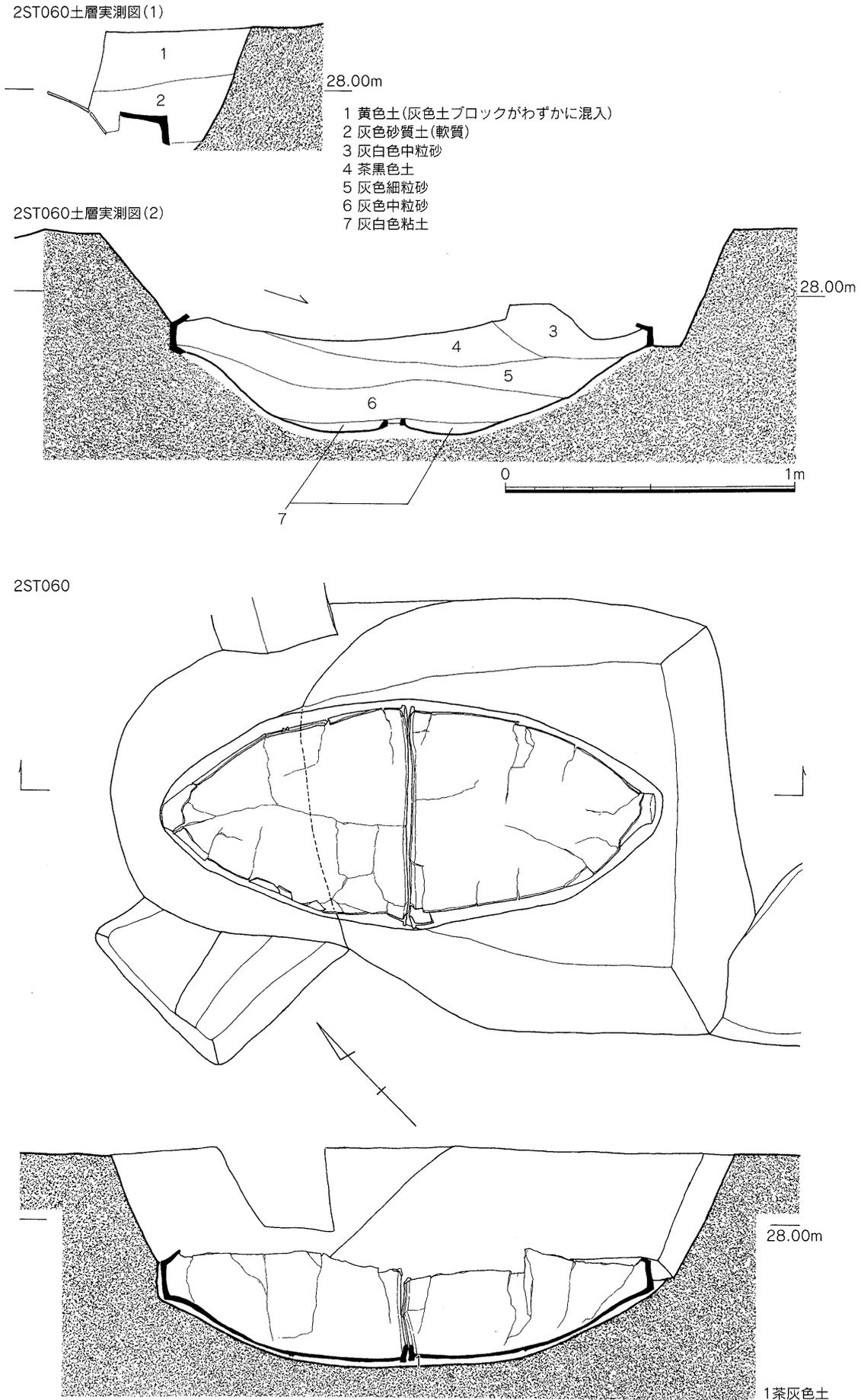


図140. 甕棺墓遺構実測図(3)

底までの深さは、0.77mを測る。棺内には上位より灰白色中粒砂←茶黒色土←灰色細粒砂←灰色中粒砂←灰白色粘土が堆積していた。

**2ST065**(図 139)

調査区西部に検出した大型甕棺墓で、検出墓壙長軸長 2.18m、短軸長 1.34m を測り、棺挿入角度は水平であった。棺の挿入方向は、南東方向と想定できる。なお墓壙の南東部にテラス状の平坦部が形成されており、南から墓壙へ入る行為が想定できそうである。検出標高から墓壙底までの深さは 0.85m を測る。棺内には上位より明灰褐色土←灰褐色土が堆積していた。

**d. 土坑**

**2SK014**

調査区東部にて検出した土坑で、不整形な形状を呈している。遺構規模は検出長軸長 3.0m、短軸長 1.20m を測り、深さは 0.4m を測る。遺構内堆積土は上位より黒色土←茶色土が観察できた。

**2SK088**

調査区中央部にて検出した土坑で、調査区南へ展開しており全形は明らかにし難いものの略楕円形を呈しているものと推定する。検出長軸長 2.70m、短軸長 2.34m、深さ 0.28m を測る。遺構内堆積土は、上位より黒茶色砂混じり土←黄色粘土←炭化物が混入する黒色土←茶黄色土であった。

**e. その他の遺構**

**2SX124**

調査区南端部にて検出した凹みで、遺構内から破砕された土器片が多量に堆積していた。当初廃棄土坑を想定しての調査であったが、出土土器の多くが細片であることから、一回の行為によって廃棄された可能性よりは、放置された土器群が片付けによって処理された可能性が高いものと判断される。遺構規模は、調査区南側へ広がることから全形については判断し難い。検出長軸長 4.86m、短軸長 1.60m を測り、深さ 0.38m であった。

**D. 遺物**

**a. 掘立柱建物**

**2SB020b** (図 141 - 1 ~ 3)

**弥生土器**

**壺** (1) 壺 1a の口縁部である。内外面ともに丹塗りである。

**甕** (2・3) 甕 1b、3 は甕 2b の口縁部である。3 の内面には丹塗りが施されている。

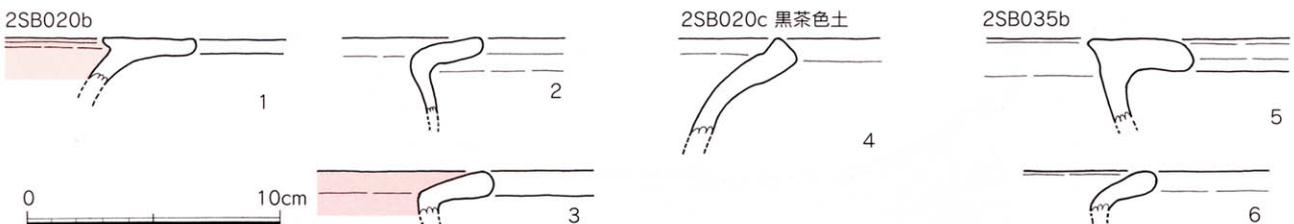


図141. 掘立柱建物出土遺物実測図(S=1/3)

**2SB020c 黒茶土 (図 141 - 4)**

**弥生土器**

**壺×高坏 (4)** 壺 1b の口縁部片として実測したが、高坏の脚部である可能性も考えられる。

【埋没時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式) である。

**2SB035b (図 141 - 5・6)**

**弥生土器**

**甕 (5・6)** 5 は甕 1a の口縁部片である。口縁部内面にはヨコナデにより凹みを形成している。

6 は甕 1b の口縁部片である。

【埋没時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式古段階) である。

**b. 溝**

**2SD002 (図 142 - 1)**

**弥生土器**

**甕 (1)** 甕 1a の口縁部片である。ヨコナデによって口縁部を整形している。

【形成・埋没時期】 中期前半 (須玖Ⅰ式古段階) である。

**2SD010 (図 142 - 2 ~ 6)**

**弥生土器**

**甕 (4・5)** 4 は甕 1c の口縁部片である。口縁端部をヨコナデにより跳ね上げている。5 は K V f 式の大型甕棺であり、口縁部から胴部下半にかけて全周の約 1 / 3 が残存している。口縁部下に三角突帯、胴部下半に断面コ字状突帯をヨコナデにより貼り付け、さらに両突帯上には斜方向の刺突文を施している。外面の口縁部・胴部中位には縦・斜方向の刷毛目、内面の口縁部・胴部下半には横・斜方向の刷毛目が残存するが、その他の部位は刷毛目をナデ消しているものと思われる。突帯の剥離部には刷毛目が残存しており、刷毛目調整の後に突帯が貼り付けられたことがわかる。また、突帯剥離部には横方向の沈線が確認でき、突帯貼付位置の目印であったと思われる。外面は丹塗りである。

**古式土師器**

**鉢 (2)** ほぼ完形の鉢である。内外面ともに指頭圧痕が残存する粗製品である。

**高坏 (3)** 円形の透かしを入れた高坏の脚部片である。

**石製品**

**つまみ形石器×石匙 (6)** サヌカイト製の不明石器である。つまみ形石器や石匙の類であろうか。表面の剥離は粗い。

**2SD010 灰茶土 (図 142 - 7)**

**弥生土器**

**甕 (7)** 甕 1a の口縁部片である。ヨコナデによって口縁部を整形している。

【埋没時期】 弥生時代終末から古墳時代前期と思われる。

**2SD010 土器集中 (図 142 - 8 ~ 12)**

**古式土師器**

**甕 (8～12)** 8は甕2×3の口縁部から胴部上半の破片であると考えられるが、口唇部は凹んでおり、甕2や3の口唇部とは異なるものである。外面の口縁部から胴部にかけて横方向のタタキ痕が連続して確認されることから、タタキ成形の後、屈曲させることで口縁部を形成したことがわかる。内面には横・斜方向の刷毛目調整が施されている。9・10は甕である。9は口縁部片のみであり、詳細は不明だが、内外面ともにナデ仕上げと思われる。10は在地の甕であると考えられる。胴部は内外面ともに刷毛目調整だが、口縁部では内外面ともに刷毛目がヨコナデにより消されていることから、刷毛目調整の後、ヨコナデによる口縁部整形が行われ

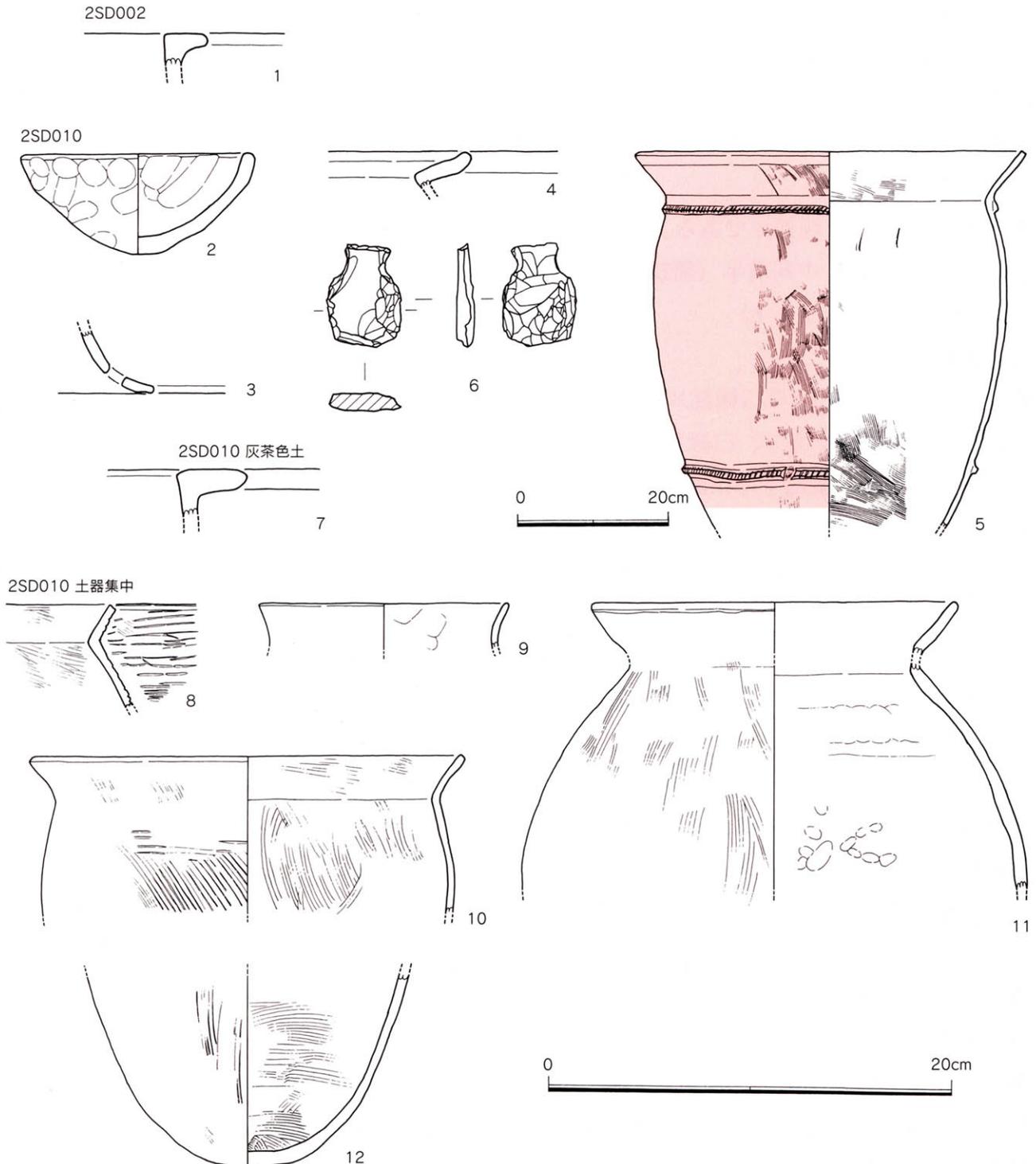


図142. 溝出土遺物実測図(1) (S=1/3・1/8)

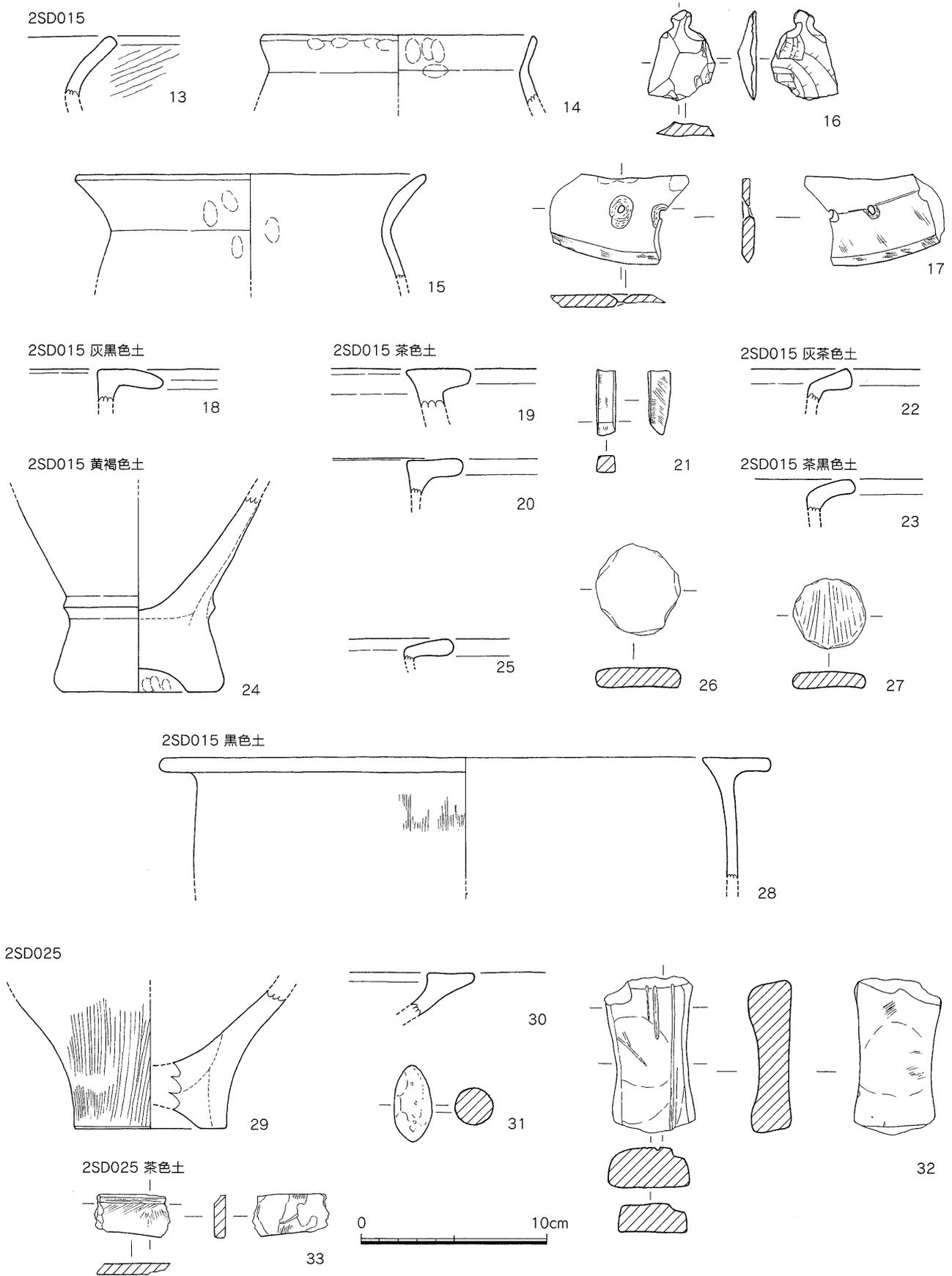


图143. 溝出土遺物実測図(2) (S=1/3)

たことがわかる。外面には煤が付着している。11は甕4である。甕4に特徴的な横方向の刷毛目調整は見られず、外面は縦方向の刷毛目調整である。内面はナデ調整であり、胴部中位には指頭圧痕が残存する。器壁の厚いものである。12は丸底の甕の底部である。外面の底部付近は器面が摩滅しており、調整などは不明であるが、胴部内外面には縦・横方向の刷毛目調整が施されている。外面には煤が付着している。

【埋没時期】 11や12から古墳時代前期である。

#### 2SD015 (図143-13~17)

##### 古式土師器

甕(13~15) 13~15は甕である。13は口縁部の破片であり、外面にはタタキ痕が観察される。14は口縁部全周の約1/4、15は口縁部全周の約1/8が残存する。口縁部内外面ともにヨコナデにより調整されるが、指頭圧痕も確認される。13・15の外面には煤が付着している。

##### 石製品

石匙(16) サヌカイト製の石匙である。刃部は作り出しておらず、未製品の可能性がある。把手部分を一回ないしはそれに近い回数の剥離で作り出している。

石庖丁(17) サヌカイト製の石庖丁である。背面がやや反っている。両孔とも二度の回転穿孔を行っている。

【埋没時期】 口縁部片のみのため詳細は不明だが、弥生時代後期後半以降と思われる。

#### 2SD015 灰黒色土 (図143-18)

##### 弥生土器

甕(18) 甕1aの口縁部片である。

【埋没時期】 中期後半(須玖Ⅱ式古段階)である。

#### 2SD015 茶色土 (図143-19~21)

##### 弥生土器

甕(19・20) 19・20は甕1aの口縁部片である。

##### 石製品

石斧(21) 頁岩製のノミ状片刃石斧である。後主面はやや湾曲しながら、刃部へと続く。

【埋没時期】 中期前半(須玖Ⅰ式古段階)であろうか。

#### 2SD015 灰茶色土 (図143-22)

##### 弥生土器

甕(22) 甕1bの口縁部片である。

【埋没時期】 中期後半(須玖Ⅱ式古段階)である。

#### 2SD015 茶黒色土 (図143-23)

##### 弥生土器

甕(23) 甕1bの口縁部片である。外面には煤が付着している。

【埋没時期】 中期後半(須玖Ⅱ式古段階)である。

#### 2SD015 黄褐色土 (図143-24~27)

**弥生土器**

**甕** (24・25) 24は甕の底部であり、全周の約1/2が残存している。胴部から底部への屈曲部には三角突帯を貼り付けている。内外面ともにナデ調整により仕上げられている。内面にはコゲが付着している。25は甕1bの口縁部片である。

**土製品**

**円盤状土製品** (26・27) 26・27は完形の円盤状土製品である。両個体ともに土器を円形に打ち欠くことで円盤状に成形している。27の外表面(上面)には刷毛目が確認される。

【埋没時期】 中期後半(須玖Ⅱ式古段階)である。

**2SD015 黒色土** (図143-28)

**弥生土器**

**甕** (28) 甕1aの口縁部から胴部上半であり、全周の約1/3が残存している。外面には縦方向の刷毛目調整が施され、内面はナデ仕上げられている。

【埋没時期】 中期前半(須玖Ⅰ式新段階)である。

**2SD025** (図143-29~32)

**弥生土器**

**甕** (29) 甕の底部であり、全周の約1/3が残存している。外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。外面には煤、内面にはコゲが付着している。

**高坏** (30) 高坏aの口縁部片である。

**土製品**

**投弾** (31) 紡錘形の土製投弾である。完形品である。器面には指頭圧痕が観察される。

**石製品**

**砥石** (32) 細粒砂岩製の小型砥石である。表面には擦切り線とも思われる溝が入る。

【埋没時期】 中期前半(須玖Ⅰ式)である。

**2SD025 茶色土** (図143-33)

**石製品**

**用途不明石器** (33) 粘板岩製の不明石器である。石庖丁を擦切った後の残りと思われる。

【埋没時期】 土器片しか出土しておらず、詳細な時期は不明である。

**2SD025 茶灰土** (図144-34~36)

**弥生土器**

**甕** (34) 甕の口縁部片である。口縁部のやや下位には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面には煤が付着している。

**土製品**

**円盤状土製品** (35) 完形の円盤状土製品である。周囲を打ち欠くことで円盤状に成形している。

**石製品**

**石斧** (36) 頁岩製のノミ状片刃石斧である。断面はやや不整な四角形を呈する。

【埋没時期】 34以外に城ノ越式の甕1a・壺1b・高坏aなどが出土していることから、本土層

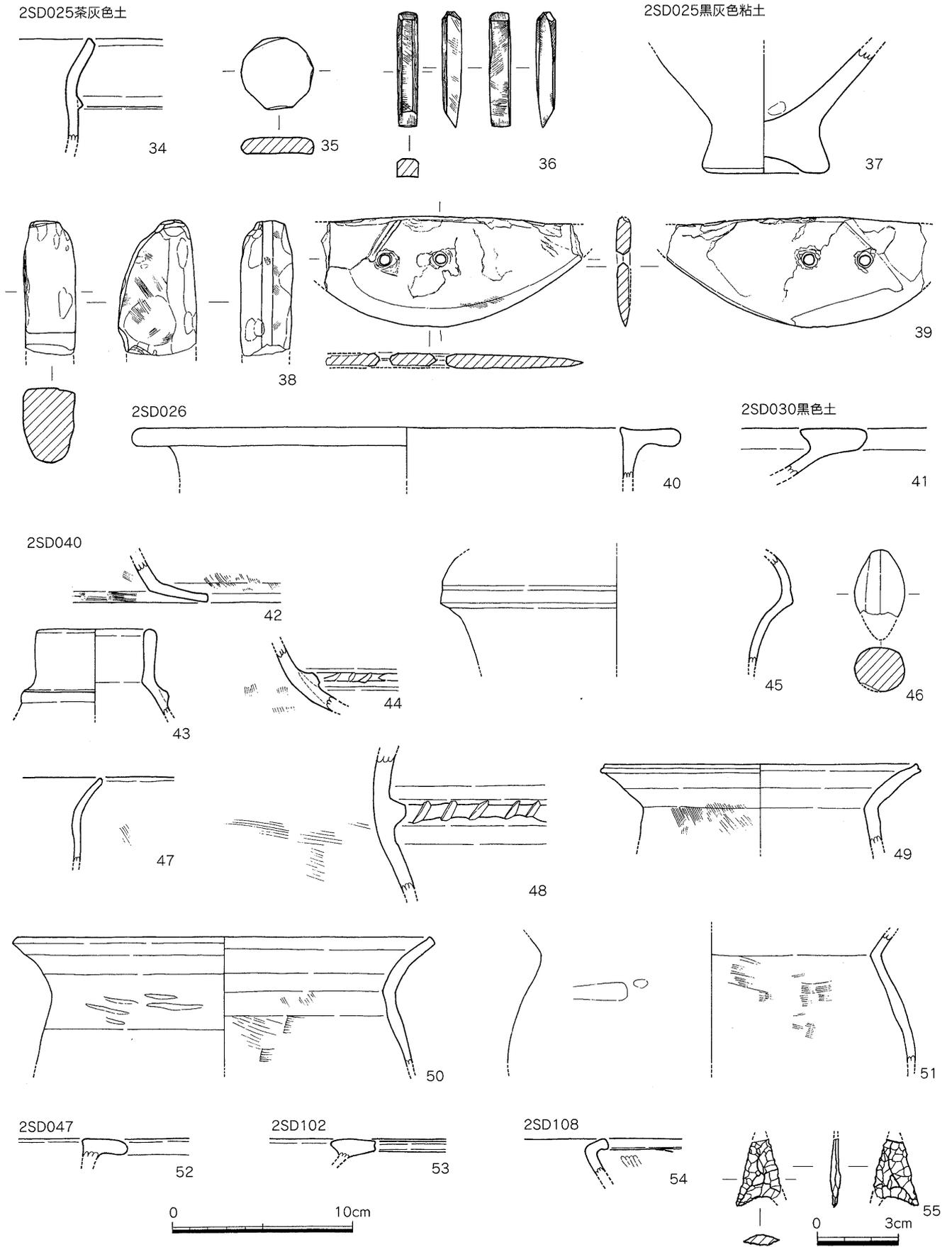


图144. 溝出土遺物実測図(3) (S=1/3·1/2)

の埋没時期は中期初頭（城ノ越式）である。

#### 2SD025 黒灰色粘土（図 144 - 37 ~ 39）

##### 弥生土器

甕（37） 甕の底部あるいは蓋 1 の天井部である。内外面ともにナデにより仕上げられている。

##### 石製品

石斧（38） 頁岩製の抉入柱状石斧である。後主面に二本の石理の線が入る。

石庖丁（39） 泥質片岩製の石庖丁である。外湾刃半月形を呈し、穿孔前に敲打を行っている。

【形成・埋没時期】 中期初頭（城ノ越式）である。

#### 2SD026（図 144 - 40）

##### 弥生土器

甕（40） 甕 1a の口縁部であり、全周の約  $1/7$  が残存している。

【埋没時期】 中期前半（須玖 I 式新段階）である。

#### 2SD030 黒色土（図 144 - 41）

##### 弥生土器

高坏（41） 高坏 a の口縁部片である。

【埋没時期】 中期後半（須玖 II 式）である。

#### 2SD040（図 144 - 42 ~ 51）

##### 弥生土器

高坏（42） 高坏の脚部片である。内外面ともに刷毛目調整が施されている。

壺（43 ~ 45） 43 は直口壺の口縁部であり、全周の約  $1/4$  が残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面ともに器面風化が著しく、調整等は不明である。44 は壺の頸胴部片である。断面コ字状突帯をヨコナデにより貼り付け、突帯上には刺突文を施している。内面には刷毛目調整が観察される。45 は壺 3a の口頸部であり、全周の約  $1/6$  が残存している。丹塗り様の痕跡がみられるが、器面が剥落しており、詳細は不明である。

甕（47 ~ 51） 47 は甕の口縁部片と考えられる。器面風化が著しく、調整等は不明である。48 は甕の胴部片である。断面コ字状突帯をヨコナデにより貼り付けた後、突帯上に斜方向の刺突文を施している。内面には横方向の刷毛目調整が施されている。49 ~ 51 は甕の口縁部であり、49 は全周の約  $1/6$ 、50 は全周の約  $1/8$ 、51 は全周の約  $1/6$  が残存している。49 は口縁端部が凹んでおり、特異な形態を呈する。外面には斜方向の刷毛目調整が施されている。50 の外面にはタタキ痕が観察され、内面には横方向の刷毛目調整が施されている。51 の内面は横方向の刷毛目調整後、ナデ仕上げられている。

##### 土製品

投弾（46） 土製の投弾である。約  $1/3$  程度を欠損している。

【埋没時期】 弥生時代後期である。

#### 2SD047（図 144 - 52）

##### 弥生土器

甕 (52) 甕 1a の口縁部片である。

【埋没時期】 中期前半 (須玖 I 式古段階) である。

2SD102 (図 144 - 53)

弥生土器

壺 (53) 壺 1a の口縁部片である。口縁端部はヨコナデにより若干凹んでいる。

【埋没時期】 中期前半 (須玖 I 式) である。

2SD108 (図 144 - 54・55)

弥生土器

壺 (54) 壺 2b の口縁部片である。外面には縦方向のミガキ調整が施されている。

石製品

石鏃 (55) サヌカイト製の凹基式打製石鏃である。剥離はやや粗く、先端と片脚を欠損する。

【埋没時期】 中期後半 (須玖 II 式) である。

2SD116 (図 145 - 56 ~ 59)

2SD116

弥生土器

壺 (56) 壺 3 の胴部片である。断面コ字状突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面は丹塗りである。

高坏 (58) 高坏 a の口縁部であり、全周の約 1 / 5 が残存している。口縁端部には縦方向の刻み目を入れている。

甕 (57・59) 57 は甕 1b、59 は甕 2a の口縁部であり、59 は全周の約 1 / 6 が残存している。59 の口縁

部下には断面 M 字状突帯を貼り付けている。外面は丹塗りである。

【埋没時期】 中期後半 (須玖 II 式新段階) である。

c. 墓

c-1. 甕棺墓【小型棺】

2ST050 (図 146 - 1・2)

弥生土器

甕 (1・2) 1・2 とともに小型の甕 1a であり、ほぼ完形である。両個体ともに器面が摩滅しており、不明瞭ではあるが、外面には縦方向の刷毛目調整の後にナデ調整、内面にはナデ調整が施されていると思われる。内面の胴部下半には刷毛目調整工具の起点痕、底部付近には指頭圧痕が残存する。

【形成時期】 中期前半 (須玖 I 式新段階) である。

2ST055 (図 146 - 3・4)

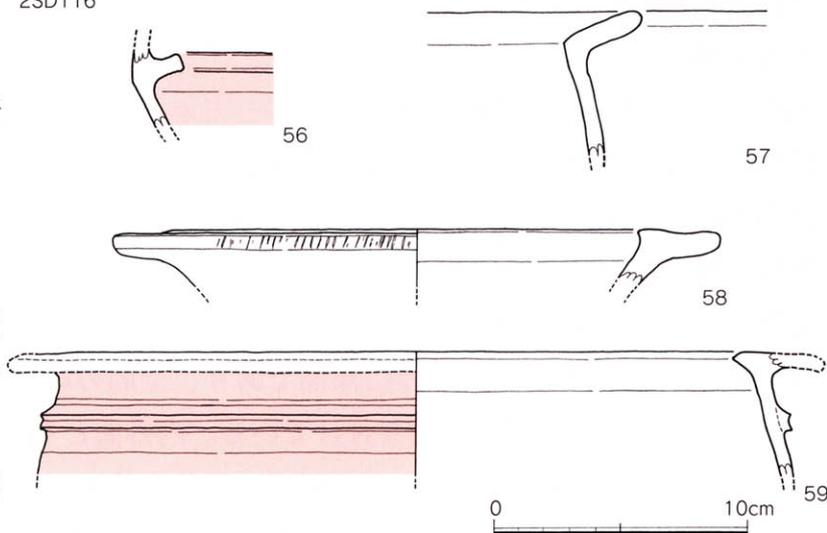


図145. 溝出土遺物実測図(4) (S=1/3)

弥生土器

甕 (3・4) 3は小型の甕 1bである。口縁部から胴部中位が全周の約1/3、胴部下半から底部が全周の約2/3ほど残存している。外面には縦・斜方向の刷毛目調整が施されている。内面はナデ仕上げられ、内面の底部付近には指頭圧痕が確認される。底部の断面観察から、若干

上げ底状の基底部上に丸底状の胴部下半を接合することで底部を製作していることがわかる。4は小型の甕 1aである。口縁部から底部まで残存するが、胴部下半から底部の全周約1/3を欠損している。外面には縦方向の刷毛目調整、内面にはナデ調整が施され、内面の胴部下半には刷毛目調整工具の起点痕が観察される。  
【形成時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式古段階) である。

c-2. 甕棺墓【中型棺】

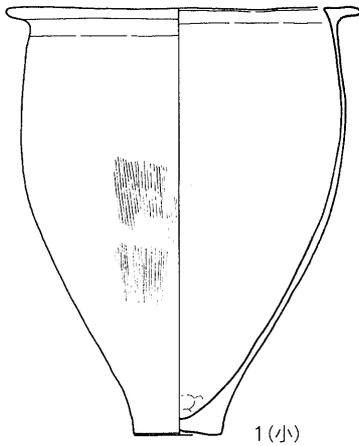
2ST045 (図 146 - 5・

6)

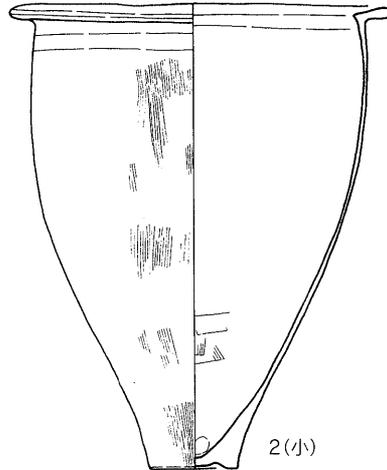
弥生土器

甕 (5・6) 5は中型の甕 1aである。口縁部から底部まで残存するが、胴部の全周約1/3程度を欠損している。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面には横

2ST050

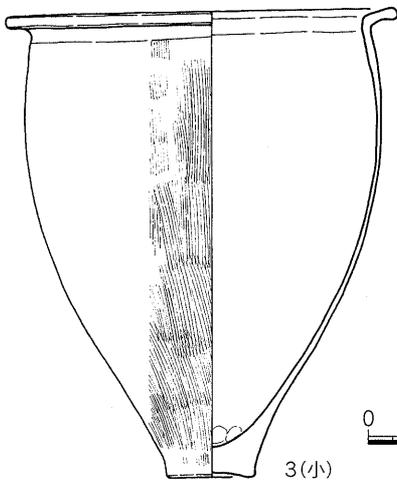


1(小)



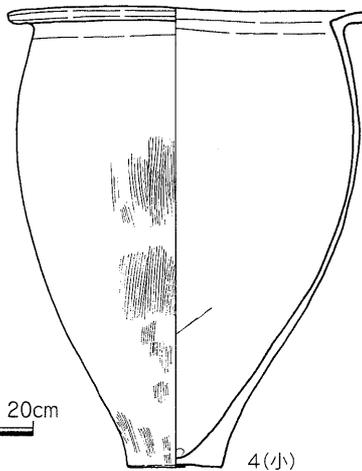
2(小)

2ST055



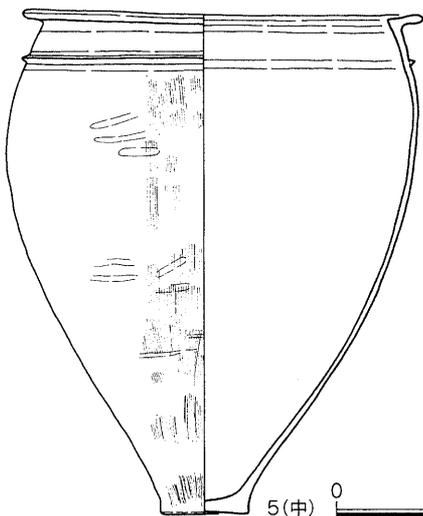
3(小)

0 20cm



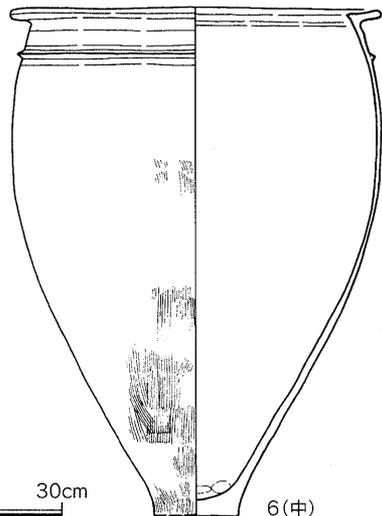
4(小)

2ST045



5(中)

0 5cm



6(中)

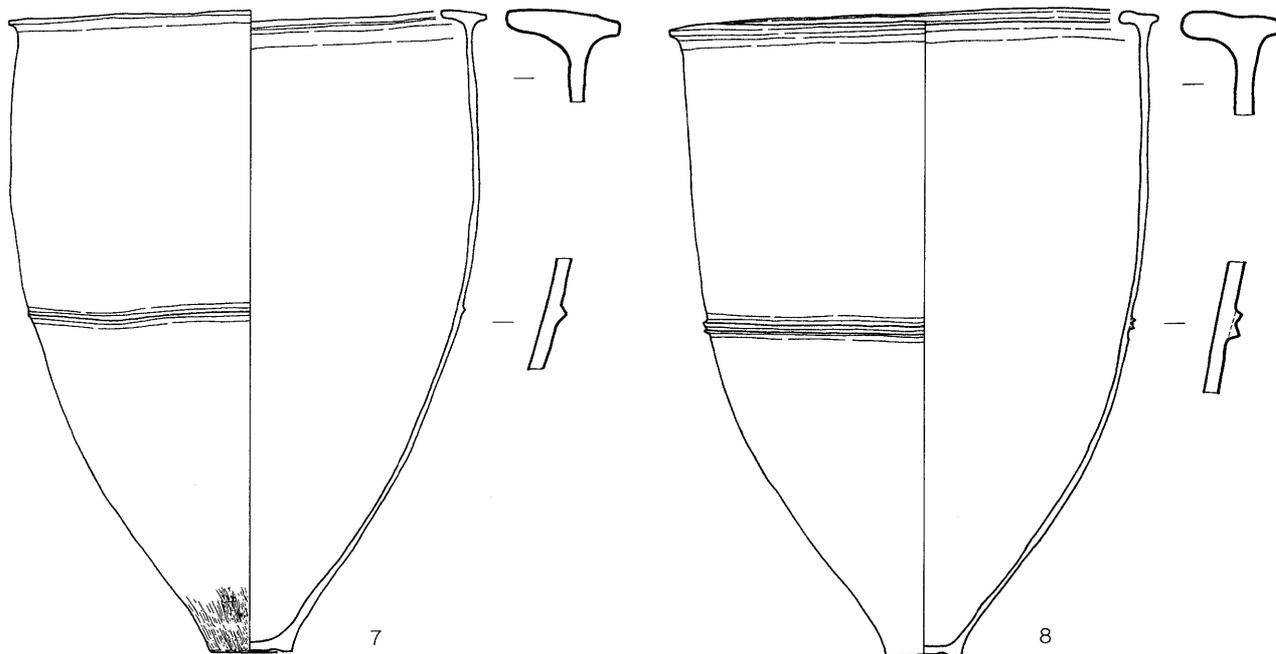
0 30cm

図146. 甕棺墓出土遺物実測図(1) (S=1/4・1/6・1/8)

方向のタタキ痕が観察されることから、棒状工具によるタタキ成形の後、縦方向の刷毛目調整で仕上げたものと思われる。内面はナデ仕上げられている。6は中型の甕1aである。口縁部から底部まで残存しており、ほぼ完形である。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面には縦方向の刷毛目調整が施されたと思われるが、胴部上半は摩滅のため、刷毛目は残存していない。内面はナデ仕上げと思われる。胴部外面下半には煤が付着している。  
**【形成時期】** 中期前半（須玖I式新段階）である。

**c-3. 甕棺墓【大型棺】**

2ST060



2ST065

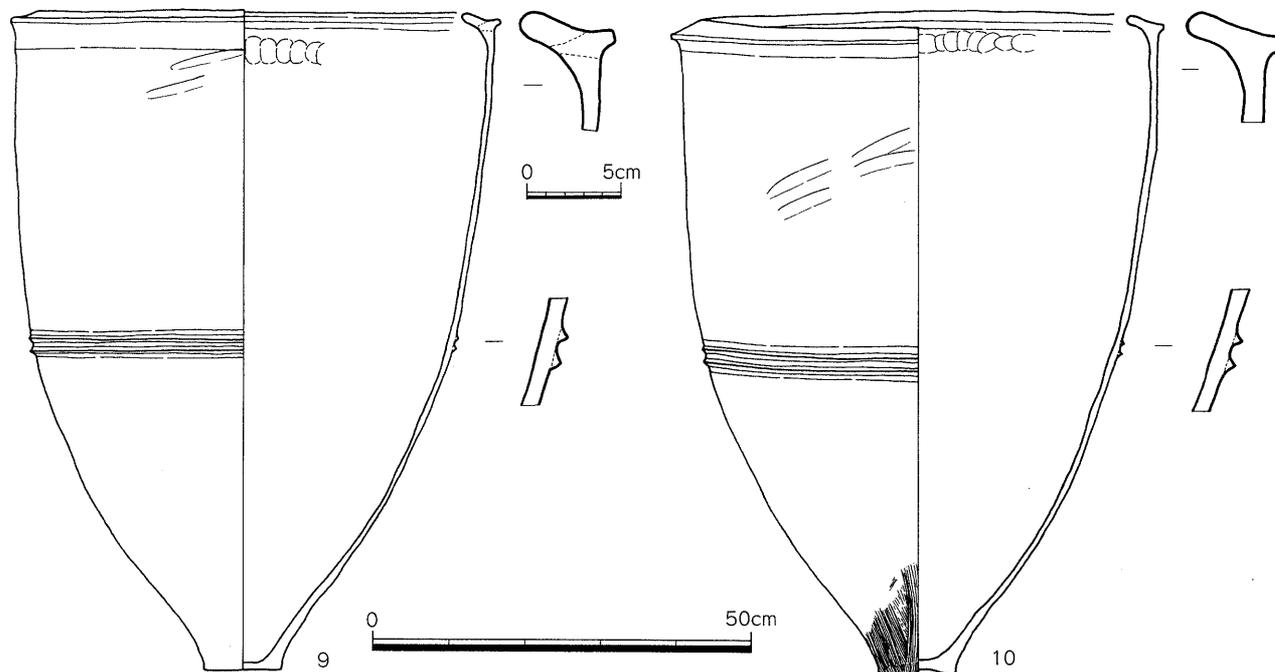


図147. 甕棺墓出土遺物実測図(2) (S=1/4・1/10)

**2ST060** (図 147 - 7・8)**弥生土器**

**甕** (7・8) 7は大型の甕棺である。ほぼ完形である。胴部中位には突出度の低い三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面ともナデ仕上げだが、外面の底部付近には縦方向の刷毛目が残存している。8は大型の甕棺である。完形である。胴部中位には断面M字状突帯を貼り付けている。内外面ともにナデ仕上げている。

【形成時期】 中期前半 (K II c式) である

**2ST065** (図 147 - 9・10)**弥生土器**

**甕** (9・10) 9は大型の甕棺である。ほぼ完形である。胴部中位にはいわゆる作り一条見かけ二条の突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面の口縁部下には棒状工具によるタタキ痕が観察され、内面には指頭圧痕が確認される。胴部内外面はナデ仕上げている。10は大型の甕棺である。ほぼ完形である。胴部中位には二条の三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。胴部外面には棒状工具によるタタキ痕が確認され、外面の底部付近には縦方向の刷毛目が残存している。内面はナデ仕上げられているが、口縁部付近には指頭圧痕が観察される。

【形成時期】 中期前半 (K II c式) である。

**d. 土坑****2SK005** (図 148 - 1)**弥生土器**

**甕** (1) 甕 1aの口縁部から胴部下半であり、全周の約1/2ほどが残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。内外面ともにナデ調整であり、内面には指頭圧痕が残存する。外面の口縁部と胴部下半には煤、内面の胴部下半にはコゲが付着している。

【埋没時期】 中期前半 (須玖 I 式新段階) である。

**2SK009** (図 148 - 2)**弥生土器**

**甕** (2) 甕 1aの口縁部片である。ヨコナデによって口縁部を整形している。

【埋没時期】 中期前半 (須玖 I 式新段階) である。

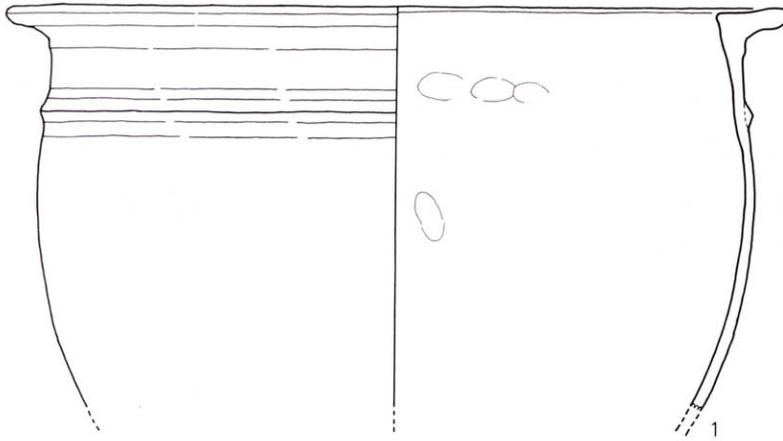
**2SK014** (図 148 - 3・4)**弥生土器**

**甕** (3・4) 3・4は甕 1bの口縁部片である。

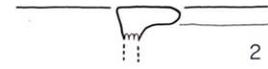
**2SK014 茶色土** (図 148 - 5・6)**弥生土器**

**甕** (5・6) 5は甕の口縁部から胴部上半であり、全周の約1/4程度が残存している。内外面ともに斜方向の刷毛目調整が施されるが、外面はナデ仕上げられている。外面には煤が付着している。6は甕の胴部片である。外面は丹塗りであり、縦方向の刷毛目が部分的に残存している。この土器片には焼成時の剥離痕跡が二ヶ所みられ、さらに剥離した後に黒斑が形成され

2SK005



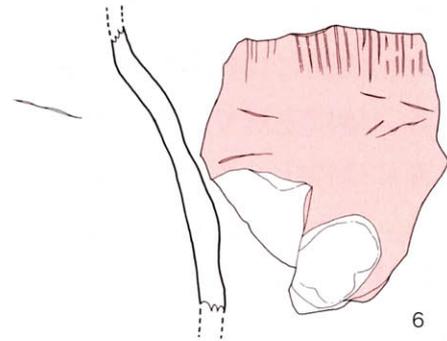
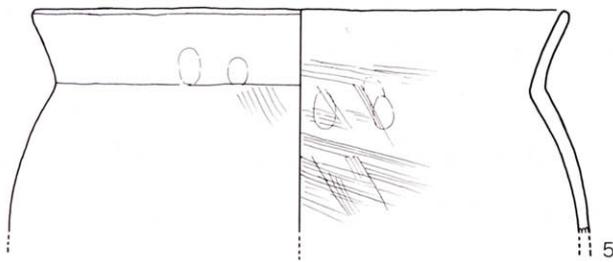
2SK009



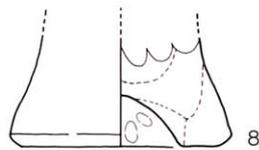
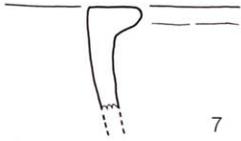
2SK014



2SK014茶色土



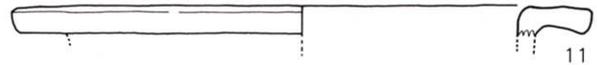
2SK016



2SK031



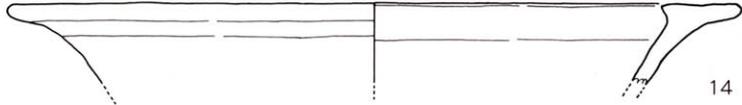
2SK049



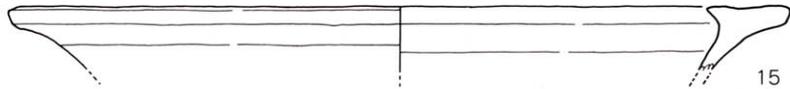
2SK062



2SK122



2SK128



2SK129



図148. 土坑出土遺物実測図(S=1/3)

ている。

【埋没時期】5が出土していることから、弥生時代後期と考えられる。

2SK016 (図148-7・8)

弥生土器

**甕** (7・8) 7は甕1aの口縁部片である。8は甕底部であり、全周の約1/2が残存している。外面・底面ともにナデ仕上げられている。

【形成・埋没時期】 中期初頭（城ノ越式）である。

**2SK031** (図148-9)

**弥生土器**

**甕** (9) 甕1aの口縁部片である。

【埋没時期】 中期前半（須玖I式新段階）である。

**2SK049** (図148-10・11)

**弥生土器**

**甕** (10・11) 10・11は甕1bの口縁部片である。

【埋没時期】 中期後半（須玖II式古段階）である。

**2SK062** (図148-12・13)

**弥生土器**

**壺×高坏** (12) 壺1aあるいは高坏aの口縁部片である。

**甕** (13) 甕1aの口縁部片である。

【埋没時期】 中期前半（須玖I式）である。

**2SK122** (図148-14)

**弥生土器**

**壺×高坏** (14) 壺1aあるいは高坏aの口縁部であり、全周の約1/8が残存している。

【形成・埋没時期】 中期前半（須玖I式）である。

**2SK128** (図148-15)

**弥生土器**

**壺×高坏** (15) 壺1aあるいは高坏aの口縁部であり、全周の約1/8が残存している。

【形成・埋没時期】 中期前半（須玖I式）である。

**2SK129** (図148-16)

**弥生土器**

**甕** (16) 甕の口縁部片である。口縁部はタタキによる成形後、ナデ仕上げられている。内面にはナデ調整の痕跡や指頭圧痕が観察される。外面には煤が付着している。

【埋没時期】 弥生時代後期である。

**e. その他の遺構** (小穴、凹み)

**2SX003** (図149-1・2)

**弥生土器**

**甕** (1) 甕1aの口縁部片である。ヨコナデにより口縁部を整形している。

**器台** (2) 器台の筒部から裾部である。内外面ともにナデ仕上げと思われる。

**2SX004** (図149-3)

**弥生土器**

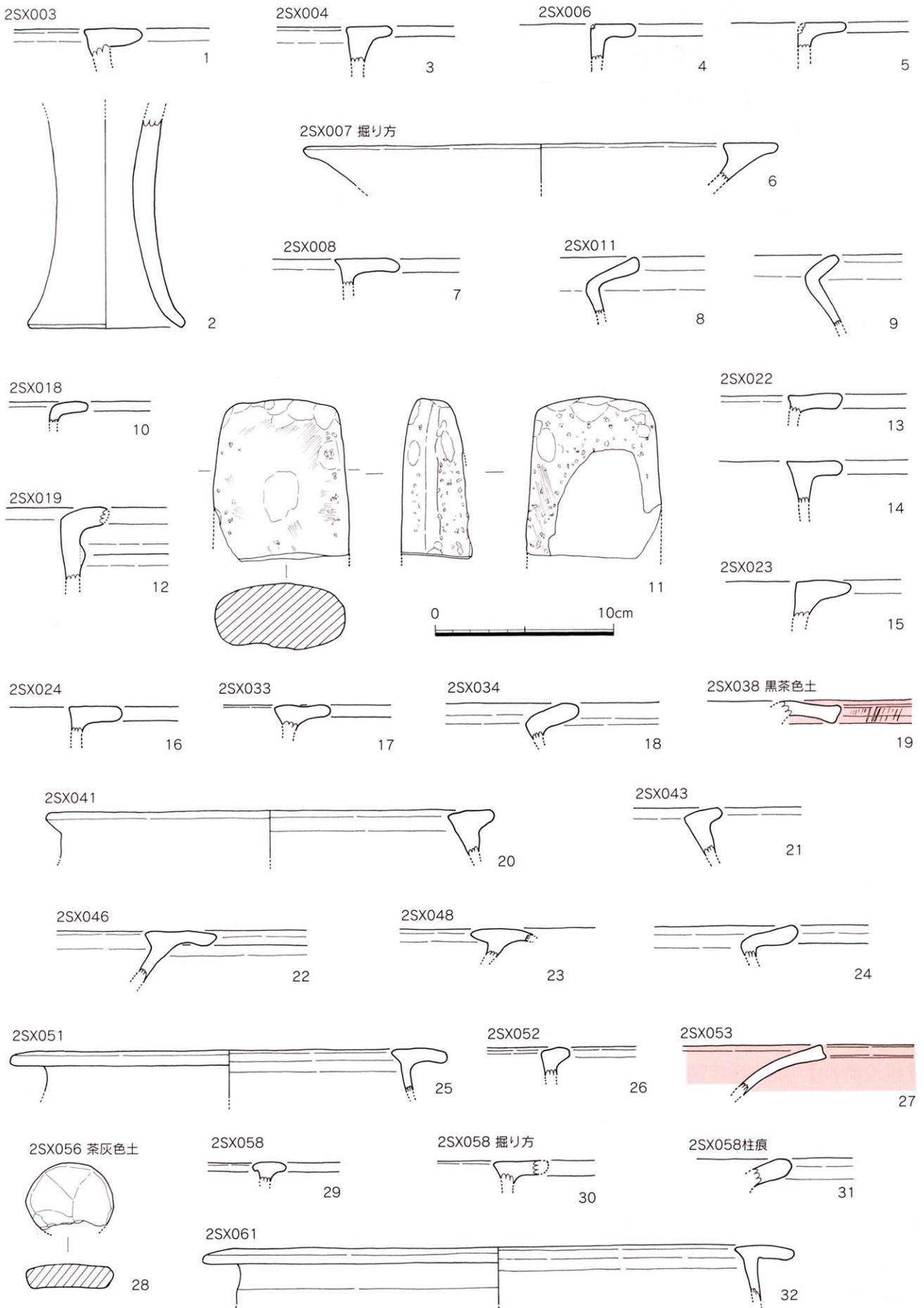


図149. その他の遺溝出土遺物実測図(1) (S=1/3)

甕 (3) 甕 1a の口縁部片である。

2SX006 (図 149 - 4・5)

弥生土器

甕 (4・5) 4・5 は甕 1a の口縁部片である。4 の外面には煤が付着している。

2SX007 (図 149 - 6)

弥生土器

高坏 (6) 高坏 a の口縁部片である。口縁部をヨコナデによって整形している。

2SX008 (図 149 - 7)

弥生土器

甕 (7) 甕 1a の口縁部片である。口縁端部が若干垂れ下がっている。

2SX011 (図 149 - 8・9)

弥生土器

甕 (8・9) 8・9 は甕 1b の口縁部片である。8 には煤が付着している。

2SX018 (図 149 - 10・11) 11 全体

弥生土器

甕 (10) 甕 1b の口縁部片である。

石製品

石斧 (11) 玄武岩製の石斧である。太形蛤刃石斧とも考えられるが、断面はやや方形気味の長楕円形を呈する。基部端にやや剥離が見られる。

2SX019 (図 149 - 12)

弥生土器

甕 (12) 甕 1a の口縁部片である。口縁部下には突出度の低い三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。

2SX022 (図 149 - 13・14)

弥生土器

甕 (13・14) 13・14 は甕 1a の口縁部片である。ともに口縁端部を丸くおさめている。

2SX023 (図 149 - 15)

弥生土器

甕 (15) 甕 1a の口縁部片である。

2SX024 (図 149 - 16)

弥生土器

甕 (16) 甕 1a の口縁部片である。一部、赤化している部分がある。

2SX033 (図 149 - 17)

弥生土器

甕 (17) 甕 1a の口縁部片である。口縁部上面はヨコナデにより若干凹んでいる。

2SX034 (図 149 - 18)

**弥生土器**

甕 (18) 甕 1b の口縁部片である。

**2SX038 黒茶土** (図 9 - 19)

**弥生土器**

壺 (19) 壺 1a の口縁部片である。口縁端部はヨコナデにより平坦化され、刻み目が入れている。内外面ともに丹塗りである。

**2SX041** (図 149 - 20)

**弥生土器**

甕 (20) 甕 1a の口縁部片である。煤が付着している。

**2SX043** (図 149 - 21)

**弥生土器**

甕 (21) 甕 1a の口縁部片である。器面が摩滅しており、調整等は不明である。

**2SX046** (図 149 - 22)

**弥生土器**

高坏×壺 (22) 高坏 a あるいは壺 1a の口縁部片である。

**2SX048** (図 149 - 23・24)

**弥生土器**

高坏×壺 (23) 高坏 a あるいは壺 1a の口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

甕 (24) 甕 1b の口縁部片である。

**2SX051** (図 149 - 25)

**弥生土器**

甕 (25) 甕 1a の口縁部片であり、全周の約 1 / 9 程度が残存している。

**2SX052** (図 149 - 26)

**弥生土器**

甕 (26) 甕 1a の口縁部片である。

**2SX053** (図 149 - 27)

**弥生土器**

壺 (27) 壺 1b の口縁部片である。口縁端部はヨコナデによりやや凹みを形成している。内外面ともに丹塗りである。

**2SX056 茶灰色土** (図 149 - 28)

**土製品**

円盤状土製品 (28) 円盤状土製品であるが、約 1 / 3 程を欠損している。上面には煤かとも思われる痕跡が確認される。

**2SX058** (図 149 - 29)

**弥生土器**

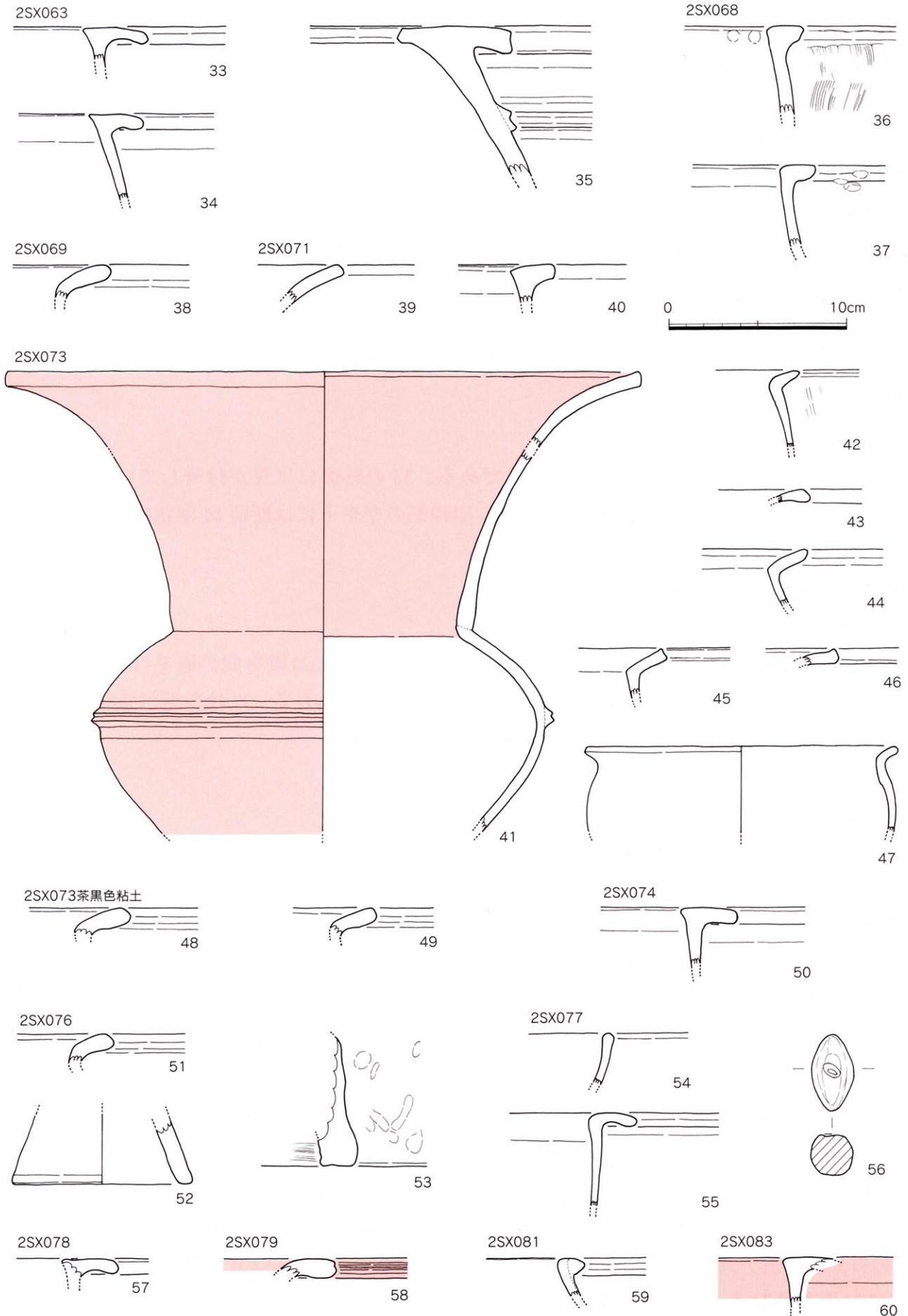


図150. その他の遺溝出土遺物実測図(2) (S=1/3)

甕 (29) 甕 1a の口縁部片である。

2SX058 (図 149 - 30)

弥生土器

甕 (30) 甕 1a の口縁部片だが、口縁端部を欠損している。

2SX058 柱痕 (図 9 - 31)

弥生土器

甕 (31) 甕 1b の口縁部片である。小破片のため、詳細は不明である。

2SX061 (図 149 - 32)

弥生土器

甕 (32) 甕 1a の口縁部片である。

2SX063 (図 150 - 33 ~ 35)

弥生土器

甕 (33 ~ 35) 33・34 は甕 1a の口縁部片である。33 の外面には煤が付着している。35 はいわゆる丸みをおびた甕棺の口縁部片である。口縁部のやや下には断面 M 字状突帯をヨコナデにより貼り付けている。

2SX068 (図 150 - 36・37)

弥生土器

甕 (36・37) 36・37 は甕 1a の口縁部片である。36 の外面には縦方向の刷毛目調整、内面にはナデ調整が施されており、口縁部内面には指頭圧痕が確認される。37 は器面が摩滅しており、詳細等は不明である。36・37 の外面には煤が付着している。

2SX069 (図 150 - 38)

弥生土器

甕 (38) 甕 1b の口縁部片である。

2SX071 (図 150 - 39・40)

弥生土器

壺 (39) 壺 1b の口縁部片である。

甕 (40) 甕 1a の口縁部片である。

2SX073 (図 150 - 41 ~ 47)

弥生土器

壺 (41) 壺 1b の口縁部から胴部下半であり、全周の約 1 / 3 程度が残存している。胴部は扁平であり、胴部最大径部位には断面 M 字状突帯を貼り付けている。外面全面と口頸部内面には丹塗りが施されている。

甕 (42 ~ 47) 42 ~ 44・47 は甕 1b の口縁部であり、47 は全周の約 1 / 2 程度が残存している。42 の外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。45・46 は甕 1c の口縁部片である。

2SX073 茶黒色粘土 (図 150 - 48・49)

弥生土器

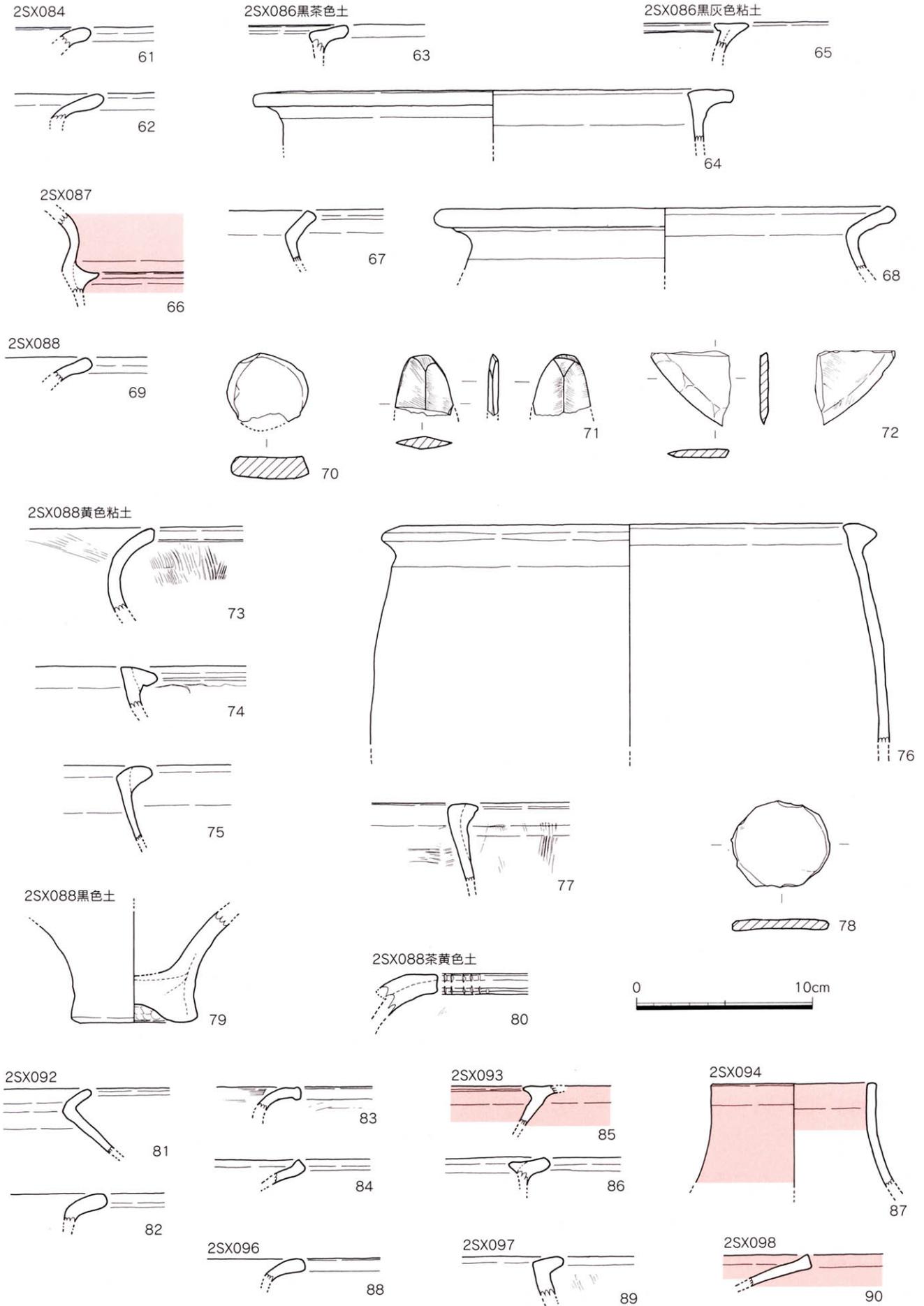


図151. その他の遺溝出土遺物実測図(3) (S=1/3)

甕 (48・49) 48・49は甕1bの口縁部片である。小片のため詳細は不明である。

2SX074 (図150-50)

弥生土器

甕 (50) 甕1aの口縁部片である。

2SX076 (図150-51~53)

弥生土器

甕 (51) 甕1bの口縁部片である。口縁部には煤が付着している。

器台 (52) 器台の裾部であり、全周の約1/5程度が残存している。器面風化が著しく、調整等は不明である。

支脚 (53) 支脚の裾部片である。外面には指頭圧痕が確認され、ナデ仕上げている。内面には横方向の刷毛目調整が施されている。

2SX077 (図150-54~56)

弥生土器

鉢 (54) 鉢dの口縁部片である。

甕 (55) 甕1bの口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

土製品

投弾 (56) 土製投弾である。表面中央部には楕円形の凹みが形成されているが、意味・用途などは不明である。

2SX078 (図150-57)

弥生土器

甕 (57) 甕1aの口縁部片である。

2SX079 (図150-58)

弥生土器

甕 (58) 甕2bの口縁部片である。口縁端部には刻み目が入れられ、その後、横方向に沈線を一列めぐらせている。内外面ともに丹塗りである。

2SX081 (図150-59)

弥生土器

甕 (59) 甕1aの口縁部片である。断面観察から、口縁部上端まで粘土紐を積み上げた後、新たに外面側に粘土紐を貼り付けることで口縁部を成形していることがわかる。

2SX083 (図150-60)

弥生土器

甕 (60) 甕2aの口縁部片である。口縁端部が欠損している。内外面には丹塗りが施されている。

2SX084 (図151-61・62)

弥生土器

甕 (61・62) 61・62は甕1bの口縁部片である。

2SX086 黒茶色土 (図151-63・64)

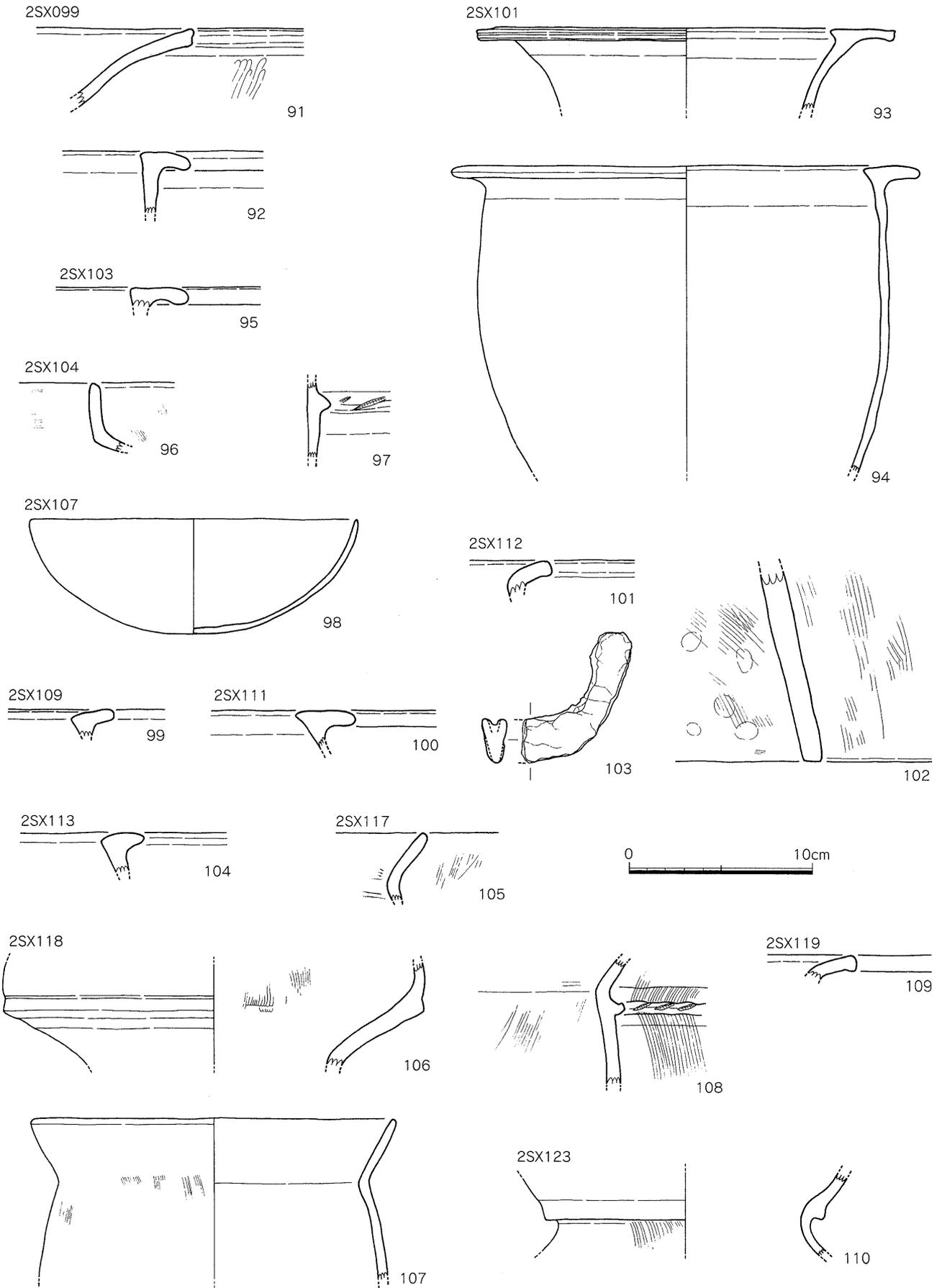


図152. その他の遺溝出土遺物実測図(4) (S=1/3)

### 弥生土器

甕 (63・64) 63・64 は甕 1a の口縁部であり、64 は全周の約 1 / 7 が残存している。

2SX086 黒灰色粘土 (図 151 - 65)

### 弥生土器

壺 (65) 壺 1a の口縁部片である。

2SX087 (図 151 - 66 ~ 68)

### 弥生土器

壺 (66) 壺 3 の胴部片である。三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。外面は丹塗りである。

甕 (67・68) 67・68 は甕 1b の口縁部であり、68 は全周の約 1 / 8 が残存している。68 の外面には煤、内面にはコゲが付着している。

2SX088 (図 151 - 69 ~ 72)

### 弥生土器

甕 (69) 甕 1b の口縁部片である。小片のため、詳細は不明である。

### 土製品

円盤状土製品 (70) 円盤状土製品である。一部欠損している。周囲を打ち欠くことによって円盤状に成形している。

### 石製品

石剣 (71) 粘板岩製の石剣の切先である。先端部分を研磨し、丸く仕上げている。再利用品であろうか。

石庖丁 (72) サヌカイト製の石庖丁である。外湾刃半月形を呈すると思われる。背面が剥離し、やや刃こぼれが見られる。

2SX088 黄色粘土 (図 151 - 73 ~ 78)

### 弥生土器

壺 (73) 壺 1b の口縁部片である。外面には縦方向、内面には斜方向の刷毛目調整が施されている。

甕 (74 ~ 77) 74・75・77 は甕 1a の口縁部片である。断面観察から、各個体ともに口縁部外面に新たに粘土紐を貼り付けることによって口縁部を成形している。77 の外面には縦方向、内面には横方向の刷毛目調整が施されている。76 は甕 1a の口縁部から胴部であり、全周の約 1 / 4 が残存している。内外面とも器面風化が著しく、調整等は不明である。

### 土製品

円盤状土製品 (78) 完形の円盤状土製品である。周囲を打ち欠くことで円盤状に成形している。

2SX088 黒色土 (図 151 - 79)

### 弥生土器

甕 (79) 甕の底部であり、全周の約 1 / 2 が残存している。底面には指頭圧痕が観察される。内面にはコゲが付着している。

**2SX088 茶黄土 (図 151 - 80)**

**弥生土器**

壺 (80) 壺 1b の口縁部片である。口縁端部の上端と下端にはそれぞれ刻み目を施している。

**2SX092 (図 151 - 81 ~ 84)**

**弥生土器**

壺 (81) 壺 2b の口縁部片である。器面風化が著しく、調整等は不明である。

甕 (82 ~ 84) 82・83 は甕 1b の口縁部片である。83 の口縁端部は肥厚しており、口縁部内面には横方向の刷毛目調整が施されている。82・83 ともに外面には煤が付着している。84 は甕 1c の口縁部片である。

**2SX093 (図 151 - 85・86)**

**弥生土器**

高坏 (85) 高坏 a の口縁部片である。内外面ともに丹塗りである。

甕 (86) 甕 1a の口縁部片である。

**2SX094 (図 151 - 87)**

**弥生土器**

筒形器台 (87) 筒形器台の口縁部であり、全周の約 1 / 3 が残存している。外面と口縁部内面には丹塗りが施されている。

**2SX096 (図 151 - 88)**

**弥生土器**

甕 (88) 甕 1b の口縁部片である。口縁端部には煤が付着している。

**2SX097 (図 151 - 89)**

**弥生土器**

甕 (89) 甕 1a の口縁部片である。外面には斜方向の刷毛目調整が施されている。

**2SX098 (図 151 - 90)**

**弥生土器**

壺 (90) 壺 1b の口縁部片である。口縁端部はヨコナデにより、平坦化されている。内外面ともに丹塗りである。

**2SX099 (図 152 - 91・92)**

**弥生土器**

壺 (91) 壺 1b の口縁部片である。外面には縦方向のミガキ調整が施されている。

甕 (92) 甕 1a の口縁部片である。

**2SX101 (図 152 - 93・94)**

**弥生土器**

壺 (93) 壺 1a の口縁部であり、全周の約 1 / 4 が残存している。

甕 (94) 甕 1a の口縁部から胴部下半であり、完存する。内外面ともに器面風化が著しく、調整等は不明である。

**2SX103** (図 152 - 95)

**弥生土器**

**甕** (95) 甕 1a の口縁部片である。

**2SX104** (図 152 - 96・97)

**弥生土器**

**壺** (96) 96 は壺 7 の口縁部片と思われる。内外面ともに器面風化が著しいが、刷毛目が若干確認される。

**甕** (97) 97 は甕の胴部片である。三角突帯をヨコナデにより貼り付け、突帯上には刷毛目調整工具による斜方向の刺突文が施されている。

**2SX107** (図 152 - 98)

**土師器**

**丸底坏** (98) 丸底坏の口縁部から底部であり、全周の約 1 / 2 が残存している。器面風化が著しく、調整等については不明である。

**2SX109** (図 152 - 99)

**弥生土器**

**甕** (99) 甕 1a の口縁部片である。

**2SX111** (図 152 - 100)

**弥生土器**

**甕** (100) 甕 1a の口縁部片である。

**2SX112** (図 152 - 101 ~ 103)

**弥生土器**

**甕** (101) 甕 1b の口縁部片である。小片のため、詳細は不明である。

**器台** (102) 器台の裾部片である。内外面ともに刷毛目調整が施されている。

**鉄製品**

**鋤先** (103) 鉄製の U 字形の鋤先であり、右耳側のみが残存している。錆がひどく、刃部や V 字溝なども形跡程度しか観察できない。

**2SX113** (図 152 - 104)

**弥生土器**

**甕** (104) 甕 1a の口縁部片である。

**2SX117** (図 152 - 105)

**弥生土器**

**甕** (105) 甕の口縁部片である。内外面ともに刷毛目調整が施されている。

**2SX118** (図 152 - 106 ~ 108)

**弥生土器**

**壺** (106) 壺 3 の口頸部であり、全周の約 1 / 5 が残存している。口縁部下には三角突帯を貼り付けている。外面は器面風化が著しく、調整は不明だが、内面には縦方向の刷毛目調整が施

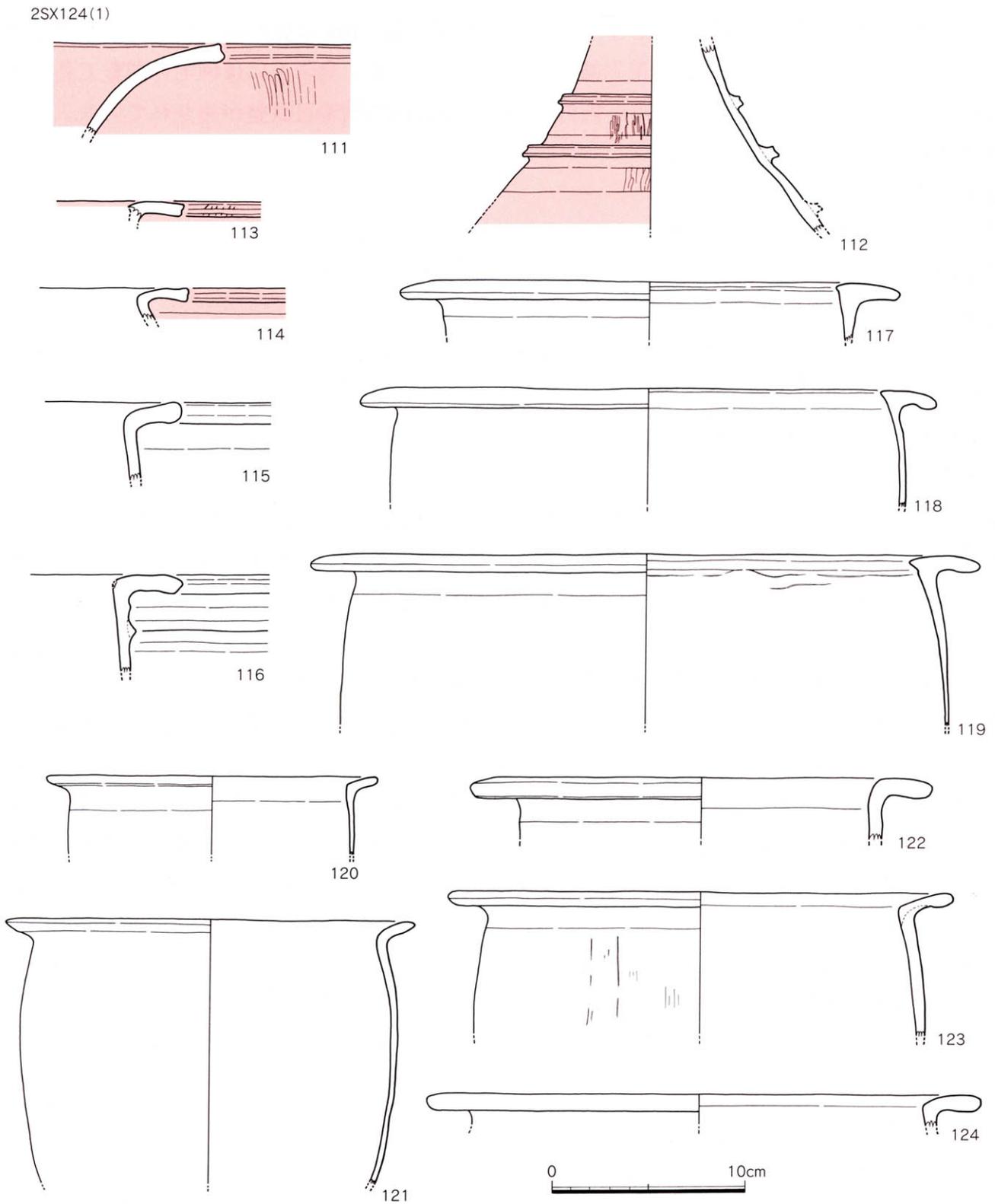


図153. その他の遺溝出土遺物実測図(5) (S=1/3)

されている。

**甕 (107・108)** 107は甕の口縁部から胴部上半であり、全周の約1/5が残存している。胴部内外面ともに、刷毛目調整の後、ナデ仕上げられている。108は甕の胴部片ある。断面コ字形の突帯を貼り付けているが、突帯先端が上方を向いている。突帯上には刷毛目調整工具による斜方向の刻み目が入れている。内外面ともに縦方向の刷毛目調整が施されている。

**2SX119 (図 152 - 109)**

**弥生土器**

**甕 (109)** 甕 1b の口縁部片である。口縁端部が若干肥厚している。

**2SX123 (図 152 - 110)**

**古式土師器**

**壺 (110)** 壺 2 (畿内系二重口縁壺) の口縁部であり、全周の約1/5が残存している。頸部外面には縦方向の刷毛目調整が施されている。

**2SX124 (図 153・154 - 111 ~ 127)**

**弥生土器**

**壺 (111・112)** 111は壺 1b の口縁部片である。外面には縦方向のミガキ調整が施されている。内外面ともに丹塗りである。112は壺 4 の頸部であり、全周の約1/3が残存している。断面M字状突帯が間隔をあけて二条貼り付けられており、さらに下部には突帯の剥離した痕跡が認められることから、最低三条の突帯が貼り付けられていたことがわかる。外面には縦方向のミガキ調整、内面にはナデ調整が施されている。外面は丹塗りである。

**甕 (113 ~ 124)** 113・114は甕 2b の口縁部片である。113の口縁端部には縦方向の刻み目が入れた後、横方向に一条の沈線文がめぐらされている。113の内外面、114の外面は丹塗りである。117 ~ 119は甕 1a の口縁部から胴部上半であり、117は全周の約1/7、118は約1/5、119は約1/3が残存している。各個体ともに器面風化が著しく、調整等は不明である。117の外面には煤が付着している。115・116・120 ~ 124は甕 1b の口縁部から胴部である。

120は全周の約1/6、121は約1/4、122は約1/8、123は約1/4、124は約1/6が残存している。116は口縁部下に突出度の低い三角突帯をヨコナデにより貼り付けている。123の外面には

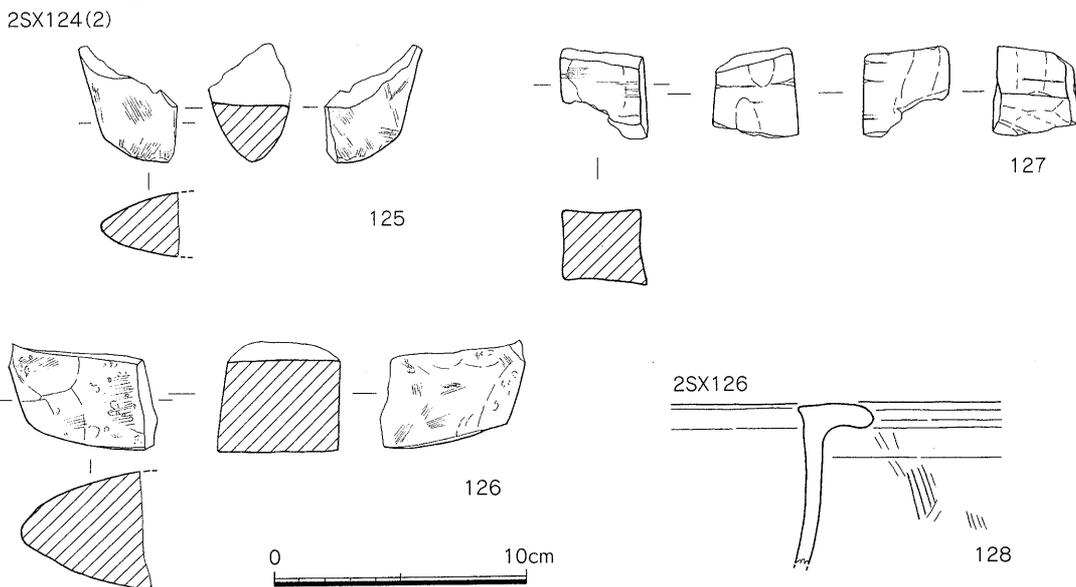


図154. その他の遺溝出土遺物実測図(6) (S=1/3)

縦方向の刷毛目調整を施した後、ナデ調整により仕上げている。120の外面には煤が付着している。

**石製品**

**石斧** (125・126) 125は玄武岩製の大型蛤刃石斧である。刃部のみであり126と同一個体であろうか。126は玄武岩製の大型石斧である。小片だが今山産の太形蛤刃石斧であろうか。

**砥石** (127) 細粒砂岩製の小型砥石である。全面使用し、側面から垂直に筋状痕が入っている。

**2SX126** (図154 - 128)

**弥生土器**

**甕** (128) 甕1aの口縁部片である。外面には縦・斜方向の刷毛目調整が施され、内面はナデ仕上げている。

**f. 土層**

**f-1. 表土** (図155 - 1)

**土製品**

**紡錘車** (1) 土製の紡錘車であるが、一部欠損している。

**f-2. 灰茶土** (図155 - 2・3)

**土製品**

**投弾** (2) 紡錘形の土製投弾である。側面を3分の1ほど欠損し、表面は風化が激しい。

**石製品**

**石庖丁** (3) サヌカイト製の大型石庖丁であり、外湾刃半月形を呈する。やや大きく回転穿孔を行うが、孔間が狭く両孔が切りあう。

**f-3. 茶色土** (図155 - 4)

**弥生土器**

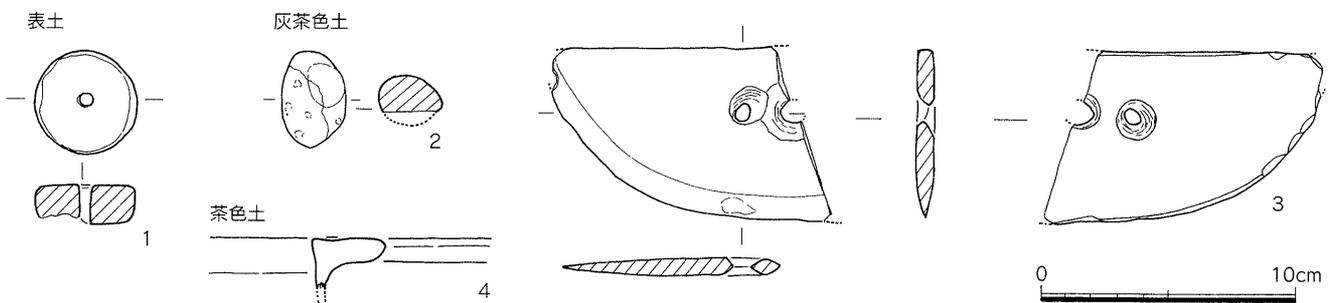


図155. 土層出土遺物実測図 (S=1/3)

**甕** (4) 甕1aの口縁部片である。ヨコナデによって口縁部を整形している。

**E. 小結**

当該調査区では、弥生中期の甕棺墓形成にはじまり、その後弥生中期後半に掘立柱建物や土坑、溝が形成されるなど集落化が観察できた。甕棺墓は小型棺2基、中型棺1基、大型棺2基が確認できた。先に調査を行った国分松本遺跡第7次調査成果を受けて、「造成土」形成の有無を調査視点として実施したが、当該調査区では7次調査時に認定した「造成土」として

の黄茶色土の分布は観察できていない。これは見かけである可能性もあり、「造成土」分布範囲が当該調査区まで達していなかったのか、後世の削平によって欠失しているのかは調査所見から導き出すことはできなかった。なお溝 2SD015 と前後関係を有する掘立柱建物 2SB020、2SB035 は、確認土層から前後が想定され、同一生活面で形成されたものである可能性は低いと考えられる。なお先述した甕棺墓は、当該調査区の西端部域にて確認でき、東域における確認はできなかった。このことから、甕棺墓域は国分松本遺跡第4次調査域から同遺跡第7次調査区の西半部を南へ通り、さらに今次調査区の西端部をかすめて、さらに南東方向へ展開するものと考えられる。今次調査区の今一つの視点としては、調査区が東西方向に位置しており、条里痕跡をとどめている可能性があったことから、先に実施した国分松本遺跡第4次調査で検出した溝 4SD022 との関連情報を得る目的があったが、結果として奈良期に位置づけられる遺構が確認できなかった。したがって条里痕跡に関する資料蓄積は今後委ねることになる。

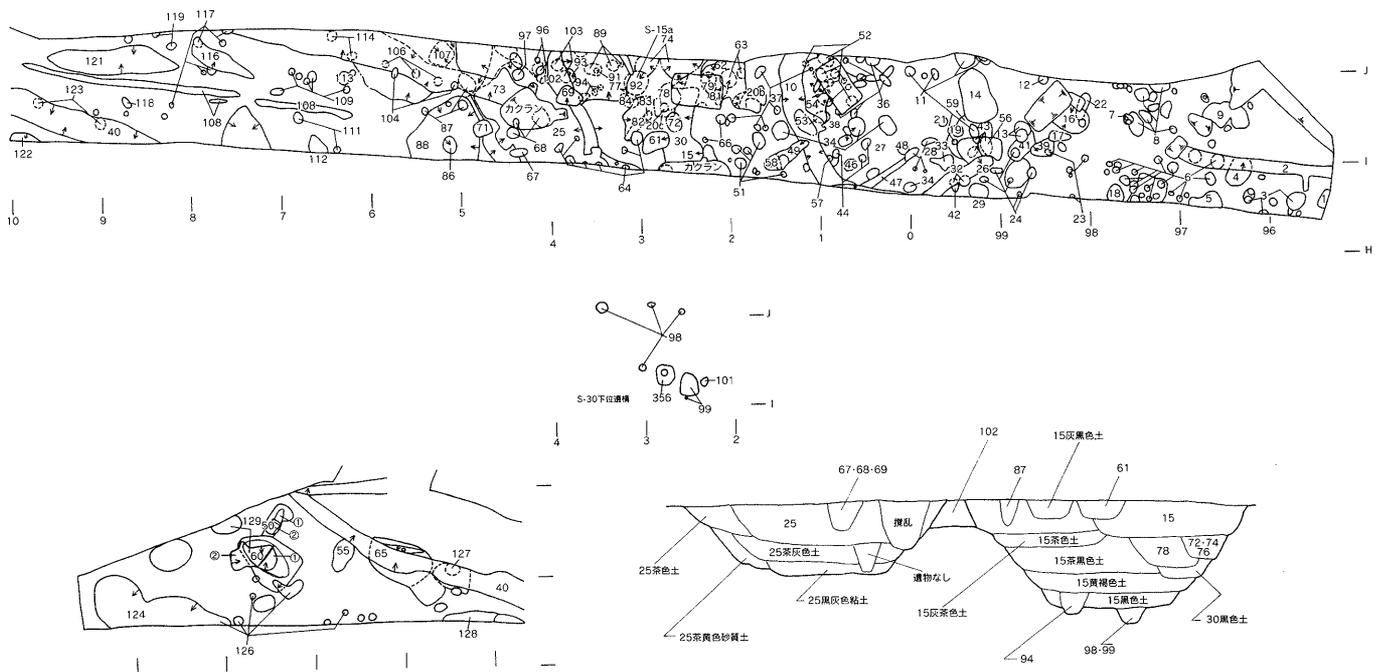


図156. 正尻遺跡 第2次調査 遺構略測図・土層模式図

## 6. 国分千足町遺跡第4次調査

### A. 調査に至る経過

調査地の地番は太宰府市国分3丁目429-1の一部にあたり、筑紫医師会・筑紫看護高等専修学校の敷地内で、対象面積は900㎡である。筑紫医師会および建築設計の(株)太陽設計より専修学校の体育館建設にあたり埋蔵文化財についての照会が平成5年5月21日にあった。同年6月11日に確認調査を実施したところ対象地の一部に遺構が残存していることが判明した。そのため筑紫医師会との協議を行い、設計変更等の後、破壊する部分の発掘調査を実施することとした。最終的な対象面積は330㎡、調査面積は150㎡で現地調査は平成5年7月8日～同年7月29日に行った。調査は城戸康利が担当した。

### B. 基本土層(図160)

調査地は四王寺山から御笠川へ下る斜面の、川に近い沖積段丘面に位置すると考えられる。医師会の敷地は北が一段高くそこに現建物がある。南側はそこから2m程度低いところに体育館建設予定地があった。北側の高まりは黄色の粘土層で鳥栖ローム、八女粘土と呼ばれるAso4火砕流の堆積物と考えられる。そのすぐ南は砂層があり水流による侵食と堆積があり遺構は存在しない。さらにその南に遺構面が現れる。砂層の堆積は旧耕作土上からあることから近現代の水害によることが考えられる。

調査区は現況地表面から客土、耕作土、床土を除去すると黒色粘質土の遺物包含層が現れる。南北両端では黒色粘質土はなくなり、北では上述の砂層が遺構面を直接覆う。南は黒色粘質土より古い堆積層があり、調査区南側に展開する流路に関連するものと考えられる。遺構面は灰色砂質土によりなっている。南部および東北側は遺構群と相前後する時期の流路であった。現地表面の標高は約31mで遺構面までの深さは約1.5mを測る。

### C. 遺構(図158)

#### a. 掘立柱建物(図157)

##### 4SB001

調査区北側で検出した、1×1間の建物跡である。掘り方は略方形から長円形を基本としているが、規則性はないようである。北東隅から反時計回りにaからdの記号を振っている。aは長辺0.9m、短辺0.7m、深さ0.3mである。砂っぽい埋土の中に黒色土があり柱痕跡と考えられる。bは長辺0.9m、短辺0.7m、深さ0.5mである。埋土は粘質の灰～黒色土であり、黒茶色の砂質土が柱痕跡と考えられる。cは長辺1.5m、短辺1.1m、深さ0.4mである。底面には礎板と考えられる0.5

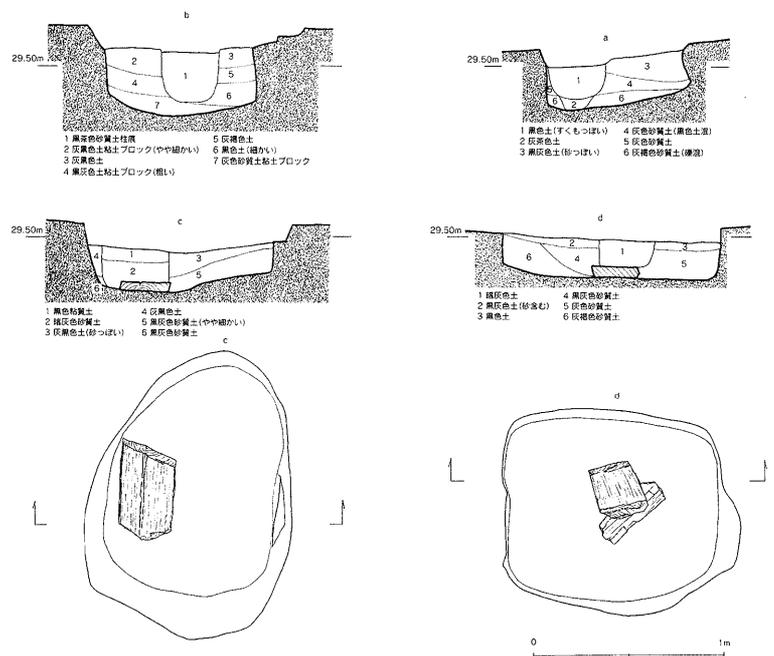


図157. 4SB001・柱穴土層・遺構略測図(S=1/40)

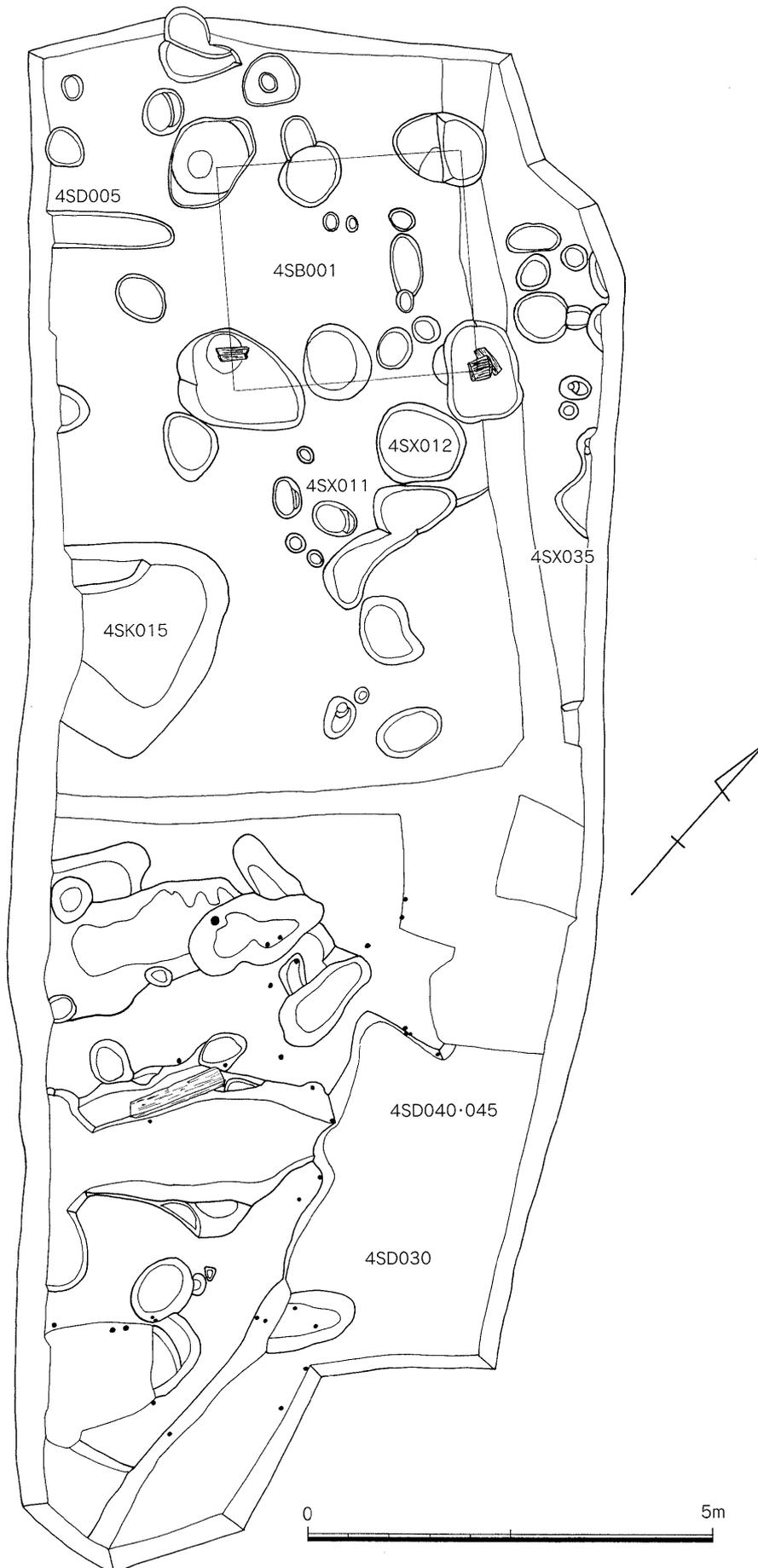


図158. 千足町遺跡 第4次調査 遺構配置図(S=1/80)

× 0.30m の板材が検出された。d は長辺 1.1m、短辺 1.1m の略方形を示し、深さは 0.3m を測る。底面には礎板と考えられる 0.3 × 0.25 m の板材を検出し、さらにその下に 0.4m × 0.15 m の枕木状の材木が敷いてあった。あわせて礎板と考えられる。柱はその痕跡からおおよそ径 0.3m と推定される。掘り方の深さから、遺構面は当時の生活面からかなり削平を受けていると考えられる。上部構造は不明である。

**b. 流路**

**4SD030**

調査区南側に広がる流路の跡と考えられる。黒灰色砂質土～灰褐色粗砂で構成されている。東から西または南に流れたと考えられる。深さは約 0.2m である。

**4SD040**

4SD030 の下で検出した。4SD030 とほぼ同じ場所にあるが、岸の形状が異なる。

るので別の遺構としたが、遺構の形成原因と過程は同様と考えられる。灰白色粗砂である。石剣片、流木もしくは木材を検出した。

**4SD045**

4SD040 の下で検出した。白色の粗い砂である。範囲は 4SD040 とほぼ同じである。深さは約 0.3m である。

**4SD050**

調査区の東側で検出した流路である。4SD030 ～ 045、4SB001 等に切られており、今回検出した遺構群の中ではもっとも古いものと考えられる。暗灰色砂の埋土を持ち遺物が散漫に出土した。北から南へと流れていたと考えられる。深さは約 0.4m である。

**c. 土坑**

**4SK015( 図 159)**

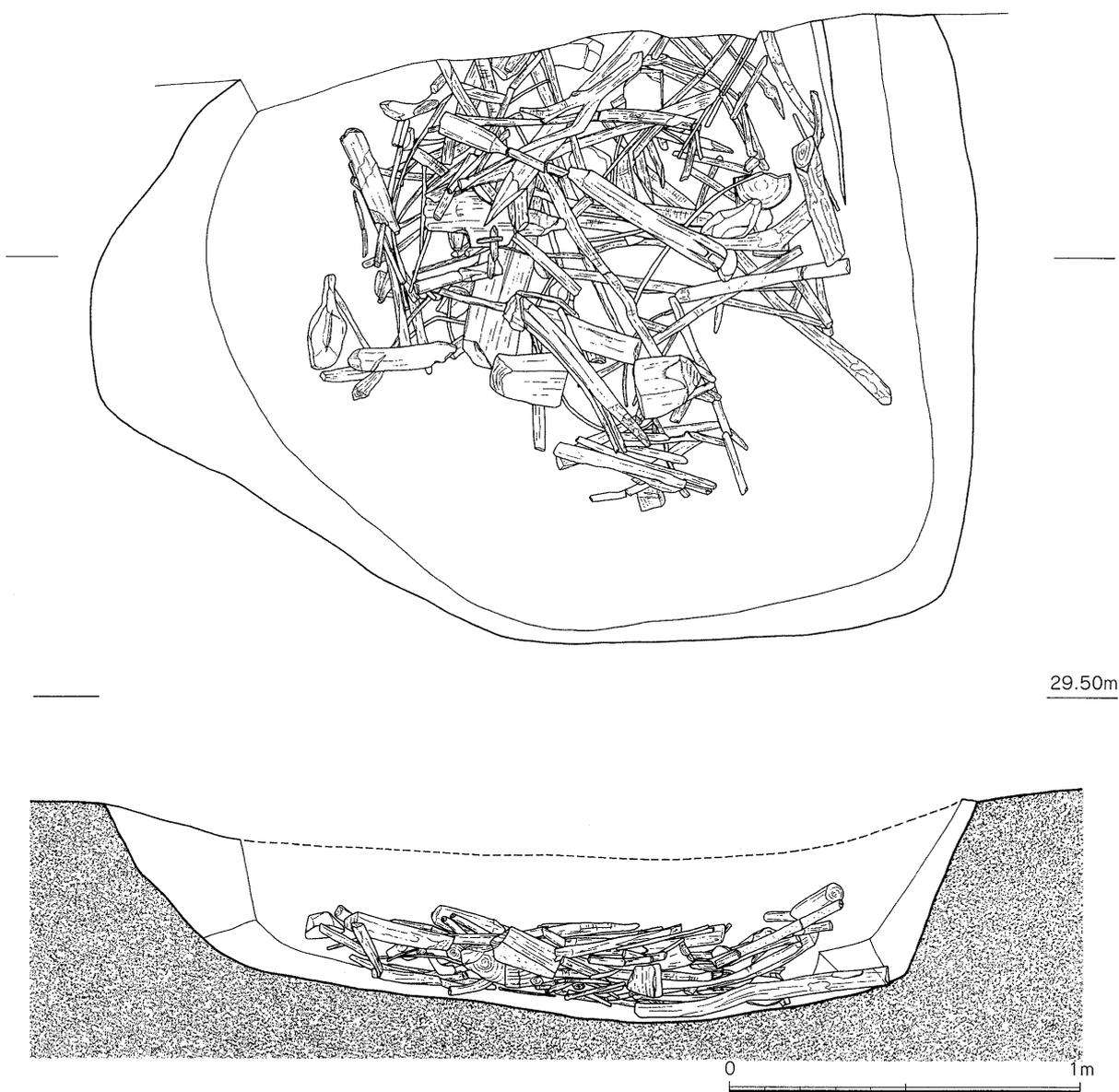


図159. 4SK015木材出土状況実測図 (S=1/20)

調査区中央西端で検出した土坑である。西側は調査区外に伸びていて正確な規模は不明である。北側は方形、南は円形を呈する。南北2.5m、東西1.8m以上、深さ0.7mを測る。南側の傾斜が緩く、こちら側からアプローチした可能性が考えられる。検出面から黒灰色粘土→黒色砂質土→黒色シルトと推移するが、黒色シルト内には多くの木材が杉の枝葉とともに多く出土した。木材は土坑の中心部に分布し、土圧で変形しているが、底面から約0.4mの厚さで検出した。木材は土坑の中心部に分布し、土圧で変形しているが、底面から約0.4mの厚さで検出した。加工していない枝や丸太も多いが、先端を尖らせた杭、部分的に焼けた材、材料に加工途中の割材、半製品、壊れた製品が入っていた。また、南側の黒灰色粘土上から丹塗りの脚付き壺が出土した。

d. その他の遺構

4SX011

4SB001の南で検出した長円形の小穴である。長辺0.5m、短辺0.3m、深さ0.3mを測る。柱材と考えられる径0.15mの円柱状の木材を検出した。

4SX012

4SB001のすぐ南で検出した略方形の小穴である。一辺0.8m、深さ0.4mを測る。柱材と考えられる径0.2mの円柱状の木材を検出した。

4SX035

調査区北東で検出した遺構である。東側は調査区外に伸びているが、長円形の長土坑になると考えられる。4SD050、S-16を切っている。たいへん残りが悪くひと掻きで消えてしまったが、塀など古代の遺物を出土した。

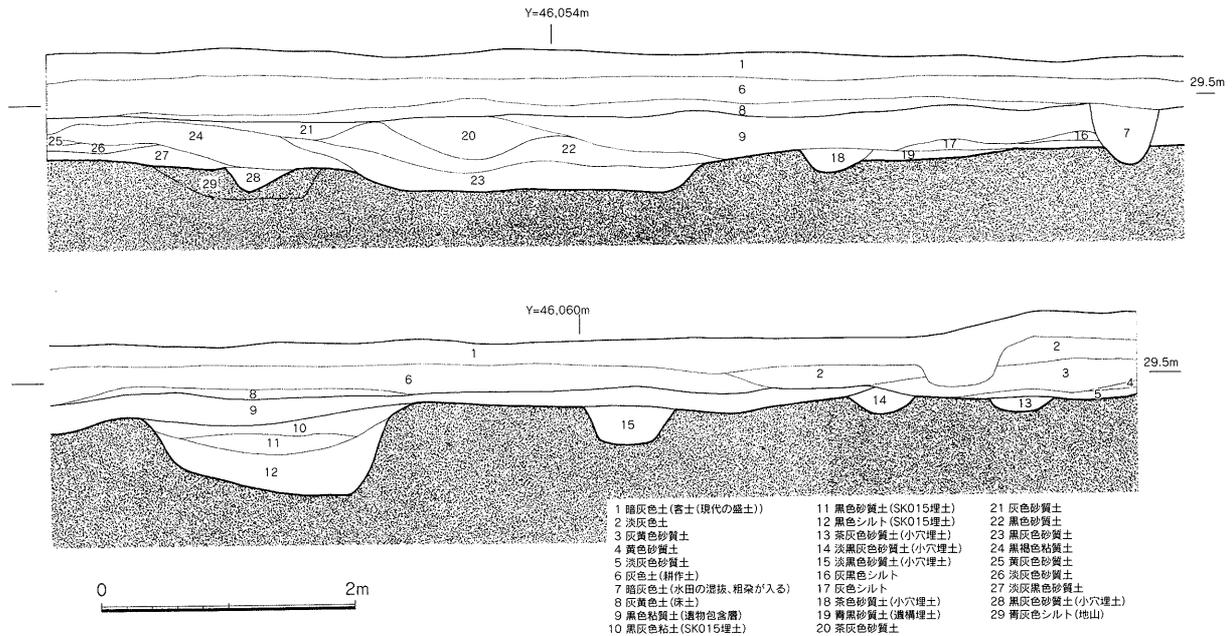


図160. 調査区南壁土層実測図(S=1/40)

D. 遺物

a. 掘立柱建物

4SB001a (図 161 - 1・2)

弥生土器

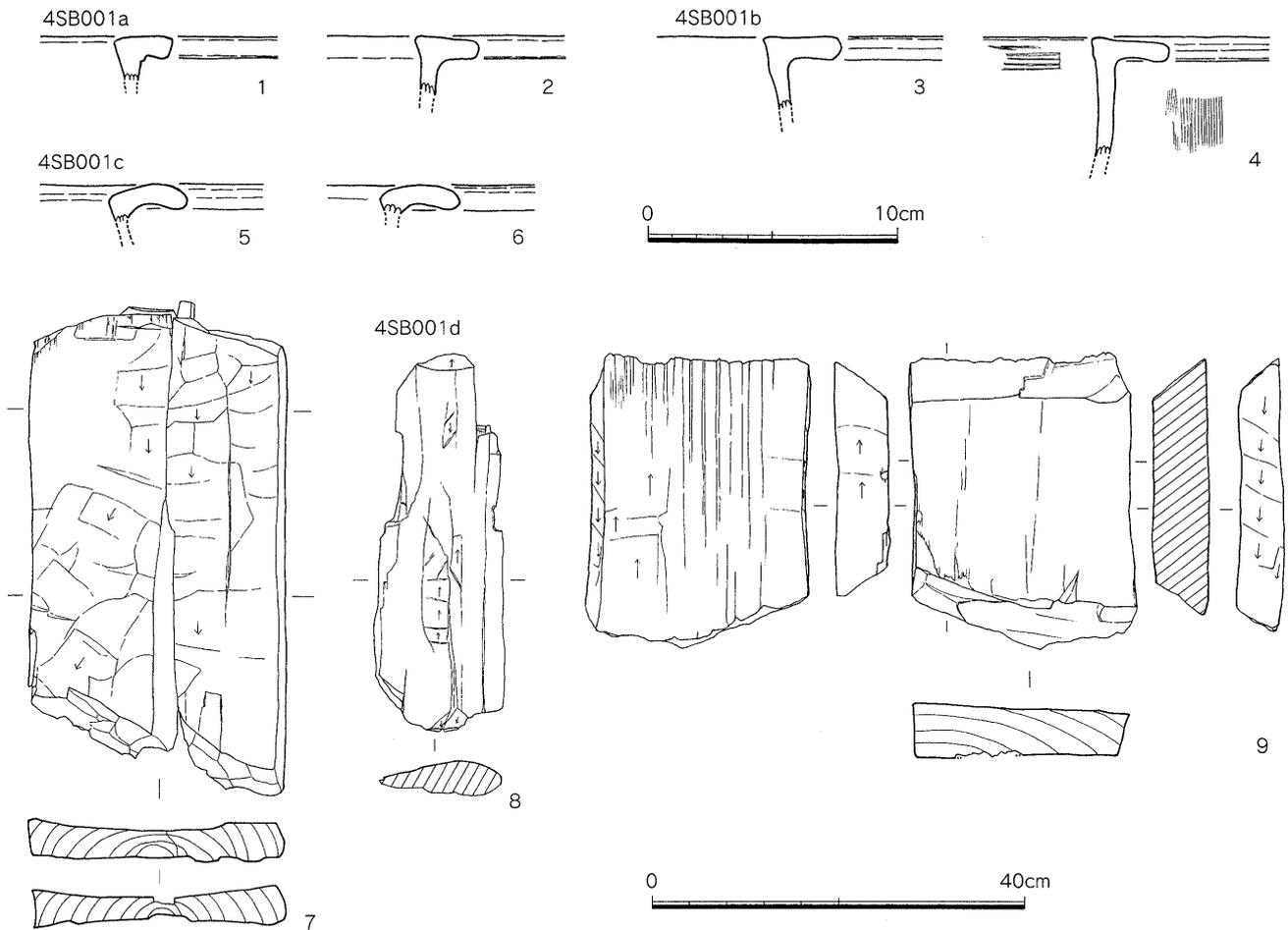


図161. 掘立柱建物出土遺物実測図 (S=1/3・1/8)

**甕 (1・2)** 1と2は小型の甕1aである。

**4SB001b (図161-3・4)**

**弥生土器**

**甕 (3・4)** 3と4は小型の甕1aである。3は内外面とも器面が摩耗しており調整は不明だが、4の胴部外面には縦方向の刷毛目、口縁部内面には横方向の刷毛目調整が認められる。また、4は橙色の強い色調である。

**4SB001c (図161-5～7)**

**弥生土器**

**甕 (5・6)** 5と6は小型の甕1bである。内外面とも器面は摩耗しており、調整などは不明である。

**木製品**

**礎板 (7)** 礎板である。下端部はやや欠損するが、ほぼ完形である。表面は中央部分が凹んでおり、柱を乗せた面と考えられる。また、表裏両面を平坦にするための加工痕が観察される。一方、側面の左側は削りによって調整されるが、右側は樹皮が残存しており加工していない。現状で長さ52.6cm、幅27.5cm、厚さ4.5cmである。

**4SB001d (図161-8・9)**

**木製品**

**礎板 (8・9)** 8・9は礎板である。8は出土状況から礎板と考えられる。表面には加工痕が観

察できるが、全面に及ばない。現状で長さ 40.5cm、幅 14.0cm、厚さ 3.7cm である。9 は完形であるが、横断面が台形を呈し、短辺側が上面となると思われる。両面、両側面とも削りによって平坦に調整されている。現状で長さ 31.5cm、幅 24.4cm、厚さ 6.2cm である。

【埋没時期】各柱穴の埋没時期が異なるが、4SB001c の出土土器から須玖Ⅱ式古段階と考えられる。

## b. 溝・流路

### 4SD005 (図 162 - 1 ~ 3)

#### 弥生土器

甕 (1 ~ 3) 1 ~ 3 は甕 1b の口縁部片である。口縁部はヨコナデによって調整されていると思われるが、器面は摩滅しており、調整などの詳細は不明である。

【埋没時期】甕より須玖Ⅱ式新段階である。

### 4SD021 (図 162 - 4)

#### 弥生土器

甕 (4) 4 は甕 1b の口縁部片である。内外面とも摩滅しており調整などは不明である。

【形成・埋没時期】須玖Ⅱ式古段階である。

### 4SD030 (図 162・163 - 5 ~ 29)

#### 弥生土器

鉢 (5) 鉢 d の口縁部片である。外面は摩滅しているが、内面には斜方向の粗い刷毛目とミガキ調整が観察できる。また、内外面ともに丹塗りである。

高坏 (6) 高坏 a の口縁部から坏部の破片である。内面には斜方向のナデの単位が観察できる。内外面ともに丹塗りである。

壺 (7 ~ 13) 7・9・11 は壺 1a の口縁部片である。7・11 は口縁端部に刻み目が施される。また、11 は内外面とも丹塗りであり、外面の口頸部には数条を単位とする縦方向の暗文を施している。9 の外面は縦方向の刷毛目調整であるが、口縁部上面にも刷毛目が観察できる。内外面ともに丹塗りであるが、薄い橙色のような色調である。8・10 は壺 2b の口縁部から胴部にかけての破片である。8 は口縁部に穿孔がなされ、外面は横方向のミガキ、内面には指オサエの痕跡が観察できる。外面と口縁部内面が丹塗りである。10 の外面は縦方向の刷毛目、内面は指オサエおよびナデが施される。口縁部が短く胴部が丸みをもつことから壺 2b として分類したが、外面には煤が付着し、火を使用する容器として使用されたと考えられることから、甕として分類すべきかもしれない。12 は壺 4 の頸部片である。突帯の先端部は欠損しているが、二条の三角突帯がヨコナデによって貼り付けられている。外面は横方向のミガキ、内面はナデで仕上げられており、外面には丹塗りも施される。13 は壺 3 の胴部片である。胴部のくびれ部にコ字突帯がヨコナデによって貼り付けられている。外面は横方向のミガキ、内面には指オサエの痕跡が観察できる。また、砂粒の少ない胎土を使用しており、外面は丹塗りである。

筒形器台 (14) 筒形器台の口縁部であり、全周の約 1/4 が残存している。外面には縦方向のミガキ、内面はヨコナデで調整されている。内外面ともに丹塗りである。

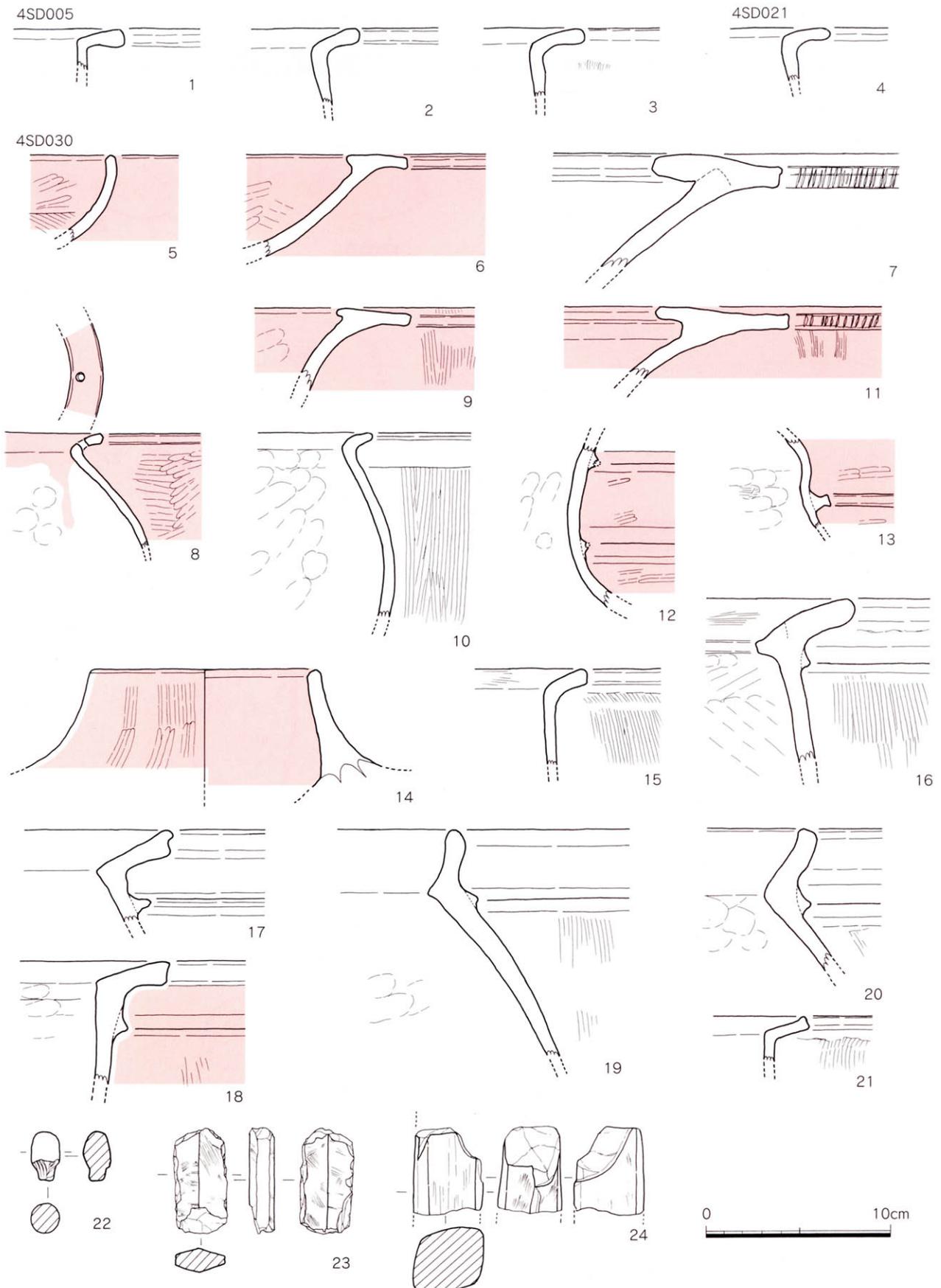


図162. 溝・流路出土遺物実測図(1) (S=1/3)

甕 (15 ~ 21) 15・16は甕 1b、18は甕 2b の口縁部片である。16・18は口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。また、15・18の口縁端部は平坦な面をもつように意識

的にヨコナデが施されている。一方、16は口縁部内面をヨコナデによって平坦な面を形成しており、珍しい形態である。15・16の外面には縦方向、口縁部内面には横方向の刷毛目が施され、

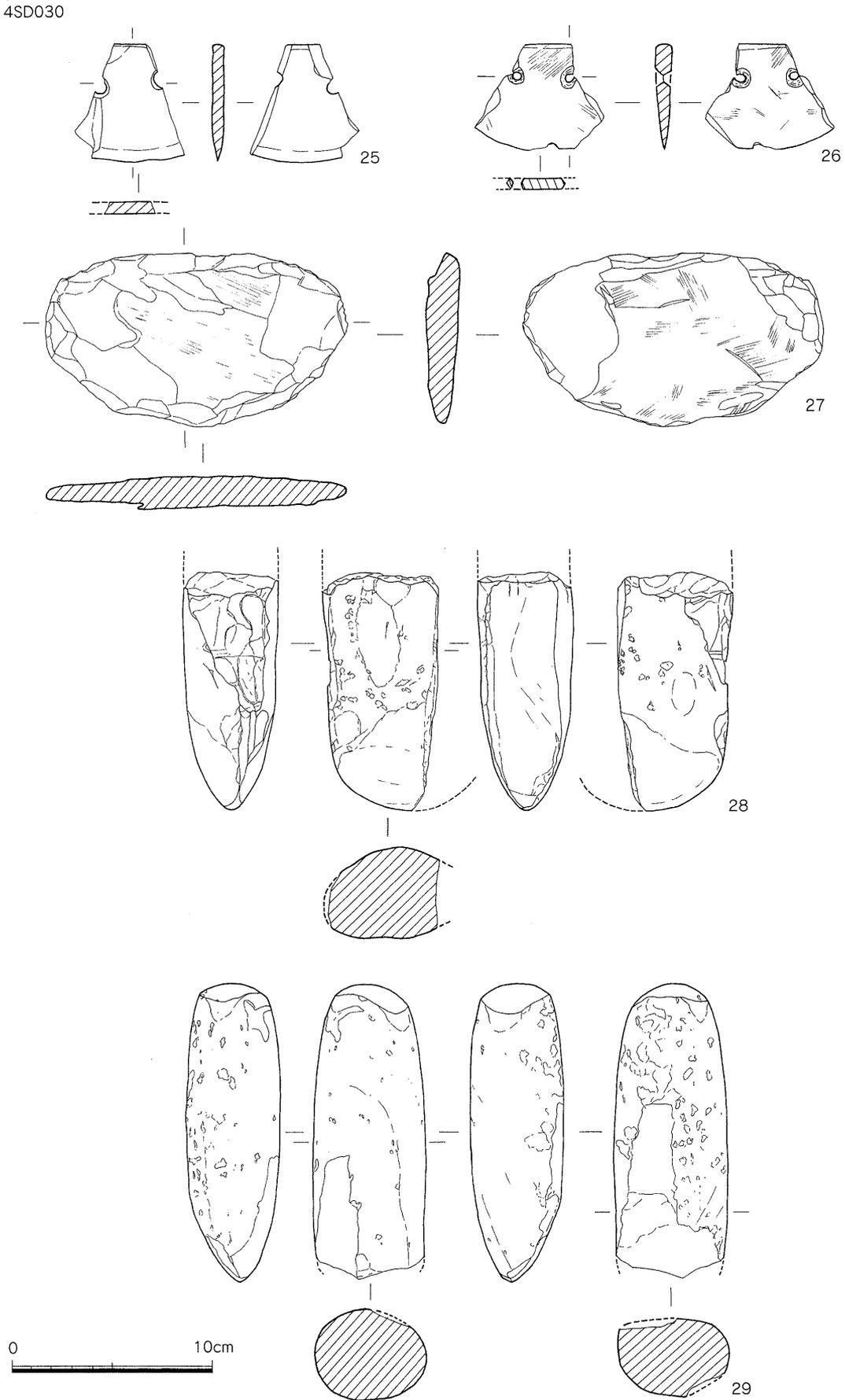


図163. 溝・流路出土遺物実測図(2) (S=1/3)

内面はナデである。18は煤・コゲが付着しており、煮沸具として使用されたと考えられるが、外面は丹塗りである。19・20は口縁部が内湾するタイプである甕1dの口縁部から胴部の破片である。両者とも口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。また、調整は外面が縦・斜方向の刷毛目、内面には指オサエの形跡がみられる。17・21は甕1cの口縁部片である。17の口縁端部は、中央部を大きく凹ませるとともに上部を若干つまみ上げた非常に特異な形態を呈している。口縁部下には突出度の高い三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。21の口縁部外面には粘土紐接合痕と縦方向の刷毛目が観察できる。

### 土製品

**投弾** (22) 22は土製の投弾であると思われる。片方を削りだし、茎のようなものを作り出している。佐賀県千代田町詫田西分遺跡で同様のものが三例報告されているが(徳富1996)、その意味・用途は不明である。

### 石製品

**石剣** (23) 粘板岩製の石剣である。身のみで、両側面も欠損している。再利用品の可能性もある。

**石斧** (24・28・29) 24は泥質片岩製の柱状石斧と思われる。身のみであり、断面は不整四角形を呈す。4SX026の30と同一個体の可能性がある。28は玄武岩製の太型蛤刃石斧である。刃部のみが残存しており、側面は全体的に欠損している。刃縁は精緻に研磨されており、剥離は見られない。29は変成岩製の太型蛤刃石斧である。刃部をわずかに欠損し、全面に敲打痕が認められる。

**石包丁** (25～27) 25・26は凝灰岩製の石庖丁であり、外湾刃半月形を呈する。片面からの穿孔のみで孔を作り出しており、刃部にはやや刃こぼれが見られる。26は基部厚が最大で、刃部に行くにしたがって徐々に薄くなる。回転穿孔を行い、刃部にやや刃こぼれが見られる。27は泥質片岩製の石庖丁の未製品である。粗割りの後、表面に研磨を行っている。

【埋没時期】 壺3や筒形器台、甕1dなどから須玖Ⅱ式新段階である。

### 【参考文献】

徳富則久(編) 1996『詫田西分遺跡Ⅱ区の調査』千代田町文化財調査報告書第20集 千代田町教育委員会

4SD040 (図164-30～40)

### 弥生土器

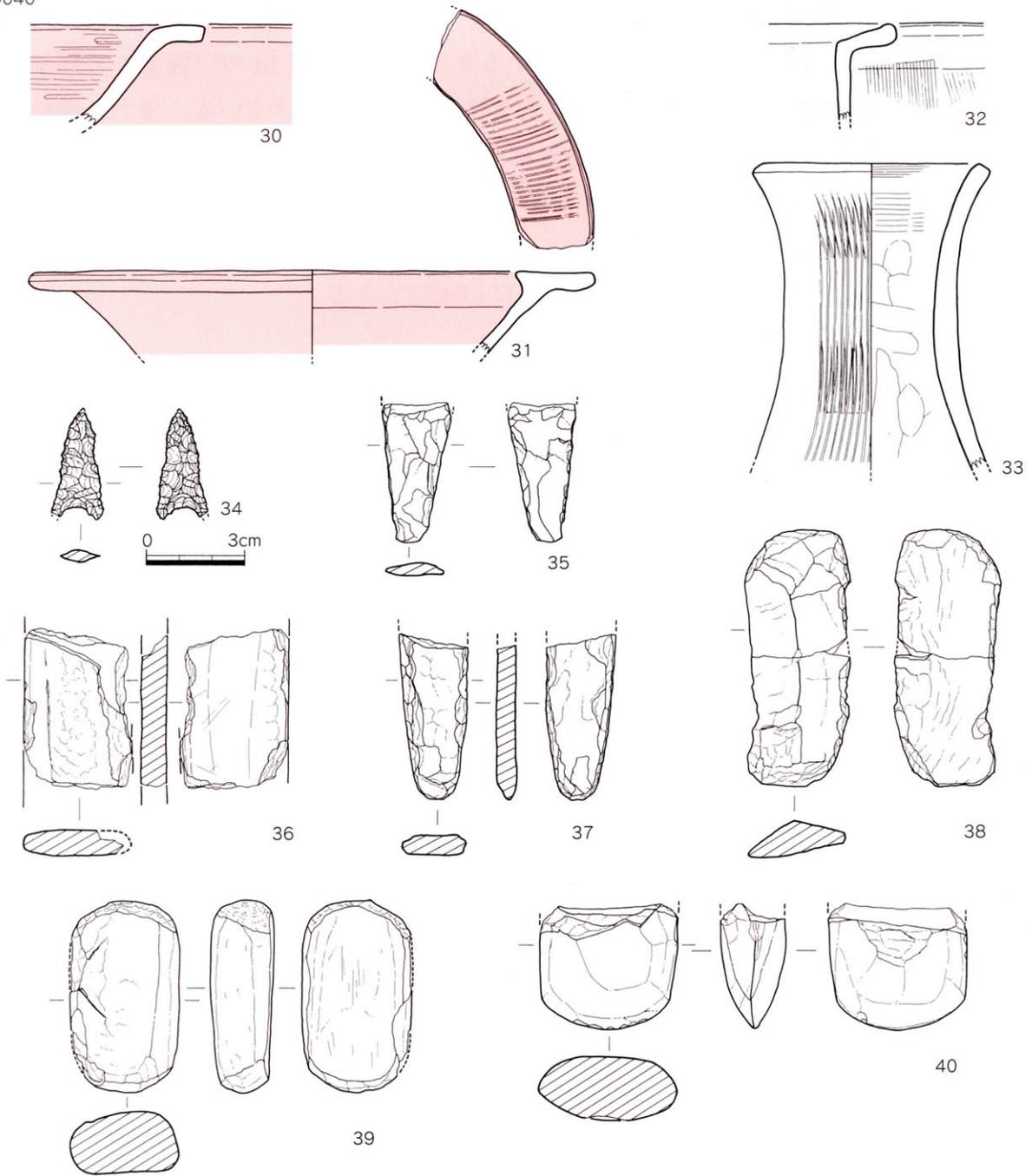
**高坏×鉢** (30) 高坏a×鉢bの口縁部片である。内面は横方向のミガキが観察でき、内外面ともに丹塗りである。

**高坏** (31) 高坏aの口縁部であり、全周の約1/7が残存している。口縁部上面には暗文が施され、内外面ともに丹塗りである。

**甕** (32) 甕1cの口縁部片である。ヨコナデによって口縁端部を若干跳ね上げている。外面には縦方向の刷毛目がみられる。

**器台** (33) 器台で、やや裾部を欠損しているが全周の1/2ほどが残存している。外面は縦方向の粗い刷毛目、内面の受け部は横方向の刷毛目調整が、内面の筒部は指頭圧痕とナデ調整が観察できる。また、内面に煤が付着している。

4SD040



4SD045

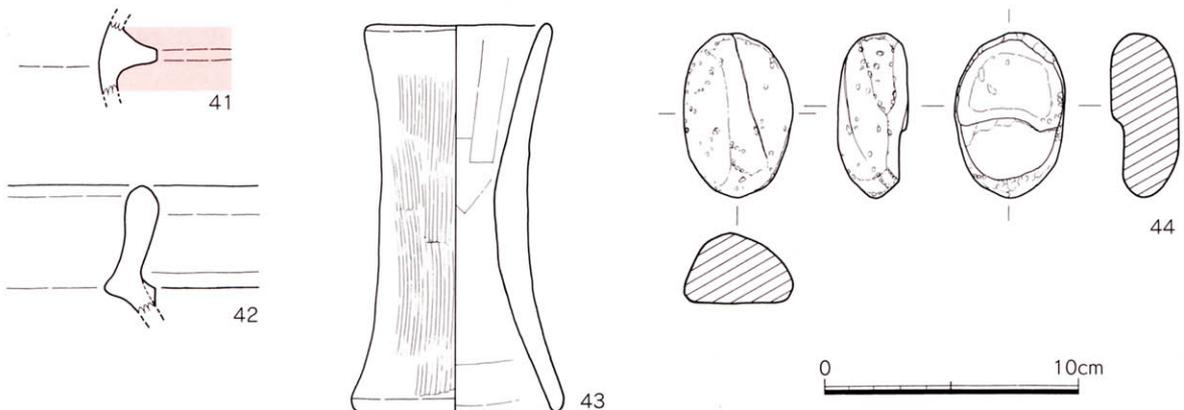


図164. 溝・流路出土遺物実測図(3) (S=1/2・1/3)

**石製品**

**打製石鏃** (34) 姫島産黒曜石製の凹基式打製石鏃である。先端および片方の脚部端をわずかに欠損する。

**用途不明石器** (35～38) 35は泥岩製の用途不明石器である。両面に研磨を施すが、一部に認められるのみであり、未製品と思われる。剣の切先状をなすが、身は薄く器種不明である。36は頁岩製の用途不明石器である。一部研磨を施すが表面は風化が激しく詳細は明らかでない。刃部を研ぎ出しておらず未製品と思われる。石剣にしては幅が広く、石鎌の可能性もある。37は泥質片岩の用途不明石器である。一部研磨を施すが表面は風化が激しく、詳細は明らかではない。石剣の切先状を呈するが、側面に研磨が認められ、器種は不明である。38はサヌカイト製の用途不明石器である。上面中央には稜が入り、一部研磨を施す。欠損が激しく詳細は不明であるが、形状から石戈もしくは石鎌の可能性が考えられる。

**叩石×磨石** (39) 火成岩製の叩石もしくは磨石である。全面にミガキが入り、両端には敲打痕が認められる。

**石斧** (40) 玄武岩製の太型蛤刃石斧である。刃部のみが残存しており、先端にはやや剥離が認められる。

【埋没時期】 図化していないが壺3なども出土しており、須玖Ⅱ式新段階と考えられる。

4SD045 (図 164 - 41 ~ 44)

**弥生土器**

**壺** (41) 壺3の突帯片である。外面は丹塗りである。

**甕** (42) 甕1dの口縁部片である。器面は摩滅しており、調整は不明である。

**器台** (43) 器台であり、口縁部から裾部まで全周の約3/4程度が残存している。外面は縦方向の刷毛目が施され、内面にはナデの痕跡が観察できる。

**石製品**

**叩石** (44) 玄武岩製の叩石である。明灰色を呈し、下部に叩き面を残す。

【埋没時期】 壺3や甕1dより須玖Ⅱ式新段階である。

4SD050 (図 165 - 45 ~ 50)

**弥生土器**

**甕** (45～47) 45・46は甕1bの口縁部片である。両者とも表面が摩滅しており、調整は不明であるが、45は煤が付着している。47は甕1aの口縁部片である。口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。内外面ともに摩滅しているが、刷毛目がわずかに観察できる。

**土製品**

**円盤状土製品** (48) 円盤状土製品である。周囲を打ち欠いて円盤状に成形したものと思われるが、用途などについては不明である。

**木製品**

**板材** (49) 板材と考えられる。上面、両側面を平坦に整形するために細かい加工痕が施されている。上端部を欠損している。現存で長さ63.7cm、幅17.5cm、厚さ6.5cmである。

**割材 (50)** 割材である。樹皮が残存しており、割られた状態のままで未加工である。現存で長さ 55.8cm、幅 21.6cm、厚さ 12.3cm である。

**【埋没時期】** 図化していないが須恵器の破片が出土しており、古墳時代以降と考えられる。

**c. 土坑**

**4SK015 (図 165・166 - 1 ~ 20)**

**弥生土器**

**蓋 (1)** ほぼ完形の蓋 2 である。口縁部付近には穿孔が 2 つあり、この蓋とセットになる 2 の穿孔位置から考えると、欠損部分にもう一組の穿孔があると思われる。外面は縦方向のミガキで調整し、さらに丹塗りも施している。

**壺 (2)** 壺 2b で脚部をもつタイプであり、ほぼ完形である。口縁部には二個一対の穿孔が向かいあった位置に二ヶ所ある。壺の胴部外面には横方向と斜方向の細いミガキが、脚部外面には縦方向のミガキが施される。胴部内面には粘土紐接合痕や指頭圧痕が観察できる。また、外面・内面とも口縁部から胴部にかけて煤が付着している。部分的に遺存したというよりは、何かの行為にともなってこの部分にだけ煤が付着したような状況を呈している。外面と口縁部内面は丹塗りである。

**高坏 (3)** 高坏の脚部であり、全周の約 4 / 5 程度が残存している。脚部外面は縦方向のミガキが施され、内面は刷毛目工具で押し引いたような刷毛目が観察でき、絞り痕跡も観察できる。また、砂粒をほとんど含まない精緻な胎土である。外面は全体的に丹塗りである。

**筒形器台 (4)** 筒形器台の筒部であり、全周の約 1 / 5 程度が残存している。縦方向に長い透かしを入れていたと思われるが、透かしの数や大きさは不明である。外面には縦方向のミガキ、内面には指頭圧痕と絞りの痕跡がみられる。外面は全面丹塗りである。

**甕 (5 ~ 7)** 5・6 は甕 1a の口縁部片で、7 は甕 2b の口縁部片である。5・6 ともに口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。5 は内外面ともに刷毛目調整が施される。外面には煤が付着し、吹きこぼれ痕跡が観察できることから、短時間の強い加熱によって吹き

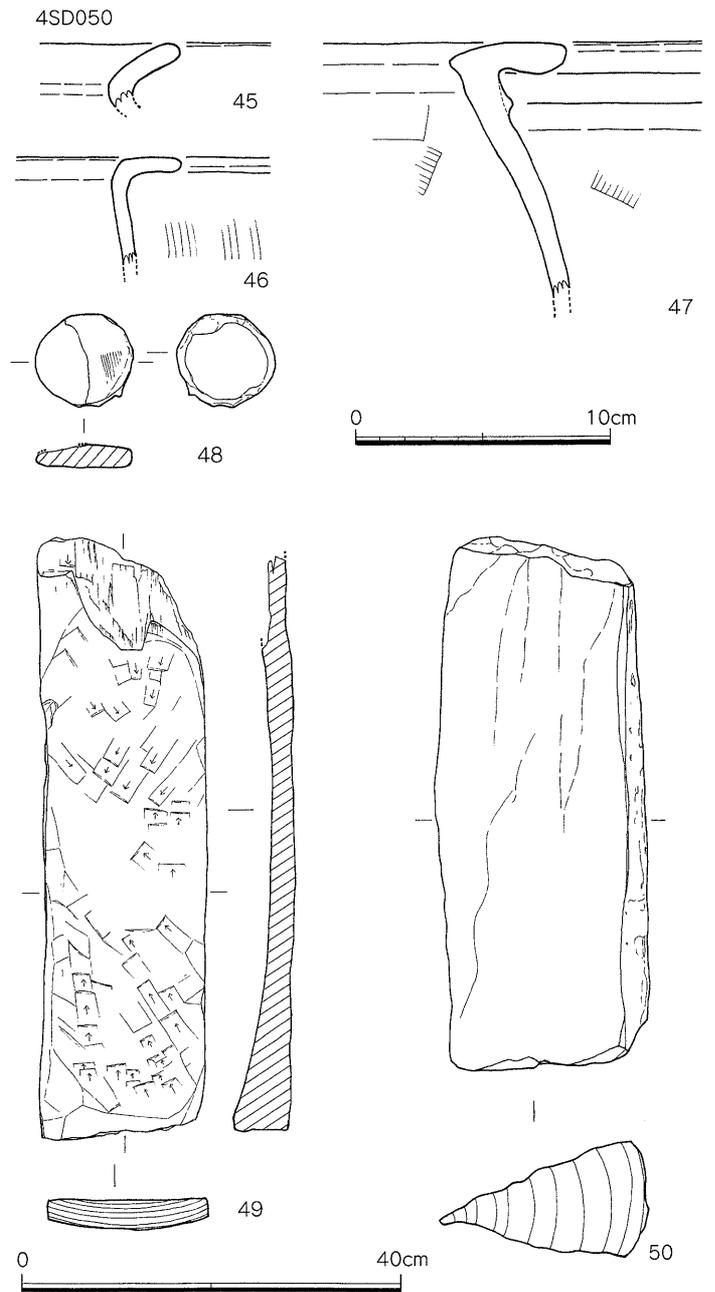


図165. 溝・流路出土遺物実測図(4) (S=1/3・1/8)

4SK015

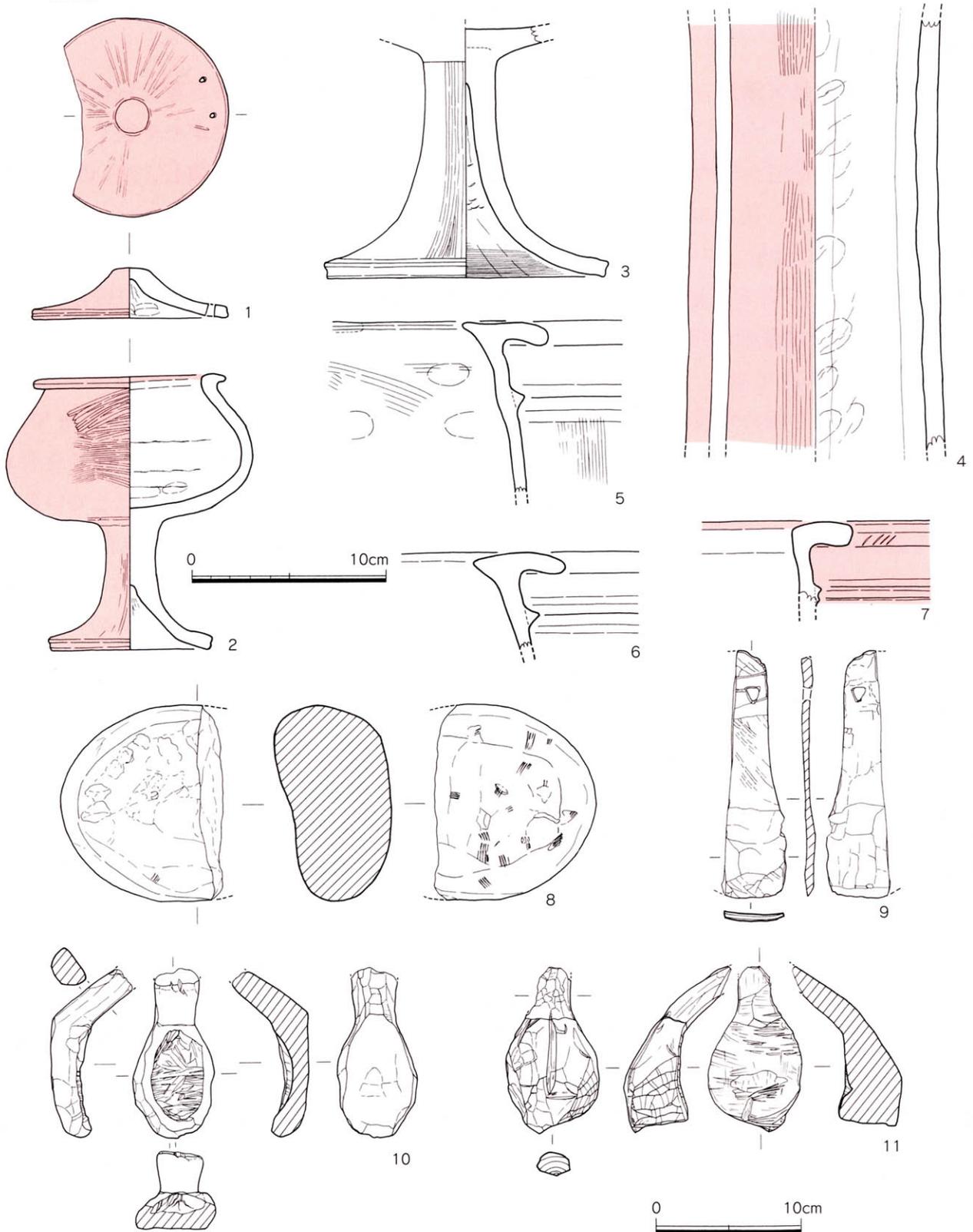


図166. 土杭出土遺物実測図(1) (S=1/3・1/8)

こぼれるような調理に使用されたことが想定される。7は口縁部下にM字突帯をヨコナデによって貼り付け、口縁端部下端には斜方向の刻み目が施される。器面は摩滅しており調整などは不明であるが、外面と口縁部上面は丹塗りである。

石製品

**磨石 (8)** 石英閃緑岩製の磨石である。約半分を欠損し、両面に敲打痕が見られる。

### 木製品

**シャモジ状木製品×鋏先 (9)** シャモジ状の木製品もしくは鋏先であると考えられる。下半部はやや欠損するが、完形に近いものと考えられる。舌状を呈し、上半部がやや狭くなり、上端部付近の中央に逆三角形の透かし孔があるものである。下半部は削りを施し、浅い凹みを形成している。現存で、長さ 34.0cm、幅 8.8cm、厚さ 1.4cm である。

**匙 (10・11)** 10 は匙 (スプーン) である。平面舟形を呈する身を持ち、斜め上位にのびる柄が削り出されている。完形であると思われるが、身の凹部には粗い加工痕が残存していることから、器面調整の段階までには至っておらず、未製品であると考えられる。現存で長さ 23.2cm、幅 11.0cm を測る。11 は匙 (スプーン) 状木製品の未製品である。製作途中で、身の部分は若干刳抜き始めた段階で中断したままである。現存で、長さ 22.8cm、幅 12.9cm である。

**竪杵 (12～14)** 12～14 は竪杵である。12 は A と B は同一個体と考えられ、両者を合わせるとほぼ完形になるものと思われる。握部は搗部の片側に位置するように削りだしている。A、B とも搗部の端部を凸レンズ状に削って作りだし、断面は楕円形を呈する。現存で A の搗部長 44.4cm、幅 8.2cm、厚さ 4.6cm で、握部長 19.3cm、幅 3.3cm、厚さ 2.1cm である。B は搗部長 29.5cm、幅 7.3cm、厚さ 3.7cm で、握部長 7.7cm、幅 4.0cm である。13 は握部の一部と搗部の一部が残存している。握部は搗部の中央に位置するように細く削って作りだしている。搗部断面は円形を呈する。現存で搗部長 18.5cm、幅 7.0cm、厚さ 5.6cm で、握部長 19.9cm、幅 3.4cm、厚さ 2.1cm である。14 は上部の搗部と握部は欠損しており、全体の約 1 / 3 程度しか残存していない。搗部先端は平坦に仕上げられており、断面は円形を呈する。現存で搗部長 45.9cm、幅 8.0cm、厚さ 6.0cm、握部長 7.8cm、幅 4.4cm、厚さ 3.5cm である。

**割材 (15～17)** 15～17 は割材である。15 は割られた状態のままで未加工のものである。現存で長さ 19.6cm、幅 14.5cm、厚さ 9.85cm である。16 は樹皮が残存しており、割られた状態のままで未加工のものである。上端面は平坦で、削られたような痕跡が観察できず、切断されたような痕跡から切断面と考えられる。現存で長さ 23.2cm、幅 11.7cm、厚さ 9.0cm である。17 は破片のため、不明確であるが割材と考えられる。断面は崩れた三角形を呈する。破片のため、用途などの詳細は不明である。現存で長さ 19.8cm、幅 18.5cm、厚さ 8.7cm である。

**用途不明製品 (18～20)** 18 は上端部を柄状に削りだし、他の部分は枝をそのまま利用しており、加工されていない。柄の部分も欠損しており、全体の残存状況の程度やその用途などについては不明である。現存で長さ 14.8cm、幅 3.4cm、厚さ 1.4cm である。19 は下端部を削り、尖らそうとした形跡が残る木製品である。用途などの詳細については不明である。現存で長さ 15.1cm、幅 3.1cm、厚さ 2.6cm である。20 は一部に加工面をもつ木製品である。しかし、破片であり、用途などについての詳細は不明である。現存で長さ 13.1cm、幅 10.9cm、厚さ 9.3cm である。

**4SK015 黒灰色粘土 (図 166 - 21)**

### 弥生土器

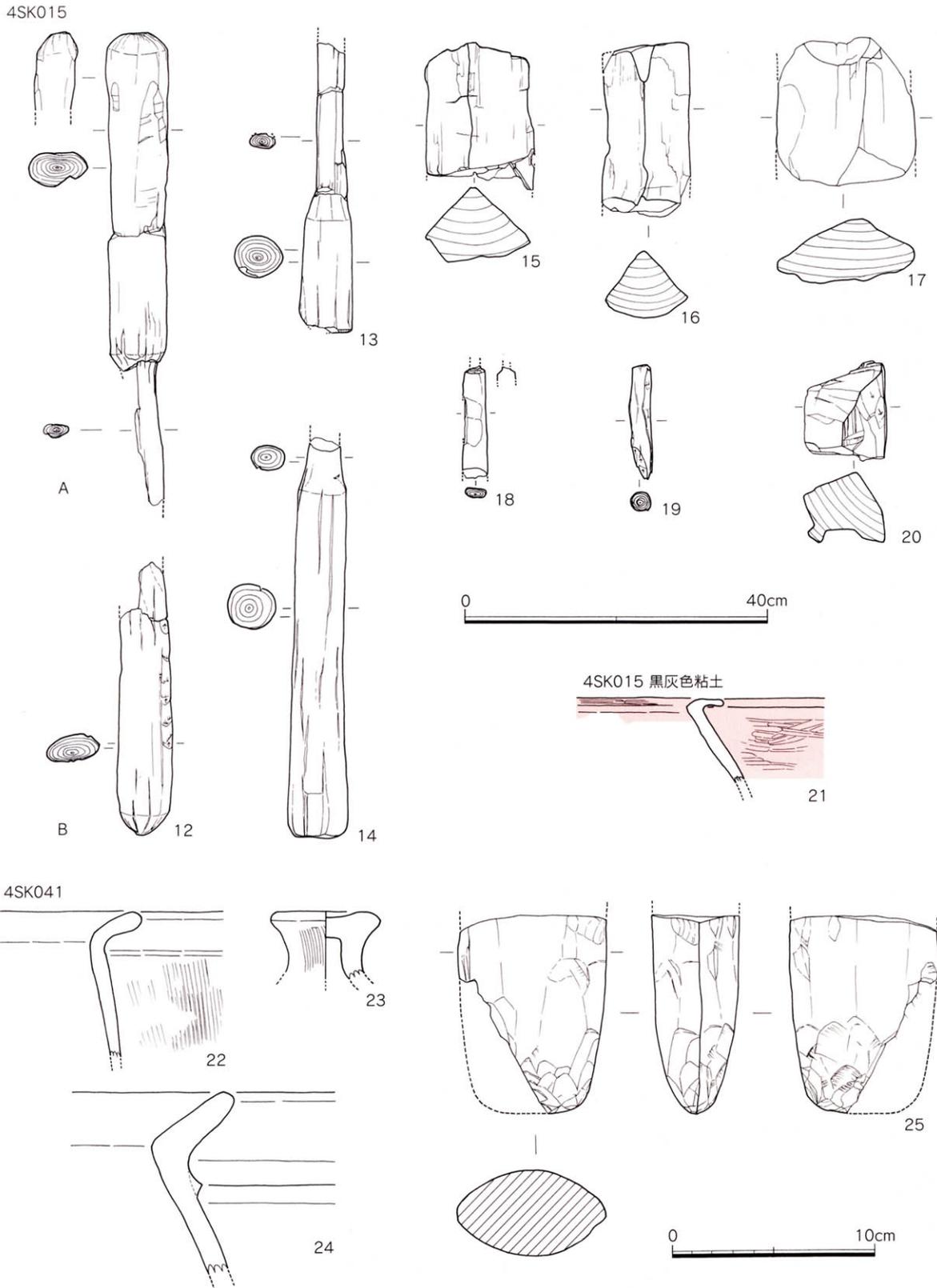


図167. 土抗出土遺物実測図(2) (S=1/3・1/8)

壺 (21) 壺 2b である。外面や口縁部上面には横方向のミガキが施され、外面と内面の一部は丹塗りである。胎土は砂粒の少ない精緻なものである。

【埋没時期】筒形器台や甕などから須玖Ⅱ式である。

4SK041 (図 166 - 22 ~ 25)

弥生土器

**甕 (22・24)** 22・24は甕1bの口縁部片である。22の外表面は縦方向の刷毛目調整である。24は口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。

**蓋 (23)** 蓋1の頂部である。外表面には縦方向の刷毛目がみられる。

#### 石製品

**石斧 (25)** 玄武岩製の太型蛤刃石斧である。刃部のみが残存しており、使用時に付いたと思われる剥離が認められる。一部敲打痕を残している。

【埋没時期】須玖Ⅱ式新段階であろう。

#### d. その他の遺構 (小穴、たまり)

4SX002 (図168-1)

#### 弥生土器

**甕 (1)** 大型の甕棺の口縁部片である。断面観察から頸部以下を成形した後、その上位に粘土を付け足すことで口縁部を作りだしていることがわかる。

4SX006 (図168-2)

#### 弥生土器

**甕 (2)** 甕1bの口縁部片である。器面は摩耗しており、調整などは不明である。

4SX009 (図168-3)

#### 弥生土器

**甕 (3)** 壺1bの口縁部片である。口縁端部の下端には刻み目を入れている。また、内外表面には煤・コゲが付着している。

4SX011 (図168-4~7)

#### 弥生土器

**壺 (4)** 壺1aの口縁部片である。内外表面とも器面は摩耗しており調整は不明である。

**甕 (5・6)** 5・6は甕1aの口縁部片である。6の外表面は斜方向の刷毛目が施され、内表面はナデで調整されていると思われる。

#### 木製品

**柱 (7)** 柱と考えられるが、破片であり詳細は不明である。上端面は炭化している。現存で、長さ14.5cm、幅18.5cm、厚さ16.0cmである。

4SX012 (図168-8)

#### 木製品

**柱 (8)** 柱である。上端部は欠損しているが、下端部は残存している。下端部は礎板の上に乗せた部分と思われ、平坦になるように削りによって調整されている。現存で長さ46.0cm、幅23.8cm、幅20.3cmである。

4SX014 (図168-9)

#### 弥生土器

**甕 (9)** 甕1bの口縁部から胴部中位の破片である。外表面は縦方向の刷毛目調整、内表面はナデである。また、外表面は煤、内表面はコゲが多量に付着している。

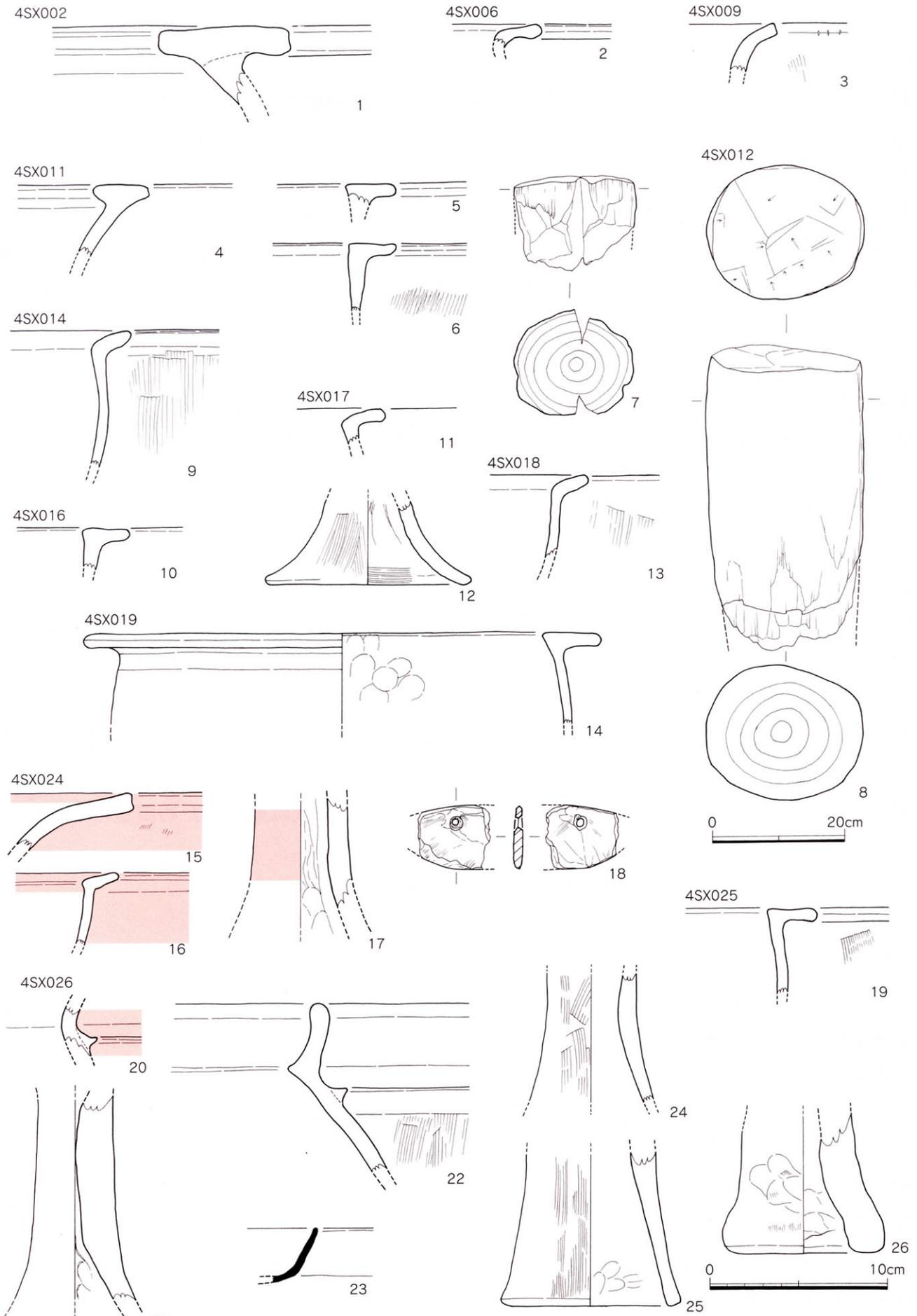


図168. その他の遺構出土遺物実測図(2) (S=1/3・1/8)

**4SX016** (図 168 - 10)

**弥生土器**

**甕** (10) 甕 1a の口縁部片である。器面が摩滅しており、調整などは不明である。

**4SX017** (図 168 - 11・12)

**弥生土器**

**甕** (11) 甕 1b の口縁部片である。器面が摩滅しており、調整などは不明である。

**器台×高坏** (12) 12 は器台または高坏の脚部であり、全周の 1 / 4 程度が残存している。外面は縦方向の刷毛目、内面の裾部には横方向の刷毛目が施される。また内面には絞り痕も観察できる。

**4SX018** (図 168 - 13)

**弥生土器**

**甕** (13) 甕 1b の口縁部片である。外面は刷毛目が施されるが、内面は摩滅のため不明である。また、外面は煤が、内面はコゲが付着している。

**4SX019** (図 168 - 14)

**弥生土器**

**甕** (14) 甕 1a の口縁部であり、全周の約 1 / 4 ほどが残存している。器面は摩滅しており調整は不明だが、内面には指頭圧痕が認められる。外面はやや褐色がかかった色調を呈する。

**4SX024** (図 168 - 15 ~ 18)

**弥生土器**

**壺** (15) 壺 1b の口縁部片である。外面は僅かに刷毛目が観察できるが、刷毛目調整後ナデが行われたと考えられる。内外面ともに丹塗りである。

**高坏** (17) 高坏の脚部であり、1 / 3 程度残存している。外面は摩滅のため調整は不明だが、内面には絞り痕跡が観察できる。外面は丹塗りである。

**甕** (16) 甕 2b であり、外面と口縁部内面は丹塗りである。

**石製品**

**石包丁** (18) 頁岩製の石庖丁である。1 / 3 ほどの残存であるが、杏仁形を呈していると思われる。表面は剥離している。

**4SX025** (図 168 - 19)

**弥生土器**

**甕** (19) 甕 1a の口縁部片である。外面には縦方向の刷毛目が観察できるが、内面は摩滅しており調整は不明である。

**4SX026** (図 168・169 - 20 ~ 31)

**弥生土器**

**壺** (20) 壺 3 の突帯片である。突帯はヨコナデにより先端部をつまみ上げた形態を呈する。外面は丹塗りである。

**高坏** (21) 高坏の脚部である。外面は摩滅のため調整は不明だが、内面には絞り痕跡が観察

できる。

**甕 (22)** 甕 1d の口縁部片である。口縁部下に三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。刷毛目が三角突帯を貼り付ける際のヨコナデによって切られていることから、縦方向の刷毛目調整後に突帯を貼り付けていることがわかる。胴部外面には煤が、内面にコゲが付着している。

**器台 (24・25)** 24・25 は器台の筒部・裾部である。24 は 1 / 2 程度、25 は 1 / 5 程度残存している。ともに外面は縦方向の刷毛目、内面はナデが施されている。

**支脚 (26)** 支脚の裾部片である。内外面ともにナデもしくは指オサエを粗雑に行っているため、表面に著しい凸凹がみられる。内面には粘土紐接合痕も見られる。

### 須恵器

**坏 (23)** 須恵器の坏の破片である。7 世紀後半代のもと考えられる。

### 石製品

**石包丁 (27・28)** 27 は凝灰岩製の石庖丁である。やや小型で、背面には凹みがある。回転穿孔を行い、刃部にやや刃こぼれが見られる。28 は輝緑凝灰岩製の石庖丁である。外湾刃半月形を呈する。回転穿孔を行い、刃部にやや刃こぼれが見られる。

**砥石 (29)** 砂岩製の砥石である。欠損しており、四面共に使用の痕跡がみられる。

**石斧 (30・31)** 30 は泥質片岩製の柱状石斧である。身の部分のみで、断面は不整四角形を呈する。31 は玄武岩製の太型蛤刃石斧である。刃部は使用時に付いたと思われる剥離が多く認められる。

**4SX027 (図 169 - 32・33)**

### 弥生土器

**甕 (32)** 甕 1a の口縁部片である。外面は斜方向の刷毛目が施されているが、内面は摩滅が著しく調整は不明である

**器台 (33)** 器台である。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデで仕上げている。比較的器壁の厚いつくりである。

**4SX029 (図 169 - 34)**

### 弥生土器

**甕 (34)** 甕 1a の口縁部から胴部の破片である。口縁部からやや下に三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。このヨコナデが刷毛目を切っていることから、縦方向の刷毛目が施された後に突帯を貼り付けたことがわかる。内面はナデで仕上げている。色調は内外面ともに褐色を呈している。

**4SX032 (図 169 - 35)**

### 弥生土器

**壺 (35)** 壺 1b の口縁部片である。外面は斜格子状にミガキが施され、内面は横方向にミガキが施されている。内外面ともに丹塗りである。

**4SX033 (図 169 - 36・37)**

### 弥生土器

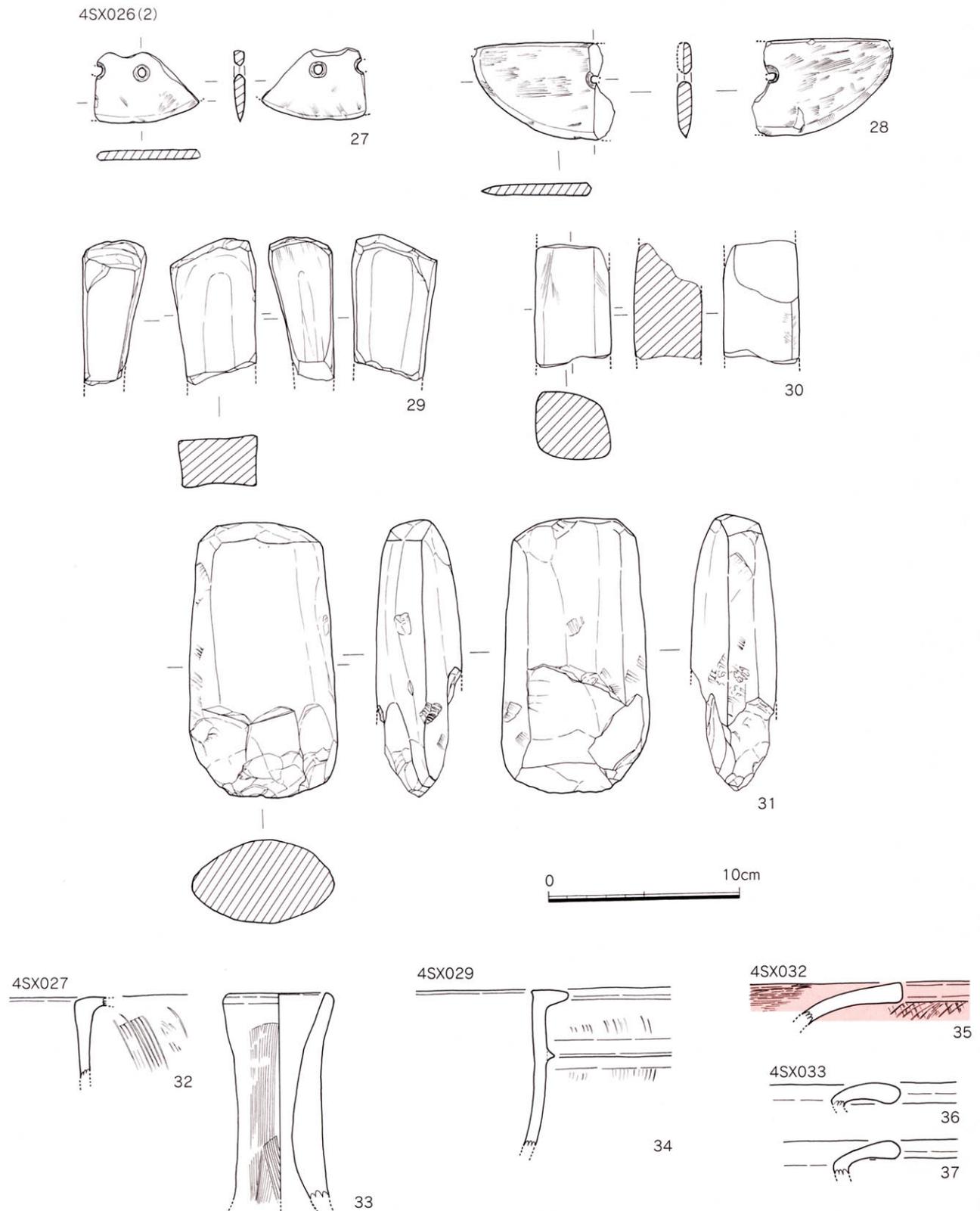


図169. その他の遺構出土遺物実測図(2) (S=1/3・1/8)

**甕 (36・37)** 36・37は甕1bの口縁部片である。ヨコナデによって口縁部を整形している。

**4SX035** (図170-38・39)

**弥生土器**

**甕 (38)** 壺3aの口縁部片である。弥生時代後期のものである。内外面ともに摩滅しており、調整は不明瞭だが、内面の屈曲部付近には横方向のナデと思われる部分が観察できる。また、外面は丹塗りの痕跡が認められる。

**瓦類**

**埴 (39)** 埴の破片である。焼成不良のため軟質に焼きあがっており、調整などについては不明であるが、一面だけ瓦質化しており、その部分から判断すると表面はナデによる調整と思われる。

**4SX036** (図170-40・41)

**弥生土器**

**甕 (40)** 甕1bの口縁部片である。器面が摩滅しており調整は不明である。

**石製品**

**用途不明石器 (41)** 粘板岩製の用途不明石器である。側面にも精緻に研磨を施し、石戈の再加工品か、石剣柄部のみが残存したものと思われる。

**4SX038** (図170-42)

**弥生土器**

**甕 (42)** 甕1bの口縁部片である。器面が摩滅しており調整は不明である。

**4SX039** (図170-43)

**弥生土器**

**甕 (43)** 甕の底部である。断面は厚く、上げ底になっており、須玖I式古段階と考えられる。底面には上げ底にするために粘土を掻き取った痕跡と考えられる器面の凹凸が観察できる。また、外面には粗雑な指頭圧痕が観察できる。

**4SX042** (図170-44)

**木製品**

**鋤先 (44)** 鋤身と柄を別木作りし、後で組み合わせるタイプの鋤先と考えられる。ほぼ完形で、整形段階の未製品である。各面に粗い加工痕が観察できる。上端部には着柄軸を削り出すための突起が認められる。現存で長さ35.0cm、幅17.7cm、厚さ5.2cmである。

**4SX043** (図170-45～47)

**弥生土器**

**甕 (45～47)** 45・46は甕1aの口縁部片である。表面が摩滅しており、調整は不明である。ともに外面は褐色を呈する。47は甕の底部であるが、断面は厚く、裾部が踏ん張り気味の形態を呈する。外面には煤、内面にはコゲが付着している。

**4SX046** (図170-48・49)

**弥生土器**

**甕 (48・49)** 48は甕1bの口縁部片である。49はKⅢa式の大型甕棺の口縁部片である。口縁部下にM字突帯をヨコナデによって貼り付けている。両者ともに内外面の器面が摩滅しており調整は不明である。

**e. 土層**

**e-1. 表土 (図171-1~6)**

**弥生土器**

**鉢 (1)** 鉢aの口縁部片である。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。口縁部と突帯間の刷毛目調整は突帯貼り付け時のヨコナデによって切られており、刷毛目調整後、突帯を貼り付けたことがわかる。内面には斜方向のナデ調整が観察できる。外面に煤、内

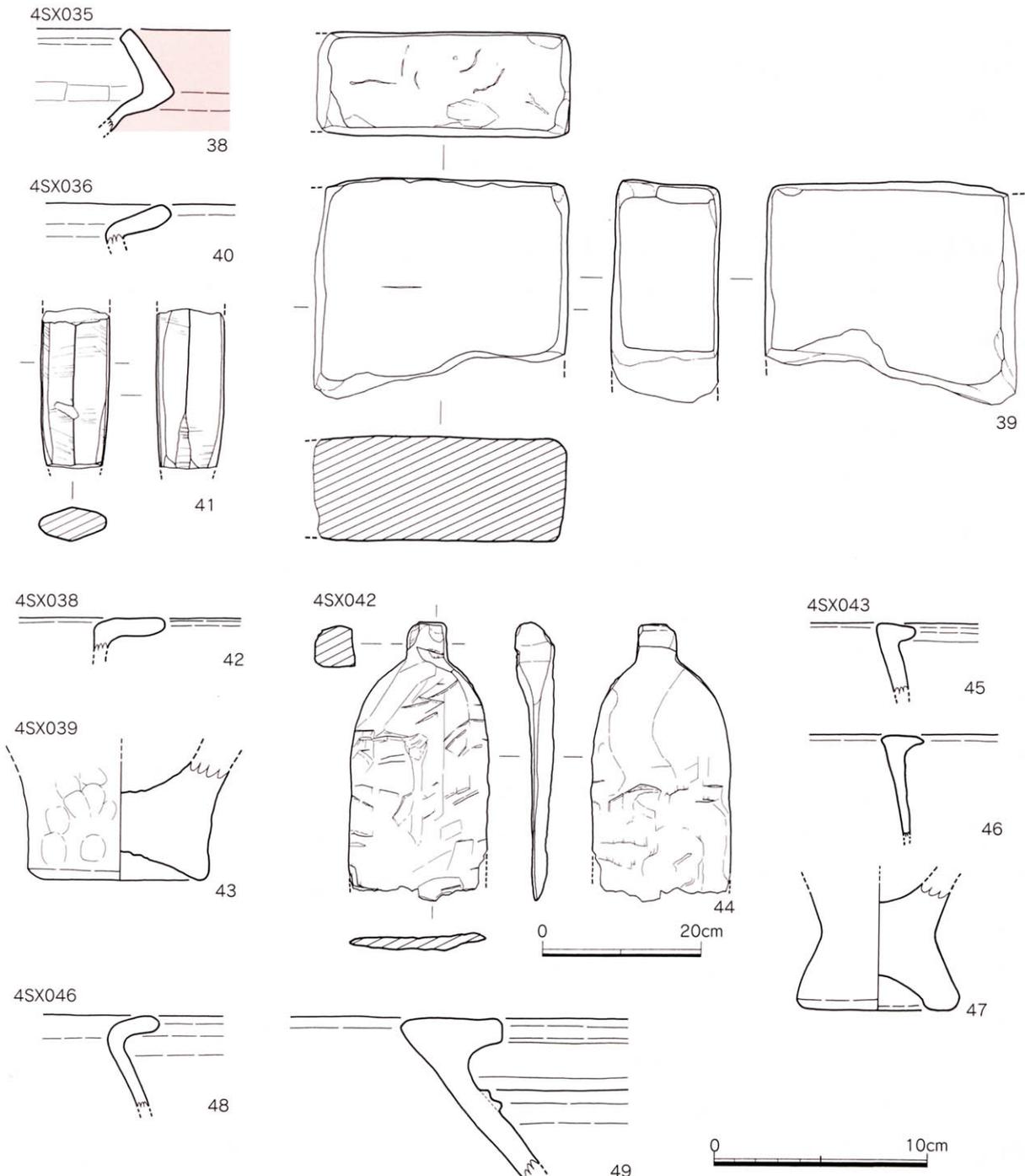


図170. その他の遺構出土遺物実測図(3) (S=1/3・1/8)

面にコゲが付着している。内面には丹塗りが施されている。

**壺 (2)** 壺 2b の口縁部片である。口縁部には穿孔が二孔施され、口縁部上部から穿孔したことを示す棒状工具の痕跡が胴部に残存している。外面は丹塗りである。

**甕 (3 ~ 5)** 3は甕 1b の口縁部片である。外面には縦方向の刷毛目調整、内面にはナデ調整が施されている。4は甕 1b の口縁部から胴部上半の破片である。外面には縦方向の刷毛目調整が施され、内面には斜方向のナデ調整が観察できる。5は甕 1b の胴部上半片である。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面の縦方向の刷毛目調整は突帯貼り付け時のヨコナデによって切られており、刷毛目調整の後、突帯を貼り付けたことがわかる。

**石製品**

**砥石 (6)** 細粒砂岩製の砥石である。大きく欠損するが四面とも使用している。上面には敲打痕も見られる。下面は焼けて灰黒色を呈する。

**e-2. 湿抜き (図 171 - 7・8)**

**弥生土器**

**壺 (7)** 壺 4 の頸部片である。残存部には二条の三角突帯がヨコナデによって貼り付けられている。また、外面には丹塗りが施されている。

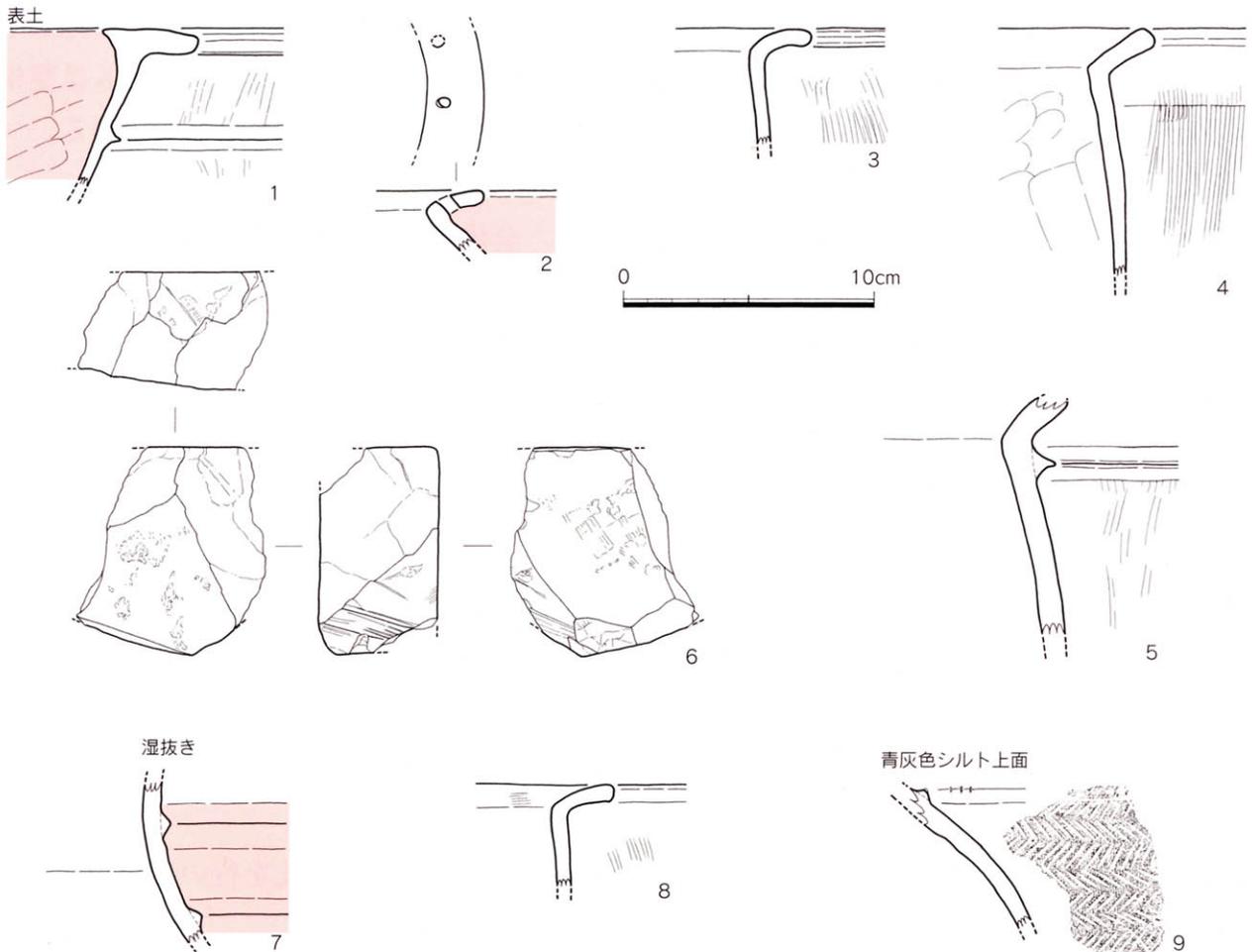


図171. 土層出土遺物実測図(1) (S=1/3)

**甕** (8) 甕 1b の口縁部片である。外面には縦方向、内面には横方向の刷毛目が若干残存している。

### e-3. 青灰シルト上面 (図 171 - 9)

#### 弥生土器

**壺** (9) 壺の胴部上半の破片である。破片の上位には三角突帯をヨコナデによって貼り付け、突帯上には刻目を入れている。突帯より下位には、刺突文を斜方向に交互に施した羽状文が描かれている。

### e-4. 黒色粘土 (図 172 - 1 ~ 14)

#### 弥生土器

**鉢** (1・4) 1 はミニチュアの鉢である。口縁部下に突帯を付し、段を形成している。段の下部には突帯貼り付け時の指頭圧痕が観察できる。内外面ともナデ調整であり、内面上部は横方向、内面中位は縦方向のナデ調整である。4 は鉢 a の口縁部から胴部であり、全周の約 1 / 4 が残存している。器面が摩耗しており調整は不明であるが、外面には煤が付着している。

**鉢×壺** (2) 2 は壺あるいは鉢であろう。完形であるが、底部に穿孔と思われる孔がある。内外面ともに指頭圧痕が多数観察できる。

**甕** (3・6) 3 は甕 1a の口縁部片であるが、口縁部上面に把手を持つものである。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。胴部外面には煤が付着している。6 は甕棺の口縁部片である。断面観察から内面側に粘土を付け加えて内面の突出部を成形している。

#### 土製品

**投弾** (5) 紡錘形の土製投弾である。欠損が激しく、全体の 2 / 3 ほどしか残存していない。

#### 瓦類

**平瓦** (7) 平瓦の破片である。側面が残存しており、ケズリの痕跡が観察できる。内面には布目が残存し、外面には斜格子目タタキが施されている。

#### 石製品

**石鍋** (8) 滑石製の石鍋の破片である。内外面ともケズリの単位を明瞭に観察することができる。口縁部外面には方形の把手がつく。

**石剣** (9) 粘板岩製の石剣である。断面レンズ形の無茎式石剣で、基部端は裏面が落ち、側面形が斜めになっている。表面にはやや風化が見られる。

**石斧** (10) 頁岩製の抉入柱状片刃石斧である。基部を欠損し、刃部にもわずかに欠損が見られる。後主面に二段の抉りが入り、前主面における刃先にいたる屈曲部の鑄は明確ではない。断面は蒲鋒形を呈する。

**石包丁** (11) 凝灰岩製の石庖丁で、外湾刃半月形を呈する。回転穿孔を行い、刃部には、やや刃こぼれが見られる。

**叩石** (12) 玄武岩製の叩石である。断面扁平で、右側面および表面を敲打により欠損している。

**砥石** (13・14) 13 は細粒砂岩製の小形砥石である。四面全てを使用している。14 は細粒砂岩製の小形砥石である。四面全てを使用しており、一箇所、溝状の擦切り痕が見られる。表面の

黑色粘土

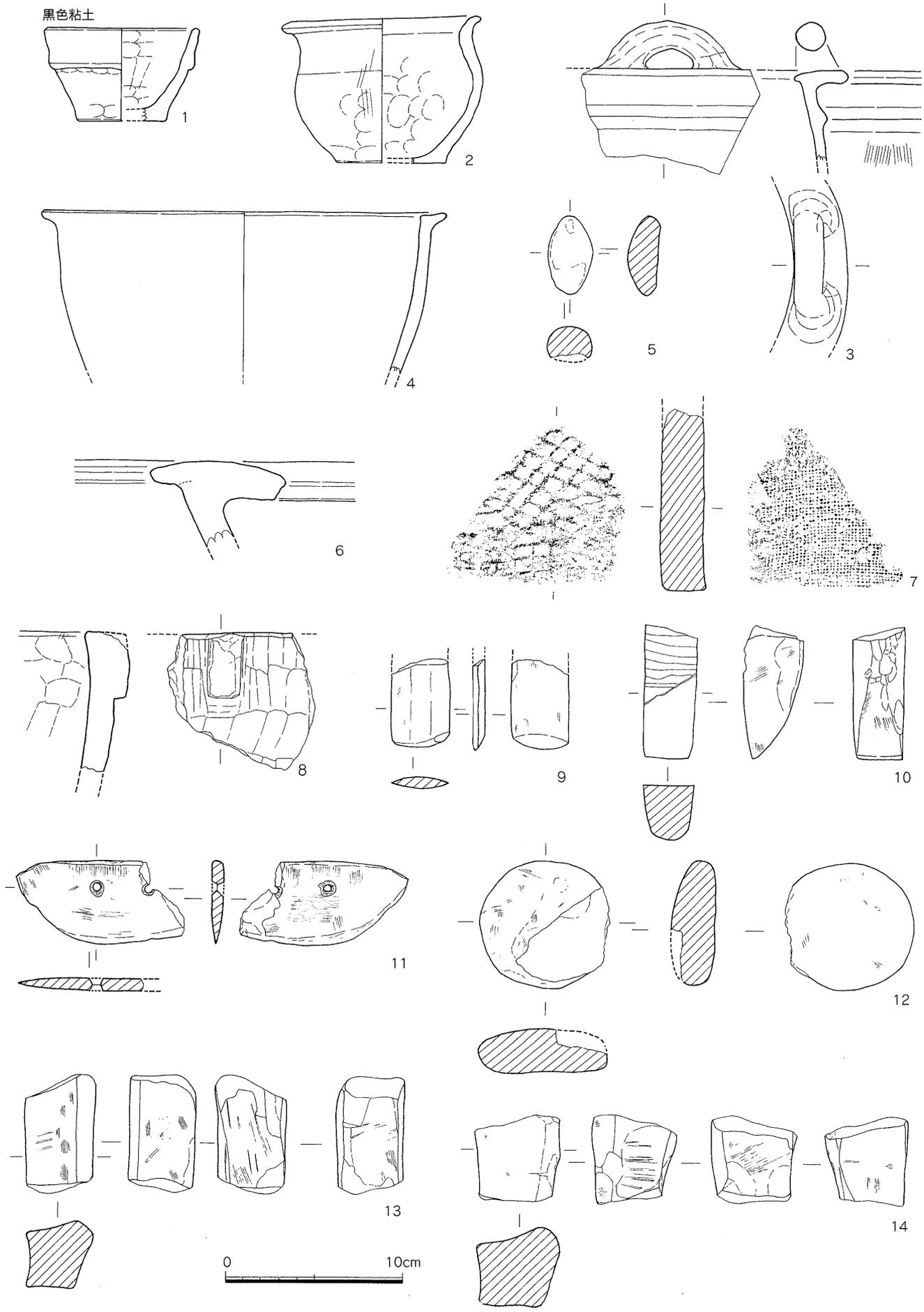


图172. 土層出土遺物実測図(2) (S=1/3)

剥離は激しい。13 と 14 は同一個体と思われる。

## E. 小結

調査地は平地ながらやや起伏に富む地形をしていたと考えられる。発掘調査によって何度か流路になっていること、またその方向は一定ではないことが確認された。遺構も流路であったところの堆積層上に展開している。このように長期的には安定的な立地とは言えないが、実際の生活感覚からすれば安定していたと考えられる。

主な遺構群は建物等の柱穴と土坑であり、広く集落の一部と考えられるが、居住空間そのものであることを示すものではない。SK015 は木製の半製品や欠損品を含む木材などの出土品などから木材加工のための材料の水漬け場と考えられる。また、流路の中には木杭が打ち込まれており、規格性を見つけられず用途は不明であるが、護岸を含めて水利用のための仕掛けであると思われ、調査地付近は水が必要とされる施設があったと考えられる。

遺物は弥生時代中期中頃～後半のものがほとんどであり、この時期しか活動していないようである。一方、筑前国分寺・尼寺に近く、水城東門を通過する道路に近接していたことを考えると、まだ活発な活動の痕跡が検出されてよさそうであるが、一部の遺構から古代の遺物が少量出土しているだけである。削平された可能性もあるが周辺の調査とあわせて今後検討が必要と考えられる。

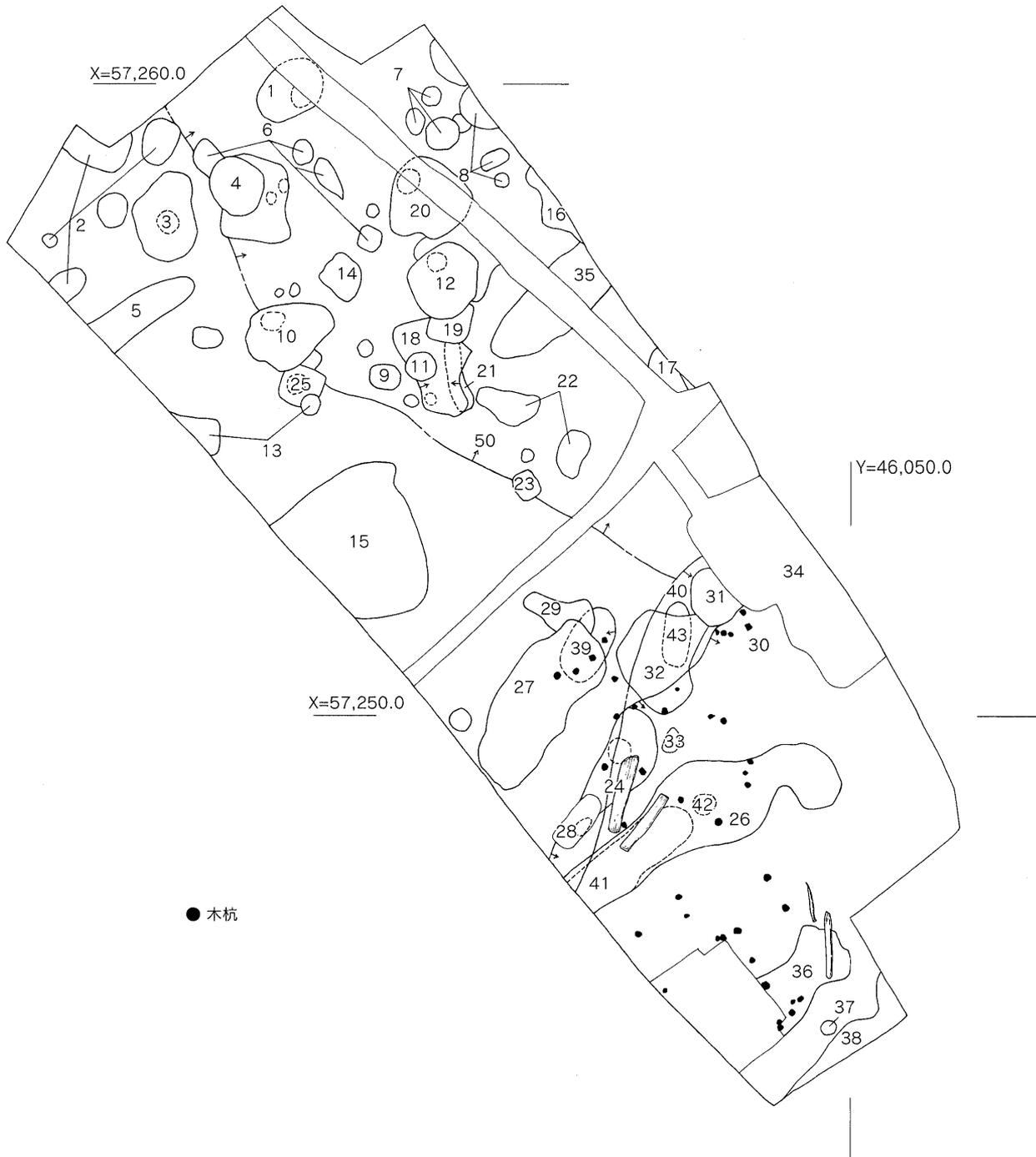


図173. 千足町遺跡 第4次調査 遺構略測図 (S=1/100)

## 7. 国分千足町遺跡 第5次調査

### A. 調査に至る経過

平成7年8月31日に、国分3丁目337-1における埋蔵文化財取り扱いの有無に関する問い合わせが地権者である月山征夫氏より文化財課へなされた。周辺において弥生時代の集落跡が確認されており、当該地番においても同様の遺跡が包蔵されている可能性が極めて高いと判断されたため、遺跡の有無および規模についての試掘調査を平成7年10月17日に行った。その結果現況地表面から約145cm下位に遺構密度は希薄ながら遺跡が包蔵されていることが確認できたため、月山氏および建設業者である大成建設と協議を行った結果、平成7年12月から発掘調査を実施することで合意を見た。試掘調査は山本信夫が行い、発掘調査は中島恒次郎が行った。開発対象面積は819.36㎡、調査面積は140㎡である。なお保護法57条の2（平成7年11月2日受理、受付番号586号）届出に基づき、建物建築場所のみが遺跡破壊箇所と判断し、その部分のみを発掘調査を行っている。したがって残地について、遺跡は包蔵されており、将来は開発内容によって取り扱いが生じることになる。なお調査期間は、平成7年12月2日～平成8年2月6日に行った。

### B. 基本土層

現況地表標高から約0.85mほどが盛土によるマサ土が観察され、その下位に旧耕作土ならびに床土が0.25m確認できた。遺構は床土直下に検出でき、遺構検出時の遺物として黄茶色土層の記載を行っているが、実際には床土直下に遺構を検出したことから、便宜的な土層と理解していただきたい。

### C. 遺構 (図174)

検出した遺構は、掘立柱建物の他に性格が特定できるものはなく、他には性格不明の小穴を多数検出している。

#### a. 掘立柱建物

掘立柱建物は全部で4棟確認しており、遺構間の切りあい関係から、5SB015 ← 5SB001 の前後関係を確認している。

#### 5SB001

調査区南半部で確認した建物で、調査区南へ

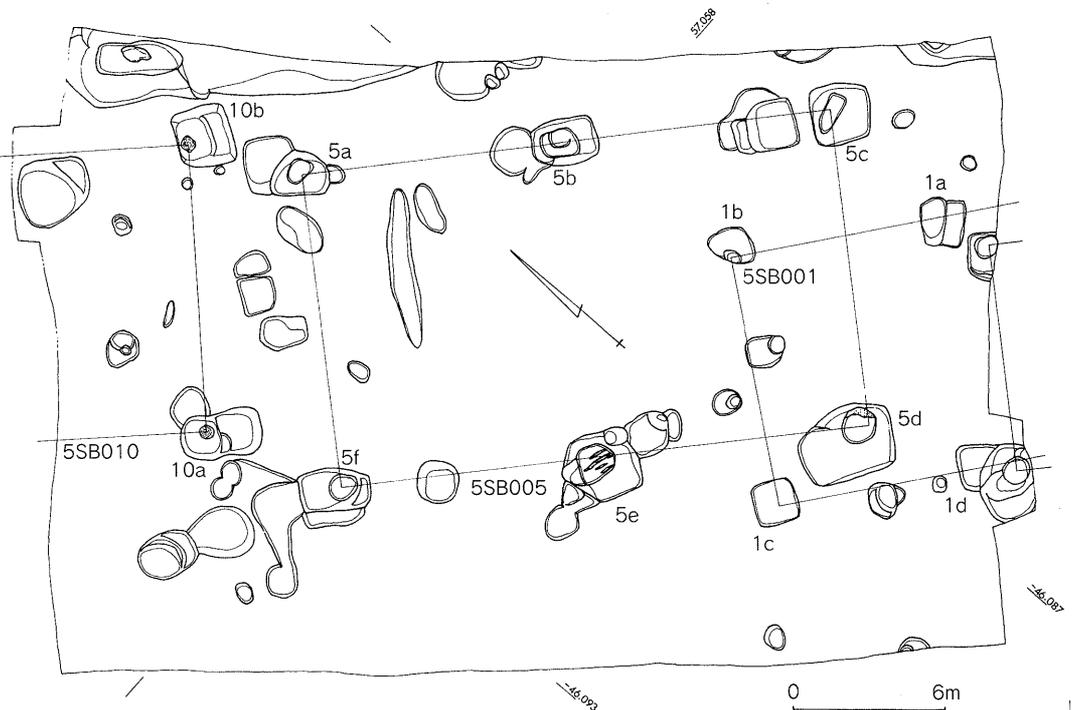


図174. 千足町遺跡 第5次調査 遺構配置図

展開するものと考えられることから、遺構規模については明らかにし難い。南北方向を桁行と仮定した場合、桁行柱間は1.63mを測り、梁行柱間は2.01mを測る。各柱穴には、柱痕跡と考えられる土層が観察できるものの、他の建物のように礎板や柱そのものの残存は観察できなかった。

**5SB005**

調査区中央部にて確認できた建物で、2間×1間の建物であると考えられる。桁行柱間は北側で2.06m、南側で2.14mを測り、わずかに南側柱間が広い。柱穴dならびにeには礎板が残存しており、柱穴dは板材を、柱穴eには棒状の木材を礎板材として使用している。梁行柱間は2.51mを測り、建物占有面積を柱中心線に基づいて算出すると10.542 m<sup>2</sup>を測る。

**5SB010**

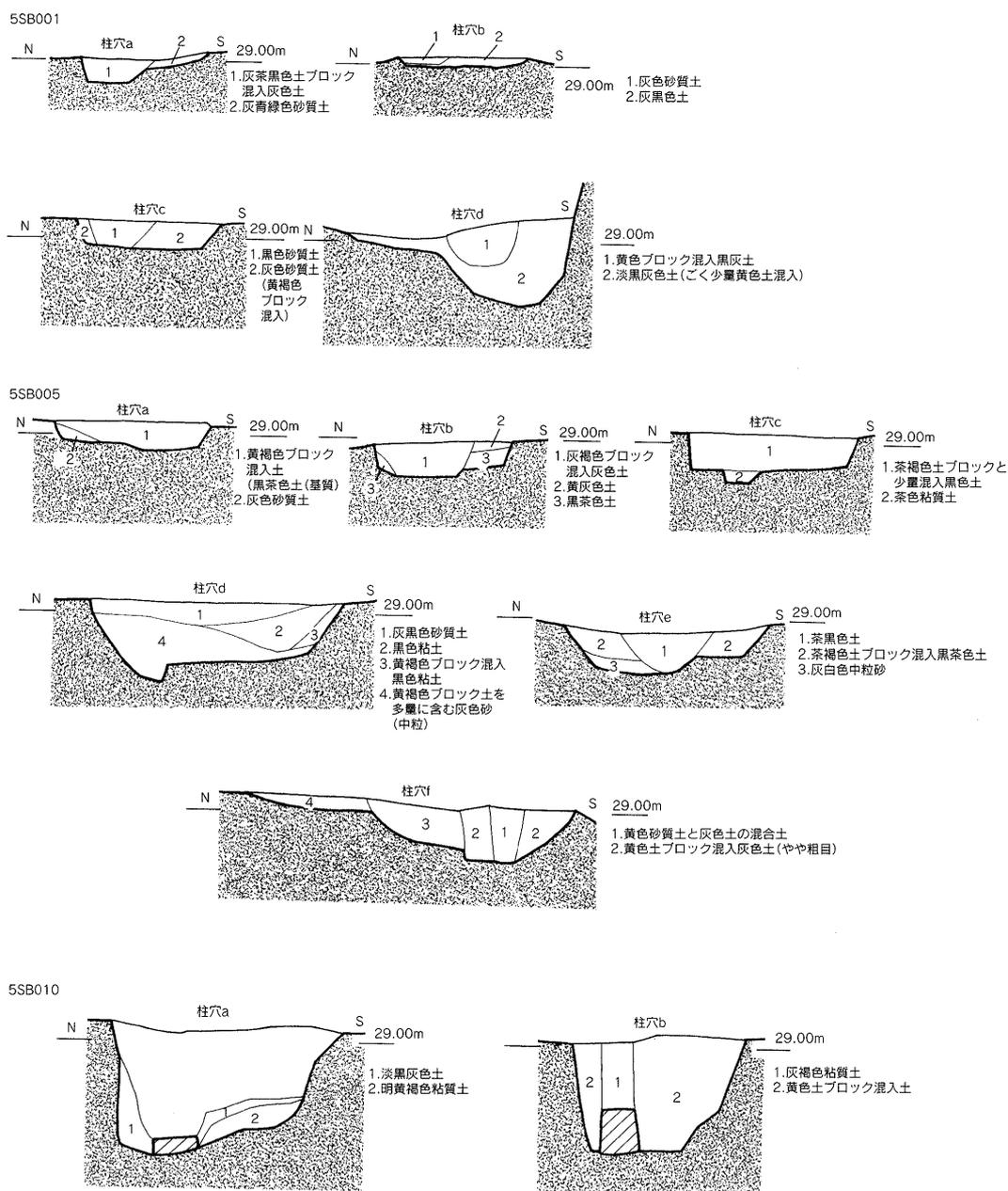


図175. 掘立柱建物柱穴土層実測図 (S=1/40)

調査区北端部で検出した建物で、調査区北側へ展開すると考えられることから、遺構規模については明らかにし難い。南北方向を桁行方向と仮定すると、梁行柱間は2.28mを測る。検出できた柱穴には、直径0.22mほどの柱材が残存していた。

#### 5SB015

調査区南端にて確認したもので、柱痕跡の確認ならびに東西方向への展開が見られないことから南に展開する建物跡と推定した。南北方向を桁行方向と仮定すると、梁行柱間は1.82mを測る。柱穴には、直径0.42m～0.32mを測る柱痕跡が観察できた。

#### b. 溝

#### 5SD009

調査区北東隅に確認できたもので、遺構形状として細長い形状をとるものの、溝掘り方の西側の上端のみ確認しており、溝と確定するには躊躇する。検出長は3.0m、深さ0.15mを測る。溝内には、灰白色粘土が堆積していた。また遺構北部には垂角礫が確認できている。

### D. 遺物

#### a. 掘立柱建物

#### 5SB001a (図176-1)

#### 弥生土器

壺(1) 壺1bの口縁部片である。口縁端部はヨコナデによって若干凹んでいる。内外面とも器面は摩耗しているため調整は不明である。

#### 5SB001b (図176-2)

#### 弥生土器

器種不明(2) 底部破片である。器面調整は内外面ともナデ調整である。また、内外面とも丹塗りである。

#### 5SB001c (図176-3)

#### 弥生土器

壺(3) 壺1aの口縁部片である。内外面とも器面が摩耗しており調整は不明である。

#### 5SB001d1層 (図176-4～6)

#### 弥生土器

鉢(4) 鉢dの口縁部から胴部上半の破片である。内面にはナデの痕跡が残存している。

壺(5・6) 5は壺1a、6は壺1bの口縁部片である。6の内面には横方向の刷毛目調整がみられる。また、5の外表面と内面、6の外表面が丹塗りである。

#### 5SB001d2層 (図176-7)

#### 弥生土器

壺(7) 壺1bの口縁部片である。外面には縦方向の暗文風のミガキがみられ、外面・内面とも丹塗りが施されている。

【埋没時期】 中期前半(須玖I式)である。

#### 5SB005a (図176-8)

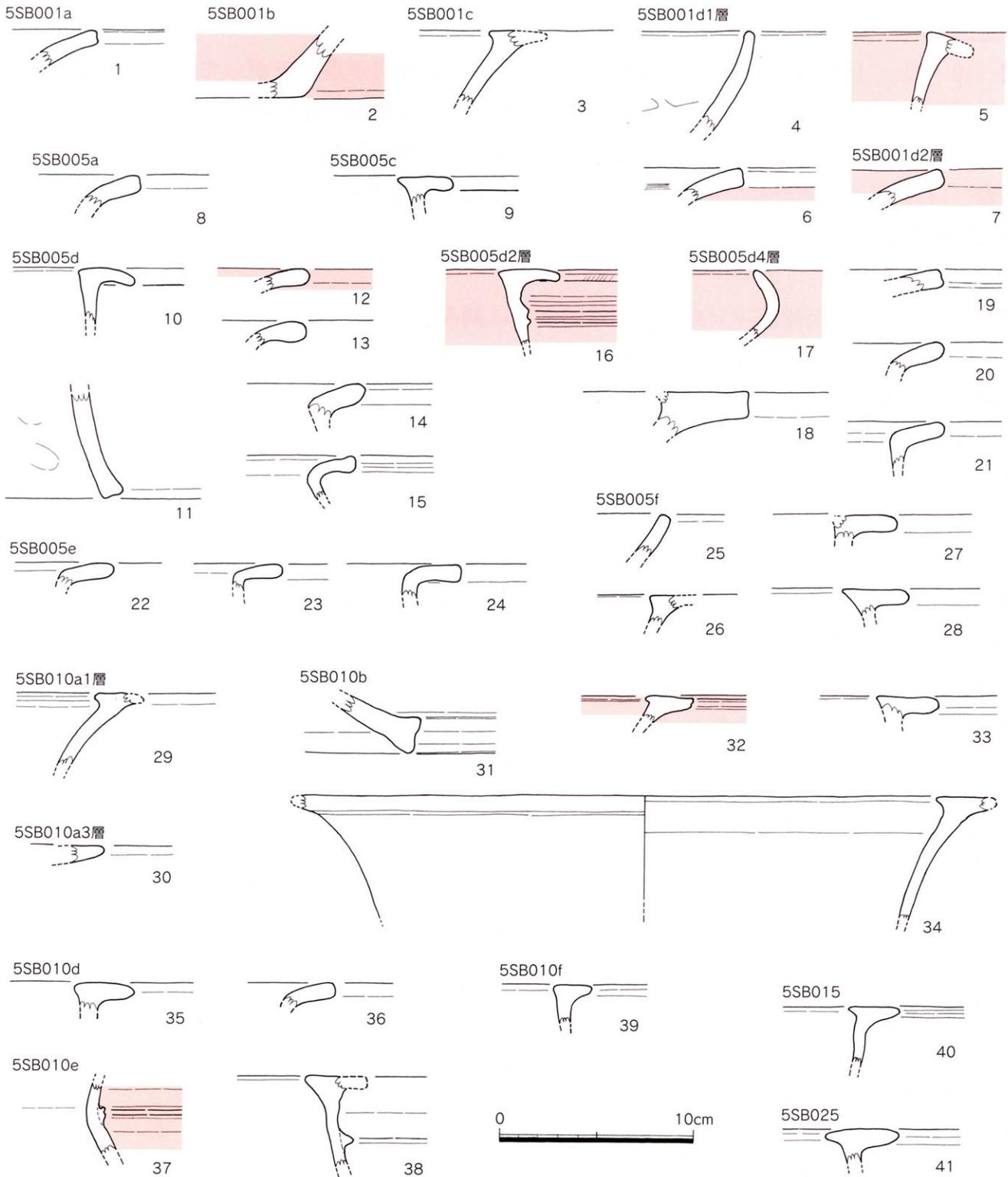


図176. 堀立柱建物出土遺物実測図 (S=1/3)

弥生土器

甕 (8) 甕 1b の口縁部片である。内外面とも摩滅のため調整は不明である。

5SB005c (図 175 - 9)

弥生土器

甕 (9) 甕 1a の口縁部片である。煤が付着している。

5SB005d (図 176 - 10 ~ 15)

### 弥生土器

甕 (10・12～15) 10は甕1aの口縁部片である。口縁端部が垂れ下がっている。12は甕2bの口縁部片であり、内外面とも丹塗りである。13～15は甕1bの口縁部片である。15はヨコナデによって口縁端部を肥厚させるとともに、端面には沈線状の凹みを入れている。

器台 (11) 器台の裾部片である。内面には指頭圧痕が観察される。

### 5SB005d2層 (図176-16)

### 弥生土器

甕 (16) 甕2aの口縁部片である。口縁端部には刻み目を入れ、口縁部下には断面M字状突帯をヨコナデによって貼り付けている。内外面とも丹塗りである。

### 5SB005d4層 (図176-17～21)

### 弥生土器

壺 (17・19) 17は壺4の口縁部片であり、内外面とも丹塗りである。19は壺1bの口縁部片である。ヨコナデによって口縁端部が若干凹んだ形態となっている。

壺×高坏 (18) 壺1aもしくは高坏aの口縁部片である。胎土には角閃石を少量含んでいる。

甕 (20・21) 20・21は甕1bの口縁部片である。いずれも器面が摩滅しており調整は不明である。

### 5SB005e (図176-22～24)

### 弥生土器

甕 (22～24) 22～24は甕1bの口縁部片である。いずれも器面が摩滅しており調整は不明である。なお、23・24には煤が付着している。

### 5SB005f (図176-25～28)

### 弥生土器

鉢 (25) 25は鉢dの口縁部片である。ヨコナデによって口縁部を整形している。

高坏 (26) 高坏aの口縁部片である。

甕 (27・28) 27・28は甕1aの口縁部片である。器面は摩滅しており調整は不明である。27には煤が付着している。

【埋没時期】 中期後半 (須玖Ⅱ式新段階) である。

### 5SB010a1層 (図176-29)

### 弥生土器

壺 (29) 壺1aの口縁部から頸部の破片である。口縁端部を欠損している。

### 5SB010a3層 (図176-30)

### 弥生土器

甕 (30) 甕1aの口縁部片である。

### 5SB010b (図176-31～34)

### 弥生土器

高坏 (31) 高坏の脚裾部の破片である。裾部をヨコナデによって肥厚させるとともに、端面には凹みを形成している。

**壺×高坏** (32) 壺 1a もしくは高坏 a の口縁部片である。内外面とも丹塗りである。

**壺** (34) 34 は壺 1a の口縁部から頸部であり、約 1 / 10 ほど残存しているのみである。口縁端部は欠損している。また、内外面とも摩滅しており調整は不明である。

**甕** (33) 甕 1a の口縁部片である。器面は摩滅しており調整は不明である。

**5SB010d** (図 176 - 35・36)

**弥生土器**

**甕** (35・36) 35 は甕 1a、36 は甕 1b の口縁部片である。いずれも器面は摩滅しており調整は不明である。

**5SB010e** (図 176 - 37・38)

**弥生土器**

**壺** (37) 壺 4 の頸部片である。断面 M 字状突帯をヨコナデによって貼り付け、突帯上部をつまみ上げている。外面は丹塗りである。

**甕** (38) 甕 1a の口縁部片である。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。

**5SB010f** (図 176 - 39)

**弥生土器**

**甕** (39) 甕 1a の口縁部片である。器面は摩滅しており調整は不明である。

**【埋没時期】** 中期後半 (須玖Ⅱ式) である。

**5SB015** (図 176 - 40)

**弥生土器**

**甕** (40) 甕 1a の口縁部片である。ヨコナデによって口縁部を整形している。

**【埋没時期】** 中期前半 (須玖Ⅰ式古段階) である。

**5SB025** (図 176 - 41)

**弥生土器**

**甕** (41) 甕 1a の口縁部片である。内側への突出が著しい鋤形口縁である。

**【埋没時期】** 中期前半 (須玖Ⅰ式新段階) である。

**b. 溝**

**5SD006** (図 177 - 2・3)

**弥生土器**

**甕** (2・3) 2・3 は甕 1a の口縁部片である。3 の内面には指頭圧痕が残存している。

**【形成・埋没時期】** 中期前半 (須玖Ⅰ式新段階) である。

**5SD009** (図 177 - 5・6)

**弥生土器**

**鉢** (5) 鉢 d の口縁部から胴部片である。外面は縦・斜方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛調整である。

**甕** (6) 甕 1a の口縁部片である。ヨコナデで口縁部を整形している。

**【埋没時期】** 中期後半 (須玖Ⅱ式古段階) である。

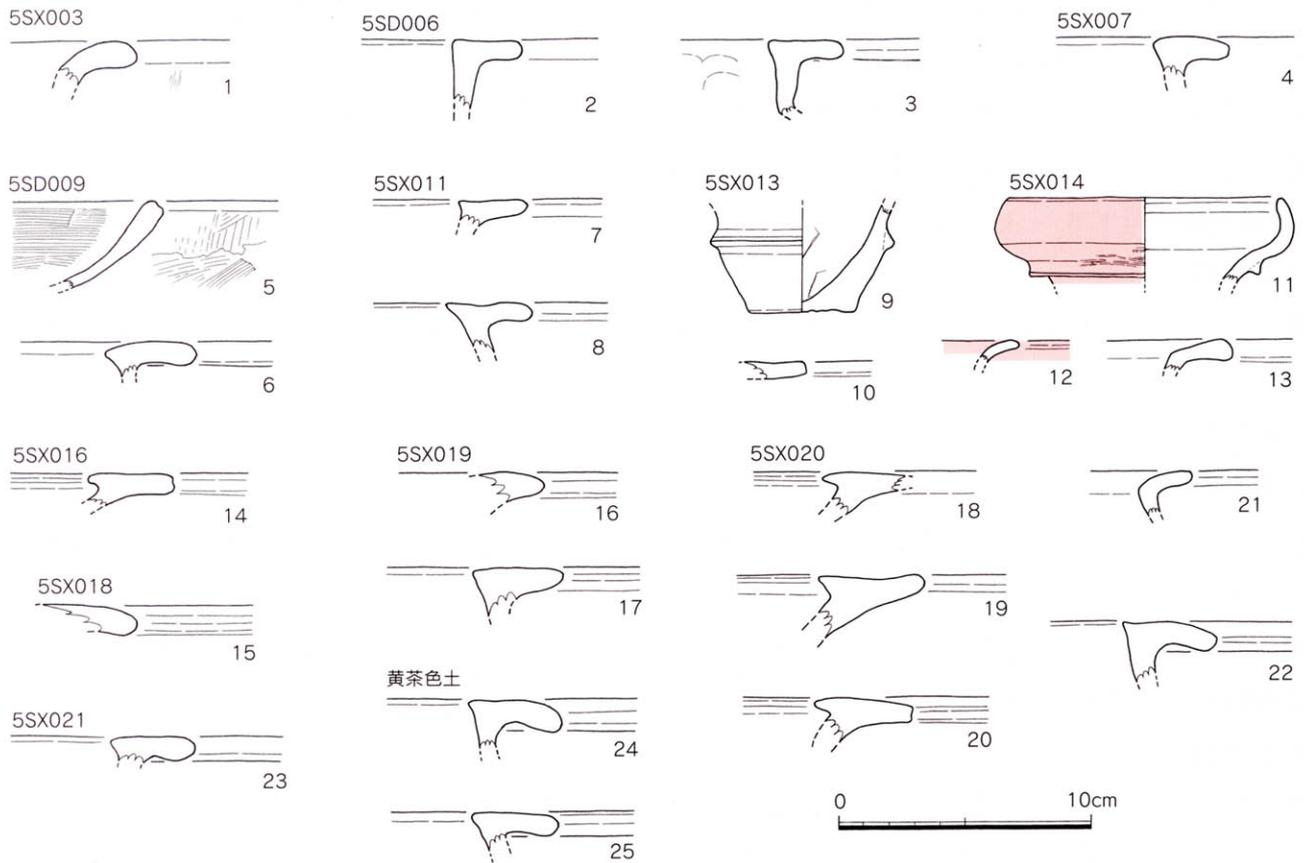


図177. 溝・その他の遺構・土層出土遺物実測図 (S=1/3)

c. その他の遺構 (小穴、凹み)

5SX003 (図 177 - 1)

弥生土器

甕 (1) 甕 1b の口縁部片である。外面には縦方向の刷毛目が若干残存している。

5SX007 (図 177 - 4)

弥生土器

甕 (4) 甕 1a の口縁部片である。煤が付着している。

5SX011 (図 177 - 7・8)

弥生土器

甕 (7・8) 7・8は甕 1a の口縁部片である。7には煤、8にはコゲが付着している。

5SX013 (図 177 - 9・10)

弥生土器

ミニチュア土器 (9) ミニチュア土器の胴部から底部であると思われるが全体的な形態がどういったものかは不明である。胴部には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。

甕 (10) 甕 2a の口縁部片である。口縁部上面には丹塗りが残存している。

5SX014 (図 177 - 11 ~ 13)

弥生土器

壺 (11・12) 11は壺4の口縁部であり、1/6ほど残存している。口縁部下には三角突帯をヨコナデによって貼り付けている。外面は横方向のミガキで調整しており、さらに外面には丹塗りを施している。12は壺2bの口縁部片である。内外面とも丹塗りである。

甕 (13) 甕1bの口縁部片である。内外面とも摩滅しており調整は不明である。

5SX016 (図177-14)

弥生土器

壺 (14) 壺1aの口縁部片である。

5SX018 (図177-15)

弥生土器

甕 (15) 甕1aの口縁部片である。口縁端部が垂れ下がっている。また、煤が付着している。

5SX019 (図177-16・17)

弥生土器

甕(16・17) 16・17は甕1aの口縁部片である。いずれも器面が摩滅しており調整は不明である。

5SX020 (図177-18~22)

弥生土器

高坏 (18) 高坏aの口縁部片である。摩滅しており調整は不明である。

高坏×壺 (19) 壺1aあるいは高坏aの口縁部片である。口縁部上面はヨコナデによって若干凹みを形成している。

壺 (20・21) 壺1a、21は壺2bの口縁部片である。20には煤が付着している。

甕 (22) 甕1aの口縁部片である。

ヨコナデによって口縁部を整形している。

5SX021 (図177-23)

弥生土器

甕 (23) 甕1aの口縁部片である。

ヨコナデによって口縁端部を肥厚させている。

d. 土層

d-1. 黄茶色土 (図177-24・25)

弥生土器

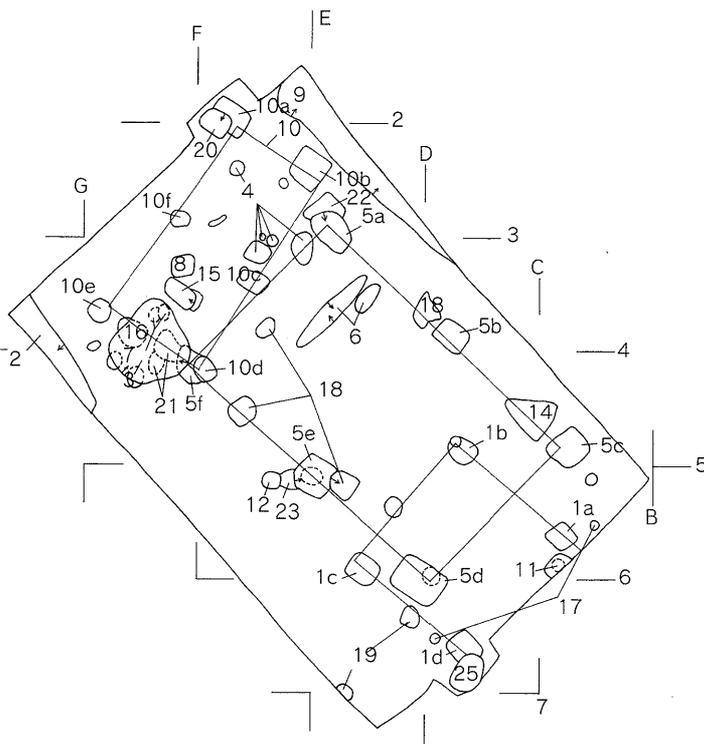
甕 (24・25) 24・25は甕1aの口縁部片である。24は口縁端部が特に垂れ下がっている。

E. 小結

当該調査区では、ほぼ並列するよ

(遺物取り上げ時の遺構、その後変更)

図178. 千足町遺跡 第5次調査 遺構略測図 (S=1/200)



うに弥生期の掘立柱建物のみが確認でき、隣接する5次調査での成果を含めて考えると当該調査区東を河川が流れ、自然堤防上に高くなった箇所建物に建造していたものと考えられる。なお今次調査で検出したものは、掘立柱建物のみが検出できており、集落内における空間的位置ならびに社会的な位置が今後問題となってくる。

今一つの調査視点であった水城東門からの大宰府への進入路の実態については、今次調査成果では明らかにできなかった。今後の調査成果を待ちたい。

## VI. 自然科学分析

### 1. 動物種同定

#### A. 歯

国分松本遺跡第4次調査検出の4ST035から歯が出土している。出土状況に関しては上甕と考えられる土器棺内に沈着した朱とともに出土しており、その位置から頭部下位に想定することは可能である。他の骨は確認できておらず、出土した歯に関しても破砕しているものの1点ないしは2点程度のものであると考えられる。その形状から成人の臼歯であると推定できるのみで、それ以上の情報を得ることは不可能であった。

### 2. 古環境復原

#### A. 花粉分析

##### a. 国分松本遺跡7次の花粉分析

###### a-1. 目的

弥生時代前期末～弥生時代中期の河道埋積物（SD001）の花粉分析を実施し、当時の古植生に関する情報を得る。

###### a-2. 試料

試料は、SD001の6層と9層から採取された土壌試料2点である。

###### a-3. 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

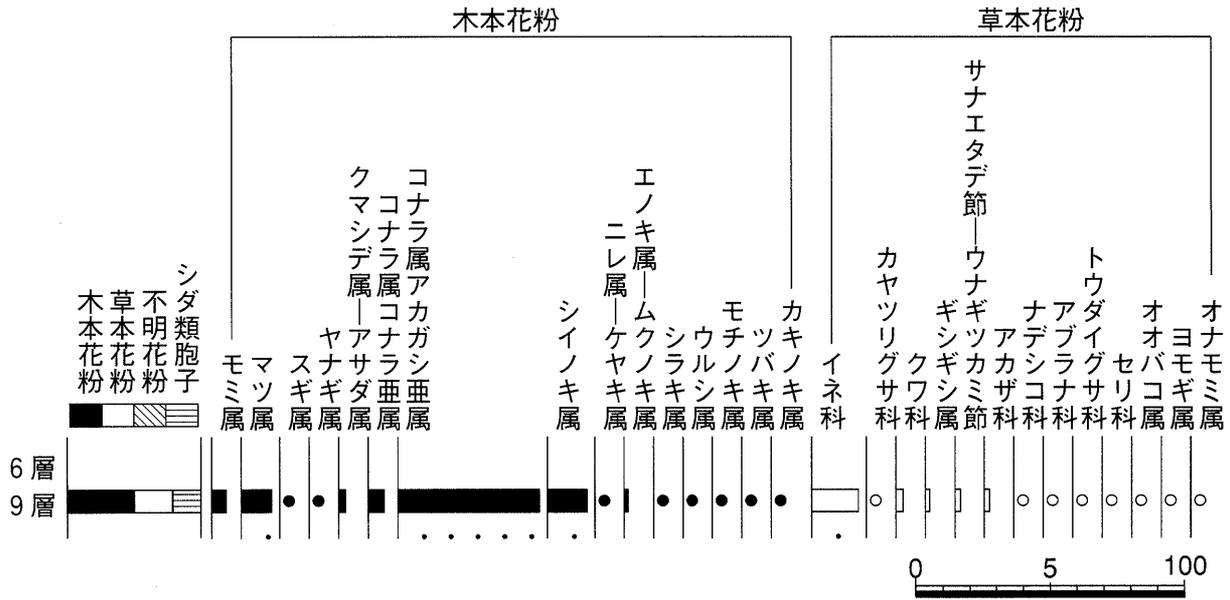
結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総花粉・孢子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し、図示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

###### a-4. 結果

結果を表1・図178に示す。6層からは全く検出されなかったが、9層からは花粉化石が検出された。木本花粉では、アカガシ亜属の割合が高く、モミ属、シイノキ属、マツ属などを伴う。草本花粉では、イネ科が多く、クワ科やギシギシ属などがみられる。

表1. 花粉分析結果

種 類	試料番号	6層	9層
木本花粉			
モミ属		-	11
マツ属		-	23
スギ属		-	2
ヤナギ属		-	2
クマシデ属-アサダ属		-	5
コナラ属コナラ亜属		-	12
コナラ属アカガシ亜属		-	108
シイノキ属		-	30
ニレ属-ケヤキ属		-	1
エノキ属-ムクノキ属		-	3
シラキ属		-	1
ウルシ属		-	1
モチノキ属		-	1
ツバキ属		-	2
カキノキ属		-	2
草本花粉			
イネ科		-	70
カヤツリグサ科		-	1
クワ科		-	11
ギシギシ属		-	6
サナエタデ節-ウナギツカミ節		-	8
アカザ科		-	8
ナデシコ科		-	1
アブラナ科		-	2
トウダイグサ科		-	1
セリ科		-	1
オオバコ属		-	2
ヨモギ属		-	3
オナモミ属		-	1
不明花粉		-	2
シダ類孢子			
シダ類孢子		-	62
合 計			
木本花粉		0	204
草本花粉		0	115
不明花粉		0	2
シダ類孢子		0	84
総計(不明を除く)		0	403
寄生虫卵			
鞭虫卵		-	21
蛔虫卵		-	1



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

図 178. 花粉化石群集

**a-5. 考察**

今回の花粉化石群集をみると、アカガシ亜属の割合が高く、シイノキ属も検出される。これらの照葉樹は、暖温帯林のなかでも主要な構成要素であることから、多くの森林を作っていたものと考えられる。なお、暖温帯林構成種の中では、クスノキ科が重要な要素を占めるが、クスノキ科の花粉は膜の構造が非常に弱く、化石としては残らないため、花粉化石群集には反映されない。一方で、九州地方では、土壤中から樹木起源の植物珪酸体が多産することがしばしばあるが、この中にはクスノキ科由来のものも多く含まれているとの報告がある（杉山・早田, 1994）。このことから、シイ類やカシ類に混じって、クスノキ科も多く分布していたと考えられる。

また、モミ属、スギ属などの針葉樹林の存在は、縄文時代後期・晩期から起こる気候の多雨・冷涼化が原因と考えられる（那須, 1989）。このような傾向は、九州地方各地で行われた花粉分析結果にも、同様に現れている（Hatanaka, 1985 など）。

**B. 植物種同定**

**a. 国分千足町遺跡の自然科学分析**

**a-1. はじめに**

国分千足町遺跡第4次調査(以下「当該調査」と記載)では、木材が生木の状態で出土している。本報告では、当該調査の木材について樹種同定を行い、木材利用や古植生に関する資料を得る。

**a-2. 木材の樹種**

**a-2-1. 試料**

試料は、4SK015 から出土した木材3点（試料番号1-3）である。木材の用途等の詳細は不明である。

**a-2-2. 分析方法**

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

### a-2-3. 結果

木材は、全て常緑広葉樹のツブラジイに同定された。解剖学的特徴等を記す。

・ツブラジイ (*Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky)      ブナ科シノキ属

環孔性放射孔材で、孔圏部は接線方向に疎な3-4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。

### a-2-4. 考察

4SK015から出土した木材の樹種は、全て常緑広葉樹のツブラジイであった。ツブラジイは、同属のスダジイやコナラ属アカガシ亜属（カシ類）とともに、暖温帯常緑広葉樹林の主要構成種である。本州（伊豆半島以南西南）・四国・九州に分布し、また植栽される高木で、スダジイが沿海地に多くみられるのに対し、ツブラジイはより内陸に多く生育する。材はやや重硬で、割裂性は大きく、加工はやや容易、耐朽性は中程度～低い。薪炭材としての用途が最も多く、器具・家具・建築材などにも用いられる。これらのことから、4SK015が利用されていた時期に周囲に常緑広葉樹のツブラジイが生育していたことが推定される。今後、木材の用途等を明らかにしたうえで、改めて木材利用等について検討したい。

## b. 国分正尻遺跡第2次調査の自然科学分析

### b-1. 試料

試料は、2ST045②の棺内堆積土中から出土した炭化材試料1点である。なお、炭化材については1点中に複数の炭化材が入っている。

### b-2. 分析方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

### b-3. 結果

・サカキ (*Cleyera japonica* Thunberg pro parte emend. Sieb. et Zucc.)

ツバキ科サカキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～3個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、単列、1～20細胞高。

### c-3. 考察

検出された種類はサカキであった。サカキは神事などで使われる重要な木であるが、暖温帯林では普通にみられる種類であることから、遺跡周辺に生育していたものに由来すると思われる。

## C. 粒度分析

## a. 国分松本遺跡 7 次の粒度分析

### a-1. 目的

国分松本遺跡において採取された堆積物の粒度分布を調査し、層相変化・堆積環境の基礎的試料を得ることを目的とする

### a-2. 試料

分析試料は、国分松本遺跡 SD001 の 1 - 2 層、2 層、3 層、7 層（細）、7 層（粗）、8 層、12 層の 7 試料である。

### a-3. 分析方法

碎屑性堆積物研究会 (1983) の方法を参考に、礫・砂粒子画分はふるい分け法、シルト・粘土粒子画分はピペット法で行った。また、粒径区分は Wentworth(1922) に従った。

試料を風乾して、2 mm φ 篩でふるい分ける。2 mm φ 篩上粒子は水洗して、重量を測定する。一方、2 mm φ 篩下粒子は 40.00g をビーカーに秤量し、蒸留水と 30% 過酸化水素水を加え、熱板上で有機物分解を行う。分解終了後、蒸留水と分散剤（4% カルゴン）を加え、攪拌しながら 30 分間音波処理を行う。沈底瓶にこの懸濁液を移し、往復振とう機で 1 時間振とうする。振とう終了後、水で全量を 1000ml にする。この沈底瓶を 1 分間手で激しく振り、直ちに静置する。ピペット法に準じて所定時間に所定深度から粘土・シルト画分 (0.063mm >)、粘土画分 (0.0039mm >) を 10ml 採取し、105℃ で 24 時間乾燥させた後、重量を測定し、加積通過率（質量%）を求める。ピペット法終了後、懸濁液を 63 μ m 篩で水洗いする。63 μ m 篩残留物を 105℃ で 5 時間熱乾後、1.0、0.5、0.25、0.125mm φ 篩でふるい分け、各篩毎に篩上残留物の質量を測定し、加積通過率（質量%）を求める。ピペット法およびふるい分けで求められる加積通過率（質量%）から、粒径加積曲線を描き、Wentworth(1922) の粒径区分毎の質量を算出する。

### a-4. 結果

粒度分析結果を表 2、Folk & Ward (1957) による評価結果を表 3 に示した。また、粒度分析加積曲線を図 179 ~ 181 に示した。

#### ・ 1 - 2 層

粒径の中央値 0.59 φ、平均値 1.23 φ、最頻値 -0.66 φ の中粒な砂質堆積物に分類される。歪度は 0.55 で、「著しい正」に評価される。尖度は 1.26 で「突出」しており、淘汰度を表す分級度は 2.57 で、評価は「非常に悪い」となる。

表 2. 粒度分析結果

試料名	粒径区分 礫 2.00mm<	砂					泥	
		極粗粒砂 2.00~ 1.00mm	粗粒砂 1.00~ 0.50mm	中粒砂 0.50~ 0.25mm	細粒砂 0.25~ 0.125mm	極細粒砂 0.125~ 0.063mm	シルト 0.063~ 0.0039mm	粘土 0.0039mm>
SD001 1-2層	33.7	14.8	16.0	11.3	7.3	3.5	7.3	6.0
SD001 2層	17.0	15.7	15.0	12.4	9.9	5.7	13.2	11.0
SD001 3層	39.1	15.8	12.2	9.6	6.5	3.3	6.8	6.8
SD001 7層(細)	15.8	12.3	14.5	14.3	12.0	6.3	13.9	10.9
SD001 7層(粗)	26.4	14.9	14.7	13.4	9.7	4.3	8.9	7.7
SD001 8層	27.5	11.3	12.7	12.9	10.4	5.5	11.5	8.1
SD001 12層	32.7	13.9	13.8	12.0	9.3	4.7	7.9	5.6

表 3. 粒度組成解析結果

試料名	Md(中央値)	Mz(平均値)	Mo(最頻値)	Sk(歪度)	$\sigma$ (分級度)	Kg(尖度)			
SD001 1-2層	0.59 $\phi$ (0.663mm)	1.23 $\phi$ (0.426mm) (中粒砂)	-0.66 $\phi$ (1.585mm)	0.55	著しい正	2.57	非常に悪い	1.26	突出
SD001 2層	1.67 $\phi$ (0.314mm)	2.91 $\phi$ (0.133mm) (細粒砂)	-0.66 $\phi$ (1.585mm)	0.50	著しい正	3.65	非常に悪い	0.78	偏平
SD001 3層	0.04 $\phi$ (0.974mm)	1.07 $\phi$ (0.477mm) (中粒砂)	-0.66 $\phi$ (1.585mm)	0.73	著しい正	2.65	非常に悪い	1.33	突出
SD001 7層(細)	2.02 $\phi$ (0.247mm)	3.04 $\phi$ (0.121mm) (細粒砂)	-0.66 $\phi$ (1.585mm)	0.42	著しい正	3.63	非常に悪い	0.77	偏平
SD001 7層(粗)	1.10 $\phi$ (0.467mm)	2.21 $\phi$ (0.217mm) (細粒砂)	-0.66 $\phi$ (1.585mm)	0.54	著しい正	3.23	非常に悪い	1.15	突出
SD001 8層	1.38 $\phi$ (0.384mm)	2.55 $\phi$ (0.170mm) (細粒砂)	-0.66 $\phi$ (1.585mm)	0.50	著しい正	3.44	非常に悪い	1.00	中間的
SD001 12層	0.74 $\phi$ (0.597mm)	1.43 $\phi$ (0.371mm) (中粒砂)	-0.66 $\phi$ (1.585mm)	0.52	著しい正	2.65	非常に悪い	1.12	突出

注) 評価はFolk &amp;Ward(1957)による

## 2層

粒径の中央値 1.67  $\phi$ 、平均値 2.91  $\phi$ 、最頻値 -0.66  $\phi$  の細粒な砂質堆積物に分類される。歪度は 0.50 で、「著しい正」に評価される。尖度は 0.78 で「偏平」であり、淘汰度を表す分級度は 3.65 で、評価は「非常に悪い」となる。

## ・ 3層

粒径の中央値 0.04  $\phi$ 、平均値 1.07  $\phi$ 、最頻値 -0.66  $\phi$  の中粒な砂質堆積物に分類される。歪度

は 0.73 で、「著しい正」に評価される。尖度は 1.33 で「突出」しており、淘汰度を表す分級度は 2.65 で、評価は「非常に悪い」となる。

## ・ 7層(細)

粒径の中央値 2.02  $\phi$ 、平均値 3.04  $\phi$ 、最頻値 -0.66  $\phi$  の細粒な砂質堆積物に分類される。歪度は 0.42 で、「著しい正」に評価される。尖度は 0.77 で「偏平」であり、淘汰度を表す分級度は 3.63 で、評価は「非常に悪い」となる。

## ・ 7層(粗)

粒径の中央値 1.10  $\phi$ 、平均値 2.21  $\phi$ 、最頻値 -0.66  $\phi$  の細粒な砂質堆積物に分類される。歪度は 0.54 で、「著しい正」に評価される。尖度は 1.15 で「突出」しており、淘汰度を表す分級度は 3.23 で、評価は「非常に悪い」となる。

## ・ 8層

粒径の中央値 1.38  $\phi$ 、平均値 2.55  $\phi$ 、最頻値 -0.66  $\phi$  の細粒な砂質堆積物に分類される。歪度は 0.50 で、「著しい正」に評価される。尖度は 1.00 で「中間的」であり、淘汰度を表す分級度は 3.44 で、評価は「非常に悪い」となる。

## ・ 12層

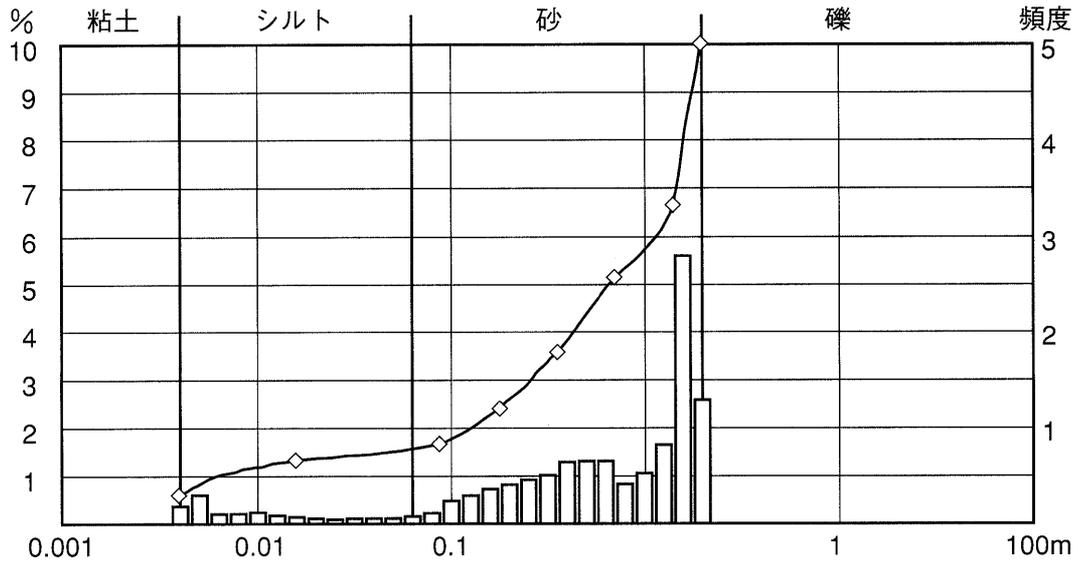
粒径の中央値 0.74  $\phi$ 、平均値 1.43  $\phi$ 、最頻値 -0.66  $\phi$  の細粒な砂質堆積物に分類される。歪度は 0.52 で、「著しい正」に評価される。尖度は 1.12 で「突出」しており、淘汰度を表す分級度は 2.65 で、評価は「非常に悪い」となる。

## a-5. 考察

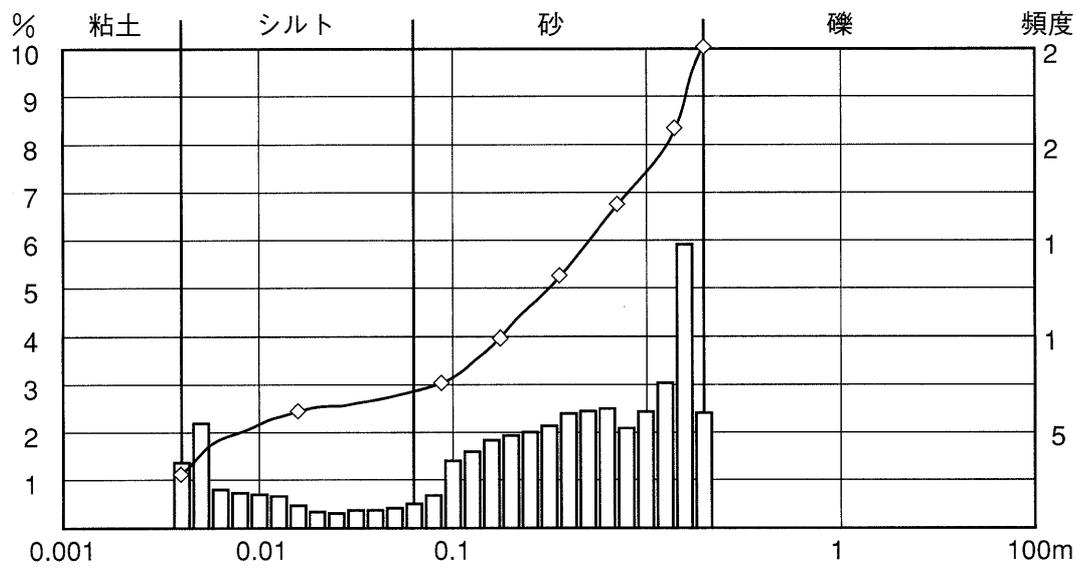
本地点の堆積物は全体的に比較的多くの礫を含み、粘土、シルトが少ないことから、全体的には細粒～中粒の砂質堆積物に分類される。また、歪度が正に傾いており、淘汰が非常に悪い堆積物であることが指摘される。この中で、1-2層、3層、12層は平均粒径から同じ中粒砂に区分され、加積曲線も非常に近似した曲線を示すことから、同様な堆積過程を経て堆積さ

注.) 単位は重量%で表示。

1-2層



2層



3層

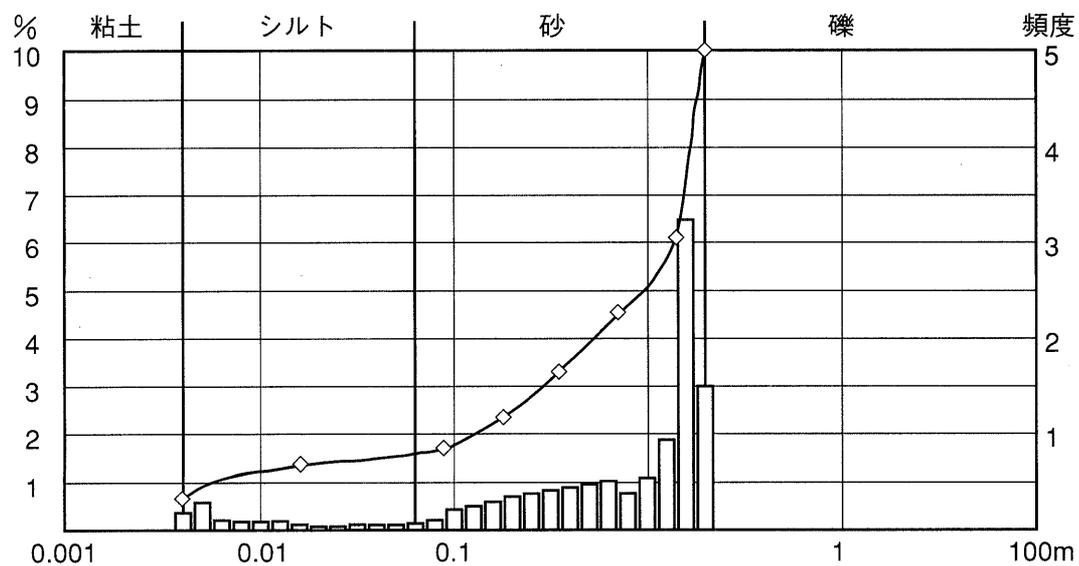
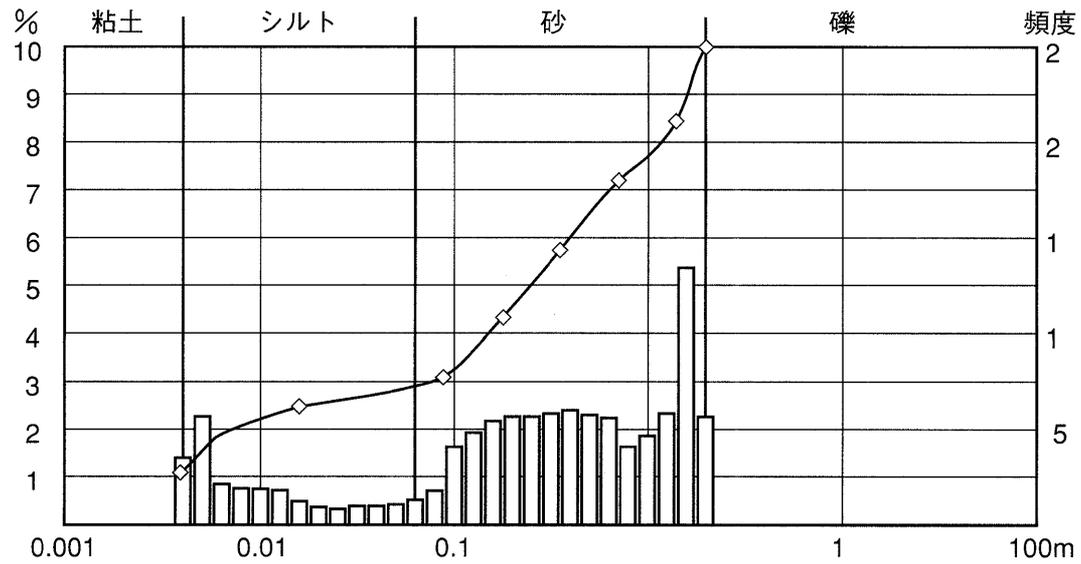
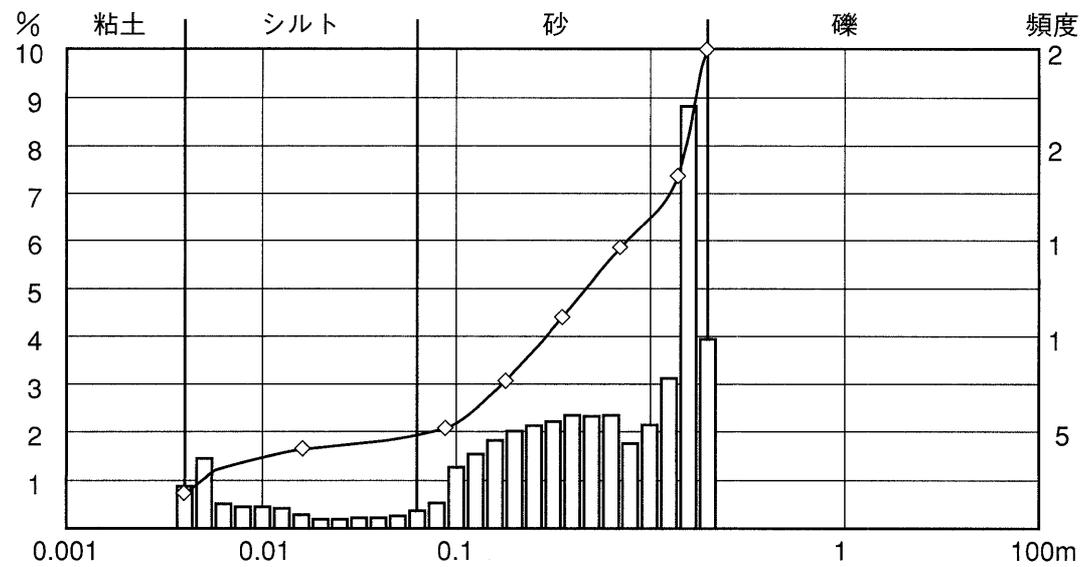


図179. 粒度分析加積曲線(1)

7層 (細)



7層 (粗)



8層

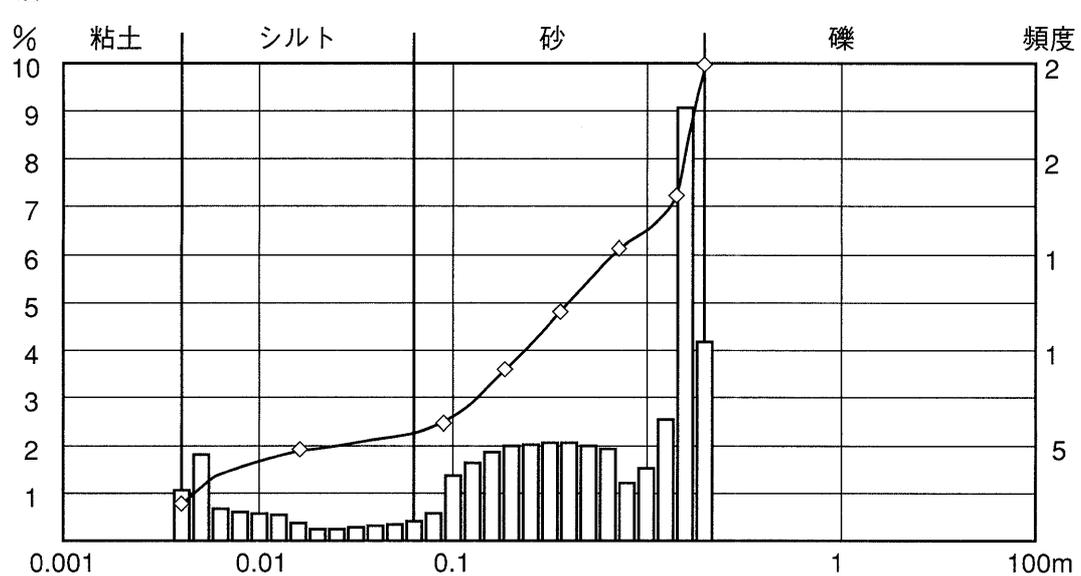


図180. 粒度分析加積曲線 (2)

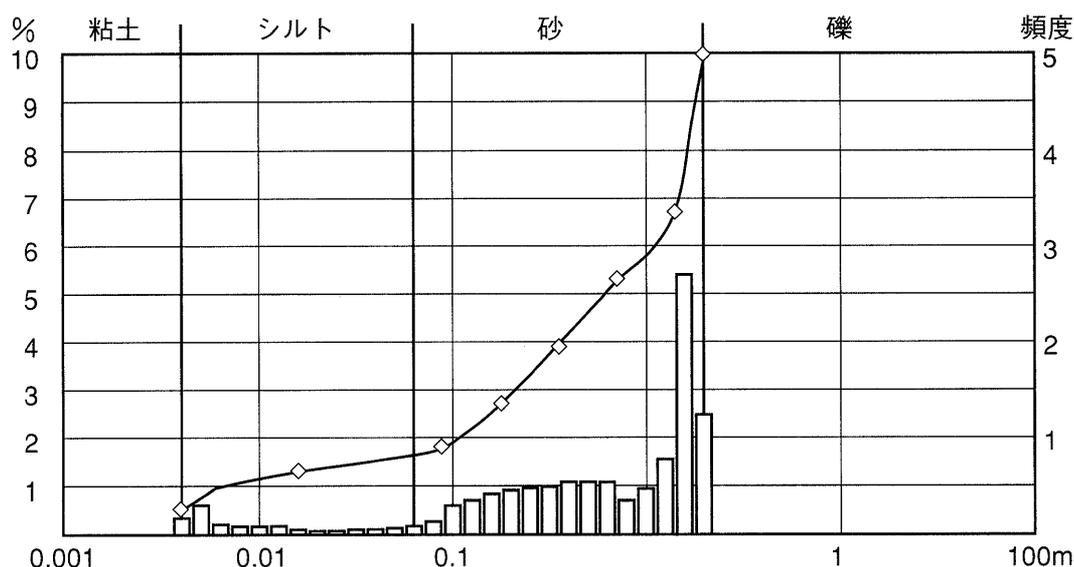


図181. 粒度分析加積曲線(3)

れたことが予想される。2層と7層（細）や7層（粗）と8層についても、加積曲線が近似していることから、同じことが予想される。今後は、これらの結果について、現地調査や他の分析結果に反映した解析が行われることが期待される。

### 3. 材質分析

#### A. 国分松本遺跡 7次粘土鉱物分析

##### a. 目的

国分松本遺跡において採取された試料について、材質分析を目的とし、粘土鉱物分析を実施した。

##### b. 試料

なお、今回対象とした試料は、国分松本遺跡 7次調査の SD001 から検出された黒褐色砂層の1点である。その目的は焼成温度の推定を行う。

##### c. 分析方法

和田（1966）に従い、粘土鉱物同定を実施した。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00mm φのふるいを通させる（風乾細土）。風乾細土約10gを500ml ビーカーに秤とり、水を適量加えた後、30%過酸化水素水10mlを加えて混合した。時計皿で蓋をして、約1時間放置した。これを砂浴上に乗せて加熱し、土壌から黒色味が完全に抜けるまで過酸化水素水を5mlずつ滴下し、分解を続けた。分解終了後、ほとんど上澄みがなくなるまで加熱を続け、過剰の過酸化水素水を分解除去した。冷却後、Mehra-Jackson抽出液を加え、80℃まで加熱し、約2gのヒドロサルファイトナトリウム（ $\text{Na}_2\text{S}_2\text{O}_4$ ）を加え、攪拌した後、15分間放置した。直ちに遠心分離し、上澄み液を捨て、さらに蒸留水で2回洗浄した。次に超音波処理し、分散させた後、1000ml沈底瓶に移した。液温20℃の状態ですべて8時間静置した後、水面下10cm深にサイフォンを挿入し、粘土画分（ $2\mu\text{m}$  >）の懸濁液を採取した（粘土懸濁液）。懸濁液の一定量を2本の遠沈管に採取し、1N酢酸ナトリウム-酢

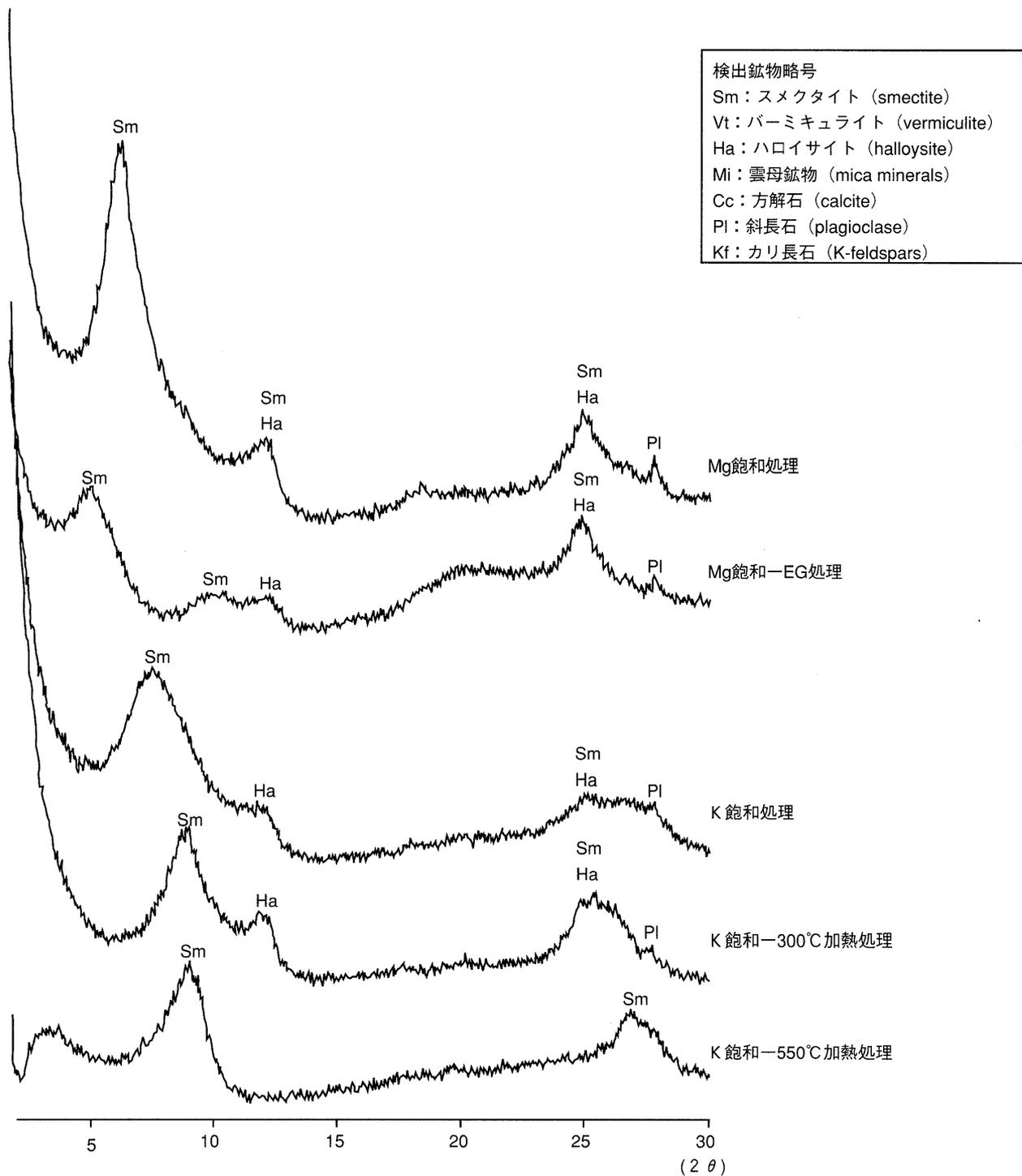


図182. 粘土鉱物X線回折

酸緩衝液 (pH5.0) を加え、内容物を攪拌した後、上澄み液を遠沈除去した。この操作をもう 1 回繰り返した。遠沈管の 1 本に 1 N 酢酸マグネシウム溶液 (pH7.0) を加え (マグネシウム飽和試料)、もう 1 本の遠沈管に 1 N 酢酸カリウム溶液 (pH7.0) を加え (カリウム飽和試料)、遠沈洗浄した。この操作を更に 2 回繰り返し、最後に水を加えて過剰の塩溶液を除いた。遠沈管の内容物に水を加えて懸濁状態とし、その懸濁物をスライドガラス上に採取した。この液をガラス全面に拡げ、風乾した。これらの試料を X 線回折装置によって、以下の条件で測定した。

装 置：島津制作所製 XD-3 A      Time Constant：2.0sec  
Target：Cu (K $\alpha$ )      Scanning Speed：2 $\frac{1}{\circ}$ /min  
Filter：Ni      Chart Speed：2cm/min  
Voltage：30KVP      Divergency：1 $\frac{1}{\circ}$   
Current：30mA      Receiving Slit：0.3mm  
Count Full Scale：5,000C/S      Scanning Range：2 $\sim$ 30 $\frac{1}{\circ}$

#### d. 結果

土壤粘土鉱物の X 線回折図を、図 182 に示した。

##### ・国分松本遺跡 7 次 SD001 黒褐色砂

本試料では、スメクタイト (smectite) が主要粘土鉱物として確認されるほか、少量のハロイサイト (halloysite) の存在が認められた。また、一次鉱物として僅かではあるが、斜長石 (plagioclase) の存在が認められる。

#### e. 考察

粘土を加熱していくと、種々の鉱物が生成し、あるいは逆に変態して消失する。X 線回折分析は粘土のこの性質を利用し、試料中にどの種の鉱物が存在するかを検出することによって焼成温度を推定する手法である。たとえば、イライトは 950 $\text{C}$  までしか存在しないので、イライトの回折スペクトルが検出されなかったならば 950 $\text{C}$  以上の焼成であり、さらに斜長石は 1100 $\text{C}$  までしか存在しないので、斜長石の回折スペクトルが検出されたならば 1100 $\text{C}$  以下の焼成温度であると推定される。国分松本遺跡 7 次の黒褐色砂は、550 $\text{C}$  以上の被熱によって変態・消失される鉱物であるハロイサイトの存在が顕著に認められたことから、この試料においては 550 $\text{C}$  以上の焼成を受けたとは考えにくい。なお、550 $\text{C}$  以下の温度推定については、被熱による脱水作用によって粘土鉱物の結晶格子の距離が変化を受けるものの、後天的に吸湿などの可逆的作用が予想されることから、粘土鉱物からの温度推定は難しいものとなる。したがって、今回の試料については、仮に焼成を受けていたとしても 550 $\text{C}$  以下の低温であると考えられるが、それ以外の詳細な温度推定は不明である。粘土鉱物による焼成温度推定では、粘土が産地によって組成のバラツキが大きく複雑であり、温度による物理的・化学的変化も至って複雑なものであるため、実際には対照試料を用いた焼成実験を行う必要がある。

#### A. 土器胎土分析

##### a. 分析目的

今回報告する国分地区遺跡群は、早良型花崗岩を基盤層とし、低位段丘構成層上面に立地し

ている。近年太宰府市域でも弥生期の遺跡が展開していることが明らかとなり、御笠川対岸の大佐野脇道遺跡でも弥生中期の遺跡が確認されてきている。今回の分析目的は、これら市域に所在している弥生中期の遺跡にて出土する土器に、何か識別するための属性がないかどうかについて検討することを目的として実施した。土器製作のために用いられる粘土は、仮説上遺跡の立地する地質環境に左右されるが、分析対象とした2遺跡とも太宰府市内に所在しており、早良型花崗岩を母岩としていることから、含有鉱物の定性分析ないしは化学組成の定性・定量分析では両者を識別することは困難と判断された。したがって分析方法としては、松田順一郎他が行った鉱物組成および鉱物粒径を分析視点とした胎土分析を行った（松田、1999）。分析はパリノサーヴェイへの委託事業として実施している。ただし大佐野脇道遺跡周辺では花崗班岩や火山灰堆積層が観察されることから、これらに由来する鉱物が識別属性として抽出できるかどうか検討課題である（太宰府市、2001）。

ここまで記載した目的は基礎的なもので、その背後には分業論を視野に入れた分析意図がある。具体的には集落構成員を維持するための生活材の質ならびに量が、自立的なのか外部依存的なのかを両極として、本報告で取り上げた遺跡群を形成した人々の社会がどちらの極に傾く社会であるのかを明らかにするための一分析になる。また分業論の一つとして流通論があり、どのような経済的な構造に立脚して生活材が入手され、消費されるのか、一つ土器生産に視点を置いても、材料入手→製作→焼成→使用までの諸段階において様々な流通像に関する課題が解決される必要がある。これら膨大な学説史に描かれる弥生社会像の検証に本分析では不十分であり、ここでは、最も基礎的な材料提示としての一部の胎土分析結果を提示するととどめている。今後は太宰府市所在の分析資料を蓄積してゆくことで見通しが描けることが予想できるが、今回の分析結果を見ても、同一型式とした土器について胎土上分類できることが明らかとなった。これは個々の土器が「記憶」としてとどめている作り手の「くせ」を表現したものと解するならば、その「くせ」を作り出した社会的な背景が問題となる。またこの「くせ」が歴史的に意味のある群にまとめられるとき、集落内での「くせ」であるのか、集落外にその「くせ」の起源を求めるのかによって、分業論へ発展する糸口がつかめることになる。さらに集落外の「くせ」を有する製品と集落内の「くせ」を有する製品との比率、この場合、単一形式・単一器種・複数形式・複数器種など組成にまで視点を広げることで、その背景を立論する手がかりとなる。これ以外にも多くの課題を解決する必要がある、そういう点からも今回の分析は単に作り手の「くせ」の存否を認識するのに有効な分析であるのかを考える上での基礎作業以前の下準備にすぎない。

## b. 分析試料抽出にあたって

分析資料抽出にあたっては、比較する2遺跡間において自然環境上、隔絶する条件、例えば流系の異なる河川、地質環境の違いなどが想定できる遺跡を抽出する必要があった。そこで、陣ノ尾川および大谷川に挟まれた国分諸遺跡と御笠川を挟んで対岸に所在し、大佐野川流域に位置している脇道遺跡を抽出することにした。地質環境については先述したように早良型花崗岩のみによって構成される国分諸遺跡に対し、花崗班岩および火山灰が分布している脇道遺跡

など地質環境上も差異がある。また時代性について同時期ないしは近接した時期の土器を抽出する必要がある。ただし分析資料として抽出した土器の肉眼観察に基づく「型式」分類との比較を行い、型式へ昇華させる必要性から完形に近い遺物を抽出した。抽出した土器型式は、須玖Ⅰ式新段階～Ⅱ式古段階に属しているものを抽出している。なお遺跡特性を把握する必要から、一遺跡あたり20点を抽出し比較を試みている。なお今回の分析結果が、等しく国分諸遺跡ならびに大佐野脇道遺跡の代表特性とすることは早計である。比較対象物を広げて、市域さらには隣接地域の分析を行い検討を加える必要がある。その際の視点としては土器の製作、移動を視野に入れた分析が必要となり、今回分析を行った抽出遺物のような各器種ではなく限定的に目的をもって器種を選択して行う必要がある。

### c. 分析 (国分松本遺跡の自然科学分析)

#### c-1. はじめに

当社ではこれまで太宰府市内各地の遺跡において自然科学分析を行い、当時の古環境推定や植物利用、遺物に関する情報を蓄積してきた。

本報告では、国分松本遺跡第7次調査により出土した弥生土器の胎土分析を行う。対象とされた土器は、北部九州の弥生時代中期を代表する須玖式土器である。遺物の肉眼観察の所見により、胎土の色調、形態的特徴および時期（Ⅰ式、Ⅱ式）が分類されており、特に形態的特徴は、地域的な特徴とされ、遠賀川以東と遠賀川以西という地域が設定されている。国分松本遺跡は遠賀川以西地域に所在するが、遠賀川以東地域の特徴を有する土器も認められており、これらの材質すなわち胎土を明らかにすることは、土器の移動や人のみの移動など、地域間の交流のあり方を考える上で重要な資料の作成になると考えられる。本報告では、国分松本遺跡第7次調査出土試料の分析結果に関して考察を行う。

#### c-2. 試料

胎土薄片作製鑑定に用いた試料は、国分松本遺跡第7次調査で出土した須玖式土器の土器片15点である。各試料には試料番号11～15までが付されている。各試料の分類を一覧表にして表4に示す。

#### c-3. 胎土薄片作製鑑定

表4. 胎土分析試料一覧 (1)

試料番号	遺跡名	調査回数	遺構名	地区番号	採集日付	色調系統	系統	器種	型式
11	国分松本遺跡	7	7ST155②	K18	990120	白系統	異系統	甕	須玖Ⅱ(新)
12	国分松本遺跡	7	7ST165①	L19	990121	白系統	異系統	甕	須玖Ⅱ(古)
13	国分松本遺跡	7	7ST165②	L19	990121	白系統	異系統	甕	須玖Ⅱ(新)
14	国分松本遺跡	7	7ST170①	L18	990122	白系統	異系統	甕	須玖Ⅰ(新)
15	国分松本遺跡	7	7ST180	K19	990122	白系統	異系統	甕	須玖Ⅱ(古)
16	国分松本遺跡	7	7ST195①	N13	990209	白系統	在地系統	甕	須玖Ⅰ(古)
17	国分松本遺跡	7	7ST195②	N13	990209	白系統	在地系統	甕	須玖Ⅰ(古)
18	国分松本遺跡	7	7ST205①	M13	991026	赤系統	在地系統	甕	須玖Ⅰ(新)
19	国分松本遺跡	7	7ST205②	M13	990126	赤系統	在地系統	甕	須玖Ⅰ(新)
20	国分松本遺跡	7	7ST210①	M13	990209	赤系統	在地系統	甕	須玖Ⅰ(新)
21	国分松本遺跡	7	7ST210②	M13	990209	赤系統	在地系統	甕	須玖Ⅰ(新)
22	国分松本遺跡	7	7ST220①	M13	990225	白系統	在地系統	甕	須玖Ⅰ(古)
23	国分松本遺跡	7	7ST220②	M13	990225	赤系統	在地系統	壺	須玖Ⅰ(古)
24	国分松本遺跡	7	7ST230①	L11	990208	白系統	異系統	甕	須玖Ⅰ(新)
25	国分松本遺跡	7	7ST310	L16	990311	赤系統	在地系統	壺	城ノ越

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩石片組成を求める方法と化学組成を求める方法とがある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。弥生土器のように比較的粗粒の砂粒を含む土器胎土の分析では、前者の方法の方が、胎土の特徴が捉えやすいこと、地質との関連性を考えやすいことなどの利点がある。さらに前者の方法の中でも薄片観察は、胎土中における砂粒の量はもちろんのこと、その粒径組成や砂を構成する鉱物および岩石片の種類なども捉えることが可能であり、得られる情報は多い。

この情報をより客観的な方法で表現したものとして、松田ほか（1999）の方法がある。これは、胎土中の砂粒について、中粒シルトから細礫までを対象とし、各粒度階ごとに砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を調べたものである。この方法では、胎土中における砂の含量や粒径組成により、土器の製作技法の違いを見出すことができるために、同一の地質分布範囲内にある近接した遺跡間での土器製作事情の解析も可能である。今回の分析では、地域的な設定として遠賀川以東と以西という区分がされているが、後述するように地質の分布は、遠賀川の東と西とで大きく異なるということはない。したがって、単に岩石片や鉱物片の種類のみを捉えただけでは、両地域間の土を区別することができないことも予想される。このことを考慮し、本分析では松田ほか（1999）の方法を用いる。以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製する。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにする。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて1mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行う。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数する。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度、砂粒の粒径組成、孔隙・砂粒・基質の割合を求める。

各試料の計数結果を表5に、各粒度階における鉱物・岩石出現頻度を図183に、胎土の砂粒の割合を図184、胎土中の砂の粒径組成を図185に示す（いずれもCD-ROMに搭載）。

いずれの試料も、砂粒の主体を占めるのは、石英、カリ長石、斜長石の鉱物片と多結晶石英および花崗岩類の岩石片である。これらのうち、石英、カリ長石、斜長石の3鉱物の量比をみると、試料番号11、12、15の3点はシルト径の石英または斜長石が比較的多い特徴が認められ、試料番号17～22までの6点は、3鉱物の量比が概ね同量程度で細粒砂径のものが多く多い傾向が認められる。

岩石片については、多結晶石英とした岩石片も、おそらく花崗岩類に由来するものである。花崗岩類と多結晶石英を合わせてみると、試料番号13と23に粗粒の岩石片がやや多く含まれる。また、試料によっては少量の火山ガラスが含まれるが、特に試料番号25には多く含まれる。火山ガラスの多くは、緩い曲率を持った平板状を呈するバブル型である。さらに、試料番号13と23は、粗粒の岩石片も多いが、シルト径の石英や斜長石も多いという特徴が認められる。

他に、試料によっては単斜輝石、角閃石、不透明鉱物などの鉱物片や植物珪酸体およびチャートなどの堆積岩類が認められるが、いずれも極めて微量である。なお、土器の細片や繊維、

籾殻などはいずれの試料にも認められなかった。

砂粒の割合は、試料番号 11 が特に少ないほかは、試料間で特に顕著な差はない。また、砂全体の粒径組成では、試料番号 17～22 までの 6 点は細粒砂を最頻値とするが、他の試料は最頻値はあまり明瞭ではない。その中で、試料番号 11、12、15 は細粒砂～粗粒シルトに多い傾向があり、試料番号 13 と 23 は粗粒砂～細粒砂に多い傾向が認められる。

#### **c-4. 考察**

##### **c-4-1. 砂粒の由来について**

九州北部の地質を、地質調査所（1982）、日本の地質「九州地方」編集委員会（1992）、久保ほか（1993）などにより概観すると以下のように説明できる。九州北部には、東より西へ山地が連なっているが、北流する遠賀川および御笠川により 3 分され、東より田川山地、三郡山地、背振山地とそれぞれ呼ばれている。これらの山地を構成する主な地質は、結晶片岩などの変成岩と中～古生代の堆積岩からなる三郡帯と呼ばれる地質と中生代の白亜紀に貫入した花崗岩類である。これらのうち、三郡帯は中国地方の三郡帯の西方延長部であるとされ、田川山地および三郡山地には比較的広く分布するが、背振山地では花崗岩類の分布が広く、三郡帯の分布は局地的である。一方、花崗岩類の分布は、田川山地では狭く、三郡山地では西南部の三郡山から嘉穂にかけて較的広く分布する。

さらに遠賀川沿いには筑豊炭田を形成している古第三紀の堆積岩類が分布し、遠賀川水系の河川沿いや御笠川・那珂川沿いには、更新世に噴出した阿蘇 4 火砕流堆積物により構成されている段丘が限定的ではあるが分布している。

今回の試料の胎土中に含まれる砂粒は、石英・カリ長石・斜長石の鉱物片と多結晶石英および花崗岩類の岩片を主体とするが、これらの碎屑物はいずれも花崗岩類の岩石に由来するものである。また、これらの碎屑物以外の碎屑物では、火山ガラスを除けば極めて微量しか認められないことから、本分析および大宰府条坊跡他出土品分析業務の試料は、全て花崗岩類が広く分布する三郡山地西南部から背振山地にかけての地域で作られたものである可能性が高い。試料の出土地である国分松本遺跡は、その三郡山地西南部と背振山地東部との間に位置し、今回の胎土分析結果は、国分松本遺跡周囲の地質学的背景とよく一致する。また、火山ガラスについては、その形態的特徴から、おそらく阿蘇 4 火砕流堆積物に由来する可能性があることから、これも御笠川流域を示唆する碎屑物であるといえる。以上のことから、今回分析した国分松本遺跡出土の弥生土器全 25 点の産地は、広くみても御笠川流域およびその周辺地域内に収まる可能性がある。

##### **c-4-2. 胎土から見出される土器製作事情**

上述のように、今回の試料となった弥生土器の製作地は、九州北部の中でも限定される地域内にあると考えられる。しかし、発掘調査所見では色調や形態的な特徴の違いが指摘されている。また、分析結果をみても、胎土中の砂粒構成は同様であるが、粒径組成までは同一ではない。このことは、御笠川流域内の複数の土器製作地の存在とそれらの間での交流を示唆している可能性がある。ここで、全 25 点の試料の胎土から、互いの共通性と異質性を見出すことにより、

以下のような分類をすることができた。

A類：全体的に砂粒の割合が多く、粒径組成は細粒砂を最頻値とする。鈳物片ではカリ長石が比較的少なく、細粒砂径の石英と斜長石が多い傾向にある。これに分類される試料は、試料番号1、4、17～22の8点である。

B類：砂粒の粒径組成では、細粒砂～粗粒砂の範囲に多いことが特徴である。鈳物片では、石英・カリ長石・斜長石の3鈳物間で量比に大きな差はなく、また粗粒砂径の岩石片を比較的多く含むことが特徴である。これに分類される試料は、試料番号2、3、5～10、13、23の10点である。ただし、試料番号2は、火山ガラスを多く含むことからB'類とする。

C類：砂粒の粒径組成では、粗粒シルト～極細粒砂の範囲に多いことが特徴である。この範囲の砂粒の主な構成物は、石英と斜長石であり、カリ長石および岩石片は比較的少ない。これに分類される試料は、試料番号11、12、15の3点である。

D類：砂粒の粒径組成では、粗粒シルトから粗粒砂までの広い範囲で多いことが特徴である。この粒径組成の特徴は、粗粒シルト～細粒砂径の石英および斜長石と粗粒砂径の岩石片が比較的多いことによる。これに分類される試料は、試料番号14、16、24の3点である。

E類：本類は、極細粒砂～中粒砂径の火山ガラスを多量に含むことで特徴付けられる。また、砂粒の粒径組成では、極細粒砂から粗粒砂までほぼ同量程度に多いことが特徴となる。これに分類される試料は、試料番号25の1点のみである。

以上の分類を各試料について記入した一覧を表6に示す(CD-ROMに搭載)。本表からは、次のことが言える。

1) 土器の形態的特徴と胎土の分類との間には何らかの相関関係が示唆される。すなわち、異系統とされた13点のうち、B類が半数以上の7点を占め、残り6点はC類が3点、D類が2点、A類は1点である。これに対して、在地系統とされた試料では、全12点のうち半数を超える7点がA類であり、残る5点はB類が3点、D類およびE類が1点ずつという構成である。なお、E類の1点は、今回の試料の中でただ1点の城ノ越式である。

2) 色調系統と胎土の分類との間には相関が認められない。このことから、色調の違いは、素地の違いよりも焼成状態の違いによる可能性が高い。

3) 今回の試料では、須玖I式と在地系統、須玖II式と異系統という対応関係になっているため、須玖I式と同II式との違いと胎土との関係は、上記の1)とほぼ同様である。ただし、異系統の須玖I式が3点あるが、このうちの2点はD類である。このことは、須玖I式の中でも在地系統と異系統との間には胎土の違いが存在する可能性のあることを示唆する。

現時点では、1)～3)の状況が、国分松本遺跡における土器の製作と供給に関わるどのような事情を示しているかを知ることはできない。また、試料の選択により、各形態的特徴における胎土の種類構成も変わる可能性がある。しかし、今後、継続的に御笠川流域内の各地における同時期の遺跡出土土器の胎土を調べることができれば、流域内における遺跡ごとおよび形態的特徴や型式ごとの胎土の種類構成が明らかになる可能性がある。これにより、御笠川流域内における遺跡間の関係を考えられるような資料を作成できる可能性もある。

d. 分析（脇道遺跡の自然科学分析【比較資料として】）

d-1. はじめに

佐野地区遺跡群は、太宰府市域の西南部に広がる標高 200 ～ 300m 程度の低山地から構成される牛頸低山地（磯，2001）の北麓に分布している。佐野地区遺跡群では、弥生時代および古墳時代を中心とした遺構、遺物が検出されており、集落が確認されている遺跡もある。本報告では、遺跡群中の脇道遺跡の発掘調査に伴う自然科学分析を行う。

脇道遺跡では、発掘調査により出土した須玖Ⅱ式とされる弥生土器を対象とし、その材質（胎土）の特性を明らかにして、前回報告した国分松本遺跡出土試料との比較などから、土器の生産と使用および集落間の関係などに関わる資料を作成する。

d-2. 試料

試料は、脇道遺跡第 6 次調査で検出された 6SK566 土坑より出土した須玖Ⅱ式土器の土器片 14 点と脇道遺跡第 7 次調査で検出された 7SK010 土坑より出土した須玖Ⅱ式土器の土器片 11 点の合計 25 点である。各土坑出土試料には試料番号 1 ～ 14 あるいは 1 ～ 11 までが付されている。本文中では、便宜上、試料番号の前に「6 次」または「7 次」を付して区別する。各試料の分類を一覧表にして表 7 に示す。

d-3. 分析方法

既報告の国分松本遺跡第 7 次調査出土試料の分析と同様に松田ほか（1999）の方法を用いる。

表 7.. 胎土分析試料一覧（2）

遺跡名	遺構名	試料番号	器種	型式(業務分類)	型式	色調		胎土分類
						内面	外面	
脇道遺跡 第 6 次調査	6SK566 土坑	1	壺	3	須玖Ⅱ新	10YR6/3	7.5YR7/4	E
		2	壺	3	須玖Ⅱ新	2.5Y6/2	7.5YR7/4	F
		3	壺	3	須玖Ⅱ新	10YR5/2	10YR7/4	E
		4	壺	3	須玖Ⅱ新	10YR6/4	10YR7/4	E
		5	壺	3	須玖Ⅱ新	10YR7/4	10YR7/4	E
		6	壺	3	須玖Ⅱ新	10YR6/3	10YR7/3	E
		7	高坏	1b	須玖Ⅱ新	2.5YR5/6	2.5YR5/6	A1
		8	器台（異形）			7.5YR6/4	10YR6/4	C
		9	甕	1b	須玖Ⅱ新	7.5YR6/4	7.5YR6/4	A1
		10	甕	1b	須玖Ⅱ新	7.5YR6/4	7.5YR5/3	A2
		11	甕	—	須玖Ⅱ新	7.5YR6/4	5YR5/6	D
		12	甕	1b	須玖Ⅱ新	10YR7/3	10YR6/4	F
		13	甕（底部）	—	須玖Ⅱ新	10YR3/2	7.5YR6/4	D
		14	甕	1b	須玖Ⅱ新	5YR6/6	5YR6/6	A2
脇道遺跡 第 6 次調査	7SK010 土坑	1	甕	2a	須玖Ⅱ新	7.5YR7/6	10YR7/6	C
		2	甕	2a	須玖Ⅱ新	10YR7/6	10YR6/6	C
		3	甕	1b	須玖Ⅱ新	7.5YR6/4	7.5YR6/6	D
		4	甕	1b	須玖Ⅱ新	7.5YR6/4	7.5YR6/6	D
		5	甕	1b	須玖Ⅱ新	7.5YR4/3	7.5YR5/4	A1
		6	甕	1b	須玖Ⅱ新	7.5YR4/4	5YR4/4	A1
		7	器台		須玖Ⅱ新	5YR5/6	5YR5/6	A2
		8	器台		須玖Ⅱ新	5YR5/6	5YR5/6	A2
		9	甕	1b	須玖Ⅱ新	10YR7/3	10YR6/2	F
		10	甕	1b	須玖Ⅱ新	7.5YR7/4	10YR4/1	F
		11	甕	1b	須玖Ⅱ新	10YR7/3	10YR7/4	F

以下に試料の処理過程を述べる。

薄片は、試料の一部をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨して作製した。薄片は偏光顕微鏡による岩石学的な手法を用いて観察し、胎土中に含まれる砂粒を構成する鉱物片および岩石片の種類構成を明らかにした。砂粒の計数は、メカニカルステージを用いて1mm間隔で移動させ、細礫～中粒シルトまでの粒子をポイント法により200個あるいはプレパラート全面で行った。また、同時に孔隙と基質のポイントも計数した。これらの結果から、各粒度階における鉱物・岩石別出現頻度、砂粒の粒径組成、孔隙・砂粒・基質の割合を求めた。

#### d-4. 結果

各試料の計数結果を表8に、各粒度階における鉱物・岩石出現頻度を図186、胎土の砂粒の割合を図187、胎土中の砂の粒径組成を図188に示す（いずれもCD-ROMに搭載）。

いずれの試料も、砂粒の主体を占めるのは、石英、カリ長石、斜長石の鉱物片と多結晶石英および花崗岩類の岩石片である。また、試料によっては火山ガラスを多く含むものも認められる。このような鉱物片、岩石片の産状は、既報告の国分松本遺跡第7次調査出土試料とほぼ同様である。同報告では、鉱物片、岩石片の種類構成と粒径組成から、胎土をA類からE類までの5種類に分類した。今回の分析結果についても、この分類を適用する。ただし、前回の分析結果では認められなかった特徴を有する胎土も認められたことから、今回の分析結果を以下のように分類する。

A類：全体的に砂粒の割合が多く、粒径組成は、前回の分析では細粒砂を最頻値とする比較的明瞭な単独峰形を呈するヒストグラムが特徴であった。鉱物片ではカリ長石が比較的少なく、細粒砂径の石英と斜長石が多い傾向にある。今回の分析では、最頻値が中粒砂であるほかは、前回のA類とほぼ同様の特徴を有する試料も認められたことから、最頻値を細粒砂とするタイプをA1類とし、最頻値を中粒砂とするタイプをA2類とした。A1類に分類される試料は、6次試料番号7、6次試料番号9、7次試料番号5、7次試料番号6の4点、A2類に分類される試料は、6次試料番号10、6次試料番号14、7次試料番号7、7次試料番号8の4点である。

B類：砂粒の粒径組成では、細粒砂～粗粒砂の範囲に多いことが特徴である。鉱物片では、石英・カリ長石・斜長石の3鉱物間で量比に大きな差はなく、また粗粒砂径の岩石片を比較的多く含むことが特徴である。これに分類される試料は、今回の試料では認められない。

C類：砂粒の粒径組成では、粗粒シルト～極細粒砂の範囲に多いことが特徴である。この範囲の砂粒の主な構成物は、石英と斜長石であり、カリ長石および岩石片は比較的少ない。これに分類される試料は、6次試料番号8、7次試料番号1、7次試料番号2の3点である。

D類：砂粒の粒径組成では、粗粒シルトから粗粒砂までの広い範囲で多いことが特徴である。この粒径組成の特徴は、粗粒シルト～細粒砂径の石英および斜長石と粗粒砂径の岩石片が比較的多いことによる。これに分類される試料は、6次試料番号11、6次試料番号13、7次試料番号3、7次試料番号4の4点である。

E類：本類は、極細粒砂～中粒砂径の火山ガラスを多量に含むことで特徴付けられる。また、砂粒の粒径組成では、極細粒砂から粗粒砂までほぼ同量程度に多いことが特徴となる。これに

分類される試料は、6次試料番号1、3～6の5点である。

F類：E類と同様に極細粒砂～中粒砂径の火山ガラスを多量に含むことで特徴付けられるが、砂粒の粒径組成が、中粒砂または細粒砂を最頻値とする山形のヒストグラムを呈することから、E類とは区別してF類とした。前回の試料には認められなかった胎土である。これに分類される試料は、6次試料番号2、6次試料番号12、7次試料番号9～11の5点である。

以上の分類を各試料について記入した一覧を表7に併記する。

#### d-5. 考察

今回の試料から検出された鋳物片および岩石片の種類構成は、国分松本遺跡第7次調査出土試料とほぼ同様である。国分松本遺跡第7次調査出土試料の分析報告で述べたように、この鋳物片および岩石片の種類構成は、御笠川流域およびその周辺域における地質学的背景と良く一致する。すなわち、今回の脇道遺跡出土試料も全て御笠川流域およびその周辺域内で生産されたものである可能性が高い。そして、その地域内での多様性が存在することも国分松本遺跡第7次調査出土試料と同様である。

今回の試料では、型式は全て須玖Ⅱ式であるが、出土遺構、器種および業務分類型式という分類が設定されている。これらのうち、業務分類型式と胎土分類との間に明瞭な対応関係が認められる。すなわち、1b式とされた試料は、A1類、A2類、D類、F類のいずれかに分類され、2a式とされた試料は2点のみではあるがともにC類であり、3式とされた6点の試料のうち、5点までがE類に分類された。現時点では業務分類型式の分類基準が不明なため、この対応関係の意味するところはわからない。少なくとも外見から分類される業務分類型式が、胎土中に含まれる砂粒の量と粒径組成に起因している可能性のあることが判ったことは成果であるといえる。

遺構別、器種別さらには脇道遺跡と国分松本遺跡との違いが、胎土から見出せるかという問題については、分析試料が、いずれも発掘調査者の意図（特に業務分類型式）により選択されたものであるから、現時点では全体的な傾向を知ることはできない。選択された試料の範囲内では以下のことが指摘できる。

器種別における胎土分類では、業務分類型式のない器台について、異形とされた6次試料番号8と単に器台とされた7次試料番号7、8とは異なる胎土を示しており、外形の違いと胎土とが対応している可能性のあることが示唆される。また、壺と甕の違いについては、今回の試料では既に業務分類型式において分類された試料のみであるが、壺の胎土はいずれも火山ガラスを多く含むことが特徴となる。火山ガラスの由来については、国分松本遺跡の分析報告では周辺に分布する阿蘇4火砕流に由来する可能性があるとしたが、それに加えて、周辺の台地や丘陵上の表層堆積物中に挟まれる広域テフラ（例えば始良Tn火山灰（AT）など）も由来の一つとして考えることができる。実際に、本報告のIにおいて、殿城戸遺跡や大宰府跡の堆積物中からATを確認している。なお、胎土中に含まれる火山ガラスが、表層堆積物中の広域テフラに由来する場合には、胎土の素材となった粘土や砂の採取地を特定するための指標にはならないが、土器の製作技術（特に物理性など）に関わる指標として注目すべきであると考えら

れる。

脇道遺跡と国分松本遺跡間での胎土の違いについては、2遺跡間に共通する型式と器種である須玖Ⅱ式の甕において比較が可能である。国分松本遺跡の分析結果では8点の試料のうち4点までがB類であり、次いでC類が3点で他の1点がA類（A1類）という構成であるが、脇道遺跡では15点の試料のうち、B類の試料は1点もなく、A1類が3点、A2類が2点、D類が3点、F類が4点という構成であり、その違いは明瞭である。特に、国分松本遺跡で最も多いB類と脇道遺跡で最も多いF類は、互いに他方には出現しない胎土であることから、両遺跡間における須玖Ⅱ式の甕の製作事情に何らかの違いが存在する可能性は高い。

## e. 小結

### e-1. 分析結果の読み取り

土器胎土中に含有されている砂粒に注目し、その種別・粒度ならびにそれぞれの量を計測した。いわば3次元情報から導き出された分類である。欲をいえば粒形があると、「円礫から角礫」かの観察が可能となり、河川堆積層からの混和材、粘土材か、河川堆積層でも「円礫」化がすすんでいないものであれば川上での抽出であるのか、意図的に破碎された岩石の混和かの、いわば作り手の「くせ」を読み取る一属性には成りえるのではないかと考えている。なお粒度に関しては、Wentworth（1922）の粒径区分による。また当該遺跡群周辺の地質では、粘土材いわば風化生成物として残りにくいものがあり、この在地性を表現しないと考えられる「指標」鉱物として角閃石（塩基性岩起源）・チャート（堆積岩起源）がある。また地域的な偏在が観察できるものとして火山ガラスがあり、この3者が胎土観察上の「指標」鉱物に位置づけられる（太宰府市、2001）。なお太宰府内において偏在する火山ガラスは、当該遺跡群においては非「在地」性を表現するが、太宰府全域を「在地」とした場合については必ずしも非「在地」性は表現しない。これは在地概念の階層によるもので、ここでは当該遺跡群においてのみ在地概念を適用する。

### e-2. 肉眼観察情報に基づく「型式」と自然科学分析による「胎土」情報の関係

先の「指標」物質を手がかりに非在地性を示すものは、分類Eのみであとのものについては、在地の枠内で捉えることが可能となる。したがってA～D類までの分類単位は、胎土組成上は在地枠内での「くせ」に相当することになり、この「くせ」が時間軸上での変化の場合は、原料土の調整が時間軸に沿って変化したものと解することができ、これに対し空間内における差の場合は分析階層によって解釈が異なる。例えば一例を述べれば、当該遺跡群内の現象であれば、集落内における製品差、作り手の「範型」差に換言できようし、当該遺跡群を超える現象であればその範囲によって集落間分業解釈の手段であったり、それとは逆に同一土器づくり「範型」の保持理由への解釈が必要となる。しかしa.目的の項にて記載してきたように、「下準備」的な階層であり、この5種の分類単体の持つ意味に関しては、想定される諸事象を検証するための材料とすべく今後練磨してゆく必要がある。（中島恒次郎）

## 4. 年代測定

### A. 炭素年代測定

## a. 調査目的

本調査は遺跡調査の一環として、太宰府市内の国分正尻遺跡 2 次調査地から採集された試料を用いて分析調査を実施し、地層や遺跡物の年代を決定することを目的とする。

## b. 分析試料数

・ $^{14}\text{C}$  年代測定 1 個 (国分正尻遺跡第 2 次調査 2ST045 ②出土木材)

## c. 分析・測定

### c-1. 分析

加速器質量分析法 (AMS 法) により  $^{14}\text{C}$  の質量分析を行った。年代測定に使用した試料は土壌、木片、炭化物である。年代値が 12000 年程度より若いものについては、Stuiver et al. (1993) によって作成された暦年代への対応を行っている。暦年代とは過去の宇宙線強度の変動による大気中  $^{14}\text{C}$  濃度の変動を、年輪によって求められた年代と対応させて補正することにより算出されるものである。

分析はニュージーランドの地質・核科学研究所 (Institute of Geological & Nuclear Sciences, Wellington, New Zealand :IGNS - NZ) の分析機器を使用して行い、加速器質量分析計を用いた AMS 法 (Accelerator Mass Spectrometry 法) を用いて測定する。この測定方法の利点は従来のベータ法に比べて飛躍的に少量の炭素化合物 (数十 mg) で年代を決定することができる。

通常の放射性炭素年代、現代炭素に対する試料の放射性炭素濃度の割合、 $\Delta^{14}\text{C}$  で表示する  $^{14}\text{C}$  濃度を測定するに当たり、 $^{14}\text{C}$  測定の標準試料である米国国立標準局 (NIST) から提供されるシュウ酸 (HOx-I) を用いて定量を行なう。また、樹木年輪にもとづく暦年代も比較的新しい年代の試料であれば較正可能である。

### c-2. 試料の調整

試料は採取時より、アルミホイルに覆うことで外来物の混入を防ぎ、ビニールにくるみ密閉容器にて保存されていた。試料を分取し、110°C のオーブンで乾燥させた上、スクリー管に保管する。これより、肉眼で分別可能な試料はハンドピックで収集する。炭化物や木片などは、測定に約 50 mg 以上が必要である。有機質土は乾燥試料 1 ~ 50 mg (試料によって異なる) が必要である。試料選別の際に最も留意する点は、年代測定を行ないたい部分以外に混入するもの (例えば、植物や樹木の根などは意外と地下深くまで入っている) を取り除くことである。

AMS 法を用いる試料は前処理を行って炭素を抽出し、グラファイト化および C - Ag ペレットにし、加速器を用いて微量炭素の同位体比分析を行う。

## d. 結果

測定結果を表 9 に示す (CD-ROM に搭載)。表に示される試料において年代が決定された。年代測定の誤差の収束率は、年代値が若くなるほど一般には大きくなるが、数千 ~ 数百年で数十年程度であり、今回の結果もこれに大きく逸脱するものではない。一覧中に見られる表記方法については、付録を参照されたい。

年代値は 1854yBP、暦年代で 76AD ~ 244AD の年代を示し、出土状況から推定される時期

と整合している。

#### e. 考察

一般に炭素年代測定を行う場合、年代値の誤差は基本的に試料の若さと試料中の炭素の形態に起因する。年代が数千年より若くなると、試料中の<sup>14</sup>C量が少なくなるので、誤差が大きくなる。また、試料の形態は、土壌<木片<炭の順で年代値の誤差が小さくなる。これも試料中に安定して存在する<sup>14</sup>Cの量に起因する。しかし一方、木片や炭の場合、「地層に堆積した時期=樹木等が生存を終えた年代」が成り立たない場合もある。一旦木片や炭が地層に堆積した後に、侵食を受け、再堆積した場合などがこの例に当てはまる。一方土壌の年代を決定した場合は堆積年代とほとんど一致すると考えられる。さらに、木片の場合は、バクテリアの繁殖などによって、<sup>14</sup>Cが改めて供給され、年代値が見かけ上若くなることもあるので注意が必要である。

今回最も古い年代値を示したものである。おおよそ 1800yBP である。

((財) 地域地盤環境研究所 北田 奈緒子)

#### 【参考文献】

Stuiver,M(1993) A Note on single-year calibration of the radiocarbon time scale,AD 1950-6000BC. Radiocarbon,35,67-72

Stuiver,M and Becker,B (1993) High-precision decadal calibration of the radiocarbon time scale,AD 1950-6000BC.Radiocarbon 35,35-66.

#### 【引用文献】

平井信二 (1979a) 木の事典 第2巻. かなえ書房.

平井信二 (1979b) 木の事典 第3巻. かなえ書房.

足立吟也 (1980) 「6章 粉末X線回折法」『機器分析のてびき3』p.64-76, 化学同人. Fork,R.L. and Ward,W. (1957) Brazons river bar;a study in the significance of grain size parameters. J.Sed.Petrol.,27, p3-26. Hatanaka Ken'ichi(1985)PALYNOLOGICAL

STADIES ON THE VEGETATIONAL SUCCESSION THE WURM

GLACIAL AGE IN KYUSYU AND ADJACENET AREAS.Journal of the Faculty of literature,

Kitakyusyu Univerasity(Series B),18,p.29-71.

杉山真二・早田 勉 (1994) 「植物珪酸体分析による遺跡周辺の高環境推定 (第2報) -九州南部の台地上における照葉樹林の分布拡大の様相-」『日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨

集』p.53-54.

那須孝悌 (1989) 「活動の舞台:概論」『弥生時代の研究1 弥生人とその環境』永井昌文・那須孝悌・金関 恕・佐原 真編, p.119-130, 雄山閣.

日本粘土学会編 (1987) 『粘土ハンドブック 第二版』. 技報堂出版, 1289p.

Powers.M.C. (1953) A new roundness scale for sedimentary particles. J.Sed.Petrol.,23, p117-119.

碎屑性堆積物研究会編 (1983) 『地学双書 24 堆積物の研究法』. 377p, 地学団体研究会.

和田光史 (1966) 粘土鉱物の同定および定量法. 土肥誌, 37, p.9-17.

Wentworth,C.K. (1922) A scale of grade and class terms for clasticsediments. J.Geol, 30, p.377-392.

地質調査所 (1982) 『日本地質アトラス』119p.

久保和也・松浦浩久・尾崎正紀・牧本 博・星住英夫・鎌田耕太郎・広島俊男 (1993) 『20万分の1地質 図幅「福岡」』地質調査所.

松田順一郎・三輪若葉・別所秀高（1999）「瓜生堂遺跡より出土した弥生時代中期の土器薄片の観察－岩石学的・堆積学的による－」『日本文化財科学会第16回大会研究発表要旨集』p.120-121.

日本の地質「九州地方」編集委員会（1992）『日本の地質9 九州地方』371p., 共立出版.

磯 望（2001）地形. 太宰府市史 環境資料編, 太宰府市史編集委員会編, p.7-32, 太宰府市.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗（1987）始良T n火山灰の<sup>14</sup>C年代. 第四紀研究, 26, p79- 83.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村 真・安田尚登・平 朝彦（1993）四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討－タンデロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の<sup>14</sup>C年代－. 地質学雑誌, 99, p.787-798.

## VII. まとめ

### A. 成果

本文にて記載してきたように、弥生前期末からの遺構が確認でき、弥生中期における墓域および集落造成事業という現象が確認され、その後集落中心は今調査では明らかにし難かったものの、人為性の看取できる弥生後期終末から古墳前期の溝が検出できている。この後しばらく土地利用痕跡は空白となり先の古墳前期の溝の埋没時期が古墳後期であることから、それまで補修されつつ維持されていた可能性は残っているものの、その他の遺構が確認できていない。最後の土地利用痕跡としては、奈良期埋没の東西溝で、中世期の遺物は散見できるものの、遺構の確認はできていない。

今調査にて確認できた遺構の概略は上記のようになるが、各々で以下に概略を記述する。

#### a. 弥生・古墳

##### a-1. 集落

「生活・生産」の場として、墓との対用語として集落を用いている。今調査にて明らかにできた集落関係遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、溝、土坑であり、これらの検出状況から観察できることは、今回報告した調査所見の中で、弥生期における集落として、千足町遺跡第4・5次調査地域に集落関係遺構が展開しているものと考えられる。その境界としては松本遺跡第7次、正尻遺跡第2次調査地東部域にあるものの、同時期における空間利用ではなく、集落造成としての行為が観察できることを踏まえると、墓域から集落への時間差による空間利用として考えられる。その境界時期については、今回報告した遺跡群のみで語ることは早計の感が否めないが、現象面のみからは弥生中期後半のどこかで造成が開始されたものとの観察結果は得られている。この現象の歴史的背景については、生産性の向上を史的背景とした集落統合など、様々な事象が想定できるものの、本報告で記述してきた内容では極めて稚拙であることから、課題の項にて問題とすべき点を考えてみたい（小沢、2000）。

次いで、弥生後期終末から古墳前期における溝は、西偏するもののほぼ南北方向に形成され、溝断面形状が三角形を呈するなど、極めて防御性の高い溝として考えられる。先の弥生期では調査区東部が住居空間であると考えられるのに対し、古墳期においては溝西部に竪穴住居が検出されるなど、調査区西部に展開しているものと考えられる。

##### a-2. 墓

全て弥生期の墓で、甕棺墓を主体とし、明確に述べることはできないものの、遺構形状から「木棺」墓と考えられるものが1基確認できている。墓域形成は、金海式甕棺（KIc）が1基形成され、その後増加傾向をたどり、KIIIb 式期を最後に忽然と終焉する。この最後の時期に集落の項にて記載した、居住空間としての「居住空間造成」事業が確認され、墓域として土地利用が途絶したものと考えられる。この墓域を途絶せしめた要因については、「集落統合」という単語で表現するにはあまりに不明確であり、その「行動」要因を説明する必要がある、遺物組成その他の考古資料を用いた分析を経る必要がある。

個々の墓形成過程に関して詳細な分析は経ていないものの、墓群間に空間が想定でき、まとまりを想定することは可能である。また、納棺行為を想定した場合、松本遺跡第7次調査にて検出した7ST285、7ST300、7ST320の3基に関しては付帯施設としての階段が同一方向に形成されるなど（図189）、葬送行為時の参列者の視線がいずれも同一方向を意識するような造墓行為が想像できる（溝口、1999）。その視線の先には銅戈が不時発見ながら出土した地点（山の内遺跡）が望め、水城東部にて検出された大型甕棺墓群の中に墳丘墓が検出される可能性が高く、これら首長墓を望む行為が想定できる（太宰府市、1992）。またこれら3基は、後出する墓が、常に前に造営された墓に僅かに重なるように形成されており、後出する墓が以前の墓の被葬者とのつながりを意識したものと解することができる。

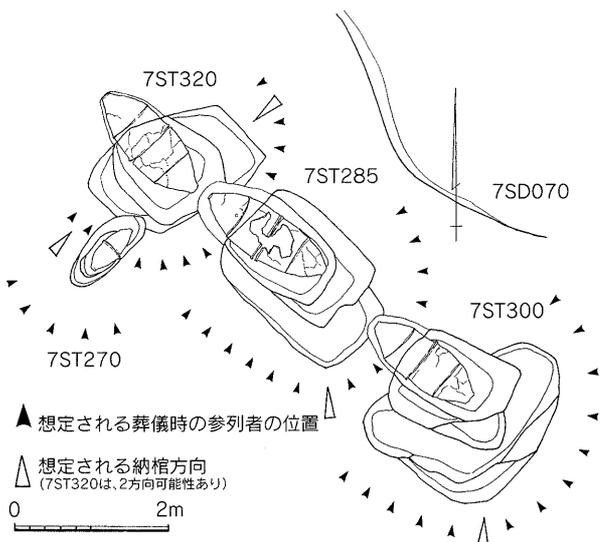


図189. 7ST285・300・320関係実測図

## b. 奈良以降

最後の空間利用状況として、奈良期における東西溝が確認できている。当該調査区は鏡山氏による大宰府条坊域外（以下「鏡山案」と記載する。鏡山、1968）にあたり、鏡山案に対する議論が多く提出され、様々な対案が提示されているものの、学説史の項で記述したように各対案についても問題点を内包していることから、周知されている鏡山案をここでは用いる。これは単に作業仮説にすぎないため、今後は対案提出も視野に入れた検証を行うべきと考えている。今回の報告で記載したこの東西溝の性格に関しては、一条のみの検出であることから、道路側溝である可能性はこれまでの条坊路側溝の検出状況を加味すると一概に否定できるものではない。しかし、鏡山案の外において古代埋没の条坊路平行溝が散見され、条坊外における何らかの区画規定施設である可能性はある（太宰府市教委、2003）。しかし生産空間としての「条里」なのか、生活空間であるのかの検証が現状で経られていないことを考えると、今後の課題とせざるを得ない。その後平安後期の遺物が散見されるが、遺物のみの確認であり、遺構の検出の可能性を示唆しているにすぎない。なお平安後期においては、当該調査区の上流にあたる国分松本遺跡第6次調査地域において当該期の大規模崩壊（洪水層）痕跡が確認できており、この崩壊層からの混入の可能性も残る。

## B. 課題

以上本報告にて記述してきた成果について概略を記述した。しかし、これら成果よりも表出した課題が大きい。それは調査所見を得るレベルからそれを解釈するレベルまで様々であるが、後者から投影される検証材料を提示することで、今後の課題としたい。

### a. 弥生・古墳期

集落動態としてどのような空間利用がなされ、それらがどのように結びついているのか。特に墓、居住、生産の弥生社会を形成する上で基礎となるこれらの遺構群が、当該調査区周辺では必ずしも明らかではない。断片的な調査成果をつなぎ合わせる調査が行政調査の宿命であるが、これまでの調査所見の整理と報告がまず解決されなければならない。その上に立脚して、成果にて記述してきた問題点について、それらを検証する方法を以下に列記しておく。

#### 1) 集落統合

松本遺跡第7次調査にて検出された弥生中期における「居住空間造成」事業の背景の解明に関して、墓造営集団と居住空間形成集団の異同が検証される必要がある。集落統合の結果と解するにしても、どのような構造的変化に基づく統合であるのか、この課題解決の方法を考古資料から導き出すことは容易ではないものの、低位階層の分析として土器組成上の変化、それは胎土分析の項で述べた、土器づくりの「くせ」から導き出される「集団差」を基礎とし、組成上の差も含めることで、造墓集団と居住空間形成集団の異同、さらには集落統合「範囲」、換言すると統合される集落数からその範囲についても明らかしてゆく必要がある。

#### 2) 墓造営階層の変化

今回報告した遺跡群の周囲には、これまで弥生期の小型棺埋葬遺構の確認例は多くあった。しかし下位に存在していたであろう大型棺に関しては確認できていない。またその多くは筑前国分尼寺確認調査での例であり、遺跡保存措置として尼寺を保護する観点からそれ以前の遺構を確認するにとどめたという行政的措置でもあった。したがって、今後もこれら小型棺の下位に存在すると考えられる大型棺に関しては、学説史的な問題点の整理によって行われるべき課題であり、上位にある筑前国分尼寺跡との関係を考慮しつつすすめるべきであろう。一方先述した不時発見ながら銅戈が出土した甕棺群の実体が不明であることから、現在特別史跡水城跡ならびに大野城跡内に包括されている低丘陵頂部における弥生期の調査が必要となってこよう。今回報告した墓群と比較した場合、棺内副葬が観察できるものはなく、また特定集団の特化を示すような遺構検出状況がないことから、一般成員の共同墓地的な性格と考えることができる（溝口、2000）。さらに時期不明ながら今回報告した松本遺跡第4次調査にて検出した「木棺」墓や筑前国分尼寺跡で検出されている石棺墓との造墓階層との関係を明らかにしておく必要がある。しかし時間軸上での位置が明らかな筑前国分尼寺跡第17次調査7ST009が少量の土器と鉄鏃1点を共伴しているだけで、他の多くは明らかでないだけに、まずはここを解決しておく必要性を感じる（太宰府市教委、1995）。

#### 3) 生産空間の二者

生活基礎材としての農耕・狩猟採集空間の想定と「威信財」としての金属器生産空間の想定

の二者が当該遺跡群の中にはある。前者に関しては、行政的な調査ではなかなか検出するのが困難であり、今後農耕関係施設の確認はひとつ灌漑システムを例にとっても、その質の解明から集落間の関係を探る上で重要となり、農耕空間を視野に入れた確認調査を行ってゆく必要は感じている。しかし無遺物状況での確認をどのように「開発者」側へ認識させるのかは、それまでの普及を含めた周知化に関わるだけに容易ではない。遺物からは各種農具が出土しており、今後は帰属する単位を導き出す必要がある。また集落間での保有階層差の検討も必要となる。

今ひとつの「威信財」としての金属器生産であるが、筑前国分尼寺跡第7次調査 SD010（平安前期埋没）から鋳型の破片が出土しており、製品については破片資料の限界から明確化できていない（太宰府市教委、1991）。報告者は弥生期の遺物の流れ込みとしており、これに従えば今回報告した遺跡群と同時期に金属器製作が当該地域で行われていたと考えることができる。しかし現状では製作工房が未確認であることからくる規模の確認ができておらず、どの程度の製作規模であったのかの解明が待たれるところである。また金属器製作集団の質とその背景についても考えて行く必要がある。

## b. 奈良期

鏡山案の外側の空間利用状況を考える上での考古事象の整理と、加えて当該遺跡群に引き付けて考えるならば水城東門内部の「大宰府官制」的施設の有無と構造を時間軸上で考えてゆく必要がある。ただし当該地域においては「大宰府官制」直前の施設として解される水城があり、これら「大宰府官制」直前の諸施設造営過程ならびに造営背景の解明が必要であろう。詳述するならば、「在地」と「国家」という対概念で記載した場合のどちらが主体となって直接的な造営主体として描くことが可能かという問いに答える検証を行う必要がある。特に「大宰府官制」を境界としてその前後の集落展開を明らかにしておくことは、国家形成過程を考える上での基礎作業と考えている。

### 【引用文献】

- 鏡山猛（1968）『大宰府都城の研究』風間書房
- 太宰府市教育委員会（1991）『筑前国分尼寺跡 II』
- 太宰府市史編纂委員会（1992）『太宰府市史 考古資料編』
- 太宰府市教育委員会（1995）『筑前国分尼寺跡 III』
- 溝口孝司（1999）「考古学と空間的リアリティ」『空間へのパースペクティブ』九州大学出版会
- 溝口孝司（2000）「墓地と埋葬行為の変遷」『古墳時代像を見なおす』青木書店
- 小沢佳憲（2000）「弥生集落の動態と画期」『古文化談叢 第44集』九州古文化研究会
- 太宰府市教育委員会（2003）『太宰府・佐野地区遺跡群 16』

写 真 図 版



国分松本遺跡第4次調査全景（空中写真 上が北西）



国分松本遺跡第4次調査全景（空中写真 上が西）



国分松本遺跡第5次調査全景（空中写真 上が北）



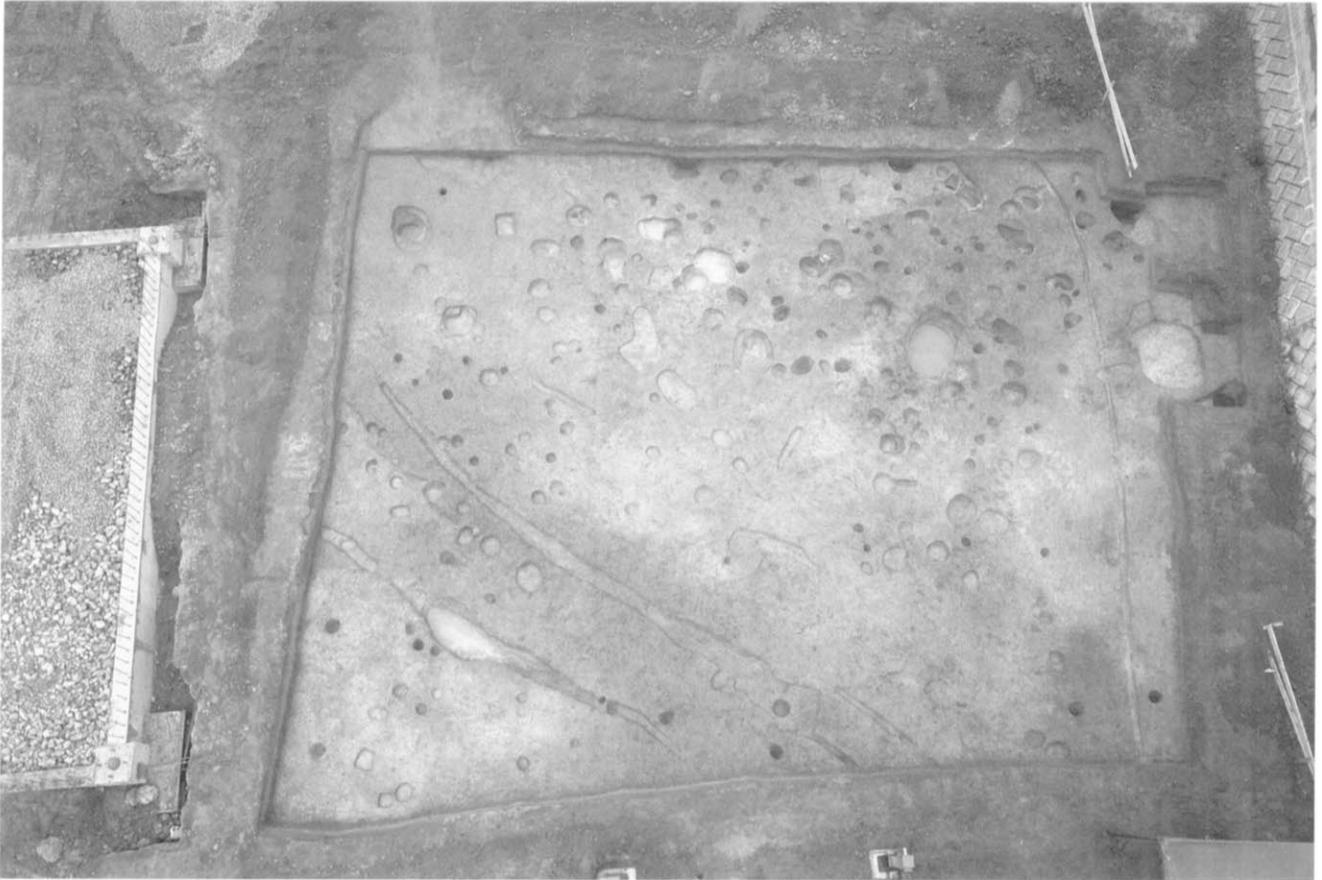
国分松本遺跡第7次調査東半部全景（空中写真 上が北西）



国分松本遺跡第7次調査西半部1全景（空中写真 上が北西）



国分松本遺跡第7次調査西半部2全景（空中写真 上が南東）



国分正尻遺跡第1次調査全景（空中写真 上が西）



国分正尻遺跡第2次調査全景（空中写真 上が北）



国分千足町遺跡第4次調査全景（空中写真 上が西）



国分千足町遺跡第5次調査全景（空中写真 上が東）



国分千足町遺跡第5次調査全景（空中写真 上が北）



調査区全景（空中写真 上が北東）

報告書抄録

ふりがな	だざいふ・こくぶちくいせきぐん 1
書名	太宰府・国分地区遺跡群 1
副書名	市道正尻・紺町線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	73集
編著者	中島恒次郎・重松辰治・渡邊誠・城門義廣・(株)パリオサーヴェイ・(財)地域地盤環境研究所
編集機関	太宰府市教育委員会
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号
発行年月日	2004(平成16)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	条坊 【鏡山推定案】	ふりがな 所在地	コード		座標		調査期間		調査面積 m	調査原因
			市町村	遺跡番号	X	Y	開始	終了		
こくぶまつもといせき 国分松本遺跡 第4次	条坊外	だざいふしこくぶ 太宰府市国分1丁目406-1	402214	210306-4	57.312	-46.213	19951009	19951205	500	共同住宅建設
こくぶまつもといせき 国分松本遺跡 第5次	条坊外	だざいふしこくぶ 太宰府市国分1丁目425-9外	402214	210306-5	57.288	-46.176	19961126	19970110	140	店舗建築
こくぶまつもといせき 国分松本遺跡 第7次	条坊外	だざいふしこくぶ 太宰府市国分1丁目406-3外	402214	210306-7	57.276	-46.180	19981005	19990331	870	市道新設
こくぶしょうじりいせき 国分正尻遺跡 第1次	条坊外	だざいふしこくぶ 太宰府市国分1丁目420-1	402214	210000-1	57.105	-46.175	19911007	19911018	200	店舗建設
こくぶしょうじりいせき 国分正尻遺跡 第2次	条坊外	だざいふしこくぶ 太宰府市国分1丁目425	402214	210000-2	57.263	-46.156	20000403	20000616	128	農道改良
こくぶせんぞくちよういせき 国分千足町遺跡 第4次	条坊外	だざいふしこくぶ 太宰府市国分3丁目429-1	402214	210008-4	57.253	-46.056	19930708	19930729	150	体育館建設
こくぶせんぞくちよういせき 国分千足町遺跡 第5次	条坊外	だざいふしこくぶ 太宰府市国分3丁目337-1	402214	210008-5	57.257	-46.089	19951202	19960206	140	店舗併用住宅建設

所収遺跡名	遺跡種別	時代	主要遺構	主要遺物	特記事項
国分松本遺跡 第4次	集落 墓	弥生 古墳 奈良	竪穴住居 土坑 溝 甕棺墓 木棺墓	弥生土器 古式土師器 土師器 須恵器 青磁 白磁 瓦 石製品 木製品(弓他)	函(甕棺内)出土
国分松本遺跡 第5次	集落 墓	弥生 古墳	竪穴住居 溝 甕棺墓	弥生土器 古式土師器 土師器	
国分松本遺跡 第7次	集落 墓	弥生 古墳 室町	竪穴住居 掘立柱建物 溝 甕棺墓	弥生土器 古式土師器 土師器 須恵器 石製品木製品(農具)	胎土分析 花粉分析 粘土鉱物分析 粒度分析(堆積環境復原)
国分正尻遺跡 第1次	集落	弥生	溝	弥生土器	
国分正尻遺跡 第2次	集落 墓	弥生 古墳	掘立柱建物 溝 甕棺墓	弥生土器 古式土師器	炭素年代測定
国分千足町遺跡 第4次	集落	弥生	掘立柱建物 流路	弥生土器 木製品(農具他)	樹種同定分析
国分千足町遺跡 第5次	集落	弥生	掘立柱建物	弥生土器	

太宰府市の文化財 第73集

太宰府・国分地区遺跡群 1

- 市道正尻・紺町線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成16(2004)年3月

編集 太宰府市教育委員会

発行 〒818-0198

福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号

印刷 株式会社 大道印刷

〒816-0873

春日市日の出町6丁目23番地